



大正四年六月廿五日印刷
大正四年六月廿八日發行

有朋堂文庫
萬葉集 上
（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

山の嵐は―古義は「嵐の風は」と訓ずべしと主張せり。
豫て寒しも―その前よりかねて寒しと也

我が宿に、咲きたる梅を、月夜よみ、夜々見せむ、君をこそ待て。

寄レ夜

足檜木乃。山下風波。雖不吹。君無夕者。豫寒毛。

足引の、山の嵐は、吹かねども、君無き宵は、豫て寒しも。

梅の花……雪の―序
著けむな―人目につきて其れと知られんかな

ながらへ渡る―生きながらへて月日を渡る

うか狙ふ―枕詞
跡見山―大和國

蜑小船―枕詞
け長く―月日久しく。上三句は「消」(け)に掛る序也
猒毛無跡―宣長は「消長戀跡」の誤にて「けながく戀ふと」かといひ、古義には「敷手念跡」にて「しきて思ふと」かといへり
和蹔―美濃國不破郡
申せ其の兒に―使に命ずるか人に言傳するかなるべし

梅の花、其とも見えず、降る雪の、著けむな。間使遣らば。

一云。零雪爾。間使遣者。其將知名。

天霧相。雪來雪之。消友。於君合常。流經度。

天ぎらひ、降り來る雪の、消なめども、君に逢はむと、ながらへ渡る。

窺良布。跡見山雪之。灼然。戀者妹名。人將知可聞。

うか狙ふ、跡見山雪の、著く、戀ひば妹が名、人知らむかも。

海小船。泊瀨乃山爾。落雪之。消長戀師。君之音曾爲流。

蜑小船、泊瀨の山に、降る雪の、け長く戀ひし、君が音ぞする。

和射美能。嶺往過而。零雪乃。猒毛無跡。白其兒爾。

和蹔の、峰行き過ぎて、降る雪の、厭ひも無しと、申せ其の兒に。

寄レ花

吾屋戸爾。開有梅乎。月夜好美。夕夕令見。君乎社待也。

の誤かといひ、一說「敢」は「玖」の誤にて「いたく」か、又「いたも」と訓ずる說もあれど未詳
はた野—大和國高市郡に波多鄉あり、そこにや
吉名張—城上郡
野木—野の木立
戀ふらく—我が戀ふるは
豐國の木綿山—豐後國速見郡由布
裳曳き著けむ—裳を曳きたるあとの著しくして人に知られん

霰降り、いたま風吹き、寒き夜や、はた野に今宵、我が獨り寝む。

吉名張乃。野木爾零覆。白雪乃。市白霜。將戀吾鴨。
吉名張の、野木に降り覆ふ、白雪の、著くしも、戀ひむ我かも。

一眼見之。人爾戀良久。天霧之。零來雪之。可消所念。
一目見し、人に戀ふらく、天ぎらし、降り來る雪の、消ぬべく思ほゆ。

思出。時者爲便無。豐國之。木綿山雪之。可消所念。
思ひ出づる、時は術無み、豐國の、木綿山雪の、消ぬべく思ほゆ。

如夢。君乎相見而。天霧之。落來雪之。可消所念。
夢の如、君を逢見て、天ぎらし、降り來る雪の、消ぬべく思ほゆ。

吾背子之。言愛美。出去者。裳引將知。雪勿零。
我が背子が、言美しみ、出でて行かば、裳曳き著けむ。雪な降りそね。

梅花。其跡毛不所見。零雪之。市白兼名。間使遣者。

咲き出照る―照るばかり咲き匂ふ意か、一説、本文「照」は「鳥」の誤にて「さきいづる」又一說「照」は「有」の誤にて「咲き出たる」か

ゆ笹―五百笹にて、笹の多きをいふ

はだれ―はだれ（まだら）に降れる雪
言へば―妹が也
まして思ほゆ―我は也
板敢風―「敢」は「隙」など

泡雪は、千重に降り敷け。戀しくの、け長き我は、見つゝ偲ばむ。

右柿本朝臣人麻呂之歌集出。

寄レ露

咲出照。梅之下枝。置露之。可消於妹。戀頃者。

咲き出照る、梅の下枝に、置く露の、消ぬべく妹に、戀ふる此の頃。

寄レ霜

甚毛。夜深勿行。道邊之。湯小竹之於爾。霜降夜烏。

甚だも、夜更けてな行き。道の邊の、ゆ笹が上に、霜の降る夜を。

寄レ雪

小竹葉爾。薄太禮零覆。消名羽鴨。將忘云者。益所念。

笹の葉に、はだれ降り覆ひ、消なばかも、忘れむと言へば、まして思ほゆ。

霰落。板敢風吹。寒夜也。旗野爾今夜。吾獨寢牟。

妹が爲め、上枝の梅を、手折るとは、下枝の露に、濡れにけるかも。

詠二黄葉一

八田乃野之。淺茅色付。有乳山。峰之沫雪。寒零良之。

矢田の野の、淺茅色づく、有乳山、峰の泡雪、寒く降るらし。

詠レ月

左夜深者。出來牟月乎。高山之。峰白雲。將隱鴨。

小夜更けば、出で來む月を、高山の、峰の白雲、隱すらむかも。

冬相聞

零雪。虛空可消。雖戀。相依無。月經在。

降る雪の、空に消ぬべく、戀ふれども、逢ふ由を無み、月ぞ經にける。

沫雪。千重零敷。戀爲來。食永我。見偲。

手折るとは—手折るとては

矢田の野—大和國添下郡

有乳山—越前國敦賀郡、郡近き野の秋の景色を見て遠き越路の山を思ひやりてよめるなり

小夜更けば云々—此の歌冬の歌とも見えず、紛れて入れるか

降る雪の—降る雪の如く

空に消ぬべく—戀ひも死ぬべく

誰苑之。梅花毛。久堅之。清月夜爾。幾許散來。

誰が園の、梅の花ぞも。久方の、清き月夜に、幾許散り來る。

梅花。先開枝。手折而者。裹常名付而。與副手六香聞。

梅の花、先づ咲く枝を、手折りては、裹と名づけて、よそへてむかも。

誰苑之。梅爾可有家武。幾許毛。開有可毛。見我欲左右手二。

誰が園の、梅にかありけむ。幾許も、咲きにたるかも。見がほるまでに。

來可視。人毛不有爾。吾家有。梅早花。落十方吉。

來て見べき、人もあらなくに、我家なる、梅の初花、散りぬともよし。

雪寒三。咲者不開。梅花。縱比來者。然而毛有金。

雪寒み、咲きは開けず、梅の花、よし此の頃は、さてもあるがね。

詠レ露

爲妹。末枝梅乎。手折登波。下枝之露爾。沾家類可聞。

花毛—「花」の下に「曾」を脫せしか、或は「毛」は「髭」の誤にて「はなかも」か

よそへてむかも—妹が我によそふと也、一說、二人の間が怪しいと人がいひさわがんと也

梅爾可有家武—「家」は「良」の誤にて「うめにかあるらむ」か

咲きにたるかも—一訓「咲きにけるかも」

咲きは開けず—一訓「咲きには咲かず」

よし此の頃は云々—雪寒き此頃は咲くともしぼむべければ、斯く咲かずてもよしと也

觸れぬか—觸れよかし

袖纏將干—一說「纏」は衍文にて「ころもでほさむ」か

言多毛—「言」は「許」の誤にて「こちたくも」か

降らぬ雪ゆゑ—降らぬ雪なるものを

ほどろに—はだらに、まだらに、前にも註したる古義の說にては、むらむら、離れ〲に也

夕されば、衣手寒し。高圓の、山の木毎に、雪ぞ降りたる。

吾袖爾。零鶴雪毛。流去而。妹之手本。伊行觸糠。
我が袖に、降りつる雪も、流れ行きて、妹が袂に、い行き觸れぬか。

沫雪者。今日者莫零。白妙之。袖纏將干。人毛不有惡。
泡雪は、今日はな降りそ。白妙の、袖まき干さむ。人もあらぬを。

甚多毛。不零雪故。言多毛。天三空者。陰相管。
甚だも、降らぬ雪ゆゑ、こちたくも、天つみ空は、曇り合ひつゝ。

吾背子乎。且今且今。出見者。沫雪零有。庭毛保杼呂爾。
我が背子を、今か〳〵と、出で見れば、泡雪降れり。庭もほどろに。

足引。山爾白者。我屋戸爾。昨日暮。零之雪疑意。
足引の、山に白きは、我が宿に、昨日の夕、降りし雪かも。

詠レ花

足引の、山路も知らず。白樫の、枝もとをゝに、雪の降れゝば。

或云。枝毛多和多和。

右柿本朝臣人麻呂歌集出也。但一首。或本云。三方沙彌作。

詠レ雪

奈良山乃。峯尚霧合。宇倍志社。前垣之下乃。雪者不消家禮。

奈良山の、峰猶きらふ。宜しこそ、籬の下の、雪は消ずけれ。

殊落者。袖副沾而。可通。將落雪之。空爾消二管。

こと降らば、袖さへ濡れて、通るべく、降りなむ雪の、空に消につゝ。

夜乎寒三。朝戸乎開。出見者。庭毛薄太良爾。三雪落有。

夜を寒み、朝戸を開き、出でて見れば、庭もはだらに、み雪降りたり。

一云。庭裳保杼呂爾。雪曾零而有。

暮去者。衣袖寒之。高松之。山木毎。雪曾零有。

峰尚―一訓「峰すら」

きらふ―曇る

消ずけれ―消えずありけれ

こと降らば―とても斯く降る位ならば

衣袖寒之―「之」は「久」の誤にて「ころもでさむく」なるべし

陽炎の—枕詞

消たずも—一訓「けたずて」

岸—山の崖

雲居ねば—雲居ぬに
流る—降る
白杜杙—(一)「杜杙」は「我牱」の誤か(二)「杙」は「橿」の誤か

なくに。

皮爲酢寸。穗庭開不出。戀乎吾爲。玉蜻。直一目耳。視之人故爾。
旗薄、穗には咲き出ぬ、戀を我がする。陽炎の、唯一目のみ、見し人ゆゑに。

冬雜歌

我袖爾。雹手走。卷隱。不消有。妹爲見。
我が袖に、霰た走る。卷き隱し、消たずもあらむ。妹が見む爲め。

足曳之。山鴨高。卷向之。木志乃子松二。三雪落來。
足引の、山かも高き、纏向の、岸の小松に、み雪降りけり。

卷向之。檜原毛未。雲居者。子松之末由。沫雪流。
纏向の、檜原も未だ、雲居ねば、小松がうれゆ、泡雪流る。

足引。山道不知。白杜杙。枝母等乎乎爾。雪落者。

戀ふらむ君と―我を戀ふらん君と也、右の歌の答

色葉二毛―一說「葉二」は「二葉」を上下に誤れるにて「いろにはも」なるべし

出でじと思へば―出でじと思ふに

君が碎かむ―君に心を碎かしむべき心は持たずの意

右一首云々―後人の書入也

我が床の邊に―毛詩「十月蟋蟀入我牀下」

寢ねがてぬに―寢ねがてなくに

時雨降る、曉月夜、紐解かず。戀ふらむ君と、居らましものを。

於黃葉。置白露之。色葉二毛。不出跡念者。事之繁家口。

黃葉に、置く白露の、匂にも、出でじと思へば、言の繁けく。

雨零者。瀧都山川。於石觸。君之摧。情者不持。

雨降れば、たぎつ山川、岩に觸り、君が碎かむ、心は持たず。

右一首。不レ類ニ秋謌ニ而以レ和載レ之也。

譬喩歌

祝部等之。齋經社之。黃葉毛。標繩越而。落云物乎。

祝部等が、齋ふ社の、黃葉も、標繩越えて、散るとふものを。

旋頭歌

蟋蟀之。吾床隔爾。鳴乍本名。起居管。君爾戀爾。宿不勝爾。

蟋蟀の、我が床の邊に、鳴きつゝもとな。起き居つゝ、君に戀ふるに、寢ねがて

よしゑやし―よしや

惑者―一說「さとびと」とよみて「里人」の意とす寐師耳―「寐」の上に「不」の字あるべきを略せるものの「耳」は「在」の誤ならんといへどいかゞ、古義に「寒師有」にて「寒くしあれば」かといへど、それもいかゞ、要するに未詳

蜻蛉羽に―蜻蛉羽の如くに
またさば―たてまつらば、一訓「まつらば」
夜も著るがね―我が形見としての意ならん

言繁み―うるさくいひさわがるゝ故、一說、事の繁さに也

よしゑやし、戀ひじとすれど、秋風の、寒く吹く夜は、君をしぞ思ふ。

惑者之。痛情無跡。將念。秋之長夜乎。寐師耳。

侘人の、あな心無と、思ふらむ。秋の長夜を、寢ねずしあれば。

秋夜乎。長跡雖言。積西。戀盡者。短有家里。

秋の夜を、長しと言へど、積りにし、戀を盡せば、短かりけり。

寄レ衣

秋都葉爾。爾寶敝流衣。吾者不服。於君奉者。夜毛著金。

蜻蛉羽に、匂へる衣、我は著じ。君にまたさば、夜も著るがね。

問答

旅倘。襟解物乎。事繁三。丸宿吾爲。長此夜。

旅にすら、紐解くものを、言繁み、丸寢我がする。長き此の夜を。

四具禮零。曉月夜。紐不解。戀君跡。居益物。

眞葛―五味(サネカヅラ)也、常盤なれどたまたま色づけるもありしを見て詠めるならん

黄葉の―枕詞
過ぎがてぬ兒―思ひ過し難き女

足引の、山眞葛、もみづまで、妹に逢はずや、我が戀ひ居らむ。

黄葉之。過不勝兒乎。人妻跡。見乍哉將有。戀敷物乎。

黄葉の、過ぎがてぬ兒を、人妻と、見つゝやあらむ。戀しきものを。

寄レ月

於君戀。之奈要浦觸。吾居者。秋風吹而。月斜烏。

君に戀ひ、萎えうらぶれ、我が居れば、秋風吹きて、月傾きぬ。

秋夜之。月疑意君者。雲隱。須臾不見者。幾許戀敷。

秋の夜の、月かも君は、雲隱れ、暫も見ねば、幾許戀しき。

九月之。在明能月夜。有乍毛。君之來座者。吾將戀八方。

九月の、有明の月夜、ありつゝも、君が來まさば、我戀ひめやも。

寄レ夜

忍咲八師。不戀登爲跡。金風之。寒吹夜者。君乎之曾念。

秋津野—大和國吉野郡

もだもあらむ—たゞじつとしても居られん

不座君者—「座」の上一本「來」あり

朝咲き、夕は消ぬる、つき草の、消ぬべき戀も、我はするかも。

蜓野之。尾花苅副。秋芽子之。花乎葺核。君之借廬。

秋津野の、尾花刈り添へ、秋萩の、花を葺かさね。君が假廬に。

咲友。不知師有者。默然將有。此秋芽子乎。令視管本無。

咲きぬとも、知らずしあらば、もだもあらむ。此の秋萩を、見せつゝもとな。

寄レ山

秋去者。鴈飛越。龍田山。立而毛居而毛。君乎思曾念。

秋されば、雁飛び越ゆる、龍田山、立ちても居ても、君をしぞ思ふ。

寄二黄葉一

我屋戸之。田葛葉日殊。色付奴。不座君者。何情曾毛。

我が宿の、葛葉日にけに、色づきぬ。來まさぬ君は、何心ぞも。

足引乃。山佐奈葛。黄變及。妹獨不相哉。吾戀將居。

花にし云々—ありありて見れども飽かず珍しと也

藤原—元明天皇和銅三年高市郡藤原より奈良へ都をうつす

鴨頭草—一説「つゆくさ」と訓まんか

秋萩の、花野の薄、穗には出でず、我が戀ひ渡る、籠妻はも。

吾屋戸爾。開秋芽子。散過而。實成及丹。於君不相鴨。

我が宿に、咲きし秋萩、散り過ぎて、實になるまでに、君に逢はぬかも。

吾屋前之。芽子開二家里。不落間爾。早來可見。平城里人。

我が宿の、萩咲きにけり。散らぬ間に、早來て見ませ。奈良の里人。

石走。間間生有。「貌花乃。花西有來。在筒見者。

岩橋の、間々に生ひたる、顏花の、花にしありけり。ありつゝ見れば。

藤原。古鄉之。秋芽子者。開而落去寸。君待不得而。

藤原の、古りにし里の、秋萩は、咲きて散りにき。君待ち兼ねて。

秋芽子乎。落過沼蛇。手折持。雖見不怜。君西不有者。

秋萩を、散り過ぎぬべみ、手折り持て、見れどもさぶし。君にしあらねば。

朝開。夕者消流。鴨頭草。可消戀毛。吾者爲鴨。

今咲く花―新に咲き出でし花
あへぬ心―堪へじと止めんとすれど止めあへぬ心

鴨頭草―一說「つゆくさ」と訓む

生けらずは―生きてあらよりは

旗薄―下句の「穗には咲き」にかゝる「出ず」までかゝるにあらず

四搓二將有―一說「二」は「豆」の誤にて「しなひてあらむ」か

いさゝめに―かりそめになりとも

我が里に、今咲く花の、女郎花、あへぬ心に、猶戀ひにけり。

芽子花。咲有乎見者。君不相。眞毛久二。成來鴨。
萩が花、咲けるを見れば、君に逢はず、誠も久に、なりにけるかも。

朝露爾。咲酢左乾垂。鴨頭草之。日斜共。可消所念。
朝露に、咲きすさびたる、つき草の、日長くるなへに、消ぬべく思ほゆ。

長夜乎。於君戀乍。不生者。開而落西。花有益乎。
長き夜を、君に戀ひつゝ、生けらずは、咲きて散りにし、花ならましを。

吾妹兒爾。相坂山之。皮爲酢寸。稻穗開不出。戀渡鴨。
我妹子に、逢坂山の、旗薄、穗には咲き出ず、戀ひ渡るかも。

卒爾。今毛欲見。秋芽之。四搓二將有。妹之光儀乎。
いさゝめに、今も見が欲し。秋萩の、しなひにあらむ。妹が姿を。

秋芽子之。花野乃爲酢寸。穗庭不出。吾戀度。隱嬬波母。

其の初花の—其の初花の如く
こい轉び—伏し轉び
朝顏の花—色に出づといはん譬に置けるにて、「出でじ」までかゝるにはあらず
將手枕—「將」の下に「爲」を脫せしか、一說「衣手將枕」にて「そでまくらかむ」
入野—山城國乙訓郡、丹後國竹野郡にも納野あり、こゝは前者なるべし
韓藍—紅花

何すとか、君を厭はむ。秋萩の、其の初花の、嬉しきものを。

展轉。戀者死友。灼然。色庭不出。朝容貌之花。
こい轉び、戀ひはしぬとも、著く、色には出でじ。朝顏の花。

言出而。云忌染。朝貌乃。穗庭開不出。戀爲鴨。
言に出でて、言はば由々しみ、朝顏の、ほには咲き出ぬ、戀もするかも。

鴈鳴之。始音聞而。開出有。屋前之秋芽子。見來吾世古。
雁がねの、初聲聞きて咲き出たる、宿の秋萩、見に來我が背子。

左小牡鹿之。入野乃爲酢寸。初尾花。何時加妹之。將手枕。
さ牡鹿の、入野の薄、初尾花、何時しか妹が、手枕をせむ。

戀日之。氣長有者。三苑圃能。辛藍花之。色出爾來。
戀ふる日の、氣長くしあれば、御園生の、韓藍の花の、色に出でにけり。

吾鄉爾。今咲花乃。女郎花。不堪情。尙戀二家里。

今更爾―「更」の下になほ「更」の字ありしを脱せしか
下の―一訓「したの」

さはに―一訓「すだき」

秋づけば―秋になれば
あえぬがに―あえぬは物の熟したる意にて、妹に逢はん時なりぬと我は思へどの義といふ、古義には、花の落ちこぼるゝ如くの意とせり
知らず―一訓「知らじ」

寄レ鶴

今夜乃。曉降。鳴鶴之。念不過。戀許増益也。

此の夜らの、曉降ち、鳴く田鶴の、思ひは過ぎず、戀こそまされ。

寄レ草

道邊之。乎花我下之。思草。今更爾。何物可將念。

道の邊の、尾花が下の、思草、今更々に、何か思はむ。

寄レ花

草深三。蟋多。鳴屋前。芽子見公者。何時來益牟。

草深み、蟋蟀さはに、鳴く宿の、萩見に君は、何時か來まさむ。

秋就者。水草花乃。阿要奴蟹。思跡不知。直爾不相在者。

秋づけば、み草の花の、あえぬがに、思へど知らず。直に逢はざれば。

何爲等加。君乎將猒。秋芽子乃。其始花之。歡寸物乎。

蟋蟀の、待ち喜べる、秋の夜を、寢る驗無し。枕と我は。

寄レ蝦

朝霞。鹿火屋之下爾。鳴蝦。聲谷聞者。吾將戀八方。

朝霞、蚊火屋が下に、鳴く蛙、聲だに聞かば、我戀ひめやも。

寄レ鴈

出去者。天飛鴈之。可泣美。且今日且今日云二。年曾經去家類。

出でて去なば、天飛ぶ雁の、鳴きぬべみ、今日々々とふに、年ぞ經にける。

寄レ鹿

左小牡鹿之。朝伏小野之。草若美。隱不得而。於人所知名。

さ牡鹿の、朝伏す小野の、草若み、隱ろひ兼ねて、人に知らゆな。

左小牡鹿之。小野草伏。灼然。吾不問爾。人乃知良久。

さ牡鹿の、小野の草伏、著く、我が問はなくに、人の知れらく。

枕と我は―枕より外に共寢する者なき身は也

朝霞―枕詞

蚊火屋―山田などを守る人は蚊を避くる爲また猪鹿などを避くるために火を焚くことあり、其假庵をいふとぞ、又、一說「かひや」と淸みて讀み、蠶室の義とす

著く云々―我はあらはに妻問ひせしこともなきに

三更者—「者」は「乎」の誤にて「よはを」か

泊瀬風—泊瀬に吹く風

煙寸吾告智—一本「告」なき方宜し

寄レ蟋—下に「蟀」を脱せしか

吾妹子者。衣丹有南。秋風之。寒比來。下著益乎。

我妹子は、衣にあらなむ。秋風の、寒き此の頃、下に著ましを。

泊瀬風。如是吹三更者。及何時。衣片敷。吾一將宿。

泊瀬風、斯く吹く夜半は、何時までか、衣片敷き、我が一人寢む。

寄レ雨

秋芽子乎。令落長雨之。零比者。一起居而。戀夜曾大寸。

秋萩を、散らす長雨の、降る頃は、一人起き居て、戀ふる夜ぞ多き。

九月。四具禮乃雨之。山霧。煙寸吾告智。誰乎見者將息。

九月の、時雨の雨の、山霧の、いぶせき我が胸、誰を見ば息まむ。

一云。十月。四具禮乃雨降。

寄レ蟋

蟋蟀之。待歡。秋夜乎。寐驗無。枕與吾者。

消かもしなまし―消えてもしまはん
戀ひつゝあらずは―戀ひつゝあらんよりは、本文「爾」は「筒」の誤

秋の穗―稻の穗

とををに―たわゝに

秋萩の、上に置きたる、白露の、消かもしなまし。戀ひつゝあらずは。

吾屋前。秋芽子上。置露。市白霜。吾戀目八面。

我が宿の、秋萩の上に、置く露の、著くしも、我が戀ひめやも。

秋穗乎。之努爾押靡。置露。消鴨死益。戀乍不有者。

秋の穗を、しぬに押しなべ、置く露の、消かもしなまし。戀ひつゝあらずは。

露霜爾。衣袖所沾而。今谷毛。妹許行名。夜者雖深。

露霜に、衣手濡れて、今だにも、妹許行かな。夜は更けぬとも。

秋芽子之。枝毛十尾爾。置露之。消毳死猿。戀乍不有者。

秋萩の、枝もとをゝに、置く露の、消かもしなまし。戀ひつゝあらずは。

秋芽子之。上爾白露。毎置。見管曾思努布。君之光儀乎。

秋萩の、上に白露、置く毎に、見つゝぞ偲ぶ。君が姿を。

寄レ風

廬付而—「付」は「爲」の誤
思はしむらく—思はしむるとはさても苦しき妹ぞ
橘を—枕詞
守部—大和國の地名か
色附かふ—色附くの延言
妹が云々—獨り寢る夜は

鶴鳴之。所聞田井爾。五百入爲而。吾客有跡。於妹告社。
田鶴が音の、聞ゆる田居に、廬して、我旅なりと、妹に告げこそ。
春霞。多奈引田居爾。廬付而。秋田苅左右。令思良久。
春霞、棚引く田居に、廬して、秋田刈るまで、思はしむらく。
橘乎。守部乃五十戸之。門田早稻。苅時過去。不來跡爲等霜。
橘を、守部の家の、門田早稻、刈る時過ぎぬ。來じとすらしも。

寄レ露

秋芽子之。開散野邊之。暮露爾。沾乍來益。夜者深去鞆。
秋萩の、咲き散る野邊の、夕露に、濡れつゝ來ませ。夜は更けぬとも。
色付相。秋之露霜。莫零根。妹之手本乎。不纏今夜者。
色附かふ、秋の露霜、な降りそね。妹が袂を、まかぬ今宵は。
秋芽子之。上爾置有。白露之。消鴨死猿。戀爾不有者。

田にはり—田にひらき
ひでて—穗に出でて、本文「乃」は「秀」の誤ならん

太刀の後—枕詞
玉まく田居—玉卷くをまく田といふ地名にかけ、まく田に田居をかけたるなりといふ、古義には稻種を蒔く田の義といへり、尚勘ふべし

有藍君叫—「叫」は「刈」の誤、「刈り」一訓「刈る」
秋田刈り云々—班田使の妻などのよめるかといふ

右柿本朝臣人麻呂之歌集出。

寄二水田一

住吉之。岸乎田爾墾。蒔稻。乃而及苅。不相公鴨。
住吉の、岸を田にはり、蒔きし稻、ひでて刈るまで、逢はぬ君かも。

劍後。玉纏田井爾。及何時可。妹乎不相見。家戀將居。
太刀の後、玉まく田居に、何時までか、妹を逢ひ見ず、家戀ひ居らむ。

秋田之。穗上爾置。白露之。可消吾者。所念鴨。
秋の田の、穗の上に置ける、白露の、消ぬべく我は、思ほゆるかも。

秋田之。穗向之所依。片縁。吾者物念。都禮無物乎。
秋の田の、穗向の寄れる、片寄りに、我はもの思ふ。情なきものを。

秋田叫。借廬作。五百入爲而。有藍君叫。將見依毛欲得。
秋田刈り、假廬を造り、廬して、あるらむ君を、見む由もがも。

秋山の—枕詞
したひ—紅葉のかゞやく色

誰そ彼と—彼は誰ぞと

夙夙—「凡々」の誤にて「おほろしく」か

生靡—「生」は「打」の誤にて「うちなびき」か

行けども—一訓「行くとも」
忘るれや—一訓「忘れめや」

秋相聞

金山。舌日下。鳴鳥。音聞。何嘆。
秋山の、したひが下に、鳴く鳥の、聲だに聞かば、何か嘆かむ。

誰彼。我莫問。九月。露沾乍。君待吾。
誰そ彼と、我をな問ひそ。九月の、露に濡れつゝ、君待つ我を。

秋夜。霧發渡。夙夙。夢見。妹形矣。
秋の夜の、霧立ち渡り、朝なさな、夢にぞ見つる。妹が姿を。

秋野。尾花末。生靡。心妹。依鴨。
秋の野の、尾花がうれの、生ひ靡き、心は妹に、寄りにけるかも。

秋山。霜零覆。木葉落。歳雖行。我忘八。
秋山に、霜降り覆ひ、木の葉散り、年は行けども、我忘るれや。

爲暮零禮見—「禮」は「所」の誤にて「しぐれふる見ゆ」か

旅の廬—かりそめに居る廬の義ならん

乾す人無しに—妻に遠ざかり居れば也

玉襷—枕詞

懸けぬ時無き—心にかけて思はぬ時なき

我が戀を—我が戀なるものを

夜副衣寒—古訓は「ふすまもさむし」なるが如し、從ふべし

雁の翼の云々—雁は數多羽打ちひろげて連り飛ぶものなればいふ

一日。千重敷布。我戀。妹當。爲暮零禮見。
一日には、千重しく〳〵に、我が戀ふる、妹があたりに、時雨降れ見む。

右一首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

秋田苅。客乃廬入爾。四具禮零。我袖沾。干人無二。
秋田刈る、旅の廬に、時雨降り、我が袖濡れぬ。乾す人無しに。

玉手次。不懸時無。吾戀。此具禮志零者。沾乍毛將行。
玉襷、懸けぬ時無き、我が戀を、時雨し降らば、濡れつゝも行かむ。

黄葉乎。令落四具禮能。零苗爾。夜副衣寒。一之宿者。
黄葉を、散らす時雨の、降るなへに、夜さへぞ寒き。一人し寝れば。

詠レ霜

天飛也。鴈之翅乃。覆羽之。何處漏香。霜之零異牟。
天飛ぶや、雁の翼の、覆羽の、何處漏りてか、霜の降りけむ。

戀ひつゝも—秋來れどもなほ暑さの殘れるほど風を戀ふるなり　家し居ればー一訓「家居れば」田の伏廬に居る也

霜毛置應久—略解に「久」は「之」の誤かとて、下文の如く訓じたるなれど、原文のまゝ「べく」と訓じても可ならん　もみでねば—黄葉せねば、一訓「もみぢねば」

笠立ちて—一訓「笠立てて」、宣長が題の芳は茸の誤にて松茸をよめるなりといへる然るべし、和名抄「菌生爾雅注云菌有二木菌土菌石菌一和名皆多介云々狀如二人著一レ笠者也」

白露を、玉になしたる、九月の、有明の月夜、見れど飽かぬかも。

詠レ風

戀乍裳。稻葉搔別。家居者。乏不有。秋之暮風。

戀ひつゝも、稻葉搔別け、家し居れば、乏しくもあらず。秋の夕風。

芽子花。咲有野邊。日晩之乃。鳴奈流共。秋風吹。

萩が花、咲きたる野邊に、茅蜩の、鳴くなるなへに、秋の風吹く。

秋山之。木葉文未。赤者。今旦吹風者。霜毛置應久。

秋山の、木の葉も未だ、もみでねば、今朝吹く風は、霜も置きぬべし。

詠レ芳

高松之。此峰迫爾。笠立而。盈盛有。秋香乃吉者。

高圓の、此の峰も狹に、笠立ちて、滿ち盛りなる、秋の香のよさ。

詠レ雨

月人男―月中の男
かざしゝ―一訓「かざしの」
秋の月夜の―末句「照りつゝもとな」につゞく
月夜清烏―「烏」に一本「焉」
思はぬに―四句「天雲云云」につゞく
開乃乎再入緒―「再」は「烏」の誤か

天の海に、月の船浮け、桂楫、懸けて漕ぐ見ゆ。月人男。
此夜等者。沙夜深去良之。鴈鳴乃。所聞空從。月立度。
此の夜らは、小夜更けぬらし。雁が音の、聞ゆる空ゆ、月立ち渡る。
吾背子之。挿頭之芽子爾。置露乎。清見世跡。月者照良思。
我が背子が、かざしゝ萩に、置く露を、さやかに見よと、月は照るらし。
無心。秋月夜之。物念跡。寢不所宿。照乍本名。
心無き、秋の月夜の、もの思ふと、寢の寢らえぬに、照りつゝもとな。
不念爾。四具禮乃雨者。零有跡。天雲霽而。月夜清烏。
思はぬに、時雨の雨は、降りたれど、天雲霽れて、月夜さやけし。
芽子之花。開乃乎再入緒。見代跡可聞。月夜之清。戀益良國。
萩の花、咲きのをゝりを、見よとかも、月夜の清き。戀増さらくに。
白露乎。玉作有。九月。在明之月夜。雖見不飽可聞。

秀でずとも—穂に出でずとも、譬喩の歌なるべし

早稲田は刈らじ—鹿をあはれむ也

夕さらず—夕毎に
聞かくしよしも—「聞かく」は「聞く」の延言

詠二水田一

足曳之。山田佃子。不秀友。繩谷延與。守登知金。
足引の、山田作る兒、秀でずとも、繩だに延へよ、守ると知るがね。

左小牡鹿之。妻喚山之。岳邊在。早田者不苅。霜者雖零。
さ牡鹿の、妻呼ぶ山の、岡邊なる、早稲田は刈らじ。霜は降るとも。

我門爾。禁田乎見者。沙穂内之。秋芽子爲酢寸。所念鴨。
我が門に、守る田を見れば、佐保の内の、秋萩薄、思ほゆるかも。

詠レ河

暮不去。河蝦鳴成。三和河之。清瀬音乎。聞師吉毛。
夕さらず、蛙鳴くなる、みわ川の、清き瀬の音を、聞かくしよしも。

詠レ月

天海。月船浮。桂梶。懸而榜所見。月人壯子。

比者之。五更露爾。吾屋戸乃。秋之芽子原。色付爾家里。
此の頃の、曉露に、我が宿の、秋の萩原、色附きにけり。

夕去者。鴈之越往。龍田山。四具禮爾競。色付爾家里。
夕されば、雁の越え行く、龍田山、時雨に競ひ、色附きにけり。

左夜深而。四具禮勿零。秋芽子之。本葉之黄葉。落巻惜裳。
小夜更けて、時雨な降りそ。秋萩の、本葉の黄葉、散らまく惜しも。

古郷之。始黄葉乎。手折以而。今日曾吾來。不見人之爲。
故郷の、初黄葉を、手折りもて、今日ぞ我が來る。見ぬ人の爲め。

君之家乃。黄葉早。落之者。四具禮乃雨爾。所沾良之母。
君が家の、黄葉早く、散りにしは、時雨の雨の、濡れにけらしも。

一年。二遍不行。秋山乎。情爾不飽。過之鶴鴨。
一歳に、二度行かぬ、秋山を、心に飽かず、過しつるかも。

競ひ――一訓「きほひ」

本葉――下葉

一歳に云々――一年に二度とは來ぬ秋の山を

水莖の―枕詞

解くと結びて―立つの序也、一說、本文「而」は「等」の誤にて「解くと結ぶと」

喧之從―「之」の下に「日」を脫す

吾屋戸之。淺茅色付。吉魚張之。夏身之上爾。四具禮零疑。
我が宿の、淺茅色附く、吉隱の、なつみの上に、時雨降るかも。

鴈鳴之。寒鳴從。水莖之。岡乃葛葉者。色付爾來。
雁がねの、寒く鳴きしゆ、水莖の、岡の葛葉は、色附きにけり。

秋芽子之。下葉乃黄葉。於花繼。時過去者。後將戀鴨。
秋萩の、下葉の黄葉、花に繼ぎ、時過ぎ行かば、後戀ひむかも。

明日香河。黄葉流。葛木。山之木葉者。今之散疑。
明日香川、黄葉流る。葛城の、山の木の葉は、今し散るかも。

妹之紐。解登結而。立田山。今許曾黄葉。始而有家禮。
妹が紐、解くと結びて、龍田山、今こそもみぢ、初めたりけれ。

鴈鳴之。喧之從。春日有。三笠山者。色付丹家里。
雁がねの、鳴きにし日より、春日なる、三笠の山は、色附きにけり。

月人の―月の異名を月人男といへば是も月のことならんか、古義には「月内」の誤にて「つきぬちの」かといへり

里異―「里」は「且」の誤にて「あさにけに」なるべし

山の司―山の高き所

露を重み―一訓「露しげみ」

新玉の―枕詞

眞十鏡―枕詞
南淵山―大和國

妹許跡。馬鞍置而。射駒山。撃越來者。紅葉散筒。
妹許と、馬に鞍置きて、射駒山、打越え來れば、紅葉散りつゝ。

黄葉爲。時爾成良之。月人。楓枝乃。色付見者。
黄葉する、時になるらし。月人の、桂の枝の、色附く見れば。

里異。霜者置良之。高松野。山司之。色付見者、
さともけに、霜は置くらし。高圓の、山の司の、色附く見れば。

秋風之。日異吹者。露重。芽子之下葉者。色付來。
秋風の、日にけに吹けば、露を重み、萩の下葉は、色附きにけり。

秋芽子乃。下葉赤。荒玉乃。月之歴去者。風疾鴨。
秋萩の、下葉もみぢぬ。新玉の、月の經ぬれば、風をいたみかも。

眞十鏡。見名淵山者。今日鴨。白露置而。黄葉將散。
眞十鏡、南淵山は、今日もかも、白露置きて、黄葉散るらむ。

眞木―檜杉類の總稱、常磐木ながら色附けるもあるを見てよめるならん

大城の山―元暦本に「謂大城者、在筑前國御笠郡之大野山頂、號曰大城者也」と註せり

小雲―「小」一本「少」に從ふ

風吹けば―略解に「よそのもみぢを風の吹きよせて、そこばく松原の淸からぬといふ也」

我が松原―松に我が待つといひかく、一說「吾」は「君」の誤か

鴈之鳴。聲聞苗荷。明日從者。借香能山者。黄始南。
雁がねの、聲聞くなへに、明日よりは、春日の山は、匂ひ初めなむ。

四具禮能雨。無間之零者。眞木葉毛。爭不勝而。色付爾家里。
時雨の雨、間無くし降れば、眞木の葉も、爭ひ兼ねて、色附きにけり。

灼然。四具禮乃雨者。零勿國。大城山者。色付爾家里。
著く、時雨の雨は、降らなくに、大城の山は、色附きにけり。

風吹者。黄葉散乍。小雲。吾松原。淸在莫國。
風吹けば、黄葉散りつゝ、少くも、我が松原は、淸からなくに。

物念。隱座而。今日見者。春日山者。色就爾家里。
もの思ふと、隱ひ居りて、今日見れば、春日の山は、色附きにけり。

九月。白露負而。足日木乃。山之將黄變。見幕下吉。
九月の、白露負ひて、足引の、山のもみぢむ、見まくしもよけむ。

露霜聞。寒夕之。秋風爾。黄葉爾來毛。妻梨之木者。

露霜も、寒き夕の、秋風に、黄葉にけりも。つま梨の木は。

吾門之。淺茅色就。吉魚張能。浪柴乃野之。黄葉散良新。

我が門の、淺茅色附く、吉隱の、なみしばの野の、黄葉散るらし。

鴈之鳴乎。聞鶴奈倍爾。高松之。野上之草曾。色付爾家留。

雁が音を、聞きつるなへに、高圓の、野の上の草ぞ、色附きにける。

吾背兒我。白細衣。往觸者。應染毛。黄變山可聞。

我が背子が、白妙衣、行き觸れば、匂ひぬべくも、もみづ山かも。

秋風之。日異吹者。水莖能。岡乃木葉毛。色付爾家里。

秋風の、日にけに吹けば、水莖の、岡の木の葉も、色附きにけり。

鴈鳴乃。來鳴之共。韓衣。裁田之山者。黄始有。

鴈がねの、來鳴きしなへに、韓衣、龍田の山は、匂ひ初めたり。

露霜聞—一本「聞」を「乃」に作る、取るべし

つま梨の木—妻無しより梨の木につゞけたる也、つま梨といふ一種にはあらじ、梨の紅葉の特にめでたきをいへる也

吉隱—大和國宇陀郡

行き觸れば—行き觸れなば

水莖の—枕詞

岡—大和國高市郡飛鳥の岡か、筑前國遠賀郡に崗水門あり、或はたゞ岡にて地名にはあらぬにや

韓衣—枕詞

雁鳴者—「鳴」一本「音」

黄葉早繼げ—早く雁の鳴くにつぎて黄葉せよ

ゆめ人懸くな—人よ決して言葉に懸けてな言ひそ

大坂—大和國葛上郡

うら葉—末の葉

まきゝの山—(一)妹が袖を枕(マ)きといひて筑前國御笠郡の城の山にかけたるにや(二)本文「來乃」は「年久」の誤にて「纒向山」の誤

鴈鳴者。今者來鳴沼。吾待之。黄葉早繼。待者辛苦母。

雁がねは、今は來鳴きぬ。我が待ちし、黄葉早繼げ。待てば苦しも。

秋山乎。謹人懸勿。忘西。其黄葉乃。所思君。

秋山を、ゆめ人懸くな。忘れにし、其の黄葉の、思ほゆらくに。

大坂乎。吾越來者。二上爾。黄葉流。志具禮零乍。

大坂を、我が越え來れば、二上に　黄葉流る。時雨降りつゝ。

秋去者。置白露爾。吾門乃。淺茅何浦葉。色付爾家里。

秋されば、置く白露に、我が門の、淺茅がうら葉、色附きにけり。

妹之袖。巻來乃山之。朝露爾。仁寶布黄葉之。散巻惜裳。

妹が袖、まきゝの山の、朝露に、匂ふ黄葉の、散らまく惜しも。

黄葉之。丹穂日者繁。然鞆。妻梨木乎。手折可佐寒。

黄葉の、匂は繁し。然れども、つま梨の木を、手折りかざさむ。

妻籠る―枕詞

やのゝ神山―出雲國にも伊豫國にも備後國にも播磨國にもあり

染め初めたる―一訓「にほひそめたる」從ふべきか

在り渡るがね―冬までも黄葉のあらんために

濡れ通り―下葉までとほりて濡れ

匂はすものは―元曆本の訓也、眞淵は「もみだすものは」と訓ず

詠二黄葉一

妻隱。矢野神山。露霜爾。爾寶比始。散卷惜。
妻籠る、やのゝ神山、露霜に、匂ひ初めたり。散らまく惜しも。

朝露爾。染始。秋山爾。鐘禮莫零。在渡金。
朝露に、染め初めたる、秋山に、時雨な降りそ。在り渡るがね。

右二首。柿本朝臣人麻呂之謌集出。

九月乃。鐘禮乃雨丹。沾通。春日之山者。色付丹來。
九月の、時雨の雨に、濡れ通り、春日の山は、色附きにけり。

鴈鳴之。寒朝開之。露有之。春日山乎。令黄物者。
雁がねの、寒き朝明の、露ならし。春日の山を、匂はすものは。

比日之。曉露丹。吾屋前之。芽子乃下葉者。色付爾家里。
此の頃の、曉露に、我が宿の、萩の下葉は、色附きにけり。

押しなべ―押し靡かせ
手觸れ―手を觸れよ

露に競ひて―今を時と置ける露とはりあひて、古義に、露の散らんに爭ひ先だちてといへるはいかが也

露置爾家留―「露」の下に「曾」を脫す

萩の花―一訓「萩が花」

秋田刈る云々―秋田を刈るために造れる假廬の苫の端動くの意、宣長說、二の句は「衣手涅奈利」の誤にて「そでひぢぬなり」に從ふべし

穗田―穗に出でたる田

錦に見ゆる―一訓「まだらに見ゆる」

我が宿の、尾花押しなべ、置く露に、手觸れ我妹子、散らまくも見む。

白露乎。取者可消。去來子等。露爾爭而。芽子之遊將爲。
白露を、取らば消ぬべし。いざ兒ども、露に競ひて、萩の遊びせむ。

秋田苅。借廬乎作。吾居者。衣手寒。露置爾家留。
秋田刈る、假庵を造り、我が居れば、衣手寒く、露ぞ置きにける。

日來之。秋風寒。芽子之花。令散白露。置爾來下。
此の頃の、秋風寒し。萩の花、散らす白露、置きにけらしも。

秋田刈。苫手搖奈利。白露者。置穗田無跡。告爾來良思。
秋田刈る、苫手動くなり。白露は、置く穗田無しと、告げに來ぬらし。

一云。告爾來良思母。

詠レ山

春者毛要。夏者綠丹。紅之。綵色爾所見。秋山可聞。
春は萌え、夏は綠に、紅の、錦に見ゆる、秋の山かも。

片聞吾妹—宣長說「聞」は「待」の誤か

とをゝに—たわむ程に

別くこと難き—何れがまされりと區別し難き

秋野之。草花我末。鳴百舌鳥。音聞濫香。片聞吾妹。
秋の野の、尾花がうれに、鳴く百舌の、聲聞くらむか。片聞く我妹。

詠レ露

冷芽子丹。置白露。朝朝。珠斗曾見流。置白露。
秋萩に、置ける白露、朝なさな、玉とぞ見ゆる。置ける白露。
暮立之。雨落每。一云「打零者」春日野之。尾花之上乃。白露所念。
夕立の、雨降る每に、春日野の、尾花が上の、白露思ほゆ。
秋芽子之。枝毛十尾丹。露霜置。寒毛時者。成爾家類可聞。
秋萩の、枝もとをゝに、露霜置き、寒くも時は、なりにけるかも。
白露與。秋芽子者。戀亂。別事難。吾情可聞。
白露と、秋の萩とは、戀ひ亂れ、別くこと難き、我が心かも。
吾屋戶之。麻花押靡。置露爾。手觸吾妹兒。落卷毛將見。

岩もと――一訓「いそもと」

秋といはむとや――秋來れりと告げんとや

妹が手を――枕詞
取石の池――和泉國
けに鳴く――鳴く聲のかはりたるをいふ

三吉野の、岩もとさらず、鳴く蛙、宜も鳴きけり。川をさやけみ。

神名火之。山下動。去水丹。川津鳴成。秋登將云鳥屋。
神奈備の、山下とよみ、行く水に、蛙鳴くなり。秋といはむとや。

草枕。客爾物念。吾聞者。夕片設而。鳴川津可聞。
草枕、旅にもの思ひ、我が聞けば、夕かたまけて、鳴く蛙かも。

瀬乎速見。落當知足。白浪爾。川津鳴奈里。朝夕每。
瀬を早み、落ちたぎちたる、白浪に、蛙鳴くなり。朝宵毎に。

上瀬爾。河津妻呼。暮去者。衣手寒三。妻將枕跡香。
上つ瀬に、蛙妻呼ぶ。夕されば、衣手寒み、妻まかむとか。

詠レ鳥

妹手乎。取石池之。浪間從。鳥音異鳴。秋過良之。
妹が手を、取石の池の、波の間ゆ、鳥が音けに鳴く。秋過ぎぬらし。

夕影—夕暮
幾許—多く

陰草—物陰に生ひたる草

庭草—庭に生ひたる草
秋附きにけり—秋めきにけり

詠レ蟬

暮影。來鳴日晩之。幾許。毎日聞跡。不足音可聞。
夕影に、來鳴く茅蜩、幾許も、日毎に聞けど、飽かぬ聲かも。

詠ニ蟋蟀一

秋風之。寒吹奈倍。吾屋前之。淺茅之本。蟋蟀鳴毛。
秋風の、寒く吹くなへ、我が宿の、淺茅がもとに、蟋蟀鳴くも。

影草乃。生有屋外之。暮陰爾。鳴蟋蟀者。雖聞不足可聞。
陰草の、生ひたる宿の、夕影に、鳴く蟋蟀は、聞けど飽かぬかも。

庭草爾。村雨落而。蟋蟀之。鳴音聞者。秋付爾家里。
庭草に、村雨降りて、蟋蟀の、鳴く聲聞けば、秋附きにけり。

詠レ蝦

三吉野乃。石本不避。鳴川津。諸文鳴來。河平淨。

京爾之有者—「京」は義を以て「みさと」とも訓むべし
乏し—珍し

見ずはともしみ—「ともし」はさびしの意、一訓「見ねばともしみ」

しゞに—繁く

野邊の—一訓「野邊に」

山遠。京爾之有者。狹小牡鹿之。妻呼音者。乏毛有香。
山遠き、都にしあれば、さ牡鹿の、妻呼ぶ聲は、乏しくもあるか。

秋芽子之。散過去者。左小牡鹿者。和備鳴將爲名。不見者乏焉。
秋萩の、散り過ぎ行かば、さ牡鹿は、侘鳴せむな。見ずはともしみ。

秋芽子之。咲有野邊者。左小牡鹿曾。露乎別乍。嬬問四家類。
秋萩の、咲きたる野邊は、さ牡鹿ぞ、露を分けつゝ、妻問しける。

奈何牡鹿之。和備鳴爲成。蓋毛。秋野之芽子也。繁將落。
何ぞ鹿の、侘鳴すなる。蓋しくも、秋野の萩や、しゞに散るらむ。

秋芽子之。開有野邊。左牡鹿者。落卷惜見。鳴去物乎。
秋萩の、咲きたる野邊の、さ牡鹿は、散らまく惜しみ、鳴きぬるものを。

足日木乃。山之跡陰爾。鳴鹿之。聲聞爲八方。山田守酢兒。
足引の、山のと陰に、鳴く鹿の、聲聞かすやも、山田守らす兒。

鹿の花妻といへば斯くよめり
戀も盡きねば―戀も盡きぬに
戀こそまされ―妻戀しき心が益々催さると也
家や居るべき―家居してや居るべき
多かれど―多かるものを
山より來せば―山より越え來りなば
恐けど―恐しけれども
妻のめを欲り―妻を見んと欲して
いぶかしみ―心のむすぼれてはれやかならずして

秋芽子之。戀裳不盡者。左小鹿之。聲伊續伊繼。戀許曾益焉。
秋萩の、戀も盡きねば、さ牡鹿の、聲い繼ぎい繼ぎ、戀こそまされ。

山近。家哉可居。左小牡鹿乃。音乎聞乍。宿不勝鳴。
山近く、家や居るべき。さ牡鹿の、聲を聞きつゝ、寢ねがてぬかも。

山邊爾。射去薩雄者。雖大有。山爾文野爾文。沙小牡鹿鳴母。
山の邊に、い行く獵夫は、多かれど、山にも野にも、さ牡鹿鳴くも。

足日木笑。山從來世波。左小鹿之。妻呼音。聞益物乎。
足引の、山より來せば、さ牡鹿の、妻呼ぶ聲を、聞かましものを。

山邊庭。薩雄乃禰良比。恐跡。小牡鹿鳴成。妻之眼乎欲焉。
山邊には、獵夫の狙ひ、恐けど、牡鹿鳴くなり。妻のめを欲り。

秋芽子之。散去見。鬱三。妻戀爲良思。棹牡鹿鳴母。
秋萩の、散り行くを見て、いぶかしみ、妻戀すらし。さ牡鹿鳴くも。

ぬば玉の、夜渡る雁は、おほゝしく、幾夜を經てか、己が名を告る。
璞。年之經往者。阿跡念登。夜渡吾乎。問人哉誰。
新玉の、年の經行けば、あともふと、夜渡る我を、問ふ人や誰。

詠二鹿鳴一

比日之。秋朝開爾。霧隱。妻呼雄鹿之。音之亮左。
此の頃の、秋の朝明に、霧隱り、妻呼ぶ鹿の、聲のさやけさ。
左男牡鹿之。妻整登。鳴音之。將至極。靡芽子原。
さ牡鹿の、妻とゝのふと、鳴く聲の、至らむ極み、靡け萩原。
於君戀。裏觸居者。敷野之。秋芽子凌。左牡鹿鳴裳。
君に戀ひ、うらぶれ居れば、しきの野の、秋萩凌ぎ、さ牡鹿鳴くも。
鴈來。芽子者散跡。左小牡鹿之。鳴成音毛。裏觸丹來。
雁來り、萩は散りぬと、さ牡鹿の、鳴くなる聲も、うらぶれにけり。

おほゝしく—覺束なく、心當てもなくの意か
己が名を告る—かりかりと鳴くをいふ
あともふ—誘ふ（友を）
我—雁自らいふ樣に歌へる也
朝明—夜のあけて程なき時
妻とゝのふと—妻を呼び立つるとての意
しきの野—大和國礒城郡の野か
凌ぎ—押し分けて
雁來り云々—雁の來る頃は萩の花散り、萩はまた

押照る―枕詞　寢たるかも―一訓「寢たるらし」

夙に―朝早く　もの思へかも―もの思へばかも

葦邊在。荻之葉左夜藝。秋風之。吹來苗丹。鴈鳴渡。
葦邊なる、荻の葉さやぎ、秋風の、吹き來るなへに、雁鳴き渡る。
一云。秋風爾。鴈音所聞。今四來霜。

押照。難波穿江之。葦邊者。鴈宿有疑。霜乃零爾。
押照る、難波堀江の、葦邊には、雁寢たるかも。霜の降らくに。

秋風爾。山飛越。鴈鳴之。聲遠離。雲隱良思。
秋風に、山飛び越ゆる、雁がねの、聲遠ざかる、雲隱るらし。

朝爾往。鴈之鳴音者。如吾。物念可毛。聲之悲。
夙に行く、雁の鳴く音は、我が如く、もの思へかも、聲の悲しき。

多頭我鳴乃。今朝鳴奈倍爾。鴈鳴者。何處指香。雲隱良武。
田鶴が音の、今朝鳴くなへに、雁がねは、何處指してか、雲隱るらむ。

野干玉之。夜度鴈者。欝。幾夜乎歷而鹿。己名乎告。

明暗―夜明方のなほ少し暗き時
告げこそ―我心中を告げよかし

國へかも行く―故郷の國へ行くか

はたれ―斑に、一説、ばらばらと離れ〳〵に

刈りばか―第四卷に註せり

秋風に、大和へ越ゆる、雁がねは、彌遠ざかり、雲隱れつゝ。

明闇之。朝霧隱。鳴而去。鴈者吾戀。於妹告社。

明暗の、朝霧隱り、鳴きて行く、雁は我が戀ふる、妹に告げこそ。

吾屋戶爾。鳴之鴈哭。雲上爾。今夜喧成。國方可聞遊群。

我が宿に、鳴きし雁がね、雲の上に、今宵鳴くなり。國へかも行く。

左小牡鹿之。妻問時爾。月乎吉三。切木四之泣所聞。今時來等霜。

さ牡鹿の、妻問ふ時に、月をよみ、雁が音聞ゆ。今し來らしも。

天雲之。外鴈鳴。從聞之。薄垂霜零。寒此夜者。

天雲の、外に雁が音、聞きしより、はたれ霜降り、寒し此の夜は。

一云。彌益益爾。戀許曾增焉。

秋田。吾苅婆可能。過去者。鴈之喧所聞。冬方設而。

秋の田の、我が刈りばかの、過ぎぬれば、雁が音聞ゆ。冬かたまけて。

咲かずける—咲かざりける
しみゝに—繁く
風にたぐひて—風につれて
はなに散りぬる—あだに散りぬるの意

吾待之。秋者來奴。雖然。芽子之花曾毛。未開家類。
我が待ちし、秋は來りぬ。然れども、萩の花ぞも、未だ咲かずける。

欲見。吾待戀之。秋芽子者。枝毛思美三荷。花開二家里。
見まく欲り、我が待ち戀ひし、秋萩は、枝もしみゝに、花咲きにけり。

春日野之。芽子落者。朝東。風爾副而。此間爾落來根。
春日野の、萩し散りなば、朝東風の、風にたぐひて、此處に散りこね。

秋芽子者。於鴈不相常。言有者香。一云「言有可聞」音乎聞而者。花爾散去流。
秋萩は、雁に逢はじと、言へればか、聲を聞きては、はなに散りぬる。

秋去者。妹令視跡。殖之芽子。露霜負而。散來毳。
秋さらば、妹に見せむと、植ゑし萩、露霜負ひて、散りにけるかも。

詠レ鴈

秋風爾。山跡部越。鴈鳴者。射矢遠放。雲隱筒。

行き合ひの早稻―夏と秋と行き合ふ頃實る早稻か、行相といふ地名か、其他にも說あれども定かならず

しゑや―歎息の詞

あたらし―惜し

復逢はめやも―散りなば復花に逢ふべきやと思ふにつけて

日にけに―日毎に

𡢳嬬等。行相乃速稻乎。苅時。成來下。芽子花咲。

少女らが、行き合ひの早稻を、刈る時に、なりにけらしも。萩の花咲く。

朝霧之。棚引小野之。芽子花。今哉散濫。未猒爾。

朝霧の、棚引く小野の、萩の花、今や散るらむ。未だ飽かなくに。

戀之久者。形見爾爲與登。吾背子我。殖之秋芽子。花咲爾家里。

戀しくは、形見にせよと、我が背子が、植ゑし秋萩、花咲きにけり。

秋芽子。戀不盡跡。雖念。思惠也安多良思。又將相八方。

秋萩に、戀盡さじと、思へども、しゑやあたらし。復逢はめやも。

秋風者。日異吹奴。高圓之。野邊之秋芽子。散卷惜裳。

秋風は、日にけに吹きぬ。高圓の、野邊の秋萩、散らまく惜しも。

丈夫之。心者無而。秋芽子之。戀耳八方。奈積而有南。

丈夫の、心は無しに、秋萩の、戀にのみやも、泥みてありなむ。

玉梓。公之使乃。手折來有。此秋芽子者。雖見不飽鹿裳。
玉章の、君が使の、手折りける、此の秋萩は、見れど飽かぬかも。

吾屋前爾。開有秋芽子。常有者。我待人爾。令見猿物乎。
我が宿に、咲ける秋萩、常にあらば、我が待つ人に、見せましものを。

手寸十名相。殖之名知久。出見者。屋前之早芽子。咲爾家類香聞。
たぎ備へ、植ゑしも著く、出で見れば、宿のわさ萩、咲きにけるかも。

吾屋外爾。殖生有。秋芽子乎。誰標刺。吾爾不所知。
我が宿に、植ゑ生したる、秋萩を、誰か標さす。我に知らえず。

手取者。袖并丹覆。美人部師。此白露爾。散卷惜。
手に取れば、袖さへ匂ふ、女郎花、此の白露に、散らまく惜しも。

白露爾。荒爭金手。咲芽子。散惜兼。雨莫零根。
白露に、爭ひ兼ねて、咲ける萩、散らば惜しけむ。雨な降りそね。

玉章の—枕詞
手折りける—手折り來れる
殖之名—「名」は「毛」の誤
たぎ備へ—たぐり備へ、仙覺以前の古點は「てもすまに」なりしといふ
我が宿に云々—譬論の歌にて、女を萩によそへしならん

時なれば―一訓「時しあれば」

さき野―大和佐紀野

急之吹來―「之」は「久」の誤か

競竟―(一)「竟」は「豆見」の誤(二)「竟」は「立見」の誤にて「きほひたちみむ」

思乎―「乎」一本「手」とある宜し

萩を秋と言ふ―萩を特に秋の景物といふ

春去者。霞隱。不所見有師。秋芽子咲。折而將插頭。
春されば、霞隱れて、見えざりし、秋萩咲けり。折りてかざさむ。

沙額田乃。野邊乃秋芽子。時有者。今盛有。折而將插頭。
さぬかだの、野邊の秋萩、時なれば、今盛りなり。折りてかざさむ。

事更爾。衣者不摺。佳人部爲。咲野之芽子爾。丹穗日而將居。
殊更に、衣は摺らじ。女郎花、さき野の萩に、匂ひて居らむ。

秋風者。急之吹來。芽子花。落卷惜三。競竟。
秋風は、早く吹き來ぬ。萩が花、散らまく惜しみ、爭ひて見む。

我屋前之。芽子之若末長。秋風之。吹南時爾。將開跡思乎。
我が宿の、萩のうれ長し。秋風の、吹きなむ時に、咲かむと思ひて。

人皆者。芽子乎秋云。縱吾等者。乎花之末乎。秋跡者將言。
人皆は、萩を秋と言ふ。よし我は、尾花がうれを、秋とは言はむ。

折りのみ折りて云々—古義の「而」は「六」又は「无」の誤にて「折りのみ折らむ」と訓む、第五句を豈露に置き枯れしめんやと解したる、取るべからんか

行之者—(一)「之」は「去」の誤か(二)「之」の下に「香」を脱せしか、然らば「野邊行きしかば」也

白露に云々—花は咲かんとするに露の重りて咲かせじとするに似たれば、爭ふとはいふにや

行かな—行かん

白露乃。置巻惜。秋芽子乎。折耳折而。置哉枯。
白露の、置かまし惜しみ、秋萩を、折りのみ折りて、置きや枯らさむ。

秋田苅。借廬之宿。爾穗經及。咲有秋芽子。雖見不飽香聞。
秋田刈る、假庵の宿、匂ふまで、咲ける秋萩、見れど飽かぬかも。

吾衣。摺有者不在。高松之。野邊行之者。芽子之摺類曾。
我が衣、摺れるにはあらず。高圓の、野邊行きぬれば、萩の摺れるぞ。

此暮。秋風吹奴。白露爾。荒爭芽子之。明日將咲見。
此の夕、秋風吹きぬ。白露に、爭ふ萩の、明日咲かむ見む。

秋風。冷成奴。馬並而。去來於野行奈。芽子花見爾。
秋風は、涼しくなりぬ。馬並めて、いざ野に行かな。萩の花見に。

朝杲。朝露負。咲雖云。暮陰社。咲益家禮。
朝顏は、朝露負ひて、咲くといへど、夕影にこそ、咲きまさりけれ。

落僧惜毛—「僧」は「倶」の誤か、一說「僧」は「信」の誤にて「散らくし惜しも」

時雨の降るに—常時は一般に小雨をしぐれといへりしにや

露枯—契沖は「露にかれつゝ」と訓じ、宣長は「枯」は「沾」の誤にて「露にぬれつゝ」といへり

阿陀の大野—大和國宇智郡

雁がねの云々—萩は雁の來る頃は散り過ぐるものなれば斯くよめり

宵さらず—夜毎に

詠レ花

竿志鹿之。心相念。秋芽子之。鐘禮零丹。落僧惜毛。
さ牡鹿の、心相思ふ、秋萩の、時雨の降るに、散らまく惜しも。

夕去。野邊秋芽子。末若。露枯。金待難。
夕されば、野邊の秋萩、うら若み、露に萎れて、秋待ちがてぬ。

右二首。柿本朝臣人麻呂之謌集出。

眞葛原。名引秋風。吹毎。阿太乃大野之。芽子花散。
眞葛原、靡く秋風、吹く毎に、阿陀の大野の、萩が花散る。

雁鳴之。來喧牟日及。見乍將有。此芽子原爾。雨勿零根。
雁がねの、來鳴かむ日まで、見つゝあらむ。此の萩原に、雨な降りそね。

奥山爾。住云男鹿之。初夜不去。妻問芽子之。散久惜裳。
奥山に、住むちふ鹿の、宵さらず、妻問ふ萩の、散らまく惜しも。

得行きて泊てむ―正訓「はててとまらむ」今傍訓に據る
弖大王―「弖」は「定」の誤
時をし待つと―一訓「時さもらふと」
村肝の―枕詞
心覺えず―一說、本文「欲」は「歡」の誤にて「こゝろさぶしく」又「心不知欲比」の誤にて「心いさよひ」
解衣の―枕詞
行長有得鴨―(一)「長」は「行」の誤、「得」の上に「不」を脱せしか、然らば「ゆくら〳〵にありがてぬかも」と訓むべし、(二)「行」は「待」の誤にて「まちつゝながくありえてむかも」と訓むか(三)「行瀬長有欲得鴨」の誤脱にて「ゆくせのながくありこせぬかも」か
片待つ―心に思ひ構へて待つ

彥星之。川瀨渡。左小舟乃。得行而將泊。河津石所念。
彥星の、川瀨を渡る、さ小舟の、得行きて泊てむ、河津し思ほゆ。

天地跡。別之時從。久方乃。天驗常。弖大王。天河原爾。璞。月累而。妹爾相。時侯跡。立待爾。吾衣手爾。秋風之。吹反者。立坐。多土伎乎不知。村肝。心不欲。解衣。思亂而。何時跡。吾待今夜。此川。行長有得鴨。
天地と、別れし時ゆ、久方の、天つしるしと、定めてし、天の河原に、新玉の、月を重ねて、妹に逢ふ、時をし待つと、立ち待つに、我が衣手に、秋風の、吹きかへらへば、立ちて居て、たどきを知らに、村肝の、心覺えず、解衣の、思ひ亂れて、何時しかと、我が待つ今宵、此の川の、行長有得鴨。

反歌

妹爾相。時片待跡。久方乃。天之漢原爾。月叙經來。
妹に逢ふ、時片待つと、久方の、天の河原に、月ぞ經にける。

旗荒—「荒」は「荻」又は「[illegible]木」の誤かといひ、一説「旗荒木末葉裳」の誤脱にて「旗すゝきうら葉も」と訓ず
具世丹—「具」は「其」の誤ならん
物思ふ人—彦星をさす
そほ船—あかく塗りたる船、一説「大船」
若草の—枕詞
妻—織女をさす
大船の—枕詞
其の夫の兒—彦星をさす
天人—彦星をさす、本文「天人」古訓「ひこぼし」

本葉裳具世丹。秋風乃。吹來夕丹。天川。白浪凌。落沸。速湍涉。稚草乃。妻手枕迹。大船乃。思憑而。榜來等六。其夫乃子我。荒珠乃。年緒長。思來之。戀將盡。七月。七日之夕者。吾毛悲烏。

天地の、初の時ゆ、天の河、い向ひ居りて、一年に、二度逢はぬ、妻戀ひに、物思ふ人、天の河、安の河原の、あり通ふ、年の渡に、そほ船の、艫にも舳にも、船裝ひ、眞楫しゞ貫き、旗薄、本葉もそよに、秋風の、吹き來る宵に、天の河、白浪凌ぎ、落ちたぎつ、早瀬渡りて、若草の、妻が手まかむと、大船の、思ひ頼みて、漕ぎ來らむ、其の夫の兒が、新玉の、年の緒長く、思ひ來し、戀盡すらむ、七月の、七日の宵は、我も悲しも。

反歌

狛錦。紐解易之。天人乃。妻問夕叙。吾裳將偲。

高麗錦、紐解き交し、天人の、妻問ふ宵ぞ。我も偲ばむ。

有二家里—「有」は「絕」の誤にて「たえにけり」ならん

高けども—高けれども
待てば苦しみ—一訓「待たば苦しみ」、織女の迎への來るを待つが苦しとも、又、織女を迎へにやりて待つが苦しければ自らとも解せらる

船出し去なむ—彥星の別れに臨める歌、一說「去」は「來」の誤か

出出乃渡丹—「出出」は「誠」の誤か
具穗船乃—「具」は「曾」又は「其」の誤か、一說「意」の誤にて「おほ船の」か

天漢。去年之渡湍。有二家里。君將來。道乃不知久。
天の河、去年の渡瀨、荒れにけり。君が來まさむ、道の知らなく。

天漢。湍瀨爾白浪。雖高。直渡來沼。待者苦三。
天の河、瀨々に白浪、高けども、直渡り來ぬ。待てば苦しみ。

牽牛之。嬬喚舟之。引綱乃。將絶跡君乎。吾念勿國。
彥星の、妻呼ぶ船の、引綱の、絶えむと君を、我が思はなくに。

渡守。舟出爲將去。今夜耳。相見而後者。不相物可毛。
渡守、船出し去なむ。今宵のみ、逢見て後は、逢はじものかも。

吾隱有。檝棹無而。渡守。舟將借八方。須臾者有待。
我が隱せる、檝棹無くて、渡守、船貸さめやも。暫しはあり待て。

乾坤之。初時從。天漢。射向居而。一年丹。兩遍不遭。妻戀爾。物念人。天漢。安乃川原乃。有通。出出乃渡丹。具穗船乃。艫丹裳舳丹裳。船裝。眞梶繁拔。旗荒。

玉葛—枕詞　絶えぬものから—契は絶えぬものながら　さ寝らくは—さは發語、寝るは

明日を隔てて云々—明日の一日を隔にして其れより末の長からん

棚橋—棚の如く懸け渡せる橋

待つと告げこそ—待つと告げよかし

玉葛。不絶物可良。佐宿者。年之度爾。直一夜耳。
玉葛、絶えぬものから、さ寝らくは、年の渡りに、只一夜のみ。

戀日者。氣長物乎。今夜谷。令乏應哉。可相物乎。
戀ふる日は、け長きものを、今宵だに、乏しむべしや。逢ふべきものを。

織女之。今夜相奈婆。如常。明日乎阻而。年者將長。
棚機の、今宵逢ひなば、常の如、明日を隔てて、年は長けむ。

天漢。棚橋渡。織女之。伊渡左牟爾。棚橋渡。
天の河、棚橋渡せ。棚機の、い渡らさむに、棚橋渡せ。

天漢。河門八十有。何爾可。君之三船乎。吾待將居。
天の河、川門八十あり。何處にか、君が御船を、我が待ち居らむ。

秋風乃。吹西日從。天漢。瀬爾出立。待登告許曾。
秋風の、吹きにし日より、天の河、瀬に出で立ちて、待つと告げこそ。

船渡せをと―船渡せよと

まきなむ―一訓「まかれむ」

來しくも著し―「く」は助辭、來りし甲斐あり

見繼がずあらむ―見とゞけずあらんやはの意

君ならなくに―君にてはなきものなるを

渡守、船渡せをと、呼ぶ聲の、至らねばかも、檝の音せぬ。

眞氣長。河向立。有之袖。今夜卷。跡念之吉沙。
まけ長く、川に向き立ち、ありし袖、今宵まきなむ、と思ふがよさ。

天漢。渡湍每。思乍。來之雲知師。逢有久念者。
天の河、渡瀬每に、思ひつゝ、來しくも著し。逢へらく思へば。

人左倍也。見不繼將有。牽牛之。嬬喚舟之。近附往乎。
人さへや、見繼がずあらむ。彥星の、妻呼ぶ船の、近づき行くを。
一云。見乍有良武。

天漢。瀨乎早鴨。烏珠之。夜者闌爾乍。不合牽牛。
天の河、瀨を早みかも、ぬば玉の、夜は更けにつゝ、逢はぬ彥星。

渡守。舟早渡世。一年爾。二遍往來。君爾有勿久爾。
渡守、船早や渡せ。一年に、二度通ふ、君ならなくに。

君—彦星をさす

明けずもあらぬか—明けずもあれかし

足濡らし渡り—一訓「足ぬれ渡り」未だまかねば—未だまかぬに

月日擇り、逢ひてしあれば、別れまく、惜しかる君は、明日さへもがも。

天漢。渡瀬深彌。泛船而。棹來君之。楫之音所聞。
天の河、渡り瀬深み、船浮けて、漕ぎ來る君が、楫の音聞ゆ。

天原。振放見者。天漢。霧立渡。公者來良志。
天の原、ふりさけ見れば、天の河、霧立ち渡る。君は來ぬらし。

天漢。瀬每幣。奉。情者君乎。幸來座跡。
天の河、瀬每に幣を、奉る。心は君を、幸く來ませと。

久方之。天河津爾。舟泛而。君待夜等者。不明毛有寢鹿。
久方の、天の河津に、船浮けて、君待つ夜らは、明けずもあらぬか。

天河。足沾渡。君之手毛。未枕者。夜之深去良久。
天の河、足濡らし渡り、君が手も、未だまかねば、夜の更けぬらく。

渡守。船度世乎跡。呼音之。不至者疑。梶之聲不爲。

蹈木—機を織る時尻を掛ける板

かへる—ひるがへる

織義之—「義」は「羲」の誤

古ゆ—一訓「古に」

足玉—足に飾としてつけたる玉

ゆらに—玉のゆら〳〵として打合ひ鳴るをいふ

逢義之—「義」は「羲」の誤

別乃—「乃」は「久」の誤か

たゞ今宵、逢ひたる兒らに、言問も、未だせずして、小夜ぞ明けにける。

天河。白浪高。吾戀。公之舟出者。今爲下。

天の河、白浪高し。我戀ふる、君が舟出は、今しすらしも。

機。蹋木持往而。天河。打橋度。公之來爲。

機ものの、蹈木持て行きて、天の河、打橋渡す、君が來むため。

天漢。霧立上。棚幡乃。雲衣能。飄袖鴨。

天の河、霧立ち上る。棚機の、雲の衣の、かへる袖かも。

古。織義之八多乎。此暮。衣縫而。君待吾乎。

古ゆ、織りてし機を、此の夕、衣に縫ひて、君待つ我を。

足玉母。手珠毛由良爾。織旗乎。公之御衣爾。縫將堪可聞。

足玉も、手玉もゆらに、織る機を、君が御衣に、逢ひ敢へむかも。

擇月日。逢義之有者。別乃。惜有君者。明日副裳欲得。

引船に云々—引船して渡り來ませ
夜降たぬ間に—夜の更けぬ間に、一訓「夜のふけぬまに」
打橋—こゝかしこへ移し渡す假橋
逢ふ宵は—一訓「逢へる夜は」
今し七夜を云々—今夜一夜に七夜が繼げざまに來て明けずあれかし
年に装ふ—一年待ち〳〵て装ひして舟出する

風吹きて、川浪立ちぬ。引船に、渡りも來ませ、夜降たぬ間に。
天河。遠度者。無友。公之舟出者。年爾社候。
天の河、遠き渡りは、無けれども、君が船出は、年にこそ待て。
天河。打橋度。妹之家道。不止通。時不待友。
天の河、打橋渡せ、妹が家路、止まず通はむ。時待たずとも。
月累。吾思妹。會夜者。今之七夕。續巨勢奴鴨。
月重ね、我が思ふ妹に、逢ふ宵は、今し七夜を、繼ぎこせぬかも。
年丹裝。吾舟榜。天河。風者吹友。浪立勿忌。
年に装ふ、我が船漕がむ。天の河、風は吹くとも、浪立つなゆめ。
天河。浪者立友。吾舟者。率榜出。夜之不深間爾。
天の河、浪は立つとも、我が船は、いざ漕ぎ出でむ。夜の更けぬ間に。
直今夜。相有兒等爾。事問母。未爲而。左夜曾明二來。

川門に居りて―川門に出でて待ち居りて

往射跡―解し難し、一説「往」は「注」の誤にて「さしてや射ると」

月人男―月の異稱

櫂の散るかも―櫂の雫の散れるかと疑ふなり

きらひぬ―一訓「きらへり」

時待つ船は―時節を待ち得たる船はの意

一云。天川河向立。

天漢。川門座而。年月。戀來君。今夜會可母。

天の河、川門に居りて、年月に、戀ひ來し君に、今宵逢へるかも。

明日從者。吾玉床乎。打拂。公常不宿。孤可母寢。

明日よりは、我が玉床を、打拂ひ、君と寢ねずて、獨りかも寢む。

天原。往射跡。白檀。挽而隱在。月人壯子。

天の原、行きてや射ると、白眞弓、引きて隱せる、月人男。

此夕。零來雨者。男星之。早榜船之。賀伊乃散鴨。

此夕、降り來る雨は、彦星の、早や漕ぐ船の、櫂の散るかも。

天漢。八十瀬霧合。男星之。時待船。今榜良之。

天の河、八十瀬きらひぬ。彦星の、時待つ船は、今し漕ぐらし。

風吹而。河浪起。引船丹。度裳來。夜不降間爾。

月人男―古註彥星をさすといへど、實は月の歌の紛れ入りしなるべきか

此の川の瀨―天の川瀨

八十の舟津―舟津の多きをいふ、一說、安の舟津

秋榜船之―「秋」は「速」の誤か

川音淸し―一訓「かはとさやけし」

秋風之。淸夕。天漢。舟榜度。月人壯子。
秋風の、さやけき夕、天の河、舟漕ぎ渡る、月人男。

天漢。霧立度。牽牛之。檝音所聞。夜深往。
天の河、霧立ち渡り、彥星の、檝の音聞ゆ。夜の更け行けば。

君舟。今榜來良之。天漢。霧立度。此川瀨。
君が舟、今漕ぎ來らし、天の河、霧立ち渡る。此の川の瀨に。

秋風爾。河浪越。暫。八十舟津。三舟停。
秋風に、川浪立ちぬ。暫くは、八十の舟津に、御舟止めよ。

天漢。川聲淸之。牽牛之。秋榜船之。浪躁香。
天の河、川音淸し。彥星の、秋漕ぐ舟の、波の騷ぎか。

天漢。川門立。吾戀之。君來奈里。紐解待。
天の河、川門に立ちて、我が戀ひし、君來るなり。紐解き待たむ。

年の戀—一年中の戀を

逢はなくは—逢はぬは

來まさざるらむ—七夕に織女の待ち侘ぶるをよめり

君を—君なるものを

年之戀。今夜盡而。明日從者。如常哉。吾戀居牟。
年の戀、今宵盡して、明日よりは、常の如くや、我が戀ひ居らむ。

不合者。氣長物乎。天漢。隔又哉。吾戀將居。
逢はなくは、け長きものを、天の河、隔てて復や、我が戀ひ居らむ。

戀家口。氣長物乎。可合有。夕谷君之。不來益有良武。
戀しけく、氣長きものを、逢ふべかる、宵だに君が、來まさざるらむ。

牽牛與。織女。今夜相。天漢門爾。波立勿謹。
彦星と、棚機津女と、今宵逢ふ、天の河門に、波立つなゆめ。

秋風。吹漂蕩。白雲者。織女之。天津領巾毳。
秋風の、吹き漂はす、白雲は、棚機津女の、天つ領巾かも。

數裳。相不見君矣。天漢。舟出速爲。夜不深間。
屢も、逢見ぬ君を、天の河、船出早やせよ。夜の更けぬ間に。

戀も盡きねば—戀も盡きぬに

天の河云々—天の安の河原に神々の集ひ給ふは何時にても必要に應じてあるを、二星の集ひは一年に只一夜のみと定れるを恨めるにや、種々異說あれど今略す

庚辰年—天武天皇白鳳九年

五百機—機の數多きをいふ

秋さり衣—秋になりて著る衣、一說、本文「秋去」は「和布」の誤にて「にぎたへごろも」か

誰か取り見む—彥星ならで誰かと也

年にありて—一年間戀ひ暮して漸く

何事あれぞ—何事ありてか

一年に、七日の夜のみ、逢ふ人の、戀も盡きねば、夜の更け行くも。

一云。不盡者。佐宵曾明尒來。

天漢。安川原。定而。神競者。磨待無。

天の河、安の河原の、定りて、神つ集ひは、時待たなくに。

此歌一首。庚辰年作之。

右柿本朝臣人麻呂歌集出。

棚機之。五百機立而。織布之。秋去衣。孰取見。

棚機の、五百機立てて、織る布の、秋さり衣、誰か取り見む。

年有而。今香將卷。烏玉之。夜霧隱。遠妻手乎。

年にありて、今日かまくらむ。ぬば玉の、夜霧隱りに、遠妻の手を。

吾待之。秋者來沼。妹與吾。何事在曾。紐不解在牟。

我が待ちし、秋は來りぬ。妹と我と、何事あれぞ、紐解かざらむ。

遠けども―遠けれども
宵さらず見む―夜毎に見やらん

其の宿―織女の家をさす
織る白妙云々―一説「織れる白妙縫ひてけむかも」下の「織」は「縫」の誤也

河霧―下に「渡」を脱せるか、古義が取りたる古寫本には「立」を補へり

直ならずとも―直接逢ふにあらずとも
告げむ兒もがも―告げやるべき使もあれかし

白雲の、五百重隱りて、遠けども、宵さらず見む。妹があたりは。

爲我登。織女之。其屋戸爾。織白布。織弖兼鴨。

我が爲と、棚機津女の、其の宿に、織る白妙は、織りてけむかも。

君不相。久時。織服。白栲衣。垢附麻弖爾。

君に逢はず、久しき時ゆ、織る機の、白妙衣、垢附くまでに。

天漢。梶音聞。孫星與。織女。今夕相霜。

天の河、楫の音聞ゆ。彦星と、棚機津女と、今宵逢ふらしも。

秋去者。河霧。天川。河向居而。戀夜多。

秋されば、川霧渡る、天の河、河に向き居て、戀ふる夜ぞ多き。

吉哉。雖不直。奴延鳥。浦嘆居。告子鴨。

よしゑやし。直ならずとも、鵺鳥の、うらなげ居ると、告げむ兒もがも。

一年爾。七夕耳。相人之。戀毛不過者。夜深往久毛。

袖交へずあらむ―袖を交はさずあらん、夫婦の交をせぬこと、一訓「袖交へずあらめや」從ふべし、「哉」の字脫也

遙媄等―「媄」は「嬬」の誤か

逢見らく云々―彥星に代りて其の別れを惜むをよめり

いなのめの―枕詞

あらねば―あらぬに

帶乞ふべしや―帶をくれとは聞えませぬ也、彥星の帶を解きて置きたるを別に臨みて織女に返せと乞ふ時織女の恨みいふ也

戀も盡きねば―戀も盡きぬに

相見とも―相見るとも

逢はむと思へど―年に只一度の逢瀨故月の雲にかくれたるを見る如く心もくれて苦しとにや

天の河、夜船を漕ぎて、明けぬとも、逢はむと思ふ夜、袖交へずあらむ。

遙媄等。手枕易。寢夜。雞音莫動。明者雖明。

遠妻と、手枕交へて、寢たる夜は、雞が音な鳴き、明けはあくとも。

相見久。猒雖不足。稲目。明去來理。舟出爲牟孃。

逢見らく、飽足らねども、いなのめの、明け行きにけり。船出せむ妹。

左尼始而。何太毛不在者。白栲。帶可乞哉。戀毛不過者。

さ寢初めて、幾何もあらねば、白妙の、帶乞ふべしや。戀も盡きねば。

萬世。携手居而。相見鞆。念可過。戀爾有莫國。

萬代に、携り居て、相見とも、思ひ過ぐべき、戀ならなくに。

萬世。可照月毛。雲隱。苦物叙。將相登雖念。

萬代に、照るべき月も、雲隱り、苦しきものぞ。逢はむと思へど。

白雲。五百遍隱。雖遠。夜不去將見。妹當者。

時が也、本文「來」の下に「良」を脱せるか
我が待ちし云々—逢ふべき時になれる意
にほひに行かな—染まりに行かん、織女に相觸れに行かんとなるべし
遠方人—織女をさす
我が背子—彦星
うら戀ひ居れば—心のうちに戀ひ居れば
眞氣長く—眞は接頭語、月日久しく
妹が音聞ゆ—秋風の便に妹が音信せしなり、妹は織女
紐解き行かな—紐解き行かん、一說、本文「往」は「待」の誤
戀しくは—戀は「しく」は助辭
乏しむべしや—逢はんと契りし今宵だにもせめて十分に語りつくさぶらんやの意
渡場—一說「わたりで」にて、渡出即ち渡の水門
あげてし機—織るべく掛け置きたる機

我が待ちし、秋萩咲きぬ。今だにも、にほひに行かな。遠方人に。

吾世子爾。裏戀居者。天河。夜船榜動。梶音所聞。
我が背子に、うら戀ひ居れば、天の河、夜船漕ぎとよむ、檝の音聞ゆ。

眞氣長。戀心自。白風。妹音所聽。紐解往名。
眞氣長く、戀ふる心ゆ、秋風に、妹が音聞ゆ。紐解き行かな。

戀敷者。氣長物乎。今谷。乏牟可哉。可相夜谷。
戀しくは、氣長きものを、今だにも、乏しむべしや、逢ふべき夜だに。

天漢。去歲渡伐。遷閉者。河瀨於蹈。夜深去來。
天の河、去歲の渡場、移ろへば、川瀨を蹈むに、夜ぞ更けにける。

自古。擧而之服。不顧。天河津爾。年序經去來。
古ゆ、あげてし機を、顧みず、天の河津に、年ぞ經にける。

天漢。夜船榜而。雖明。將相等念夜。袖易受將有。

早く告げこせ―疾く其の意を告げよかし、「與」は「乞」の誤

飽足爾―「足」は「泣」の誤ならんか

月人男―彥星をさす、中山嚴水說に、月也、月を待つ歌の紛れて入れる也と

戀等爾―「等」は「樂」の誤

こ向ひ立ちて―「こ」は「こことより」の略、一說「己」にあらず「已」也、「い向ひ立ちて」

妻と言ふまでは―牽牛の織女を得ずして戀ふるさまによみなしたるか

白玉の云々―多くの白玉を飾りて彥星の來るを待つとなるべし

干しがたぬ―涙の乾し難きをいふ、「がたぬ」は「がてぬ」といふに同じ、或は本文「干」は「在」の誤にて「ありがたぬ」か

水陰草―「陰」一本「隱」、「みこもり」にて、天の河の水隈に生えたる草の意

時來るらし―二星相逢ふ

ぬば玉の、夜霧籠りて、遠くとも、妹が傳へは、早く告げこせ。

汝戀。妹命者。飽足爾。袖振所見都。及雲隱。

汝が戀ふる、妹の命は、飽足りに、袖振る見えつ。雲隱るまで。

夕星毛。往來天道。及何時鹿。仰而將待。月人壯。

夕星も、通ふ天路を、何時までか、仰ぎて待たむ、月人男。

天漢。己向立而。戀等爾。事谷將告。孋言及者。

天の河、こ向ひ立ちて、戀ふらくに、言だに告げむ。妻と言ふまでは。

水良玉。五百都集乎。解毛不見。吾者干可太奴。相日待爾。

白玉の、五百つ集ひを、解きも見ず、我は干しがたぬ。逢はむ日待つに。

天漢。水陰草。金風。靡見者。時來之。

天の河、水陰草の、秋風に、靡くを見れば、時來るらし。

吾等待之。白芽子開奴。今谷毛。爾寶比爾往奈。越方人邇。

八千桙の神—大己貴命
乏妻—たま〳〵逢ひてめづらしみ思ふ妻
我が戀ふる—彦星になりてよめり
にのほの面わ—紅顏をいふ
石枕まく—まくは枕にす、一訓「石枕まかむ」然るべし
竟津—(一)「竟」は「立見」の誤にて「たちて見つ」と訓むべしと眞淵說也(二)「はてむ津の」
己が妻の云々—織女をさす、一訓「己がつま」
然ぞ手にある—天地別れし時より織女は己が妻と定りて斯くぞ手に有るといふ意、或は本文に誤字あらんか
告余叙來鶴—「余」は「爾」の誤
彦星の—一訓「彦星は」
水無川—天の河
妹傳—「妹傳言」の誤にて「妹がつてごと」か

八千桙の、神の御世より、乏妻、人知りにけり。繼ぎてし思へば。
吾等戀。丹穗面。今夕母可。天漢原。石枕卷。
我が戀ふる、にのほの面わ、今宵もか、天の河原に、石枕まく。
己孋。乏子等者。竟津。荒礒卷而寢。君待難。
己が妻の、乏しき兒らは、立ちて見つ。荒礒まきて寢む。君待ちがてに。
天地等。別之時從。自孋。然叙手而在。金待吾者。
天地と、別れし時ゆ、己が妻、然ぞ手にある、秋待つ我は。
彦星。嘆須孋。事谷毛。告余叙來鶴。見者苦彌。
彦星の、嘆かす妻に、言だにも、告げにぞ來つる。見れば苦しみ。
久方。天印等。水無川。隔而置之。神世之恨。
久方の、天つしるしと、水無川、隔てて置きし、神世し恨し。
黑玉。宵霧隱。遠鞆。妹傳。速告與。

二三四の句は「みなそこさへにてるふねのはててふなびと」と訓むべし、又一訓、二三四の句「光る船はてし丹人」
船漕ぐ人―牽牛
妹―織女
乏しきまでに―たぐひ少く珍しきまでに、一說は、たの見る目も羨しき迄に
嬬者知遠―「知」一本「彌」に作る、「つまはいやとはく」と訓むべし
告火―「火」は「哭」の誤か
過ぎて來べしや―去ぬるを來るといふ例有り
あから引く―枕詞、この歌七夕の歌ならず、竄入せるならん
色妙の兒―美しき女
しば見れば―屢見れば
人妻ゆゑに―人妻なれば益なしと思ひながらも猶且
秋立待等―宣長云「秋」は「我」の誤にて「わがたちまつ」
安の渡り―安河の渡
告げこそ―告げよかし、本文「與具」は「乞其」の誤か
我―彥星
汝―織女

天の河、水さへに照る。船渡り、船漕ぐ人に、妹と見えきや。

久方之。天漢原丹。奴延鳥之。裏歎座津。乏諸手丹。

久方の、天の河原に、鵺鳥の、うらなげましつ。乏しきまでに。

吾戀。嬬者知遠。往船乃。過而應來哉。事毛告火。

我が戀ふる、夫は知れるを、行く船の、過ぎて來べしや。言も告げなく。

朱羅引。色妙子。數見者。人妻故。吾可戀奴。

あから引く、色妙の兒を、しば見れば、人妻ゆゑに、我戀ひぬべし。

天漢。安渡丹。船浮而。秋立待等。妹告與具。

天の川、安の渡りに、船浮けて、秋立つ待つと、妹に告げこそ。

從蒼天。往來吾等須良。汝故。天漢道。名積而叙來。

大空ゆ、通ふ我すら、汝が故に、天の河路を、なづみてぞ來し。

八千戈。神自御世。乏孋。人知爾來。告思者。

逢ひ見んと也
朝なさな―朝な〳〵
末摘花―紅花、末より摘み取ればしかいふ、一説「うれつむはな」と訓むべし
露分衣―露の繁きところをわけ行く衣
著せなくに―「けせなくに」と訓ずべきか、著てはあらぬものをの意
水左閉而照―一本「水」の下に「底」あり、しかる時は

外耳。見筒戀牟。紅乃。末採花乃。色不出友。
外のみに、見つゝを戀ひむ。紅の、末摘花の、色に出でずとも。

寄レ露

夏草乃。露別衣。不著爾。我衣手乃。干時毛名寸。
夏草の、露分衣、著せなくに、我が衣手の、干る時も無き。

寄レ日

六月之。地副割而。照日爾毛。吾袖將乾哉。於君不相四手。
六月の、地さへ裂けて、照る日にも、我が袖干めや。君に逢はずして。

秋雜歌

七夕

天漢。水左閉而照。舟竟。舟人。妹等所見寸哉。

片搓りに－片思にたとふ

憂きことあれや－憂きことあればにや

咲くとはなしに－我に逢はんと思ふ心の開けずに

籠りのみ－忍びてのみ　花に咲き出よ－大びらに

片搓爾。絲叫曾吾搓。吾背見之。花橘乎。將貫跡母冂手。
片搓りに、絲をぞ我が搓る、我が背子が、花橘を、貫かむと思ひて。

鶯之。往來垣根乃。宇能花之。厭事有哉。君之不來座。
鶯の、通ふ垣根の、卯の花の、憂きことあれや、君が來まさぬ。

宇乃花之。開登波無二。有人爾。戀也將渡。獨念爾指天。
卯の花の、咲くとはなしに、ある人に、戀ひや渡らむ。片思にして。

吾社葉。憎毛有目。吾屋前之。花橘乎。見爾波不來烏屋。
我こそは、憎くもあらめ。我が宿の、花橘を、見には來じとや。

霍公鳥。來鳴動。崗部有。藤浪見者。君者不來登夜。
郭公、來鳴きとよもす、岡部なる、藤浪見には、君は來じとや。

隱耳。戀者苦。瞿麥之。花爾開出與。朝旦將見。
籠りのみ、戀ふれば苦し。撫子の、花に咲き出よ。朝なさな見む。

我戀—「我」元暦本「於」に作り、一本「物」とあり、従ふべし

時と鳴けども—時を定めて鳴けども

手弱女我は—手弱女なる我は、女自らいふ

妹與吾—元暦本「吾」の下に「師」あり

繁けく—繁き様は恰も

さね—まことに、眞實

燕子花—枕詞

にづらふ—正訓「にはへる」とあれどいかゞ、今傍訓に従へり

日倉足者。時常雖鳴。我戀。手弱女我者。不定哭。

茅蜩は、時と鳴けども、我が戀ふる、手弱女我は、時別かず鳴く。

寄レ草

人言者。夏野乃草之。繁友。妹與吾。携宿者。

人言は、夏野の草の、繁くとも、妹と我とし、携はり寢ば。

迺者之。戀乃繁久。夏草乃。苅掃友。生布如。

此の頃の、戀の繁けく、夏草の、刈り掃へども、生ひしくが如。

眞田葛延。夏草之繁。如是戀者。信吾命。常有目八方。

眞葛這ふ、夏野の繁く、斯く戀ひば、さね我が命、常ならめやも。

吾耳哉。如是戀爲良武。垣津旗。丹頬合妹者。如何將有。

我のみや、斯く戀すらむ。燕子花、にづらふ妹は、如何にあるらむ。

寄レ花

橘の云々―女の許に通はばやがては人の口端の騒しからんとなるべし

蜾蠃なす―蜾蠃の如く、一説、蜾蠃は春巣を借りて生れ、郭公も鶯の巣を借りて生ひ立てば斯くいふか、又其鳴く聲の似たるよりいふか、何れに似したても定かならず、上三句は序也

橘。花落里爾。通名者。山霍公鳥。將令響鳴。
橘の、花散る里に、通ひなば、山郭公、とよもさむかも。

夏相聞

寄レ鳥

春之在者。酢輕成野之。霍公鳥。保等穗跡妹爾。不相來爾家里。
春されば、蜾蠃なす野の、郭公、ほと〳〵妹に、逢はず來にけり。

五月山。花橘爾。霍公鳥。隱合時爾。逢有公鴨。
五月山、花橘に、郭公、隱ろふ時に、逢へる君かも。

霍公鳥。來鳴五月之。短夜毛。獨宿者。明不得毛。
郭公、來鳴く五月の、短夜も、一人し寢れば、明し兼ねつも。

寄レ蟬

ありこせぬかも—あれかし、本文「與」は「乞」の誤

散りにて—散り去にて、一說「而」は「吉」の誤にて「散りにき」

時ならず云々—時ならず卯の花の玉をぞ貫けると句を轉じて見るべし、ただ結び束ぬるをも玉に貫くといへり

五月を待たば—五月には藥玉をつくればいふ、卯の花は四月の景物

さ渡る—さは發語

しぬゝに—ぴつしよりと

こゆ鳴き渡る—こゝより鳴き渡る

吾妹子爾。相市乃花波。落下過。今咲有如。有與奴香聞。
我妹子に、楝の花は、散り過ぎず、今咲ける如、ありこせぬかも。

春日野之。藤者散去而。何物鴨。御狩人之。折而將挿頭。
春日野の、藤は散りにて、何をかも、御狩の人の、折りてかざさむ。

不時。玉乎會連有。宇能花乃。五月乎待者。可久有。
時ならず、玉をぞ貫ける、卯の花の、五月を待たば、久しかるべみ。

問答

宇能花乃。咲落岳從。霍公鳥。鳴而沙渡。公者聞津八。
卯の花の、咲き散る岡ゆ、郭公、鳴きてさ渡る、君は聞きつや。

聞津八跡。君之問世流。霍公鳥。小竹野爾所沾而。從此鳴綿類。
聞きつやと、君が問はせる、郭公、しぬゝに濡れて、こゆ鳴き渡る。

譬喩歌

贈らむ―我に也
みつれてもあるか―病みつかれてもあるにや
見む人や誰―君こそ其人なれと也
向ひの野邊―打向ふところの野邊
雨間―雨の降る間
故鄕の云々―上に、雨降りつゞきて空しく過す程にと補ひて見るべし
故鄕―藤原か飛鳥の古京を指すなるべし

香細寸。花橘乎。玉貫。將送妹者。三禮而毛有香。
芳しき、花橘を、玉に貫き、贈らむ妹は、みつれてもあるか。

霍公鳥。來鳴響。橘之。花散庭乎。將見人八孰。
郭公、來鳴きとよもす、橘の、花散る庭を、見む人や誰。

吾屋前之。花橘者。落爾家里。悔時爾。相在君鴨。
我が宿の、花橘は、散りにけり。悔しき時に、逢へる君かも。

見渡者。向野邊乃。石竹之。落卷惜毛。雨莫零行年。
見渡せば、向ひの野邊の、撫子の、散らまく惜しも、雨な降りそね。

雨間開而。國見毛將爲乎。故鄕之。花橘者。散家牟可聞。
雨間あけて、國見もせむを、故鄕の、花橘は、散りにけむかも。

野邊見者。瞿麥之花。咲家里。吾待秋者。近就良思母。
野邊見れば、撫子の花、咲きにけり。我待つ秋は、近づくらしも。

「干」の誤、「領」は「きぬ」と訓むべし、さらば「わがほすきぬの」なるべしと眞淵説、(三)古義に引く中山嚴水説「領」は「頷」の誤にて「我をうなづき」我にうなづき知らせての義といふ

本つ人—郭公をさしていふ

郭公をや—「をや」は「よや」に同じく呼びかくる詞

もだもあらむ—たゞ何事もなくてあらん

匂ひこそ—匂へかし、本文「與」は「乞」の誤か

島—高市郡

爲君御跡—「爲」は「御」の下に有りしが亂れしならん

本つ人、郭公をや、珍しく、今や汝が來し、戀ひつゝ居れば。

如是許。雨之零爾。霍公鳥。宇之花山爾。猶香將鳴。

斯くばかり、雨の降らくに、郭公、卯の花山に、猶か鳴くらむ。

詠レ蟬

默然毛將有。時母鳴奈武。日晩乃。物念時爾。鳴管本名。

もだもあらむ、時も鳴かなむ、茅蜩の、物思ふ時に、鳴きつゝもとな。

詠レ榛

思子之。衣將摺爾。爾保比與。島之榛原。秋不立友。

思ふ兒が、衣摺らむに、匂ひこそ。島の榛原、秋立たずとも。

詠レ花

風散。花橘叫。袖受而。爲君御跡。思鶴鴨。

風に散る、花橘を、袖に受けて、君が御爲と、思ひつるかも。

來らむ―行くらん

殖ゑつ―一訓「殖ゑむ」がね―爲に

我を知らせて―誤字あるべし、(一)我に心をつけて、これは竿にかけて干せる衣などをいふにやと契沖いふ、(二)本文「乎」は

大和には、鳴きてか來らむ。郭公、汝が鳴く毎に、亡き人思ほゆ。

宇能花乃。散卷惜。霍公鳥。野出山入。來鳴令動。
卯の花の、散らまく惜しみ、郭公、野に出で山に入り、來鳴きとよもす。

橘之。林乎殖。霍公鳥。常爾冬及。住度金。
橘の、林を植ゑつ。郭公、常に冬まで、住み渡るがね。

雨霽之。雲爾副而。霍公鳥。指春日而。從此鳴度。
雨霽れし、雲にたぐひて、郭公、春日を指して、こゆ鳴き渡る。

物念登。不宿旦開爾。霍公鳥。鳴而左度。爲便無左右二一。
物思ふと、寢ねぬ朝けに、郭公、鳴きてさ渡る、術無きまでに。

吾衣。於君令服與登。霍公鳥。吾乎領。袖爾來居管。
我が衣、君に著せよと、郭公、我を知らせて、袖に來居つゝ。

本人。霍公鳥乎八。布將見。今哉汝來。戀乍居者。

聲の嗄るかに—聲の嗄るるばかりに

覺束なきに—暗くてなるべし

卯の花月夜—卯の花の白く咲き滿ちたるは月の影に以たればいふ、古義には卯の花に月がさしたる實景なるべしといへり

鳴かぬかも—鳴けかし

地二落六見牟—宣長は「六見牟」は「左右手」の誤にて「つちにおつるまで」と訓むべしといひ、古義には「六」は「文」の誤にて「地に散るも見む」也といへり

鳴くか—「鳴くかも」の略

菖蒲草云々—前に、されど特にと補ふ、昔五月五日の節に菖蒲草を以て蘰とせり

郭公、花橘の、枝に居て、鳴きとよもせば、花は散りつゝ。

慨哉。四去霍公鳥。今社者。音之干蟹。來喧響目。

うれたきや、醜郭公、今こそは、聲の嗄るかに、來鳴きとよまめ。

今夜乃。於保束無荷。霍公鳥。喧奈流聲之。音乃遙左。

此の夜らの、覺束なきに、郭公、鳴くなる聲の、音の遙さ。

五月山。宇能花月夜。霍公鳥。雖聞不飽。又鳴鴨。

五月山、卯の花月夜、郭公、聞けども飽かず、又鳴かぬかも。

霍公鳥。來居裳鳴香。吾屋前乃。花橘乃。地二落六見牟。

郭公、來居ても鳴くか。我が宿の、花橘の、地に落ちむ見む。

霍公鳥。厭時無。菖蒲。蘰將爲日。從此鳴度禮。

郭公、厭ふ時無し。菖蒲草、蘰にせむ日、こゆ鳴き渡れ。

山跡庭。啼而香將來。霍公鳥。汝鳴毎。無人所念。

今城の岡―大和國高市郡、郭公今來に掛く

越來―一說「越成」の誤にて「こゆなり」

朝霧の―枕詞、或は本文「霧」は「霞」の誤か

とよめて―とよませて

暮闇―一訓「くらやみ」

鳴渡良哉―「哉」は「武」の誤

木の暗―木の下闇をいふ

朝寢か寢らむ―若しくは朝寢して聞かざりしか、本文、一訓「寢けむ」

藤浪の、散らまく惜しみ、郭公、今城の岡を、鳴きて越ゆなり。

旦霧。八重山越而。霍公鳥。宇能花邊柄。鳴越來。

朝霧の、八重山越えて、郭公、卯の花邊から、鳴きて越え來ぬ。

木高者。曾木不殖。霍公鳥。來鳴令響而。戀令益。

木高くは、嘗て木植ゑじ。郭公、來鳴きとよめて、戀ひまさらしむ。

難相。君爾逢有夜。霍公鳥。他時從者。今社鳴目、

逢ひ難き、君に逢へる夜、郭公、あだし時ゆは、今こそ鳴かめ。

木晩之。暮闇有爾。（一云「有者」）霍公鳥。何處乎家登。鳴渡良哉。

木の暗の、夕闇なるに、郭公、何處を家と、鳴き渡るらむ。

霍公鳥。今朝之旦明爾。鳴都流波。君將聞可。朝宿疑將寢。

郭公、今朝の朝けに、鳴きつるは、君聞きけむか。朝寢か寢らむ。

霍公鳥。花橘之。枝爾居而。鳴響者。花波散乍。

我にもが—我が物にせん由もがな、一說「吾」は「花」の誤

朝霞—枕詞

田草—一說「草」は「葛」の誤、集中くずを田葛と書けり

吾草取有—一說、「吾」は「今」の誤にて「いまくさとれり」と訓む、草取るとは凡て鳥の木の枝にとまり居ること

見まく欲り—月を也、又一訓「見がほれば」

右古歌集中出。

霍公鳥。汝始音者。於吾欲得。五月之珠爾。交而將貫。
郭公、汝が初聲は、我にもが。五月の玉に、交へて貫かむ。

朝霞。棚引野邊。足檜木乃。山霍公鳥。何時來將鳴。
朝霞、棚引く野邊に、足引の、山郭公、何時か來鳴かむ。

旦霞。八重山越而。喚孤鳥。吟八汝來。屋戸母不有九二。
朝霞、八重山越えて、呼子鳥、鳴きや汝が來る。宿もあらなくに。

霍公鳥。鳴音聞哉。宇能花乃。開落岳爾。田草引媙嬬。
郭公、鳴く聲聞くや、卯の花の、咲き散る岡に、葛引く少女。

月夜吉。鳴霍公鳥。欲見。吾草取有。見人毛欲得。
月夜よみ、鳴く郭公、見まく欲り、我が草取れる。見む人もがも。

藤浪之。散巻惜。霍公鳥。今城岳叫。鳴而越奈利。

丈夫丹—一說「丹」は「乃」の誤にて「ますらをの」

出で立ち向ふ—神名備山は我が家を出で立たば直に向はるゝ故にいふ

故郷—飛鳥の故京

答するまで—一訓「あひとよむまで」

夏雜歌

詠レ鳥

丈夫丹。出立向。故郷之。神名備山爾。明來者。柘之左枝爾。暮去者。小松之若末爾。里人之。聞戀麻田。山彦乃。答響萬田。霍公鳥。都麻戀爲良思。左夜中爾鳴。

丈夫に、出で立ち向ふ、故郷の、神名備山に、明け來れば、柘の小枝に、夕されば、小松がうれに、里人の、聞き戀ふるまで、山彦の、答するまで、郭公、妻戀すらし、さ夜中に鳴く。

反歌

客爾爲而。妻戀爲良思。霍公鳥。神名備山爾。左夜深而鳴。

旅にして、妻戀すらし。郭公、神名備山に、さ夜更けて鳴く。

川上之。伊都藻之花之。何時何時。來座吾背子。時自異目八方。

川の上の、いつもの花の、何時も〳〵、來ませ我が背子、時じけめやも。

春雨之。不止零零。吾戀。人之目尙矣。不令相見。

春雨の、止まず降りつゝ、我が戀ふる、人のめすらを、あひ見せざらむ。

吾妹子爾。戀乍居者。春雨之。彼毛知如。不止零乍。

我妹子に、戀ひつゝ居れば、春雨の、彼も知る如、止まず降りつゝ。

相不念。妹哉本名。菅根之。長春日乎。念晩牟。

相思はぬ、妹をやもとな、菅の根の、長き春日を、思ひ暮さむ。

春去者。先鳴鳥乃。鶯之。事先立之。君乎之將待。

春されば、先づ鳴く鳥の、鶯の、言先立ちし、君をし待たむ。

相不念。將有兒故。玉緒。長春日乎。念晩久。

相思はず、あるらむ兒ゆゑ、玉の緒の、長き春日を、思ひ暮さく。

川の上の―四巻に既出

零零―「零乍」の誤といふ說による、文字通りに「ふるふる」とも訓ずべし

あひ見せざらむ―一訓「相見せなくに」

彼―春雨をさす、妹に戀ひて泣く涙を雨も知りたる如く降るといふ意

相思はぬ―略解に「以下三首は問答ともなし、又末の一首は此歌といさゝか變れるのみにて、此歌の或本なるべくおぼゆ」といへり

言先立ちし―言ひ出初めし、一訓「言先立てし」

兒ゆゑ―兒なるに

玉の緒の―枕詞

問答—「トヒコタヘノウタ」と訓ずべきか、略解に「左の歌ども問答にあらざるも交れゝば、此題叶はず、次での亂たるか」といへり
君にはしゑや—しゑやは歎息の聲
寄せぬともよし—よしやたとひ人の言寄せいひさわぐとも厭はずと也

石の上—大和國山邊郡石上の神宮
神さびて—我が身の老いたるをいふ
右一首云々—略解に「此註心得がたし、後人の書入也」

さぬかたは—野の名、近江國か、そこにある梅桃などをいへるなり
實にならずとも—よしや實になりて事の成就せずとも、うはべのみなりとも相思ふよしを見せよと也

引津—筑前國
花咲くまでに—思ひ始めてより時久しきをいふ

問答

春山之。馬醉花之。不惡。公爾波思惠也。所因友好。

春山の、馬醉木の花の、憎からぬ、君にはしゑや、寄せぬともよし。

石上。振乃神杉。神佐備而。吾八更更。戀爾相爾家留。

石の上、布留の神杉、神さびて、我やさら〱、戀に逢ひにける。

右一首。不レ有ニ春歌一而猶以レ和故載ニ於茲次一。

狹野方波。實爾雖不成。花耳。開而所見社。戀之名草爾。

さぬかたは、實にならずとも、花のみも、咲きて見えこそ。戀の慰に。

狹野方波。實爾成西乎。今更。春雨零而。花將咲八方。

さぬかたは、實になりにしを、今更に、春雨降りて、花咲かめやも。

梓弓。引津野邊有。莫告藻之。花咲及二。不會君毳。

梓弓、引津の邊なる、神馬藻の、花咲くまでに、逢はぬ君かも。

まつ—待つ、松

白眞弓—枕詞

丈夫の—自らいふ　伏し居嘆きて—蘰を造りたる勢をいふか、或は伏を夜とし、居るを晝として、夜晝妹を思ひなげくといふ意か　蘰せ—かづらせよ

寄レ松

梅花。咲而落去者。吾妹乎。將來香不來香跡。吾待乃木曾。

梅の花、咲きて散りなば、我妹子を、來むか來じかと、我がまつの木ぞ。

寄レ雲

白檀弓。今春山爾。去雲之。逝哉將別。戀敷物乎。

白眞弓、今春山に、行く雲の、行きや別れむ。戀しきものを。

贈レ蘰

丈夫之。伏居嘆而。造有。四垂柳之。蘰爲吾妹。

丈夫の、伏し居嘆きて、造りたる、枝垂柳の、蘰せ我妹。

悲レ別

朝戸出之。君之儀乎。曲不見而。長春日乎。戀八九良三。

朝戸出の、君が姿を、よく見ずて、長き春日を、戀ひや暮さむ。

春雨の云々―宣長說に、「雨の事は人間のはかり知るべきにあらねば」といへるはいかゞ、古義に、春雨の降る降らずも知らず行く旨の切なる情を妹は知るまじきにと解せる方可ならんか

七日し降らば云々―七日といひ七夜といふ七は數の多きをいふ也、正數にあらず

多零―「多」は「痛」の誤にて「いたく降る」か、一說「多」は「重」にて「しきて降る」

國栖等之―舊訓「くにすらが」從ふべきか、國栖は吉野の奧にあり

しめの野の―本文、一訓「島の野」

方往浪之―「往」は「依」の誤

大海の―下に、浪の如くと補ふ

菅の根の―枕詞

今更に、君はい行かじ。春雨の、心を人の、知らざらなくに。

春雨爾。衣甚。將通哉。七日四零者。七夜不來哉。

春雨に、衣は甚く通らめや。七日し降らば、七夜來じとや。

梅花。令散春雨。多零。客爾也君之。廬入西留良武。

梅の花、散らす春雨、さはに降る。旅にや君が、庵せるらむ。

寄レ草

國栖等之。春菜將採。司馬乃野之。數君麻。思比日。

國栖らが、若菜摘まむと、しめの野の、屢君を、思ふ此の頃。

春草之。繁吾戀。大海。方往浪之。千重積。

春草の、繁き我が戀、大海の、邊に寄る浪の、千重に積りぬ。

不明。公平相見而。菅根乃。長春日乎。孤悲渡鴨。

おほゝしく、君を逢ひ見て、菅の根の、長き春日を、戀ひわたるかも。

さにづらふ―枕詞
春日もくれに―心のはれぬ意といふ
たまきはる―枕詞
我が山―未詳
立つともうとも―立つもすわるも
吾背子爾―「背」は「妹」の誤にて「わぎも子に」なるべし
降る別知らに―降るか降らぬかの見境もなく心そらにて
君者―一説、「君」は「吾」の誤

左丹頬經。妹乎念登。霞立。春日毛晩爾。戀度可母。
さにづらふ、妹を思ふと、霞立つ、春日もくれに、戀ひわたるかも。

靈寸春。吾山之於爾。立霞。雖立雖座。君之隨意。
たまきはる、我が山のへに、立つ霞、立つともうとも、君がまに〱。

見渡者。春日之野邊爾。立霞。見卷之欲。君之容儀香。
見渡せば、春日の野邊に、立つ霞、見まくの欲しき、君が姿か。

戀乍毛。今日者暮都。霞立。明日之春日乎。如何將晩。
戀ひつゝも、今日は暮しつ。霞立つ、明日の春日を、如何に暮さむ。

寄レ雨

吾背子爾。戀而爲便莫。春雨之。零別不知。出而來可聞。
我が背子に、戀ひて術無み、春雨の、降る別知らに、出でて來しかも。

今更。君者伊不往。春雨之。情乎人之。不知有名國。

平城之人―「人」の上に「在」を脱せしか、或は「之」は「在」の誤か

戀ふらく―見せんと思ひし人の來ぬを戀ふるにや

み草―みは接頭語、單に草の意、一說、水草

おほゝしく―ほのかに

本の繁けば―木の本の繁きを戀の繁きに譬へたるか、一本の「片思にして」最も取るべきが如し

梅の花、我は散らさじ。青丹よし、奈良なる人の、來つゝ見るがね。

如是有者。何如殖兼。山振乃。止時喪哭。戀良苦念者。

斯くしあれば、如何で植ゑけむ。山吹の、止む時も無く、戀ふらく思へば。

寄レ霜

春去者。水草之上爾。置霜之。消乍毛我者。戀度鴨。

春されば、み草の上に、置く霜の、消つゝも我は、戀ひわたるかも。

寄レ霞

春霞。山棚引。鬱。妹乎相見。後戀義。

春霞、山に棚引き、おほゝしく、妹を逢ひ見て、後戀ひむかも。

春霞。立爾之日從。至今日。吾戀不止。本之繁家波。

春霞、立ちにし日より、今日までに、我が戀止まず。本の繁けば。

一云。片念爾指天。

を雨に腐らしめての意なるべし

片待ちがてり—梅花をも見、君が使をも待たんと相兼ねての意、本文「花」は衍文か

下よし戀ひば—「よ」は「より」「し」は助辭、忍びて戀ひつゝあらば、本文「夜」は「從」の誤か

斯くなるまでに—斯く實になるまでに

花爾—一說、「花」は「神」の誤

女郎花—枕詞

咲野—大和國添下郡

言はれし我が背—言はれたり、我背よ之を聞き給へ

梅の花、咲き散る園に、我行かむ。君が使を、片待ちがてり。

藤浪。咲春野爾。蔓葛。下夜之戀者。久雲在。

藤浪の、咲ける春野に、這ふ葛の、下よし戀ひば、久しくもあらむ。

春野爾。霞棚引。咲花之。如是成二手爾。不逢君可母。

春の野に、霞棚引き、咲く花の、斯くなるまでに、逢はぬ君かも。

吾瀨子爾。吾戀良久者。奥山之。馬醉花之。今盛有。

我が背子に、我が戀ふらくは、奥山の、馬醉木の花の、今盛りなり。

梅花。四垂柳爾。折雜。花爾供養者。君爾相可毛。

梅の花、枝垂柳に、折交へ、花にたむけば、君に逢はむかも。

姫部思。咲野爾生。白管自。不知事以。所言之吾背。

女郎花、咲野に生ふる、白躑躅、知らぬこともて、言はれし我が背。

梅花。吾者不令落。青丹吉。平城之人。來管見之根。

爲垂柳―一訓「しだる柳」
とをゝにも―たわゝにも、たわむばかりにも
妹が心に云々―妹が事の常に我が心の上にあるをいふ

春されば云々―春の野に百舌が草をくゞりて見えぬが如く君が家はこゝより見えねども、我は心あてに見やりつゝあらんの意、「ぐき」はくゞり

顏鳥―美しき鳥の稱なりとも雉子の雄とも呼子鳥ともいふ
しば鳴く―しば〳〵鳴く

くたし―腐ちすること、略解に「卯花垣を忍越るとて、其花を散しなどせしが」といへるはいかゞ、古義にいへる如く卯の花

春去。爲垂柳。十緒。妹心。乘在鴨。
春されば、枝垂柳の、とをゝにも、妹が心に、乘りにけるかも。

古柿本朝臣人麻呂歌集出。

寄ㇾ鳥

春之在者。伯勞鳥之草具吉。雖不所見。吾者見將遣。君之當婆。
春されば、百舌の草ぐき、見えねども 我は見遣らむ、君があたりは。

容鳥之。間無數鳴。春野之。草根之繁。戀毛爲鴨。
顏鳥の、間無くしば鳴く、春の野の、草根の繁き、戀もするかも。

寄ㇾ花

春去者。宇乃花具多思。吾越之。妹我垣間者。荒來鴨。
春されば、卯の花くたし、我が越えし、妹が垣間は、荒れにけるかも。

梅花。咲散苑爾。吾將去。君之使乎。片待香花光。

春日野。犬鸎。鳴別。眷益間。思御吾。
春日野に、去ぬる鶯、鳴き別れ、還ります間も、思ほせ我を。

冬隱。春開花。手折以。千遍限。戀渡鴨。
冬籠、春咲く花を、手折り持ち、千度の限り、戀ひ渡るかも。

春山。霧惑在。鸎。我益。物念哉。
春山の、霧に惑へる、鶯も、我にまさりて、物思はめや。

出見。向崗。本繁。開在花。不成不止。
出でて見る、向ひの岡に、本繁く、咲きたる桃の、ならずは止まじ。

霞發。春永日。戀暮。夜深去。妹相鴨。
霞立つ、春の永き日、戀ひ暮し、夜の更け行きて、妹に逢へるかも。

春去。先三枝。幸命在。後相。莫戀吾妹。
春されば、先づ三枝の、幸くあらば、後にも逢はむな、戀ひそ我妹。

犬鸎—「犬」は「哭」の誤にて「鳴く鶯の」か、下文の訓は眞淵の「犬」は「去」の誤といふ說によれる也

冬籠—枕詞

霧に惑へる—朗詠「咽霧山鶯啼猶少」

開在花—宣長の「花」は「桃」の誤となす說に取る、又、濱臣は「在」は「毛」かといへり

住吉之。里得之鹿齒。春花乃。益希見。君相有香聞。
住吉の、里行きしかば、春花の、彌珍らしき、君に逢へるかも。

旋頭歌

春日在。三笠乃山爾。月母出奴可母。佐紀山爾。開有櫻之。花乃可見。
春日なる、三笠の山に、月も出でぬかも。佐紀山に、咲ける櫻の、花の見ゆべく。

白雪之。常敷冬者。過去家良霜。春霞。田菜引野邊之。鶯鳴烏。
白雪の、常しく冬は、過ぎにけらしも。春霞、棚引く野邊の、鶯鳴きぬ。

譬喩歌

吾屋前之。毛桃之下爾。月夜指。下心吉。菟楯頃者。
我宿の、毛桃の下に、月夜さし、しづ心よし。うたて此の頃。

春相聞

里得之鹿齒―「得」は「行」の誤か

月も出でぬかも―月も出でよかし
佐紀山―添下郡

常しく―本文、一說「常」は「落」の誤にて「降りしく」

下心吉―宣長は「下心苦」の誤にて「したなやましも」又「下にぞなげく」と訓ずべしといへり
我宿……さし―序
毛桃―桃の一種にて毛の生ひたるものか

相見む―思ふ友と共に見ん
意將述跡―「述」は「遣」の誤か
暮れずもあらぬか―暮れずもあれかし
百敷の―枕詞
暇あれや―暇あればにや
新なれども―一訓「新まれども」
物皆は云々―尚書盤庚上「遲任有レ言、人惟求レ舊、器非レ求レ舊惟新」
舊りたる云々―此四五の句、古義には「舊りぬるのみぞよろしかるべき」

春霞。立春日野乎。往還。吾者相見。彌年之黄土。
春霞、立つ春日野を、往き還り、我は相見む。彌年のはに。

春野爾。意將述跡。念共。來之今日者。不晩手荒粳。
春の野に、心遣らむと、思ふどち、來りし今日は、暮れずもあらぬか。

百礒城之。大宮人者。暇有也。梅乎挿頭而。此間集有。
百敷の、大宮人は、暇あれや、梅をかざして、こゝに集へる。

歎レ舊

寒過。暖來者。年月者。雖新有。人者舊去。
冬過ぎて、春し來ぬれば、年月は、新なれども、人は古りゆく。

物皆者。新吉。唯人者。舊之。應宜。
物皆は、新しきよし、唯人は、舊りたるのみし、宜しかるべし。

懽レ逢

のまち久しきよし也といひ、古義には「くれば」と濁りて、朝より霞の立籠ひて春日の光の暗き時節なればまして夜になりなばいよ〳〵暗かるべしの義かといへり、私かに按ずるに、これら諸説や〻考へ過ぎたらずや、朝より霞立ちてのどかなる春日の暗れ行かばやがて朧の月の木の間に移らふべきをさても其月を待つ間の春の日の長さよとならんか

春の雨に云々―春の雨の習として小止みなく降ると、うつかり雨宿りして待つ間に日を暮したりと也

聞くものにもが―聞くべき暇もがな

うはぎ―よめな

煮らしも―煮るらしも

遊べる今日は―一訓「遊ぶ此日の」

詠レ雨

春之雨爾。有來物乎。立隱。妹之家道爾。此日晩都。

春の雨に、ありけるものを、立ち隠れ、妹が家路に、此の日暮しつ。

詠レ河

今往而。聞物爾毛我。明日香川。春雨零而。瀧津湍音乎。

今行きて、聞くものにもが。明日香川、春雨降りて、たぎつ瀬の音を。

詠レ煙

春日野爾。煙立所見。媙嬬等四。春野之菟芽子。採而煮良思文。

春日野に、煙立つ見ゆ。少女等し、春野のうはぎ、摘みて煮らしも。

野遊

春日野之。淺茅之上爾。念共。遊今日。忘目八方。

春日野の、淺茅が上に、思ふどち、遊べる今日は、忘らえめやも。

見渡者。春日之野邊爾。霞立。開艶者。櫻花鴨。
見渡せば、春日の野邊に、霞立ち、咲き匂へるは、櫻花かも。

何時鴨。此夜之將明。鶯之。木傳落。梅花將見。
何時しかも、此の夜の明けむ、鶯の、木傳ひ散らす、梅の花見む。

詠レ月

春霞。田菜引今之。暮三伏一向夜。不穢照良武。高松之野爾。
春霞、棚引く今日の、夕月夜、清く照るらむ。高圓の野に。

春去者。紀之許能暮之。夕月夜。鬱束無裳。山陰爾指天。
春されば、木の木のくれの、夕月夜、覺束なしも。山陰にして。

一云。春去者木陰多暮月夜。

朝霞。春日之晩者。從木間。移歷月乎。何時可將待。
朝霞、春日のくれは、木の間より、移ろふ月を、何時とか待たむ。

明けむ―早く明けよかしと待つ意也

暮三伏一向夜―「ゆふづくよ」と訓じたるにつき諸說あれど略す

紀之許能暮之―一本取るべし

朝霞云々―一二の句宣長は春日の朝に霞みてくらきをいふ、其朝霞のくらき時分はといふ意也朝霞のくらき時分より夜まで

流らふる—流るゝ、流るは降るに同じ、一訓「散りてながらふ」
佐宿木花者—「佐宿木」は「作樂」の誤にて「さくらのはなは」か
阿保山—山城國にも、伊賀國にもあり、又「佐保山」の誤かともいふ
馬醉之花會—「會」は「者」の誤か
置末勿勤—(一)「置」は「觸」「末」は「手」の誤にて「手なふれそゆめ」(二)「末」は「土」の誤にて「つちにおくなゆめ」
含みてもかも—含みつぼみてもあれかし

春鴙鳴。高圓邊丹。櫻花。散流歷。見人毛我裳。
雉子鳴く、高圓の邊に、櫻花、散り流らふる。見む人もがも。

阿保山之。佐宿木花者。今日毛鴨。散亂。見人無二。
阿保山の、さねきの花は、今日もかも、散り亂るらむ。見る人無しに。

川津鳴。吉野河之。瀧上乃。馬醉之花會。置末勿勤。
蛙鳴く、吉野の川の、瀧の上の、馬醉木の花ぞ、おくにまもなき。

春雨爾。相爭不勝而。吾屋前之。櫻花者。開始爾家里。
春雨に、爭ひ兼ねて、我が宿の、櫻の花は、咲き初めにけり。

春雨者。甚勿零。櫻花。未見爾。散卷惜裳。
春雨は、甚くな降りそ。櫻花、未だ見なくに、散らまく惜しも。

春去者。散卷惜。櫻花。片時者不咲。含而毛欲得。
春されば、散らまく惜しき、櫻花、暫は咲かず、含みてもかも。

長きけに―月日久しく、略解に「按に此歌女のうけひきていまだ逢はぬをそへたる譬喩歌なるが、まぎれて入りたるなるべし」

能登川―添上郡にて高圓三笠の二山の間を西へ流るゝとぞ

三笠の山は云々―三笠の山の花は咲きにけるかも、花は櫻なるべし

久木―(一)「久」は「冬」の誤にて「ふゆぎ」冬籠りせし木の意、(二)「之久木」三字は「左久樂」の誤にて「こぞさけるさくらいまさく」か、(三)「久木」は「足氷」の誤にて「あしび」(馬醉木)か

山のま―一訓「山かひ」

散りぬらむかも―本文「散」の上に「將」の字脱としての訓也、一說「散りにけるかも」

花咲而。實者不成登裳。長氣。所念鴨。山振之花。

花咲きて、實はならねども、長きけに、思ほゆるかも。山吹の花。

能登河之。水底幷爾。光及爾。三笠之山者。咲來鴨。

能登川の、水底さへに、照るまでに、三笠の山は、咲きにけるかも。

見雪者。未冬有。然爲蟹。春霞立。梅者散乍。

雪見れば、未だ冬なり。しかすがに、春霞立ち、梅は散りつゝ。

去年咲之。久木今開。徒。土哉將墮。見人名四二。

去年咲きし、ひさき今咲く。徒に、地にや落ちむ。見る人なしに。

足日木之。山間照。櫻花。是春雨爾。散去鴨。

足引の、山のま照す、櫻花、此の春雨に、散りぬらむかも。

打靡。春避來之。山際。最木末之。咲往見者。

打靡く、春さり來らし。山のまの、遠き木ぬれの、咲きぬる見れば。

移ろへば―散れば
時かたまけぬ―時を待ち得たり

我が刺せる―我がかざしとせる、略解に「集中刺柳ともよみて柳は枝を地に刺てよく生たつものなればかくいへり」といへるはいかゞ
妹が―妹が宿の
年のはに―年毎に
君―「吾」の誤なるべし
春なかりけり―梅は年毎に春に逢へど、己は時を得ぬを歎くなり
うつたへに―やたらに
馬並而―「馬」は「忍」の誤にて「おしなべて」か
梅花―「梅」は「櫻」の誤なるべし

鶯之。木傳梅乃。移者。櫻花之。時片設奴。
鶯の、木傳ふ梅の、移ろへば、櫻の花の、時かたまけぬ。

櫻花。時者雖不過。見人之。戀盛常。今之將落。
櫻花、時は過ぎねど、見る人の、戀の盛りと、今し散るらむ。

我刺。柳絲乎。吹亂。風爾加妹之。梅乃落覽。
我が刺せる、柳の絲を、吹き亂る、風にか妹が、梅の散るらむ。

毎年。梅者開友。空蟬之。世人君羊蹄。春無有來。
年のはに、梅は咲けども、空蟬の、世の人君し、春無かりけり。

打細爾。鳥者雖不喫。繩延。守卷欲寸。梅花鴨。
うつたへに、鳥は食まねど、標はへて、守らまく欲しき、梅の花かも。

馬並而。高山部乎。白妙丹。令艷色有者。梅花鴨。
馬並めて、高き山邊を、白妙に、匂はせたるは、梅の花かも。

水飯合―「飯」は「激」の誤にて「みなぎらふ」か

川之副者―「副」は「楊」の誤にて「川の柳は」かともいふ、略解には「紀に、いなむしろ川そひ柳と有る意也」といへり

絲乃細紗―一説「絲のくはしさ」と訓ず、麗しさの義也

かづらける―蘰にせる

眉し―しは強辭

山のまに、雪は降りつゝ、しかすがに、此の川柳は、萌えにけるかも。

山際之。雪不消有乎。水飯合。川之副者。目生來鴨。

山のまの、雪は消ざるを、流れ合ふ、川の沿へれば、萌えにけるかも。

朝旦。吾見柳。鶯之。來居而應鳴。森爾早奈禮。

朝なさな、我が見る柳、鶯の、來居て鳴くべく、森に早やなれ。

青柳之。絲乃細紗。春風爾。不亂伊間爾。令視子裳欲得。

青柳の、絲の細さを、春風に、亂れぬい間に、見せむ兒もがも。

百礒城。大宮人之。蘰有。垂柳者。雖見不飽鴨。

百敷の、大宮人の、かづらける、枝垂柳は、見れど飽かぬかも。

梅花。取持見者。吾屋前之。柳乃眉師。所念可聞。

梅の花、取り持ち見れば、我が宿の、柳の眉し、思ほゆるかも。

詠レ花

鶯の—下に、囀ると補ふ

見人—一說「見」は「良」の誤か、又「見八人」にて「宮人」か

染め懸けたりと—染めて懸け干したりと

昨日社。年者極之賀。春霞。春日山爾。速立爾來。
昨日こそ、年は果てしか。春霞、春日の山に、早や立ちにけり。

寒過。暖來良思。朝烏指。滓鹿能山爾。霞輕引。
冬過ぎて、春來たるらし。朝日射す、春日の山に、霞棚引く。

鸎之。春成良思。春日山。霞棚引。夜目見侶。
鶯の、春になるらし。春日山、霞棚引く、夜目に見れども。

詠レ柳

霜干。冬柳者。見人之。蘰可爲。目生來鴨。
霜枯れし、冬の柳は、見る人の、蘰にすべく、萠えにけるかも。

淺綠。染懸有跡。見左右二。春楊者。目生來鴨。
淺綠、染め懸けたりと、見るまでに、春の柳は、萠えにけるかも。

山際爾。雪者零管。然爲我二。此河楊波。毛延爾家留可聞。

ゑぐ―草の名、略解に「あし引の山澤回具ともよみて、東國にては、與共といひ、土左人はゑぐといへり、葉は蘭に似て小さく、根は白く小き芋有て味小しゑぐし、俗黒くわゐといふものの類也」といへり

移ろふ―木傳ふ

家居爲流君―一説「流」は衍にて「家居らす君」

山片附きて―山にかたよりて

右一首。筑波山作。

爲君。山田之澤。惠具採跡。雪消之水爾。裳裾所沾。

君が爲め、山田の澤に、ゑぐ摘むと、雪消の水に、裳の裾濡れぬ。

梅枝爾。鳴而移徙。鶯之。翼白妙爾。沫雪曾落。

梅が枝に、鳴きて移ろふ、鶯の、はね白妙に、泡雪ぞ降る。

山高三。零來雪乎。梅花。落鴨來跡。念鶴鴨。

山高み、降り來る雪を、梅の花、散りかも來ると、思ひつるかも。

一云。梅花開香裳落跡。

除雪而。梅莫戀。足曳之。山片就而。家居爲流君。

雪をおきて、梅をな戀ひそ。足引の、山片附きて、家居せる君。

右二首。問答。

詠レ霞

消に——一訓「消え」

しきに——一訓「しきり」

風のむた—風につれて

梅花。零覆雪乎。裹持。君爾令見跡。取者消管。
梅の花、降り覆ふ雪を、包み持て、君に見せむと、取れば消につゝ。

梅花。咲落過奴。然爲蟹。白雪庭爾。零重管。
梅の花、咲き散り過ぎぬ。しかすがに、白雪庭に、降りしきにつゝ。

今更。雪零目八方。蜻火之。燎留春部常。成西物乎。
今更に、雪降らめやも。陽炎の、燃ゆる春邊と、なりにしものを。

風交。雪者零乍。然爲蟹。霞田菜引。春去爾來。
風交り、雪は降りつゝ、しかすがに、霞棚引き、春さりにけり。

山際爾。鸎喧而。打靡。春跡雖念。雪落布沼。
山のまに、鶯鳴きて、打靡く、春と思へど、雪降りしきぬ。

峰上爾。零置雪師。風之共。此間散良思。春者雖有。
峰の上に、降り置ける雪し、風のむた、こゝに散るらし。春にはあれども。

答へぬに云々―一說、この歌は上の歌の作者おし返してよめり、かゝること集中に多しといへり
家居之―「之」は「者」の誤、一說、文字通りに「家居らし」
小竹之米丹―「米」は「末」の誤、一說「しぬのめに」「め」は群
打靡く―枕詞
しぬゝに―しとゝに、しつぽりと
三船の山―吉野の內
しかすがに―しかしながら、さすがに、末句を此の句の上に置きて見るべし
天雲きらふ―空の霞むをいふ

春日有。羽買之山從。猿帆之內敝。鳴往成者。孰喚子鳥。
春日なる、はがひの山ゆ、佐保の內へ、鳴き行くなるは、誰呼子鳥。

不答爾。勿喚動曾。喚子鳥。佐保乃山邊乎。上下二。
答へぬに、な呼び止よめそ、呼子鳥、佐保の山邊を、上り下りに。

梓弓。春山近。家居之。續而聞良牟。鶯之音。
梓弓、春山近く、家居れば、繼ぎて聞くらむ、鶯の聲。

打靡。春去來者。小竹之米丹。尾羽打觸而。鶯鳴毛。
打靡く、春さり來れば、篠のうれに、尾羽打振りて、鶯鳴くも。

朝霧爾。之怒怒爾所沾而。喚子鳥。三船山從。喧渡所見。
朝霧に、しぬゝに濡れて、呼子鳥、三船の山ゆ、鳴き渡る見ゆ。

打靡。春去來者。然爲蟹。天雲霧相。雪者零管。
打靡く、春さり來れば、しかすがに、天雲きらふ、雪は降りつゝ。

流るゝなへに―流るゝにつれて
鳴くも―鳴くかも
夜の更けぬとに―夜の更けぬ内に
朝井手に―朝の井手、井手は井堰、一説、本文「井」は「戸」の誤にて「あさとでに」
君に戀ふれや―君に戀ふればにや
時終へず鳴く―鳴きやまずして絶えず鳴くをいふ
横野―河内國
君を懸けつゝ―我が如く君を心に懸けつゝ、一説、言にかけて卽ち噂しての意
鳴きつゝもとな―鳴きて人の戀情を催すが詮なしとの意

春霞。流共爾。青柳之。枝喙持而。鶯鳴毛。
春霞、流るゝなへに、青柳の、枝くひ持ちて、鶯鳴くも。

吾瀬子乎。莫越山能。喚子鳥。君喚變瀬。夜之不深刀爾。
我が背子を、な巨勢の山の、呼子鳥、君呼び返せ、夜の更けぬとに。

朝井代爾。來鳴杲鳥。汝谷文。君丹戀八。時不終鳴。
朝井手に、來鳴く顔鳥、汝だにも、君に戀ふれや、時終へず鳴く。

冬隱。春去來之。足比木乃。山二文野二文。鶯鳴裳。
冬籠り、春さり來らし。足引の、山にも野にも、鶯鳴くも。

紫之。根延横野之。春野庭。君乎懸管。鶯名雲。
紫の、根這ふ横野の、春野には、君を懸けつゝ、鶯鳴くも。

春之在者。妻乎求等。鶯之。木末乎傳。鳴乍本名。
春されば、妻を求むと、鶯の、木ぬれを傳ひ、鳴きつゝもとな。

玉蜻。夕去來者。佐豆人之。弓月我高荷。霞霏霺。
陽炎の、夕さり來れば、獵人の、ゆづきが嶽に、霞棚引く。

今朝去而。明日者來牟等。云子鹿丹。旦妻山丹。霞霏霺。
今朝行きて、明日は來なむと、言ふこかに、朝妻山に、霞棚引く。

子等名丹。關之宜。朝妻之。片山木之爾。霞多奈引。
兒らが名に、かけの宜しき、朝妻の、片山岸に、霞棚引く。

右柿本朝臣人麻呂歌集出。

詠レ鳥

打霏。春立奴良志。吾門之。柳乃宇禮爾。鶯鳴都。
打靡く、春立ちぬらし。我が門の、柳のうれに、鶯鳴きつ。

梅花。開有崗邊爾。家居者。乏毛不有。鶯之音。
梅の花、咲ける岡邊に、家居れば、乏しくあらず、鶯の聲。

陽炎の—枕詞
獵人の—枕詞
ゆづきが嶽—大和國城上郡
云子鹿丹—誤字あらん、未詳、古義には「明日者來牟等云愛也子」（アスハコムトフハシキヤシ）かといへり
朝妻山—大和國葛上郡

かけの宜しき—其の名に懸け負はするも宜しきといふ意

柳のうれに—柳の梢に

家居れば—家居し居れば
乏しく—少く

萬葉集　卷第十

春雜歌

久方之。天芳山。此夕。霞霏霺。春立下。
久方の、天の香具山、此の夕、霞棚引く、春立つらしも。

卷向之。檜原丹立流。春霞。鬱之思者。名積米八方。
纏向の、檜原に立てる、春霞、おほにし思はば、なづみ來めやも。

古。人之殖兼。杉枝。霞霏霺。春者來良之。
古の、人の植ゑけむ、杉が枝に、霞棚引く。春は來ぬらし。

子等我手乎。卷向山丹。春去者。木葉凌而。霞霏霺。
兒らが手を、纏向山に、春されば、木の葉凌ぎて、霞棚引く。

おほにし思はば—おほよそに思はば、上三句は此語の序

兒らが手を—枕詞
木の葉凌ぎて—木の葉のあはひまでも

鋭利なる刀劍、たがみは柄、本文「預」は「頭」の誤ならん、押ねりは捉りひねり
我妹子—菟原處女
倭文手纒—枕詞
生けりとも云々—反歌を合せ見るに、此處女茅渟男に心ありしかど斯く爭ふ故に逢ひ難きをいふなるべし「あれや」一訓「あらめや」
しゝ釧—枕詞
したばへ置きて—「した」は忍び隱してものするをいひ、「はへ」とは妻問するをいふ、處女の方よりひそかに思を懸け置きての意ならん
妹が去ぬれば—自害せしをいふ
追ひ行きければ—處女のあとを追ひ、即ち死せるをいふ
足摩し—この詞は「跐」は「蹉」の誤ならんとの說に依れる也、古義の「つちに伏し」と訓じたる方可ならんか
もころ男—我が如き男、即ち競爭者たる茅渟男をさす
かき佩きの—かきは接頭語
ところづら—枕詞
依倍—一說「依仁」の誤にて「よりに」

爭ふ見れば、生けりとも、逢ふべくあれや、しゝ釧、黄泉に待たむと、隱沼の、したばへ置きて、打嘆き、妹が去ぬれば、茅渟男、其の夜夢に見、取り續き、追ひ行きければ、後れたる、菟原男も、い仰ぎて、叫びおらび、足摩し、牙がみたけびて、もころ男に、負けてはあらじと、かき佩きの、小太刀取佩き、ところづら、とめ行きければ、親族ども、い寄り集ひて、永き世に、しるしに爲むと、遠き世に、語り繼がむと、處女塚、中に造り置き、男塚、此方彼方に、造り置ける、故由聞きて、知らねども、新喪の如も、音泣きつるかも。

反歌

葦屋之。宇奈比處女之。奥槨乎。往來跡見者。哭耳之所泣。
葦の屋の、菟原處女が、奥津城を、往き來と見れば、音のみし泣かゆ。

墓上之。木枝靡有。如聞。陳努壯士爾之。依倍家良信母。
塚の上の、木の枝靡けり。聞くが如、茅渟男にし、寄るべけらしも。

右五首。高橋連蟲麻呂之歌集中出。

乃。手預押彌利。白檀弓。靫取負而。入水。火爾毛將入跡。立向。競時爾。吾妹子之。母爾語久。倭文手纏。賤吾之故。丈夫之。荒爭見者。雖生。應合有哉。宍串呂。黄泉爾將待跡。隱沼乃。下延置而。打嘆。妹之去者。血沼壯士。其夜夢見。取次寸。追去祁禮婆。後有。菟原壯士。伊仰天。叫於良妣。蹉他。牙喫建怒而。如己男爾。負而者不有跡。懸佩之。小劍取佩。冬敍預都良。尋去祁禮婆。親族共。射歸集。永代爾。標將爲跡。遐代爾。語將繼常。處女墓。中爾造置。壯士墓。此方彼方二。造置有。故緣聞而。雖不知。新裳之如毛。哭泣鶴鴨。

葦の屋の、菟原處女が、八歳兒の、片生の時ゆ、をばなりに、髪たぐまでに、並び居る、家にも見えず、うつゆふの、籠りて居れば、見てしがと、いぶせむ時の、垣穗なす、人のとふ時、茅渟男、菟原男の、伏屋燒き、進し競ひて、相婚ひ、しける時に、燒太刀の、たがみ押ねり、白眞弓、靫取負ひて、水に入り、火にも入らむと、立向ひ、競へる時に、我妹子し、母に語らく、倭文手纏、賤しき我が故、丈夫の、

八歳兒―幼き兒
片生―まだなりとゝのはぬこと、一訓「片生ひ」
をばなり―をは發語、振分髪
髪たぐ―髪を上ぐ
並び居る云々―軒を並べ居る人々も見えぬをいふ
うつゆふの―枕詞
垣穗なす―中を距つるに譬ふ
人のとふ時―とふは妻問すること
伏屋燒き―枕詞
進し競ひて―進み競ひて
燒太刀の云々―燒太刀は

も、搔きは梳らず、履をだに、はかず行けども、錦綾の、中に裹める、齋兒も、妹にしかめや。望月の、たれる面わに、花の如、笑みて立てれば、夏蟲の、火に入るが如。水門入りに、船漕ぐ如く、よりかぐれ、人のいふ時、いくばくも、生けらぬものを、何すとか、身をたな知りて、浪の音の、騒ぐ湊の、奥津城に、妹がこやせる、遠き代に、有りける事を、昨日しも、見けむが如も、思ほゆるかも。

反歌

勝牡鹿之。眞間之井見者。立平之。水挹家牟。手兒名之所念。

葛飾の、眞間の井見れば、たちならし、水汲ましけむ、手兒名し思ほゆ。

見二菟原處女墓一歌一首并短歌

葦屋之。菟名負處女之。八年兒之。片生乃時從。小放爾。髮多久麻庭爾。並居。家爾毛不所見。虛木綿乃。窂而座在者。見而師香跡。悒憤時之。垣廬成。人之誂時。智奴壯士。宇奈比壯士乃。廬八燎。須酒師競。相結婚。爲家類時者。燒太刀

齋兒—傅き守る良家の女子
望月の—枕詞
たれる面わに—「たれる」はふくやかなる
よりかぐれ—懸想して、一説本文の「具禮」は「賀比」の誤にて、「行きかゞひ」かゞひは妻問ひするをいふ
人のいふ時—一説本文「言」は「誂」の誤にて「人のとふ時」
生けらぬものを—一訓「生けらじものを」
何すとか身をたな知りて—身を何と心得て
こやせる—臥せる、死せる

還らふ見れば—葬送の人の歸るを見れば

青帶—一說、文字通りに「青衿」(アヲエリ)

ひたさを—さは助辭、直麻(ヒタヲ)即ち麻そのまま

蘆檜木笶。荒山中爾。送置而。還良布見者。情苦喪。

足引の、荒山中に、送り置きて、還らふ見れば、心苦しも。

右七首。田邊福麻呂之歌集出。

詠二勝鹿眞間娘子一歌一首幷短歌

鷄鳴。吾妻乃國爾。古昔爾。有家留事登。至今。不絶言來。勝牡鹿乃。眞間乃手兒奈我。麻衣爾。青衿著。直佐麻乎。裳者織服而。髮谷母。掻者不梳。履乎谷。不著雖行。錦綾之。中丹裹有。齋兒毛。妹爾將及哉。望月之。滿有面輪二。如花。咲而立有者。夏蟲乃。入火之如。水門入爾。船己具如久。歸香具禮。人乃言時。幾時毛。不生物乎。何爲跡歟。身乎田名知而。浪音乃。騷湊之。奧津城爾。妹之臥勢流。遠代爾。有家類事乎。昨日霜。將見我其登毛。所念可聞。

鷄が鳴く、吾妻の國に、古に、ありける事と、今までに、絶えず言ひ來る、葛飾の、眞間の手兒奈が、麻衣に、青帶著け、ひたさをを、裳には織り著て、髮だに

なしのまに〳〵―生みしまゝに
はし向ふ―枕詞、
神のむた云々―神と共に、生も死も神のなすわざなれば斯くいへり
家無みや―家はなしとてや
はふ蔦の―枕詞
天雲の―雲の如く
惑はひ―惑ひ
いゆしゝの―枕詞
葦垣の―枕詞
春鳥の―春鳥の如く
陽炎の―枕詞
嘆く別れを―「を」は「よ」
一説本文「別焉」は「我爲」の誤れて、「嘆きぞ我がする」

葦原乃。水穂之國爾。家無哉。又還不來。遠津國。黄泉乃界丹。蔓都多乃。各各向向。天雲乃。別石往者。闇夜成。思迷匍匐。所射十六乃。意矣痛。葦垣之。思亂而。春鳥能。啼耳鳴乍。味澤相。宵晝不云。蜻蜓火之。心所燎管。悲悽別焉。

父母が、なしのまに〳〵、はし向ふ、弟の命は、朝露の、消易き命、神のむた、爭ひかねて、葦原の、水穂の國に、家無みや、復還り來ぬ、遠つ國、黄泉の界に、はふ蔦の、己がむき〳〵、天雲の、別れし行けば、闇夜なす、思ひ惑はひ、いゆしゝの、心を痛み、葦垣の、思ひ亂れて、春鳥の、音のみ泣きつゝ、あぢさはふ、晝といはず、陽炎の、心燃えつゝ、嘆く別れを。

反歌

別而裳。復毛可遭。所念者。心亂。吾戀目八方。

一云。意盡而。

別れても、復も逢ふべく、思ほえば、心亂れて、我戀ひめやも。

奥津城—墓

塚を—一訓「墓を」

そきへ—遠くはなれたる處、はて

わび人—宣長說に「里人」(サトビト)

處女ら—「ら」は助辭

小竹田—一訓「しぬだ」和泉國信太なるべしといふ

語り繼ぐ云々—今語り繼ぐにつけてすら戀しきに直接逢ひ見し古の男はいかに戀しかりけんの意

古の、益荒男の、相競ひ、妻問ひしけむ、葦屋の、菟原處女の、奥津城を、我が立ち見れば、永き世の、語りにしつゝ、後人の、偲びにせむと、玉桙の、道の邊近く、岩構へ、作れる塚を、天雲の、そきへの限、此の道を、行く人毎に、行き寄りて、い立ち嘆かひ、わび人は、音にも泣きつゝ、語りつぎ、偲びつぎ來し、處女らが、奥津城所、我さへに、見れば悲しも。古思へば。

反歌

古乃。小竹田丁子乃。妻問石。菟會處女乃。奥城叙此。

古の、小竹男の、妻問ひし、菟原處女の、奥津城ぞこれ。

語繼。可良仁文幾許。戀布矣。直目爾見兼。古丁子。

語り繼ぐ、からにも幾許、戀しきを、たゞめに見けむ、古男。

哀二弟死去一作時一首幷短歌

父母賀。成乃任爾。箸向。弟乃命者。朝露乃。銷易杵壽。神之共。荒競不得而。

小垣つ―小は發語にて垣の内をいふ
妹なね―女を親みていふ語
一重結ふ帶を三重結ひ―痩せ衰へし形容ならん
今だにも―今にも、追附け
行きけむ君―死人をさす
畏きや―神といはん序
神の御坂―山の坂即ち足柄の坂
和魂の―本文「靈」は「細布」の誤にて「にぎたへの」なるべし
寒らに―寒げに
こやせる―臥せる
葦屋處女―古この處女を得んとて茅渟男菟原男の二人相爭ひし時身を投げし事ありて、此の下にも巻十九にも同じさまの歌あり、茅渟は和泉國、菟原は攝津國

亂而。郡問跡。國矣毛不告。家問跡。家矣毛不云。益荒夫乃。去能進爾。此間偃有。

小垣つの、麻を引き干し、妹なねが、作り著せけむ、白妙の、紐をも解かず、一重結ふ、帶を三重結ひ、苦しきに、仕へまつりて、今だにも、國に退りて、父母も、妻をも見むと、思ひつゝ、行きけむ君は、鷄が鳴く、東の國の、畏きや、神の御坂に、和魂の、衣寒らに、ぬば玉の、髮は亂れて、國問へど、國をも告らず、家問へど、家をも言はず。丈夫の、行きの進に、此處にこやせる。

過二葦屋處女墓一時作歌一首幷短歌

古之。益荒丁子。各競。妻問爲祁牟。葦屋乃。菟名日處女乃。奥城矣。吾立見者。永世乃。語爾爲乍。後人。偲爾世武等。玉桙乃。道邊近。磐構。作冢矣。天雲乃。退部乃限。此道矣。去人毎。行因。射立嘆日。惑人者。啼爾毛哭乍。語嗣。偲繼來。處女等賀。奥城所。吾幷。見者悲裳。古思者。

黄葉の―「過ぎにし」の枕詞にて、人の死にいふ常套句
磯ま―一說「礒を」と訓ずべし
ぬば玉の―枕詞
眞名―下に「見」を脱す
爾保比―下に「氐」を脱す
足柄坂―相模國

黄葉の、過ぎにし兒らと、携はり、遊びし磯ま、見れば悲しも。
鹽氣立。荒礒丹者雖在。往水之。過去妹之。方見等曾來。
鹽氣立つ、荒磯にはあれど、行く水の、過ぎにし妹が、形見とぞ來し。
古家丹。妹等吾見。黑玉之。久漏牛方乎。見佐府下。
古に、妹と我が見し、ぬば玉の、くろうし潟を、見れば淋しも。
玉津島。礒之裏未之。眞名仁文。爾保比去名。妹觸險。
玉津島、磯の浦まの、眞砂にも、匂ひて行かな。妹が觸れけむ。

右五首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

過二足柄坂一見二死人一作歌一首

小垣内之。麻矣引干。妹名根之。作服異六。白細乃。紐緒毛不解。一重結。帶矣三重結。苦侍伎爾。仕奉而。今谷裳。國爾退而。父妣毛。妻矣毛將見跡。思乍。往祁牟君者。鳥鳴。東國能。恐耶。神之三坂爾。和靈乃。服寒等丹。烏玉乃。髮者

垣保成。人之横辭。繁香裳。不遭日數多。月乃經良武。
垣穂なす、人の横言、繁きかも、逢はぬ日まねく、月の經ぬらむ。

立易。月重而。雖不遇。核不所忘。面影思天。
立易る、月重りて、逢はざれど、さね忘らえず、面影にして。

右三首。田邊福麻呂之歌集出。

挽歌

宇治若郎子宮所歌一首

妹等許。今木乃嶺。茂立。嬬待木者。古人見祁牟。
妹等許、今木の峰に、しみ立てる、妻松の木は、古人見けむ。

紀伊國作歌四首

黄葉之。過去子等。携。遊礒麻。見者悲裳。

垣穂なす—二人の間の隔をなす意にて喩へしならん

横言—よこしまは人のいひさまたぐる言葉

逢はざれど—一訓「逢はねども」

さね忘らえず—まことに忘られず

妹等許—枕詞

今木の峰—大和國十市郡、舒明紀には今來、雄略紀には新漢と書けり

しみ立てる—茂く立てる

旅人の、宿りせむ野に、霜降らば、我が子はぐくめ。天の鶴群。

思二娘子一作歌一首幷短歌

白玉之。人乃其名矣。中々二。辭緒不延。不遇日之。數多過者。戀日之。累行者。思遣。田時乎白土。肝向。心摧而。珠手次。不懸時無。口不息。吾戀兒乎。玉釧。手爾取持而。眞十鏡。直目爾不視者。下檜山。下逝水乃。上丹不出。吾念情。安虚歟毛。

「白玉の」人の其の名を、なかなかに、辭の緒はへず、逢はぬ日の、まねく過ぐれば、戀ふる日の、重り行けば、思ひ遣る、たどきを知らに、肝向ふ、心碎けて、玉襷、懸けぬ時無く、口やまず、我が戀ふる兒を、玉釧、手に取り持ちて、眞十鏡、たゞ目に見ねば、下樋山、下行く水の、上に出でず、我が思ふ心、安き空かも。

反歌

鶴群—一訓「たづむら」

まねく—多く
思ひ遣る—心を慰むる
肝向ふ—枕詞
玉襷—枕詞
懸けぬ時無く—心に懸けぬ時なく
下樋山云々—心の内に戀ふるに譬ふ、下樋山は攝津國能勢郡
安き空かも—本文「虚」は「不在」の誤にて「安からぬかも」かともいふ

吾妹子之。結手師紐乎。將解八方。絕者絕十方。直二相左右二。

我妹子が、結ひてし紐を、解かめやも。絕えば絕ゆとも、直に逢ふまでに。

右件五首。笠朝臣金村之歌中出。

天平五年癸酉遣唐使舶發二難波一入レ海之時親母贈レ子歌一首并短歌

秋芽子乎。妻問鹿許會。一子二子。持有跡五十戶。鹿兒自物。吾獨子之。草枕。客二師往者。竹珠乎。密貫垂。齋戶爾。木綿取四手而。忌日管。吾思吾子。眞好去有欲得。

秋萩を、妻問ふ鹿こそ、一つ子二つ子、持たりと言へ。鹿子じ物、我が一子の、草枕、旅にし行けば、竹玉を、しじに貫き垂れ、齋瓮に、木綿取りしでて、齋ひつつ、我が思ふ我子、まさきくありこそ。

反歌

客人之。宿將爲野爾。霜降者。吾子羽裹。天乃鶴群。

一つ子二つ子—鹿は子を僅に一つ二つ生むものといふ、一說、本文「一子」は「乎」の誤にて「ひとつ子を」を又、「ひとり子を」

竹玉—もとは玉を緒に貫きて小竹につけて神を齋ふ時に用ひたるならんを、やゝ後になりては玉の代りに竹を管の如く切りて緒に貫けるなるべしといふ

齋瓮—古へ神酒を盛れる陶製の壺

取りしでて—取り垂れて

み越路―みは接頭語なるべし
懸けて偲ばせ―心にかけて偲び給へ
山上復有山―古樂府「山上更有山」、詩「山上有山不得歸」
明毛不得呼―一說「明毛不得呼鷄」（アケモカネツ）か
敷島の―枕詞
たゞか―容姿
都にぞ―都をぞ

み越路の、雪降る山を、越えむ日は、留れる我を、懸けて偲ばせ。

天平元年己巳冬十二月歌一首幷短歌

虛蟬乃。世人有者。大王之。御命恐彌。礒城島能。日本國乃。石上。振里爾。紐不解。丸寢乎爲者。吾衣有。服者奈禮奴。毎見。戀者雖益。色二山上復有山者。一可知美。冬夜之。明毛不得呼。五十母不宿二。吾齒曾戀流。妹之直香仁。

空蟬の、世の人なれば、大君の、命畏み、敷島の、大和の國の、石の上、布留の里に、紐解かず、まろ寢をすれば、我が著たる、衣はなれぬ。見る毎に、戀は增されど、色に出でば、人知りぬべみ、冬の夜の、明しも得ぬを、寢も寢ずに、我はぞ戀ふる。妹がたゞかに。

反歌

振山從。直見渡。京二曾。寢不宿戀流。遠不有爾。

布留山ゆ、直に見渡す、都にぞ、寢も寢ず戀ふる。遠からなくに。

誤か

わくらばに—たまさかに

朝立たし—朝立ち
群鳥の—枕詞
群立ち—一訓「群れ立ち」
見ず久ならば—今別れて見ざること久しからば

海の、何れの神を、齋はばか、往くさも來さも、船の早けむ。

右一首。渡海年紀未レ詳。

神龜五年戊辰秋八月歌一非并短歌

人跡成。事者難乎。和久良婆爾。成吾身者。死毛生毛。君之隨意常。念乍。有之間爾。虛蟬乃。代人有者。大王之。御命恐美。天離。夷治爾登。朝鳥之。朝立爲管。群鳥之。群立行者。留居而。吾者將戀奈。不見久有者。

人となる、事は難きを、わくらばに、なれる我が身は、死にも生きも、君がまにまと、思ひつゝ、ありし間に、空蟬の、世の人なれば、大君の、命畏み、天離る、鄙治めにと、朝鳥の、朝立たしつゝ、群鳥の、群立ち行けば、留り居て、我は戀ひむな。見ず久ならば。

反歌

三越道之。雪零山乎。將越日者。留有吾乎。懸而小竹葉背。

凪ぎなむ時も—凪ぎなん時にも

消え失せたれや—消え失せたればにや

まつがへり云々—この歌いと解き難し、眞淵は第五句の「呂」は「追」の誤かといへり、さらば「待つといへや子也」、一首の大意は、我が君を待つといふは決して誣言にあらず、一ト月の半も君が來ぬ故我は誠に待ち侘ぶる也、その事を君に告げよ子等と使の者にいひつくるにや、其他諸說あれど今之を略して後考を待つ

三栗の—枕詞

齊祈者歟—「齊」は「齋」の

海津路乃。名木名六時毛。渡七六。加九多都波二。船出可爲八。

海つ路の、凪ぎなむ時も、渡らなむ。斯く立つ浪に、船出すべしや。

右二首。高橋連蟲麻呂之歌集中出。

與レ妻歌一首

雪己曾波。春日消良米。心佐閉。消失多列夜。言母不往來。

雪こそは、春日消ゆらめ。心さへ、消え失せたれや、言も通はぬ。

妻和歌一首

松反。四臂而有八羽。三栗。中上不來。麻呂等言八子。

まつがへり、しひにてあれやは。三栗の、中過ぎて來ず。待つと言はむやも。

右二首。柿本朝臣人麻呂之歌集中出。

贈二入唐使一歌

海若之。何神乎。齊祈者歟。往方毛來方毛。船之早兼。

麻勢久可願—眞淵說に「麻狹伎久母願」の誤にて「まさきくもがも」
復亦毛來武—「復」は「後」の誤にて「のちまたもこむ」か
酒爾—「潟爾」の誤、一說「汭爾（ウラニ）」の誤
奈居而—「居」の下に「美」を脫せるか、又「奈」は「竝」の誤か
足垂之—「垂」は「摩」の誤なるべし
ことひうしの—枕詞、本文「牝」は「牡」の誤
滿ちのとゞみ—夕潮の滿ちたらへたる意ならん
あともひ—誘ひ
濱も狹に—濱も狹き程に人々見送ると也
こい轉び—伏しまろびあり
海上—下總國に海上郡あり

命乎志。麻勢久可願。名欲山。石踐平之。復亦毛來武。

命をし、ませ久しかれ。なほり山、岩踏みならし、また／＼も來む。

鹿島郡苅野橋別二大伴卿一歌一首并短歌

牝牛乃。三宅之酒爾。指向。鹿島之崎爾。狹丹塗之。小船儲。玉纏之。小梶繁貫。夕鹽之。滿乃登等美爾。三船子呼。阿騰母比立而。喚立而。三船出者。濱毛勢爾。後奈居而。反側。戀香裳將居。足垂之。泣耳八將哭。海上之。其津於指而。君之己藝歸者。

ことひうしの、三宅の潟に、差向ふ、鹿島の崎に、さ丹塗りの、小船をまけて、玉纏きの、小楫しゞ貫き、夕潮の、滿ちのとゞみに、御船子を、あともひ立てて、呼び立てて、御船出でなば、濱も狹に、後れ並み居て、こい轉び、戀ひかも居らむ、足摩し、音のみや泣かむ。海上の、其の津に指して、君が漕ぎ往なば。

反歌

泊瀬河。夕渡來而。我妹兒何。家門。近春二家里。
泊瀬川、夕渡り來て、我妹子が、家の金戸に、近づきにけり。

右三首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

石河大夫遷任上レ京時播磨娘子贈歌二首

絶等寸笑。山之岑上乃。櫻花。將開春部者。君乎將思。
たゆらきの、山の峰の上の、櫻花、咲かむ春邊は、君を偲ばむ。

君無者。奈何身將裝餝。匣有。黃楊之小梳毛。將取跡毛不念。
君無くば、何ぞ身裝はむ。櫛笥なる、黃楊の小櫛も、取らむとも思はず。

藤井連遷任上レ京時娘子贈歌一首

從明日者。吾波孤悲牟奈。名欲山。石踏平之。君我越去者。
明日よりは、我は戀ひむな。なほり山、岩踏みならし、君が越え去なば。

藤井連和歌一首

きらしかばの意か、一說「言にあらば」と假定に訓じ、下に、誠の母親ならぬは賴み難しと反對の意を含めて見る
近春―「春」は「春」の誤ならん

たゆらき―播磨國

君無くば云々―毛詩「自二伯之東一、首如二飛蓬一、豈無二膏沐一、誰適爲レ容」と同工異曲

なほり山―豐後國直入郡か、古義には名次山（ナスキヤマ）の誤といへり

於久禮居而。吾波也將戀。春霞。多奈妣久山乎。君之越去者。
後れ居て、我はや戀ひむ。春霞、棚引く山を、君が越え去なば。

右二首。古集中出。

大神大夫任二筑紫國一時阿倍大夫作歌一首

於久禮居而。吾者哉將戀。稻見野乃。秋芽子見都津。去奈武子故爾。
後れ居て、我はや戀ひむ。稻見野の、秋萩見つゝ、去なむ兒故に。

獻二弓削皇子一歌一首

神南備。神依板爾。爲杉乃。念母不過。戀之茂爾。
神南備の、神憑板に、する杉の、思ひも過ぎず。戀の繁きに。

獻二舍人皇子一歌二首

垂乳根乃。母之命乃。言爾有者。年緒長。憑過武也。
垂乳根の、母の命の、言なれば、年の緒長く、頼み過ぎむや。

古集—「古歌集」の誤

神憑板—一訓「神よせ板」、琴の板と稱し、神を祭るに當り、まづ神を天上より請じ奉るためたゝきならしゝ杉の板

思ひも過ぎず—思ひはれ難し

垂乳根の—枕詞

言なれば—ゆるせる詞を

釧—古昔臂に纒ひつけし一種の装飾品、今日のうでわの類

奥の手—左の手、思ふ妹を大切にする意に喩へたる也

いつがり居れば云々—いは發語、つがるは緒にてつながりたる樣により添ふ意、紐といふ名の緣語

穗には出でず—表面にはあらはさず

帶ばせる—帶とし給へる

吾妹兒者。久志呂爾有奈武。左手乃。吾奧手爾。纒而去麻師乎。
我妹子は、釧にあらなむ。左手の、我が奧の手に、纒きて往なましを。

拔氣大首任二筑紫一時娶二豐前國娘子紐兒一作歌三首

豐國乃。加波流波吾宅。紐兒爾。伊都我里座者。革流波吾家。
豐國の、香春は我家、紐兒に、いつがり居れば、香春は我家。

石上。振乃早田乃。穗爾波不出。心中爾。戀流比日。
石の上、布留の早稻田の、穗には出でず、心の中に、戀ふる此の頃。

如是耳志。戀思渡者。靈刻。命毛吾波。惜雲奈師。
斯くのみし、戀ひし渡れば、たまきはる、命も我は、惜しけくも無し。

大神大夫任二長門守一時集二三輪河邊一宴歌二首

三諸乃。神能於婆勢流。泊瀬河。水尾之不斷者。吾忘禮米也。
三諸の、神の帶ばせる、泊瀬川、澪し絶えずは、我忘れめや。

雨零而云々—一說、二つの「不」は「者」の誤にて「あめふりてかぜはふくともかぜふきてあめはふるとも」

玉橋—橋をほめていふ也

君—牽牛

久堅乃。天漢爾。上瀨爾。珠橋渡之。下湍爾。船浮居。雨零而。風不吹登毛。風吹而。雨不落等物。裳不令濕。不息來益常。玉橋渡須。

久方の、天の河原に、上つ瀨に、玉橋渡し、下つ瀨に、船を浮け据ゑ、雨降りて、風吹かずとも、風吹きて、雨降らずとも、裳濡らさず、止まず來ませと、玉橋渡す。

反歌

天漢。霧立渡。且今日且今日。吾待君之。船出爲等霜。

天の河、霧立ち渡る、今日々々と、我が待つ君が、船出すらしも。

右件歌。或云。中衞大將藤原北卿宅作也。

相聞

振田向宿禰退二筑紫國一時歌一首

まかむと—求めあはんと
朝月夜—有明月夜
とよめ—とよませ
右件歌云々—後人の書入れなるべし
倉橋の山—大和國、此歌巻三に初月の歌として末句「光乏寸」とかへて出づ
片待ち難き—待遠にて待ち難きにやあらん

視。足日木乃。山響令動。喚立鳴毛。
三諸の、神南備山に、立ち向ふ、三垣の山に、秋萩の、妻をまかむと、朝月夜、明けまく惜しみ、足引の、山彦とよめ、よび立て鳴くも。

反歌

明日之夕。不相有八方。足日木之。山彦令動。呼立哭毛。
明日の宵、逢はざらめやも、足引の、山彦とよめ、呼び立て鳴くも。

右件歌。或云。柿本朝臣人麻呂作。

沙彌女王歌一首

倉橋之。山乎高歟。夜牢爾。出來月之。片待難。
倉橋の、山を高みか、夜籠りに、出で來る月の、片待ち難き。

右一首。間人宿禰大浦歌中既見。但末一句相換。亦作歌兩主不敢正指。因以累載。

七夕歌一首并短歌

交らむ—一訓「あはむ」
うしはく—領する
初より—一訓「いにしへよ」又「昔より」
いさめぬ業ぞ—とゞめぬ、禁ぜぬ事ぞ
めぐしもな見そ—見苦しくも見ること勿れ、古義には類例を立證して、めでなつかしむ意とせり、然らば、今日は互に妻を他に任せ置きて、可愛の妻やと思ひ見おこさざれとなるべし
男の神—男體山

布嬥歌爾。他妻爾。吾毛交牟。吾妻爾。他毛言問。此山乎。牛掃神之。從來。不禁行事叙。今日耳者。目串毛勿見。事毛咎莫。

鷲の住む、筑波の山の、もはき津の、其の津の上に、誘ひて、少女男の、行き集ひ、かゞふ嬥歌に、人妻に、我も交らむ。我が妻に、人も言問へ。此の山を、うしはく神の、初より、いさめぬ業ぞ。今日のみは、めぐしもな見そ。ことも咎むな。

嬥歌者東俗語曰二賀我比一。

反　歌

男神爾。雲立登。斯具禮零。沾通友。吾將反哉。

男の神に、雲立ちのぼり、時雨降り、濡れ通るとも、我還らめや。

右作歌者。高橋連蟲麻呂歌集中出。

詠二鳴鹿一歌一首并短歌

三諸之。神邊山爾。立向。三垣乃山爾。秋芽子之。妻卷六跡。朝月夜。明卷鴦

草枕。客之憂乎。名草漏。事毛有武跡。筑波嶺爾。登而見者。尾花落。師付之田井爾。鴈泣毛。寒來喧奴。新治乃。鳥羽能淡海毛。秋風爾。白浪立奴。筑波嶺乃。吉久乎見者。長氣爾。念積來之。憂者息沼。

草枕、旅の憂ひを、慰もる、こともあらむと、筑波根に、登りて見れば、尾花散る、しづくの田居に、雁がねも、寒く來鳴きぬ。新治の、とばの淡海も、秋風に、白浪立ちぬ。筑波根の、よけくを見れば、長きけに、思ひ積み來し、憂ひは息みぬ。

反歌

筑波嶺乃。須蘇廻乃田井爾。秋田苅。妹許將遣。黃葉手折奈。

筑波根の、裾わの田居に、秋田刈る、妹がり遣らむ、黃葉手折らな。

登二筑波嶺一爲二嬥歌會一日作歌一首幷短歌

鷲住。筑波乃山之。裳羽服津乃。其津乃上爾。率而。未通女壯士之。往集。加賀

憂ひ—一訓「うけく」
しづく—筑波山の麓の村の名
田居—田
新治—常陸にある郡名
とばの淡海—常陸風土記「新治郡、郡西一里有二騰波江一」
長きけに—長き月日に、長く積り來し旅の憂苦も此のよき景色によりてやみぬといふ意
裾わの田居—麓にめぐれる田
手折らな—手折らん
嬥歌會—歌垣の類にて、男女宴會して唱歌すること
率而—一本「卛而」に作る、又一訓「あともひて」

鶯の云々―郭公は鶯の巣の中に卵をうみおとし鶯にかへさしむといふ

幣―おくりもの、賄賂

鳥―郭公、一説「鳴」の誤にて、「住み渡り鳴け」

詠二霍公鳥一一首并短歌

鸎之。生卵乃中爾。霍公鳥。獨所生而。己父爾。似而者不鳴。己母爾。似而者不鳴。宇能花乃。開有野邊從。飛翻。來鳴令響。橘之。花乎居令散。終日。雖喧聞吉。幣者將爲。遐莫去。吾屋戸之。花橘爾。住度鳥。

鶯の、卵の中に、郭公、獨り生れて、己が父に、似ては鳴かず、己が母に、似ては鳴かず。卯の花の、咲きたる野邊ゆ、飛び翔り、來鳴きとよもし、橘の、花を居散らし、終日に、鳴けど聞き好し。幣はせむ、遠くな行きそ。我が宿の、花橘に、住み渡れ鳥。

反歌

搔霧之。雨零夜乎。霍公鳥。鳴而去成。何怜其鳥。

搔き霧らし、雨の降る夜を、郭公、鳴きて行くなり。あはれその鳥。

登二筑波山一歌一首并短歌

衣手の—枕詞、一說「衣手」と四言
二並み—男體山女體山とて峰二つ並び立てればいふ、一訓「二並び」
君—大伴卿をさす
汗かき嘆き云々—さかしき山を登るさま也、本文「奈氣」の下に「伎」を脫す
許し給ひ—大伴卿の登覽するを許し給ひて—幸を下したまふ也
ちはひ給ひて—幸を下し給ひて
時となく云々—高山故常に雲飛び雨降るなり
いぶかりし—いぶせく鬱陶しかりし
國のまほら—まほらは含まれこもれる意といふ、こゝは只國の義に解すべし
紐の緖解きて—我が家に燕居する時のさま
春見ましゆは—春見んよりは「ゆ」は一訓「よ」
如何及ばむ—一訓「いかでしかめや」

嘯鳴登。峯上乎。君爾令見者。男神毛。許賜。女神毛。千羽日給而。時登無。雲居雨零。筑波嶺乎。清照。言借石。國之眞保良乎。委曲爾。示賜者。歡登。紐之緒解而。家如。解而會遊。打靡。春見麻之從者。夏草之。茂者雖在。今日之樂者。

衣手の、常陸の國の、二並み、筑波の山を、見まく欲り、君來ませりと、熱けきに、汗かき嘆き、木の根取り、嘯き登り、峰の上を、君に見すれば、男の神も、許し給ひ、女の神も、ちはひ給ひて、時となく、雲居雨降る、筑波根を、さやに照して、いぶかりし、國のまほらを、つばらかに、示し給へば、嬉しみと、紐の緒解きて、家の如、解けてぞ遊ぶ、打靡く、春見ましゆは、夏草の、茂くはあれど、今日の樂しさ。

反歌

今日爾。何如將及。筑波嶺。昔人之。將來其日毛。

今日の日に、如何及ばむ。筑波根に、昔の人の、來けむ其の日も。

島山乎。射往廻流。河副乃。丘邊道從。昨日己曾。吾越來牡鹿。一夜耳。宿有之柄二。岑上之。櫻花者。瀧之瀨從。落墮而流。君之將見。其日左右庭。山下之。風莫吹登。打越而。名二負有杜爾。風祭爲奈。

島山を、い行き廻れる、川添の、岡邊の道ゆ、昨日こそ、我が越え來しか。一夜のみ、寢たりしからに、峰の上の、櫻の花は、瀧の瀨ゆ、たぎちて流る。君が見む、其の日までには、山嵐の、風な吹きそと、打越えて、名に負へる杜に、風祭せな。

反歌

射行相乃。坂上之蹈本爾。開乎爲流。櫻花乎。令見兒毛欲得。

い行き逢ひの、坂の麓に、咲きをゝる、櫻の花を、見せむ兒もがも。

檢税使大伴卿登二筑波山一時歌一首并短歌

衣手。常陸國。二並。筑波乃山乎。欲見。君來座登。熱爾。汗可伎奈氣。木根取。

島山—大和國
廻れる—一訓「もとほる」
寢たりしからに—寢たりしものを早くも其間に
君—天皇
山嵐の—一訓「嵐の」と四言
名に負へる杜—龍田の杜、天武紀に風神級長津彥命を龍田立野にまつるよし見ゆ、風神と名に立てる神の社の杜
風祭せな—風祭せん、風祭は四月七月兩度五穀成就の爲に行ふなるを、茲は花の爲めに祭らんといふ也
乎爲—「乎島」の誤
い行き逢ひの—雙方より登り行く人の行き逢ふ坂の義なるべしといふ
大伴卿—安麻呂卿か、而して作者は常陸國守か屬官などにて彼國に在任せる人なるべしといふ

龍田彦—大和國立田郡立田比古立田比女神社、風神なり。

こちごち—あちらこちら

見ずといへど—一訓「見せずとも」、この邊誤字あるべしといふ

なづさひ渡り—山川を渡りて、なづさふは浪漬傍の義なるべしといふ

反歌

吾去者。七日不過。龍田彦。勤此花乎。風爾莫落。

我が行きは、七日は過ぎじ。龍田彦、ゆめ此の花を、風にな散らし。

白雲乃。立田山乎。夕晩爾。打越去者。瀧上之。櫻花者。開有者。落過祁里。含有者。可開繼。許智期智乃。花之盛爾。雖不見。左右。君之三行者。今西應有。

白雲の、立田の山を、夕暮に、打越え行けば、瀧の上の、櫻の花は、咲きたるは、散り過ぎにけり。含めるは、咲き繼ぎぬべし。こちごちの、花の盛りに、見ずといへど、かにかくに、君が行幸は、今にしあるべし。

反歌

暇有者。魚津柴比渡。向峯之。櫻花毛。折末思物緒。

暇あらば、なづさひ渡り、向つ峰の、櫻の花も、折らましものを。

難波經宿明日還來之時歌一首幷短歌

三栗の―枕詞
那珂に向きたる―那珂に向ひて流るゝ、一說「向」は「回」の誤にて「めぐれる」
高爾―「高」は「其」の誤にて「そこに」なるべし
爲流―「爲」は「烏」の誤
白雲の―枕詞
咲きをゝる―枝もたわむ程に咲き亂れたる

三栗乃。中爾向有。曝井之。不絕將通。彼所爾妻毛我。
三栗の、那珂に向きたる、曝井の、絕えず通はむ、其處に妻もが。

手綱濱歌一首

遠妻四。高爾有世婆。不知十方。手綱乃濱能。尋來名益。
遠妻し、たかに有りせば、知らずとも、手綱の濱の、尋ね來なまし。

春三月諸卿大夫等下ニ難波ー時歌二首并短歌

白雲之。龍田山之。瀧上之。小鞍嶺爾。開乎爲流。櫻花者。山高。風之不息者。春雨之。繼而零者。最末枝者。落過去祁利。下枝爾。遺有花者。須臾者。落莫亂。草枕。客去君之。及還來。
白雲の、龍田の山の、瀧の上の、小鞍の山に、咲きをゝる、櫻の花は、山高み、風し止まねば、春雨し、繼ぎて降れゝば、上枝は、散り過ぎにけり。下枝に、殘れる花は、暫くは、散りな亂れそ。草枕、旅行く君が、還り來までに。

獨。伊渡爲兒者。若草乃。夫香有良武。橿實之。獨歟將宿。問卷乃。欲我妹之。家乃不知。

しな照る、かたしは川の、さ丹塗の、大橋の上ゆ、紅の、赤裳裾引き、山藍もて、摺れる衣著て、唯獨り、い渡らす兒は、若草の、夫かあるらむ。橿の實の、獨りか寢らむ。問はまくの、欲しき我妹が、家の知らなく。

反歌

大橋之。頭爾家有者。心悲久。獨去兒爾。屋戸借申尾。

大橋の、詰に家あらば、ま悲しく、獨り行く兒に、宿貸さましを。

見武藏小埼沼鴨作歌一首

前玉之。小埼乃沼爾。鴨曾翼霧。己尾爾。零置流霜乎。掃等爾有斯。

埼玉の、小埼の池に、鴨ぞ羽根きる。己が尾に、降り置ける霜を、掃ふとならし。

那賀郡曝井歌一首

しな照る—枕詞
かたしは川—一訓「かたあすは川」
い渡らす—いは接頭語
家の知らなく—家の知れぬ事よ
ま悲しく—悲しげに獨り行くと解すると、眞心にいとしく宿貸さんと解するとの二説あり、後説可ならんか
埼玉—武藏國埼玉郡
羽根きる—羽ばたきす
那賀—武藏國那珂郡

そこらく―そこばく、許多
堅めしことを―堅く約したるものを
見かねて―見えかねて
怪しと―一訓「怪しみと」
開きて見てば―開きて見たらば
こい轉び―臥し轉び
ゆな〳〵―夜な〳〵、はて〳〵等の義とする說あり、又本文の上に註せる如く「ゆり〳〵」とする說もあり
劒太刀―枕詞
しが心―汝自らの心
此の君―浦島子をさす

らば、此の篋、開くなゆめと、そこらくに、堅めしことを、住吉に、還り來りて、家見れど、家も見かねて、里見れど、里も見かねて、怪しと、そこに思はく、家ゆ出て、三歳の程に、墻もなく、家失せめやと、此の篋を、開きて見てば、もとの如、家はあらむと、玉篋、少し開くに、白雲の、篋より出でて、蓬萊山邊に、棚引きぬれば、立走り、叫び袖振り、こい轉び、足摩しつゝ、忽に、心消失せぬ。若かりし、膚も皺みぬ。黑かりし、髮も白けぬ。ゆな〳〵は、息さへ絶えて、後遂に、命死にける、水江の、浦島の子が、家處見ゆ。

反歌

常世邊。可住物乎。劒刀。己之心柄。於曾也是君。
蓬萊山邊に、住むべきものを、劒太刀、しが心から、おそや此の君。

見ニ河内大橋ノ獨去ル娘子ヲ一歌一首并短歌

級照。片足羽河之。左丹塗。大橋之上從。紅。赤裳數十引。山藍用。摺衣服而。直

由奈由奈—一説「由利由利」の誤、「ゆり〳〵」は後後の義といふ
とをらふ—通らふ、又たゆたふの誤なるべき事本文の上に註せるが如し
かゞらひ—一説「かたらひ」關係する
かき結び—かきは接頭語、結ぶは約束する意
しれたる人—浦島をさす、一説「かたくな人」
我妹子—海神の少女をさす

念久。從家出而。三歳之間爾。墻毛無。家滅目八跡。此筥乎。開而見手歯。如本來。家者將有登。玉篋。小披爾。白雲之。自箱出而。常世邊。棚引去者。立走。叫袖振。反側。足受利四管。頓。情消失奴。若有之。皮毛皺奴。黒有之。髪毛白斑奴。由奈由奈波。氣左倍絶而。後遂。壽死祁流。水江之。浦島子之。家地見。

春の日の、霞める時に、住吉の、岸に出で居て、釣船の、とをらふ見れば、古の、事ぞ思ほゆる。水江の、浦島の子が、堅魚釣り、鯛釣り誇り、七日まで、家にも來ずて、海界を、過ぎて漕ぎ行くに、海神の、神の少女に、たまさかに、い漕ぎ向ひて、あひかゞらひ、事なりしかば、かき結び、蓬萊山にいたり、海神の、神の宮の、内のへの、妙なる殿に、携はり、二人入り居て、老いもせず、死にもせずして、永久に、在りけるものを、世の中の、しれたる人の、我妹子に、告りて語らく、暫くは、家に歸りて、父母に、事をも告らひ、明日の如、我は來なむと、言ひければ、妹が言へらく、蓬萊山邊に、復歸り來て、今の如、逢はむとな

寄りてぞ—その人に

金戸—門
身はたな知らず—身をば忘れて
水江浦島子—浦島子の事は日本紀雄略天皇の卷、丹後風土記、釋日本紀天書第八、古事談等に詳也
淂乎良布見者—「淂」一本「得」に作る「乎」一說「本」の誤、又宿掛太平說に「淂乎良布」は「手湯多布」の誤にて「たゆたふ」

反歌

金門爾之。人乃來立者。夜中母。身者田菜不知。出曾相來。

金戸にし、人の來立てば、夜中にも、身はたな知らず、出でてぞ逢ひける。

詠二水江浦島子一一首幷短歌

春日之。霞時爾。墨吉之。岸爾出居而。釣船之。淂乎良布見者。古之。事曾所念。水江之。浦島兒之。堅魚釣。鯛釣矜。及七日。家爾毛不來而。海界乎。過而榜行爾。海若。神之女爾。邂爾。伊許藝趍。相誂良比。言成之賀婆。加吉結。常代爾至。海若。神之宮乃。內隔之。細有殿爾。携。二人入居而。老目不爲。死不爲而。永世爾。有家留物乎。世間之。愚人之。吾妹兒爾。告而語久。須臾者。家歸而。父母爾。事毛告良比。如明日。吾者來南登。言家禮婆。妹之答久。常世邊爾。復變來而。如今。將相跡奈良婆。此篋。開勿勤常。曾己良久爾。堅目師事乎。墨吉爾。還來而。家見跡。宅毛見金手。里見跡。里毛見金手。恠常。所許爾

大瀧乎。過而夏箕爾。傍爲而。淨河瀨。見河明沙。
大瀧を、過ぎてなつみに、そはり居て、清き川瀬を、見るがさやけさ。

詠二上總末珠名娘子一一首并短歌

水長鳥。安房爾繼有。梓弓。末乃珠名者。胸別之。廣吾妹。腰細之。須輕娘子之。其姿之。端正爾。如花。咲而立者。玉桙乃。道行人者。己行。道者不去而。不召爾。門至奴。指並。隣之君者。預。己妻離而。不乞爾。鎰左倍奉。人乃皆。如是迷有者。容艷。緣而曾妹者。多波禮弖有家留。
息長鳥、安房に繼ぎたる、梓弓、末の珠名は、胸わけの、廣き我妹、腰細の、蜾蠃少女の、其の顏の、嚴しけさに、花の如、笑みて立てれば、玉桙の、道行く人は、己が行く、道は行かずて、よばなくに、門に至りぬ。さしなみの、隣の君は、豫め、己妻離れて、乞はなくに、鎰さへまたす。人の皆、斯く惑へれば、打ちしなひ、寄りてぞ妹は、戲れたりける。

傍爲而―一說「爲」は「居」の誤にて「そひをりて」か
大瀧―吉野の內
末珠名―末は季といふ地名、珠名は娘の名
端正―「きら〳〵しきに」とも訓むべし
息長鳥―枕詞
梓弓―枕詞
胸わけ―胸幅の廣きをよき相とせしなるべし
蜾蠃少女―腰細くして姿しなやかなる少女、蜾蠃は蜂の一種
さしなみの―一說「さし並ぶ」
隣の君―近隣の男
豫め―眞淵說に「預」は「頓」の誤にて「たちまちに」
またす―與ふ、一說「まつる」と訓ず

みをが崎―近江國

今香―舊本「今者」とあるを略解が官本により改めたるせ

鹽津―近江國淺井郡、菅浦も同所と見ゆ

我が疊―枕詞

三重―伊勢國

礒のうら―礒のうち

かばかりかもと―斯くばかり面白き所かなと、一說「かくしもがもと」

白木綿花に―白木綿花の如くに

思乍。雖來來不勝而。水尾崎。眞長乃浦乎。又顧津。
思ひつゝ、來れど來兼ねて、みをが崎、まながの浦を、復還り見つ。

小辨歌一首

高島之。足利湖乎。榜過而。鹽津菅浦。今香將榜。
高島の、あとの港を、漕ぎ過ぎて、鹽津菅浦、今か漕ぐらむ。

伊保麻呂歌一首

吾疊。三重乃河原之。礒裏爾。如是鴨跡。鳴河蝦可物。
我が疊、三重の河原の、礒のうらに、かばかりかもと、鳴く蛙かも。

式部大倭芳野作歌一首

山高見。白木綿花爾。落多藝津。夏身之河門。雖見不飽香聞。
山高み、白木綿花に、落ちたぎつ、なつみの川門、見れど飽かぬかも。

兵部川原歌一首

慰めて―略解に「旅にして女に逢ひてよめるなるべし」

こゆ―こゝより

梶島―丹後國、一說筑紫國

しきてし―頻に絕間なく

山科―山城國宇治郡

布靡越者―一說「布麻勢者」の誤にて「たむけせば」

石田―久世郡、山科はこの郡にもかゝれるか

おも山―美濃國、宣長は本文上に「祖」の字を脫し大葉山なりといふ

名草目而。今夜者寐南。從明日波。戀鴨行武。從此間別者。

慰めて、今宵は寢なむ。明日よりは、戀ひかも行かむ。こゆ別れなば。

宇合卿歌三首

曉之。夢所見乍。梶島乃。石越浪乃。敷弖志所念。

曉の、夢に見えつゝ、梶島の、磯越す浪の、しきてし思ほゆ。

山品之。石田乃小野之。母蘇原。見乍哉公之。山道越良武。

山科の、石田の小野の、柞原、見つゝや君が、山路越ゆらむ。

山科乃。石田社爾。布靡越者。蓋吾妹爾。直相鴨。

山科の、石田の森に、踏越えば、蓋し我妹に、直に逢はむかも。

碁師歌二首

母山。霞棚引。左夜深而。吾舟將泊。等萬里不知母。

おも山に、霞棚引く。小夜更けて、我が舟はてむ、泊り知らずも。

來しくも著く—來りしだけの甲斐ありて「く」は助辭
乏しき—珍しく面白し
汝が名告らされ—名を告げて我が妻たるを許せかし
人跡乎見座—上に「海」を脱せるか、又は一の句の末の「流」は「海」の誤か「あまとを見ませ」也
妻者不敷—「敷」は「敎」の誤「つまとはのらじ」也

見まく欲り、來しくも著く、吉野川、音のさやけさ、見るに乏しき。

麻呂歌一首

古之。賢人之。遊兼。吉野川原。雖見不飽鴨。
古の、賢き人の、遊びけむ、吉野の川原、見れど飽かぬかも。

右柿本朝臣人麻呂之歌集出。

丹比眞人歌一首

難波方。鹽干爾出而。玉藻苅。海未通女等。汝名告左禰。
難波潟、鹽干に出でて、玉藻刈る、海人少女ども、汝が名告らさね。

和歌一首

朝入爲流。人跡乎見座。草枕。客去人爾。妻者不敷。
漁する、人とを見ませ。草枕、旅行く人に、妻とはしかじ。

石河卿歌一首

何時かへり見む―復いつ來りて見ん
戀ひしけまくに―後に戀しからんに
六田の川―吉野の内

元仁歌三首

馬屯而。打集越來。今日見鶴。芳野之川乎。何時將顧。
馬並めて、打群れ越え來、今日見つる、吉野の川を、何時かへり見む。

辛苦。晩去日鴨。吉野川。清河原乎。雖見不飽君。
苦しくも、暮れ行く日かも、吉野川、清き河原を、見れど飽かなくに。

吉野川。河浪高見。多寸能浦乎。不視歟成嘗。戀布眞國。
吉野川、川浪高み、瀧の裏を、見ずかなりなむ、戀ひしけまくに。

絹歌一首

河蝦鳴。六田乃河之。川楊乃。根毛居侶雖見。不飽君鴨。
蛙鳴く、六田の川の、川柳の、懇見れど、飽かぬ君かも。

島足歌一首

欲見。來之久毛知久。吉野川。音清左。見二友敷。

巻一にも出でて「幸二于紀伊國一時川島皇子御作歌、或云山上臣憶良作」と見ゆ

衣手湖―「湖」は「濕」の誤

みつ川―川の名か、一説近江國滋賀郡

淵瀬も落ちず―淵瀬も漏さず

あともひて―相伴ひて

漕ぎ行く―「こぎにし」なるべきか

高島―近江國

右一首。或云。河島皇子御作歌。

春日歌一首

三河之。淵瀬物不落。左提刺爾。衣手湖。干兒波無爾。

みつ川の、淵瀬も落ちず、叉手さすに、衣手濡れぬ。干す兒は無しに。

高市歌一首

足利思代。榜行舟薄。高島之。足速之水門爾。極爾監鴨。

あともひて、漕ぎ行く船は、高島の、あとの港に、はてにけむかも。

春日藏歌一首

照月遠。雲莫隱。島陰爾。吾船將極。留不知毛。

照る月を、雲な隱しそ、島陰に、我が船はてむ、泊り知らずも。

右一首或本云。小辯作也。或記二姓氏一無レ記二名字一。或稱二名號一不レ稱二姓氏一。然依二古記一便以レ次載。凡如レ此類下皆效焉。

幸二芳野離宮一時歌二首

瀧上乃。三船山從。秋津邊。來鳴度者。誰喚兒鳥。

瀧の上の、三船の山ゆ、秋津べに、來鳴き渡るは、唯呼子鳥。

落多藝知。流水之。磐觸。與杼賣類與杼爾。月影所見。

落ち激ち、流るゝ水の、岩に觸り、淀めるよどに、月の影見ゆ。

右二首。作者未ㇾ詳。

槐本歌一首

樂波之。平山風之。海吹者。釣爲海人之。袂變所見。

細波の、ひら山風の、海吹けば、釣する海人の、袖反る見ゆ。

山上歌一首

白那彌之。濱松之本乃。手酬草。幾世左右二箇。年薄經濫。

白浪の、濱松が根の、手向草、幾世までにか、年は經ぬらむ。

觸り—觸れて

袖反る—袖が飜る

山上—憶良

濱松之本乃—「本」の「木」とあるを略解が一本に依りて改めたる也、「木」にても差支なかるべし、又「枝」の誤かともいふ、この歌

喜郡か、馬喰＝喰山
雁の使—單に雁のことをいふ
宿り過ぐなり—雁の使とはいへど、我郷より我への使にはあらで、雁は我が住む宿を鳴きて過ぐと也
削遺有—「削」は「消」の誤
御食向ふ—枕詞
南淵山—大和國
くらなしの濱—豐前國といへど未詳、四句までは序
百傳之—「之」は衍文か、或は「布」「不」などの誤か
漕ぎ來れど—一說「漕ぎ來けど」と訓ずべし
粟の小島—粟島
入らまく—山の端に入らん事の

獻二弓削皇子一歌一首

御食向。南淵山之。巖者。落波太列可。削遺有。

御食向ふ、南淵山の、巖には、降れるはだれか、消え殘りたる。

右柿本朝臣人麻呂之歌集所レ出。

吾妹兒之。赤裳泥塗而。殖之田乎。苅將藏。倉無之濱。

我妹子が、赤裳ひづちて、植ゑし田を、刈りて收めむ、くらなしの濱。

百傳之。八十之島廻乎。榜雖來。粟小島者。雖見不足可聞。

百傳ふ、八十の島まを、漕ぎ來れど、粟の小島は、見れど飽かぬかも。

右二首。或云。柿本朝臣人麻呂作。

登二筑波山一詠レ月一首

天原。雲無夕爾。烏玉乃。宵渡月乃。入巻惜毛。

天の原、雲無き宵に、ぬば玉の、夜渡る月の、入らまく惜しも。

打手折り—枕詞
多武の山—大和國十市郡
細川—集中細川山ともあり、多武山近き山ならん
冬籠—譬喩の歌也、略解は、未だ逢ふべき程ならぬ内より領して時を待つの意と解し、古義は、身の榮華を仰ぐ意とせり
烏羽玉の—枕詞
衣手を—枕詞
高屋—大和國城上郡か
はりつゝ—木の芽のはりて
春草を—枕詞
馬喰山—喰山は山城國綴

打手折り、多武の山霧、繁みかも、細川の瀬に、波の騷げる。

冬木成。春部戀而。殖木。實成時。片待吾等叙。
冬籠、春邊を戀ひて、植ゑし木の、實になる時を、片待つ我ぞ。

舍人皇子御歌一首

黑玉。夜霧立。衣手。高屋於。霏霺麻天爾。
烏羽玉の、夜霧ぞ立てる、「衣手を、」高屋の上に、棚引くまでに。

鷺坂作歌一首

山代。久世乃鷺坂。自神代。春者張乍。秋者散來。
山城の、久世の鷺坂、神代より、春ははりつゝ、秋は散りけり。

泉河邊作歌一首

春草。馬咋山自。越來奈流。鴈使者。宿過奈利。
春草を、馬喰山ゆ、越え來なる、雁の使は、宿り過ぐなり。

巨椋の、入江とよむなり。「射部人の」伏見が田居に、雁渡るらし。

金風。山吹瀬乃。響苗。天雲翔。鴈相鳴。

秋風に、山吹の瀬の、とよむなへ、天雲翔ける、雁に逢へるかも。

獻二弓削皇子一歌三首

佐宵中等。夜者深去良斯。鴈音。所聞空。月渡見。

小夜中と、夜は更けぬらし、雁が音の、聞ゆる空に、月渡る見ゆ。

妹當。茂苅音。夕霧。來鳴而過去。及乏。

妹があたり、繁き雁がね、夕霧に、來鳴きて過ぎぬ。乏しきまでに。

雲隱。鴈鳴時。秋山。黄葉片待。時者雖過。

雲隱り、雁鳴く時は、秋山の、黄葉片待つ、時は過ぐれど。

獻二舍人皇子一歌二首

拺手折。多武山霧。茂鴨。細川瀬。波騷祁留。

巨椋―山城國久世郡か
射部人の―枕詞
伏見―山城
金風―一說「秋風の」と訓ず、山を吹く意の枕詞
雁相鳴―一說「相」は「亘」の誤にて「かりわたるかも」
山吹の瀬―山城國宇治
茂苅音―宣長說、「茂」は「衣」の誤にて「ころもかりがね」
來鳴きて過ぎぬ―我が宿のあたりに
乏しきまでに―珍しきばかり稀に、第一句宣長說に從へば、この語は羨しき迄にの義と解すべき也
時は過ぐれど―宣長は「時は過ぎねど」の誤といひ、古義には、未だ十分紅葉せぬ故時節は既に過ぎ行けどなほ其色附くを待つ意といへり

妹が門―枕詞
入泉川―入り出づ、泉川

家思ふらむか―家に思ふらんか、即ち家人の我苦を思ふらんか也

間使―時々消息するこど、又彼此の間の使

泉河作歌一首

妹門。入出見河乃。床奈馬爾。三雪遺。未冬鴨。

妹が門、入泉川の、常滑に、み雪残れり。未だ冬かも。

名木河作歌三首

衣手乃。名木之河邊乎。春雨。吾立沾等。家念良武可。

衣手の、名木の川邊を、春雨に、我立ち濡ると、家思ふらむか。

家人。使在之。春雨乃。與久列杼吾乎。沾念者。

家人の、使なるらし、春雨の、避くれど我を、濡らす思へば。

燄干。人母在八方。家人。春雨須良乎。間使爾爲。

炙り干す、人もあれやも。家人の、春雨すらを、間使にする。

宇治河作歌二首

巨椋乃。入江響奈理。射目人乃。伏見何田非爾。鴈渡良之。

騒げども—下に、それに心の紛るゝ事なくと補ふ

旅なれば—下に、月を見て心に少しは心を慰むべきにと補ふ

妹は逢はさず—妹は逢つて下さらず

玉櫛笥—枕詞
衣手離れて—妹が袖を離れて

栲領巾の—枕詞
匂はね—匂へ

高島之。阿渡河波者。驟鞆。吾者家思。宿加奈之彌。
高島の、あと川波は、騒げども、我は家思ふ、宿り悲しみ。

客在者。三更刺而。照月。高島山。隱惜毛。
旅なれば、夜中をさして、照る月の、高島山に、隱らく惜しも。

紀伊國作歌二首

吾戀。妹相佐受。玉浦丹。衣片敷。一鴨將寐。
我が戀ふる、妹は逢はさず。玉の浦に、衣片敷き、一人かも寢む。

玉匣。開卷惜。悋夜矣。袖可禮而。一鴨將寐。
玉櫛笥、開けまく惜しき、あたら夜を、衣手離れて、一人かも寢む。

鷺坂作歌一首

細比禮乃。鷺坂山。白管自。吾爾尼保波尼。妹爾示。
栲領巾の、鷺坂山の、白躑躅、我に匂はね。妹に示さむ。

たぎる―訓「たぎつ」
玉も―もは助辭
川門―川の瀬々の水の一になりて過ぐる狹き處
亂れにけらし―川瀬の浪の碎くるをかざしの玉と見なしてよめる也
鷺坂―山城國
白鳥の―枕詞
行かな―行かん
名木河―山城國久世郡、宣長は次の歌と共に他所の歌なるを誤りて斯く題せるならんといへり
人もあれやも―人もあらんやはの反語か、又あれかしと思へどさる人もあらねばの意か
杏人―宣長說に「杏」は「京」の誤にて、二三の句「著きて漕がされ都人」と訓ずべし
高島―近江國高島郡

川の瀬の、たぎるを見れば、玉もかも、散り亂れたる、此の川門かも。

彦星。頭刺玉之。嬬戀。亂祁良志。此河瀬爾。
彦星の、かざしの玉の、妻戀に、亂れにけらし。此の川の瀬に。

鷺坂作歌一首

白鳥。鷺坂山。松影。宿而往奈。夜毛深往乎
白鳥の、鷺坂山の、松影に、宿りて行かな。夜も更け行くを。

名木河作歌二首

炙干。人母在八方。沾衣乎。家者夜良奈。覊印。
炙り干す、人もあれやも、濡衣を、家には遣らな。旅のしるしに。

在衣邊。著而榜尼。杏人。濱過者。戀布在奈利。
荒磯邊に、つきて漕ぐ海人、からびとの、濱を過ぐれば、戀しくあるなり。

高島作歌二首

我が戀ひ居れば—我が戀ひ居るに

夏冬行けや—夏と冬とが互に經行けばにや

吾刺可—一說「吾」は「君」の誤にて「きみがさすべき」と訓むべし

春山—春の山

未だふゝめり—未だ蕾めり

後居而。吾戀居者。白雲。棚引山乎。今日香越濫。

後れ居て、我が戀ひ居れば、白雲の、棚引く山を、今日か越ゆらむ。

獻二忍壁皇子一歌一首　詠二仙人形一

常之倍爾。夏冬往哉。裘。扇不放。山住人。

永久に、夏冬行けや、皮衣、扇放たぬ、山に住む人。

獻二舍人皇子一歌二首

妹手。取而引與治。捄手折。吾刺可。花開鴨。

妹が手を、取りて引きよぢ、打手折り、我がかさすべき、花咲けるかも。

春山者。散過去鞆。三和山者。未含。君待勝爾。

春山は、散り過ぎ行けども、三輪山は、未だふゝめり。君待ちがてに。

泉河邊間人宿禰作歌二首

河瀨。激乎見者。玉藻鴨。散亂而在。此河常鴨。

せの山に、黄葉常敷く、神岡の、山の黄葉は、今日か散るらむ。

山跡庭。聞往歟。大我野之。竹葉苅敷。廬爲有跡者。

大和には、聞えも行くか、おほや野の、笹葉刈敷き、庵せりとは。

木國之。昔弓雄之。響矢用。鹿取靡。坂上爾曾安留。

紀の國の、昔弓雄の、鳴矢もて、鹿とりなめし、坂の上にぞある。

城國爾。不止將往來。妻社。妻依來西尼。妻常言長柄。

紀の國に、止まず通はむ。つまの森、妻寄し來せね。妻と言ひながら。

一云。嬬賜爾毛。嬬云長柄。

右一首。或云。坂上忌寸人長作。

後人歌二首

朝裳吉。木方往君我。信土山。越濫今日曾。雨莫零根。

あさもよし、紀邊行く君が、まつち山、越ゆらむ今日ぞ、雨な降りそね。

神岡―飛鳥の神南備山

竹葉―一本「竹」の上に「小」の字あり、從ふべし

おほや野―紀伊國名草郡、一說、本文「我」は「家」の誤

弓雄―弓を善く射る人、一說「弓」は「幸」の誤にて「さつを」

鳴矢―鏑矢

とりなめし―取並べしの意ならん

つまの森―紀伊國名草郡

妻寄し來せね―妻を寄せ來させよ

妻と言ひながら―妻といふ名のまゝに

後人―從駕の人の妻か

あさもよし―枕詞

ゆらの崎、潮干にけらし、白神の、磯の浦みを、あへて漕ぎとよむ。

黒牛方。鹽干乃浦乎。紅。玉裾須蘇延。往者誰妻。

くろうし潟、潮干の浦を、紅の、玉裳裾引き、行くは誰が妻。

風莫乃。濱之白浪。徒。於斯依久流。見人無。

風なみの、濱の白浪、徒に、此處に寄り來る。見る人無しに。

一云。於斯依來藻。

右一首。山上臣憶良類聚歌林曰。長忌寸意吉麻呂應レ詔作ニ此歌一。

我背兒我。使將來歟跡。出立之。此松原乎。今日香過南。

我が背子が、使來むかと、出立ちの、此の松原を、今日か過ぎなむ。

藤白之。三坂乎越跡。白栲之。我衣手者。所沾香裳。

藤白の、三坂を越ゆと、白妙の、我が衣手は、濡れにけるかも。

勢能山爾。黄葉常敷。神岳之。山黄葉者。今日散濫。

白神―紀伊國
浦み―浦わ
あへて―舟を漕ぐにいふ詞、あへぎての意ならん、他の所は概ね阿倍の如く濁音の字を用ひたり
くろうし潟―紀伊國黒江
風莫―「莫」は「早」の誤にて「かざはや」か
於斯依來藻―「こゝに寄せ來も」この方採るべし
出立ちの―地勢の海濱などに出張りて面白き意なるべし、上の二句は此語の序
藤白―紀伊國
常敷―「常」は「落」又は「散」の誤にて「ちりしく」なるべし

朝霧に、濡れにし衣、乾かずて、一人や君が、山路越ゆらむ。

右二首。作者未詳。

大寶元年辛丑冬十月太上天皇大行天皇幸紀伊國時歌十三首

爲妹。我玉求。於伎邊有。白玉依來。於岐都白浪。

妹が爲め、我玉求む。沖邊なる、白玉寄せ來、沖つ白浪。

右一首上見既畢。但歌辭小換。年代相違。因以累載。

白崎者。幸在待。大船爾。眞梶繁貫。又將顧。

白崎は、幸く在り待て、大船に、眞楫しゞ貫き、復還り見む。

三名部乃浦。鹽莫滿。鹿島在。釣爲海人乎。見變來六。

みなべの浦、潮な滿ちそね。鹿島なる、釣する海人を、見て歸り來む。

朝開。榜出而我者。湯羅前。釣爲海人乎。見變將來。

朝開き、漕ぎ出て我は、ゆらの崎、釣する海人を、見て歸り來む。

湯羅乃前。鹽乾爾祁良志。白神之。礒浦箕乎。敢而榜動。

乾かずて—一訓「はさずして」乾かすべき妻もなく暇もなきをいふ也

君—従駕の人の妻より其の夫をさす。

太上天皇大行天皇—此八字目録になし、略解には太上天皇は持統、大行の二字は衍文とし、古義には「元明天皇の御治世の時之を記すとて、持統天皇を太上天皇といひ、文武天皇を未だ諡奉らぬ程なれば大行天皇と申すにや」といへり

白崎—紀伊國

幸く在り待て—幸くて復の行幸を待て

朝開き—朝船の帆を開きて港を出づること

ゆらの崎—紀伊國

泊瀨云々—一本「崗本天皇御製云々」

崗本宮云々—一說、「後崗本宮云々」にや

萬葉集卷第九

雜歌

泊瀨朝倉宮御宇大泊瀨幼武天皇天皇御製歌一首

暮去者。小椋山爾。臥鹿之。今夜者不鳴。寐家良霜。

夕されば、をぐらの山に、臥す鹿の、今宵は鳴かず。寢ねにけらしも。

右或本云。崗本天皇御製不ㇾ審二正指一。因以累載。

崗本宮御宇天皇幸二紀伊國一時歌二首

爲妹。吾玉拾。奥邊有。玉緣持來。奥津白浪。

妹が爲め、我玉拾ふ、沖邊なる、玉寄せ持ち來、沖つ白浪

朝霧爾。沾爾之衣。不干而。一哉君之。山道將越。

梅の花―開けていふ比喩也

消ぬべきものを―消えぬべかりしものを
長らへぬるは―生き長らへしは

手枕まかず―妹が手枕をもせずして

梅花。令落冬風。音耳。聞之吾妹乎。見良久志吉裳。
梅の花、散らす暴風の、音にのみ、聞きし我妹を、見らくしよしも。

紀少鹿女郎歌一首

久方乃。月夜乎清美。梅花。心開而。吾念有公。
久方の、月夜を清み、梅の花、心開けて、我が思へる君。

大伴田村大娘與妹坂上大娘歌一首

沫雪之。可消物乎。至今。流經者。妹爾相曾。
泡雪の、消ぬべきものを、今までに、長らへぬるは、妹に逢はむとぞ。

大伴宿禰家持歌一首

沫雪乃。庭爾零敷。寒夜乎。手枕不纏。一香聞将宿。
泡雪の、庭に降りしき、寒き夜を、手枕まかず、獨かも寝む。

官にも云々―左註の如く今宵の宴は官許ぞと也
散りこすなゆめ―梅の花よ決して散ること勿れ

藤原后―光明皇后、「后」の上に「皇」を脱す

見ませば―見てありせば

眞木―檜
小夜訪へ―「小」は發語にて、今夜は訪ひ來給へとならん、或は本文に誤字あるか

盃に、梅の花浮けて、思ふどち、飲みての後は、散りぬともよし。

和歌一首

官爾毛。縱賜有。今夜耳。將飲酒可毛。散許須奈由米。
官にも、許し給へり。今宵のみ、飲まむ酒かも、散りこすなゆめ。

右酒者官禁制稱京中閭里不レ得二集宴一。但親親一二飲樂聽許者緣レ此和人作二此發句一焉。

藤原后奉二天皇一御歌一首

吾背兒與。二有見麻世波。幾許香。此零雪之。懽有麻思。
我が背子と、二人見ませば、幾何か、此の降る雪の、嬉しからまし。

池田廣津娘子歌一首

眞木乃於上。零置有雪乃。敷布毛。所念可聞。佐夜問吾背。
眞木の上に、降り置ける雪の、しく／＼も、思ほゆるかも。小夜訪へ我が背。

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

今の如—宣長云、「これは新たに夫に逢へる比の歌にて、男の心の今の如く常にかはらずば、後まで捨らるゝ事は有まじきを、人の心は變りやすき習ひなれば、今ねもころなるも後は賴みがたしとよめるならん」

言者—一説、「言」は「吉」の誤にて、由の借字なるべし

消ぬとか言はも—戀の繁さは喩へんやうもなし、只消え失すといひ遣らんかと也、上の三句は序

如今。心乎常爾。念有者。先咲花乃。地爾將落八方。

今の如、心を常に、思へらば、先づ咲く花の、地に落ちめやも。

大伴坂上郎女雪歌一首

松影乃。淺茅之上乃。白雪乎。不令消將置。言者可聞奈吉。

松蔭の、淺茅が上の、白雪を、消たずて置かむ、事はかも無き。

冬相聞

三國眞人人足歌一首

高山之。菅葉之努藝。零雪之。消跡可曰毛。戀乃繁鷄鳩。

高山の、菅の葉凌ぎ、降る雪の、消ぬとか言はも、戀の繁けく。

大伴坂上郎女歌一首

酒杯爾。梅花浮。念共。飲而後者。落去登母與之。

うら葉―梢の葉

折りも云々―折りても見、折らず枝ながらも見たれども

今日降りし、雪に競ひて、我が宿の、冬木の梅は、花咲きにけり。

御ニ在西池邊ー肆宴歌一首

池邊乃。松之末葉爾。零雪者。五百重零敷。明日左倍母將見。

池の邊の、松のうら葉に、降る雪は、五百重降りしけ。明日さへも見む。

右一首作者未レ詳。但豎子阿倍朝臣蟲麻呂傳ニ誦之ー。

大伴坂上郎女歌一首

沫雪乃。比日續而。如此落者。梅始花。散香過南。

泡雪の、此の頃繼ぎて、斯く降れば、梅の初花、散りか過ぎなむ。

池田廣津娘子梅歌一首

梅花。折毛不折毛。見都禮杼母。今夜能花爾。尙不如家利。

梅の花、折りも折らずも、見つれども、今宵の花に、尙如かずけり。

縣犬養娘子依レ梅發レ思歌一首

我が宿の、冬木の上に、降る雪を、梅の花かと、打見つるかも。

小治田朝臣東麻呂雪歌一首

夜干玉乃。今夜之雪爾。率所沾名。將開朝爾。消者惜家牟。

ぬば玉の、今宵の雪に、いざ濡れな。明けむ朝に、消えば惜しけむ。

忌部首黒麻呂雪歌一首

梅花。枝爾可散登。見左右二。風爾亂而。雪曾落久類。

梅の花、枝にか散ると、見るまでに、風に亂れて、雪ぞ散りくる。

紀少鹿女郎梅歌一首

十二月爾者。沫雪零跡。不知可毛。梅花開。含不有而。

師走には、泡雪降ると、知らぬかも、梅の花咲く。ふゝめらずして。

大伴宿禰家持雪梅歌一首

今日零之。雪爾競而。我屋前之。冬木梅者。花開二家里。

濡れな―濡れん
消えば―一訓「けなば」

知らぬかも―「知らねかも」と訓ずべし、知らねばかの意
ふゝめらず―含みつぼみて春を待たず

降らえて｜降られて
よそへてむかも｜我によそへて此方を思ひおこし給はんかの意か、又は人が我と君との間に何か有る樣にいひよそへんかとの意にや

たなぎらひ｜雲の棚引き曇りて
降らぬか｜降れかし
代に｜代りに其雪を梅の花に
そへてだに見む｜よそへてだに見ん

いつ柴｜繁きしば原
降らまくを見む｜降らんを見ん

こきれつ｜しごき入れつ
染まば染むとも｜一訓「しまばしむとも」下に、それも更に厭はじと補ふ

泡雪に、降らえて咲ける、梅の花、君許遣らば、よそへてむかも。

安倍朝臣奥道雪歌一首

棚霧合。雪毛零奴可。梅花。不開之代爾。曾倍而谷將見。

たなぎらひ、雪も降らぬか。梅の花、咲かぬが代に、そへてだに見む。

若櫻部朝臣君足雪歌一首

天霧之。雪毛零奴可。灼然。此五柴爾。零巻乎將見。

天ぎらし、雪も降らぬか。著く、此のいつ柴に、降らまくを見む。

三野連石守梅歌一首

引攀而。折者可落。梅花。袖爾古寸入津。染者雖染。

引き攀ぢて、折らば散るべみ、梅の花、袖にこきれつ。染まば染むとも。

巨勢朝臣宿奈麻呂雪歌一首

吾屋前之。冬木乃上爾。零雪乎。梅花香常。打見都流香裳。

黒木—皮のつきたるまゝの木
天皇—聖武
ほどろ〳〵に—斑に、古義の説によれば離れ〳〵にはら〳〵と
殘れる雪を—殘れる雪に
紛へ—人に見まがへしめ

天皇御製歌一首

青丹吉。奈良乃山有。黒木用。造有室戸者。雖居座不飽可聞。
青丹よし、奈良の山なる、黒木もて、造れる宿は、座せど飽かぬかも。
右聞レ之。御ニ在左大臣長屋王佐保宅一肆宴御製。

太宰帥大伴卿冬日見レ雪憶レ京歌一首

沫雪。保杼呂保杼呂爾。零敷者。平城京師。所念可聞。
泡雪の、ほどろ〳〵に、降りしけば、奈良の都し、思ほゆるかも。

太宰帥大伴卿梅歌一首

吾岳爾。盛開有。梅花。遺有雪乎。亂鶴鴨。
我が岡に、盛りに咲ける、梅の花、殘れる雪を、紛へつるかも。

角朝臣廣辨雪梅歌一首

沫雪爾。所落開有。梅花。君之許遣者。與曾倍氏牟可聞。

の情禁じ難くて詠めるにや
荻にや―荻故に
水澁―水垢
引板―猪鹿などを驚かさんために引きて鳴らす板
初飯―本文又「わさいひ」とも訓ず
おほくちの―枕詞
眞神の原―飛鳥
家もあらなくに―宿るべき家も無きものを
太上天皇―元正
室者―「室」一本「家」、一説「室戸者」の誤にて「やどは」
逆葺き―穗を下方に向けて葺くをいふ

衣手に、水澁附くまで、植ゑし田を、引板我はへ、守れるくるし。

尼作二頭句一并大伴宿禰家持所レ誂レ尼續二末句一等和歌一首

佐保河之。水乎塞上而。殖之田乎。尼作 苅早飯者。獨奈流倍思。家持續
佐保川の、水を堰き上げて、植ゑし田を、刈る初飯は、一人なるべし。

冬雜歌

舍人娘子雪歌一首

大口能。眞神之原爾。零雪者。甚莫零。家母不有國。
おほくちの、眞神の原に、降る雪は、甚くな降りそ。家もあらなくに。

太上天皇御製歌一首

波太須珠寸。尾花逆葺。黑木用。造有室者。迄萬代。
旗薄、尾花逆葺き、黑木以て、造れる室は、萬代までに。

容花—容花を見るにつけても、容花又貌花にも作る、ひるがほならんといふ

日にけに—日々に

手もすまに—手を休める間もなく一生懸命に、此歌と次の歌とは契沖の言へる如く、幼少より育てし人の尼となりて後戀々

高圓之。野邊乃容花。面影爾。所見乍妹者。忘不勝裳。
高圓の、野邊の容花、面影に、見えつゝ妹は、忘れかねつも。

大伴宿禰家持贈ニ安倍女郎ニ歌一首

今造。久邇能京爾。秋夜乃。長爾獨。宿之苦左。
今造る、久邇の都に、秋の夜の、長きに獨り、寢るが苦しさ。

大伴宿禰家持從ニ久邇京ニ贈下留ニ寧樂宅ニ坂上大娘上歌一首

足日木乃。山邊爾居而。秋風之。日異吹者。妹乎之曾念。
足引の、山邊に居りて、秋風の、日にけに吹けば、妹をしぞ思ふ。

或者贈レ尼歌二首

手母須麻爾。殖之芽子爾也。還者。雖見不飽。情將盡。
手もすまに、植ゑし萩にや、かへりては、見れども飽かず、心盡さむ。

衣手爾。水澁付左右。殖之田乎。引板吾波倍。眞守有栗子。

いたみ〳〵―「叩叩」は「叮叮」の誤にて「ねもごろに」か
さ寢し夜や―やは反語
山鳥こそは云々―山鳥は雌雄峰を隔てゝ住むといふ
こゝ思へば―これを思へば
そこ故に―それ故に
遊ばひ行けど―一説「遊び歩けど」
花のみ―一説「花のみし」

鳥許曾婆。峯向爾。嬬問爲云。打蟬乃。人有我哉。如何爲跡可。一日一夜毛。離居而。嘆戀良武。許己念者。胸許曾痛。其故爾。情奈具夜登。高圓乃。山爾毛野爾母。打行而。遊往杼。花耳。丹穗日手有者。毎見。益而所思。奈何爲而。忘物曾。戀云物乎。

いたみ〳〵、物を思へば、言はむ術、爲む術もなし。妹と我、手携りて、朝には、庭に出で立ち、夕には、床打拂ひ、白妙の、袖差交へて、さ寢し夜や、常に有りける。足引の、山鳥こそは、峰向に、妻問すとへ。空蟬の、人なる我や、なに爲とか、一日一夜も、離り居て、嘆き戀ふらむ。こゝ思へば、胸こそ痛め。そこ故に、心和ぐやと、高圓の、山にも野にも、打行きて、遊ばひ行けど、花のみ、匂ひてあれば、見る毎に、まして思ほゆ。如何にして、忘れむものぞ。戀とふものを。

反歌

秋風之。寒比日。下爾將服。妹之形見跡。可都毛思努播武。

秋風の、寒き此の頃、下に著む、妹が形見と、且も偲ばむ。

右三首。天平十一年己卯秋九月往來。

大伴宿禰家持攀二非時藤花幷芽子黃葉二物一贈二坂上大孃一歌二首

吾屋戶之。非時藤之。目頰布。今毛見牡鹿。妹之咲容乎。

我が宿の、時じく藤の、珍しく、今も見てしが、妹が笑まひを。

吾屋前之。芽子乃下葉者。秋風毛。未吹者。如此曾毛美照。

我が宿の、萩の下葉は、秋風も、未だ吹かねば、斯くぞもみでる。

右二首。天平十二年庚辰夏六月往來。

大伴宿禰家持贈二坂上大孃一歌一首幷短歌

叩叩。物乎念者。將言爲便。將爲爲便毛奈之。妹與吾。手携拂而。旦者。庭爾出立。夕者。床打拂。白細乃。袖指代而。佐寢之夜也。常爾有家類。足日木能。山

且も—尙又其上に

時じく—時ならず咲きたる

未だ吹かねば—未だ吹かぬに

斯くぞもみでる—斯くぞもみぢせる、美しさ珍らしさにまづ手折りて御身にまゐらすと也

手携拂而—一本「拂」なし

今も見てしが—曩に相見し折の如くあの美しき姿を今も見たき哉
妹—坂上大孃にて、實の妹也
妹を懸けつゝ—黄葉を見せまほしくて妹を心に懸けつゝ
大娘—娘は孃に同じ
吾之蒔有—「蒔」一本「業」「わがなれる」と訓みて、なりはひにせる意也
穗立—穗
なると造れる—「なりと造れる」と訓じたる古義の方可ならん、なりはひとして造れる

大伴田村大孃與二坂上大孃一歌二首

吾屋戸乃。秋之芽子開。夕影爾。今毛見師香。妹之光儀乎。
我が宿の、秋の萩咲く、夕影に、今も見てしが、妹が姿を。

吾屋戸爾。黄變蝦手。毎見。妹乎懸管。不戀日者無。
我が宿に、もみづる楓、見る毎に、妹を懸けつゝ、戀ひぬ日は無し。

坂上大娘秋稻蘰贈二大伴宿禰家持一歌一首

吾之蒔有。早田之穗立。造有。蘰曾見乍。師弩波世吾背
我が蒔ける、早稻田の穗立、造りたる、蘰ぞ見つゝ、忍ばせ我が背。

大伴宿禰家持報贈歌一首

吾妹兒之。業跡造有。秋田。早穗乃蘰。雖見不飽可聞。
我妹子が、なると造れる、秋の田の、早稻穗の蘰、見れど飽かぬかも。

又報下脱二著身衣一贈中家持上歌一首

うれわゝらばに—ぼさぼさと亂れたる末葉か、略解には「はぎの末にしげくむき亂れたる露をいふ」といへり

玉桙の—枕詞
遠けど—遠けれど

新玉の—枕詞
月立つ—一ト月の日が經過する

萩花—古義「萩が花」

玉爾貫。不令消賜良牟。秋芽子乃。宇禮和和良葉爾。置有白露。
玉に貫き、消たず賜ばらむ。秋萩の、うれわゝらばに、置ける白露。

大伴家持至姑坂上郎女竹田庄作歌一首

玉桙乃。道者雖遠。愛哉師。妹乎相見爾。出而曾吾來之。
玉桙の、道は遠けど、はしきやし、妹を逢見に、出でてぞ我が來し。

大伴坂上郎女和歌一首

荒玉之。月立左右二。來不益者。夢西見乍。思曾吾勢思。
新玉の、月立つまでに、來まさねば、夢にし見つゝ、思ひぞ我がせし。

右二首。天平十一年己卯秋八月作。

巫部麻蘇娘子歌一首

吾屋前乃。芽子花咲有。見來益。今二日許。有者將落。
我が宿の、萩花咲けり、見に來ませ。今二日ばかり、あらば散りなむ。

其の初雁の云々―御心の程を僅かばかりの御消息なりとも聞えさせ給へと也、雁の使の語は前漢蘇武の故事に出づ
天皇―聖武
おほの浦―遠江國
ゆたけく―ゆたのたゆたになどいふに同じ、あう思ひかう思ひ心安からず思ふをいふ
有りこせぬかも―有れかし
秋萩……風吹きて―序

九月之。其始雁乃。使爾毛。念心者。可聞來奴鴨。
長月の、其の初雁の、使にも、思ふ心は、聞え來ぬかも。

天皇賜報和御歌一首

大乃浦之。其長濱爾。緣流浪。寬公乎。念比日。
おほの浦の、其の長濱に、寄する浪、ゆたけく君を、思ふ此の頃。

笠女郎贈二大伴宿禰家持一歌一首

毎朝。吾見屋戸乃。瞿麥之。花爾毛君波。有許世奴香裳。
朝毎に、我が見る宿の、撫子の、花にも君は、有りこせぬかも。

山口女王贈二大伴宿禰家持一歌一首

秋芽子爾。置有露乃。風吹而。落涙者。留不勝都毛。
秋萩に、置きたる露の、風吹きて、落つる涙は、止め兼ねつも。

湯原王贈二娘子一歌一首

高圓の、秋の野の上の、撫子の花、うら若み、人のかざしゝ、撫子の花。

笠縫女王歌一首

足日木乃。山下響。鳴鹿之。事乏可母。吾情都末。

足引の、山下とよみ、鳴く鹿の、言乏しかも。我が心夫。

石川賀係女郎歌一首

神佐夫登。不許者不有。秋草乃。結之紐乎。解者悲哭。

神さぶと、否にはあらず。秋草の、結びし紐を、解かば悲しも。

賀茂女王歌一首 長屋王之女、母曰阿倍朝臣也

秋野乎。旦往鹿乃。跡毛奈久。念之君爾。相有今夜香。

秋の野を、朝行く鹿の、跡も無く、思ひし君に、逢へる今宵か。

右歌或云。椋橋部女王。或云。笠縫女王作。

遠江守櫻井王奉二天皇一歌一首

て改む、又干は末の誤にても有べし」といへり

高圓の―此歌の如く五七七五七七の形式なるを旋頭歌といふ

足引の……鹿の―序

言乏しかも―其物言ふ聲の愛らしくしみ〲心に感ずる意ならん「言」或は「聲」の誤なるべきか

我が心夫―我が心に夫と思ひ定めし人

神さぶと―年老いたりとて

秋草の云々―「秋草の」は結ぶといふ爲めの枕詞なるべし、老いし身の今は男に接せじと一旦結びし此紐を解かんが悲しき也の意か「解かば」古義には「解くは」

秋……鹿の―「跡」の序

跡も無く―一度絶えて跡方もなく

今宵か―今宵かな

君待つと—次の歌と共に四卷にも出づ

秋萩の……露の—「消」の序

戀ひつゝあらずは—戀ひつゝあらんよりは

秋萩凌ぎ—秋萩をおし分け

戀ふらく—戀ふる事は

下壯香見—略解に「下今本干とあり、一本により

君待つと、我が戀ひ居れば、我が宿の、簾動かし、秋の風吹く。

鏡王女作歌一首

風乎谷。戀者乏。風乎谷。將來常思待者。何如將嘆。

風をだに、戀ふるはともし、風をだに、來むとし待たば、如何嘆かむ。

弓削皇子御歌一首

秋芽子之。上爾置有。白露乃。消可毛思奈萬思。戀管不有者。

秋萩の、上に置きたる、白露の、消かも死なまし、戀ひつゝあらずは。

丹比眞人歌一首 名闕

宇陀乃野之。秋芽子師弩藝。鳴鹿毛。妻爾戀樂苦。我者不益。

宇陀の野の、秋萩凌ぎ、鳴く鹿も、妻に戀ふらく、我には增さじ。

丹生女王贈二太宰帥大伴卿一歌一首

高圓之。秋野上乃。瞿麥之花。下壯香見。人之挿頭師。瞿麥之花。

荒るらく—荒るらが

此の頃の、朝けに聞けば、足引の、山をとよもし、さ牡鹿鳴くも。

右二首。天平十五年癸未八月十六日作。

大原眞人今城傷惜寧樂故鄕歌一首

秋去者。春日山之。黃葉見流。寧樂乃京師乃。荒良久惜毛。

秋されば、春日の山の、黃葉見る、奈良の都の、荒るらく惜しも。

大伴宿禰家持歌一首

高圓之。野邊秋芽子。比日之。曉露爾。開兼可聞。

高圓の、野邊の秋萩、此の頃の、曉露に、咲きにけむかも。

秋相聞

額田王思近江天皇作歌一首

君待跡。吾戀居者。我屋戸乃。簾令動。秋之風吹。

胸分けに云々—胸にて押分けたるが爲めに散りたるか其れとも又既に盛り過ぎて自然と散りたるか、兎に角惜しき事かなと也

波奈—一說「波太」の誤

珍しく—古義「珍しき」

相とよむ—盛に反響する

一人のみして—只一人聞かん事の厭かず寂しき事よ

狹尾牡鹿乃。胷別爾可毛。秋芽子乃。散過鷄類。盛可毛行流。
さ牡鹿の、胸分けにかも、秋萩の、散り過ぎにける、盛りかも去ぬる。

右天平十五年癸未秋八月見二物色一作。

内舍人石川朝臣廣成歌二首

妻戀爾。鹿鳴山邊之。秋芽子者。露霜寒。盛須疑由君。
妻戀に、鹿鳴く山邊の、秋萩は、露霜寒み、盛り過ぎ行く。

目頬布。君之家有。波奈須爲寸。穗出秋乃。過良久惜母。
珍しく、君が家なる、花薄、穗に出る秋の、過ぐらく惜しも。

大伴宿禰家持鹿鳴歌二首

山妣姑乃。相響左右。妻戀爾。鹿鳴山邊爾。獨耳爲手。
山彦の、相とよむまで、妻戀に、鹿鳴く山邊に、一人のみして。

頃者之。朝開爾聞者。足日木篦。山乎令響。狹尾牡鹿鳴哭。

王。忍坂王。後賜姓大原眞人赤麻呂也歌子者田口朝臣家守。河邊朝臣東人。置始連長谷等十數人也。

大伴宿禰像見歌一首

秋芽子乃。枝毛十尾二。降露乃。消者雖消。色出目八方。

秋萩の、枝もとをゝに、置く露の、消なば消ぬとも、色に出でめやも。

置く露の―古義は「ふる露の」と訓ぜり、「の」は「の如く」の意にて、上よりこゝ迄は「消なば」といふ爲の序

大伴宿禰家持到娘子門作歌一首

妹家之。門田乎見跡。打出來之。情毛知久。照月夜鴨。

妹が家の、門田を見むと、打出來し、心も著く、照る月夜かも。

心も著く―心に思ひたるだけの甲斐ありて

大伴宿禰家持秋歌三首

秋野爾。開流秋芽子。秋風爾。靡流上爾。秋露置有。

秋の野に、咲ける秋萩、秋風に、靡ける上に、秋の露置けり。

棹牡鹿之。朝立野邊乃。秋芽子爾。玉跡見左右。置有白露。

さ牡鹿の、朝立つ野邊の、秋萩に、玉と見るまで、置ける白露。

過ぎまく惜しみ—散り過ぎん事の惜しさにあらぬか—あれかし

然とあらぬ—眞淵說に「然」は「歎」の誤にて「もだもあらず」と訓ず、だまつては居ずいふの義にて「いほ」の枕詞となる也と

五百代小田—拾芥抄「方六尺爲ニ一步ニ云々、積ニ七十二步ニ爲ニ十代一、百四十步爲ニ二十代ニ云々、五十代爲ニ一段ニ」

田廬—田の中の伏屋

紅に匂へる山—燃ゆるが如き滿山の紅葉

黄葉の、過ぎまく惜しみ、思ふどち、遊ぶ今宵は、明けずもあらぬか。

右一首。內舍人大伴宿禰家持。

以前冬十月十七日。集ニ於右大臣橘卿之舊宅ニ宴飲也。

大伴坂上郎女竹田庄作歌二首

然不有。五百代小田乎。苅亂。田廬爾居者。京師所念。

然とあらぬ、五百代小田を、刈り亂り、田廬に居れば、都し思ほゆ。

隱口乃。始瀨山者。色附奴。鍾禮乃雨者。零爾家良思母。

隱口の、泊瀨の山は、色附きぬ。時雨の雨は、降りにけらしも。

右天平十一年己卯秋九月作。

佛前唱歌一首

思具禮能雨。無間莫零。紅爾。丹保散流山之。落卷惜毛。

時雨の雨、間無くな降りそ。紅に、匂へる山の、散らまく惜しも。

右冬十月皇后宮之維摩講。終日供ニ養大唐高麗等種種音樂一。爾乃唱ニ此謌詞一。彈レ琴者市原

足引の云々―圖に紅葉を賞するにつけて見る人なくて寂しく散りて流るゝ山の黄葉を思ひやりたるなり

にほす―匂はす
散らば散るとも―下にうらめしくは思はじと補ふ

妹―宴席に出遇へる侍女などをいふにや、宣長は「今夜」(コヨヒ)の誤かといへり

足引の、山の黄葉、今宵もか、浮きて去ぬらむ。山川の瀬に。

右一首。大伴宿禰書持。

平山乎。令丹黄葉。手折來而。今夜挿頭都。落者雖落。

奈良山を、にほす黄葉、手折り來て、今宵かざしつ。散らば散るとも。

右一首。之手代人名。

露霜爾。逢有黄葉乎。手折來而。妹挿頭都。後者落十方。

露霜に、逢へる黄葉を、手折り來て、妹がかざしつ。後は散るとも。

右一首。秦許遍麻呂。

十月。鐘禮爾相有。黄葉乃。吹者將落。風之隨。

神無月、時雨に逢へる、黄葉の、吹かば散りなむ。風のまにまに。

右一首。大伴宿禰池主。

黄葉乃。過麻久惜美。思共。遊今夜者。不開毛有奴香。

君が黃葉―君が家の黃葉

布將見跡―「布」は「希」の誤

取れば散る―もろく散り易きをいふ

散らまく惜しみ―散らんが惜しさに

黃葉を、散らす時雨に、濡れて來て、君が黃葉を、かざしつるかも。

右一首。久米女王。

布將見跡。吾念君者。秋山。始黃葉爾。似許曾有家禮。

珍しと、我が思ふ君は、秋山の、初黃葉に、似てこそありけれ。

右一首。長忌寸娘。

平山乃。峯之黃葉。取者落。鐘禮能雨師。無間零良志。

奈良山の、峰の黃葉、取れば散る。時雨の雨し、間無く降るらし。

右一首。內舍人縣犬養宿禰吉男。

黃葉乎。落卷惜見。手折來而。今夜挿頭津。何物可將念。

黃葉を、散らまく惜しみ、手折り來て、今宵かざしつ。何をか思はむ。

右一首。縣犬養宿禰持男。

足引乃。山之黃葉。今夜毛加。浮去良武。山河之瀨爾。

見えつゝもとな―見えていとゞ詮なき物思ひをさする事よ

散りなば惜しと―一訓「散らば惜しみと」

布將見―「布」は「希」の誤

朝戸開けて、物思ふ時に、白露の、置ける秋萩、見えつゝもとな。

棹牡鹿之。來立鳴野之。秋芽子者。露霜負而。落去之物乎。

さ牡鹿の、來立ち鳴く野の、秋萩は、露霜負ひて、散りにしものを。

右二首。文忌寸馬養。

天平十年戊寅秋八月二十日。

橘朝臣奈良麻呂結二集宴一歌十一首

不手折而。落者惜常。我念之。秋黄葉乎。挿頭鶴鴨。

手折らずて、散りなば惜しと、我思ひし、秋の黄葉を、かざしつるかも。

布將見。人爾令見跡。黄葉乎。手折曾我來師。雨零久仁。

珍しき、人に見せむと、黄葉を、手折りぞ我が來し。雨の降らくに。

右二首。橘朝臣奈良麻呂。

黄葉乎。令落鐘禮爾。所沾而來而。君之黄葉乎。挿頭鶴鴨。

雲上爾。鳴都流鴈之。寒苗。芽子乃下葉者。黄變可毛。

雲の上に、鳴きつる雁の、寒きなへ、萩の下葉は、もみぢつるかも。

右二首。

此岳爾。小牡鹿履起。宇加涅良比。可聞可開爲良久。君故爾許曾。

此の岡に、牡鹿踏み起し、うか狙ひ、かもかくすらく、君故にこそ。

右一首。長門守巨曾倍朝臣津島。

秋野之。草花我末乎。押靡而。來之久毛知久。相流君可聞。

秋の野の、尾花がうれを、押なべて、來しくも著く、逢へる君かも。

今朝鳴。而行之鴈鳴。寒可聞。此野乃淺茅。色付爾家類。

今朝鳴きて、行きし雁がね、寒みかも、此の野の淺茅、色附きにける。

右二首。阿倍朝臣蟲麻呂。

朝扉開而。物念時爾。白露乃。置有秋芽子。所見喚鷄本名。

寒きなへ―寒きにつれて

可聞可開爲良久―「萬智乍居良久(マチツヽヲラク)」の誤か、又、楫取魚彦は「開」は「聞」の誤にて「かもかもすらく」と訓ずべしといへり

うか狙ひ―窺ひ狙ひ

尾花がうれ―尾花の末

押なべて―押靡かせて

來しくも―來しも「く」は助辭

色附きにける―「ける」は三句の「か」の結びといふ

雨づつみ―雨籠り

貫くものにもが―貫くべきものにもあれかし

利上―「利」は「村」の誤か

賤しけど―賤しけれど

我妹が宿―この歌は旅の歌にて、我妹が宿は即ち我が故郷の家をさすか

たもとほり來つ―まはり道して辛うじて來つ

此處にありて、春日や何處、雨づつみ、出でて行かねば、戀ひつゝぞ居る。

春日野爾。鐘禮零所見。明日從者。黄葉頭刺牟。高圓乃山。

春日野に、時雨降る見ゆ。明日よりは、黄葉かざさむ。高圓の山。

大伴家持白露歌一首

吾屋戸乃。草花上之。白露乎。不令消而玉爾。貫物爾毛我。

我宿の、尾花が上の、白露を、消たずて玉に、貫くものにもが。

大伴利上歌一首

秋之雨爾。所沾乍居者。雖賤。吾妹之屋戸志。所念香聞。

秋の雨に、濡れつゝ居れば、賤しけど、我妹が宿し、思ほゆるかも。

右大臣橘家宴歌七首

雲上爾。鳴奈流鴈之。雖遠。君將相跡。手回來津。

雲の上に、鳴くなる雁の、遠けども、君に逢はむと、たもとほり來つ。

雨間もおかず—雨のふる間もいとひなく

穗立—稻の穗の立ち並びたるをいふ、この句迄凡て序

色附きにけり—黄葉せしをいふ

又更に云々—又更に曇ること勿れ

大伴家持秋歌四首

久堅之。雨間毛不置。雲隱。鳴曾去奈流。早田鴈之哭。

久方の、雨間もおかず、雲隱り、鳴きぞ行くなる。早稻田雁がね。

雲隱。鳴奈流鴈乃。去而將居。秋田之穗立。繁之所念。

雲隱り、鳴くなる雁の、行きて居む、秋田の穗立、繁くし思ほゆ。

雨隱。情欝悒。出見者。春日山者。色付二家利。

雨籠り、心いぶせみ、出で見れば、春日の山は、色附きにけり。

雨晴而。淸照有。此月夜。又更而。雲勿田菜引。

雨晴れて、淸く照りたる、此の月夜、又更にして、雲な棚引き。

右四首。天平八年丙子秋九月作。

藤原朝臣八束歌二首

此間在而。春日也何處。雨障。出而不行者。戀乍曾乎流。

之知左寸—一說、「乏知在可」(トモシクモアルカ)」の誤か、又「ともしきまでに」か
誰聞きつ—誰か聞きつる、一說、本文「都」は「跡」の誤にて「たれきけと」
問はせる—問ひ給へる
和歌—コタヘウタ、但「和」字衍といふ
ほと〳〵散らしつるかも—すんでの事に散らしてしまふ所であつたによくこそ見に來つれと也

巫部麻蘇娘子鴈歌一首

誰聞都。從此間鳴渡。鴈鳴乃。嬬呼音乃。之知左寸。

誰聞きつ。こゆ鳴き渡る、雁がねの、妻呼ぶ聲の、行くを知らさす。

大伴家持和歌一首

聞津哉登。妹之問勢流。鴈鳴者。眞毛遠。雲隱奈利。

聞きつやと、妹が問はせる、雁が音は、誠も遠く、雲隱るなり。

日置長枝娘子歌一首

秋付者。尾花我上爾。置露乃。應消毛吾者。所念香聞。

秋づけば、尾花が上に、置く露の、消ぬべくも我は、思ほゆるかも。

大伴家持和歌一首

吾屋戸乃。一村芽子乎。念兒爾。不令見殆。令散都類香聞、

我が宿の、一村萩を、思ふ兒に、見せずほとほと、散らしつるかも。

ゆきゝの岡―(一)大和國か(二)本文「逝回岳」は「ゆきたむをか」と訓み、岡のゆきめぐれる所をいひて地名にはあらじ

鶉鳴く―枕詞

思ふ人どち―思ふ人々と共に

始見之埼乃―一說「始」は「跡」、「埼」は「丘邊」の誤にて「とみのをかべの」さて「妹が目を」は跡見の枕詞

ともしさ―珍しさ、面白き

明日香川、ゆきゝの岡の、秋萩は、今日降る雨に、散りか過ぎなむ。

右一首。丹比眞人國人。

鶉鳴。古郷之。秋芽子乎。思人共。相見都流可聞。

鶉鳴く、古りにし里の、秋萩を、思ふ人どち、相見つるかも。

秋芽子者。盛過乎。徒爾。頭刺不挿。還去牟跡哉。

秋萩は、盛り過ぐるを、徒に、かざしに插さず、歸りなむとや。

右二首。沙彌尼等。

大伴坂上郎女跡見田庄作歌二首

妹目乎。始見之埼乃。秋芽子者。此月其呂波。落許須莫湯目。

妹が目を、みそめの崎の、秋萩は、此の月頃は、散りこすなゆめ。

吉名張乃。猪養山爾。伏鹿之。嬬呼音乎。聞之登聞思佐。

よなばりの、猪養の山に、伏す鹿の、妻呼ぶ聲を、聞くがともしさ。

時雨の雨、間無くし降れば、三笠山、木ぬれ遍く、色附きにけり。

大伴家持和歌一首

皇之。御笠乃山能。黄葉。今日之鐘禮爾。散香過奈牟。
大君の、三笠の山の、黄葉は、今日の時雨に、散りか過ぎなむ。

安貴王歌一首

秋立而。幾日毛不有者。此宿流。朝開之風者。手本寒母。
秋立ちて、幾日もあらねば、此の寝ぬる、朝けの風は、袂寒しも。

忌部首黒麻呂歌一首

秋田苅。借廬毛未。壊者。鴈鳴寒。霜毛置奴我二。
秋田刈る、假廬も未だ、毀たねば、雁が音寒し。霜も置きぬがに。

故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首

明日香河。逝回岳之。秋芽子者。今日零雨。落香過奈牟。

三笠山—大和國
木ぬれ—梢
大君の—枕詞
あらねば—あらぬに
此の寝ぬる云々—寝ぬる夜の明けし此の朝は云々
毀たねば—毀たぬに
故郷豊浦寺—豊浦は推古天皇の都せし所、今の都は奈良なれば故郷といへり

散りの紛ひに—散り亂るるに紛れて妻を見失ひて

雨令零收—誤字あるか、古義には二三の句を「鐘禮能雨之零敷耳」と整理して「しぐれのあめのふりしくに」と訓じたれど、なほ可勘

朝香の山—陸奥か

しぬに—しなゆるばかりに

鳴くも—鳴くかも

爲め。

湯原王鳴鹿歌一首

秋芽之。落乃亂爾。呼立而。鳴奈流鹿之。音遙者。

秋萩の、散りの紛ひに、呼び立てて、鳴くなる鹿の、聲の遙さ。

市原王歌一首

待時而。落鐘禮能。雨令零收。朝香山之。將黄變。

時待ちて、落つる時雨の、雨止めて、朝香の山の、黄葉しぬらむ。

湯原王蟋蟀歌一首

暮月夜。心毛思努爾。白露乃。置此庭爾。蟋蟀鳴毛。

夕月夜、心もしぬに、白露の、置く此の庭に、蟋蟀鳴くも。

衛門大尉大伴宿禰稻公歌一首

鐘禮能雨。無間零者。三笠山。木末歷。色附爾家里。

附目緘結跡—一本「目」を「固」とし、又一本「結」なし、こゝは「附」は「脚」の誤にて「脚固緘結跡」を「あゆひつくる」と訓まんか、即川を渡らんとて足結をよくつくらふ意、一說「緘結跡」は「なだすと」と訓むべきか、なだすは正すの義か

川し有れば—一訓「川なれば」

あふさわに—(一)あわてふためきて(二)物語文の「おほざふに」といふ詞に同じ、即ち大方なみ〳〵の事に思ひての義

宇都呂波猷—「呂」の下「布」を脱す

奧手なる—遲れて咲く花

跡見庄—城上郡

射部立てて—枕詞

ふさ手折り—ふさやかに手折り

妹許登。吾去道乃。河有者。附目緘結跡。夜更降家類。

妹許と、我行く道の、川し有れば、人目つゝむと、夜ぞ更けにける。

藤原朝臣八束歌一首

棹四香能。芽二貫置有。露之白珠。相佐和仁。誰人可毛。手爾將卷知布。

さ牡鹿の、萩に貫き置ける、露の白玉。あふさわに、誰の人かも、手に卷かむちふ。

大伴坂上郎女晩芽子歌一首

咲花毛。宇都呂波猷。奧手有。長意爾。尙不如家里。

咲く花も、移ろふは憂し。奧手なる、長き心に、尙如かずけり。

典鑄正紀朝臣鹿人至衞門大尉大伴宿禰稻公跡見庄作歌一首

射目立而。跡見乃岳邊之。瞿麥花。總手折。吾者持將去。寧樂人之爲。

射部立てて、跡見の岡邊の、撫子の花、ふさ手折り、我は持て往なむ、奈良人の

さき萩—初萩

花妻問ひに—古義には「花を妻問にといふなり花ツマはすみてよむべし花妻をとひにと云ふにはあらず」といへる、十分考慮すべき說也、但、略解に「芽子の咲く頃鹿の其芽子原に馴るゝものなれば芽子を鹿の妻として花つまとはいへり」といふが普通の說なり、平安朝以後の歌はこの意に詠めるが多かり

移し—草木の花を紙などに染め置きていつにても絹にうつし染むる料とするもの

水鳥の—青羽といはん料、青葉の山は地名にあらず

思ひますらむ—思ひいますらん

心ゆも—心よりも

袖續ぐ—袖差し交ふる、一說「續」は「纏」の誤にて「そでまく」か

鳴かずともよし—鳴かずもあれかし

我が岡に、さ牡鹿來鳴く。さき萩の、花妻問ひに、來鳴くさ牡鹿。

吾岳之。秋芽花。風乎痛。可落成。將見人裳欲得。

我が岡の、秋萩の花、風をいたみ、散るべくなりぬ。見む人もがも。

三原王歌一首

秋露者。移爾有家里。水鳥乃。青羽乃山能。色附見者。

秋の露は、移しなりけり。水鳥の、青葉の山の、色附く見れば。

湯原王七夕歌二首

牽牛之。念座良武。從情。見吾辛苦。夜之更降去者。

彦星の、思ひますらむ、心ゆも、見る我苦し。夜の更け行けば。

織女之。袖續三更之。五更者。河瀨之鶴者。不鳴友吉。

棚機の、袖續ぐ宵の、曉は、川瀨の田鶴は、鳴かずともよし。

市原王七夕歌一首

穗田―稻の穗に出でし田
闇なるに―一訓「くらけくに」
夜のほどろにも―夜の程にも、古義には、夜の離れて未だ闇きと明くなるとの間を云ふといへり
朝け―朝明け
聞きしなへ―聞きしと共に

山上臣憶良詠二秋野花一二首

秋野爾。咲有花乎。指折。可伎數者。七種花。其一

秋の野に、咲きたる花を、指折り、かき數ふれば、七種の花。

芽之花。乎花葛花。瞿麥之花。姫部志。又藤袴。朝貌之花。其二

萩が花、尾花葛花、撫子の花、女郎花、又藤袴、朝顔の花。

天皇御製歌二首

秋田乃。穗田乎鴈之鳴。闇爾。夜之穗杼呂爾毛。鳴渡可聞。

秋の田の、穗田を雁がね、闇なるに、夜のほどろにも、鳴き渡るかも。

今朝乃旦開。鴈之鳴寒。聞之奈倍。野邊能淺茅曾。色附丹來。

今朝の朝け、雁が音寒く、聞きしなへ、野邊の淺茅ぞ、色附きにける。

太宰帥大伴卿歌二首

吾岳爾。棹牡鹿來鳴。先芽之。花嬬問爾。來鳴棹牡鹿。

草枕―枕詞
行き觸れば―行き觸れなば
匂ひぬべくも―その著たる衣も染まりぬべくも

折禮―「折」の上に「手」を脫せしか、一說、「禮」は「那」の誤にて「をらな」

待つなへに―待つに連れて
面―面わの義なるべし、別に、本文「於毛也者將見」は「於毛世者將見」の誤にて「おともせばみむ、あきかぜのふけ」か、といふ一說、辭解にあれど、古義に其不可なる由を辨じたり
宵に逢ひて云々―「なばり」といはん序、逢ひての朝のきまり惡さにかくれるとの義より序とせる也

草枕、旅行く人も、行き觸れば、匂ひぬべくも、咲ける萩かも。

伊香山。野邊爾開有。芽子見者。公之家有。尾花之所念。
保香山、野邊に咲きたる、萩見れば、君が家なる、尾花し思ほゆ。

石川朝臣老夫歌一首

娘部志。秋芽子折禮。玉桙乃。道去裹跡。爲乞兒。
女郎花、秋萩手折れ。玉桙の、道行き裹と、乞はむ兒の爲め。

藤原宇合卿歌一首

我背子乎。何時曾旦今登。待苗爾。於毛也者將見。秋風吹。
我が背子を、何時ぞ今かと、待つなへに、面は見えむ。秋風の吹く

緣達師謌一首

暮相而。朝面羞。隱野乃。芽子者散去寸。黃葉早續也。
宵に逢ひて、朝面無み、隱野の、萩は散りにき。黃葉早繼げ。

浮津―（一）天上のことなればいふか（二）本文「浮」は「御」の誤にて「御津の浪の音」

初めて―初として

玉櫛笥―枕詞

伊香山―近江國

霞立。天河原爾。待君登。伊往還程爾。裳襴所沾。

霞立つ、天の河原に、君待つと、い通ふ程に、裳の裾濡れぬ。

天河。浮津之浪音。佐和久奈里。吾待君思。舟出爲良之母。

天の河、浮津の浪音、騷ぐなり。我が待つ君し、舟出すらしも。

太宰諸卿大夫幷官人等宴二筑前國蘆城驛家一歌二首

娘部思。秋芽子交。蘆城野。今日乎始而。萬代爾將見。

女郎花、秋萩交る、蘆城の野、今日を初めて、萬代に見む。

珠匣。葦木乃河乎。今日見者。迄萬代。將忘八方。

玉櫛笥、蘆城の川を、今日見れば、萬代までに、忘らえめやも。

右二首。作者未レ詳。

笠朝臣金村伊香山作歌二首

草枕。客行人毛。往觸者。爾保比奴倍久毛。開流芽子香聞。

きながら容易に渡り行かれねば殊にせんすべなく思ふらんとなるべし

君―彥星

さもらひ難し―うかゞひ渡り難し、牽牛の許に參られぬとなるべし

近けれど―一訓「近けども」

陽炎の―枕詞

右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河。一云帥家作

秋風之。吹爾之日從。何時可登。吾待戀之。君曾來座流。
秋風の、吹きにし日より、何時しかと、我が待ち戀ひし、君ぞ來ませる。
天漢。伊刀河浪者。多多禰杼母。伺候難之。近此瀨乎。
天の河、いと川浪は、立たねども、さもらひ難し。近き此の瀨を。
袖振者。見毛可波之都倍久。雖近。度爲便無。秋西安良禰波。
袖振らば、見も交しつべく、近けれど、渡る術無し。秋にしあらねば
玉蜻蜓。髣髴所見而。別去者。毛等奈也戀牟。相時麻而波。
陽炎の、仄に見えて、別れなば、もとなや戀ひむ。逢ふ時までは。

右天平二年七月八日帥家集會。

牽牛之。迎嬬船。己藝出良之。漢原爾。霧之立波。
彥星の、妻迎へ船、漕ぎ出らし。天の河原に、霧の立てるは。

稻席—枕詞、本文「字」は「牟」の誤、略解は「寢席」の義となせどもいかゞ

久方の—枕詞

數多いも寢てしがも—一說原文「餘」の下に「多」を脫す、「あまたたび、いもねてしがも」

二つの岸—彼方と此方との岸

たぶて—つぶて

あまた術無き—極めて近

眞玉手乃。玉手指更。餘宿毛。寢而師可聞。（一云「伊毛左禰而師加」一云「秋不待登毛」）秋爾安良受登母。

彦星は、棚機津女と、天地の、別れし時ゆ、稻席、河に向き立ち、思ふ空、安からなくに、嘆く空、安からなくに、青浪に、望は絕えぬ、白雲に、淚は盡きぬ。斯くのみや、息づき居らむ。斯くのみや、戀ひつゝあらむ。さ丹塗の、小船もがも、玉卷の、眞櫂もがも、朝凪に、い掻き渡り、夕潮に、い漕ぎ渡り、久方の、天の河原に、天飛ぶや、領巾片敷き、眞玉手の、玉手差し交へ、數多いも、寢てしがも。秋にあらずとも。

反歌

風雲者。二岸爾。可欲倍杼母。吾遠嬬之。（一云「波之嬬乃」）事曾不通。

風雲は、二つの岸に、通へども、我が遠妻の、言ぞ通はぬ。

多夫手二毛。投越都倍伎。天漢。敝太而禮婆可母。安麻多須辨奈吉。

たぶてにも、投げ越しつべき、天の河、隔てればかも、あまた術無き。

甘酒を—枕詞、一訓「うまさけ」と四言
三輪の祝が云々—(一)三輪の祝が齋きまつる山を照らす(二)本文三輪云云は「三輪のいはひの山光る」と訓む、いはひの山は神を齋きまつれる山
紐解きまけな—紐を解き設けて待たん

甘酒を、三輪の祝が、山照らす、秋の黄葉、散らまく惜しも。

山上臣憶良七夕歌十二首

天漢。相向立而。吾戀之。君來益奈利。紐解設奈。
天の河、相向き立ちて、我が戀ひし、君來ますなり。紐解きまけな。
一云。向河。

右養老八年七月七日應レ令。

久方之。漢瀨爾。船泛而。今夜可君之。我許來益武。
久方の、天の河瀨に、船浮けて、今宵か君が、我許來まさむ。

右神龜元年七月七日夜左大臣家。

牽牛者。織女等。天地之。別時由。伊奈宇之呂。河向立。意空。不安久爾。嘆空。不安久爾。青浪爾。望者多要奴。白雲爾。渧者盡奴。如是耳也。伊伎都枳乎良牟。如是耳也。戀都追安良牟。佐丹塗之。小船毛賀茂。玉纒之。眞可伊毛我母。一云「小棹毛何毛」朝奈藝爾。伊可伎渡。夕鹽爾。一云「夕倍爾毛」伊許藝渡。久方之。天河原爾。天飛也。領巾可多思吉。

今朝の朝け、雁が音聞きつ。春日山、黄葉にけらし。我が心いたし。

秋芽子者。可咲有良之。吾屋戸之。淺茅之花乃。散去見者。

秋萩は、咲きぬべからし。我が宿の、淺茅が花の、散りぬる見れば。

但馬皇女御歌一首　一書云子部王作

事繁。里爾不住者。今朝鳴之。雁爾副而。去益物乎。

言繁き、里に住まずは、今朝鳴きし、雁にたぐひて、去なましものを。

一云。國爾不有者。

山部王惜秋葉歌一首　一書云子部王作

秋山爾。黄反木葉乃。移去者。更哉秋乎。欲見世武。

秋山に、もみづ木の葉の、移りなば、更にや秋を、見まく欲りせむ。

長屋王歌一首

味酒。三輪乃祝之。山照。秋乃黄葉。散莫惜毛。

我が心いたし―秋の物悲しきをいふ

住まずは―住まんよりは
たぐひて―つきて

もみづ―黄葉する、一訓「にほふ」
移りなば―散り果てなば

瞿麥者。咲而落去常。人者雖言。吾標之野乃。花爾有目八方。
撫子は、咲きて散りぬと、人は言へど、我が標し野の、花にあらめやも。

秋雜歌

崗本天皇御製歌一首

暮去者。小倉乃山爾。鳴鹿之。今夜波不鳴。寢宿家良思母。
夕されば、小倉の山に、鳴く鹿の、今宵は鳴かず、寢ねにけらしも。

大津皇子御歌一首

經毛無。緯毛不定。未通女等之。織黃葉爾。霜莫零。
經も無く、緯も定めず、少女らが、織る黃葉に、霜な降りそね。

穗積皇子御歌二首

今朝之旦開。雁之鳴聞都。春日山。黃葉家良思。吾情痛之。

崗本天皇—舒明

小倉の山—大和國

黃葉—黃葉をやがて錦になしてをとめこが織れるとはよめり

いかと、〳〵云々—いかにと〳〵待ちてある云々、本文「有」は「居」か、(一)橘の花の咲く程を、(二)本文伊加登伊可等「有」は「伊追之可等待」の誤にて「いつしかと待つ」
玉—藥玉
あえぬがに—時を得顔に、一説、咲きこぼるゝ程に
朝にけに—朝に夕に
息の緒—命
眞寸鏡—枕詞
散りこすな—散ること勿れ
うれたきや—なげかはしや
望降ち—十五日過ぐる程をいふ
後も鳴きなむ—後も郭公の鳴きなん花橘をの意、一説「後も鳴かなむ」と訓む、後にも鳴けかし未だ見もせぬ内に鳴き散らしぬるしこ時鳥よと也、又、五句「落しつ」を「散しつ」と訓ず
作歌—目錄に「作」なき方宜し

いかといかと、ある我が宿に、百枝差し、生ふる橘、玉に貫く、五月を近み、あえぬがに、花咲きにけり。朝にけに、出で見る毎に、息の緒に、我が思ふ妹に、眞寸鏡、清き月夜に、唯一目、見せむまでには、散りこすな、ゆめと言ひつゝ、幾許も、我が守るものを、うれたきや、醜郭公、曉の、うら悲しきに、追へど追へど、尚し來鳴きて、徒に、地に散らせば、術をなみ、攀ぢて手折りつ。見ませ我妹子。

反歌

望降。清月夜爾。吾妹兒爾。令覩常念之。屋前之橘。
望降ち、清き月夜に、我妹子に、見せむと思ひし、宿の橘。
妹之見而。後毛將鳴。霍公鳥。花橘乎。地爾落津。
妹が見て、後も鳴きなむ。郭公、花橘を、地に落しつ。

大伴家持贈二紀郎女一作歌一首

如何に告げきや―告げきや如何にと解すべし

大神女郎贈二大伴家持一歌一首

霍公鳥。鳴之登時。君之家爾。往跡追者。將至鴨。

郭公、鳴きし卽ち、君が家に、行けと追ひしは、至りけむかも。

大伴田村大孃與二妹坂上大孃一歌一首

古郷之。奈良思之岳能。霍公鳥。言告遣之。何如告寸八。

古郷の、ならしの岡の、郭公、言告げ遣りし。如何に告げきや。

大伴家持攀二橘花一贈二坂上大孃一歌一首幷短歌

伊加登伊可等。有吾屋前爾。百枝刺。於布流橘。玉爾貫。五月乎近美。安要奴我爾。花咲爾家里。朝爾食爾。出見每。氣緒爾。吾念妹爾。銅鏡。淸月夜爾。直一眼。令覩麻而爾波。落許須奈。由米登云管。幾許。吾守物乎。宇禮多伎也。志許霍公鳥。曉之。裏悲爾。雖追雖追。尙來鳴而。徒。地爾令散者。爲便乎奈美。攀而手折都。見末世吾妹兒。

て咲けど、見えねば斯くいふ

憂きことあれや―憂きことあればにや

五月之―一說「之」は「山」の誤

珠爾貫―「爾」一本「社」とある方宜し

垣つ―垣の内

ゆりと言へれば云々―(一)「ゆり」はよりにて、相逢ふをいふ、(二)「ゆり」は後にの意にて、後に逢はんといふ意

よそへぬに似る―(一)よそへいふに及ばぬに似るの意、(二)本文「謌」は「許」の誤にて「いなちふににつ」

小治田朝臣廣耳歌一首

霍公鳥。鳴峯乃上能。宇乃花之。猒事有哉。君之不來益。

郭公、鳴く峰の上の、卯の花の、憂きことあれや、君が來まさぬ。

大伴坂上郎女歌一首

五月之。花橘乎。爲君。珠爾貫。零巻惜美。

五月の、花橘を、君が爲め、玉にこそ貫け。落ちまく惜しみ。

紀朝臣豐河歌一首

吾妹兒之。家乃垣内乃。佐由理花。由利登云者。不謌云二似。

我妹子が、家の垣つの、さ百合花、ゆりと言へれば、よそへぬに似る。

高安歌一首

暇無。五月乎尙爾。吾妹兒我。花橘乎。不見可將過。

暇無み、五月をすらに、我妹子が、花橘を、見ずか過ぎなむ。

其の郭公と更にいひて我が聞かざるを恨む意を深からしむ、この歌は筑波根に行きし人の郭公の繁く鳴きたる事を語りたるを聞きてよめり

不來之—「之」は「座」の誤なるべし「きまさぬ」

朝戸—朝の程未だ開かぬ戸

苦物乎—「乎」一本「曾」

姫百合—紅に小さき花なれば夏野の草にもはばかれ

右一首。高橋連蟲麻呂之歌中出。

夏相聞

大伴坂上郎女歌一首

無暇。不來之君爾。霍公鳥。吾如此戀常。往而告社。

暇無み、來ざりし君に、郭公、我斯く戀ふと、行きて告げこそ。

大伴四繩宴吟歌一首

事繁。君者不來益。霍公鳥。汝太爾來鳴。朝戸將開。

事繁み、君は來まさず。郭公、汝だに來鳴け。朝戸開かむ。

大伴坂上郎女歌一首

夏野乃。繁見丹開有。姫由理乃。不所知戀者。苦物乎。

夏の野の、茂みに咲ける、姫百合の、知らえぬ戀は、苦しきものを。

本—橘の木の本、一說「本」は「地」の誤にて「つち」

しゞに—繁みに

足引の—枕詞もて山のことす　立ちぐく—立ちくゞる

兒—女

惜」不云々—「惜」は「恨」の誤か

鳴かましやそれ—鳴かましやは鳴くまじ、それは

我が宿の、花橘を、郭公、來鳴きとよめて、本に散らしつ。

大伴家持霍公鳥歌二首

夏山之。木末乃繁爾。霍公鳥。鳴響奈流。聲之遙佐。
夏山の、木ぬれのしゞに、郭公、鳴きとよむなる、聲の遙けさ。

足引乃。許乃間立八十一。霍公鳥。如此聞始而。後將戀可聞。
足引の、木の間立ちぐく、郭公、斯く聞き初めて、後戀ひむかも。

大伴家持石竹花歌一首

吾屋前之。瞿麥乃花。盛有。手折而一目。令見兒毛我母。
我が宿の、撫子の花、盛りなり。手折りて一目、見せむ兒もがも。

惜レ不レ登二筑波山一歌一首

筑波根爾。吾行利世波。霍公鳥。山妣兒令響。鳴麻志也其。
筑波根に、我が行けりせば、郭公、山彦とよめ、鳴かましやそれ。

蒲草—上に「菖」を脱す

玉—藥玉

こゆ—ここより、ここを

なりにけり—實になりにけり

我が宿の、花橘は、散り過ぎて、玉に貫くべく、實になりにけり。

大伴家持霍公鳥歌一首

霍公鳥。雖待不來喧。蒲草。玉爾貫日乎。未遠美香。

郭公、待てど來鳴かず。菖蒲草、玉に貫く日を、未だ遠みか。

大伴家持雨日聞二霍公鳥喧一歌一首

宇乃花能。過者惜香。霍公鳥。雨間毛不置。從此間喧渡。

卯の花の、過ぎば惜しみか、郭公、雨間もおかず、こゆ鳴き渡る。

橘歌一首

君家乃。花橘者。成爾家利。花乃有時爾。相益物乎。

君が家の、花橘は、なりにけり。花なる時に、逢はましものを。

大伴村上橘歌一首

吾屋前乃。花橘乎。霍公鳥。來鳴令動而。本爾令散都。

はねず—にはうめの一名

思はずありき—來鳴かざらんとは思ひ掛けざりき、一説に、我が思ふ如く時鳥は我を思はずありきの義といへどいかゞ

木のくれ—木の茂りて暗きこと

何處には—よそには、どこかにては

夏儲而。開有波爾受。久方乃。雨打零者。將移香。

夏まけて、咲きたるはねず、久方の、雨打降らば、移ろひなむか。

大伴家持恨二霍公鳥晚喧一歌二首

吾屋前之。花橘乎。霍公鳥。來不喧地爾。令落常香。

我が宿の、花橘を、郭公、來鳴かず地に、落しなむとか。

霍公鳥。不念有寸。木晚乃。如此成左右爾。奈何不來喧。

郭公、思はずありき、木のくれの、斯くなるまでに、などか來鳴かぬ。

大伴家持懽二霍公鳥一歌一首

何處者。鳴毛思仁家武。霍公鳥。吾家乃里爾。今日耳曾鳴。

何處には、鳴きもしにけむ、郭公、我家の里に、今日のみぞ鳴く。

大伴家持惜二橘花一歌一首

吾屋前之。花橘者。落過而。珠爾可貫。實爾成二家利。

友に逢へる時—友人の來逢ひたる時ぞ

寢の寢らえぬに—寢ても眠られぬに

我屋前乃。花橘爾。霍公鳥。今社鳴米。友爾相流時。
我が宿の、花橘に、郭公、今こそ鳴かめ。友に逢へる時。

大伴淸繩歌一首

皆人之。待師宇能花。雖落。奈久霍公鳥。吾將忘哉。
皆人の、待ちし卯の花、散りぬとも、鳴く郭公、我忘れめや。

庵君諸立歌一首

吾背子之。屋戸乃橘。花乎吉美。鳴霍公鳥。見曾吾來之。
我が背子が、宿の橘、花をよみ、鳴く郭公、見にぞ我が來し。

大伴坂上郎女歌一首

霍公鳥。痛莫鳴。獨居而。寐乃不所宿。聞者苦毛。
郭公、甚くな鳴きそ。獨居て、寢の寢らえぬに、聞けば苦しも。

大伴家持唐棣花歌一首

咲かねば—咲かぬに

玉—藥玉

茅蜩—蟬の一種

押照れり—押しなべて照れり

大伴家持霍公鳥歌一首

宇能花毛。未開者。霍公鳥。佐保乃山邊。來鳴令響。

卯の花も、未だ咲かねば、郭公、佐保の山邊を、來鳴きとよもす。

大伴家持橘歌一首

吾屋前乃。花橘乃。何時毛。珠貫倍久。其實成奈武。

我が宿の、花橘の、何時しかも、玉に貫くべく、其の實なりなむ。

大伴家持晩蟬歌一首

隱耳。居者鬱悒。奈具左武登。出立聞者。來鳴日晩。

籠りのみ、居ればいぶせみ、慰むと、出で立ち聞けば、來鳴く茅蜩。

大伴書持歌二首

我屋戸爾。月押照有。霍公鳥。心有今夜。來鳴令響。

我が宿に、月押照れり、郭公、心ある今宵、來鳴きとよもせ。

行くへもなくなりしと郭公に問はんものをとの意、この場合は二の句にてきる

橘—亡き妻に譬ふ
郭公—我に譬ふ

とよむ—とよます
我無けれども—賞玩すべき我も居られど、

こゝばく戀ふる—郭公を也、一訓「こゝだく戀ふる」に
戀こそ增され—人の戀しさこそまされ
廣耳—「耳」は「千」の誤か

こゆ—こゝより
心しあるらし—斯く慰め顏に鳴き渡るは心あるらし

太宰帥大伴卿和ル歌一首

橘之。花散里乃。霍公鳥。片戀爲乍。鳴日四曾多寸。
橘の、花散る里の、郭公、片戀しつゝ、鳴く日しぞ多き。

大伴坂上郎女思二筑紫大城山一歌一首

今毛可聞。大城乃山爾。霍公鳥。鳴令響良武。吾無禮杼毛。
今もかも、大城の山に、郭公、鳴きとよむらむ、我無けれども。

大伴坂上郎女霍公鳥歌一首

何哥毛。幾許戀流。霍公鳥。鳴音聞者。戀許曾益禮。
何しかも、こゝばく戀ふる、郭公、鳴く聲聞けば、戀こそ增され。

小治田朝臣廣耳歌一首

獨居而。物念夕爾。霍公鳥。從此間鳴渡。心四有良思。
獨り居て、物思ふ宵に、郭公、こゆ鳴き渡る、心しあるらし。

武士の―枕詞
鳴かぬか―鳴けかし、本文「奴」の下に「香」を脱せしか
蔭―(一)木蔭の意(二)たを蔭、たをは山のたわみたるところ(三)常陰にて、常に日の蔭となるところ
戀しけば―戀しからん時には
卯の花の―卯の花と、大伴卿の妻の亡きたまも云云と也
共にや來しと―本文、一說「來」は「成」の誤にて「むたやなりし」と訓む、さらば帥卿の妻は卯の花の散り失せたると共にうせて

刀理宣令歌一首

物部乃。石瀬之杜乃。霍公鳥。今毛鳴奴。山之常影爾。
武士の、磐瀬の森の、郭公、今も鳴かぬか。山のと蔭に。

山部宿禰赤人歌一首

戀之家婆。形見爾將爲跡。吾屋戸爾。殖之藤浪。今開爾家里。
戀しけば、形見にせむと、我が宿に、植ゑし藤浪、今咲きにけり。

式部大輔石上堅魚朝臣歌一首

霍公鳥。來鳴令響。宇乃花能。共也來之登。問麻思物乎。
郭公、來鳴きとよもす、卯の花の、共にや來しと、問はましものを。

右神龜五年戊辰太宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇レ病長逝焉。于時勅使式部大輔石上朝臣堅魚遣二太宰府一。弔レ喪幷賻物色。其事既畢。驛使及府諸卿大夫等。共登二記夷城一。而望遊之日。乃作二此歌一。

て未だ時ならぬを惜みてよめるなり、郭公は五月の景物
五月の玉—藥玉、郭公を愛するあまりに藥玉に貫かまほしとをさなくよめり
磐瀨の森—大和國城上郡、ならしの岡もその邊か
行きてしが—行きてしがな
萩咲きぬれや—萩咲きぬればにや
ともしき—少なく稀になりたり

志貴皇子御歌一首

神名火乃。磐瀨乃杜之。霍公鳥。毛無乃岳爾。何時來將鳴。
神奈備の、磐瀨の森の、郭公、ならしの岡に、何時か來鳴かむ。

弓削皇子御歌一首

霍公鳥。無流國爾毛。去而師香。其鳴音乎。聞者辛苦母。
郭公、無かる國にも、行きてしが。其鳴く聲を、聞けば苦しも。

小治田廣瀨王霍公鳥歌一首

霍公鳥。音聞小野乃。秋風。芽開禮也。聲之乏寸。
郭公、聲聞く小野の、秋風に、萩咲きぬれや、聲のともしき。

沙彌霍公鳥謌一首

足引之。山霍公鳥。汝鳴者。家有妹。常所思。
足引の、山郭公、汝が鳴けば、家なる妹し、常に思ほゆ。

我が君—女をさす　わけ—こゝは對稱代名詞を共のまゝとりて自稱とせり

へなれゝば—隔れば

いたくな鳴きそ—これは四月に郭公の鳴くを聞き

我が君に、わけは戀ふらし。賜ひたる、茅花を食へど、彌瘦にやす。

吾妹子之。形見乃合歡木者。花耳爾。咲而蓋。實爾不成鴨。

我妹子が、形見の合歡木は、花のみに、咲きて蓋しく、實にならじかも。

大伴家持贈二坂上大孃一歌一首

春霞。輕引山乃。隔者。妹爾不相而。月曾經爾來。

春霞、たなびく山の、へなれゝば、妹に逢はずて、月ぞ經にける。

右從二久邇京一贈二寧樂宅一。

夏雜歌

藤原夫人歌　明日香清御原宮御宇天皇之夫人也。字曰二大原大刀自一。卽新田部皇子之母也

霍公鳥。痛莫鳴。汝音乎。五月玉爾。相貫左右二。

郭公、いたくな鳴きそ。汝が聲を、五月の玉に、相貫くまでに。

宿なる、櫻の花は、今もかも、松風早み、地に落つらむ。

久米女郎報贈歌一首

世間毛。常爾師不有者。屋戸爾有。櫻花乃。不所比日可聞。
世の中も、常にしあらねば、宿にある、櫻の花の、散れる頃かも。

紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首

戯奴（變云和氣）之爲。吾手母須麻爾。春野爾。拔流茅花曾。御食而肥座。
わけが爲め、我が手もすまに、春の野に、拔ける茅花ぞ、召して肥えませ。

晝者咲。夜者戀宿。合歡木花。君耳將見哉。和氣佐倍爾見代。
晝は咲き、夜は戀ひ寢る、合歡木花、我のみ見むや、わけさへに見よ。

右折攀合歡花幷茅花贈也。

大伴家持贈和歌二首

吾君爾。戯奴者戀良思。給有。茅花乎雖喫。彌瘦爾夜須。

早み—一訓「いたみ」

變云和氣—原歌自註也、契沖は「變」を「反」に改むべしといへり

わけ—汝、家持卿を戯れに賤しめてさす

すまに—すきまなく、暇なく

茅花—古へ之を食すれば肥ゆといひならはしゝにや

君耳—「君」は「我」の誤

夜は戀ひ寢る—合歡木は晝は葉を開き夜は卷けば人の二人戀ひ寢るにとりなせり

兒島—備前國
息づかし—なげかはし、息づくは長く太く息をつく、ため息をつく
いねば—一訓「なば」
たまきはる—枕詞
命に向ひ—命を相手にして、命掛けにて
檝柄の握るところをいふか、一訓「かぢつか」
一よ—一節か
言持ち兼ねて—言の重さにたへ兼ねて
屋戸在—「在」の上に「爾」脱せるか、「やどにある」

波上從。所見兒島之。雲隱。穴氣衝之。相別去者。
波の上ゆ、見ゆる兒島の、雲隱り、あな息づかし。相別れいねば。

玉切。命向。戀從者。公之三船乃。檝柄母我。
たまきはる、命に向ひ、戀ひむゆは、君が御船の、檝柄にもが。

藤原朝臣廣嗣櫻花贈二娘子一歌一首

此花乃。一與能内爾。百種乃。言曾隱有。於保呂可爾爲莫。
此の花の、ひとよの中に、百種の、言ぞ籠れる。おほろかにすな。

娘子和歌一首

此花乃。一與能裏波。百種乃。言持不勝而。所折家良受也。
此の花の、一よの中は、百種の、言持ち兼ねて、折られけらずや。

厚見王贈二久米女郎一歌一首

屋戸在。櫻花者。今毛香聞。松風疾。地爾落良武。

には、やゝ萌え出でたれどなほ盛にならぬを胸に思のふさがりてあるに喩ふといふ

出でまさじとや―來まさじとや

幣引―「引」は「取」の誤か
將往―「往」は「待」の誤

玉襷―枕詞
息の緒に―命の限り
命畏み―上に「世の人なれば大君の」の二句を脱せしか

紀女郎歌一首

闇夜有者。宇倍毛不來座。梅花。開月夜爾。伊而麻左自常屋。

闇ならば、宜も來まさじ。梅の花、咲ける月夜に、出でまさじとや。

天平五年癸酉春閏三月笠朝臣金村贈入唐使歌一首并短歌

玉手次。不懸時無。氣緒爾。吾念公者。虛蟬之。命恐。夕去者。鶴之妻喚。難波方。三津埼從。大舶爾。二梶繁貫。白浪乃。高荒海乎。島傳。伊別往者。留有。吾者幣引。齊乍。公平者將往。早還萬世。

玉襷、懸けぬ時なく、息の緒に、我が思ふ君は、空蟬の、命畏み、夕されば、田鶴が妻呼ぶ、難波潟、三津の崎より、大船に、眞楫しゞ貫き、白浪の、高き荒海を、島傳ひ、い別れ行かば、留れる、我は幣帛取り、齋ひつゝ、君をば待たむ。早還りませ。

反歌

準へつゝ見む—妹に也

茅花—一訓「ちばな」

大伴宿禰—下に「家持贈」を脱す

心ぐき—心苦しき、一説に、愛らしく思ふ心のいよいよ切なるをいふと

覺束無くも—春山の茂きをいへるか、又は春山の霞めるをいへるか、一説

大伴宿禰家持贈㆓坂上家之大孃㆒歌一首

吾屋外爾。蒔之瞿麥。何時毛。花爾咲奈武。名蘇經乍見武。
我が宿に、蒔きし撫子、何時しかも、花に咲かなむ。準へつゝ見む。

大伴田村家之大孃與㆓妹坂上大孃㆒歌一首

茅花拔。淺茅之原乃。都保須美禮。今盛有。吾戀苦波。
茅花拔く、淺茅が原の、壺菫、今盛りなり。我が戀ふらくは。

大伴宿禰坂上郎女歌一首

情具伎。物爾曾有雞類。春霞。多奈引時爾。戀乃繁者。
心ぐき、物にぞありける。春霞、たなびく時に、戀の繁きは。

笠女郎贈㆓大伴家持㆒歌一首

水鳥之。鴨乃羽色乃。春山乃。於保束無毛。所念可聞。
水鳥の、鴨の羽の色の、春山の、覺束無くも、思ほゆるかも。

實にならぬ—未だ夫婦とならぬ喩ならん

養鴙—「養」目録に「春」に作るをよしとす

知れつゝ—知らしめつゝ

時—春の季節

大伴坂上郎女歌一首

風交。雪者雖零。實爾不成。吾宅之梅乎。花爾令落莫。

風交り、雪は降るとも、實にならぬ、我家の梅を、花に散らすな。

大伴宿禰家持養鴙歌一首

春野爾。安佐留鴙乃。妻戀爾。己我當乎。人爾令知管。

春の野に、あさる雉子の、妻戀に、己があたりを、人に知れつゝ。

大伴坂上郎女歌一首

尋常。聞者苦寸。喚子鳥。音奈都炊。時庭成奴。

世の常に、聞くは苦しき、呼子鳥、聲懷しき、時にはなりぬ。

右一首。天平四年三月一日佐保宅作。

春相聞

打ちきらし—打ちは接頭語、きらしは霧の延音、曇り隔つる意

しかすがに—然しながら、さすがに

壺菫—すみれの一名、花の形の壺に似たれば名づく

大伴宿禰家持鶯歌一首

打霧之。雪者零乍。然爲我二。吾宅乃苑爾。鶯鳴裳。

打ちきらし、雪は降りつゝ、しかすがに、我家の園に、鶯鳴くも。

大藏少輔丹比屋主眞人歌一首

難波邊爾。人之行禮波。後居而。春菜採兒乎。見之悲也。

難波邊に、人の行ければ、後れ居て、若菜摘む兒を、見るが悲しさ。

丹比眞人乙麻呂歌一首

霞立。野上乃方爾。行之可波。鶯鳴都。春爾成良思。

霞立つ、野上の方に、行きしかば、鶯鳴きつ。春になるらし。

高田女王歌一首

山振之。咲有野邊乃。都保須美禮。此春之雨爾。盛奈里鷄利。

山吹の、咲きたる野邊の、壺菫、此の春の雨に、盛りなりけり。

ふゝめりと、言ひし梅が枝、今朝降りし、沫雪に遇ひて、咲きぬらむかも。

霞立。春日之里。梅花。山下風爾。落許須莫湯目。

霞立ち、春日の里の、梅の花、嵐の風に、散りこすなゆめ。

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

霞立。春日里之。梅花。波奈爾將問常。吾念奈久爾。

霞立ち、春日の里の、梅の花、はなに問はむと、我が思はなくに

中臣朝臣武良自歌一首

時者今者。春爾成跡。三雪零。遠山邊爾。霞多奈婢久。

時は今は、春になりぬと、み雪降る、遠山の邊に、霞たなびく

河邊朝臣東人歌一首

春雨乃。敷布零爾。高圓。山能櫻者。何如有良武。

春雨の、しく〳〵降るに、高圓の、山の櫻は、如何にあるらむ。

ふゝめりと—蕾めりと

霞立ち—枕詞、一訓「霞立つ」

散りこすなゆめ—「こすな」は「こそな」にて、こそは希求の助詞、なは禁止の副詞、散る勿れ

霞立ち云々—「はな」といはん序

はなに問はむと—はなばなしくあだに問はんと

しく〳〵—頻に

綵欲得—「綵」は「緣」の誤か
見らむ—見るらん
打上る—枕詞
三林—「林」は「依」の誤か
過ぎねば—過ぎぬに
思はぬに—思ひ掛もなく

吾背兒我。見良牟佐保道乃。青柳乎。手折而谷裳。見綵欲得。
我が背子が、見らむ佐保路の、青柳を、手折りてだにも、見む由もがも。

打上。佐保能河原之。青柳者。今者春部登。成爾雞類鴨。
打上る、佐保の河原の、青柳は、今は春べと、なりにけるかも。

大伴宿禰三林梅歌一首

霜雪毛。未過者。不思爾。春日里爾。梅花見都。
霜雪も、未だ過ぎねば、思はぬに、春日の里に、梅の花見つ。

厚見王歌一首

河津鳴。甘南備河爾。陰所見。今哉開良武。山振乃花。
蛙鳴く、神奈備川に、影見えて、今や咲くらむ、山吹の花。

大伴宿禰村上梅歌二首

含有常。言之梅我枝。今旦零四。沫雪二相而。將開可聞。

櫻花歌一首并短歌

媙嬬等之。挿頭乃多米爾。遊士之。蘰之多米等。敷座流。國乃波多氏爾。開爾雞類。櫻花能。丹穗日波母安奈何。

少女等が、かざしの爲に、雅男が、蘰の爲と、敷き座せる、國のはたてに、咲きにける、櫻の花の、匂ひはもあなに。

反　謌

去年之春。相有之君爾。戀爾手師。櫻花者。迎來良之母。

去年の春、逢へりし君に、戀ひにてし、櫻の花は、迎へくらしも。

右二首。若宮年魚麻呂誦レ之。

山部宿禰赤人歌一首

百濟野乃。芽古枝爾。待春跡。居之鶯。鳴爾鷄鵡鴨。

百濟野の、萩の古枝に、春待つと、栖みし鶯、鳴きにけむかも。

大伴坂上郎女柳歌二首

安奈何―「何」一本「爾」一説、「何」は「荷」の誤

敷き座せる―上に句の落ちしか

はたて―果て、限り、中央は元よりはてまでもの意か

あなに―はめていふ

去年の春云々―櫻の花の心を推し量りてよめる歌か

迎へくらしも―一説、右の長歌は脱句ありて、春山を人の越え行くことのあり、さてこそ迎へ云々とはよめるなるべし、古義は別に説をなして、三句「手師」は「手伎」の誤、五句「迎へけらしも」と訓じ、去年の春花の下にて逢ひし君を戀ひ暮したるに今復櫻花の下に逢へるは花が君を迎へけらしの意とせり

百濟野―大和國十市郡

栖みし―一説、本文「來居之」の誤にて「來ゐし」

日並べて―幾日も日を重ねて
いたも―一訓「いと」
我が背子―友
草香山―河內國
押照る―枕詞
打靡く―枕詞
山もせに―山も狹き程に
馬醉木の―馬醉木の如く
惡からぬ―一訓「惡しからぬ」
君―女より男を、男より女を、こゝは後者か

足比奇乃。山櫻花。日並而。如是開有者。甚戀目夜裳。
足引の、山櫻花、日並べて、斯く咲きたらば、いたも戀ひめやも。
吾勢子爾。令見常念之。梅花。其十方不所見。雪乃零有者。
我が背子に、見せむと思ひし、梅の花、其れとも見えず。雪の降れゝば。
從明日者。春菜將採跡。標之野爾。昨日毛今日毛。雪波布利管。
明日よりは、若菜摘まむと、標し野に、昨日も今日も、雪は降りつゝ。

草香山歌一首

忍照。難波乎過而。打靡。草香乃山乎。暮晚爾。吾越來者。山毛世爾。咲有馬醉木乃。不惡。君乎何時。往而早將見。
押照る、難波を過ぎて、打靡く、草香の山を、夕暮に、我が越え來れば、山もせに、咲ける馬醉木の、惡からぬ、君を何時しか、行きて早や見む。

右一首。依二作者微一不レ顯二名字一。

泡雪―春の雪
はたれに―斑に、一說「はだれに」離れ〳〵にばらばらと
流らへ散る―流れ散る
開乃乎爲黑爾―(一)「乎爲黑」は「手烏里」の誤、「さきのたをり」は山の崎のたわみたるところ、(二)「乎爲黑」は「乎烏里」の誤にて「さきのをゝりに」枝も撓むばかり花の咲きたるをいふ
打靡く―枕詞
い掘じて―いは發語、根のつけるまゝ引き拔きて

泡雪か、はたれに降ると、見るまでに、流らへ散るは、何の花ぞも。

尾張連歌二首 名闕

春山之。開乃乎爲黑爾。春菜採。妹之白紐。見九四與四門。
春山の、崎のたをりに、若菜摘む、妹が白紐、見らくしよしも。

打靡。春來良之。山際。遠木末乃。開往見者。
打靡く、春來るらし。山の間の、遠き木ぬれの、咲きぬる見れば。

中納言阿倍廣庭卿歌一首

去年春。伊許自而植之。吾屋外之。若樹梅者。花咲爾家里。
去年の春、い掘じて植ゑし、我が宿の、若木の梅は、花咲きにけり。

山部宿禰赤人歌四首

春野爾。須美禮採爾等。來師吾曾。野乎奈都可之美。一夜宿二來。
春の野に、菫摘みにと、來し我ぞ、野を懐しみ、一夜寢にける。

萬葉集 巻第八

春雜歌

志貴皇子懽御歌一首

石激。垂見之上乃。左和良妣乃。毛要出春爾。成來鴨。

岩走る、垂水の上の、早蕨の、萌え出づる春に、なりにけるかも。

鏡王女歌

神奈備乃。伊波瀬乃杜之。喚子鳥。痛莫鳴。吾戀益。

神奈備の、いはせの森の、呼子鳥、いたくな鳴きそ。我が戀まさる。

駿河采女歌一首

沫雪香。薄太禮爾零登。見左右二。流倍散波。何物花其毛。

岩走る—枕詞
垂水—攝津國豊島郡
早蕨の—古義には「さ」は美稱といへり

いはせの森—大和國

孤枕—古枕は孤にてつくれり
相まきし兒も—抱いて寢た妻も
更くらくも—更くるも
玉梓の—枕詞
蒔けば散りぬる—火葬して其の灰を蒔き散らすをいふ、本文「染」は「漆」の誤
鹿子曾鳴成—「鳴」は「喚」の誤にて「かこぞよぶなる」
なごの海—攝津國

薦枕。相卷之兒毛。在者社。夜乃深良久毛。吾惜責。
孤枕、相まきし兒も、在らばこそ、夜の更くらくも、我惜みせめ。

玉梓能。妹者珠氈。足氷木乃。淸山邊。蒔散染。
玉梓の、妹は玉かも、足引の、淸き山邊に、蒔けば散りぬる。

或本歌曰。
玉梓之。妹者花可毛。足日木乃。此山影爾。麻氣者失留。

羇旅歌

名兒乃海乎。朝榜來者。海中爾。鹿子曾鳴成。何怜其水手。
なごの海を、朝漕ぎ來れば、海中に、水夫ぞ泣くなる。あはれ其の水夫。

枉言―一説、「枉」は「狂」の誤にて「たはこと」
廬せり―葬りしことをいふ
入りにし―葬りたるをいふ
さき竹の―枕詞
そがひ―うしろむき、一寸喧嘩でもしてせなか合はせに寢たる事のありしを思ひ出でたる也
寢しく―くは助辭
庭つ鳥―枕詞
かけ―鷄の一名
長き心―のどやかなる心をいふ

枉言香。逆言哉。隱口乃。泊瀬山爾。廬爲云。
禍言か、妖言か、隱口の、泊瀬の山に、廬せりとふ。

秋山。黄葉何怜。浦觸而。入西妹者。待不來。
秋山の、黄葉あはれみ、うらぶれて、入りにし妹は、待てど來まさず。

世間者。信二代者。不往有之。過妹爾。不相念者。
世の中は、誠二世は、行かざらし。過ぎにし妹に、逢はぬ思へば。

福。何有人香。黒髪之。白成左右。妹之音乎聞。
幸の、如何なる人か、黒髪の、白くなるまで、妹が聲聞く。

吾背子乎。何處行目跡。辟竹之。背向爾宿之久。今思悔裳。
我が背子を、何處行かめと、「さき竹の、」そがひに寢しく、今し悔しも。

庭津鳥。可鷄乃垂尾乃。亂尾乃。長心毛。不所念鴨。
庭つ鳥、かけの垂尾の、亂れ尾の、長き心も、思ほえぬかも。

ほと〳〵しくに云々─殆ど手斧を取られんとしたり、すんでの事に取られる所であつた

鏡なす─日々に見たる義、又、大切に見たる義

あばの野─大和國

珠に─珠の如くに

拾ひつ─火葬して骨を拾ふをいふ

秋津野を─君を火葬にせし秋津野を、本文「叫」は「呼」の誤か

懸くれば─言に懸けていへば

朝蒔きし─火葬にしたる灰を朝蒔き散らすこと

御幣取る、三輪の祝が、齋ふ杉原、薪伐り、ほと〳〵しくに、手斧取らえぬ。

挽歌

雜挽

鏡成。吾見之君乎。阿婆乃野之。花橘之。珠爾拾都。

鏡なす、我が見し君を、あばの野の、花橘の、珠に拾ひつ。

蜻野叫。人之懸者。朝蒔。君之所思而。嗟歯不病。

秋津野を、人の懸くれば、朝蒔きし、君が思ほえて、嘆きは止まず。

秋津野爾。朝居雲之。失去者。前裳今裳。無人所念。

秋津野に、朝居る雲の、失せ行けば、昨日も今日も、亡き人思ほゆ。

隱口乃。泊瀨山爾。霞立。棚引雲者。妹爾鴨在武。

隱口の、泊瀨の山に、霞立ち、棚引く雲は、妹にかもあらむ。

神樂聲浪乃。四賀津之浦能。船乘爾。乘西意。常不所忘。
細波の、滋賀津の浦の、船乘の、乘りにし心、常忘らえず。

百傳。八十之島廻乎。榜船爾。乘西情。忘不得裳。
百傳ふ、八十の島わを、漕ぐ船に、乘りにし心、忘れ兼ねつも。

島傳。足速乃小舟。風守。年者也經南。相常齒無二。
島傳ふ、あばやの小舟、風まもり、年はや經なむ。逢ふとは無しに。

水霧相。奥津小島爾。風乎疾見。船縁金都。心者念杼。
みなぎらふ、沖つ小島に、風をいたみ、船寄せ兼ねつ、心は思へど。

殊放者。奥從酒甞。湊自。邊著經時爾。可放鬼香。
ことさけば、沖ゆ避けなむ。湊より、邊つかふ時に、避くべきものか。

旋頭歌

三幣帛取。神之祝我。鎭齋杉原。燎木伐。殆之國。手斧所取奴。

細波の…船乘の—「乘り」の序

百傳ふ—枕詞

あばやの小舟—「あばや」は足早にて、速に走る舟をいふ

ことさけば—殊更に我を避け離れんとならば、一説「ことさかば」と訓ず、斯く我を遠ざけんとならば、此類の「こと」を略解には常に殊更にと解したれどいかゞ、「こんなに云々する位ならばいつその事」といふが最も當れりと覺ゆ

豐國之。聞之濱邊之。愛子地。眞直之有者。何如將嘆。

豐國の、きくの濱邊の、まなご路の、眞直にしあらば、何か嘆かむ。

寄レ藻

鹽滿者。入流礒之。草有哉。見良久少久。戀良久乃太寸。

潮滿てば、入りぬる礒の、草なれや、見らく少く、戀ふらくの多き。

奧浪。依流荒礒之。名告藻者。心中爾。疾跡成有。

沖つ浪、寄する荒礒の、神馬藻は、心の中に、とくとなりけり。

紫之。名高浦乃。名告藻之。於礒將靡。時待吾乎。

紫の、名高の浦の、神馬藻の、礒に靡かむ、時待つ我を。

荒礒超。浪者恐。然爲蟹。海之玉藻之。憎者不有乎。

荒礒越す、浪は畏し、しかすがに、海の玉藻の、憎くはあらぬを。

寄レ船

名高に紫川といふ川あり、これ古の地名にてそこにありし名高の浦にあらざるか、然らば「紫の」は枕詞にあらず

きく―豐前企救郡か

まなご路―眞砂路

眞直にしあらば―ますぐならば、言葉通りにていつはりのなきならばの喩

太―「太」は「大」の誤

入りぬる―隱れぬる

疾跡成有―「疾」は「知」の誤にて「知るとなりけり」か、されど「成有」も穩かならず、古義には「靡相有」の誤にて「なびきあひにけり」かといへり、要するにこの四字は誤ならん

ふしごえゆ、行かましものを、隙守るに、打濡らされぬ。浪よまずして。

石灘。岸之浦廻爾。縁浪。邊爾來依者香。言之將繁。
岩灘ぐ、岸の浦曲に、寄する浪、邊に來寄ればか、言の繁けむ。

礒之浦爾。來依白浪。反乍。過不勝者。雉爾絶多倍。
磯の浦に、來寄る白浪、反りつゝ、過ぎがてなくは、岸にたゆたへ。

淡海之海。浪恐登。風守。年者也將經去。撈者無二。
近江の海、浪畏しと、風まもり、年はや經なむ。漕ぐとは無しに。

朝奈藝爾。來依白浪。欲見。吾雖爲。風許增不令依。
朝凪に、來寄る白浪、見まく欲り、我はすれども、風こそ寄せね。

寄二浦沙一

紫之。名高浦之。愛子地。袖耳觸而。不寐香將成。
紫の、名高の浦の、まなご路に、袖のみ觸れて、寢ずかなりなむ。

ふしごえ―或は富士の山の横走といひ或は土佐國安藝郡の海邊の山邊といへど詳かならず
隙守るに―一訓「まもらふに」
石灘―「灘」は「隠」の誤にて「いそがくり」か
過ぎがてなくは―一訓「は」を「ば」と濁る、過ぎがてにするならばの意
雉―「涯(キシ)」の誤か、或は借字か
紫の―枕詞
名高の浦―紀伊國、一說

流る水沫の―一說「沫」は「脉」の誤にて「流るゝみをの」
堰かへたるかも―堰き敢へたるかも、即ち強ひて堰き止めてある哉の意
不可顯―一說、「下可戀」の誤にて「したにこふべき」
事等―一本「等」は「爾」
まがなもて―枕詞、一訓「まがなもち」
弓削―河內國若江郡

泊瀨川、流る水沫の、絕えばこそ、我が思ふ心、遂げじと思はめ。
名毛伎世婆。人可知見。山川之。瀧情乎。塞敢而有鴨。
嘆きせば、人知りぬべみ、山川の、たぎつ心を、堰かへたるかも。
水隱爾。氣衝餘。早川之。瀨者立友。人二將言八方。
水籠に、息づきあまり、早川の、瀨には立つとも、人に言はめやも。

寄二埋木一

眞鉋持。弓削河原之。埋木之。不可顯。事等不有君。
まがなもて、弓削の河原の、埋木の、顯るまじき、事とあらなくに。

寄レ海

大船爾。眞梶繁貫。水手出去之。奧將深。潮者干去友。
大船に、眞檝しゞぬき、漕ぎ出にし、沖は深けむ。潮は干ぬとも。
伏超從。去益物乎。間守爾。所打沾。浪不數爲而。

木綿懸けて云々―「神さびて」の序

齋む此の森も―一訓「齋ふ此森」

柵―思ひ合ふ中をさゝふる人に喩ふ

廣瀬川―大和國

木綿懸而。祭三諸乃。神佐備而、齋爾波不在。人目多見許増、

木綿懸けて、祭る三諸の、神さびて、齋むにはあらず、人目多みこそ。

木綿懸而。齋此神社。可超。所念可毛。戀之繁爾。

木綿懸けて、齋む此の森も、越えぬべく、思ほゆるかも。戀の繁きに。

寄レ河

不絶逝。明日香川之。不逝有者。故霜有如。人之見國。

絶えず行く、明日の川の、淀めらば、故しもある如、人の見まくに。

明日香川。湍瀬爾玉藻者。雖生有。四賀良美有者。靡不相。

明日香川、瀬々に玉藻は、生ひたれど、柵有れば、靡き合はなくに。

廣瀬川。袖衝許。淺乎也。心深目手。吾念有良武。

廣瀬川、袖漬くばかり、淺きをや、心深めて、我が思へらむ。

泊瀬川。流水沫之。絶者許曾。吾念心。不遂登思齒目。

月夜見男―月の異稱
夕さらず―夕毎に
菅根―(一)「根」は「實」の誤か(二)「菅根」は「菅鄕」の誤にて「いそのかみ、ふるさとみむに」なるべし
待ちがてぬ―待ちかねつ、一訓「待ちがたし」
照らぬか―照れかし
左丹著―一本「著」の下に「者」あるをよしとす
さ丹―さは發語、赤土
そこもか―それをもや

み空行く、月夜見男、夕さらず、目には見れども、寄る由も無し。

春日山。山高有良之。石上。菅根將見爾。月待難。
春日山、山高からし、岩の上の、菅の根見むに、月待ちがてぬ。

闇夜者。辛苦物乎。何時跡。吾待月毛。早毛照奴賀。
闇の夜は、苦しきものを、何時しかと、我が待つ月も、早も照らぬか。

朝霜之。消安命。爲誰。千歳毛欲得跡。吾念莫國。
朝霜の、消易き命、誰が爲に、千歳もがもと、我が思はなくに。

右一首者。不レ有ニ譬喩歌類一也。但闇夜歌人所心之故並作ニ此歌一。因以ニ此歌一載ニ出此次一。

寄ニ赤土一

山跡之。宇陁乃眞赤土。左丹著。曾許裳香人之。吾乎言將成。
大和の、宇陁の眞埴の、さ丹著かば、そこもか人の、我を言なさむ。

寄レ神

石倉―山城國、されどここは大和國か
秋津―吉野の内
雲にしもあれや―我身雲にしもあらば自在に飛行して通ひもすべけれど、雲ならぬ身の如何ともすべからねば只時節の到來するを待たん
天雲…神の―「畏し」の序
にはたづみ―雨降りて俄に地上に溜りて流るゝ水
衣手―袖
干る時無きか―乾く時も無きかな

石倉之。小野從秋津爾。發渡。雲西裳在哉。時乎思將待。
石倉の、小野ゆ秋津に、立ち渡る、雲にしもあれや。時をし待たむ。

寄レ雷

天雲。近光而。響神之。見者恐。不見者悲毛。
天雲に、近く光りて、鳴神の、見れば畏し、見ねば悲しも。

寄レ雨

甚多毛。不零雨故。庭立水。大莫逝。人之應知。
甚だも、降らぬ雨故、にはたづみ、いたくな行きそ。人の知るべく。
久堅之。雨爾波不著乎。恠毛。吾袖者。干時無香。
久方の、雨には著ぬを、怪しくも、我が衣手は、干る時無きか。

寄レ月

三空徃。月讀壯士。夕不去。目庭雖見。因緣毛無。

ふゝめり—蕾めり
七瀬の淀—多くの淀
心あれこそ—心あればこそ
此待鳥如—「此」は衍文
三國山—越前國
木ぬれ—梢

春日野に、咲きたる萩は、片つ枝は、未だふゝめり。言な絶えこそ。

欲見。戀管待之。秋芽子者。花耳開而。不成可毛將有。
見まく欲り、戀ひつゝ待ちし、秋萩は、花のみ咲きて、ならずかもあらむ。

吾妹子之。屋前之秋芽子。自花者。實成而許曾。戀益家禮。
我妹子が、宿の秋萩、花よりは、實になりてこそ、戀ひ増りけれ。

寄レ鳥

明日香川。七瀬之不行爾。住鳥毛。意有社。波不立目。
明日香川、七瀬の淀に、住む鳥も、心あれこそ、波立てざらめ。

寄レ獸

三國山。木末爾住歷。武佐左妣乃。此待鳥如。吾俟將痩。
三國山、木ぬれに住まふ、鼯鼠の、鳥待つが如、我を待ちやせむ。

寄レ雲

詞にて、母が其身のなりはひとする蠶の義と也
垂乳根の—枕詞

本繁く—木の茂れるをいふ

若楓—和名抄に「兼名苑云、楓一名攝、爾雅云、有脂而香、謂之楓、和名乎加豆良」カツラには專ら桂の字を用ひ、楓はカヘデと訓ずれど、その古正ならざる事は宣長の說にも見えたり

い間—いは發語

歎きつるかも—待遠しさに也

山ぢさ—木の名

花にか—花の如くにか

影毛 云々—一說、「影」は「移」の誤にて「うつしもせむと」うつすは染むること

秋さらば—秋にならば

韓藍—けいとう

行年—「所年」の誤にて「それ」

波之吉也思。吾家乃毛桃。本繁。花耳開而。不成在目八方。

はしきやし、我家の毛桃、本繁く、花のみ咲きて、ならざらめやも。

向岡之。若楓木。下枝取。花待伊間爾。嘆鶴鴨。

向つ峰の、若楓の木、下枝取り、花待つい間に、嘆きつるかも。

寄レ花

氣緒爾。念有吾乎。山治左能。花爾香君之。移奴良武。

息の緒に、思へる我を、山ぢさの、花にか君が、移ろひぬらむ。

墨吉之。淺澤小野之。垣津幡。衣爾揩著。將衣日不知毛。

住吉の、淺澤小野の、燕子花、衣に摺り附け、著む日知らずも。

秋去者。影毛將爲跡。吾蒔之。韓藍之花乎。誰採家牟。

秋さらば、かげにもせむと、我が蒔きし、韓藍の花を、誰か摘みけむ。

春日野爾。咲有芽子者。片枝者。未含有。言勿絶行年。

石の上—枕詞
早稲田を—「守りつゝ居らむ」につゞけて見よ
ひでずとも—穗に出でずとも
繩—一訓「しめ」

いさゝめに—かりそめに

汝が心ゆめ—用心して人に知られるな
母之其業云々—一說「桑」の下に「子」を脫す、さらば「はゝがそのわざのくはこすら」と訓むべし、くはこは蠶、又一說「なる」は「なりはひとす」の意の動

寄レ稻

石上。振之早田乎。雖不秀。繩谷延與。守乍將居。
石の上、布留の早稻田を、ひでずとも、繩だに延へよ。守りつゝ居らむ。

寄レ木

白菅之。眞野乃榛原。心從毛。不念君之。衣爾揩。
白菅の、眞野の榛原、心ゆも、思はぬ君が、衣に揩りぬ。
眞木柱。作蘇麻人。伊左佐目丹。借廬之爲跡。造計米八方。
眞木柱、造る杣人、いさゝめに、假廬の爲と、造りけめやも。
向峯爾。立有桃樹。成哉等。人曾耳言爲。汝情勤。
向つ峰に、立てる桃の木、なりぬやと、人ぞさゝめきし。汝が心ゆめ。
足乳根乃。母之其業。桑尙。願者衣爾。著常云物乎。
垂乳根の、母がそのなる、桑すらも、願へば衣に、著るとふものを。

野山―一說「野上」の誤にて、「ぬのへ」か

三島江―攝津國

大荒木野―大和國宇智郡か

篠ならなくに―一訓「篠にあらなくに」この類凡て斯く訓ずる方然るべからんか

ゆたにたゆたに―甚だたゆたひて

ぬなは―じゆんさいといふ水草

於君似。草登見從。我標之。野山之淺茅。人莫苅根。
君に似る、草と見しより、我が標めし、野山の淺茅、人な苅りそね。

三島江之。玉江之薦乎。從標之。己我跡曾念。雖未苅。
三島江の、玉江の菰を、標めしより、己がとぞ思ふ。未だ苅らねど。

如是爲而也。尙哉將老。三雪零。大荒木野之。小竹爾不有九二。
斯くしてや、尙や老いなむ。み雪降る、大荒木野の、篠ならなくに。

淡海之哉。八橋乃小竹乎。不造矢而。信有得哉。戀敷鬼乎。
近江のや、矢走の篠を、矢矧がずて、誠在り得むや。戀しきものを。

月草爾。衣者將摺。朝露爾。所沾而後者。徙去友。
月草に、衣は摺らむ。朝露に、濡れて後には、移ろひぬとも。

吾情。湯谷絕谷。浮蓴。邊毛奧毛。依勝益士。
我が心、ゆたにたゆたに、浮きぬなは、邊にも沖にも、寄りがてましを。

眞珠つく―枕詞
越智―大和國高市郡か近江國か
結はましを―結ふべかりしを
こちたくは―人の口のうるさくば
ともかも―ともかくも、一訓「かもかも」
我し刈りてば―我し刈りたらば
菅根―「根」は「實」の誤か
眞鳥―鷲
雲梯―大和國高市郡
かき附け―かきは接頭語
常不―下に「知」を脱す、「つねしらぬ」とよむべし
人國山―大和國
生ふる澤邊の―古義には「さき澤の邊の」と訓じ、さき澤は大和添上郡佐紀澤なりといへり

眞珠付。越能菅原。吾不苅。人之苅巻。惜菅原。
眞珠つく、越智の菅原、我が刈らず、人の刈らまく、惜しき菅原。

山高。夕日隱奴。淺茅原。後見多米爾。標結申尾。
山高み、夕日隱りぬ。淺茅原、後見む爲に、標結はましを。

事痛者。左右將爲乎。石代之。野邊之下草。吾之刈而者。
こちたくは、ともかもせむを、岩代の、野邊の下草、我し刈りてば。

一云。紅之寫心哉。於妹不相將有。

眞鳥住。卯名手之神社之。菅根乎。衣爾書付。令服兒欲得。
眞鳥住む、雲梯の森の、菅の根を、衣にかき附け、著せむ兒もがも。

常不。人國山乃。秋津野乃。垣津幡鷲。夢見鴨。
常ならぬ、人國山の、秋津野の、燕子花をし、夢に見しかも。

姫押。生澤邊之。眞田葛原。何時鴨絡而。我衣將服。
女郎花、生ふる澤邊の、眞葛原、何時かも繰りて、我が衣に著む。

玉襷—枕詞
標—標繩、境界又は出入の禁止等のしるしに引き渡す繩

飽かぬ—一訓「足らね」

今悔拭—一說、「拭」は「茂」の誤か、然らば「いましくやしも」
知りて—領して

つちばり—つくばね草
摺らゆな—摺らるな

思ひあまり、いとも術無み、玉襷、畝傍の山に、我が標結ひつ。

寄レ草

冬隱。春乃大野乎。燒人者。燒不足香文。吾情熾。
冬籠り、春の大野を、燒く人は、燒き飽かぬかも、我が心燒く。

葛城乃。高間草野。早知而。標指益乎。今悔拭。
葛城の、高間の茅野、早知りて、標さゝましを、今ぞ悔しき。

吾屋前爾。生土針。從心毛。不想人之。衣爾須良由奈。
我が宿に、生ふるつちばり、心ゆも、思はぬ人の、衣に摺らゆな。

鴨頭草丹。服色取。摺目伴。移變色登。偁之苦沙。
月草に、衣彩り、摺らめども、移ろふ色と、言ふが苦しさ。

紫。絲乎曾吾搓。足檜之。山橘乎。將貫跡念而。
紫の、絲をぞ我が搓る。足引の、山橘を、貫かむと思ひて。

文「絲」一本「紘」に作る方よろし
南淵、細川山—大和國高市郡
檀—古昔弓をつくるに用ひし木
準へらなくに—準へにあらぬに、身分の異るをいふ
出でがてぬかも—出でがたきかも
おほに—一通りに
畏けど—恐ろしけれども

南淵之。細川山。立檀。弓束級。人二不所知。
南淵の、細川山に、立つ檀、弓束巻くまで、人に知らえじ。

寄レ山

磐疊。恐山常。知管毛。吾者戀香。同等不有爾。
岩疊み、畏き山と、知りつゝも、我は戀ふるか。準へらなくに。

石金之。凝木敷山爾。入始而。山名付染。出不勝鴨。
岩が根の、こゞしき山に、入り初めて、山懐しみ、出でがてぬかも。

佐保山乎。於凡爾見之鹿跡。今見者。山夏香思母。風吹莫勤。
佐保山を、おほに見しかど、今見れば、山懐しも。風吹くなゆめ。

奥山之。於石蘿生。恐常。思情乎。何如裳勢武。
奥山の、岩に苔むし、畏けど、思ふ心を、如何にかもせむ。

思賸。痛文爲便無。玉手次。雲飛山仁。吾印結。

不纏爾―「爾」は「氐」の誤にて「卷かずて」か、卷かずしての意

てるさつ―玉商人をいふか、或は本文誤字あるならん

いと幾許に―一訓「甚だこゝだ」

あたゝら―地名か

つら―つる、弓の弦、本

白玉乎。手者不纏爾。匣耳。置有之人曾。玉令泳流。
白玉を、手には卷かずに、箱のみに、置けりし人ぞ、玉溺らする。

照左豆我。手爾纏古須。玉毛欲得。其緒者替而。吾玉爾將爲。
てるさつが、手に卷き古す、玉もがも。其の緒は替へて、我が玉にせむ。

秋風者。繼而莫吹。海底。奥在玉乎。手纏左右二。
秋風は、繼ぎてな吹きそ。海の底、沖なる玉を、手に卷くまでに。

寄二日本琴一

伏膝。玉之小琴之。事無者。甚幾許。吾將戀也毛。
膝に伏す、玉の小琴の、事無くば、いと幾許に、我が戀ひめやも。

寄レ弓

陸奥之。吾田多良眞弓。著絲而。引者香人之。吾乎事將成。
陸奥の、あたゝら眞弓、つら矧げて、引かばか人の、我を言なさむ。

行年—（一）去年の義にとりて「こそ」（二）「行」は「所」の誤にて「それ」

誰が故か—誰が爲ならん皆そなた故に心盡して思ふと也

絶ゆらく—絶ゆる

あまのしまつが—（一）あまは伊勢國海部（アマ）、津は舟の津、「が」は「の」の意、（二）本文「島」は「鳥」、「我」は「流」の誤にて「あまがとりつる」なるべし（三）島津は海人の名か

由を無み—採る由なくして

結義之—「義之」は「羲之」の誤

葦の根の—枕詞

大海之。水底照之。石著玉。齋而將採。風莫吹行年。
大海の、水底照し、しづく玉、齋ひて採らむ。風な吹きこそ。

水底爾。沈白玉。誰故。心盡而。吾不念爾。
水底に、しづく白玉、誰が故か、心盡して、我が思はなくに。

世間。常如是耳加。結大王。白玉之緒。絶樂思者。
世の中は、常斯くのみか。結びてし、白玉の緒の、絶ゆらく思へば。

伊勢海之。白水郎之島津我。鰒玉。取而後毛可。戀之將繁。
伊勢の海の、あまのしまつが、鰒珠、取りて後もか、戀の繁けむ。

海之底。奥津白玉。緣乎無三。常如此耳也。戀度味試。
海の底、沖つ白玉、由を無み、常斯くのみや、戀ひ渡りなむ。

葦根之。懃念而。結義之。玉緒云者。人將解八方。
葦の根の、懇思ひて、結びてし、玉の緒と言はば、人解かめやも。

言なさむかも―世の人の

橘の島―大和國

しづく―「しづける」の約、沈みてあるをいふ、一説海底の石に著きてあるをいふ

告りし―訓「告げし」

橡。解濯衣之。恠。殊欲服。此暮可聞。

橡の、解き洗ひ衣の、怪しくも、殊に著欲しき、此の夕かも。

橘之。島爾之居者。河遠。不曝縫之。吾下衣。

橘の、島にし居れば、川遠み、晒さず縫ひし、我が下衣。

寄レ絲

河内女之。手染之絲乎。絡反。片絲爾雖有。將絶跡念也。

河内女の、手染の絲を、繰り返し、片絲にあれど、絶えむと思へや。

寄レ玉

海底。沈白玉。風吹而。海者雖荒。不取者不止。

海の底、しづく白玉、風吹きて、海は荒るとも、取らずは止まじ。

底清。沈有玉乎。欲見。千遍曾告之。潛爲白水郎。

底清み、しづける玉を、見まく欲り、千度ぞ告りし、潛する海人。

長「大海は湊を守る」

畏けば—畏ければ

衣人者—(一)「人者」は「者人」の誤にて「ころもは、人の」(二)一本「者」を「皆」に作りて「きぬはひとみな」

橡—橡色、この色の衣は古へ賤者の服

なれにし—古くなりし

下に著て云々—忍びて心を通はしたる人を後に晴れて妻とせばの意ならん

風吹。海荒。明日言。應久。君隨。
風吹きて、海は荒るとも、明日と言はば、久しかるべし。君がまに〱。

雲隱。小島神之。恐者。目間。心間哉。
雲隱る、小島の神の、畏けば、目は隔つれど、心へだつや。

右十五首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

寄レ衣

橡。衣人者。事無跡。曰師時從。欲服所念。
橡の、衣著る人は、事無しと、言ひし時より、著欲しく思ほゆ。

凡爾。吾之念者。下服而。穢爾師衣乎。取而將著八方。
大凡に、我し思はば、下に著て、なれにし衣を、取りて著めやも。

紅之。深染之衣。下著而。上取著者。事將成鴨。
紅の、濃染の衣を、下に著て、上に取り著ば、言なさむかも。

天雲の云々—「籠り」の序
己心—一說「己」は「下」の誤にて「したのこゝろに」
人國山—大和國
花矣我云々—一說「花矣」は「咲花」の誤、「反」は「乍」の誤にて「このやまの、もみぢのしたに、さくはなを、あれはつ〳〵にみつつこひしも」と訓むべし
はつ〳〵に—わづかに
吾率陵—(一)「陵」は「隙」の誤か、然らば「わをゐてかくさむ」(二)「わをゐてゆかむ」と訓むべし
大海を云々—一二の句宜

天雲の、たなびく山の、籠りたる、我が下心、木の葉知るらむ。

雖見不飽。人國山。木葉。己心。名著念。

見れど飽かぬ、人國山の、木の葉をし、我が心から、懷しみ思ふ。

寄レ花

是山。黄葉下。花矣我。小端見。反戀。

此の山の、黄葉の下の、花を我が、はつ〴〵に見て、歸る戀しも。

寄レ川

從此川。船可行。雖在。渡瀬別。守人有。

此の川ゆ、船は行くべく、ありと言ど、渡り瀬毎に、守る人あるを。

寄レ海

大海。候水門。事有。從何方君。吾率陵。

大海を、守る水門に、事しあらば、何所ゆ君が、我を率しのがむ。

安治村。十依海。船浮。白玉採。人所知勿。
あぢ群の、とを寄る海に、船浮けて、白玉採らむ、人に知らゆな。

遠近。礒中在。白玉。人不知。見依鴨。
遠近の、いその中なる、白玉を、人に知らえず、見む由もがな。

海神。手纏持在。玉故。石浦廻、潜爲鴨。
海神の、手に纏き持たる、玉故に、礒の浦曲に、潜するかも。

海神。持在白玉。見欲。千遍告。潜爲海子。
海神の、持たる白玉、見まく欲り、千度ぞ告りし。潜する海人。

潜爲。海子雖告。海神。心不得。所見不云。
潜する、海人はのれども、海神の、心し得ねば、見ゆと言はなくに。

寄レ木

天雲。棚引山。隱在。吾忘。木葉知。

あぢ群—味鴨の群
とを寄る—撓み寄る、あぢ群のむれ飛ぶ樣をいふ
白玉採らむ—一訓「白玉採ると」
知らゆな—知らるな
いその中なる云々—いそは石、石の中に交りてある玉を云々
知らえず—知られず

告りし—一訓「告げし」

のれども—一訓「告ぐれど」見ゆと言はなくに—一訓「見えむともいはず」

吾忘—「忘」は「下心」の誤

新しき―一訓「今造る」
斑の衣―摺衣
おもづきて―一訓「目につきて」
我に思ほゆ―一說「爾」は「者」の誤にて「我は思ほゆ」
欲しけども―欲しけれども
千名にはも云々―人は色色にいひたつるとも、一說「千各」の誤にて「かにかくに」

春日在。三笠乃山二。月船出。遊士之。飲酒杯爾。陰爾所見管。
春日なる、三笠の山に、月の船出づ。雅男の、飲む盃に、影に見えつゝ。

譬喩歌

寄レ衣

今造。斑衣服。面就。吾爾所念。未服友。
新しき、斑の衣、おもづきて、我に思ほゆ。未だ著ねども。

紅。衣染。雖欲。著丹穂哉。人可知。
紅に、衣染めまく、欲しけども、著て匂はばや、人の知るべき。

千名。人雖云。織次。我二十物。白麻衣。
千名にはも、人は言ふとも、織り繼がむ。我が機物の、白麻衣。

寄レ玉

垣越ゆる、犬呼び來して、鳥獵する君、青山の、葉繁き山邊、馬休め君。

海底。奥玉藻之。名乘曾花。妹與吾。此何有跡。莫語之花。

海の底、沖つ玉藻の、神馬藻の花。妹と我と、此所にし在りと、なのりその花。

此崗。草苅小子。然苅。有乍。君來座。御馬草爲。

此の岡に、草刈る童、然かな刈りそね。在りつゝも、君が來まさむ、御秣にせむ。

江林。次宍也物。求吉。白栲。袖纏上。宍待我背。

江林に、宿るしゝやも、求むるによき、白妙の、袖捲き上げて、しゝ待つ我が背。

丸雪降。遠江。吾跡川楊。雖苅。亦生云。余跡川楊。

霰降り、遠江の、あと川楊、刈れゝども、復も生ふちふ、あと川楊。

朝月日。向山。月立所見。遠妻。持在人、看乍偲。

朝附日、向ひの山に、月立てる見ゆ。遠妻を、持ちたる人し、見つゝ偲ばむ。

右二十三首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

そでみむと」又は「そでふるみむと」

垣越ゆる—枕詞

犬呼び來して—犬を呼び來らしめて

馬休め—馬を憩はせしめよ

此何—「何」は「所」の誤か

海の底—枕詞

然苅—「然」の下に「眞」を脱す

君が來まさむ—君が來まさん時

江林—地名なるべし

しゝ—猪鹿などの總稱

次宍也物、求吉—一說「次」は「伏」、「來吉」は「來告」の誤にて、「伏せるしゝやも來ぬとつげけむ」か

霰降り—枕詞

あと川—近江國、遠江にもさる川あるか、未詳

朝附日—枕詞

橋立の、倉橋川の、岩の橋はも。男盛に、我が渡りし、岩の橋はも。

橋立。倉椅川。河靜菅。余苅。笠裳不編。川靜菅。

橋立の、倉橋川の、川のしづ菅、我が刈りて、笠にも編まず。川のしづ菅。

春日尙。田立羸。公哀。若草。孅無公。田立羸。

春日すら、田に立ち疲る、君は哀しも。若草の、妻無き君が、田に立ち疲る。

開木代。來背社。草勿手折。己時。立雖榮。草勿手折。

山城の、くぜの社の、草な手折りそ。己が時、立ち榮ゆとも、草な手折りそ。

青角髮。依網原。人相鴨。石走。淡海縣。物語爲。

青角髮、依網の原に、人も逢はぬかも。岩橋の、近江縣の、物語せむ。

水門。葦末葉。誰手折。吾背子。振手見。我手折。

湊の、葦の末葉を、誰か手折りし。我で背子が、振る手を見むと、我ぞ手折りし。

垣越。犬召越。鳥獵爲公。青山。葉茂山邊。馬安君。

我が渡りし―一訓「我が渡せりし」

しづ菅―(一)小さき菅、(二)一種の菅の名か

我が刈りて云々―約束はしたれどまだ共寢せぬ女の喩か

若草の―枕詞

山城の云々―この歌は主ある女に懸想するともあながちなるわざすなといふ意か

己が時云々―女のときめける時を草の時を得て榮ゆるに譬へしか、一說「しが時と云々」と訓じ、時を待ち得て得意になる義とせり

青角髮―枕詞

依網の原―三河國か

人も―人にも

逢はぬかも―逢へかし

岩橋の―枕詞、一訓「いはばしる」

近江縣の云々―近江は遠江にして、この歌は遠江の國司の下る時三河の依網の郷にてよめるものなりといふ

振手見―「振」の下に「衣」を脱せしか、然らば「ふる

ひめ菅原―(一)地名、(二)天上にある地名
蜷の腸―枕詞
夏影の―契沖説に女は北の室に住むが例なれば北窓の涼の夏によろしとの意にや
大に―一訓「ひろに」
引津―筑前國の海岸
引津邊在―一説、「ひきつべにある」と訓むか
念委―一本「念亂」とある方宜し
打日射す―枕詞
思ひしなえて―思ひわびて、一本によれば「思ひみだれて」
衣服斜―「斜」は「料」の誤
何何―「何色」の誤
摺りてばよけむ―摺りたらばよからん
橋立の―枕詞
倉橋山―大和國十市郡

夏影。房之下邇。衣裁吾妹。裏儲。吾爲裁者。差大裁。
夏影の、閨の下に、衣裁つ我妹、裏設けて、我がため裁たば、稍大に裁て。

梓弓。引津邊在。莫謂花。及採。不相有目八方。勿謂花。
梓弓、引津の邊なる、神馬藻の花、摘むまでに、逢はざらめやも、神馬藻の花。

撃日刺。宮路行丹。吾裳破。玉緒。念委。家在矣。
打日射す、宮路を行くに、我が裳は破れぬ。玉の緒の、思ひしなえて、家に在らましを。

君爲。手力勞。織在衣服斜。春去。何何。摺者吉。
君が爲め、手力疲れ、織りたる衣を、春さらば、如何なる色に、摺りてばよけむ。

橋立。倉椅山。立白雲。見欲。我爲苗。立白雲。
橋立の、倉橋山に、立てる白雲、見まく欲り、我がするなへに、立てる白雲。

橋立。倉椅川。石走者裳。壯子時。我度爲。石走者裳。

劍後。鞘納野邇。葛引吾妹。眞袖以。著點等鴨。夏草苅母。
太刀の後、鞘に入野に、葛引く我妹、眞袖以て、著せてむとかも、夏葛引くも。

住吉。波豆麻君之。馬乘衣。雜豆臘。漢女乎座而。縫衣叙。
住吉の、なみづま君が、馬乘衣、さにづらふ、漢女を据ゑて、縫へる衣ぞ。

住吉。出見濱。柴莫苅曾尼。未通女等。赤裳下。閏將往見。
住吉の、いでみの濱の、柴な刈りそね。少女等が、赤裳の裾の、濡れて行かむ見む。

住吉。小田苅爲子。賤鴨無。奴雖在。妹御爲。私田苅。
住吉の、小田を刈らす兒、奴かも無き。奴有れど、妹が御爲に、秋の田刈らす。

池邊。小槻下。細竹苅嫌。其谷。君形見爾。監乍將偲。
池の邊の、小槻が下の、篠な刈りそね。其をだに、君が形見に、見つゝ偲ばむ。

天在。日賣菅原。草莫苅嫌。彌那綿。香烏髮。飽田志付勿。
天なる、ひめ菅原の、草な刈りそね。蜷の腸、か黒き髪に、芥し附くも。

入野―山城國乙訓郡
夏草苅母―「草」は「葛」「苅」は「引」の誤
眞袖―兩袖
なみづま君―(一)なみづまは地名か(二)本文「波豆麻君」は「波里摩着」「馬乘衣」は「馬垂衣」の誤にて「榛摺り附けし斑の衣」と訓む
座而―一說「ませて」と訓む、招待しての意
漢女―雄略紀「身狹村主青等共吳國使將吳所獻手末才伎漢織吳織及衣縫兄媛弟媛等泊於住吉津」とあるによりて戯れてよみやれる歌
いでみの濱―Sづみの濱か、又はいでみる濱か
赤裳云々―以下一訓「赤裳裾ひぢ行かまくも見む」
刈らす―刈る
秋の田―本文「私」は「秋」の誤か
細竹―下に「莫」を脫す
君―男
彌那綿―「那」の下に「能」を脫す
天なる―(一)枕詞、(二)天上にある

世の人我は｜世の人なる我は、我は現の身なれば

滿ち缺けしてを｜をは助辭

卷向之。山邊響而。往水之。三名沫如。世人吾等者。

纏向の、山邊とよみて、行く水の、水沫の如し。世の人我は。

右二首。柿本朝臣人麻呂歌集出。

寄レ物發レ思

隱口乃。泊瀬之山丹。照月者。盈昃爲烏。人之常無。

隱口の、泊瀬の山に、照る月は、滿ち缺けしてを、人の常なき。

右一首。古歌集出。

行路

遠有而。雲居爾所見。妹家爾。早將至。歩黑駒。

遠くありて、雲居に見ゆる、妹が家に、早く至らむ。歩め黑駒。

右一首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

旋頭歌

いはひ妻—いつきかしづく妻
目並ばず—一人で目利したる爲めの義ならん
あきじこりかも—種々の說あれど、商買のしくじりといふが最も可なるに似たり
防人—古へ太宰府に防人司ありて西番の寇を防がんために東の兵を遣はせり
肩のまよひ—まよひは布の糸が引けてよれ〳〵になること
許誰取見—「許」は衍文なるべし、一說「阿」の誤
や船たけ—やは彌、たくは骨折りて漕ぎ行ること、色々と心をつくして漸く見たる女の目附はたしかに我に氣があると喜ぶなるべし
まみ—目もと
兒らが手を—枕詞
行きまかめやも—尋ねゆくともまき得ざらん、まくは共寢の義

西市爾。但獨出而。眼不並。買師絹之。商自許里鴨。
西の市に、只一人出でて、目並ばず、買へりし絹の、あきじこりかも。

今年去。新島守之。麻衣。肩乃間亂者。許誰取見。
今年行く、新防人が、麻衣、肩のまよひは、誰か取り見む。

大舟乎。荒海爾榜出。八船多氣。吾見之兒等之。目見者知之母。
大船を、荒海に漕ぎ出で、や船たけ、我が見し兒らが、まみは著しも。

就レ所發レ思　旋頭歌

百師木乃。大宮人之。蹈跡所。奥浪。來不依有勢婆。不失有麻思乎。
百敷の、大宮人の、踏みし跡所、沖つ浪、來寄らざりせば、失せざらましを。

右十七首。古歌集出。

兒等手乎。卷向山者。常在常。過往人爾。往卷目八方。
兒らが手を、纏向山は、常なれど、過ぎにし人に、行きまかめやも。

訓ずるが可ならん
妻といふべしや―一說「妻といふべし」と訓む
少可有來―一說、「少可」は「奇」の誤にて「あやしかりけり」又一說「苛曾有來」の誤にて「からくぞありける」
默あらじ―心から思ふならねど只待つても居られぬとて
佐伯山―安藝國か、或は本文「伯」は「附」の誤にて「五月山」か
哀しきが―我が愛する女が
花は散るとも―其妹が持てる花は散るともよし
著ほしきが―著まほしきかな
榛原―大和國高市郡、榛に衣を張るをいひ掛く
山守―男をさす
茂くなりける―草木の
忘れけらしも―我を
やつを―重れる峰
しゝ待つ君―狩人、遠路を通ひ來る男に譬ふ、一說、「しゝ待ち君」と訓みて、「しゝ待ち」までは序にて、狩人のしゝをうかゞひねらひて待つ如くに大切にする妻、「しゝ待つ」と元のまゝの訓にても義はなほ斯く解すべからん、前說よりも此說可なりと覺ゆ

默然不有跡。事之名種爾。云言乎。聞知良久波。少可有來。
默あらじと、事の慰に、言ふことを、聞き知れらくは、少かりけり。

佐伯山。于花以之。哀我。子鴛取而者。花散鞆。
佐伯山、卯の花持ちし、哀しきが、手をし取りてば、花は散るとも。

不時。斑衣。服欲香。衣服針原。時二不有鞆。
時じくに、斑の衣、著ほしきか。衣榛原、時ならねども。

山守之。里邊通。山道曾。茂成來。忘來下。
山守の、里へ通ひし、山路ぞ、茂くなりける。忘れけらしも。

足病之。山海石榴開。八岑越。鹿待君之。伊波比嬬可聞。
足引の、山椿咲く、やつを越え、しゝ待つ君が、いはひ妻かも。

曉跡。夜鳥雖鳴。此山上之。木末之於者。未靜之。
曉と、夜鳥鳴けど、此の峰の、木ぬれが上は、未だ靜し。

神樂浪之。思我津乃白水郎者。吾無二。潛者莫爲。浪雖不立。
細波の、志賀津の海人は、我無しに、潛きはなせそ。浪立たずとも。
大船爾。梶之母有奈牟。君無爾。潛爲八方。波雖不起。
大船に、梶しもあらなむ。君無しに、潛きせめやも。波立たずとも。

右二首。詠二白水郎一。

臨時

月草爾。衣曾染流。君之爲。綵色衣。將摺跡念而。
月草に、衣ぞ染める。君が爲め、斑の衣、摺らむと思ひて。
春霞。井上從直爾。道者雖有。君爾將相登。他回來毛。
春霞、井上ゆ直に、道はあれど、君に逢はむと、たもとほり來も。
道邊之。草深由利乃。花咲爾。咲之柄二。妻常可云也。
道の邊の、草深百合の、花笑みに、笑ましょからに、妻といふべしや。

志賀津—志賀の大津
我無しに—我が斯く見る時ならでは
大船に云々—今君がおはする時に沖中に潛ぎ出でて潛きして見せ奉らんものを
斑の衣—摺衣は斑なればいふ
春霞—枕詞
井上—大和國にも河内國にもあり
たもとほり來も—君の家の方へまはり道して來りしといふ意
草深百合—草深きところに咲く百合「草ふけ」の傍訓略解のまゝ「草ふか」と

我妹子と—その花をだに妹と思ひて、一說「妹と共に」
我に告げこそ—「こそ」は希求の助詞、海人などにいひかけたるさまなり、本文「與」は「乞」の誤
うきぬ—地名か或は沼か或は「うき」は泥か
菅—山菅、麥門冬
行く我を—行く我なるを、一訓「行きし我」
何しかも—何故ありて
偲び—慕ひ
おほにも—おほよそにも
しぬぶ川原—戀ひ慕ふ佐保の川原

我妹子と、見つゝ偲ばむ。沖つ藻の、花咲きたらば、我に告げこそ。

君爲。浮沼池。菱採。我染袖。沾在哉。

君がため、うきぬの池の、菱採ると、我が染めし袖、濡れにけるかも。

妹爲。菅實採。行吾。山路惑。此日暮。

妹がため、菅の實取りに、行く我を、山路惑ひて、此の日暮しつ。

右四首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

問答

佐保河爾。鳴成智鳥。何師鴨。川原乎思努比、益河上。

佐保川に、鳴くなる千鳥、何しかも、川原を偲び、彌川上る。

人社者。意保爾毛言目。我幾許。師奴布川原乎。標結勿謹。

人こそは、おほにも言はめ。我が幾許、しぬぶ川原を、標結ふなゆめ。

右二首詠レ鳥。

近き里わ—里は故郷の里なり、この歌は旅より歸りて故郷に近づける時の歌
たもとほり—たは發語、めぐり、まはりて
領巾振りし野—旅立つ時別れし野、本文「禮」は「領」の誤か
はなりの髪—振分け髪
ゆふの山—豐後國速見郡

綱堪へず—(一)まことに釣舟の綱のつなぐに堪へざるに非ず、堪ふる綱をかりて堪へずといへるなるべし(二)本文「綱」は「維」の誤にて「つなぎあへず」ならんか(三)本文「堪」は「絕」か「斷」の誤か(四)古義二、三の句「釣船の綱堪へがてに」「不堪」の間に「勝」を補へる也

大己貴云々—神代紀に大己貴尊と少彥名尊と協力して天下を經營せし事見ゆれば斯くいへり

視渡者。近里廻乎。田本欲。今衣吾來。禮巾振之野爾。
見渡せば、近き里わを、たもとほり、今ぞ我が來し。領巾振りし野に。

未通女等之。放髪乎。木綿山。雲莫蒙。家當將見。
少女らが、はなりの髪を、ゆふの山、雲なたなびき。家のあたり見む。

四可能白水郞乃。釣船之。綱不堪。情念而。出而來家里。
しかの海人の、釣する船の、綱堪へず、心に思ひて、出でて來にけり。

之加乃白水郞之。燒鹽煙。風乎疾。立者不上。山爾輕引。
しかの海人の、鹽燒く煙、風をいたみ、立ちは上らず、山にたなびく。

右件歌者古集中出。

大穴道。少御神。作。妹勢能山。見吉。
大己貴、少御神の、作らしゝ、妹背の山を、見らくしよしも。

吾妹子。見偲。奧藻。花開在。我告與。

「八」の誤にて「繼ぎて見ゆれ八竹島の」文「小」は「乍」の誤にて、二三の句「つぎて見えつゝ高島の」かともいふ
磯越す波の—序
しく〳〵—重ね〳〵、頻りに
寄りけるか—「か」は「かな」
たか島—近江國高島、或は周防國に竹島ありと
あと白浪—本文「白」は「河」の誤にて「あと川浪」か
寄らむと—一訓「寄せむと」前に「大海の水底とよみ立つ波の寄せむと思へる磯のさやけさ」とあり、殆んど同一也、上三句は景を以て序とせるもの、「寄せむ」は船をこぎ寄せんの義か
玉櫛笥—枕詞
みもろと山—備中國
黑髮山—下野國といへどいかゞ
妹立ち待ちて—妹は遊女の類、古義には、宿かさんか、山路にはさる妹もあらじかとの意とせり

靜母。岸者波者。緣家留香。此屋通。聞乍居者。
靜くも、岸には波は、寄りけるか。此の家通し、聞きつゝ居れば。

竹島乃。阿戸白波者。動友。吾家思。五百入鉋染。
たか島の、あと白浪は、騷げども、我は家思ふ。庵悲しみ。

大海之。礒本由須理。立波之。將依念有。濱之淨奚久。
大海の、磯元搖り、立つ波の、寄らむと思へる、濱のさやけく。

珠運。見諸戸山矣。行之鹿齒。面白四手。古昔所念。
玉櫛笥、みもろと山を、行きしかば、面白くして、古思ほゆ。

黑玉之。玄髮山乎。朝越而。山下露爾。沾來鴨。
ぬば玉の、黑髮山を、朝越えて、山下露に、濡れにけるかも。

足引之。山行暮。宿借者。妹立待而。宿將借鴨。
足引の、山行き暮し、宿借らば、妹立ち待ちて、宿かさむかも。

天霧相。日方吹羅之。水莖之。崗水門爾。波立渡。
天ぎらひ、日方吹くらし。水莖の、岡の水門に、波立ち渡る。

大海之。波者畏。然有十方。神乎齋禮而。船出爲者如何。
大海の、波は恐し。然れども、神を齋ひて、船出せば如何に。

未通女等之。織機上乎。眞櫛用。掻上栲島。波間從所見。
少女らが、織る機の上を、眞櫛もて、かゝげたく島、波間より見ゆ。

鹽早三。礒回荷居者。入潮爲。海人鳥屋見濫。多比由久和禮乎。
潮早み、磯曲に居れば、潜きする、海人とや見らむ。旅行く我を。

浪高之。奈何梶取。水鳥之。浮寢也應爲。猶哉可榜。
浪高し。如何に檝取り、水鳥の、浮寢やすべき、なほや漕ぐべき。

夢耳。繼而所見。小竹島之。越礒波之。敷布所念。
夢のみに、繼ぎて見ゆれば、さゝ島の、磯越す波の、しく〳〵思ほゆ。

天ぎらひ—空曇り
日方—西南より吹き來る風
水莖の—枕詞
少女らが云々—三句まで序、機織るに絲筋の迷はぬために櫛をもてかきあぐるをいふ
たく島—出雲國か「たく」はたぐるの約か、又はかき寄せ整ふる意の古語といふ
入潮爲—一説「入潮」は「朝入」の誤にて「漁りする」
水鳥の—水鳥の如く
さゝ島—(一)石見國(二)隱岐國、(三)本文「小」は

夜中の方に―夜半に向ひてといふ意、一說、本文「夜」は「度」の誤にて「となかのかたに」又一說「夜中潟」といふ地名

みわの崎―紀伊國
よき路―避け路

風早―紀伊國にさる地あるならん

明石之潮爾―一說「潮」は「浦」の誤か

沖へな離り―沖の方に漕ぎ行く勿れ
金の岬―筑前國三笠郡
我は忘れじ―一訓「あをば忘れじ」
志加の皇神―神名帳に筑前國糟屋郡志加神社とある神

狹夜深而。夜中乃方爾。欝之苦。呼之舟人。泊兼鴨。
小夜更けて、夜中の方に、おほゝしく、呼びし舟人、はてにけむかも。

神前。荒石毛不所見。浪立奴。從何處將行。與奇道者無荷。
みわの崎、荒磯も見えず、浪立ちぬ。何處ゆ行かむ。よき路は無しに。

礒立。奧邊乎見者。海藻苅舟。海人榜出良之。鴨翔所見。
磯に立ち、沖邊を見れば、海布刈舟、海人漕ぎ出らし、鴨翔ける見ゆ。

風早之。三穗乃浦廻乎。榜舟之。船人動。浪立良下。
風早の、三穗の浦曲を、漕ぐ舟の、舟人騷ぐ。浪立つらしも。

吾舟者。明石之潮爾。榜泊牟。奧方莫放。狹夜深去來。
我が舟は、明石の濱に、漕ぎはてむ。沖へな離り。小夜更けにけり。

千磐破。金之三崎乎。過鞆。吾者不忘。牡鹿之須賣神。
千早振る、金の岬を、過ぎぬとも、我は忘れじ。志加の皇神。

檝はな引きそ—急ぎ漕ぐ勿れ、引くは檝をあらふかにつかふことといへど、只檝を使ふな即ち舟を漕がずに止め置けの意と聞ゆ、一訓「檝をばな引き」

裹持將去—「つとに持て行かむ」との訓もあれどいかゞ

海の底—枕詞
吹かぬか—吹けかし

おほば山—紀伊國か

若浦爾。白浪立而。奧風。寒暮者。山跡之所念。
和歌の浦に、白浪立ちて、奧つ風、寒き夕は、大和し思ほゆ。

爲妹。玉乎拾跡。木國之。湯等乃三埼二。此日鞍四通。
妹がため、玉を拾ふと、紀の國の、由良の岬に、此の日暮しつ。

吾舟乃。梶者莫引。自山跡。戀來之心。未飽九二。
我が舟の、檝はな引きそ。大和より、戀ひ來し心、未だ飽かなくに。

玉津島。雖見不飽。何爲而。裹持將去。不見人之爲。
玉津島、見れども飽かず、如何にして、包み持て行かむ。見ぬ人のため。

綿之底。奧己具舟乎。於邊將因。風毛吹額。皮不立而。
海の底、沖漕ぐ舟を、邊に寄せむ、風も吹かぬか。波立たずして。

大葉山。霞蒙。狹夜深而。吾船將泊。停不知文。
おほば山、霞たなびき、小夜更けて、我が舟はてむ、泊り知らずも。

名草山。事西在來。吾戀。千重一重。名草目名國。
名草山、言にしありけり。我が戀の、千重の一重も、慰めなくに。

安太部去。小爲手乃山之。眞木葉毛。久不見者。蘿生爾家里。
あだへ行く、緒捨の山の、眞木の葉も、久しく見ねば、苔むしにけり。

玉津島。能見而伊座。青丹吉。平城有人之。待問者如何。
玉津島、よく見て去ませ。青丹吉、奈良なる人の、待ち問はば如何に。

鹽滿者。如何將爲跡香。方便海之。神我手渡。海部未通女等。
潮滿たば、如何にせむとか、海の、神が手渡る、海人少女ども。

玉津島。見之善雲。吾無。京往而。戀幕思者。
玉津島、見てしよけくも、我はなし。都に行きて、戀はまく思へば。

黑牛乃海。紅丹穗經。百磯城乃。大宮人四。朝入爲良霜。
くろうしの海、紅匂ふ、百敷の、大宮人し、漁すらしも。

名草山—紀伊國名草郡

あだへ—英多（アダ）へなるべし
緒捨の山—紀伊國牟婁郡といへど定かならず

去ませ—去にませ、行き給へ

神が手渡る—一說、本文「手」は「戶」の誤にて「神が門渡る」也、海上の波荒く恐しき所と、いかゞ

見てしよけくも—「し」は助辭、「よけくも」は「よくも」
戀はまく思へば—再び見たしと思ふ故に、一訓「こひまく思へば」

くろうし—紀伊國
大宮人—供奉の女房をさすか、この前後從駕の人の歌と見ゆ

明石の門浪—明石海峡の浪
背の山の—常に妹山に對ひ居て戀ひずあるが羨し
朝もよし—枕詞
ともしくも—羨しくも
めのみだに—めは見えの約也、略解に目にのみだにといへるはいかゞ
阿提—紀伊國、後の在田郡
絲鹿の山—在田郡

粟島爾。許枳將波等。思鞆。赤石門浪。未佐和來。
粟島に、漕ぎ渡らむと、思へども、明石の門浪、未だ騒げり。

妹爾戀。余越去者。勢能山之。妹爾不戀而。有之乏左。
妹に戀ひ、我が越え行けば、背の山の、妹に戀ひずて、あるがともしさ。

人在者。母之最愛子曾。麻毛吉。木川邊之。妹與背之山。
人ならば、母がまな子ぞ。朝もよし、紀の川の邊の、妹と背の山。

吾妹子爾。吾戀行者。乏雲。並居鴨。妹與勢能山。
我妹子に、我が戀ひ行けば、ともしくも、並び居るかも。妹と背の山。

妹當。今曾吾行。目耳谷。吾耳見乞。事不問侶。
妹があたり、今ぞ我が行く、めのみだに、我に見えこそ。言問はずとも。

足代過而。絲鹿乃山之。櫻花。不散在南。還來萬代。
阿提過ぎて、絲鹿の山の、櫻花、散らずもあらなむ。還り來るまで。

大海の云々―譬喩の歌か
思へや―思へばにや
玉の浦―紀伊國か
我が潛き來し―我が海中に入りて取り來し
沖つ白玉―鮑
見者―「見」の下に「人」を脱せしか
しはゝ〳〵しふを―未詳、一說、「志夫乎」は「爾水乎」の誤にて、「やゝ〳〵にこげ」か、靜かにゆるやかに漕げの意
見まく欲り云々―我が見まく欲りする里の隱れ行くが惜し
沖つ波云々―戀の歌

大海之。水底豐三。立浪之。將依思有。礒之清左。
大海の、水底とよみ、立つ浪の、寄らむと思へる、磯のさやけさ。
自荒礒毛。益而思哉。玉之浦。離小島。夢石見。
荒磯ゆも、まして思へや、玉の浦、離れ小島の、夢にし見ゆる。
礒上爾。爪木折燒。爲汝等。吾潛來之。奧津白玉。
磯の上に、爪木折り燒き、汝がためと、我が潛き來し、沖つ白玉。
濱清美。礒爾吾居者。見者。白水郎可將見。釣不爲爾。
濱清み、磯に我が居れば、見む人は、海人とか見らむ、釣もせなくに。
奧津梶。漸々志夫乎。欲見。吾爲里乃。隱久惜毛。
沖つ檝、しは〳〵しふを、見まく欲り、我がする里の、隱らく惜しも。
奧津波。部都藻纏持。依來十方。君爾益有。玉將縁八方。
沖つ波、邊つ藻卷き持ち、寄り來とも、君にましたる、玉寄らめやも。
一云。奧津浪。邊波布敷。縁來登母。

麻衣、著れば懷し。紀の國の、妹背の山に、麻蒔く我妹。

右七首者。藤原卿作。未レ審二年月一。

欲得裹登。乞者令取。貝拾。吾乎沾莫。奥津白浪。

裹もがと、乞はば取らせむ、貝拾ふ、我を濡らすな。沖つ白浪。

手取之。柄二忘跡。礒人之曰師。戀忘貝。言二師有來。

手に取りし、からに忘ると、海人の言ひし、戀忘貝、言にしありけり。

求食爲跡。礒二住鶴。曉去者。濱風寒彌。自妻喚毛。

あさりすと、礒に住む田鶴、明け行けば、濱風寒み、己妻呼ぶも。

藻苅舟。奥榜來良之。妹之島。形見之浦爾。鶴翔所見。

藻刈舟、沖漕ぎ來らし。妹が島、形見の浦に、田鶴翔ける見ゆ。

吾舟者。從奥莫離。向舟。片待香光。從浦榜將會。

我が舟は、沖ゆな離り。迎へ舟、片待ちがてら、浦ゆ漕ぎあはむ。

麻衣云々—略解に麻衣を我も著てあれど麻まく女よ縁ありて睦まじく思ふと解せるはいかゞ也、古義にいふ如く麻衣をきるにつけてよしと見たりし麻蒔く女の樣が偲ばれてなつかしと見る方可ならん

裹—家裹

手に取りし—一訓「手に取るが」最も可

形見の浦—紀伊國名草郡か、妹が島も同じところなるべし

がてら—一訓「がてり」

息長鳥—枕詞

かし—舟を繫ぐ杙

なご江—名兒の海にや、越中の名ご江にてはあらじ、一說「江」は「潟」の誤にて、第三句より「せむな、子潟の濱邊」

出入乃河—入出水河（イリイヅミガハ）の誤か、イヅミガハは泉川

家思ふらしも—家に思ふらしも、家人の思へば旅に馬の蹟くといふ諺ありしにや

まつちの山—紀伊國

背の山、妹の山—紀伊國、川を隔てゝ相對す

事許せやも—事許せばか、即ち夫のあはんといふを妹の納得したればかの意

浪間より—一訓「浪の間ゆ」

大海に、暴風な吹きそ、息長鳥、爲奈の港に、舟はつるまで。

舟盡。可志振立而。廬利爲。名子江乃濱邊。過不勝鳧。

船はてて、かし振立てて、廬せむ。なご江の濱邊、過ぎがてぬかも。

妹門。出入乃河之。瀬速見。吾馬爪衝。家思良下。

妹が門、でいりの川の、瀬を早み、我が馬蹟く。家思ふらしも。

白栲爾。丹保布信土之。山川爾。吾馬難。家戀良下。

白妙に、匂ふまつちの、山川に、我が馬なづむ。家戀ふらしも。

勢能山爾。直向。妹之山。事聽屋毛。打橋渡。

背の山に、直に向へる、妹の山、事許せやも、打橋渡す。

木國之。狹日鹿乃浦爾。出見者。海人之燈火。浪間從所見。

紀の國の、雜賀の浦に、出でて見れば、海人の燈火、浪間より見ゆ。

麻衣。著者夏樫。木國之。妹背之山二。麻蒔吾妹。

數悲哭—「哭」は「喪」の誤か
浪越しに見ゆ—浪の彼方に遙に見ゆ
袖通り—袖を通して
飽浦—紀伊國
山越えて—枕詞か、又第四に掛けて見るべきか
遠津の濱—紀伊國か
我が來るまでに—本文「吾」は「返」の誤にて「かへり來む迄」かともいふ
含みてあり待て—蕾みて待つて居れ

鳥自物。海二浮居而。奥津浪。驂乎聞者。數悲哭。
鳥じ物、海に浮き居て、沖つ浪、騒ぐを聞けば、數多悲しも。

朝菜寸二。眞梶榜出而。見乍來之。三津乃松原。浪越似所見。
朝凪に、眞楫漕ぎ出て、見つゝ來し、三津の松原、浪越しに見ゆ。

朝入爲流。海未通女等之。袖通。沾西衣。雖干跡不乾。
漁する、海人少女らが、袖通り、濡れにし衣、干せどかわかず。

網引爲。海子哉見。飽浦。淸荒礒。見來吾。
網引する、海人とや見らむ。飽浦の、淸き荒磯を、見に來し我を。

右一首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

山越而。遠津之濱之。石管自。迄吾來。含而有待。
山越えて、遠津の濱の、岩躑躅、我が來るまでに、含みてあり待て。

大海爾。荒莫吹。四長鳥。居名之湖爾。舟泊左右手。

印南野、日笠―共に播磨國
天傳ふ―枕詞

家にして―家に歸りて後

鞆―備後國

好去而―義を以て「まさきゆきて」ともよむべし
丈夫の云々―鞆の序

印南野は、行き過ぎぬらし。天傳ふ、日笠の浦に、波立てる見ゆ。
　一云。思賀麻江者。許藝須疑奴良思。

家爾之氏。吾者將戀名。印南野乃。淺茅之上爾。照之月夜乎。
家にして、我は戀ひむな。印南野の、淺茅が上に、照りし月夜を。

荒礒超。浪乎恐見。淡路島。不見哉將過。幾許近乎。
荒磯越す、浪を恐み、淡路島、見ずや過ぎなむ。幾許近きを。

朝霞。不止輕引。龍田山。船出將爲日者。吾將戀香聞。
朝霞、止まずたなびく、龍田山、船出せむ日は、我戀ひむかも。

海人小船。帆毳張流登。見左右荷。鞆之浦回二。浪立有所見。
海人小船、帆かも張れると、見るまでに、鞆の浦まに、浪立てる見ゆ。

好去而。亦還見六。丈夫乃。手二卷持在。鞆之浦回乎。
よく行きて、復歸り見む。丈夫の、手に卷き持たる、鞆の浦まを。

何處にか、船乘りしけむ。高島の、香取の浦ゆ、漕ぎ出來る船。

斐太人之。眞木流云。爾布乃河。事者雖通。船會不通。
飛驒人の、眞木流すとふ、丹生の川、ことは通へど、船ぞ通はぬ。

霰零。鹿島之崎乎。浪高。過而夜將行。戀敷物乎。
霰降り、鹿島の崎を、浪高み、過ぎてや行かむ。戀しきものを。

足柄乃。筥根飛超。行鶴乃。乏見者。日本之所念。
足柄の、箱根飛び越え、行く田鶴の、ともしき見れば、大和し思ほゆ。

夏麻引。海上滷乃。奧津洲爾。鳥者簀竹跡。君者音文不爲。
夏そ引く、海上潟の、沖つ洲に、鳥は集けど、君は音もせぬ。

若狹在。三方之海之。濱淸美。伊往變良比。見跡不飽可聞。
若狹なる、三方の海の、濱淸み、い行き歸らひ、見れど飽かぬかも。

印南野者。往過奴良之。天傳。日笠浦。波立見。

來る―一訓「來し」
飛驒人―古へ飛驒の國より木匠多く出でたれば木匠をも杣人をもいひならはせり
丹生の川―大和國
ことは通へど云々―これは譬喩の歌なるべし
霰降り―枕詞
鹿島―常陸國
過ぎてや行かむ―其の地のさまのめでたく戀しけれどあかで過ぎ行かん
行く田鶴の―都の方へ也
夏そ引く―枕詞
海上―上總國
君は音もせぬ―旅行く君は音信もせぬ、「せぬ」は「せず」と訓ずべからん
い行き歸らひ―いは發語、行き歸り〳〵して

眞野—攝津國

漁すと云々—これは譬喩の歌

八重折る—浪の幾重にも打寄するさま

湖者八十—一説「者」は「有」の誤にて「湖八十有り」

草結びけむ—旅寢すること、一説、しるしに草を結ぶ也

細波—近江國

高島—近江國

古に、ありけむ人の、求めつゝ、衣に摺りけむ。眞野榛原。

朝入爲等。礒爾吾見之。莫告藻乎。誰島之。白水郎可將刈。

漁すと、礒に我見し、神馬藻を、何れの島の、海人か刈るらむ。

今日毛可母。奥津玉藻者。白浪之。八重折之於丹。亂而將有。

今日もかも、沖つ玉藻は、白浪の、八重折るが上に、亂れてあらむ。

近江之海。湖者八十。何爾加。君之舟泊。草結兼。

近江の海、港は八十、何處にか、君が舟はて、草結びけむ。

佐左浪乃。連庫山爾。雲居者。雨曾零智否。反來吾背。

細波の、なみくら山に、雲居れば、雨ぞ降るちふ。歸り來我が背。

大御舟。竟而佐守布。高島之。三尾勝野之。奈伎左思所思。

大御舟、はてて候ふ、高島の、三尾の勝野の、渚し思ほゆ。

何處可。舟乘爲家牟。高島之。香取乃浦從。己藝出來船。

圓方―伊勢國
洲鳥―洲に住む鳥
浪立てや―浪立てばにや、本文「也」舊本「巳」とあるを略解に改めし也、舊に從つて「浪立てば」と訓じても通ぜぬにはあらじか
愛智、智多―尾張國

潟―干潟
あさり―餌を求むること
一訓「いそみ」

己が妻呼ぶ―一訓「おのづま呼ぶも」

覊旅作

離家。旅西在者。秋風。寒暮丹。雁喧渡。
家離り、旅にしあれば、秋風の、寒き夕に、雁鳴き渡る。

圓方之。湊之渚鳥。浪立也。妻唱立而。邊近著毛。
圓方の、湊の洲鳥、浪立てや、妻呼び立てて、邊に近づくも。

年魚市方。鹽干家良思。知多乃浦爾。朝榜舟毛。奧爾依所見。
愛智潟、潮干にけらし。智多の浦に、朝漕ぐ舟も、沖に寄る見ゆ。

鹽干者。共滷爾出。鳴鶴之。音遠放。礒回爲等霜。
潮干れば、共に潟に出で、鳴く田鶴の、聲遠ざかる。あさりすらしも。

暮名寸爾。求食爲鶴。鹽滿者。奧浪高三。己妻喚。
夕凪に、あさりする田鶴、潮滿てば、沖浪高み、己が妻呼ぶ。

古爾。有監人之。覓乍。衣丹揩牟。眞野之榛原。

朝け—朝明の略
亂れてあらむ—玉藻海松などの也といへど、只餘波の亂れ散ると見てあるべし
遠里小野—地名、宣長は「をりのをの」と六言也といへり
盛り過ぎ行く—色の褪せ行くをいふ
時つ風—潮時の風
吹かまく知らに—吹かんも知らねば
朝けの潮に—朝海の穩かなる内に
刈りてな—刈りてん
音之淸羅—「羅」一本「緗」

奈呉乃海之。朝開之奈凝。今日毛鴨。磯之浦回爾。亂而將有。
なごの浦の、朝けの餘波、今日もかも、磯の浦まに、亂れてあらむ。

住吉之。遠里小野之。眞榛以。須禮流衣乃。盛過去。
住吉の、遠里小野の、眞榛もて、摺れる衣の、盛り過ぎ行く。

時風。吹麻久不知。阿胡乃海之。朝明之鹽爾。玉藻苅奈。
時つ風、吹かまく知らに、あごの海の、朝けの潮に、玉藻刈りてな。

住吉之。奥津白浪。風吹者。來依留濱乎。見者淨霜。
住吉の、沖つ白浪、風吹けば、來寄する濱を、見れば淸しも。

住吉之。岸之松根。打曝。縁來浪之。音之淸羅。
住吉の、岸の松が根、打ちさらし、寄り來る浪の、音し淸しも。

難波方。鹽干丹立而。見渡者。淡路島爾。多豆渡所見。
難波潟、潮干に立ちて、見渡せば、淡路の島に、田鶴渡る見ゆ。

行くとふ道―一説「云」は「去」の誤にて「行きにし道」
言にしありけり―戀忘貝といふは名のみにして仲仲さる事はなしと也
偲ばむ―賞せん
大伴の―枕詞
打ちさらし―打ちは接頭語、さらすは洗ふ也
拾ひしく―「く」は助辭
雨は降る―一訓「雨は降り」
あご―住吉の名兒をあごともとなへしにや

住吉爾。往云道爾。昨日見之。戀忘貝。事二四有家里。
住吉に、行くとふ道に、昨日見し、戀忘貝、言にしありけり。

墨吉之。岸爾家欲得。奥爾邊爾。緣白浪。見乍將思。
住吉の、岸に家もがも。沖に邊に、寄する白浪、見つゝ偲ばむ。

大伴之。三津之濱邊乎。打曝。因來浪之。逝方不知毛。
大伴の、三津の濱邊を、打ちさらし、寄り來る浪の、行方知らずも。

梶之音曾。髣髴爲鳴。海未通女。奥藻苅爾。舟出爲等思母。
檝の音ぞ、仄にすなる。海人少女、沖つ藻刈りに、舟出すらしも。

住吉之。名兒之濱邊爾。馬並而。玉拾之久。常不所忘。
住吉の、名兒の濱邊に、馬並めて、玉拾ひしく、常忘らえず。

雨者零。借廬者作。何暇爾。吾兒之鹽干爾。玉者將拾。
雨は降る、假廬は作る、何時の間に、あごの潮干に、玉は拾はむ。

松浦船—肥前國松浦の船

浦ま—浦曲

茅渟の海—和泉國

干せどかわかず—いたく濡れたるをいふ

めづらしき—愛らしき、一二の句は「すむ」といはん序

戀忘貝—契沖云「忘貝は美しき貝なる故に見ればうき事を忘るとて名づくとぞ」

作夜深而。穿江水手鳴。松浦船。梶音高之。水尾早見鴨。
小夜更けて、堀江漕ぐなる、松浦船、檝の音高し。澪早みかも。

悔毛。滿奴流鹽鹿。墨江之。岸乃浦回從。行益物乎。
悔しくも、滿ちぬる潮か。住吉の、岸の浦まゆ、行かましものを。

爲妹。貝乎拾等。陳奴乃海爾。所沾之袖者。雖涼常不干。
妹が爲め、貝を拾ふと、茅渟の海に、濡れにし袖は、干せどかわかず。

目頰敷。人乎吾家爾。住吉之。岸乃黃土。將見因毛欲得。
めづらしき、人を我家に、住吉の、岸の埴生を、見む由もがも。

暇有者。拾爾將往。住吉之。岸因云。戀忘貝。
暇あらば、拾ひに行かむ。住吉の、岸に寄るとふ、戀忘貝。

馬雙而。今日吾見鶴。住吉之。岸之黃土。於萬世見。
馬並めて、今日我が見つる、住吉の、岸の埴生を、萬代に見む。

氏河乎。船令渡呼跡。雖喚。不所聞有之。檝音毛不為。
宇治川を、船渡せをと、呼ばへども、聞えざるらし。檝の音もせず。

千早人。氏川浪乎。淸可毛。旅去人之。立難為。
千早人、宇治川浪を、淸みかも、旅行く人の、立ちがてにする。

攝津作

志長鳥。居名野乎來者。有間山。夕霧立。宿者無為。
息長鳥、為奈野を來れば、有馬山、夕霧立ちぬ。宿は無くして。
一本云。猪名乃浦廻乎榜來者。

武庫河。水尾急嘉。赤駒。足何久激。沾祁流鴨。
武庫川の、水を早みか、赤駒の、足搔くそゝぎに、濡れにけるかも。

命。幸久吉。石流。垂水水乎。結飲都。
命を、幸くあらむと、岩走る、垂水の水を、掬びて飲みつ。

今は寄らまし―思ふ人の我に
木積―流るゝ芥、一訓「こつ」木屑の義、又本文「來」は「成」の誤ならん
渡せを―渡せよ
呼ばへども―呼べども
千早人―枕詞
立ちがてにする―立ち去り難く思ふ
息長鳥―枕詞
為奈野―河邊郡か豊島郡か
そゝぎ―散りかゝる水、一訓「たぎちに」
幸久吉―一說、「吉」は「在」の誤
石流―「流」は「激」の誤
岩走る―枕詞
垂水―豊島郡

夢の曲、言にしありけり。現にも、見て來しものを、思ひし思へば。

皇祖神之。神宮人。冬薯蕷葛。彌常敷爾。吾反將見。

天皇の、神の宮人、まさきづら、彌常敷きに、我がかへり見む。

能野川。石迹柏等。時齒成。吾者通。萬世左右二。

吉野川、いはとがしはと、常磐なす、我は通はむ。萬代までに。

山背作

氏河齒。與杼湍無之。阿自呂人。舟召音。越乞所聞。

宇治川は、淀瀬なからし。網代人、舟呼ばふ聲、遠近聞ゆ。

氏河爾。生菅藻乎。河早。不取來爾家里。裹爲益緒。

宇治川に、生ふるすが藻を、川早み、取らず來にけり。裹にせましを。

氏人之。譬乃足白。吾在者。今齒王良增。木積不來友。

宇治人の、譬の網代、我ならば、今は寄らまし。木積ならずとも。

夢の曲―吉野の内
言にしありけり―名のみなりけり

神の宮人―官人をいふ
まさきづら―まさきのかづら、常葉なる蔓草の稱といふ、一說「ところづら」にて常敷きの序
いはとがしは―本文、一說、石常磐（イハトコシハ）、下の常磐と同じ詞なれども其の磐の常磐なるが如くにと重ねいへるのみ

淀瀬なからし―淀瀬なかるらし、網代は水の淀みなきところに立つるものなれば斯くいふ
すが藻―藻の名か、或はすがは淸の意か
裹―家裹
吾在者―一說「吾」は「君」の誤か
王良增―「王」一本「生」、共に「與」の誤か
宇治人云々―宇治の里人の物の譬によくいふ網代の義か、二句誤あらんといふ

走井—一訓「はしゐ」渡りは我は云々—我は渡りてはえ行かぬの意、「がてぬ」は「がて」といふに同じ

あしびなす—枕詞

蓋しくも—若しは
下樋—琴の腹のうつろなる所

こゞしき—險しき

落ちたぎつ、走井の水の、清くあれば、渡りは我は、行きがてぬかも。

安志妣成。榮之君之。穿之井之。石井之水者。雖飲不飽鴨。

「あしびなす、榮えし君が、掘りし井の、石井の水は、飲めど飽かぬかも。

詠和琴

琴取者。嘆先立。蓋毛。琴之下樋爾。嬬哉匿有。

琴とれば、嘆き先立つ。蓋しくも、琴の下樋に、妻や籠れる。

芳野作

神左振。磐根己凝敷。三芳野之。水分山乎。見者悲毛、

神さぶる、岩根こゞしき、三吉野の、水分山を、見れば悲しも。

皆人之。戀三吉野。今日見者。諸拑戀來。山川清見。

皆人の、戀ふる三吉野、今日見れば、うべも戀ひけり。山川清み。

夢乃和太。事西在來。寤毛。見而來物乎。念四念者。

秋沙—一名小鴨

鳴く千鳥—鳴く千鳥と蛙—一說河津にて其所の景色をいふといへどいかが

遊ぶ—一訓「さをどる」

岩橋—川瀬に石をおき並べ飛石としたる橋

度者—一說「者」は「布」の誤にて「渡らふ」と訓ずべきか

山の間に、渡る秋沙の、行きて居む、其の川の瀬に、浪立つなゆめ。

佐保河之。清河原爾。鳴知鳥。河津跡二。忘金都毛。
佐保川の、清き川原に、鳴く千鳥、蛙と二つ、忘れかねつも。

佐保河爾。小驟千鳥。夜三更而。爾音聞者。宿不難爾。
佐保川に、遊ぶ千鳥、夜降ちて、汝が聲聞けば、寢ねがてなくに。

思二故郷一

清湍爾。千鳥妻喚。山際爾。霞立良武。甘南備乃里。
清き瀬に、千鳥妻呼び、山のまに、霞立つらむ。神奈備の里。

年月毛。未經爾。明日香河。湍瀬由渡之。石走無。
年月も、未だ經なくに、明日香川、瀬々ゆ渡りし、岩橋も無し。

詠レ井

隕田寸津。走井水之。清有者。度者吾者。去不勝可聞。

行く川の―枕詞　過ぎにし人―古人　うちぶれ立てり―今はさる人なくなりてめで手折ることもなければわびしくしをれて立てり

峰の―一訓「たけの」　苔筵―筵を敷きたる如くなめらかにむせる苔

通路の―一訓「ゆく路の」　篠薄―薄は篠の如く細きものなればいふ

古に、ありけむ人も、我が如か、三輪の檜原に、かざし折りけむ。

往川之。過去人之。手不折者。裏觸立。三和之檜原者。

行く川の、過ぎにし人の、手折らねば、うらぶれ立てり。三輪の檜原は。

右二首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

詠レ蘿

三芳野之。青根我峰之。蘿席。誰將織。經緯無二。

三芳野の、青根が峰の、苔筵、誰か織りけむ。經緯無しに。

詠レ草

妹所等。我通路。細竹爲酢寸。我通。靡細竹原。

妹許と、我が通路の、篠薄、我し通はば、靡け篠原。

詠レ鳥

山際爾。渡秋沙乃。往將居。其河瀬爾。浪立勿湯目。

言擧せねども―神代紀に天照大神素盞鳴尊の十握の劒を乞ひ取りて三段に打折り天の眞名井に振りすゝぎて吹きうつるいぶきの狹霧に生れませる神の御名を田心姫といひし古事をおもひ出でてよめりと略解にいへる、いかがあるべき

我が紐を云々―「ゆふ」の序

ゆふは川―吉野の內、元暦本の訓は「ゆふやがは」

よき人―古の歌人をさす、本文「并」は「淑」の誤か

こを誰か知る―略解に「よき人見きと傳ふれど其人を誰かよく知る意と解し、古義は「人并見管此乎偲吉」にて「人さへ見つゝこゝを偲びき」と訓せん、かといへど、共にいかが、猶可勘

降りなづむ―なづむは滯る意か、露霜の置きたまるをいふ

露霜―水霜

漁すと―一訓「島みすと」島みは島めぐりの意

礒に見し花―妹に譬ふ

吾紐乎。妹手以而。結八川。又還見。萬代左右荷。

我が紐を、妹が手もちて、ゆふは川、復還り見む。萬代までに。

妹之紐。結八川内乎。古之。并人見等。此乎誰知。

妹が紐、ゆふは川內を、古の、よき人見きと、こを誰か知る。

詠レ露

烏玉之。吾黒髪爾。落名積。天之露霜。取者消乍。

ぬば玉の、我が黒髪に、降りなづむ、天の露霜、取れば消えつゝ。

詠レ花

島廻爲等。礒爾見之花。風吹而。波者雖緣。不取不止。

漁すと、礒に見し花、風吹きて、波は寄るとも、取らずは止まじ。

詠レ葉

古爾。有險人母。如吾等架。彌和乃檜原爾。挿頭折兼。

澪ー水筋
井手ー井堰
さ檜隈ーさは接頭語、大和國高市郡
よせ言はむかもー人のいひ立てさわがん、一訓「ことよせんかも」
齋種ー苗代に蒔く種子、水口祭などして蒔けばいふ
あらきー大和國宇智郡か或は新墾田をいへるか
足結ひ出てー足結ひは足に結ひ纏ふ脛巾（ハバキ）足結ひして出でて、一說、本文「出」は「者」の誤にて「あゆひは」
ふる川ー初瀨か石上か
偲びけむー慕ひけん
はね蘰ー花蘰、上古少女の髮飾とせるもの
妹ー少女
うら若みーこゝろまで「いさ」といはん序
いさいさ川ー「いさ」は人を誘ふ時に發する感動詞、いさ川は大和國添上郡、二つの「さ」共に濁るべし
霧ぞ結べるー一訓「霧たなびけり」
走井ー逢坂にも伊勢國にもあり

泊瀨川。流水尾之。湍乎早。井提越浪之。音之淸久。
泊瀨川、流るゝ澪の、瀨を早み、井手越す波の、音のさやけく。

佐檜乃熊。檜隈川之。瀨乎早。君之手取者。將緣言毳。
さ檜隈、檜隈川の、瀨を早み、君が手取らば、よせ言はむかも。

湯種蒔。荒木之小田矣。求跡。足結出所沾。此水之湍爾。
齋種蒔く、あらきの小田を、求めむと、足結ひ出て濡れぬ、此の川の瀨に。

古毛。如此聞乍哉。偲兼。此古河之。淸瀨之音矣。
古も、斯く聞きつゝや、偲びけむ。此のふる川の、淸き瀨の音を。

波禰蘰。今爲妹乎。浦若三。去來率去河之。音之淸左。
はね蘰、今する妹を、うら若み、いさいさ川の、音のさやけさ。

此小川。白氣結。瀧至。八信井上爾。事上不爲友。
此の小川、霧ぞ結べる、たぎち行く、走井の上に、言擧せねども。

大君の―枕詞
三笠の山―大和國添上郡春日山の内
細谷川―細き谷川
今しくは―「しく」は助辭、今は、一訓「今しきは」
馬並めて―四句の上に置きかへて見よ
越え來て―吉野山を
見つゝ―今日の如くと補ふ
白木綿花に―白木綿花の如くに
我を―「を」は感嘆詞、よ

大王之。御笠山之。帶爾爲流。細谷川之。音乃淸也。
大君の、三笠の山の、帶にせる、細谷川の、音のさやけさ。

今敷者。見目屋跡念之。三芳野之。大川余杼乎。今日見鶴鴨。
今しくは、見めやと思ひし、三芳野の、大川淀を、今日見つるかも。

馬並而。三芳野河乎。欲見。打越來而曾。瀧爾遊鶴。
馬並めて、三芳野川を、見まく欲り、打越え來てぞ、瀧に遊びつる。

音聞。目者未見。吉野河。六田之與杼乎。今日見鶴鴨。
音に聞き、目には未だ見ぬ、吉野川、六田の淀を、今日見つるかも。

河豆鳴。淸川原乎。今日見而者。何時可越來而。見乍偲食。
蛙鳴く、淸き川原を、今日見ては、何時か越え來て、見つゝ偲ばむ。

泊瀨川。白木綿花爾。墮多藝都。瀨淸跡。見爾來之吾乎。
泊瀨川、白木綿花に、落ちたぎつ、瀨をさやけみと、見に來し我を。

此方巨勢山―古義に「いで巨勢山」と訓まんといへり
巨勢山―大和國
名ならし―名なるらし
ありといへ―ありといへ
御櫛笥の―枕詞、本文一本「櫛」の上に「三」あり
二上山―大和國

片岡―大和國葛下郡
むかつを―向きあへる峯
なみむか―生並ばんか、今年の夏までには成長して陰をやなさんの意、或は本文「比」は「成」の誤にて「ならむか」か
病足―「病」は「痛」の誤か
行く水の―行く水の如く

我が背子を、此方巨勢山と、人はいへど、君も來まさず。山の名ならし。

木道爾社。妹山在云。櫛上。二上山母。妹許曾有來。

紀路にこそ、妹山ありといへ。御櫛笥の、二上山も、妹こそありけれ。

詠レ岳

片崗之。此向峯。椎蒔者。今年夏之。陰爾將比疑。

片岡の、此のむかつをに、椎蒔かば、今年の夏の、陰になみむか。

詠レ河

卷向之。病足之川由。往水之。絶事無。又反將見。

纏向の、あなしの川ゆ、行く水の、絶ゆること無く、復還り見む。

黑玉之。夜去來者。卷向之。川音高之母。荒足鴨疾。

ぬば玉の、夜さり來れば、纏向の、川音高しも。嵐かも疾き。

右二首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

鳴神の―枕詞

三諸―三輪山
兒らが手を―枕詞
つぎの宜しも―山並のつづきの美しきをほめていふ

色服―一説「服色」
甘酒を―枕詞、一説「うまさけ」と四言

三諸就―「就」は「能」の誤かと略解にいひ、古義はその説を誤の甚しきものと極言し「御室齋」の借字なりといへり
三輪山―三輪山の檜原を

動神之。音耳聞。巻向之。檜原山乎。今日見鶴鴨。
鳴神の、音のみ聞きし、纏向の、檜原の山を、今日見つるかも。

三毛侶之。其山奈美爾。兒等手乎。巻向山者。繼之宜霜。
三諸の、其の山並に、兒らが手を、纏向山は、つぎの宜しも。

我衣。色服染。味酒。三室山。黄葉爲在。
我が衣、色に染めなむ。甘酒を、三室の山は、黄葉しにけり。

右三首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

三諸就。三輪山見者。隱口乃。始瀬之檜原。所念鴨。
みもろつく、三輪山見れば、隱口の、泊瀬の檜原、思ほゆるかも。

昔者之。事波不知乎。我見而毛。久成奴。天之香具山。
古の、ことは知らぬを、我見ても、久しくなりぬ。天の香具山。

吾勢子乎。乞許世山登。人者雖云。君毛不來益。山之名爾有之。

足引之。山河之瀨之。響苗爾。弓月高。雲立渡。

足引の、山川の瀬の、鳴るなへに、ゆづきが嶽に、雲立ち渡る。

右二首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

大海爾。島毛不在爾。海原。絶塔浪爾。立有白雲。

大海に、島もあらなくに、海原の、たゆたふ浪に、立てる白雲。

右一首。伊勢從駕作。

詠レ雨

吾妹子之。赤裳裾之。將染湿。今日之霡霂爾。吾共所沾名。

我妹子が、赤裳の裾の、ひづちなむ、今日の小雨に、我さへ濡れな。

可融。雨者莫零。吾妹子之。形見之服。吾下爾著有。

通るべく、雨はな降りそ。我妹子が、形見の衣、我下に著たり。

詠レ山

鳴るなへに—鳴るにつれて

島もあらなくに—島には必ず山ありて雲も立つものなれば斯くいふ

ひづちなむ—一訓「ひづつらむ」

濡れな—濡れん

霜曇り—霜の降らんとする夜霧の如く曇るをいふ
見えぬ—見えぬを

妹があたり—妹の居るあたりに向ひて
木の間より云々—それを妹の見んため也

伴の緒廣き—大伴氏は武官の家柄にてその業多ければいふ
大伴に—大伴氏の守れる衛門府の陣をさしていふならん

あなし川、纒向—共に大和國城上郡
雲居—雲

水底の、玉さへさやに、見ゆべくも、照る月夜かも。夜の更け行けば。

霜雲入。爲登爾可將有。久堅之。夜度月乃。不見念者。
霜曇り、すとにかあらむ、久方の、夜渡る月の、見えぬ思へば。

山末爾。不知夜經月乎。何時母。吾待將座。夜者深去乍。
山の端に、いさよふ月を、何時とかも、我が待ち居らむ。夜は更けにつゝ。

妹之當。吾袖將振。木間從。出來月爾。雲莫棚引。
妹があたり、我が袖振らむ。木の間より、出で來る月に、雲な棚引き。

靫懸流。伴雄廣伎。大伴爾。國將榮常。月者照良思。
靫懸くる、伴の緒廣き、大伴に、國榮えむと、月は照るらし。

詠レ雲

痛足河。河浪立奴。巻目之。由槻我高仁。雲居立良志。
あなし川、川浪立ちぬ。纒向の、ゆづきが嶽に、雲居立つらし。

百敷の、大宮人の、退り出て、遊ぶ今宵の、月のさやけさ。

夜干玉之。夜渡月乎。將留爾。西山邊爾。塞毛有糠毛。

ぬば玉の、夜渡る月を、止めむに、西の山邊に、關もあらぬかも。

此月之。此間來者。且今跡香毛。妹之出立。待乍將有。

此の月の、こゝに來れば、今とかも、妹が出で立ち、待ちつゝあらむ。

眞十鏡。可照月乎。白妙乃。雲香隱流。天津霧鴨。

「眞十鏡」照るべき月を、白妙の、雲か隱せる、天つ霧かも。

久方乃。天照月者。神代爾加。出反等六。年者經去乍。

久方の、天照る月は、神代にか、出でかへるらむ、年は經につゝ。

烏玉之。夜渡月乎。何怜。吾居袖爾。露曾置爾鷄類。

ぬば玉の、夜渡る月を、面白み、我が居る袖に、露ぞ置きにける。

水底之。玉障淸。可見裳。照月夜鴨。夜之深去者。

退り出て—宮中より退出して

あらぬか—あれかし

此の月の云々—早こゝまで月の影の來つれば夜は更けたり、さらば今や來ん今や來んと云々

眞十鏡—枕詞

出でかへるらむ—立ちかへりては出づるならん、一說、遂には昔の神代の如き世にも立歸りて出で照すならん、共にいかゞ

我が—我が見つゝ居る

丈夫の、弓末振り起し、獵高の、野邊さへ淸く、照る月夜かも。

山末爾。不知與歷月乎。將出香登。待乍居爾。與曾降家留。

山の端に、いさよふ月を、出でむかと、待ちつゝ居るに、夜ぞ降ちける。

明日之夕。將照月夜者。片因爾。今夜爾因而。夜長有。

明日の宵、照らむ月夜は、片寄に、今宵に寄りて、夜長からなむ。

玉垂之。小簾之間通。獨居而。見驗無。暮月夜鴨。

「玉垂の、」小簾の間通り、獨り居て、見るしるしなき、夕月夜かも。

春日山。押而照有。此月者。妹之庭母。淸有家里。

春日山、押して照りたる、此の月は、妹が庭にも、さやけかりけり。

海原之。道遠鴨。月讀。明少。夜者更下乍。

海原の、道遠みかも、月夜見の、明少き、夜は降ちつゝ。

百師木之。大宮人之。退出而。遊今夜之。月淸左。

丈夫の云々―獵の序

獵高―大和國添上郡

夜ぞ降ちける―夜ぞ更けにける

片寄に云々―片より一つになりて今宵の長かれと也

玉垂の―枕詞

小簾の間通り―結句へつゞく、一説「小簾の間通し」と訓じ、見るしるしなきの句に接すといへり

見るしるしなき―見る甲斐なき

押して―押並べて

照りたる―一訓「照らせる」

明少き―一訓「光少き」

天の海—大空を喩ふ

此の月の云々—特に今宵の月が惜しと也

萬葉集卷第七

雜歌

詠レ天

天海丹。雲之波立。月船。星之林丹。榜隱所見。

天の海に、雲の波立ち、月の船、星の林に、漕ぎ隱る見ゆ。

右一首。柿本朝臣人麻呂之歌集出。

詠レ月

常者曾。[illegible]不念物乎。此月之。過匿卷。惜夕香裳。

常は嘗て、思はぬものを、此の月の、過ぎ隱れまく、惜しき宵かも。

丈夫之。弓上振起。借高之。野邊副清。照月夜可聞。

大曲の濱—攝津國

濱淸。浦愛見。神世自。千船湊。大和太乃濱。

濱淸み、浦うるはしみ、神代より、千船のはつる、大曲の濱。

右二十一首。田邊福麻呂之歌集中出也。

潮干れば、葦邊に騒ぐ、葦田鶴の、妻呼ぶ聲は、宮もとゞろに。

過二敏馬浦一時作歌一首并短歌

八千桙之。神之御世自。百船之。泊停跡。八島國。百船純乃。定而師。三犬女乃浦者。朝風爾。浦浪左和寸。夕浪爾。玉藻者來依。白沙清濱部者。去還。雖見不飽。諸石社。見人毎爾。語嗣。偲家良思吉。百世歴而。所偲將往。清白濱。

八千矛の、神の御代より、百船の、はつる泊りと、八洲國、百船人の、定めてし、敏馬の浦は、朝風に、浦浪騒ぎ、夕浪に、玉藻は來寄る。白眞沙、淸き濱邊は、往き還り、見れども飽かず。うべしこそ、見る人毎に、語り繼ぎ、偲びけらしき。百世歴て、偲ばえ行かむ。淸き白濱。

反歌二首

眞十鏡。見宿女乃浦者。百船。過而可往。濱有七國。

「眞十鏡」敏馬の浦は、百船の、過ぎて行く可き、濱ならなくに。

八千矛の神―大己貴命の御一名にして少彦名命と協力して天下を經營せし神なれば斯くいふ

偲びけらしき―「き」は「かし」と同じく語の末につけて其の意を強むる語

眞十鏡―枕詞

百船の云々―景色の見過し難きをいふ

- 櫂合之聲—「合」は衍か、古義は、もとのまゝにても通ずといへり
- 在り通ふ—度々行幸ありしかばいふ
- 海片附きて—海邊によりたるをいふ
- 朝羽振る—朝浪の打寄するを鳥の羽振りて飛び立つに喩ふ
- あまいしの—宣長説に、本文「石之」は「近二」の誤にて「うみ近み」
- 潮干のむた—潮の干ると共に
- 御食向ふ—枕詞
- 味原—攝津國東生郡、卽ち難波の宮所

見。朝羽振。波之聲躁。夕薙丹。櫂合之聲所聆。曉之。寐覺爾聞者。海石之。鹽干乃共。汭渚爾波。千鳥妻呼。葭部爾波。鶴鳴動。視人乃。語丹爲者。聞人之。視卷欲爲。御食向。味原宮者。雖見不飽香聞。

やすみしゝ、我が大君の、在り通ふ、難波の宮は、いさな取り、海片附きて、玉拾ふ、濱邊を近み、朝羽振る、浪の音騷ぎ、夕凪に、櫂の音聞ゆ、曉の、寢覺に聞けば、あまいしの、潮干のむた、浦洲には、千鳥妻呼び、葦邊には、田鶴鳴きとよみ、見る人の、語にすれば、聞く人の、見まく欲りする、御食向ふ、味原の宮は、見れど飽かぬかも。

反　歌二首

有通。難波乃宮者。海近見。漁童女等之。乘船所見。

あり通ふ、難波の宮は、海近み、海人少女等が、乘れる船見ゆ。

鹽干者。葦邊爾躁。白鶴乃。妻呼音者。宮毛動響二。

山高く——一訓「山高み」

在りが欲し——居らまほし

荒るらく——荒るゝ

移り去ぬれば——一訓「うつろひぬれば」紫香樂(シガラキ)の宮に也、續紀「天平十五年十二月、更造紫香樂宮、仍停恭仁宮造作焉」

三香の原、久邇の都は、山高く、川の瀬清み、在りよしと、人は言へども、在りよしと、我は思へど、古りにし、里にしあれば、國見れど、人も通はず、里見れば、家も荒れたり。はしけやし、斯くありけるか。三諸つく、鹿脊山の間に、咲く花の、色めづらしく、百鳥の、聲懐しく、在りが欲し、住みよき里の、荒るらく惜しも。

反　歌二首

三香原。久邇乃京者。荒去家里。大宮人乃。遷去禮者。
三香の原、久邇の都は、荒れにけり。大宮人の、移り去ぬれば。

咲花乃。色者不易。百石城乃。大宮人叙。立易去流。
咲く花の、色は變らず、百敷の、大宮人ぞ、立變りぬる。

難波宮作歌一首并短歌

安見知之。吾大王乃。在通。名庭乃宮者。不知魚取。海片就而。玉拾。濱邊乎近

少女等が云々—鹿脊（挊）の序、挊はうみを卷きかくる具
うみを—麻などをつむぎたるもの
朝去らず—朝毎に
とよもす—轟き響かす
狛山—相樂郡
在吉迹—一說「在」は「住」の誤か
波之異耶之—以下二句ばかり落ちたるか
三諸著—（一）「三諸」は「生緒」の誤か、（二）「生緒繫」の誤にて、「うみをかく」

媙嬬等之。續麻繋云。鹿脊山。時之往者。京師跡成宿。
少女等が、うみを懸くとふ、鹿脊の山、時の行ければ、都となりぬ。

鹿脊之山。樹立矣繁三。朝不去。寸鳴響爲。鶯之音。
鹿脊の山、木立を繁み、朝去らず、來鳴きとよもす、鶯の聲。

狛山爾。鳴霍公鳥。泉河。渡乎遠見。此間爾不通。
狛山に、鳴く郭公、泉川、渡を遠み、此處に通はず。

一云。渡遠哉。不通有武。

春日悲傷三香原荒墟作歌一首幷短歌

三香原。久邇乃京師者。山高。河之瀨淸。在吉迹。人者雖云。在吉跡。吾者雖念。故去之。里爾四有者。國見跡。人毛不通。里見者。家裳荒有。波之異耶之。如此在家留可。三諸著。鹿脊山際爾。開花之。色目列敷。百鳥之。音名束敷。在杲石。住吉里乃。荒樂苦惜喪。

百樹なす—一說、本文「成」は「盛」の誤、もるは森の用言にて茂る
錦なす—錦の如く
天ぎらふ—天の曇る
さにづらふ—枕詞
泉川—相樂郡

者。天霧合。之具禮乎疾。狹丹頰歷。黄葉散乍。八千年爾。安禮衝之乍。天下。所知食跡。百代爾母。不可易。大宮處。

我が大君、神の命の、高知らす、布當の宮は、百樹なす、山は木高し、落ち激ぎつ、瀨の音も淸し。鶯の、來鳴く春邊は、巖には、山下光り、錦なす、花咲きをより、さ牡鹿の、妻呼ぶ秋は、天ぎらふ、時雨をいたみ、「さにづらふ」黄葉散りつゝ、八千歲に、生れ繼がしつゝ、天の下、知らしめさむと、百代にも、變る可からぬ、大宮所。

反　歌五首

泉川。往瀨之水之。絕者許曾。大宮地。遷往目。

泉川、行く瀨の水の、絕えばこそ、大宮所、遷ひ行かめ。

布當山。山並見者。百代爾毛。不可易。大宮處。

布當山、山並見れば、百代にも、變るべからぬ、大宮所。

布當の宮—三香原の都、山城國相樂郡
しゞに—繁く
花咲きをゝり—花がたわわに咲き
あなにやし—あゝ美し
あな貴—一訓「いとたふと」
君のまに—神ながら聞こし給ひて—山川の美しき國と聞き給ひて、一訓「聞かし給ひて」
さす竹の—枕詞
神しみ行かむ—神さび行かん

まに、宮柱、太敷き立てて、高知らす、布當の宮は、川近み、瀬の音ぞ淸き、山近み、鳥が音とよむ。秋されば、山もとゞろに、さ牡鹿は、妻呼びとよめ、春されば、岡邊もしゞに、巖には、花咲きをゝり、あなにやし、布當の原、あな貴、大宮所。うべしこそ、我が大君は、君のまに、聞こし給ひて、さす竹の、大宮此處と、定めけらしも。

反歌二首

三日原。布當乃野邊。淸見社。大宮處。定異等霜。
三日の原、布當の野邊を、淸みこそ、大宮所、定めけらしも。

山高來。川乃湍淸石。百世左右。神之味將往。大宮所。
山高く、川の瀬淸し。百世まで、神しみ行かむ、大宮所。

吾皇。神乃命乃。高所知。布當乃宮者。百樹成。山者木高之。落多藝都。湍音毛淸之。鸎乃。來鳴春部者。巖者。山下耀。錦成。花咲乎呼里。左牡鹿乃。妻呼秋

立變り—立ちは添へたる詞とも、都の建替れる義ともいふ

出で立つ毎に—出で立ちて見る毎に

鳥賀鳴慟—「慟」は「動」の誤か

鹿脊山—相樂郡

立變り、古き都と、成りぬれば、道の芝草、長く生ひにけり。
名付西。奈良乃京之。荒行者。出立毎爾。嘆思益。
懐きにし、奈良の都の、荒れ行けば、出で立つ毎に、嘆きし増さる。

讃二久邇新京一歌二首并短歌

明津神。吾皇之。天下。八島之中爾。國者霜。多雖有。里者霜。澤爾雖有。山並之。宜國跡。川次之。立合郷跡。山代乃。鹿背山際爾。宮柱。太敷奉。高知爲。布當乃宮者。河近見。湍音叙清。山近見。鳥賀鳴慟。秋去者。山裳動響爾。左男鹿者。妻呼令響。春去者。岡邊裳繁爾。巌者。花開乎呼理。痛何怜。布當乃原。甚貴。大宮處。諸己曾。吾大王者。君之隨。所聞賜而。刺竹乃。大宮此跡。定異等霜。
現つ神、我が大君の、天の下、八洲の中に、國はしも、多くあれども、里はしも、さはにあれども、山並の、宜しき國と、川並の、立合ふ里と、山城の、鹿脊山の

高しかす—高知らせます
陽炎の—枕詞
顔鳥—美しき鳥の樣なりとも雉子の雄とも翡翠とも呼子鳥ともいふ、未詳
射鉤山—一本「射駒」(一)飛鳥の八鉤山か(二)羽飼山の誤か、さらば春日
とよめ—とよませ、轟き響かし
天地の云々—天地のあらん限り
新代—傍訓「あたらよ」は略解のまゝなれど、古義にいへる如く「あらたよ」と訓ずべき事論なし
ひきのまに〳〵—天皇の率ゐさせ給ふまゝに
群鳥の—枕詞

やすみしゝ、我大君の、高しかす、大和の國は、皇祖の、神の御代より、敷きませる、國にしあれば、生れまさむ、御子のつぎ〳〵、天の下、知しまさむと、八百萬、千歲を兼ねて、定めけむ、奈良の都は、「陽炎の」春にしなれば、春日山、三笠の野邊に、櫻花、木のくれ隱り、顔鳥は、間なくしば鳴き、露霜の、秋さり來れば、射鉤山、飛火が岡に、萩の枝を、しがらみ散らし、さ牡鹿は、妻呼びとよめ、山見れば、山も見が欲し、里見れば、里も住み好し。武士の、八十伴の緒の、打延へて、里並みしけば、天地の、よりあひの極、萬代に、榮え行かむと、思ひにし、大宮すらを、たのめりし、奈良の都を、新代の、事にしあれば、大君の、ひきのまに〳〵、春花の、移ひ變り、「群鳥の」朝立ち行けば、さす竹の、大宮人の、蹈み平し、通ひし道は、馬も行かず、人も行かねば、荒れにけるかも。

反歌二首

立易。古京跡。成者。道之志婆草。長生爾異梨。

岩綱の—枕詞

若返り—若返りてあらば、一訓「をちかへり」

塊丹—一本「鬼丹」(タケニ)

石綱乃。又變若反。靑丹吉。奈良乃都乎。又將見鴨。

岩綱(いはづな)の、復若返(またわかがへ)り、靑丹(あをに)よし、奈良(なら)の都(みやこ)を、またも見(み)むかも。

悲二寧樂故京鄕一作歌一首并短歌

八隅知之。吾大王乃。高敷爲。日本國者。皇祖乃。神之御代自。敷座流。國爾之有者。阿禮將座。御子之嗣繼。天下。所知座跡。八百萬。千年矣兼而。定家牟。平城京師者。炎乃。春爾之成者。春日山。御笠之野邊爾。櫻花。木晩牢。貌鳥者。間無數鳴。露霜乃。秋去來者。射鉤山。飛火賀塊丹。芽乃枝乎。石辛見散之。狹男牡鹿者。妻呼令動。山見者。山裳見貌石。里見者。里裳住吉。物負之。八十伴緒乃。打經而。里並敷者。天地乃。依會限。萬世丹。榮將往迹。思煎石。大宮尙矣。恃有之。名良乃京矣。新世乃。事爾之有者。皇之。引乃眞爾眞荷。春花乃。遷日易。村鳥乃。旦立往者。刺竹之。大宮人能。踏平之。通之道者。馬裳不行。人裳往莫者。荒爾異類香聞。

年深みかも―年久しく經ぬればかも

たまきはる―枕詞
松が枝を云々―松に齡を契るなり

紅に―深く染みにしといはん料也

移ろふ―衰へ變りて故里となる

同月十一日登二活道岡一集二一株松下一飲歌二首

一松。幾代可歷流。吹風乃。聲之淸者。年深香聞。
一松、幾代か經ぬる、吹く風の、聲の澄めるは、年深みかも。

右一首。市原王作。

靈剋。壽者不知。松之枝。結情者。長等曾念。
たまきはる、命は知らず、松が枝を、結ぶ心は、長くとぞ思ふ。

右一首。大伴宿禰家持作。

傷二惜寧樂京荒墟一作歌三首　作者不レ審

紅爾。深染西。情可母。寧樂乃京師爾。年之歷去倍吉。
紅に、深く染みにし、心かも。奈良の都に、年の經ぬべき。

世間乎。常無物跡。今曾知。平城京師之。移徙見者。
世の中を、常無きものと、今ぞ知る。奈良の都の、移ろふ見れば。

越ゆるがからに―越ゆるばかりなるを

我が背子―友をさす

降りしく―一訓「降りしけり」

君松の樹に―松に待つを掛く

高丘河内連歌二首

故鄕者。遠毛不有。一重山。越我可良爾。念曾吾世思。

故鄕は、遠くもあらず、一重山、越ゆるがからに、思ひぞ我がせし。

吾背子與。二人之居者。山高。里爾者月波。不曜十方余思。

我が背子と、二人し居れば、山高み、里には月は、照らずともよし。

安積親王宴二左少辨藤原八束朝臣家一之日内舍人大伴宿禰家持作歌一首

久堅乃。雨者零敷。念子之。屋戸爾今夜者。明而將去。

久方の、雨は降りしく。思ふ兒が、宿に今宵は、明して行かむ。

十六年甲申春正月五日諸卿大夫集二安倍蟲麻呂朝臣家一宴歌一首作者不レ審

吾屋戸乃。君松樹爾。零雪乃。行者不去。待西將待。

我が宿の、君松の樹に、降る雪の、行きには行かじ、待ちにし待たむ。

言ひ來る―言ひ傳へし
若ゆちふ水ぞ―若ゆはわかやぐ、一訓「をつちふ」
續紀「養老元年九月丁未、天皇行幸美濃國、云々、甲子車駕還宮、十一月癸丑天皇臨軒詔曰、朕以今年九月到美濃國不破行宮、留連數日、因覽當耆郡多度山美泉、自盥手面、皮膚如滑、亦洗痛處、無不除愈、在朕之躬、甚驗、又就而飲浴者、或白髮反黑、或頽髮更生、或闇目如明、自餘痼疾皆平愈云云、改靈龜三年爲養老元年、云々」
宮仕へけむ―宮を作りて仕へ奉りけん
歸りにだにも、云々―立歸りになりとも、即ちつい一すなりとも行きて
山川―山と川
うべ知らすらし―知ろしめすは誠にことわりにてあらん

美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首

從古。人之言來流。老人之。變若云水曾。名爾負瀧之瀨。
古ゆ、人の言ひ來る、老人の、若ゆちふ水ぞ、名に負ふ瀧の瀨。

大伴宿禰家持作歌一首

田跡河之。瀧乎淸美香。從古。宮仕兼。多藝乃野之上爾。
多度川の、瀧を淸みか、古ゆ、宮仕へけむ。當耆の野の邊に。

不破行宮大伴宿禰家持作歌一首

關無者。還爾谷藻。打行而。妹之手枕。卷手宿益乎。
關無くは、歸りにだにも、打行きて、妹が手枕、まきて寢ましを。

十五年癸未　秋八月十六日内舍人大伴宿禰家持讚久邇京作歌一首

今造。久邇乃王都者。山河乃。淸見者。宇倍所知良之。
今造る、久邇の都は、山川の、淸きを見れば、うべ知らすらし。

右一首云々—後人の註也
將住—「住」は「往」の誤
後れにし人—故郷に留まれる妹
思はく—思うて、一訓「しぬばく」
しでの崎—(一)英虞郡か、(二)伊勢國朝明郡に志氏(シデ)神社あればその崎か
取りしでて—取垂れて、妹の安全を神に祈りつゝ行くさま、一説無事歸京して早く妹を見ん事を祈る也
狹殘—さゞむと訓むか、古義「獨殘行宮」なりといへり
行幸のまに—行幸のまゝに

右一首今案。吾松原在二三重郡一。相二去河口行宮一遠矣。若疑御二在朝明行宮一之時所レ製御歌。傳者誤レ之歟。

丹比屋主眞人歌一首

後爾之。人乎思久。四泥能埼。木綿取之泥而。將住跡其念。
後れにし、人を思はく、しでの崎、木綿取りしでて、行かむとぞ思ふ。

右案。此歌者不レ有二此行宮之作一乎。所二以然言一レ之。勅二大夫一從二河口行宮一還レ京。勿レ令二從駕一焉。何有下詠二思泥埼一作歌上哉。

狹殘行宮大伴宿禰家持作歌二首

天皇之。行幸之隨。吾妹子之。手枕不卷。月曾歷去家留。
天皇の、行幸のまに、我妹子が、手枕まかず、月ぞ經にける。

御食國。志麻乃海部有之。眞熊野之。小船爾乘而。奥部榜所見。
(御食つ國、)志摩の海人ならし。眞熊野の、小舟に乘りて、沖邊漕ぐ見ゆ。

高圓野―大和國添上郡

下り來る―一訓「下りける」

夜の經れば―夜を重ねたれば

吾乃松原―「吾」はあごとよみて志摩國英虞(アゴ)郡、宣長說に「乃」は「自」の誤にて「我が松原ゆ」

妹に戀ひ―枕詞

十二年己卯　天皇遊二獦高圓野一之時小獸泄二走堵里之中一於レ是適値二勇士一生而見レ獲卽以二此獸一獻二上御在所一副歌一首（獸名俗曰二牟射佐妣一）

丈夫之。高圓山爾。迫有者。里爾下來流。牟射佐妣曾此。

丈夫が、高圓山に、迫めたれば、里に下り來る、鼯鼠ぞこれ。

右一首大伴坂上郎女作レ之也。但未レ逕レ奏而小獸死斃。因レ此獻レ歌停レ之。

十二年庚辰　冬十月依二太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發一レ軍幸二于伊勢國一之時河口行宮內舍人大伴宿禰家持作歌一首

河口之。野邊爾廬而。夜乃歷者。妹之手本師。所念鴨。

河口の、野邊に庵りて、夜の經れば、妹が袂し、思ほゆるかも。

天皇御製歌一首

妹爾戀。吾乃松原。見渡者。潮干乃潟爾。多頭鳴渡。

妹に戀ひ　あがの松原、見渡せば、潮干の潟に、田鶴鳴き渡る。

おくまへて―おくめて、深く
ありこせぬかも―あれかし

不去―一本「不出」

里―家

橘の云々―古は都大路に樹木を植ゑしものと見ゆ

長門なる、沖つかり島、おくまへて、我が思ふ君は、千歳にもがも。

右一首。長門守巨曾倍對馬朝臣。

奥眞經而。吾乎念流。吾背子者。千年五百歳。有巨勢奴香聞。

おくまへて、我を思へる、我が背子は、千歳五百歳、ありこせぬかも。

右一首。右大臣和歌。

百磯城乃。大宮人者。今日毛鴨。暇無跡。里爾不去將有。

百敷の、大宮人は、今日もかも、暇を無みと、里に行かざらむ。

右一首。右大臣傳云。故豊島采女歌。

橘。本爾道履。八衢爾。物乎曾念。人爾不所知。

橘の、本に道履む、八衢に、物をぞ思ふ、人に知らえず。

右一首。右大辨高橋安麻呂卿語云。故豊島采女之作也。但或本云。三方沙彌戀ニ妻苑臣一作歌也。然則豊島采女當時當所口ニ吟此歌一歟。

さし頭の―紀伊國と土佐國とは海を隔てゝさし向へばいふ
出でますや―本文「出座」の下に「三字「耶」の下に一字脱す、この五字は「はしきや」とあるべきところなり
かけまくも―本文「繫」は「懸」の誤
荒人神―人と現はれ給ふ神、略解岡部氏の說を引きて「人」は「大」の誤かと辯じたれど今略す
うしはき給ひ―うしはくは領す、船の舳を守り給ひの意
くさづつみ―枕詞、宣長は「草」は「莫」の誤にて「つつみなく」かといへり
給はね―給へ
めづ子―愛子、本文「愛兒叙」の下なほ句のありしが落ちしか
參上る―我が八十氏人の云々―恐の序
恐の阪―大和國と河内國との境
追へる―(一)去るの意(二)本文「追」は「退」の誤にて「まかる」
大崎―紀伊國か
百船人云々―舟人も過ぎがてにする景色なるに我は非ある身とて心も留め得ず過ぎ行くの意

我が夫の君を、かけまくも、忌々し畏し。住吉の、荒人神、船の舳に、うしはき給ひ、著き給はむ、島の崎々、寄り給はむ、磯の崎々、荒き浪、風に遇はせず、くさづつみ、病あらせず、速けく、還し給はね。本つ國邊に。

父公爾。吾者眞名子叙。妣刀自爾。吾者愛兒叙。參昇。八十氏人乃。手向爲等。恐乃坂爾。幣奉。吾者叙追。遠杵土左道矣。

父君に、我はまな子ぞ。母刀自に、我はめづ子ぞ。參上る、八十氏人の、手向すと、恐の坂に、幣帛奉り、我はぞ追へる。遠き土佐路を。

反歌一首

大埼乃。神之小濱者。雖小。百船純毛。過迹云莫國。

大崎の、神の小濱は、狹けれど、百船人も、過ぐと言はなくに。

秋八月二十日宴右大臣橘家歌四首

長門有。奥津借島。奥眞經而。吾念君者。千歳爾母我毛。

布留の尊—乙麻呂、布留は石上と共に山邊郡にあり、石上氏はもと物部氏なるが、居地により賜れる氏か、されば石上布留とつゞけたり
手弱女の惑—續紀「天平十一年三月、石上朝臣乙麻呂姧久米連若賣配土左國、若賣配下總國」「惑」の一訓「さどひ」
馬じ物云々—からめとられて繩懸けられたる樣
しゝじ物云々—武士に打圍まれて送らるゝさま
古衣—枕詞
眞土の山—紀伊國、紀路を經て船にて土佐國へ渡りし故に斯くいふ
大君の云々—一說、次なる長歌の初なり

右一首。或云。元興寺之僧獨覺多智。未レ有二顯聞一。衆諸狎侮。因此僧作二此歌一。自嘆二身才一也。

石上乙麻呂卿配二土左國一之時歌三首幷短歌

石上。振乃尊者。弱女乃。惑爾緣而。馬自物。繩取附。肉自物。弓笑圍而。王。命恐。天離。夷部爾退。古衣。又打山從。還來奴香聞。

石上、布留の尊は、手弱女の、惑に由りて、馬じ物、繩取り附け、しゝじ物、弓箭圍みて、大君の、命畏み、天離る、鄙邊に退る、古衣、眞土の山ゆ、還り來ぬかも。

王。命恐見。刺並之。國爾出座耶。吾背乃公矣。繫卷裳。湯湯石恐石。住吉乃。荒人神。船舳爾。牛吐賜。附賜將。島之埼前。依賜將。礒乃埼前。荒浪。風爾不令遇。草管見。身疾不有。急。令變賜根。本國部爾。

大君の、命畏み、さし並の、國に出でますや。

海原之。遠渡乎。遊士之。遊乎將見登。莫津左比曾來之。
海原の、遠き渡を、雅男の、遊ぶを見むと、なづさひぞ來し。

右一首。書㆓白紙㆒懸㆓著屋壁㆒也。題云。蓬萊仙媛所㆓嚢㆒。蘰爲㆓風流秀才之士㆒矣。斯凡客不㆑所㆓望見㆒哉。

夏四月大伴坂上郎女奉㆑拜㆓賀茂神社㆒之時便超㆓相坂山㆒望㆓見近江海㆒而晩頭還來作歌一首

木綿疊。手向乃山乎。今日越而。何野邊爾。廬將爲子等。
木綿疊、手向の山を、今日越えて、何れの野邊に、庵せむ兒ら。

十年戊寅　元興寺之僧自嘆歌一首

白珠者。人爾不所知。不知友縱。雖不知。吾之知有者。不知友任意。
白珠は、人に知らえず、知らずともよし。知らずとも、我し知れらば、知らずともよし。

なづさひぞ來し―なづさふは渡る、仙女の蓬萊より遠き海路を渡り來りし由戲によめり、本文「莫」は「魚」の誤か

木綿疊―枕詞
手向の山―旅立つ人の手向するところ、これは相坂山の上にあるべし
兒ら―從者など、一本「吾等」（アレ）
自嘆―一本「自讚」

白珠は云々―自ら白珠に譬ふ、旋頭歌

春されば―春になれば
をゝりにをゝり―花のたわゝに咲き
島―前栽、作り庭をいふ

門に宿にも―門にも宿にも

待たましし―一訓「待たまし」待たれし也、從ふべし
たけそかに―たまゝゝ思ひ掛けなく等の意ならん

春去者。乎呼理爾乎呼里。鶯之。鳴吾島曾。不息通爲。
春されば、をゝりにをゝり、鶯の、鳴く我が島ぞ、止まず通はせ。

九年丁丑　春正月橘少卿并諸大夫等集ニ彈正尹門部王家ニ宴歌二首

豫。公來座武跡。知麻世婆。門爾屋戸爾毛。珠敷益乎。
豫め、君來まさむと、知らませば、門に宿にも、玉敷かましを。

右一首。主人門部王（後賜ニ姓大原眞人氏ニ也）

前日毛。昨日毛今日毛。雖見。明日左倍見卷。欲寸君香聞。
一昨日も、昨日も今日も、見つれども、明日さへ見まく、欲しき君かも。

右一首。橘宿禰文成（即少卿之子也）

榎井王後追和歌一首

玉敷而。待益欲利者。多鷄蘇香仁。來有今夜四。樂所念。
玉敷きて、待たましよりは、たけそかに、來たる今宵し、樂しく思ほゆ。

春二月諸大夫等集ニ左少辨巨勢宿奈麻呂朝臣家ニ宴歌一首

奥山の云々―「ふり」といはん序。ふりは增すとも―元皇族なれば年は經るともなりはくだらじといふ意なるべし、降―舊

來ちふに似たり―來れかしといふに似たり、されば必ず訪ひ來るべし。散りぬともよし―さて後はこの梅の花は散るも恨みじ

右冬十一月九日。從三位葛城王。從四位上佐爲王等。辭二皇族之高名一。賜二外家之橘姓一。已訖於レ時太上天皇皇后共在二于皇后宮一。以爲二肆宴一。而卽御二製賀レ橘之歌一。幷賜二御酒宿禰等一也。或云。此歌一首太上天皇御歌。但天皇皇后歌各有二一首一者其歌遺落。未レ得二探求一焉。今檢二案內一。八年十一月九日。葛城王等願二橘宿禰之姓一上レ表。以二十七日一依二表乞一賜二橘宿禰一。

橘宿禰奈良麻呂應レ詔歌一首

奥山之。眞木葉凌。零雪乃。零者雖益。地爾落目八方。

奥山の、眞木葉凌ぎ、降る雪の、ふりは增すとも、地に落ちめやも。

冬十二月十二日歌儛所之諸王臣子等集二葛井連廣成家一宴歌二首

比來古儛盛興。古歲漸晚。理宜三共盡二古情一。同唱二此歌一。故擬二此趣一。輒獻二古曲二節一。風流意氣之士。儻在二此集之中一。爭二發念一。心々和二古體一。

我屋戶之。梅咲有跡。告遣者。來云似有。散去十方吉。

我が宿の、梅咲きたりと、告げ遣らば、來ちふに似たり、散りぬともよし。

木すら妹と兄云々―(一)木にも蘖などいひて子孫といふべきものあればいふか、(二)一本のみならず數多く生ひ立てるをいふか

君が―君が來らずして夜は降ちつゝ―夜は更けつゝ

常葉―冬になりても枯れぬ葉

反歌一首

自神代。芳野宮爾。蟻通。高所知者。山河乎吉三。

神代より、芳野の宮に、在り通ひ、高知らせるは、山川を好み。

市原王悲ニ獨子一歌一首

不言問。木尙妹與兄。有云乎。直獨子爾。有之苦者。

言問はぬ、木すら妹と兄、ありとふを、只獨子に、あるが苦しさ。

忌部首黑麻呂恨ニ友賖來一歌一首

山之葉爾。不知世經月乃。將出香常。我待君之。夜者更降管。

山の端に、いさよふ月の、出でむかと、我が待つ君が、夜は降ちつゝ。

冬十一月左大辨葛城王等賜ニ姓橘氏一之時御製歌一首

橘花者。實左倍花左倍。其葉左倍。枝爾霜雖降。益常葉之樹。

橘は、實さへ花さへ、其の葉さへ、枝に霜降れど、彌常葉の樹。

思はえず―思ひがけなく珍らしく

見し給ふ―一訓「めし給ふ」何れにしても意は見させ給ふ也
神さびて―山は也
宜しなへ―川は宜しく淸しと也

不所念。來座君乎。佐保川乃。河蝦不令聞。還都流香聞。

思ほえず、來ませる君を、佐保川の、蛙聞かせず、歸しつるかも。

右内匠寮大屬桉作村主益人聊設二飮饌一。以饗二長官佐爲王一。未レ及二日斜一。王既還歸。於時益人怜二惜不厭之歸一。仍作二此歌一。

八年丙子　夏六月幸二于芳野離宮一之時山部宿禰赤人應レ詔作歌一首幷短歌

八隅知之。我大王之。見給。芳野宮者。山高。雲曾輕引。河速彌。湍之聲曾淸寸。神佐備而。見者貴久。宜名倍。見者淸之。此山乃。盡者耳社。此河乃。絶者耳社。百師紀能。大宮所。止時裳有目。

やすみしゝ、我大君の、見し給ふ、芳野の宮は、山高み、雲ぞたなびく、川速み、瀬の音ぞ淸き、神さびて、見れば貴く、宜しなへ、見ればさやけし、此の山の、盡きばのみこそ、此の川の、絶えばのみこそ、百敷の、大宮所、止む時もあらめ。

ふべしと也、一訓「ぬれあへむかも」雨に堪へられんやの意
兒ら—故郷の妻

立たし—立ち給ひ

押止—「止」は「弖」の誤か、一訓「おさへ止めよ」

珠—鰒珠
船出せり—と切りて「見ゆ」といへるは古格也

兒らがあらば、二人聞かむを、沖つ洲に、鳴くなる田鶴の、曉の聲。

右一首。守部王作。

丈夫者。御獵爾立之。未通女等者。赤裳須素引。清濱備乎。
丈夫は、御獵に立たし、少女らは、赤裳裾引く。清き濱邊を。

右一首。山部宿禰赤人作。

馬之歩。押止駐余。住吉之。岸乃黄土。爾保比而將去。
馬の歩み、押して止めよ。住吉の、岸の埴生に、匂ひて行かむ。

右一首。安倍朝臣豐繼作。

筑後守外從五位下葛井連大成遙見二海人釣船一作歌一首

海𡢳嬬。玉求良之。奥浪。恐海爾。船出爲利所見。
海人少女、珠求むらし。沖つ浪、恐き海に、船出せり見ゆ。

桉作村主益人歌一首

逢へらく—逢へるを

住吉の云々—「明けも見ず」の序
籠りのみやも—心の中にのみやも

懸けて—目に懸けて

網手綱—(一)「あたつな」と訓むか、網の大綱か、(二)一本「網」を「細」に作る、(三)「網手繩」の誤か、さらば「つなでなは」と訓むべく舟の大綱、(四)「綱手」の誤にて「乾有」と共に比句「つなでほしたり」と訓ずべし
茅渟—和泉國
しはつ—住吉の東方
堪へむかも—用ひるに堪

御民我、生けるしるしあり。天地の、榮ゆる時に、逢へらく思へば。

春三月幸二于難波宮一之時歌六首

住吉乃。粉濱之四時美。開藻不見。隱耳哉。戀度南。
住吉の、粉濱の蜆、明けも見ず、籠りのみやも、戀ひ渡りなむ。

右一首。作者未レ詳。

如眉。雲居爾所見。阿波乃山。懸而榜舟。泊不知毛。
眉の如、雲井に見ゆる、阿波の山、懸けて漕ぐ船、泊知らずも。

右一首。船王作。

從千沼回。雨曾零來。四八津之白水郎。網手綱乾有。沾將堪香聞。
茅渟わより、雨ぞ降り來る。しはつの海人、網手綱干せり。濡れば堪へむかも。

右一首。遊二覽住吉濱一還レ宮之時。道上守部王應レ詔作歌。

兒等之有者。二人將聞乎。奥渚爾。鳴成鶴乃。曉之聲。

月立ちて—月が改りて三日月の—形の類似より眉の序とす

眉根かき—人に戀ひらるれば眉のかゆきといふ事前にも見ゆ

まよびき—眉墨を畫き引きたること

遊びのみこそ—こそは希求の助詞、本文「與」は「乙」の誤か

古里の、飛鳥はあれど、青丹吉、奈良の飛鳥を、見らくしよしも。

同坂上郎女初月歌一首

月立而。直三日月之。眉根搔。氣長戀之。君爾相有鴨。

月立ちて、たゞ三日月の、眉根かき、け長く戀ひし、君に逢へるかも。

大伴宿禰家持初月歌一首

振仰而。若月見者。一目見之。人之眉引。所念可聞。

振りさけて、三日月見れば、一目見し、人のまよびき、思ほゆるかも。

大伴坂上郎女宴親族歌一首

如是爲乍。遊飲與。草木尙。春者生管。秋者落去。

斯くしつゝ、遊びのみこそ、草木すら、春は生ひつゝ、秋は枯れゆく。

六年甲戌　海犬養宿禰岡麻呂應詔歌一首

御民吾。生有驗在。天地之。榮時爾。相樂念者。

春草は、後は移ろふ、巖なす、常磐に座せ。貴き我君。

湯原王打酒歌一首

燒刀之。加度打放。丈夫之。禱豐御酒爾。吾醉爾家里。

燒太刀の、かど打放つ、丈夫が、ほぐ豐御酒に、我醉ひにけり。

紀朝臣鹿人跡見茂崗之松樹歌一首

茂岡爾。神佐備立而。榮有。千代松樹乃。歳之不知久。

茂岡に、神さび立ちて、榮えたる、千代松の樹の、年の知らなく。

同鹿人至二泊瀬河邊一作歌一首

石走。多藝千流留。泊瀬河。絶事無。亦毛來而將見。

石走る、激ぎち流るゝ、泊瀬川、絶ゆること無く、復も來て見む。

大伴坂上郎女詠二元興寺之里一歌一首

古郷之。飛鳥者雖有。靑丹吉。平城之明日香乎。見樂思奴裳。

打酒—「打」は「祈」の誤にて「さかほがひ」か

燒太刀—銳利なる刀

かど打放つ—かどは鎬か、鎬をけづるといふに似たり、一訓「かど打放ち」從ふべし

ほぐ—ことほぐ

石走る—枕詞、一訓「いはばしり」石上を走ると有意義に解す

元興寺—飛鳥寺、飛鳥より奈良へ移してそこをも飛鳥といへり

奴裳—「奴」は「好」の誤

行方を無みと—「と」は助辭、往方しれずなりし故に

月夜見男—月の男稱

繼ぎこそ—こそは希求の助詞

大能備爾鴨—誤字あるか、或は大野邊の意か、一説、「君來跡之我待（キミコトシワガマツニカモ）」又、一説「大能備」は「云知信」の誤にて「イフシルシニカモ」といへど、共にいかゞ、なほ可勘

妹が著る—枕詞

落易—「かれやすし」とも「ちりやすし」ともよむべし

雲隱。去方乎無跡。吾戀。月哉君之。欲見爲流。

雲隱り、行方を無みと、我が戀ふる、月をや君が、見まく欲りする。

湯原王月歌二首

天爾座。月讀壯子。幣者將爲。今夜乃長者。五百夜繼許增。

天に座す、月夜見男、賄はせむ。今宵の長さ、五百夜繼ぎこそ。

愛也思。不遠里乃。君來跡。大能備爾鴨。月之照有。

はしきやし、間近き里の、君來むと、おほのびにかも、月の照りたる。

藤原八束朝臣月歌一首

待難爾。余爲月者。妹之著。三笠山爾。隱而有來。

待ちがてに、我がする月は、（妹が著る）三笠の山に、籠りてありけり。

市原王宴禱二父安貴王一歌一首

春草者。彼波落易。巖成。常磐爾座。貴吾君。

雨籠り—枕詞
夜は降ちつゝ—夜は更けつゝ
かりたか—地名
おほゝしく—おぼろに
さゝらえをとこ—月の異稱
見らくしよしも—見らくは見る、しは助辭

安倍朝臣蟲麻呂月歌一首

雨隱。三笠乃山乎。高御香裳。月乃不出來。夜者更降管。

雨籠り、三笠の山を、高みかも、月の出で來ぬ。夜は降ちつゝ。

大伴坂上郎女月歌三首

獦高乃。高圓山乎。高彌鴨。出來月乃。遲將光。

かりたかの、高圓山を、高みかも、出で來る月の、遲く照るらむ。

烏玉乃。夜霧立而。不淸。照有月夜乃。見者悲沙。

ぬば玉の、夜霧の立ちて、おほゝしく、照れる月夜の、見れば悲しさ。

山葉。左佐良榎壯子。天原。門度光。見良久之好藻。

山の端の、さゝらえをとこ、天の原、と度る光、見らくしよしも。

右一首歌。或云。月別名曰二佐散良衣壯士一也。緣二此辭一作二此歌一。

豐前國娘子月歌一首 娘子字曰二大宅一姓氏未レ詳也

よく見てな―よく見てん、本文「見」の下に「名」を脱せしか

此の道にして―此の道より見やりて

男やも―男にしてや
立たず―一訓「立てず」

元歸―元暦本この所に「歸」の字ありと也

佐保風―佐保に吹く風

難波方。潮干乃奈凝。委曲見。在家妹之。待將問多米。
難波潟、潮干の波殘、よく見てな。家なる妹が、待ち問はむため。
直超乃。此徑爾師弖。押照哉。難波乃海跡。名附家良思裳。
直越えの、此の道にして、押照るや、難波の海と、名づけけらしも。

山上臣憶良沈痾之時歌一首

士也母。空應有。萬代爾。語續可。名者不立之而。
男やも、空しかるべき。萬代に、語り繼ぐべき、名は立たずして。
右一首。山上憶良臣沈痾之時。藤原朝臣八束使ニ河邊朝臣東人一令レ問ニ所レ疾之狀一。於レ是憶良臣報語已畢。有レ須拭レ涕悲嘆。（元歸）口ニ吟此歌一。

大伴坂上郎女與下姪家持一從ニ佐保一還ニ歸中西宅上歌一首

吾背子我。著衣薄。佐保風者。疾莫吹。及家左右。
我が背子が、著る衣薄し。佐保風は、甚くな吹きそ。家に到るまで。

たむだきて―手を拱きて
うづの御手―うづは高く嚴しき意にて物をほむる語、大御手
搔撫で云々―搔は接頭語、撫愛して勞はり給ふ
歸らむ日―「歸り來む日」と訓ずべし
此の豐御酒は―豐御酒は大御酒、此の今賜へる大御酒は
おほろかに―おろそかに、並大抵に
あらくをよみぞ―あるが喜ばしさにこそ
たまきはる―枕詞

酒曾。此豐御酒者。

食す國の、遠の朝廷に、汝等が、斯く退りなば、平けく、我は遊ばむ。たむだきて、我は座さむ。天皇我が、うづの御手以て、搔撫でぞ、勞ぎ給ふ、打撫でぞ、勞ぎ給ふ。歸らむ日、相飮まむ酒ぞ。此の豐御酒は。

反歌一首

丈夫之。去跡云道曾。凡可爾。念而行勿。丈夫之伴。

丈夫の、行くとふ道ぞ。おほろかに、思ひて行くな、丈夫の伴。

右御歌者。或云太上天皇御製也。

中納言安倍廣庭卿歌一首

如是爲嘗。在久乎好叙。靈剋。短命乎。長欲爲流。

斯くしつゝ、あらくをよみぞ、たまきはる、短き命を、長く欲りする。

五年癸酉　超草香山時神社忌寸老麻呂作歌二首

白雲の―枕詞
い行きさくみ―いは接頭語、踏み分けて行き
あた守る筑紫―西蕃の賊を守るために防人を遣しをかれたればいふ
山のそき―そきは退(ソ)くの名詞法、遠く離れたる處、山の限り
冬籠―枕詞、本文「成」は「盛」の誤
飛ぶ鳥の―飛鳥の如く
來まさね―歸り來給へ
丹躑躅―紅躑躅
山たづの―枕詞

言擧せず―かれこれと言葉に掛けて言ひ立つることもなく

天皇―聖武

白雲の、龍田の山の、露霜に、色づく時に、打越えて、旅行く君は、五百重山、い行きさくみ、あた守る、筑紫に至り、山のそき、野のそき見よと、伴の部を、分ち遣し、山彦の、應へむ極、谷蟇の、さ渡る極、國形を、見し給ひて、冬籠、春さり行かば、飛ぶ鳥の、早く來まさね。龍田路の、岡邊の路に、丹躑躅の、匂はむ時の、櫻花、咲きなむ時に、山たづの、迎へ參出む、君が來まさば。

反歌一首

千萬乃。軍奈利友。言擧不爲。取而可來。男常曾念。

千萬の、軍なりとも、言擧せず、取りて來ぬべき、男とぞ思ふ。

右檢二補任文一。八月十七日任二東山山陰西海節度使一。

天皇賜二酒節度使卿等一御歌一首幷短歌

食國。遠乃御朝庭爾。汝等之。如是退去者。平久。吾者將遊。手抱而。我者將御在。天皇朕。宇頭乃御手以。掻撫曾。禰宜賜。打撫曾。禰宜賜。將還來日。相飲

に大堤を築きて水を貯へ名づけて水城といふ由見ゆ
見てしが―見たし
神奈備―旅人の故鄕
さしずみの―枕詞、其訓其義數說ありて定め難し
栗栖―大和國忍海郡
散らむ時にし―今は盛りなれど行くことかなはれば
手向けむ―故鄕の神に或は先祖の墓などに

三年辛未　大納言大伴卿在㆓寧樂家㆒思㆓故卿㆒歌二首

須臾。去而見牡鹿。神名火乃。淵者淺而。瀨二香成良牟。
暫くも、行きて見てしが、神奈備の、淵は淺びて、瀨にかなるらむ。

指進乃。栗栖乃小野之。芽花。將落時爾之。行而手向六。
さしずみの、栗栖の小野の、萩が花、散らむ時にし、行きて手向けむ。

四年壬申　藤原宇合卿遣㆓西海道節度使㆒之時高橋連蟲麻呂作歌一首幷短歌

白雲乃。龍田山乃。露霜爾。色附時丹。打超而。客行公者。五百隔山。伊去割見。賊守。筑紫爾至。山乃曾伎。野之衣寸見世常。伴部乎。班遣之。山彥乃。將應極。谷潛乃。狹渡極。國方乎。見之賜而。冬木成。春去行者。飛鳥乃。早御來。龍田道之。岳邊乃路爾。丹管士乃。將薫時能。櫻花。將開時爾。山多頭能。迎參出六。公之來益者。

おほならば—大凡の人ならば
かもかも—かもかくも
畏みと—貴人なれば
我が振る袖を—見えずなるまで我は袖を振らん其のさまを
なめし—無禮なり
大和路—大和國へ上る路
筑紫の兒島—娘子の名兒島なれば吉備の兒島を過ぐる時思ひ出でんとなり
水莖の—枕詞
水城—天智紀に、筑紫國

凡有者。左毛右毛將爲乎。恐跡。振痛袖乎。忍而有香聞。
おほならば、かもかもせむを、畏みと、振りたき袖を、忍びたるかも。

倭道者。雲隱有。雖然。余振袖乎。無禮登母布奈。
大和路は、雲隱れたり、然れども、我が振る袖を、なめしと思ふな。

右太宰帥大伴卿兼二任大納言一向レ京上道。此日馬駐二水城一。顧二望府家一。于時送レ卿府吏之中有二遊行女婦一。其字曰二兒島一也。於是娘子傷二此易レ別。嘆二彼難レ會。拭レ涕自吟振レ袖之歌。

大納言大伴卿和ル歌二首

日本道乃。吉備乃兒島乎。過而行者。筑紫乃子島。所念香裳。
大和路の、吉備の兒島を、過ぎて行かば、筑紫の兒島、思ほえむかも。

丈夫跡。念在吾哉。水莖之。水城之上爾。泣將拭。
丈夫と、思へる我や、水莖の、水城の上に、涙拭はむ。

しをかしこめるなり

奈具佐末七國—「末」は「米」の誤か

大己貴云々—神代紀に大己貴命と少彦名命と心を合はせて天下を經營せし由あれば斯くいへり

名兒山—慰むの語源は和(ナゴ)なれば、名兒山にかけてよめり

娘子—名を兒島といふ

右勅使大伴道足宿禰饗二于帥家一。此日會二集衆諸一。相二誘驛使葛井連廣成一。言レ須レ作二歌詞一。登時廣成應レ聲即吟二此歌一。

冬十一月大伴坂上郞女發二帥家一上道超二筑前國宗形郡名兒山一之時作歌二首

大汝。少彦名能。神社者。名著始雞目。名耳乎。名兒山跡負而。吾戀之。千重一重裳。奈具佐末七國。

大己貴、少彦名の、神こそは、名づけ初めけめ。名のみを、名兒山と負ひて、我が戀の、千重の一重も、慰まなくに。

同坂上郞女海路見二濱貝一作歌一首

吾背子爾。戀者苦。暇有者。拾而將去、戀忘貝。

我が背子に、戀ふれば苦し。暇あらば、拾ひて行かむ、戀忘貝。

冬十二月太宰帥大伴卿上レ京時娘子作歌二首

隼人の—枕詞をやがて薩摩としてよめり
瀬戸—薩摩國出水郡勢度か
如かずけり—如かざりけり
次田—筑前國御笠郡
湯の原—御笠郡
戀ふれや—戀ふればにや
奥山の云々—畏くもの序
畏くも—歌よめといはれ

豐前守宇努首男人(ウヌノオフトヒト)歌一首

往還。常爾我見之。香椎瀉。從明日後爾波。見緣母奈思。

往(ゆ)き還(かへ)り、常(つね)に我(わ)が見(み)し、香椎潟(かしひがた)、明日(あす)ゆ後(のち)には、見(み)む由(よし)も無(な)し。

帥大伴卿遙思芳野離宮作歌一首

隼人乃。湍門乃磐母。年魚走。芳野之瀧爾。尙不及家里。

隼人(はやひと)の、瀬戸(せと)の巖(いはほ)も、鮎走(あゆはし)る、芳野(よしの)の瀧(たき)に、尙如(なほし)かずけり。

帥大伴卿宿次田(スキダノ)溫泉聞鶴喧作歌一首

湯原爾。鳴蘆多頭者。如吾。妹爾戀哉。時不定鳴。

湯(ゆ)の原(はら)に、鳴(な)く蘆田鶴(あしたづ)は、我(わ)が如(ごと)く、妹(いも)に戀(こ)ふれや、時(とき)わかず鳴(な)く。

天平二年庚午　勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰時歌一首

奥山之。磐爾蘿生。恐毛。問賜鴨。念不堪國。

奥山(おくやま)の、岩(いは)に苔(こけ)むし、畏(かしこ)くも、問(と)ひ給(たま)ふかも。思(おも)ひあへなくに。

さす竹の―枕詞（一〇二三）
佐保の山―大伴旅人の家のありしところ
君―旅人
大伴卿―旅人

こゝ―太宰府

子供―従者
潟―しほひかた
朝菜云々―朝食の料に磯菜摘むなり

時つ風―潮のさし来る時に起る風
刈りてな―刈りてん

さす竹の、大宮人の、家と住む、佐保の山をば、思ふやも君。

帥大伴卿和歌一首

八隅知之。吾大王乃。御食國者。日本毛此間毛。同登曾念。
やすみしゝ、我が大君の、御食つ國は、大和もこゝも、同じとぞ思ふ。

冬十一月太宰官人等奉レ拜二香椎廟一訖退歸之時馬駐二于香椎浦一各述レ懷作歌

帥大伴卿歌一首

去來兒等。香椎乃滷爾。白妙之。袖左倍所沾而。朝菜採手六。
いざ子供、香椎の潟に、白妙の、袖さへ濡れて、朝菜摘みてむ。

大貳小野老朝臣歌一首

時風。應吹成奴。香椎滷。潮干汭爾。玉藻苅而名。
時つ風、吹くべくなりね。香椎潟、潮干の浦に、玉藻刈りてな。

かゞよふ珠—輝く珠、鰒の貝、勿論女の喩

著奈良—奈良に著ならしといひ掛く

島松—島は奈良路にある地名か、一說本文「島」は「君」の誤か

あさり—餌をさがし

ともし—うらやまし

見渡せば、近きものから、石隱り、かゞよふ珠を、取らずは止まじ。

韓衣。服楢乃里之。島待爾。玉乎師付牟。好人欲得。

韓衣、著奈良の里の、島松に、玉をし附けむ。よき人もがも。

竿牡鹿之。鳴奈流山乎。越將去。日谷八君。當不相將有。

さ雄鹿の、鳴くなる山を、越え行かむ、日だにや君に、はた逢はざらむ。

右笠朝臣金村之歌中出也。或云。車持朝臣千年作之也。

膳王歌一首

朝波。海邊爾安左里爲。暮去者。倭部越。雁四とも母。

朝には、海邊にあさりし、夕されば、大和へ越ゆる、雁しともしも。

右作歌之年不レ審也。但以二歌類一便載二此次一。

太宰少貳石川朝臣足人歌一首

刺竹之。大宮人乃。家跡住。佐保能山乎者。思哉毛君。

忍ぶ思の種

佐保のうちに―大和國佐保の地の内に

宮もとゞろに―宮中にいひさわがれしをいふ、本文、下の「動」はなき方よろし

五年戊辰云々―端詞誤か、歌意は枉聞

さかひ給ふ―區域を定めて界を立て給ふ

守るとふ山―親などの嚴しく守り居る箱入娘を戀しての喩ならん

行く水に、禊ぎてましを、天皇の、み命畏み、百磯城の、大宮人の、玉梓の、道にも出でず、戀ふる此の頃。

反歌一首

梅柳。過良久惜。佐保乃内爾。遊事乎。宮動動爾。

梅柳、過ぐらく惜しみ、佐保のうちに、遊びし事を、宮もとゞろに。

右神龜四年正月。數王子及諸臣子等。集二於春日野一而作二打毬之樂一。其日忽天陰雨雷電此時宮中無二侍從及侍衞一。勅行二刑罰一。皆散二禁於授刀寮一。而妄不レ得レ出二道路一。于時悒憤即作二斯歌一。作者未レ詳。

五年戊辰　幸二于難波宮一作歌四首

大王之。界賜跡。山守居。守云山爾。不入者不止。

大君の、さかひ給ふと、山守据ゑ、守るとふ山に、入らずは止まじ。

見渡者。近物可良。石隱。加我欲布珠乎。不取不已。

散禁—禁足
折木四哭—一說「折」は「斷」の誤
來繼皆石此續—譯文は宣長の「皆」は「比日」「石」は「如」の誤にて、「キツギコノゴロカクツギテ」と訓ずる說による
眞葛はふ—葛は山に這ふものなればいふ
打靡く—枕詞
春さり行く—春になりゆく
武士の—枕詞
八十伴の緒は—「友並めて」にかゝる
菅の根—祓には菅を用ふ
忍草—草の名にあらず、

四年丁卯　春正月勅二諸王諸臣子等一散二禁於授刀寮一時作歌一首并短歌

眞葛延。春日之山者。打靡。春去往跡。山上丹。霞田名引。高圓爾。鶯鳴沼。物部乃。八十友能壯者。折木四哭之。來繼皆石此續。常丹有脊者。友名目而。遊物尾。馬名目而。往益里乎。待難丹。吾爲春乎。決卷毛。綾爾恐。言卷毛。湯湯敷有跡。豫。兼而知者。千鳥鳴。其佐保川丹。石二生。菅根取而。之努布草。解除而益乎。往水丹。潔而益乎。天皇之。御命恐。百礒城之。大宮人之。玉桙之。道毛不出。戀比日。

眞葛はふ、春日の山は、「打靡く」春さり行くと、山のへに、霞棚引き、高圓に、鶯鳴きぬ、武士の、八十伴の緒は、雁がねの、來繼ぐ此頃、斯くつぎて、常にありせば、友並めて、遊ばむものを、馬並めて、行かまし里を、待難てに、我がせし春を、かけまくも、あやに畏し、言はまくも、由々しからむと、豫め、兼ねて知りせば、千鳥鳴く、その佐保川に、いそに生ふる、菅の根取りて、忍草、拂へてましを、

風吹者。浪可將立跡。伺候爾。都多乃細江爾、浦隱往。

風吹けば、浪か立たむと、さもらふに、都多の細江に、浦隱れ居り。

過二敏馬浦一時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

御食向。淡路乃島二。直向。三犬女乃浦能。奥部庭。深海松採。浦回庭。名告藻苅。深見流乃。見卷欲跡。莫告藻之。己名惜三。間使裳。不遣而吾者。生友奈重二。

御食向ふ、淡路の島に、直向ふ、敏馬の浦の、沖邊には、深海松採り、浦まには、莫告藻刈る。深海松の、見まく欲しけど、莫告藻の、己が名惜しみ、間使も、遣らずて我は、生けりとも無し。

反歌一首

爲間乃海人之。鹽燒衣乃。奈禮名者香。一日母君乎。忘而將念。

須磨の海人の、鹽燒衣の、馴れなばか、一日も君を、忘れて思はむ。

右作歌年月未レ詳也。但以レ類故載ニ於此次一。

さもらふ—浪を恐れうかがふ意
都多の細江—播磨國か
御食向ふ—枕詞
敏馬—攝津國
欲しけど—欲しけれど
間使—折々の消息
須磨の海人の云々—馴るの序
忘れて思はむ—思ふ事を忘れんか

者。淡路乃。野島毛過。伊奈美嬬。辛荷乃島之。島際從。吾宅乎見者。青山乃。曾許十方不見。白雲毛。千重爾成來沼。許伎多武流。浦乃盡。往隱。島乃埼埼。隈毛不置。憶曾吾來。客乃氣長彌。

「あぢさはふ」妹が目しば見ずて、「敷妙の」枕もまかず、かにば巻き、作れる舟に、眞楫貫き、我漕ぎ來れば、淡路の、野島も過ぎ、いなみづま、辛荷の島の、島のまゆ、我家を見れば、青山の、そことも見えず、白雲も、千重になり來ぬ。漕ぎたむる、浦の盡、行き隱る、島の崎々、隈も置かず、思ひぞ我が來る。旅のけ長み。

反歌三首

玉藻苅。辛荷乃島爾。島回爲流。水鳥二四毛有哉。家不念有六。

玉藻刈る、辛荷の島に、あさりする、鵜にしもあれや、家思はざらむ。

島隱。吾榜來者。乏毳。倭邊上。眞熊野之船。

島隱り、我が漕ぎ來れば、ともしかも、大和へ上る、眞熊野の船。

あぢさはふ―枕詞
妹が目云々―妹をしばしば見ずして、宣長は「妹が目かれて」と訓じたり、從ふべし
敷妙の―枕詞
かにば巻き―かにばは樺、今舟の舳を蘇縄以て巻く如く樺の皮にて巻きたるならん
漕ぎたむる―漕ぎ廻る
行き隱る―我が乘れる舟の也
旅のけ長み―長き間旅にある故に
あさり―古義「しまみ」と訓じ、島を廻りて食をあさる意とす
あれや―あれかし
家思はざらむ―心なき鳥ともならば也
ともしも―うらやまし

稲見野—播磨國印南郡
藤井の浦—播磨國明石郡、本文「井」は「江」の誤ならん
あり通ひ見ますも云々—從來幾度も行幸ありしかばいふ
押しなべ—押しなびけて
さ寢る—さは接頭語
偲ばゆ—偲ばる、慕はる
下笑ましけむ—心のうちによろこばしくて打笑ましからん

やすみしゝ、我が大君の、神ながら、高知らしぬる、稲見野の、大海の原の、荒妙の、藤井の浦に、鮪釣ると、海人船騒ぎ、鹽燒くと、人ぞさはなる。浦をよみ、うべも釣りはす。濱をよみ、うべも鹽燒く。あり通ひ、見ますも著し、淸き白濱。

反歌三首

奥浪。邊波安美。射去爲登。藤江乃浦爾。船曾動流。
沖つ浪、邊波靜けみ、漁すと、藤江の浦に、船ぞ騒げる。

不欲見野乃。淺茅押靡。左宿夜之。氣長在者。家之小篠生。
印南野の、淺茅押しなべ、さ寢る夜の、け長くしあれば、家し偲ばゆ。

明方。潮干乃道乎。從明日者。下咲異六。家近附者。
明石潟、潮干の道を、明日よりは、下笑ましけむ。家近附けば。

過二辛荷島一時山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

味澤相。妹目不數見而。敷細乃。枕毛不卷。櫻皮纏。作流舟二二。眞梶貫。吾榜來

手弱女の―手弱女の如く
たもとほり―た は發語、めぐりまはりて
船檝を無み―實際に船檝の無きにはあらず、播磨にありて淡路の海人少女等の見る由もなきをかこちてよめる也

見とも―見るとも
しきる―頻りに寄する

ぎに、藻鹽燒きつゝ、海人少女、ありとは聞けど、見に行かむ、由の無ければ、丈夫の、心は無しに、手弱女の、思ひたわみて、たもとほり、我はぞ戀ふる。船檝を無み。

反　歌二首

玉藻苅。海未通女等。見爾將去。船梶毛欲得。浪高友。
玉藻刈る、海人少女ども、見に行かむ。船檝もがも。浪高くとも。

往回。雖見將飽八。名寸隅乃。船瀬之濱爾。四寸流思良名美。
行きめぐり、見とも飽かめや。なきずみの、船瀬の濱に、しきる白浪。

山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

八隅知之。吾大王乃。神隨。高所知流。稻見野能。大海乃原笑。荒妙。藤井乃浦爾。鮪釣等。海人船散動。鹽燒等。人曾左波爾有。浦乎吉美。宇倍毛釣者爲。濱乎吉美。諸毛鹽燒。蟻往來。御覽母知師。淸白濱。

御食つ國—天子の供御を奉る國
日の御調—日々の獻上物
海の底—枕詞
いくり—海底の石
鰒珠—鰒の貝
さはに云々—海底にくゞり入りて澤山採りて
貴き云々—そのさまのめでたきを見れば「天地の云々知らすらし」と打返して見よ。

なきずみの船瀨—播磨國か

天地の、遠きが如く、日月の、長きが如く、押照る、難波の宮に、我ご大君、國知らすらし。御食つ國、日の御調と、淡路の、野島の海人の、海の底、奥ついくりに、鰒珠、さはに潜きで、船並めて、仕へ奉るが、貴き見れば。

反　歌一首

朝名寸二。梶音所聞。三食津國。野島乃海子乃。船二四有良信。

朝凪に、楫の音聞ゆ。御食津國、野島の海人の、船にしあるらし。

三年丙寅　秋九月十五日幸二於播磨國印南野一時笠朝臣金村作歌一首并短歌

名寸隅乃。船瀨從所見。淡路島。松帆乃浦爾。朝名藝爾。玉藻苅管。暮菜寸二。藻鹽燒乍。海未通女。有跡者雖聞。見爾將去。餘四能無者。丈夫之。情者梨荷。手弱女乃。念多和美手。徘徊。吾者衣戀流。船梶雄名三。

なきずみの、船瀨ゆ見ゆる、淡路島、松帆の浦に、朝凪に、玉藻刈りつゝ、夕な

日日雖見—「雖」は「欲」の誤にて「日々に見が欲し」か

いさな取り—枕詞

邊つ浪—濱邊の浪

いやしく／＼に—いよいよ頻りに

月にけに—月に日に

いさきめぐれる—いは接頭語、浪の高く立ちめぐるをいふ

岸の埴生に云々—古旅行の時にはすり衣を著又埴にて衣を染めしことあればいふ

行かな—行かん

波因。邊津浪之。益敷布爾。月二異二。日日雖見。今耳二。秋足目八方。四良名美乃。五十開回有。住吉能濱。

「いさな取り、濱邊を淸み、打靡き、生ふる玉藻に、朝凪に、千重浪寄り、夕凪に、五百重浪寄る。邊つ浪の、いやしく／＼に、月にけに、日々に見るとも、今のみに、飽き足らめやも。白浪の、いさきめぐれる、住吉の濱。

反歌一首

白浪之。千重來緣流。住吉能。岸乃黃土粉。二寶比天山香名。

白浪の、千重に來寄する、住吉の、岸の埴生に、匂ひて行かな。

山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

天地之。遠我如。日月之。長我如。臨照。難波乃宮爾。和期大王。國所知良之。御食都國。日之御調等。淡路乃。野島之海子乃。海底。奥津伊久利二。鰒珠。左盤潛出。船並而。仕奉之。貴見禮者。

押照る—枕詞
葦垣の—枕詞
思ひ息ひて—思ひたゆみて、本文「息」は誤か、又「思ひやすみて」とも訓ず
つれも無く—由もなく、本文「爲」は「無」の誤
うみをなす—枕詞
長柄の宮—孝德紀に難波長柄豐﨑に遷都し給ふ由見ゆ
沖つ鳥—枕詞
あぢふの原—攝津國東生郡鯵生(アヂフ)野
武士の—枕詞
廬して云々—行幸によりて從駕の官人假廬したれば旅とはいへど都の如しといふ意
旅の宿り—官人の假廬

部乃。八十作雄者。廬爲而。都成有。旅者安禮十方。

「押照る、難波の國は、「葦垣の、古りぬる郷と、人皆の、思ひ息ひて、つれも無く、ありし間に、うみをなす、長柄の宮に、眞木柱、太高敷きて、食す國を、治め給へば、沖つ鳥、あぢふの原に、武士の、八十伴の緒は、廬して、都なしたり。旅にはあれども。

反歌二首

荒野等丹。里者雖有。大王之。敷座時者。京師跡成宿。

荒野らに、里はあれども、大君の、敷きます時は、都となりぬ。

海未通女。棚無小舟。榜出良之。客乃屋取爾。梶音所聞。

海人少女、棚無小舟、漕ぎ出らし。旅の宿りに、楫の音聞ゆ。

車持朝臣千年作歌一首并短歌

鯨魚取。濱邊乎淸三。打靡。生玉藻爾。朝名寸二。千重浪緣。夕菜寸二。五百重

跡見―狩獵にて鳥獸の逃げたる跡を見て其の行くへを求むる人、勢子
射部―弓射る人

幸矢―狩獵用の矢
亂れたる見ゆ―一説「さわぎたり見ゆ」

射日立渡。朝獵爾。十六履起之。夕狩爾。十里蹋立。馬並而。御獦曾立爲。春之茂野爾。

やすみしゝ、我ご大君は、み芳野の、秋津の小野の、野の上には、跡見据ゑ置きて、御山には、射部立て渡し、朝獵に、しゝ踏み起し、夕獵に、鳥踏み立て、馬並めて、御獵ぞ立たす、春の茂野に。

反歌一首

足引之。山毛野毛。御獦人。得物矢手挾。散動而有所見。

足引の、山にも野にも、御狩人、幸矢手挾み、亂れたる見ゆ。

右不レ審二先後一。但以レ便故載二於此次一。

冬十月幸二于難波宮一時笠朝臣金村作歌一首并短歌

忍照。難波乃國者。葦垣乃、古郷跡。人皆之。念息而。都禮母爲。有之間爾。續麻成。長柄之宮爾。眞木柱。太高敷而。食國乎。收賜者。奧鳥。味經乃原爾。物

芳野離者—「離」の下に「宮」を脱す

たゝなづく—枕詞
青墻隱り—青山四方にそばだち廻ればいふ
をゝり—たわむ
其の山の—其山の如く
とはに—「つねに」と訓ずべしともいふ

木ぬれ—梢

ひさき—楸、俗に木さゝげといふ
しば—しばしば

八隅知之。和期大王乃。高知爲。芳野離者。立名附。青墻隱。河次乃。淸河内曾。春部者。花咲乎遠里。秋去者。霧立渡。其山之。彌益益爾。此河之。絶事無。百石木能。大宮人者。常將通。

やすみしゝ、我ご大君の、高知らす、芳野の宮は、「たゝなづく」青墻隱り、川並の、淸き河内ぞ、春べは、花咲きをゝり、秋されば、霧立ち渡る、其の山の、彌益々に、この川の、絶ゆる事無く、百敷の、大宮人は、とはに通はむ。

反歌二首

三吉野乃。象山際乃。木末爾波。幾許毛散和口。鳥之聲可聞。

み吉野の、象山の間の、木ぬれには、幾許も騷ぐ、鳥の聲かも。

烏玉之。夜乃深去者。久木生留。淸河原爾。知鳥數鳴。

ぬば玉の、夜の更け行けば、ひさき生ふる、淸き河原に、千鳥しば鳴く。

安見知之。和期大王波。見芳野乃。飽津之小野笑。野上者。跡見居置而。御山者。

御山―離宮あればいふ
上邊―上流
しじにしあれば―繁く澤山に居る故
ともしみ―めでたく思ひて

人皆の云々―人皆の命も我が命も、人皆の世も我が世も
常ならぬかも―常にて變らずあれかし

下邊者。河津都麻喚。百磯城乃。大宮人毛。越乞爾。思自仁思有者。毎見。文丹乏。玉葛。絶事無。萬代爾。如是霜願跡。天地之。神乎曾禱。恐有等毛。

足引の、御山もさやに、落ちたぎつ、芳野の川の、川の瀬の、清きを見れば、上邊には、千鳥しば鳴く、下邊には、蛙妻呼ぶ。百磯城の、大宮人も、遠近に、しじにしあれば、見る毎に、あやにともしみ、玉葛、絶ゆる事無く、萬代に、斯くしもがもと、天地の、神をぞ禱る、畏かれども。

反　歌二首

萬代。見友將飽八。三吉野乃。多藝都河内之。大宮所。

萬代に、見とも飽かめや、三吉野の、たぎつ河内の、大宮所。

人皆乃。壽毛吾母。三吉野乃。多吉能床磐乃。常有沼鴨。

人皆の、命も我も、三吉野の、瀧の常磐の、常ならぬかも。

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

瀲爾。風吹者。白浪左和伎。潮干者。玉藻苅管。神代從。然曾尊吉。玉津島夜麻。

やすみしゝ、我ご大君の、常宮と、仕へ奉れる、さひか野ゆ、そがひに見ゆる、沖つ島、淸き渚に、風吹けば、白浪騷ぎ、潮干れば、玉藻刈りつゝ、神代より、然ぞ尊き、玉津島山。

反歌

奥島。荒磯之玉藻。潮干滿。伊隱去者。所念武香聞。

沖つ島、荒磯の玉藻、潮干滿ち、い隱ひなば、思ほえむかも。

若浦爾。鹽滿來者。潟乎無美。葦邊乎指天。多頭鳴渡。

和歌の浦に、鹽滿ち來れば、潟を無み、葦邊をさして、田鶴鳴き渡る。

右年月不レ記。但偁從二駕玉津島一也。因今檢二注行幸年月一以載レ之焉。

神龜二年乙丑　夏五月幸二于芳野離宮一時笠朝臣金村作歌一首并短歌

足引之。御山毛淸。落多藝都。芳野河之。河瀨乃。淨乎見者。上邊見。千鳥數鳴。

我ごー我が
さひか野ー紀伊國海部郡、和歌の浦の附近なりとぞ
常宮ー離宮をさす、一說「外つ宮」とよむべし
玉津島山ー海部郡
潮干滿ちー今は潮干なれども後に滿ちんことをいふ
い隱ひなば云々ーいは接頭語、潮滿ちて隱れなば惜しからん
潟ー干潟

うまごりの―枕詞
あやにともしく―あやしきまで珍らしく思ふ
鳴神の―枕詞
明け來れば―夜の
紐解かぬ―旅の樣、まろ寢するなり
見らくし―見る
畏けど―畏けれど、本文「畏」は「見」の誤にて「見つれども」か

「うまごりの、」あやにともしく、「鳴神の、」音のみ聞きし、三芳野の、眞木立つ山ゆ、見降せば、川の瀬毎に、明け來れば、朝霧立ち、夕されば、蛙鳴くなり。紐解かぬ、旅にしあれば、我のみして、淸き川原を、見らくし惜しも。

反歌一首

瀧上乃。三船之山者。雖畏。思忘。時毛日毛無。

瀧の上の、三船の山は、畏けど、思ひ忘るゝ、時も日も無し。

或本反歌曰。

千鳥鳴。三吉野川之。音成。止時梨二。所思公。

茜刺。日不並二。吾戀。吉野之河乃。霧丹立乍。

右年月不㆑審。但以㆓歌類㆒載㆓於此次㆒焉。或本云。養老七年五月幸㆓于芳野離宮㆒之時作。

神龜元年甲子冬十月五日幸㆓于紀伊國㆒時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

安見知之。和期大王之。常宮等。仕奉流。左日鹿野由。背上爾所見。奧島。淸波

年のはに―年毎に
見てしが―「が」は希ふ意の感動詞
河内―川の廻れるところ
鳴奈辨―「辨」は一本「利」に作れる方よろし

毎年。如是裳見牡鹿。三吉野乃。淸河内之。多藝津白波。
年のはに、斯くも見てしが、三吉野の、淸き河内の、たぎつ白波。
山高三。白木綿花。落多藝追。瀧之河内者。雖見不飽香聞。
山高み、白木綿花に、落ちたぎつ、瀧の河内は、見れど飽かぬかも。

或本反歌曰。

神柄加。見欲賀藍。三吉野乃。瀧河内者。雖見不飽鴨。
三吉野之。秋津乃川之。萬世爾。斷事無。又還將見。
泊瀨女。造木綿花。三吉野。瀧乃水沫。開來受屋。

車持朝臣千年作歌一首并短歌

味凍。綾丹乏敷。鳴神乃。音耳聞師。三芳野之。眞木立山湯。見降者。川之瀨每。開來者。朝霧立。夕去者。川津鳴奈辨。紐不解。客爾之有者。吾耳爲而。淸川原乎。見良久之惜裳。

清清―内一字誤か、下に古義「大宮と」と補ふ
瑞枝―みづ〳〵しき若枝
しゞに―繁く
栂の樹の―枕詞、本文「刀」は「都」の誤にてツガノキか
斯くし知らさむ―斯くの如く知らしめさん
神がらか―神はこのを山守る神

萬葉集 巻第六

雜歌

養老七年癸亥　夏五月幸二于芳野離宮一時笠朝臣金村作歌一首并短歌

瀧上之。御舟乃山爾。水枝指。四時爾生有。刀我乃樹能。彌繼嗣爾。萬代。如是二二知三。三芳野之。蜻蛉乃宮者。神柄香。貴將有。國柄鹿。見欲將有。山川乎。清清。諸之神代從。定家良思母。

瀧の上の、御舟の山に、瑞枝さし、しゞに生ひたる、栂の樹の、いや繼ぎ〳〵に、萬代に、斯くし知らさむ、み芳野の、蜻蛉の宮は、神がらか、貴かるらむ、國がらか、見が欲しからむ。山川を、清みさやけみ、うべし神代ゆ、定めけらしも。

反歌

「よしゑ、天地の」を補ふ
立ちあざり—立ち騷ぎ、あせり
くづほり—崩る
絶えぬれ—絶えぬれば
まひ—贈物、賄賂
下邊—黄泉、
通らせ—通れ
布施—「ふせ」とも訓ずべし
乞ひのむ—佛に
率行きて—天上へ
右一首云々—後人の書き入れにて、憶良の作たること疑なからん、此卷五は憶良の家集ともいひつべきもの也。

に持たる、我が子飛ばしつ、世の中の道。

反歌

和可家禮婆。道行之良士。末比波世武。之多敝乃使。於比弖登保良世。
若ければ、道行き知らじ。まひはせむ、下邊の使、負ひて通らせ。

布施於吉弖。吾波許比能武。阿射無加受。多太爾率去弖。阿麻治思良之米。
幣置きて、我は乞ひのむ。欺かず、直に率行きて、天路知らしめ。

右一首作者未レ詳。但以三裁レ歌之體似二於山上之操一載二此次一焉。

七種の寶—七寶、阿彌陀經には金、銀、瑠璃、玻璃、硨磲、赤珠、碼碯をいひ、法華經には金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、眞珠、玫瑰をいへり

何せむに—下に古義「願ひほりせむ」の一句を補ふ

明星の—枕詞

居れども共に—下に古義「かき撫でて、こと問ひ」と補ふ

夕星—太白星、古金星の稱

うへはな離り—一說本文「表」は「遠」、「我」は「柯」などの誤か、「とほくはなさかり」と訓み、遠く離るゝこと勿れの意、又「うへはほとり」

三枝の—枕詞

汝—古日

惡しけくも云々—よくもあしくも生先を見んと云云

たどき—たづき、手段

乞ひのみ—乞ひ禱り

掛らずも云々—神の惠に掛らんも掛らざらんも云云、古義「掛りも」の下に

伊乃知多延奴禮。立平杼利。足須里佐家婢。伏仰。武禰宇知奈氣古。乎爾持流。安我古登婆之都。世間之道。

世の人の、貴み願ふ、七種の、寶も我は、何せむに、我がなかの、生れ出でたる、白玉の、我が子古日は、「明星の」あくる朝は、敷妙の、床の邊去らず、立てれども、居れども共に、戯れ、夕星の、夕になれば、いざ寢よと、手を携はり、父母も、うへはな離り、「三枝の」中にを寢むと、うつくしく、汝が語へば、何時しかも、人となり出でて、惡しけくも、善けくも見むと、大船の、思ひ憑むに、思はぬに、横風の、爾母布敷可爾布敷可爾、覆ひ來ぬれば、爲む術の、たどきを知らに、白妙の、襷を掛け、十寸鏡、手に取り持ちて、天つ神、仰ぎ乞ひのみ、國つ神、伏して額づき、掛らずも、掛りも、神の、まに〳〵と、立ちあざり、我が乞ひのめど、暫くも、よけくは無しに、やう〳〵に、容貌くづほり、朝々、言ふこと止み、たまきはる、命絶えぬれ、立踊り、足摩り叫び、伏し仰ぎ、胸打ち嘆き、手

去神龜二年作レ之但以レ類故更載二於茲一。

天平五年六月丙申朔三日戊戌作。

戀二男子名古日(フルヒ)一歌三首　長一首 短二首

世人之。貴慕。七種之。寶毛我波。何爲。和我中能。産禮出有。白玉之。吾子古
日者。明星之。開朝者。敷多倍乃。登許能邊佐良受。立禮杼毛。居禮杼毛登母爾。
戲禮。夕星乃。由布弊爾奈禮婆。伊射禰余登。手乎多豆佐波里。父母毛。表者奈
佐我利。三枝之。中爾乎禰牟登。愛久。志我可多良倍婆。何時可毛。比等等奈理
伊弖天。安志家口毛。與家久母見牟登。大船乃。於毛比多能無爾。於毛波奴爾。
横風乃。爾母布敷可爾布敷可爾。覆來禮婆。世武須便乃。多杼伎乎之良爾。志路
多倍乃。多須吉乎可氣。麻蘇鏡。弖爾登利毛知弖。天神。阿布藝許比乃美。地祇。
布之弖額拜。可加良受毛。可賀利毛神乃。末爾麻仁等。立阿射里我。乞能米登。
須臾毛。余家久波奈之爾。漸漸。可多知久都保里。朝朝。伊布許登夜美。靈剋。

爾母云々—一說「爾母」は竄入、「布敷」は「爾波」の誤、「布敷可爾」の四字は衍文、須波可爾母

去なゝ—いづくへなりとも去なん
さやりぬ—さはりぬ、子供のことが氣にかゝりて行きかぬの意
富人の—此歌と次の「荒妙の」の歌とは、前なる貧窮問答歌の反歌ならんか
著るみ無み—富める人の家には著すべき子の少くて衣は多きをいふか
くたし—腐らし
水沫なす—水の泡の如く
倭文環—枕詞

奈具佐牟留。心波奈之爾。雲隱。鳴往鳥乃。禰能尾志奈可由。
慰むる、心はなしに、雲隱れ、鳴き行く鳥の、音のみし泣かゆ。

周幣母奈久。苦志久阿禮婆。出波之利。伊奈奈等思騰。許良爾佐夜利奴。
術も無く、苦しくあれば、出で走り、去なゝと思へど、子等にさやりぬ。

富人能。家能子等能。伎留身奈美。久多志須都良牟。絁綿良波母。
富人の、家の子供の、著るみ無み、くたし棄つらむ。絹綿らはも。

麁妙能。布衣遠陀爾。伎世難爾。可久夜歎敢。世牟周弊遠無美。
荒妙の、布衣をだに、著せがてに、斯くや歎かむ。爲む術を無み。

水沫奈須。微命母。栲縄能。千尋爾母何等。慕久良志都。
水沫なす、脆き命も、栲縄の、千尋にもがと、願ひ暮しつ。

倭文手纏。數母不在。身爾波在等。千年爾母何等。意母保由留加母。
倭文環、數にもあらぬ、身にはあれど、千年にもがと、思ほゆるかも。

婆。晝波母。歎加比久良志。夜波母。息豆伎阿可志。年長久。夜美志渡禮婆。月累。憂吟比。許等許等波。斯奈奈等思騰。五月蠅奈周。佐和久兒等遠。宇都弖弖波。死波不知。見乍阿禮婆。心波母延農。可爾可久爾。思和豆良比。禰能美志奈可由。

「たまきはる」うちの限は、平けく、安くもあらむを、事も無く、もなくもあらむを、世の中の、憂けくつらけく、いとのきて、痛き瘡には、辛鹽を、灌ぐちふが如く、益々も、重き馬荷に、上荷打つと、言ふ事の如、老いにてある、我が身の上に、病をら、加へてあれば、晝はも、歎かひ暮し、夜はも、息づき明し、年長く、病みし渡れば、月かさね、憂へさまよひ、こと事は、死なゝと思へど、「五月蠅なす」、騒ぐ子供を、うつてては、死にはしらず、見つゝあれば、心は燃えぬ。かにかくに、思ひ煩ひ、音のみし泣かゆ。

反歌

たまきはる―枕詞
うちの限は―この世に生ける間は
もなく―禍なく、本文「裳」は「喪」の誤か
いとのきて―その上に
上荷打つ―諺「重荷に小附け」の意
老いにてある―老い去にてある
憂へさまよひ―憂ひ歎き
こと事は―斯く悲しき思をする位ならばいつその事
五月蠅なす―枕詞
うつてては―打棄てては
死にはしらず―死ぬことは出來ず
泣かゆ―泣かる

擊目、申臂―莊子「目擊而道存矣」また「交一臂而失之」共に須臾の間の譬
白馬走來―白駒の隙を過ぐといふより出でて日月の過ぐることの早きに譬ふ
懸信劍―季札が徐君の冢に劍を懸けたるをいふ、史記に見ゆ
白楊―墳墓に植ゑる木
內敎―聖行品

但以世无二恒質一。所以陵谷更變。人无二定期一。所以壽夭不レ同。擊目之間。百齡已盡。申臂之頃。千代亦空。旦作二席上之主一。夕爲二泉下之客一。白馬走來。黃泉何及。隴上青松空懸二信劍一。野中白楊但吹二悲風一。是知世俗本無二隱遁之室一。原野唯有二長夜之臺一。先聖已去。後賢不レ留。如有二贖而可レ免者。古人誰無二價金一乎。未レ聞下獨存遂見二世終一者上。所以維摩大士疾二玉體于方丈一。釋迦能仁掩二金容乎雙樹一。內敎曰。不レ欲二黑闇之後來一。莫レ入二德天之先至一。（德天者生也　黑闇者死也）故知生必有レ死。死若不レ欲。不レ如レ不レ生。況乎縱覺二始終之恒數一。何慮二存亡之大期一者也。

俗道變化猶擊目。人事經紀如二申臂一。空與二浮雲一行二大虛一。心力共盡無レ所レ寄。

老身重病經レ年辛苦及思二兒等一歌七首（長一首　短六首）

靈剋。內限者。（謂瞻浮州人壽一百二十年也）平氣久。安久母阿良牟遠。事母無。裳無母阿良牟遠。世間能。宇計久都良計久。伊等能伎提。痛伎瘡爾波。鹹鹽遠。灌知布何其等久。益益母。重馬荷爾。表荷打等。伊布許等能其等。老爾弖阿留。我身上爾。病遠等。加弖阿禮

窮。何以言之。欲慮慮絕。何由慮之。惟以人無賢愚。世無古今。咸悉嗟歎。歲月競流。晝夜不息。（曾子曰往而不反者年也宣尼臨川之嘆亦是矣也）老疾相催。朝夕侵動。一代歡樂。未盡席前。（魏文惜時賢詩曰未盡西苑夜劇作北望塵也）千年愁苦更繼坐後。（古詩云人生不滿百何懷千年憂矣）若夫群生品類。莫不皆以有盡之身。並求無窮之命。所以道人方士自負丹經入於名山。而合藥之者。養性怡神。以求長生。抱朴子曰。神農云。百病不愈。安得長生。帛公又曰。生好物也。死惡物也。若不幸而不得長生者。猶以生涯無病患者爲福大哉。今吾爲病見惱。不得臥坐。向東向西。莫知所爲。無福至甚。摠集于我。人願天從。如有實者。仰願頓除此病。賴得如平。以鼠爲喩。豈不愧乎。（已見上也）

悲歎俗道假合卽離易去難留詩一首并序

竊以釋慈之示敎。（謂釋氏慈氏）先開三歸（謂歸依佛法僧）五戒。而化法界（謂一不殺生二不偸盗三不邪淫四不妄語五不飮酒也）周孔之垂訓。前張三綱（謂君臣父子夫婦）五敎。以齊濟郡國。（謂父義母慈兄友弟順子孝）故知引導雖二。得悟惟一也。

摠集于我—上に脫語あるべし

以鼠爲喩—毛詩、「相鼠有皮、人而無儀、人而無儀、不死何爲」

釋慈—釋氏、慈氏、慈氏は彌勒

郡國—「郡」一本「邦」

陵谷更變—詩經「高岸爲谷、深谷爲陵」世の移り易きに譬ふ

（取病艱復摩音四五日差之）追望件醫。非敢所及。若逢聖醫神藥者。仰願割剖五藏。抄探百病。尋達膏肓之隩處。（肓鬲也心下爲膏攻之不可達之不及藥不至焉）欲顯二豎之逃匿。（謂晉景公疾秦醫緩視而還者可謂爲鬼所殺也）命根既盡。終其天年。尚爲哀。（聖人賢者一切含靈誰免此道乎）何況生錄未半。爲鬼枉殺。顏色壯年。爲病橫困者乎。在世大患。孰甚于此。（志恠記云廣平前太守北海徐玄方之女年十八歲而死其靈謂馮馬子曰案我生錄當壽八十餘歲今爲妖鬼所枉殺已經四年此遇馮馬子乃得更活是也內教云瞻浮洲人壽百二十歲謹案此數非必不得過此故壽延經云有比丘名曰難達臨命終時詣佛請壽則延十八年但善爲者天地相畢其壽夭者業報所招隨其脩短而爲半也未盈斯年而遄死去故曰未半也）任徵君曰。病從口入。故君子節其飲食。由斯言之。人遇疾病。不必妖鬼。夫醫方諸家之廣說。飲食禁忌之厚訓。知易行難之鈍情。三者盈目滿耳。由來久矣。抱朴子曰。人但不知其當死之日。故不憂耳。若誠知羽翮可得延期者。必將爲之。以此而觀。乃知我病蓋斯飲食所招。而不能自治者乎。帛公略說曰。伏思自勵以斯長生。生可貪也。死可畏也。天地之大德曰生。故死人不及生鼠。雖爲王侯。一日絶氣。積金如山。誰爲富哉。威勢如海。誰爲貴哉。遊仙窟曰。九泉下人。一錢不直。孔子曰。受之於天。不可變易者形也。受之於命。不可請益者壽也。（見鬼谷先生相人書）故知生之極貴。命之至重。欲言言

抄探―「抄」一本「探」

二豎―左傳「晉侯疾病、求醫于秦、秦伯使醫緩爲之、未至、公夢爲二豎子曰、彼良醫也、懼傷我、焉逃之、其一曰、居肓之上膏之下、若我何、醫至曰、疾不可爲也、在肓之上膏之下、攻之不可、達之不及、藥不至焉、不可爲也、公曰、良醫也、厚爲之禮而歸之」

生錄未半―志恠記「廣平前太守北海徐玄方之女年十八歲而死、其靈請馮馬子曰、案我生錄、當八十餘歲、今爲妖鬼所枉殺、云々」

任徵君―梁人、任昉字元昇

羽翮―道を得て飛行すること

朝―下に「夕」「暮」などの字を落せしか
佃―獵して獸をとること
尫羸―尫弱羸痩、よわくして痩せたるをいふ
懸布欲立―布を梁などに懸けて其れにすがりて立つこと
累塵―俗累、塵俗、煩しき俗世間に交り居ること
禍之所伏云々―老子「禍兮福所倚、福兮禍所伏」
楡樹―俞跗の誤か
和緩―醫和、醫緩

竊以朝□佃食山野者。猶無災害而得度世。謂常執弓箭不避六齋所値禽獸不論大小孕及不孕並皆殺食以此爲業者也 晝夜釣漁河海者。尙有慶福而全經俗。謂漁夫潛女各有所勤男者手把竹竿能釣波浪之上女者腰帶鑿籠潛採深潭之底者也 況乎我從胎生迄于今日。自有修善之志。曾無作惡之心。謂聞諸惡莫作諸善奉行之敎也 所以禮拜三寶。無日不勤。每日誦經發露懺悔也 敬重百神。鮮夜有闕。謂敬拜天地諸神等也 嗟乎媿哉。我犯何罪。遭此重疾。謂未知過去所造之罪若是現前所犯之過無犯罪過何獲此病乎 初沈痾已來。年月稍多。謂經十餘年也 是時年七十有四。鬢髮班白。筋力尫羸。不但年老。復加斯病。諺曰。痛瘡灌鹽。短材截端。此之謂也。四支不動。百節皆疼。身體太重。猶負鈞石。二十四銖爲一兩十六兩爲一斤三十斤爲一鈞四鈞爲一石合一百二十斤也 懸布欲立。如折翼之鳥。倚杖且步。比跛足之驢。吾以身已穿俗。心亦累塵。欲知禍之所伏。崇之所隱。龜卜之門。巫祝之室。無不往問。若實若妄。隨其所敎。奉幣帛。無不祈禱。然而彌有增苦。曾無減差。吾聞前代多有良醫。救療蒼生病患。至若楡樹扁鵲華他秦和緩葛稚川陶隱居張仲景等。皆是在世良醫。無不除愈也。扁鵲姓秦字越人勃海郡人也割胸採心腸而置之投以神藥卽寤如平也華他字元化沛國譙人也若有病結積沈重者在内者刳腸

御空ゆ—「ゆ」は「より」はへたる如く—張りたる如く
阿庭可遠志—未詳「庭」一本「遅」
血鹿—肥前國松浦郡血鹿島
大伴の—枕詞
御津—攝津國
紐解きさけて云々—紐も結ばず急ぎて迎へにまゐらん

久方の、天の御空ゆ、天翔り、見渡し給ひ、事終り、歸らむ日には、又更に、大御神たち、船の舳に、御手打ち掛けて、墨繩を、はへたる如く、阿庭可遠志、血鹿の岬より、大伴の、御津の濱邊に、直泊てに、御船は泊てむ。恙無く、幸く座して、早や歸りませ。

反歌

大伴。御津松原。可吉掃弖。和禮立待。速歸坐勢。
大伴の、御津の松原、掻き掃きて、我立ち待たむ。早や歸りませ。

難波津爾。美船泊農等。吉許延許婆。紐解佐氣弖。多知婆志利勢武。
難波津に、御船泊てぬと、聞え來ば、紐解きさけて、立走りせむ。

天平五年三月一日。良宅對面、獻三日、山上憶良。

謹上大唐大使卿記室。

沈レ痾自哀文　山上憶良作

言ひつて｜言ひ傳へ
言ひ繼がひ｜言ひ繼ぎ
今の世の云々｜「右のことは」と上に補ひて見るべし
高光る｜枕詞
天の下云々｜廣成の家は宣化天皇より出で多治比眞人島公は左大臣正二位たり
まをす｜政を執ること
罷り座せ｜下に「ば」と補ふ
神づまり｜神鎭まり、又は神集り
うしはき｜領し

奏多麻比志。家子等。撰多麻比天。勅旨。反云「大命」戴持弖。唐能。遠境爾。都加播佐禮。麻加利伊麻勢。宇奈原能。邊爾母奥爾母。神豆麻利。宇志播吉伊麻須。諸能。大御神等。船舳爾。反云「布奈能閇爾」道引麻遠志。天地能。大御神等。倭。大國靈。久堅能。阿麻能見虚喩。阿麻賀氣利。見渡多麻比。事了。還日者。又更。大御神等。船舳爾。御手打掛弖。墨繩遠。播倍多留期等久。阿庭可遠志。智可能岬欲利。大伴。御津濱備爾。多太泊爾。美船播將泊。都都美無久。佐伎久伊麻志弖。速歸坐勢。

神代より、言ひつてけらく、空見つ、日本の國は、皇神の、嚴しき國、言靈の、幸ふ國と、語り繼ぎ、言ひ繼がひけり。今の世の、人も悉、目の前に、見たり知りたり、人さはに、滿ちてはあれども、高光る、日の朝廷、神ながら、めでの盛に、天の下、まをし給ひし、家の子と、選び給ひて、大命、戴き持ちて、唐の、遠き境に、遣され、罷り座せ、海原の、邊にも沖にも、神づまり、うしはき座す、諸の、大御神たち、船の舳に、導き申し、天地の、大御神たち、大和の、大國御魂、

憂へさまよひ—憂ひ嘆き
甑—蒸籠（セイロウ）
鵺鳥の—枕詞
いとのきて—いとゞ
短き物を云々—此の末の沈痾自哀文に「諺曰、痛瘡灌鹽短材截端」
笞杖—刑具
里長—戸令「凡戸以五十戸爲里、毎里置長一人」本文「良」は「長」の誤、又「いへをさ」
ねやど—寢屋處、ねどころ

憂しとやさしと云々—憂しと思ひ恥しと思へども

好去好來—長歌の終りの句意をとりてつけたる端詞、この歌は天平五年多治比眞人廣成遣唐使にて出立せし時憶良の送れるもの

藁解き敷きて、父母は、枕の方に、妻子どもは、足の方に、圍み居て、憂へさまよひ、竈には、煙吹き立てず、甑には、蜘蛛の巣懸きて、飯炊ぐ、事も忘れて、鵺鳥の、呻呼び居るに、いとのきて、短き物を、端截ると、言へるが如く、笞杖取る、里長が聲は、ねやどまで、來立ち呼ばひぬ。斯くばかり、術なきものか、世の中の道。

世間乎。宇之等夜佐之等。於母倍杼母。飛立可禰都。鳥爾之安良禰婆。

世の中を、憂しとやさしと、思へども、飛び立ち兼ねつ、鳥にしあらねば。

山上憶良頓首謹上。

好去好來歌一首 反歌二首

神代欲理。云傳介良久。虛見津。倭國者。皇神能。伊都久志吉國。言靈能。佐吉播布國等。加多利繼。伊比都賀比計理。今世能。人母許等期等。目前爾。見在知在。人佐播爾。滿弖播阿禮等母。高光。日御朝廷。神奈我良。愛能盛爾。天下。

提。奴延鳥乃。能杼與比居爾。伊等乃伎提。短物乎。端伎流等。云之如。楚取。五十戸良我許惠波。寢屋度麻低。來立呼比奴。可久婆可里。須部奈伎物能可。世間乃道。

風交り、雨降る夜の、雨交り、雪降る夜は、術もなく、寒くしあれば、堅鹽を、取り嘰ろひ、糟湯酒、打ち啜ろひて、咳ぶかひ、鼻びしびしに、しかとあらぬ、鬚掻き撫でて、我を置きて、人はあらじと、誇ろへど、寒くしあれば、麻衾、引きかゞふり、布肩衣、ありのこと〴〵、著襲へども、寒き夜すらを、我よりも、貧しき人の、父母は、飢ゑ寒からむ、妻子どもは、乞ひて泣くらむ。此の時は、如何に爲つゝか、汝が世は渡る。天地は、廣しといへど、我が爲は、狹くやなりぬる。日月は、明しといへど、我が爲めは、照りや給はぬ。人皆か、我のみや然る。わくらばに、人とは生るを、人並に、我も生れるを、綿も無き、布肩衣の、海松の如、わゝけ下れる、かゝふのみ、肩に打懸け、伏庵の、曲庵の内に、ひた地に、

堅鹽—固りたる鹽、燒鹽
嘰ろひ—少しづつ食し
糟湯酒—湯に酒の糟を溶かしたるもの
鼻びしびしに—鼻ひし鼻ひしの略、鼻ひは嚔
引きかゝぶり—被る
布肩衣—肩ほどの短き著物ならん
ありのこと〴〵—ある限り悉く
乞ひて—食を乞ひて、本文「乞乞」は「乞弖」の誤か
わくらばに—たまさかに
我も生れるを—一說本文作はつくる、田畑を作る
わゝけ下れる—破れ亂れたる
かゝふ—襤褸
伏庵—伏屋
曲庵—傾ける家
ひた地に—土間に

之可夫可比—「之可」は一本「之波」とあるべし

貧窮問答一首幷短歌

風雜。雨布流欲乃。雨雜。雪布流欲波。爲部母奈久。寒之安禮婆。堅鹽乎。取都豆之呂比。糟湯酒。宇知須須呂比弖。之可夫可比。鼻毗之毗之爾。志可登阿良農比宜可伎撫而。安禮乎於伎弖。人者安良自等。富己呂倍騰。寒之安禮波。麻被。引可賀布利。布可多衣。安里能許等其等。伎會倍騰毛。寒夜須良乎。和禮欲利母。貧人乃。父母波。飢寒良牟。妻子等波。乞乞泣良牟。此時者。伊可爾之都都可。汝代者和多流。天地者。比呂之等伊倍杼。安我多米波。狹也奈理奴流。日月波。安可之等伊倍騰。安我多米波。照哉多麻波奴。人皆可。吾耳也之可流。和久良婆爾。比等等波安流乎。比等奈美爾。安禮母作乎。綿毛奈伎。布可多衣乃。美留乃其等。和和氣佐我禮流。可可布能尾。肩爾打懸。布勢伊保能。麻宜伊保乃内爾。直土爾。藁解敷而。父母波。枕乃可多爾。妻子等母波。足乃方爾。圍居而。憂吟。可麻度柔播。火氣布伎多弖受。許之伎爾波。久毛能須可伎弖。飯炊。事毛和須禮

何方云々—死後何方へ向きてか行くならん
くれ〳〵と—くれは闇き意、おぼつかなくも
かりて—糧食

都爾斯良農。道乃長手袁。久禮久禮等。伊可爾可由迦牟。可利弖波奈斯爾。
常知らぬ、道の長手を、くれ〳〵と、如何にか行かむ。かりては無しに。
一云。可例比波奈之爾。
家爾阿利弖。波波何刀利美婆。奈具佐牟流。許許呂波阿良麻志。斯奈婆斯農等母。
家に在りて、母が取り見ば、慰むる、心はあらまし。死なば死ぬとも。
一云。能知波志奴等母。
出弖由伎斯。日乎何俗閉都都。家布家布等。阿袁麻多周良武。知知波波良波母。
出でて行きし、日を數へつゝ、今日〳〵と、我を待たすらむ、父母等はも。
一云。波波我迦奈斯佐。
一世爾波。二遍美延農。知知波波袁。意伎弖夜奈何久。阿我和和禮南。
一世には、二度見えぬ、父母を、置きてや長く、我が別れなむ。
一云。相別南。

打日差す―枕詞
宮―朝廷
垂乳しや―枕詞
語らひ居れど―同行者と也
勞し―病にてなやまし
玉桙の―枕詞
隈み―まがりかど
床じ物―床の如く、本文「計」は「許」の誤
打ちこい伏して―臥伏して、こいは寢ぬの古言
國―故郷
斯くのみならし―斯くの如き物なるらし
犬じ物―犬の如く
母がめ見ずて―母に逢はずして
おほゝしく―おぼつかなく

比袁禮騰。意乃何身志。伊多波斯計禮婆。玉桙乃。道乃久麻尾爾。久佐太袁利。志婆刀利志伎提。等計自物。宇知許伊布志提。意母比都都。奈宜伎布勢良久。國爾阿良波。父刀利美麻之。家爾阿良婆。母刀利美麻志。世間波。迦久乃尾奈良志。伊奴時母能。道爾布斯弖夜。伊能知周疑南。

一云。和何余須疑奈牟。

「打日差す」宮へ上ると、「垂乳しや」母が手離れ、常知らぬ、國の奥處を、百重山、越えて過ぎ行き、何時しかも、都を見むと、思ひつゝ、語らひ居れど、己が身し、勞しければ、「玉桙の」道の隈みに、草手折り、柴取り敷きて、床じ物、打ちこい伏して、思ひつゝ、歎き伏せらく、國に在らば、父取り見まし、家に在れば、母取り見まし。世の中は、斯くのみならし。犬じ物、路に伏してや、命過ぎなむ。

多良知遲能。波波何目美受提。意保保斯久。伊豆知武伎提可。阿我和可留良武。

垂乳しの、母がめ見ずて、おほゝしく、何方向きてか、我が別るらむ。

おほゝしく―おぼつかなく
言問も無く―父母にものいふこともなく
親の目をほり―親に逢ひ見んことを欲して
身故―死、一説「物故」の誤か
假合―人身は地水火風の假合せるものと佛典に説く
泡沫―金剛般若經「一切有爲法如夢幻泡影」
千聖云々―史記「五帝之聖而死、三王之仁而死、五伯之賢而死」
喪明之泣―檀弓「子夏喪其子而喪其明」
何世得覲―覲は父母の起居を問ふをいふ

國遠き、道の長手を、おほゝしく、戀ふや過ぎなむ。言問も無く。

朝露乃。既夜須伎我身。比等國爾。須疑加弖奴可母。意夜能目遠保利。

朝露の、消易き我が身、他國に、過ぎがてぬかも。親のめをほり。

筑前國司守山上憶良敬和爲熊凝述其志歌六首并序

大伴君熊凝者。肥後國益城郡人也。年十八歳。以天平三年六月十七日。爲相撲使某國司官位姓名從人。參向京都。爲天不幸。在路獲疾。即於安藝國佐伯郡高庭驛家身故也。臨終之時。長歎息曰。傳聞假合之身易滅。泡沫之命難駐。所以千聖已去。百賢不留。況乎凡愚微者。何能逃避。但我老親。並在菴室。待我過日。自有傷心之恨。望我違時。必致喪明之泣。哀哉我父。痛哉我母。不患一身向死之途。唯悲二親在生之苦。今日長別。何世得覲。乃作歌六首而死。其歌曰。

宇知比佐受。宮弊能保留等。多羅知斯夜。波波何手波奈例。常斯良奴。國乃意久迦袁。百重山。越弖須疑由伎。伊都斯可母。京師乎美武等。意母比都都。加多良

住むつゝ—住みつゝ
手振—風俗
忘らえにけり—忘られにけり
息づき居らむ—歎き居らん
新玉の—枕詞
我が主—大伴卿をさす
めさげ給はね—召し上げ給へ
松浦山—領巾振山

阿麻社迦留。比奈爾伊都等世。周麻比都都。美夜故能提夫利。和周良延爾家利。
天離る、鄙に五歳、住ひつゝ、都の手振、忘らえにけり。
加久能未夜。伊吉豆伎遠良牟。阿良多麻能。吉倍由久等志乃。可伎利斯良受提。
斯くのみや、息づき居らむ、新玉の、來經行く年の、限り知らずて。
阿我農斯能。美多麻多麻比弖。波流佐良婆。奈良能美夜故爾。咩佐宜多麻波爾。
我が主の、御魂賜ひて、春さらば、奈良の都に、めさげ給はね。

天平二年十二月六日筑前國司山上憶良謹上。

三島王後追和ニ松浦佐用嬪面ニ歌一首

於登爾吉伎。目爾波伊麻太見受。佐容比賣我。必禮布理伎等敷。吉民萬通良楊滿。
音に聞き、目には未だ見ず。佐用姫が、領巾振りきとふ、君松浦山。

大伴君熊凝歌二首　大典麻田陽春作

國遠伎。路乃長手遠。意保保斯久。許布夜須疑南。己等騰比母奈久。

由久布禰遠、布利等騰尾加禰。伊加婆加利、故保斯苦阿利家武。麻都良佐欲比賣。
行く船を、振り止みかね、如何ばかり、戀しくありけむ。松浦佐用姫。

書殿餞酒日倭歌四首

阿摩等夫夜。等利爾母賀母夜。美夜故摩提。意久利摩遠志弖。等比可弊流母能。
天飛ぶや、鳥にもがもや、都まで、送り申して、飛び歸るもの。

比等母禰能。宇良夫禮遠留爾。多都多夜麻。美麻知可豆加婆。和周良志奈牟迦。
ひともねの、うらぶれ居るに、立田山、御馬近づかば、忘らしなむか。

伊比都都母。能知許曾斯良米。等乃斯久母。佐夫志計米夜母。吉美伊麻佐受斯弖。
言ひつゝも、後こそ知らめ、とのしくも、淋しけめやも。君座さずして。

余豆呂余爾。伊麻志多麻比提。阿米能志多。麻乎志多麻波禰。美加度佐良受弖。
萬代に、座し給ひて、天の下、申し給はね。朝廷去らずて。

聊布二私懷一歌三首

振り止みかね―領巾振りても止めかねて
書殿―書院
天飛ぶや―枕詞
比等母禰能―一說、「母禰」は「彌那」(みな)の誤か
うらぶれ―憂く思ふ
立田山―下に「に」と補ふ
忘らしなむか―忘れ給はんか
言ひつゝも―戀しなど
とのしくも―一說に本文「等乃」は「志萬」の誤にて「しましくも」と訓む、暫くの程もの義とす
淋しけめやも―「けめ」は「けむ」
申し―政を執ること
給はね―給へ
朝廷―太宰府

明紀「二十三年八月遣大將軍大伴連狹手彥、領兵歟萬伐于高麗」

遠つ人—枕詞

振らし—振り

巾麾之。傍者莫不流涕。因號此山曰領巾麾之嶺也。乃作歌曰。

得保都必等。麻通良佐用比米。都麻胡非爾。比例布利之用利。於返流夜麻能奈。

「遠つ人」松浦佐用姬、夫戀に、領巾振りしより、負へる山の名。

後人追和

夜麻能奈等。伊賓都夏等可母。佐用比賣何。許能野麻能閉仁。必例遠布利家無。

山の名と、言ひ繼げとかも、佐用姬が、この山の上に、領巾を振りけむ。

最後人追和

余呂豆余爾。可多利都夏等之。許能多氣仁。比例布利家良之。麻通羅佐用嬪面。

萬代に、語り繼げとし、此の嶽に、領巾振りけらし。松浦佐用姬。

最最後人追和二首

宇奈波良能。意吉由久布禰遠。可弊禮等加。比禮布良斯家武。麻都良佐欲比賣。

海原の、沖行く船を、返れとか、領巾振らしけむ。松浦佐用姬。

（しま—大和國の地名）
神さび—古び
憶良云々—古義目錄によりて「山上臣憶良松浦歌三首」の題を補ふ
方岳諸侯—文選于令升晉紀總論「方岳無鈞石之鎭、關門無結草之固」、潘安仁爲賈謐作贈陸機詩、潘岳作鎭輔我京室」
領巾振りし山—領巾振山
足姫—息長足姫、神功皇后
石—皇后の上りて釣せしといひ傳へたる石ありしか
百日しも云々—長き日子を費して行く程の遠き松浦路にはあらず、今日行けば明日は歸る程の近き道なるに何の障によりてか得行かざらん
さやれる—さはれる
大伴云々—古義「詠領巾麾嶺歌一首」の題を補へり
奉使藩國—宣化紀「二年冬十月以新羅寇於任那詔大伴金村大連、遣其子磐與狹手彥、以助任那」又欽

憶良誠惶頓首謹啓。憶良聞方岳諸侯。都督刺史。並依典法。巡行部下。察其風俗。
意內多端。口外難出。謹以三首之鄙歌。欲寫五藏之鬱結。其歌曰。

麻都良我多。佐欲比賣能故何。比列布利斯。夜麻能名乃美夜。伎伎都都遠良武。
松浦潟、佐用姫の兒が、領巾振りし、山の名のみや、聞きつゝ居らむ。

多良志比賣。可尾能美許等能。奈都良須等。美多多志世利斯。伊志遠多禮美吉。
足姫、神の命の、魚釣らすと、御立たしせりし、石を誰見き。
一云。阿由都流等。

毛毛可斯母。由加奴麻都良遲。家布由伎弖。阿須波吉奈武遠。奈爾可佐夜禮留。
百日しも、行かぬ松浦路、今日行きて、明日は來なむを、何かさやれる。

天平二年七月十一日筑前國司山上憶良謹上。

大伴佐提比古郎子特被朝命。奉使藩國。艤棹言歸。稍赴蒼波。妾也松浦。（佐用嬪面）嗟此別易。歎彼會難。卽登高山之嶺。遙望離去之船。悵然斷肝。黯然銷魂。遂脫領

雉の過ぎけるを、童子の在りけるが雉の雛を養ふ時なれば、とて取らざりしを見て、其德化の至れるを知れりといふ故事
放レ龜之術—晉の孔愉人の龜を籠に入れて持てるを見て買ひて水に放ちしに龜數多度かへりみて行きぬ、其後侯に封ぜられて印を鑄しに、其印紐の龜の頭かへり見たるやうに出で來しを改め鑄れどもなほらざりしかば、孔愉かの放ちたる龜の報にて侯に封ぜられしことを知れりといふ故事
張趙—杜甫集「預傳籍々新京兆、青史無勞數趙張」宣帝の時京兆尹となりて治跡ありし人
松喬—赤松子、王子喬
杏壇—杏樹のある壇、孔子杏壇の上に在りて諸弟子書を讀み琴を彈ぜしこと莊子に見ゆ
各言—論語「各言爾志」
衡皐税駕—曹子建洛神賦に「爾廼税ニ駕乎蘅皐ニ秣ニ駟乎芝田ニ」とあるをいふ
葵藿—ひまはり草、文選曹子建表「臣竊自比葵藿」
傾延—傾首延領か
せずは—せんよりは
常世の國—蓬萊山
思はゆる—思はるゝ
け長く—時長く

奉レ和ニ諸人梅花歌ニ一首

於久禮爲天。那我古飛世殊波。彌曾能不乃。于梅能波奈爾母。奈良麻之母能乎。

後れ居て、長戀せずは、御園生の、梅の花にも、ならましものを。

和ニ松浦仙媛歌ニ一首

伎彌乎麻都。麻都良乃于良能。越等賣良波。等己與能久爾能。阿麻越等賣可忘。

君を待つ、松浦の浦の、少女らは、常世の國の、海人少女かも。

思レ君未レ盡重題ニ首

波漏婆漏爾。於忘方由流可母。志良久毛能。智弊仁邊多天留。都久紫能君仁波。

遙々に、思はゆるかも、白雲の、千重に隔てる、筑紫の國は。

枳美可由伎。氣那我久奈理努。奈良遲那留。志滿乃己太知母。可尒佐飛仁家理。

君が行き、け長くなりぬ。奈良路なる、しまの木立も、神さびにけり。

天平二年七月十日。

松浦川、川の瀬早み、紅の、裳の裾濡れて、鮎か釣るらむ。

比等末奈能。美良武麻都良能。多麻志末乎。美受弖夜和禮波。故飛都都遠良武。

人皆の、見らむ松浦の、玉島を、見ずてや我は、戀ひつゝ居らむ。

麻都良河波。多麻斯麻能有良爾。和可由都流。伊毛良遠美良牟。比等能等母斯佐。

松浦川、玉島の浦に、若鮎釣る、妹らを見らむ、人の乏しさ。

宜啓。伏奉四月六日賜書。跪開封函。拜讀芳藻。心神開朗。似懷泰初之月。鄙懷除祛。若披樂廣之天。至若羇旅邊城。懷古舊而傷志。年矢不停。憶平生而落涙。但達人安排。君子無悶。伏冀朝宣懷翟之化。暮存放龜之術。架張趙於百代。追松喬於千齡耳。兼奉垂示。梅花芳席。群英摛藻。松浦玉潭。仙媛贈答。類杏壇各言之作。疑衡皐稅駕之篇。耽讀吟諷。感謝歡怡。宜戀主之誠。誠逾犬馬。仰德之心。心同葵藿。而碧海分地。白雲隔天。徒積傾延。何慰勞緒。孟秋膺節。伏願萬祐日新。今因相撲部領使謹付片紙。宜謹啓。不次。

見らむ―見るらん

乏しさ―うらやましさよ

宜啓―此前に拾穗本「荅和人歌書幷歌四首吉田連宜」の題あり

宜―吉田連宜

心神云々―世說に夏侯玄が事を「朗々如日月之入懷」といへることあり、泰初は玄が字

若披云々―晉書「衞瓘見樂廣而奇之嘆曰、若披雲霧而覩青天也」

邊城―太宰府

年矢―月日の立つことの早きをいふ

安排―莊子「安排而去化」註に排は推移、物と共に推し移りて安じ居る事

懷翟之化―翟は山雉、後漢の魯恭民を治めて德化の聞えありしを袁安疑ひて人をして見せしめしに魯恭の領する所の阡陌に

遠つ人—枕詞
我こそまかめ—我こそ枕にして寢ん、決して他人には遇はすまじ
並にし—通一遍に
待ちがてに—待ち兼ねて
淀まず—ろまずたゆまず
詩—官本「詞」

松浦なる、玉島川に、鮎釣ると、立たせる兒らが、家路知らずも。

等富都比等。末都良能加波爾。和可由都流。伊毛我多毛等乎。和禮許曾末加米。
遠つ人、松浦の川に、若鮎釣る、妹が袂を、我こそまかめ。

娘等更報歌三首

和可由都流。麻都良能可波能。可波奈美能。奈美邇之母波婆。和禮故飛米夜母。
若鮎釣る、松浦の川の、川波の、並にし思はば、我戀ひめやも。

波流佐禮婆。和伎覇能佐刀能。加波度爾波。阿由故佐婆斯留。吉美麻知我弖爾。
春されば、我家の里の、川門には、鮎子さ走しる。君待ちがてに。

麻都良我波。奈奈勢能與騰波。與等武等毛。和禮波與騰麻須。吉美遠志麻多武。
松浦川、七瀬の淀は、よどむとも、我は淀まず、君をし待たむ。

後人追和之詩三首　都帥老

麻都良河波。河波能世波夜美。久禮奈爲能。母能須蘇奴例弖。阿由可都流良武。

臥二巫峡一—宋玉高唐賦に巫山の神女の事を述ぶ
王魚—巨魚の誤か
陳二歎曲一—心の誠を述べ盡す
于レ時云々—文選應休璉書「徒恨宴樂始酣、白日傾夕、驪駒就駕、意不宣展」
懐抱—心に思ふこと
知らえぬ—知られぬ
うま人—身分貴き人
やさしみ—はづかしさに
蓬客—轉蓬の旅客の意か
川の瀬光り—川瀬も照るばかりにうるはしきをいふ

哉。下官對曰。唯唯。敬奉二芳命一。于レ時日落二山西一。驪馬將レ去。遂申二懷抱一。因贈二詠歌一曰。

阿佐里須流。阿末能古等母等。比得波伊倍騰。美流爾之良延奴。有麻必等能古等。

漁する、海人の兒どもと、人は言へど、見るに知らえぬ。うま人の兒と。

答　詩曰

多麻之末能。許能可波加美爾。伊返波阿禮騰。吉美乎夜佐之美。阿良波佐受阿利吉。

玉島の、この川上に、家はあれど、君をやさしみ、表さずありき。

蓬客等更贈歌三首

麻都良河波。可波能世比可利。阿由都流等。多多勢流伊毛河。毛能須蘇奴例奴。

松浦川、川の瀬光り、鮎釣ると、立たせる妹が、裳の裾濡れぬ。

麻都良奈流。多麻之麻河波爾。阿由都流等。多多世流古良何。伊弊遅斯良受毛。

牟梅—「牟」は「字」の誤か

こそ—よ、希求の助詞

松浦河—神功紀「夏四月北到火前國松浦縣、而進食於玉島里小河之側云云、因以擧竿乃獲細鱗魚、時皇后曰希見物、故時人號其處曰梅豆邏(メヅラ)國、今謂松浦訛焉、是以其國女人每當四月上旬、以鉤投河中、捕年魚、於今不絕云々」

開柳葉云々—文鏡祕府論「評桃花之似頰、笑柳葉之如眉」

稱云—東征賦「訖于今而稱云」

臨洛浦—曹植洛神賦に洛浦の神女の事を述ぶ

雪の色を、奪ひて咲ける、梅の花、今盛りなり。見む人もがも。

和我夜度爾。左加里爾散家留。牟梅能波奈。知流倍久奈里奴。美牟必登聞我母。

我が宿に、盛りに咲ける、梅の花、散るべくなりぬ。見む人もがも。

烏梅能波奈。伊米爾加多良久。美也備多流。波奈等阿例母布。左氣爾于可倍許曾。

梅の花、夢に語らく、雅びたる、花と我思ふ、酒に浮べこそ。

一云。伊多豆良爾。阿例乎知良須奈。左氣爾于可倍己曾。

遊二於松浦河一序

余以下暫往二松浦之縣一逍遙上。聊臨二玉島之潭一遊覽。忽値二釣レ魚女子等一也。花容無レ雙。光儀無レ匹。開二柳葉於眉中一。發二桃花於頰上一。意氣凌レ雲。風流絕レ世。僕問曰。誰鄕誰家兒等。若疑神仙者乎。娘等皆咲答曰。兒等者漁夫之舍兒。草菴之微者。無レ鄕無レ家。何足二稱云一。唯性便レ水。復心樂レ山。或臨二洛浦一。而徒羨二王魚一。乍臥二巫峽一。以空望二烟霞一。今以二邂逅一。相二遇貴客一。不レ勝二感應一。輙陳二欵曲一。而今而後。豈可レ非二偕老一

員外—右の多くの歌の外といふ意

雲に飛ぶ藥—淮南王劉安の仙藥の臼に殘れるを雞犬がなめて天へ登りしといふ故事による

をちめやも—「をち」は初の方へ返ること、若返へる

よは—よりは

賤しき—古義に「彌重」の義と極論せり、いかゞ

小野氏淡理

可須美多都。那我岐波流卑乎。可謝勢例杼。伊野那都可子岐。烏梅能波那可毛。

霞立つ、長き春日を、かざせれど、彌懷しき、梅の花かも。

員外思故郷歌兩首

和我佐可理。伊多久久多知奴。久毛爾得夫。久須利波武等母。麻多遠知米也母。

我が盛、甚く降ちぬ。雲に飛ぶ、藥食むとも、復をちめやも。

久毛爾得夫。久須利波牟用波。美也古彌婆。伊夜之吉阿何微。麻多越知奴倍之。

雲に飛ぶ、藥食むよは、都見ば、賤しき我が身、復をちぬべし。

後追和梅歌四首

能許利多流。由棄仁末自列留。烏梅能半奈。半也久奈知利曾。由吉波氣奴等勿。

殘りたる、雪に交れる、梅の花、早くな散りそ。雪は消ぬとも。

由吉能伊呂遠。有婆比弖佐家流。有米能波奈。伊麻佐加利奈利。彌牟必登母我聞。

散らまく惜しみ―散らん事の惜しさに

待ちがてにせし―待ちかねし
こそ―かし、希求の助詞
兒―女

薩摩目高氏海人

和家夜度能。烏梅能之豆延爾。阿蘇毗都都。宇具比須奈久毛。知良麻久乎之美。
我が宿の、梅の下枝に、遊びつゝ、鶯鳴くも、散らまく惜しみ。

土師氏御通

宇梅能波奈。乎理加射之都都。毛呂比登能。阿蘇夫遠美禮婆。彌夜古之叙毛布。
梅の花、折りかざしつゝ、諸人の、遊ぶを見れば、都しぞ思ふ。

小野氏國堅

伊母我陛邇。由岐可母不流登。彌流麻提爾。許許陀母麻我不。烏梅能波奈可毛。
妹が家に、雪かも降ると、見るまでに、幾許も紛ふ、梅の花かも。

筑前掾門氏石足

宇具比須能。麻知迦弖爾勢斯。宇米我波奈。知良須阿利許曾。意母布故我多米。
鶯の、待ちがてにせし、梅が花、散らずありこそ。思ふ兒がため。

散り紛ひたる―散亂したる
岡び―岡邊
かたまけて―今に盛の春が來ると催し設けたる也
春柳―枕詞か
なへに―に連れて

大隅目榎氏鉢麻呂

烏梅能波奈。知利麻我比多流。乎加肥爾波。宇具比須奈久母。波流加多麻氣弖。
梅の花、散り紛ひたる、岡びには、鶯鳴くも、春かたまけて。

筑前目田氏眞人

波流能能爾。紀利多知和多利。布流由岐得。比得能美流麻提。烏梅能波奈知流。
春の野に、霧立ち渡り、降る雪と、人の見るまで、梅の花散る。

壹岐目村氏彼方

波流楊奈宜。可豆良爾乎利志。烏梅能波奈。多禮可有可倍志。佐加豆岐能倍爾。
「春柳」鬘に折りし、梅の花、誰か浮べし、盃の上に。

對馬目高氏老

于遇比須能。於登企久奈倍爾。烏梅能波奈。和企弊能曾能爾。佐伎弖知留美由。
鶯の、音聞くなへに、梅の花、我家の園に、咲きて散る見ゆ。

こほしき―戀しき、愛らしき

少令史田氏肥人

烏梅能波奈。伊麻佐加利奈利。毛毛等利能。己惠能古保志枳。波流岐多流良斯。

梅の花、今盛りなり。百鳥の、聲のこほしき、春來るらし。

藥師高氏義通

波流佐良婆。阿波武等母比之。烏梅能波奈。家布能阿素眦爾。阿比美都流可母。

春さらば、逢はむと思ひし、梅の花、今日の遊びに、逢見つるかも。

陰陽師礒氏法麻呂

烏梅能波奈。多乎利加射志弖。阿蘇倍等母。阿岐太良奴比波。家布爾志阿利家利。

梅の花、手折りかざして、遊べども、飽き足らぬ日は、今日にしありけり。

筭師志氏大道

波流能努爾。奈久夜汙隅比須。奈都氣牟得。和何弊能曾能爾。汙米何波奈佐久。

春の野に、鳴くや鶯、懐けむと、我が家の園に、梅が花咲く。

筑前介佐氏子首

萬世爾。得之波岐布得母。烏梅能波奈。多由流己等奈久。佐吉和多流倍子。

萬代に、年は來經とも、梅の花、絶ゆる事なく、咲き渡るべし。

壹岐守板氏安麻呂

波流奈例婆。宇倍母佐枳多流。烏梅能波奈。岐美乎於母布得。用伊母禰奈久爾。

春なれば、宜べも咲きたる、梅の花、君を思ふと、夜寢も寢なくに。

神司荒氏稻布

烏梅能波奈。乎利弖加射世留。母呂比得波。家布能阿比太波。多努斯久阿流倍斯。

梅の花、折りてかざせる、諸人は、今日の間は、樂しくあるべし。

大令史野氏宿奈麻呂

得志能波爾。波流能伎多良婆。可久斯己曾。烏梅乎加射之弖。多努志久能麻米。

年のはに、春の來たらば、斯くしこそ、梅をかざして、樂しく飲まめ。

君を云々ー君は梅の花を指す、汝が雨風に散り過ぎん事を思ひて夜の間も眠られぬ程心を惱ますなるをと也

年のはにー年毎に

和家―「家」は「我」の誤
打靡く―枕詞
如何にか―何れまさりおとり無くめでたし
こぬれ隱りて―木蔭にかくれて
いぬ―いは發語、寢る、一說、往ぬ
舟氏―一本「丹氏」

大典史氏大原

有知奈毗久。波流能也奈宜等。和家夜度能。烏梅能波奈等遠。伊可爾可和可武。

打靡く、春の柳と、我宿の、梅の花とを、如何にか別かむ。

少典山氏若麻呂

波流佐禮婆。許奴禮我久利弖。宇具比須曾。奈岐弖伊奴奈流。烏梅我志豆延爾。

春されば、こぬれ隱りて、鶯ぞ、鳴きていぬなる。梅が下枝に。

大判事舟氏麻呂

比等期等爾。乎理加射之都都。阿蘇倍等母。伊夜米豆良之岐。烏梅能波奈加母。

人毎に、折りかざしつゝ、遊べども、彌珍しき、梅の花かも。

藥師張氏福子

烏梅能波奈。佐企弖知理奈婆。佐久良婆那。都伎弖佐久倍久。奈利爾弖阿良受也。

梅の花、咲きて散りなば、櫻花、繼ぎて咲くべく、なりにてあらずや。

主人

和何則能爾。宇米能波奈知流。比佐可多能。阿米欲里由吉能。那何列久流加母。

我が園に、梅の花散る、久方の、天より雪の、流れ來るかも。

大監大伴氏百代

烏梅能波奈。知良久波伊豆久。志可須我爾。許能紀能夜麻爾。由企波布理都都。

梅の花、散らくは何處、しかすがに、この城の山に、雪は降りつゝ。

少監阿氏奥島

烏梅乃波奈。知良麻久怨之美。和家曾乃乃。多氣乃波也之爾。于具比須奈久母。

梅の花、散らまく惜み、我が園の、竹の林に、鶯鳴くも。

少監土氏百村

烏梅能波奈。佐岐多流曾能能。阿乎夜疑遠。加豆良爾志都都。阿素比久良佐奈。

梅の花、咲きたる園の、青柳を、蘰にしつゝ、遊び暮さな。

流れ—降り

散らく—散る

しかすがに—しかしながら

城の山—筑前國下座郡

和家—「家」は「我」の誤

暮さな—暮さん

見つゝや―反語、見つゝ暮さんやは

戀しけしゑや―戀しけは戀しき、しゑやはよしや、本文「宜」は「企」の誤か、一說に「戀繁しゑや」ゑやは歎息の詞

斯くしあらば云々―斯く煩はしき思をして人とあらんよりは非情の梅にもならんものを

してな―してん

青柳云々―青柳と梅の花と

筑前守山上大夫

波流佐禮婆。麻豆佐久耶登能。烏梅能波奈。比等利美都都夜。波流比久良佐武。

春されば、先づ咲く宿の、梅の花、一人見つゝや、春日暮さむ。

豊後守大伴大夫

余能奈可波。古飛斯宜志惠夜。加久之阿良婆。烏梅能波奈爾母。奈良麻之勿能怨。

世の中は、戀しけしゑや。斯くしあらば、梅の花にも、ならましものを。

筑後守葛井大夫

烏梅能波奈。伊麻佐可利奈理。意母布度知。加射之爾斯弖奈。伊麻佐可利奈理。

梅の花、今盛りなり。思ふどち、かざしにしてな。今盛りなり。

笠沙彌

阿乎夜奈義。烏梅等能波奈乎。遠理可射之。能彌弖能能知波。知利奴得母與斯。

青柳、梅との花を、折りかざし、飲みての後は、散りぬともよし。

闕一以寫レ瑯」
傾レ蓋―松を偃蓋などいふによりて書けり
對レ縠―縠はこめおりのうすもの、霧にたとふ、宋玉神女賦「動霧縠以徐歩」一說「對」は「封」の誤
蓋レ天坐レ地―劉伶酒德頌「幕天席地」による
促レ膝―梁陸倕詩「促膝豈異人」註に「促近膝坐也」
飛レ觴―西京賦「羽觴行而無算」、註に「羽觴作生爵形」
忘言―莊子「言者所以在意、得意而忘言」こゝは打解けて物語するなどをいふ、蘭亭叙「語言一室之內」
開衿―心を開く
睦月―正月
樂しき終へめ―樂しみを極めん
有りこせぬかも―有れかし

縠而迷レ林。庭舞二新蝶一。空歸二故雁一。於レ是蓋レ天坐レ地。促レ膝飛レ觴。忘二言一室之裏一。開二衿煙霞之外一。淡然自放。快然自足。若非二翰苑一何以攄レ情。請紀二落梅之篇一。古今夫何異矣。宜下賦二園梅一聊成中短詠上。

大貳紀卿

武都紀多知。波流能吉多良婆。可久斯許曾。烏梅乎乎利都都。多努之岐乎倍米。

睦月立ち、春の來たらば、斯くしこそ、梅を折りつゝ、樂しき終へめ。

少貳小野大夫

烏梅能波奈。伊麻佐家留期等。知利須義受。和我覇能曾能爾。阿利己世奴加毛。

梅の色、今咲ける如、散り過ぎず、我が家の園に、有りこせぬかも。

少貳粟田大夫

烏梅能波奈。佐吉多流僧能能。阿遠也疑波。可豆良爾須倍久。奈利爾家良受夜。

梅の花、咲きたる園の、青柳は、鬘にすべく、なりにけらずや。

い取らして—いは發語 眞玉なす—眞玉の如き 言ひ繼ぐがねと—言ひ繼ぐやうにと 海の底—枕詞 うなかみ—海邊 置かし給ひて—置かせ給ひて くし御玉—くしは靈妙の意、神代紀に奇魂をくしみたまと訓めり、神功紀に和魂は玉身にしたがひ荒魂は先鋒として云々とあるを此の二つの石のことにいひなせり 尊きろかも—尊きかな

天地の—天地と

帥老—大伴旅人 鏡前之粉—宋武帝の女壽陽公主の額に梅花の落ちたりしが拂へども去らざりしより梅花粧といふこと起れりといふ、これによりて書けり 珮後之香—楚辭に「紐秋

伎呂可儛。

掛けまくは、あやに畏し。足姫、神の命、韓國を、むけ平げて、御心を、鎭め給ふと、い取らして、齋ひ給ひし、眞玉なす、二つの石を、世の人に、示し給ひて、萬代に、言ひ繼ぐがねと、「海の底、沖つ深江の、うなかみの、子負の原に、御手づから、置かし給ひて、かんながら、神さび座す、くし御玉、今の現に、尊きろかも。

阿米都知能。等母爾比佐斯久。伊比都夏等。許能久斯美多麻。志可志家良斯母。

天地の、共に久しく、言ひ繼げと、此のくし御玉、敷かしけらしも。

右事傳言。那珂郡伊知郷簑島人建部牛麻呂是也。

梅花歌三十二首并序

天平二年正月十三日。萃于帥老之宅。申宴會也。于時初春令月。氣淑風和。梅披鏡前之粉。蘭薫珮後之香。加以曙嶺移雲。松掛羅而傾蓋。夕岫結霧。鳥對

尊門―人を尊稱する語

筑前國云々―古義に「山上臣憶良詠二鎭懷石一歌一首幷短歌」と題を補へり

徑尺璧―大なる玉

鎭懷―神功紀「既而皇后云々、躬欲西征、于時也適當皇后之開胎、皇后則取石挿腰祈之曰、事竟還日産於玆土、其石今在于伊覩縣道邊」

謹通二尊門記室一。

筑前國怡土(イト)郡深江(フカエ)村子負(コフノ)原。臨レ海丘上有二二石一。大者長一尺二寸六分。圍一尺八寸六分。重十八斤五兩。小者長一尺一寸。圍一尺八寸。重十六斤十兩。並皆楕圓狀如二雞子一。其美好者不レ可二勝論一。所謂徑尺璧是也。或云此二石者肥前國彼杵郡平敷之石、當レ占而取之 去二深江驛家一二十許里。近在二路頭一。公私往來。莫レ不二下レ馬跪拜一。古老相傳曰。往者息長足日女命(オキナガタラシヒメノ)征二討新羅國一之時。用二玆兩石一挿二著御袖之中一。以爲二鎭懷一。實是御裳中矣 所以行人敬二拜此石一。乃作レ歌曰。

可既麻久波。阿夜爾可斯故斯。多良志比咩。可尾能彌許等。可良久爾遠。武氣多比良宜弖。彌許々呂遠。斯豆迷多麻布等。伊刀良斯弖。伊波比多麻比斯。麻多麻奈須。布多都能伊斯乎。世人爾。斯咩斯多麻比弖。余呂豆余爾。伊比都具可爾等。和多能曾許。意枳都布可延乃。宇奈可美乃。故布乃波良爾。美弖豆可良。意可志多麻比弖。可武奈何良。可武佐備伊麻須。久志美多麻。伊麻能遠都豆爾。多布刀

許等等波奴。樹爾波安里等母。宇流波之吉。伎美我手奈禮能。許等爾之安流倍志。

言問はぬ、木にはありとも、麗しき、君が手馴の、琴にしあるべし。

琴娘子答曰。

敬奉㆓徳音㆒幸甚幸甚。

片時覺卽感㆓於夢言㆒。慨然不㆑得㆓默止㆒。故附㆓公使㆒。聊以進㆓御耳㆒。謹狀不具。

天平元年十月七日附㆑使進上。

謹通㆓中衞高明閤下㆒謹空。

跪承㆓芳音㆒嘉懽交深。乃知龍門之恩。復厚㆓蓬身之上㆒。戀望殊念。常心百倍。謹和㆓白雲之什㆒。以奏㆓野鄙之歌㆒。房前謹狀。

許等騰波奴。紀爾茂安理等毛。和何世古我。多那禮乃美巨騰。都地爾意加米移母。

言問はぬ、木にもありとも、我が背子が、手馴の御琴、土に置かめやも。

十一月八日附㆓還使大監㆒。

左琴—古列女傳、楚の於陵子終が妻の言「左㆑琴右㆑書、樂在㆓其中㆒」

如何にあらむ云々—いつの時いづれの日にか

聲知らむ人—伯牙善く琴をひき鍾子期よく聽けりといふ故事による

枕かむ—枕とせん

麗しき君—麗しき人

片時云々—以下作者の詞

謹空—左白など書くと同じく、書牘の末に餘白を置くを敬とするより敬ふ時の語

跪云々—此前に古義「中衞大將藤原卿報歌一首」との題を補へり

龍門—後漢の李膺が門に入り難きを龍門に登ることの難きに喩へ、其の門に入るを榮とせし故事による、こゝは大伴卿をさす

蓬身—蓬頭の身といふ義にや

我が背子—大伴卿をさす

於保久―一說「久」は「之」の誤

あらく―ある

此琴云々―題落ちしか、古義は目錄に從て錄すとて「帥大伴卿、梧桐日本琴、贈二中衞大將藤原卿一歌二首」と題せり

余託云々―琴賦にとる、崇巒は高き峰、九陽は九天のはて或は陽日、休光は上き光

出二入雁木之間一―莊子の周山の大樹の伐られずして天年を終るは不材なるによれど、さればとて聲あしき雁の捕へて煮らるるを見れば、不材なりとて必ずしも天年を全うするものにあらずといふ故事による

龍の馬を、我は求めむ。「青丹吉」奈良の都に、來む人のため。

多陀爾阿波須。阿良久毛於保久。志岐多閇乃。麻久良佐良受提。伊米爾之美延牟。

直に逢はず、あらくも多く、敷妙の、枕去らずて、夢にし見えむ。

大伴淡等謹狀。

梧桐日本琴一面。對馬結石山孫枝也。

此琴夢化二娘子一曰。余託二根遙島之崇巒一。晞二幹九陽之休光一。長帶二煙霞一。逍二遙山川之阿一。遠望二風波一。出二入雁木之間一。唯恐百年之後。空朽二溝壑一。偶遭二良匠一。散爲二小琴一。不レ顧二質麁音少一。恒希二君子左琴一。卽歌曰。

伊可爾安良武。日能等伎爾可母。許惠之良武。比等能比射乃倍。和我摩久良可武。

如何にあらむ、日の時にかも、聲知らむ、人の膝の上、我が枕かむ。

僕報二詩詠一曰

止み―止め

伏辱来書云々―この邊錯簡甚しきが如し、古義にも說見えたれど今省略に從ふ

隔レ漢―牽牛織女の銀漢を隔てて住むをいふ

抱レ梁―尾生といへるもの女と梁下に於いて會せんと約せしに女來らずして水至りければ抱レ梁而死といへる故事

唯羨―「羨」は「冀」の誤か

披雲―晉の樂廣が事を若下披二雲霧一而覩上二青天一といへるより人に逢ふことを尊びていふ

夢にを―をは强勢の助辭

見えこそ―こそは希求の助詞

等伎波奈周。迦久斯母何母等。意母閉騰母。余能許等奈禮婆。等登尾可禰都母。

常磐なす、斯くしもがもと、思へども、世の事なれば、止みかねつも。

神龜五年七月二十一日。於二嘉摩郡一撰定。筑前國守山上憶良。

伏辱二来書一。具承二芳旨一。忽成二隔レ漢之戀一。復傷二抱レ梁之意一。唯羨去留無レ恙。遂待二披雲一耳。

歌詞兩首　太宰卿大伴卿

多都能馬母。伊麻勿愛弖之可。阿遠爾與志。奈良乃美夜古爾。由吉帝己牟丹米。

龍の馬も、今も得てしが。「青丹吉、」奈良の都に、行きて來むため。

宇豆都仁波。安布余志勿奈子。奴波多麻能。用流能伊味仁越。都伎提美延許曾。

現には、逢ふ由も無し。ぬば玉の、夜の夢にを、繼ぎて見えこそ。

答歌二首

多都乃麻乎。阿禮波毛等米牟。阿遠爾與志。奈良乃美夜古爾。許牟比等乃多米。

延。意余斯遠波。迦久能尾奈良志。多摩枳波流。伊能知遠志家騰。世武周弊母奈斯。

世の中の、術なきものは、年月は、流るゝ如し。取續き、追ひ來るものは、百種に、迫め寄り來る、少女等が、少女さびすと、唐玉を、手本に纏かし、よちこらと、手携はりて、遊びけむ、時の盛りを、止みかね、過し遣りつれ、「蜷の腸」か黑き髮に、何時の間か、霜の降りけむ、紅の、面の上に、何處ゆか、皺搔垂りし。丈夫の、男さびすと、劒太刀、腰に取佩き、幸弓を、手握り持ちて、赤駒に、下鞍打置き、匍ひ乘りて、遊び歩きし、世の中や、常に有りける。少女等が、さ鳴す板戸を、押開き、い辿り寄りて、眞玉手の、玉手差し交へ、さ寢し夜の、いくだもあらねば、手束杖、腰にたがねて、かく行けば、人に厭はえ、かく行けば、人に惡まえ、およしをば、斯くのみならし。「たまきはる」命惜しけど、せむ術も無し。

一　反　歌

少女さびす―少女の振舞すといふ意
纏かし―纏き
よちこら―同年輩の子供
止みかね―止めかね
過し遣りつれ―下に「ば」を補ふ
蜷の腸―枕詞
幸弓―獵獸用の弓
世の中や常に有りける―世の中は常にはあらず
さ鳴す―さは發語、ならす、戸を閉むることをしかいへり、古の戸は多く開き戸にて開閉に音ある故か
いくだもあらねば―幾何もあらぬに
手束杖―手に握る杖
たがねて―束ねて、杖に倚り添ふさま
厭はえ―厭はれ
およしをば―凡は
たまきはる―枕詞

八大辛苦—生、老、病、死、愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛
賞樂—賞心樂事
二毛—老いて白毛の交り生ふるをいふ
久禮奈爲能—一云「爾能保奈酒」

易レ集難レ排八大辛苦。難レ遂易レ盡百年賞樂。古人所レ歎。今亦及レ之。所以因作二一章之歌一。以撥二二毛之歎一。其歌曰。

世間能。周弊奈伎物能波。年月波。奈何流流其等斯。等利都都伎。意比久留母能波。毛毛久佐爾。勢米余利伎多流。遠等咩良何。遠等咩佐備周等。可羅多麻乎。多母等爾麻可志。或有此句云「之路多倍乃。袖布利可伴之。久禮奈爲乃。阿可毛須蘇毘伎」余知古良等。手多豆佐波利提。阿蘇比家武。等伎能佐迦利乎。等等尾迦禰。周具斯野利都禮。美奈乃和多。一云「都禰奈利之、惠麻比麻欲毘伎。散久伴奈能。宇都呂比爾家里。余乃奈迦具漏伎可美爾。伊都乃麻可。斯毛可伴。可久乃未奈良之」乃布利家武。久禮奈爲能。意母提乃宇倍爾。伊豆久由可。斯和何伎多利斯。麻周羅遠乃。遠刀古佐備周等。都流岐多智。許志爾刀利波枳。佐都由美乎。多爾伎利物知提。阿迦胡麻爾。志都久良宇知意伎。波比能利提。阿蘇比阿留伎斯。余乃奈迦野。都禰爾阿利家留。遠等咩良何。佐那周伊多斗乎。意斯比良伎。伊多度利與利提。摩多麻提乃。多麻提佐斯迦閉。佐禰斯欲能。伊久陀母阿羅禰婆。多都可豆惠。許志爾多何禰提。可久由既婆。比等爾伊等波延。可久由既婆。比等爾邇久麻

なほ〳〵に―おとなしく
爲まさに―爲ませ、本文「爾」は「禰」の誤か
等思ニ衆生一云々―最勝王經「吾觀衆生無偏黨如羅怙羅」、愛無過子、誰不愛子乎」羅怙羅は釋迦の子
何處より云々―いかなる過去の因緣にて我が子と生れ來しものぞ
まなかひに―目の間に
もとな懸りて―せんすべもなくちらつきて

久方の、天路は遠し。なほ〳〵に、家に歸りて、業を爲まさに。

思子等歌一首并序

釋迦如來金口正說。等思ニ衆生一如ニ羅睺羅一。又說愛無レ過レ子。至極大聖尙有ニ愛レ子之心一。況乎世間蒼生誰不レ愛レ子乎。

宇利波米婆。胡藤母意母保由。久利波米婆。麻斯提斯農波由。伊豆久欲利。枳多利斯物能曾。麻奈迦比爾。母等奈可可利提。夜周伊斯奈佐農。

瓜食めば、子供思ほゆ。栗食めば、況して忍ばゆ。何處より、來りしものぞ。まなかひに、もとな懸りて、安寢し爲さぬ。

反歌

銀母。金母玉母。奈爾世武爾。麻佐禮留多可良。古爾斯迦米夜母。

銀も、黃金も玉も、何せむに、優れる寶、子に如かめやも。

哀ニ世間難レ住歌一首并序

其等久。布美奴伎提。由久智布比等波。伊波紀欲利。奈利提志比等迦。奈何名能良佐爾。阿米弊由迦婆。奈何麻爾麻爾。都智奈良婆。大王伊麻周。許能提羅周。日月能斯多波。阿麻久毛能。牟迦夫周伎波美。多爾具久能。佐和多流伎波美。企許斯遠周。久爾能麻保良叙。可爾迦久爾。保志伎麻爾麻爾。斯可爾波阿羅慈迦。

父母を、見れば尊し。妻子見れば、めぐしうつくし。世の中は、斯くぞ道理。「黏鳥の」かゝらはしもよ、行方知らねば、うけ沓を、脱棄る如く、踏脱ぎて、行くちふ人は、岩木より、なりてし人か。汝が名告らさね。」天へ行かば、汝がまに〳〵。地ならば、大君座す、此の照す、日月の下は、天雲の、向伏す極み、谷蟆の、さ渡る極み、聞こし食す．國のまほらぞ。かにかくに、欲しきまに〳〵、然かにはあらじか。

反歌

比佐迦多能。阿麻遲波等保斯。奈保奈保爾。伊弊爾可弊利提。奈利乎斯麻佐爾。

黏鳥の―枕詞　うけ沓―破れ沓、「うけ」は「うがたれ」の約　行くちふ―行くといふ　岩木より云々―岩木より生れ出でし人か　告らされ―告れ、汝が名を名のれ　天へ行かば云々―天にでも上らば汝が心のまゝにせよ　谷蟆―蝦蟆　此の照す云々―天の下　天雲の云々―天地のはてに至るまで　聞こし食す―聞し召す　國のまほらぞ―國土といはんが如し　欲しきまに〳〵云々―欲するまゝにさはあるまじき事にてはなきか

枕附く—枕詞
閨屋—閨房
慕ひ來し—京より
術もすべなさ—せんかたなさ
あをによし—妻を愛していふ詞
國內—筑紫の國中
楝—せんだんの木

大野山—筑前國御笠郡
おきそ—息嘯(オキウソ)にて、ためいき

知レ敬二父母一—「知」の上に「不」を脫せしか
畏俗先生—「畏」は「異」の誤か、一本「離」
三綱—君臣、父子、夫婦
五敎—父義、母慈、兄友、弟恭、子孝
米具斯宇都久志—此字に水戶本、拾穗本等に「通路得奴、通路得奴、兄弟親族、通得奴、老見幼兒、朋友乃、言問交」の六句二十二字あり
可可良波志母與—此句の下に古義「波夜可波乃」の一句を補ふ

悔しかも、斯く知らませば、「あをによし、國內盡、見せましものを。

伊毛何美斯。阿布知乃波那波。知利奴倍斯。和何那久那美多。伊摩陀飛那久爾。

妹が見し、楝の花は、散りぬべし。我が泣く淚、未だ干なくに。

大野山。紀利多知和多流。和何那宜久。於伎蘇乃可是爾。紀利多知和田流。

大野山、霧立ち渡る。我が嘆く、おきその風に、霧立ち渡る。

神龜五年七月二十一日筑前國守山上憶良上。

令レ反二惑情一歌一首并序

或有レ人知レ敬二父母一。忘二於侍養一。不レ顧二妻子一。輕二於脫屣一。自稱二畏俗先生一。意氣雖レ揚二青雲之上一。身體猶在二塵俗之中一。未レ驗二修行得道之聖一。蓋是亡二命山澤一之民。所以指二示三綱一更開二五敎一。遣レ之以レ歌。令レ反二其惑一。歌曰。

父母乎。美禮婆多布斗斯。妻子美禮婆。米具斯宇都久志。余能奈迦波。加久叙許等和理。母智騰利乃。可可良波志母與。由久弊斯良禰婆。宇既具都遠。奴伎都流

婦功
要期—いつ〳〵迄は必ずと契りおくこと
獨飛—人の獨り別れて行くこと
半路—夫婦の契の半ばにして別るゝこと
蘭室—婦人の閨房
染筠—舜の妃娥皇女英の二人舜を慕ひその涙にて竹を染めたること博物志に見ゆ、こゝは染竹の事をかりて染筠とせり、筠は竹の惣名
泉門—黄泉の門
愛河—人情
苦海—世間
穢土—此の土
淨刹—淨土
日本挽歌—右の文と詩に對して特に日本と書けり
泣く子なす—泣く子の如く
心ゆも—心よりも
こやし—臥す、なえ臥しぬれば、死せるをいふ、本文「禮」の下に「婆」を脱せしか
岩木をも云々—岩木にだに語りて慰めんとすれど非情物なれば理解せずの意
かたち—死屍
妹の命—たふとび云ふ
鳰鳥の—枕詞
家離り座す—葬送をいふ
家—筑紫の館

大君の、遠の朝廷と、知らぬ火、筑紫の國に、泣く子なす、慕ひ來まして、息だにも、未だ休めず、年月も、未だ有らねば、心ゆも、思はぬ間に、打靡き、こやしぬれ、言はむ術、爲む術知らに、岩木をも、問ひさけ知らず。家ならば、かたちはあらむを、恨めしき、妹の命の、我をばも、如何に爲よとか、「鳰鳥の」、二人並び居、語らひし、心背きて、家離り座す。

反歌

伊弊爾由伎弖。伊可爾可阿我世武。摩久良豆久。都摩夜佐夫斯久。於母保由倍斯母。
家に行きて、如何にか我が爲む。「枕附く」、嬬屋淋しく、思ほゆべしも。
伴之伎與之。加久乃未可良爾。之多比己之。伊毛我己許呂乃。須別毛須別那左。
はしきよし、斯くのみからに、慕ひ來し、妹が心の、術もすべなさ。
久夜斯可母。可久斯良摩世婆。阿乎爾與斯。久奴知許等其等。美世摩斯母乃乎。

三千世界誰能逃ニ黑闇之搜來一。二鼠競走。而度レ日之鳥旦飛。四蛇爭侵。而過レ隙之駒夕走。嗟乎痛哉。紅顏共ニ三從一長逝。素質與ニ四德一永滅。何圖偕老違ニ於要期一。獨飛生ニ於半路一。蘭室屛風徒張。斷腸之哀彌痛。枕頭明鏡空懸。染筠之淚逾落。泉門一掩。無レ由ニ再見一。嗚呼哀哉。

愛河波浪已先滅。苦海煩惱亦無レ結。從來厭ニ離此穢土一。本願託ニ生彼淨刹一。

日本挽歌一首

大王能。等保乃朝廷等。斯良農比。筑紫國爾。泣子那須。斯多比枳摩斯提。伊企陀爾母。伊摩陀夜周米受。年月母。伊摩他阿良禰婆。許許呂由母。於母波奴阿比陁爾。宇知那比枳。許夜斯努禮。伊波牟須弊。世武須弊斯良爾。石木乎母。刀比佐氣斯良受。伊弊那良婆。迦多知波阿良牟乎。宇良賣斯企。伊毛乃美許等能。阿禮乎婆母。伊可爾世與等可。爾保鳥能。布多利那良比爲。加多良比斯。許許呂曾牟企氏。伊弊社可利伊摩須。

方レ夢―莊子「方其夢也不知其夢也」
三界―欲界、色界、無色界
能仁―釋迦の漢譯
雙林―娑羅雙樹林
泥洹―滅度、死
二聖―維摩と釋迦
至極―聖德の至極
力負―莊子「藏舟於壑、藏山於澤、謂之固矣、然而夜半有力者負之而走、昧者不知也」、こは死生の變化の逃れ難き事をいへり
黑闇―涅槃聖行品に、功德大天、黑闇天は姉妹にあり、功德天は生をいひ、黑闇は死をいふと見ゆ
二鼠―瑯琊代醉編「佛書、人有逃死者、入井、則遇四蛇傷足、而不能下、上樹則逢二鼠咬藤、而不能升、四蛇以喩四時、二鼠以喩日月」
度日之鳥―文選張景陽雜詩「人生瀛海內忽如鳥過目」人生の早く過ぎ去るに喩ふ
四蛇爭侵―最勝王經に地水火風の四を四毒蛇に喩へ人の身をかはる〴〵侵すといへること出づ
過隙之駒―光陰のうつりやすきに喩ふ
紅顏、三從―婦人の美容と美德
四德―婦言、婦德、婦容、

傾命―老いて齡の傾きたるをいふ

蓋聞云々―序と詩との題落ちしか、古義には「筑前守山上憶良悼二傷亡妻一詩一首幷序」と補へり

四生―胎生、卵生、濕生、化生

起滅―生死

萬葉集 卷第五

雜歌

太宰帥大伴卿報二凶問一歌一首

禍故重疊凶問累集。永懷二崩心之悲一。獨流二斷腸之泣一。但依二兩君大助一。傾命纔繼耳。筆不レ盡レ言。古今所レ歎。

余能奈可波。牟奈之伎母乃等。志流等伎子。伊與余麻須萬須。加奈之可利家理。

世の中は、空しきものと、知る時し、愈々益々、悲しかりけり。

神龜五年六月二十三日。

蓋聞四生起滅。方レ夢皆空。三界漂流。喩二環不一レ息。所以維摩大士在二乎方丈一。有レ懷二染疾之患一。釋迦能仁坐二於雙林一。無レ免二泥洹之苦一。故知二聖至極。不レ能レ拂二力負之尋至一。

心ぐく—なつかしく

春風の云々—遂には汝に與へんと聲明だにし給はば

在り去りて—在り在りて、このまゝになしおきて

ざれや—ざらんや

含めり—つぼめり

又家持贈二藤原朝臣久須麻呂一歌二首

情八十一。所念可聞。春霞。輕引時二。事之通者。

心ぐく、思ほゆるかも。春霞、たなびく時に、ことし通へば。

春風之。聲爾四出名者。有去而。不有今友。君之隨意。

春風の、音にし出なば、在り去りて、今ならずとも、君がまにく。

藤原朝臣久須麻呂來報歌二首

奥山之。磐影爾生流。菅根乃。懃吾毛。不相念有哉。

奥山の、岩陰に生ふる、菅の根の、懇我も、相思はざれや。

春雨乎。待常二師有四。吾屋戸之。若木乃梅毛。未含有。

春雨を、待つとにしあらし。我が宿の、若木の梅も、未だ含めり。

言はず—「言はむ」の方然るべし
まき寢—枕として寢る
壽母—一說「壽」は「身」の誤
置く露の—置く露の如き

しき降る—頻りに降る
梅の花—童女に喩ふ

まねく—繁く

一昨年の、先つ年より、今年まで、戀ふれど何ぞも、妹に逢ひ難き

打乍二波。更毛不得言。夢谷。妹之手本乎。纒宿常見者
現には、更にもえ言はず。夢にだに、妹が袂を、まき寢とし見ば。

吾屋戸之。草上白久。置露乃。壽母不有惜。妹爾不相有者。
我が宿の、草の上白く、置く露の、命も惜しからず。妹に逢はざれば。

大伴宿禰家持報贈藤原朝臣久須麻呂歌三首

春之雨者。彌布落爾。梅花。未咲久。伊等若美可聞。
春の雨は、彌しき降るに、梅の花、未だ咲かなく。いと若みかも。

如夢。所念鴨。愛八師。君乃使乃。麻禰久通者。
夢の如、思ほゆるかも。はしきやし、君が使の、まねく通へば。

浦若見。花咲難寸。梅乎殖而。人之事重三。念曾吾爲類。
うら若み、花咲き難き、梅を植ゑて、人の言繁み、思ひぞ我がする。

板盖之。黒木乃屋根者。山近之。明日取而。持將參來。
板葺の、黒木の屋根は、山近し。明日しも取りて、持ちて參來む。
黒樹取。草毛刈乍。仕日利。勤和氣登。將譽十方不在。
黒木取り、茅も刈りつゝ、仕へめど、いそしきわけと、譽めむともあらず。
一云。仕登母。
野干玉能。昨夜者令還。今夜左倍。吾乎還莫。路之長手呼。
ぬば玉の、昨夜は歸しつ。今宵さへ、我をかへすな。道の長手を。

紀女郎裹物贈レ友歌一首　女郎名曰二小鹿一

風高。邊者雖吹。爲妹。袖左倍所沾而。刈流玉藻烏。
風高く、邊には吹けれど、妹がため、袖さへ濡れて、刈れる玉藻ぞ。

大伴宿禰家持贈二娘子一歌三首

前年之。先年從。至今年。戀跡奈何毛。妹爾相難。

板葺の云々—遷都の頃なれば家造ることあるなるべし
明日—本文、下に「伐」を脱せしか、「あすきりとりて」又一説「あすの日取りて」と訓ず
黒木取り—前のと此歌とは別に端詞ありしが失せたるか
わけ—汝
昨夜—キソと訓ずべしと古義にはいへり
長手—長き道
邊—海邊

云—この二首當時の語か或は古事などありてよめるか、古來明解を與へたるものなし

鶉鳴く—枕詞　古りにし里ゆ云々—古京奈良に居りし時より思ひ初めたれど云々

言でしは云々—初に言葉を出せしは誰ぞや、即ち君にはあらずや　中淀にして—堰き入れたる水の苗代にて淀めるを二人の中の絶間なるに喩

うつたへに—ひたすらに　言へや—口にこそ言へ實は君が見たくて行く也

百千度、戀ふといふとも、諸茅らが、ねりの言葉し、我は頼まず。

大伴宿禰家持贈二紀女郞一歌一首

鶉鳴。故鄕從。念友。何如裳妹爾。相緣毛無寸。

鶉鳴く、古りにし里ゆ、思へども、何ぞも妹に、逢ふ由も無き。

紀女郞報二贈家持一歌一首

事出之者。誰言爾有鹿。小山田之。苗代水乃。中與杼爾四手。

言でしは、誰がことなるか。小山田の、苗代水の、中淀にして。

大伴宿禰家持更贈二紀女郞一歌五首

吾妹子之。屋戸乃笆乎。見爾往者。蓋從門。將返却可聞。

我妹子が、宿の籬を、見に行かば、蓋し門より、返しなむかも。

打妙爾。前垣乃酢堅。欲見。將行常云哉。君乎見爾許曾。

うつたへに、籬の姿、見まくほり、行かむと言へや。君を見にこそ。

心さへ―心にまでも

うつくし―實際に、げにげにしく眞實に

不相志思―(一)「志」は衍にて「あひおもはねば」か(二)「志」は「者」の誤にて「不相思者」(アヒオモハザレバ)か

ほどけども―諸説あり(一)紐を解けどもか、こなたの下紐を解きて寢ればかしこに夢に見ゆるといふ諺ありしか、(二)本文「杼」は「邪」の誤にて「ほざけども」か(三)「得毛經友」の誤にて「うけへども」か

言問はぬ云々、百千度云

久堅之。雨之落日乎。直獨。山邊爾居者。鬱有來。
久方の、雨の降る日を、只一人、山邊に居れば、いぶせかりけり。

大伴宿禰家持從二久邇京一贈二坂上大孃一歌五首

人眼多見。不相耳曾。情左倍。妹乎忘而。吾念莫國。
人目多み、逢はざるのみぞ。心さへ、妹を忘れて、我が思はなくに。

僞毛。似付而曾爲流。打布裳。眞吾妹兒。吾爾戀目八。
僞も、似附きてぞする。うつくしも、誠我妹子、我に戀ひめや。

夢爾谷。將所見常吾者。保杼毛友。不相志思。諸不所見武。
夢にだに、見えむと我は、ほどけども、あひし思はねば、うべ見えざらむ

事不問。木尚味狹藍。諸茅等之。練乃村戸二。所詐來。
言問はぬ、木すら紫陽花、諸茅らが、ねりのむらどに、欺かれけり。

百千遍。戀跡云友。諸茅等之。練之言羽志。吾波不信。

一重山—久邇と奈良とは山一重へだてたればいふ
へなれる—隔てる
ものからに—ものながらに
然ぞ—さぞ
君がめをほり—君を逢見んことを欲して
今知らす—今新に天皇の知ろしめす
久邇の都に—久邇の都に居りて、古里にのこせる妻に逢はざること久しくなりぬ
見な—見ん

在二久邇京一思下留二寧樂宅一坂上大孃上大伴宿禰家持作歌一首

一隔山。重成物乎。月夜好見。門爾出立。妹可將待。

一重山、へなれるものを、月夜よみ、門に出で立ち、妹か待つらむ。

藤原郎女聞レ之卽和歌一首

路遠。不來常波知有。物可良爾。然曾將待。君之目乎保利。

道遠み、來じとは知れる、ものからに、然ぞ待つらむ。君がめをほり。

大伴宿禰家持更贈二大孃一歌二首

都路乎。遠哉妹之。比來者。得飼飯而雖宿。夢爾不所見來。

都路を、遠みや妹が、この頃は、祈ひて寢れど、夢に見え來ぬ。

今所知。久邇乃京爾。妹二不相。久成。行而早見奈。

今知らす、久邇の都に、妹に逢はず、久しくなりぬ。行きて早見な。

大伴宿禰家持報二贈紀女郎一歌一首

打渡。竹田之原爾。鳴鶴之。間無時無。吾戀良久波。
打渡す、竹田の原に、鳴く田鶴の、間無く時なし。我が戀ふらくは。

早河之。湍爾居鳥之。緣乎奈彌。念而有師。吾兒羽裳何怜。
早川の、瀬に居る鳥の、由を無み、思ひてありし、我が子はもあはれ。

紀女郎贈二大伴宿禰家持一歌二首　女郎名曰二小鹿一也。

神左夫跡。不欲者不有。八也多八。如是爲而後二。佐夫之家牟可聞。
神さぶと、いなにはあらず、漸大は、斯くして後に、淋しけむかも。

玉緒乎。沫緒二搓而。結有者。在手後二毛。不相在目八方。
玉の緒を、沫緒によりて、結べれば、ありて後にも、逢はざらめやも。

大伴宿禰家持和歌一首

百歳爾。老舌出而。與余牟友。吾者不猒。戀者益友。
百歳に、老舌出でて、よゝむとも、我は厭はじ。戀はますとも。

打渡す―見渡したる、以下「田鶴の」迄は序

由を無み―せんすべの無さに

神さぶと云々―年老いねびたりとて遇ふを厭ふ譯にはあらず
漸大は―一説、本文「八也多八」は「八多也八多」（ハヤハタ）の誤か
斯くして後に―遇ひて更に君が心のかはりて我が老いたるを厭はれん時に
沫緒―紐の結び方、あはび結び、あはぢ結び

よゝむ―齒落ちたる老人の物いふ聲のよどむをいふ
戀はますとも―四句と前後して見るべし

我妹子—誠の妹

逢見む—下に「と欲す」と補ふ

高々に—仰ぎ望む意

大伴田村家之大孃贈二妹坂上大孃一歌四首

外居而。戀者苦。吾妹子乎。次相見六。事計爲與。

外に居て、戀ふれば苦し。我妹子を、次ぎて逢見む。事計りせよ。

遠有者。和備而毛有乎。里近。有常聞乍。不見之爲便奈沙。

遠からば、侘びてもあらむを、里近く、ありと聞きつゝ、見ぬが術なさ。

白雲之。多奈引山乃。高々二。吾念妹乎。將見因毛我母。

白雲の、たなびく山の、高々に、我が思ふ妹を、見む由もがも。

何。時爾加妹乎。牟具良布能。穢屋戸爾。入將座。

如何ならむ、時にか妹を、葎生の、賤しき宿に、入りまさせなむ。

右田村大孃坂上大孃幷是右大辨大伴宿奈麻呂卿之女也。卿居二田村里一。號曰二田村大孃一。

但妹坂上大孃者母居二坂上里一。仍曰二坂上大孃一。于時姉妹諮問以レ歌贈答。

大伴坂上郎女從二竹田庄一贈二賜女子大孃一歌二首

思ひ絶え侘びにしものを—侘しさの餘り思ひ絶えにしものをの意か

人目繁くて—初句の上に轉じて見よ

和ぎむかと—やはらがんかと、慰まんかと

ほどろ—程

思へりしくし—「思へりしく」が一單語「し」は助辭にて、物思はしげに我を送り出しゝ其のさまの義か

來らく—來ることの

截り燒くがごと—一説「たち燒く如し」

念絶。和備西物尾。中々爾。奈何辛苦。相見始兼。
思ひ絶え、侘びにしものを、なか〱に、何か苦しく、逢見初めけむ。

相見而者。幾日毛不經乎。幾許久毛。久流比爾久流必。所念鴨。
逢見ては、幾日も經ぬを、幾許も、狂ひに狂ひ、思ほゆるかも。

如是許。面影耳。所念者。何如將爲。人目繁而。
斯くばかり、面影のみに、思ほえば、如何にかもせむ、人目繁くて。

相見者。須臾戀者。奈木六香登。雖念彌。戀益來。
逢見ては、暫も戀は、和ぎむかと、思へどいよよ、戀ひまさりけり。

夜之穗杼呂。吾出而來者。吾妹子之。念有四九四。面影二三湯。
夜のほどろ、我が出て來れば、我妹子が、思へりしくし、面影に見ゆ。

夜之穗杼呂。出都追來良久。遍多數。成者吾胸。截燒如。
夜のほどろ、出でつゝ來らく、度まねく、なれば我が胸、截り燒くがごと。

暮去者。屋戸開設而。吾將待。夢爾相見二。將來云比登乎。
夕さらば、宿開けまけて、我待たむ。夢に逢見に、來むとふ人を。

朝夕二。將見時左倍也。吾妹之。雖見如不見。由戀四家武。
朝夕に、見む時さへや、我妹子が、見とも見ぬごと、なほ戀しけむ。

生有代爾。吾者未見。事絶而。如是何怜。縫流嚢者。
生ける世に、我は未だ見ず。言絶えて、斯く面白く、縫へる嚢は。

吾妹兒之。形見乃服。下著而。直相左右者。吾將脱八方。
我妹子が、形見の衣、下に著て、直に逢ふまでは、我脱がめやも。

戀死六。其毛同曾。奈何爲二。人目他言。辭痛吾將爲。
戀ひ死なむ、それも同じぞ。何せむに、人目人言、こちたみ我がせむ。

夢二谷。所見者社有。如此許。不所見有者。戀而死跡香。
夢にだに、見えばこそあらめ、斯くばかり、見えずしあるは、戀ひて死ねとか。

の誤にて「神のまに〳〵」かといへる、共にいかゞ、要するに未詳
開けまけて―開け設けて

朝夕に云々―朝夕相見ん時だに逢ひても逢はぬ如く戀しかるべきを、まして相別れての戀しさは又格別ならんの意か

言絶えて―言葉にも述べ難き程

こちたみ―こと痛しとて厭ふことを

あらめ―幾分心の慰む由もあらん

思へこそ—思へばこそ

不相可聞—一說「相」の下に「妹」を脫せしか、「あはぬいもかも」

驚きて—目をさまして

三重結ぶべく—瘦せ衰へたる也

懸けむも—懸けたらんはどの苦しさなる哉
神の諸臥—神が我傍に添臥す意かと略解にいへる、又、古義に「神之隨似」

又家持和二坂上大孃一歌二首

後湍山。後毛將相常。念社。可死物乎。至今日毛生有。
後瀬山、後も逢はむと、思へこそ、死ぬべきものを、今日までも生けれ。

事耳乎。後手相跡。懃。吾乎令憑而。不相可聞。
言のみを、後も逢はむと、懃に、我を頼めて、逢はざらめかも。

更大作宿禰家持贈二坂上大孃一歌十五首

夢之相者。苦有家里。覺而。掻探友。手二毛不所觸者。
夢の逢は、苦しかりけり。驚きて、掻探れども、手にも觸れねば。

一重耳。妹之將結。帶乎尙。三重可結。吾身者成。
一重のみ、妹が結ばむ、帶をすら、三重結ぶべく、我が身はなりぬ。

吾戀者。千引乃石乎。七許。頸二將繋母。神之諸伏。
我が戀は、千引の石を、七ばかり、頸に懸けむも、神の諸臥。

我が思ひ、斯くてあらずは、玉にもが、誠も妹が、手に纒はれむ。

同坂上大孃贈家持歌一首

春日山。霞多奈引。情具久。照月夜爾。獨鴨念。

春日山、霞棚引き、心ぐく、照れる月夜に、一人かも寢む。

又家持和坂上大孃歌一首

月夜爾波。門爾出立。夕占問。足卜乎曾爲之。行乎欲焉。

月夜には、門に出で立ち、夕占問ひ、足占をぞせし。行かまくをほり。

同大孃贈家持歌二首

云云。人者雖云。若狹道乃。後瀬山之。後毛將念君。

かにかくに、人は言ふとも、若狹路の、後瀬の山の、後も逢はむ君。

世間之。苦物爾。有家良久。戀二不勝而。可死念者。

世の中の、苦しき物に、ありけらく。戀に堪へずて、死ぬべき思へば。

あらずは—あらんよりは

心ぐく—おぼつかなく、一說、面白く

夕占—辻占の類
足占—足を踏みてする占
行かまくをほり—行きたさに、一說本文「乎」は「卷」の誤にて「行かまくほしみ」

將念—「念」は「會」の誤

けらく—「ける」の延

立たば—「立てば」と訓ずべし

今しはし—今は「し」は二つとも助辭、本文「有」は「者」の誤

妹に因りては—一說「妹に依りてば」と訓じ、妹により添ひてだにあらばの義とす

世やも二行く—この世は二度とは來ぬ

玉有者。手二母將卷乎。鬱瞻乃。世人有者。手二卷難石。
玉ならば、手にも纏かむを、空蟬の、世の人なれば、手にまきがたし。

將相夜者。何時將有乎。何爲常香。彼夕相而。事之繁裳。
逢はむ夜は、何時もあらむを、何すとか、其の宵逢ひて、言し繁きも。

吾名者毛。千名之五百名爾。雖立。君之名立者。惜社泣。
我が名はも、千名の五百名に、立ちぬとも、君が名立たば、惜みこそ泣け。

又大伴宿禰家持和歌三首

今時有四。名之惜雲。吾者無。妹丹因者。千遍立十方。
今しはし、名の惜しけくも、我は無し。妹に因りては、千度立つとも。

空蟬乃。代也毛二行。何爲跡鹿。妹爾不相而。吾獨將宿。
空蟬の、世やも二行く。何すとか、妹に逢はずて、我が一人寝む。

吾念。如此而不有者。玉二毛我。眞毛妹之。手二所纏牟。

かむる詞、「ね」は姉の意、母より子をいふにも、斯くあがめていふこと其例多かり
戀ふれぞ―戀ふればぞ、「戀ふれぞなねが」と轉じて見よ

鳰鳥の―枕詞
潛く―水をくゞる

あらずは―あらんよりは

言にしありけり―名ばかりにて實なきをいふ

あらぬか―あれかし、本文「粳」は「糠」の誤か

右歌報賜大孃歌也。

獻天皇歌二首

二寶鳥乃。潛池水。情有者。君爾吾戀。情示左禰。
鳰鳥の、潛く池水、心あらば、君に我が戀ふ、心示さね。

外居而。戀乍不有者。君之家乃。池爾住云。鴨二有益雄。
外に居て、戀ひつゝあらずは、君が家の、池に住むとふ、鴨ならましを。

大伴宿禰家持贈坂上家大孃歌二首　雖絶數年後會相聞往來

萱草。吾下紐爾。著有跡。鬼乃志許草。事二思安利家理。
萱草、我が下紐に、著けたれど、醜のしこ草、言にしありけり。

人毛無。國母有粳。我妹兒與。携行而。副而將座。
人も無き、國もあらぬか。我妹子と、携ひ行きて、たぐひて居らむ。

大伴坂上大孃贈大伴宿禰家持歌三首

戀ひつゝあらずは—戀ひつゝあらんよりは

常世—黄泉、本文「呼」は「與」の誤か

刀自—家の主婦

古里—跡見の庄

ありがてましを—在るに堪へ難からん

朝髪の—枕詞

なね—女子大孃、「な」はあ

如是許。戀乍不有者。石木二毛。成益物乎。物不思四手。

斯くばかり、戀ひつゝあらずは、岩木にも、ならましものを、物思はずして。

大伴坂上郎女從二跡見庄一贈二賜留レ宅女子大孃一歌一首并短歌

常呼二跡。吾行莫國。小金門爾。物悲良爾。念有之。吾兒乃刀自緒。野干玉之。夜晝跡不言。念二思。吾身者痩奴。嘆丹師。袖左倍沾奴。如是許。本名四戀者。古郷爾。此月期呂毛。有勝益士。

常世にと、我が行かなくに、小金門に、物悲しらに、思へりし、我が兒の刀自を、ぬば玉の、夜晝と言はず、思ふにし、我が身は痩せぬ。嘆くにし、袖さへ濡れぬ。斯くばかり、もとなし戀ひば、古里に、此の月頃も、ありがてましを。

反歌

朝髪之。念亂而。如是許。名姉之戀曾。夢爾所見家留。

朝髪の、思ひ亂れて、斯くばかり、なねが戀ふれぞ、夢に見えける。

惑毛―「惑」は「惑」の誤か、一説「懸」の誤にて「めぐしくも」
つれもなく云々―我につらくあるらん人を云々
我を―我なるを
みつれにみつれ―みつれは身やつれの約
村肝の―枕詞

都禮毛無。將有人乎。獨念爾。吾念者。惑毛安流香。
つれもなく、あるらむ人を、片思に、我は思へば、侘しくもあるか。
不念爾。妹之咲儛乎。夢見而。心中二。燎管曾呼留。
思はぬに、妹が笑まひを、夢に見て、心の内に、燃えつゝぞ居る。
丈夫跡。念流吾乎。如此許。三禮二見津禮。片思男責。
丈夫と、思へる我を、斯くばかり、みつれにみつれ、片思をせむ。
村肝之。情摧而。如此許。余戀良苦乎。不知香安類良武。
村肝の、心摧けて、斯くばかり、我が戀ふらくを、知らずかあるらむ。

獻二天皇一歌一首

足引乃。山二四居者。風流無三。吾爲類和射乎。害目賜名。
足引の、山にし居れば、雅無み、我がするわざを、咎め給ふな。

大伴宿禰家持歌一首

鴨鳥の……落ちて―「浮べる」の序
浮べる心―浮氣なる眞實のなき心
甘酒を―枕詞
垣穗―垣、二人の中の隔てになるより喩ふ
由を無み―逢ふべきよしのなさに
佐保―大和國

味酒呼。三輪之祝我。忌杉。手觸之罪歟。君二遇難寸。
鴨鳥の、遊ぶこの池に、木の葉落ちて、浮べる心、我が思はなくに。

味酒呼。三輪之祝我。忌杉。手觸之罪歟。君二遇難寸。
甘酒を、三輪の祝が、齋ふ杉、手觸れし罪か、君に逢ひ難き。

垣穗成。人辭聞而。吾背子之。情多由多比。不合頃者。
垣穗なす、人言聞きて、我が背子が、心たゆたひ、逢はぬこの頃。

大作宿禰家持贈二娘子一歌七首

情爾者。思渡跡。緣乎無三。外耳爲而。嘆曾吾爲。
心には、思ひ渡れど、由を無み、外のみにして、歎ぞ我がする。

千鳥鳴。佐保乃河門之。清瀬乎。馬打和多思。何時將通。
千鳥鳴く、佐保の川門の、清き瀬を、馬打渡し、何時か通はむ。

夜晝。云別不知。吾戀。情蓋。夢所見寸八。
夜晝と、いふ別知らず、我が戀ふる、心は蓋し、夢に見えきや。

思ひ遣る―心を慰むる
片椀―水を盛る器の蓋なきをいふにや
底にぞ云々―我は戀の極點に達せりといふ意
あらぬか―あれかし
衣手に―下にいとしき夫の君をと補ふ

思遣。爲便乃不知者。片垸之。底曾吾者。戀成爾家類。
思ひ遣る、術の知らねば、片椀の、底にぞ我は、戀なりにける。

復毛將相。因毛有奴可。白細之。我衣手二。齋留目六。
復も逢はむ、由もあらぬか。白妙の、我が衣手に、齋ひ留めむ。

豐前國娘子大宅女歌一首

夕闇者。路多豆多頭四。待月而。行吾背子。其間爾母將見。
夕闇は、道たづ〳〵し、月待ちて、去ませ我が背子、其の間にも見む。

安都扉娘子歌一首

三空去。月之光二。直一日。相三師人之。夢西所見。
み空行く、月の光に、只一日、逢ひ見し人の、夢にし見ゆる。

丹波大娘子歌三首

鴨鳥之。遊此池爾。木葉落而。浮心。吾不念國。

其の日—其の日より

栲縄の—枕詞

欲しけくは—ほしくあるのは

はね蘰—少女の髪の飾とするものならん、年頃になりて始めて爲すものと思はる

無かりしを—宣長が「四」は「物」の誤にて「無きものを」と訓じたる、最も然るべくや

巫部麻蘇娘子歌二首

吾背子乎。相見之其日。至于今日。吾衣手者。乾時毛奈志。

我が背子を、逢見し其の日、今日までに、我が衣手は、乾る時もなし。

栲縄之。永命乎。欲苦波。不絶而人乎。欲見社。

「栲縄の」長き命を、欲しけくは、絶えずて人を、見まほしみこそ。

大伴宿禰家持贈二童女一歌一首

葉根蘰。今爲妹乎。夢見而。情内二。戀度鳴。

はね蘰、今する妹を、夢に見て、心の内に、戀ひ渡るかも。

童女來報歌一首

葉根蘰。今爲妹者。無四乎。何妹其。幾許戀多類。

はね蘰、今する妹は、無かりしを、何れの妹か、幾許戀ひたる。

粟田娘子贈二大伴宿禰家持一歌二首

春日野爾。朝居雲之。敷布二。吾者戀益。月二日二異二。
春日野に、朝居る雲の、しく〳〵に、我は戀ひます。月に日にけに。

一瀨二波。千遍障良比。逝水之。後毛將相。今爾不有十方。
一瀨には、千度障らひ、行く水の、後も逢ひてむ。今ならずとも。

大伴宿禰家持到二娘子之門一作歌一首

如此爲而哉。猶八將退。不近。道之間乎。煩參來而。
斯くしてや、なほや退らむ。近からぬ、道の間を、なづみ參來て。

河内百枝娘子贈二大伴宿禰家持一歌二首

波都波都爾、人乎相見而。何將有。何日二箇。又外二將見。
はつ〳〵に、人を逢ひ見て、如何ならむ、何れの日にか、復外に見む。

夜干玉之。其夜乃月夜。至于今日。吾者不忘。無間苦思念者。
ぬば玉の、其の夜の月夜、今日までに、我は忘れず、間なくし思へば。

しく〳〵に—頻りに　我は戀ひます—一說「あは戀ひまさる」

障らひ—障り　後も逢ひてむ—一說「後にも逢はむ」

なづみ參來て—苦勞して參りまして

はつ〳〵に—わづかに、辛うじて　復外に見む—復いつの時かよそながらも見んの意

其の夜—初めて逢ひし夜

戀草―戀
力車―荷車

家人に―この歌は都の久邇に遷されし後奈良の故郷における妻を思ひてよめるか
戀ひ過ぎめやも―戀ふる心のすてがたきをいふ
泉の里―山城國相樂郡泉川のあたりか
聞くに―「聞きに」と訓ずべし
刈菰の―枕詞
たゞか―うはさ

斯くしのみ、戀ひや渡らむ。秋津野に、棚引く雲の、過ぐとはなしに。

廣河女王歌二首

戀草呼。力車二。七車。積而戀良苦。吾心柄。
戀草を、力車に、七車、積みて戀ふらく、我が心から。

戀者今葉。不有常吾羽。念乎。何處戀其。附見繫有。
戀は今は、あらじと我は、思ひしを、何處の戀ぞ、摑みかゝれる。

石川朝臣廣成歌一首

家人爾。戀過目八方。川津鳴。泉之里爾。年之歷去者。
家人に、戀ひ過ぎめやも。蛙鳴く、泉の里に、年の經ぬれば。

大伴宿禰像見歌三首

吾聞爾。繫莫言。刈薦之。亂而念。君之直香曾。
我が聞くに、掛けてな言ひそ。刈菰の、亂れて思ふ、君がたゞかぞ。

めごと―見ること

照日乎―一說、「てらす日を」又「日」は「月」の誤にて「照れる月を」

心にのりて―我が心に掛りて愛らしく

うはへなき―一九八頁に詳註せり

人―我

盡す―盡さする意

海山毛。隔莫國。奈何鴨。目言乎谷裳。幾許乏寸。

海山も、隔たらなくに、何しかも、めごとをだにも、幾許乏しき。

大伴宿禰三依悲レ別歌一首

照日乎。闇爾見成而。哭涙。衣沾津。干人無二。

照れる日を、闇に見做して、泣く涙、衣濡らしつ、干す人無しに。

大伴宿禰家持贈二娘子一歌二首

百礒城之。大宮人者。雖多有。情爾乘而。所念妹。

百敷の、大宮人は、多かれど、心にのりて、思ほゆる妹。

得羽重無。妹二毛有鴨。如此許。人情乎。令盡念者。

うはへなき、妹にもあるかも。斯くばかり、人の心を、盡す思へば。

大伴宿禰千室歌一首 未詳

如此耳。戀哉將度。秋津野爾。多奈引雲能。過跡者無二。

謂言之。恐國曾。紅之。色莫出曾。念死友。

言ふことの、恐き國ぞ。紅の、色にな出でそ。思ひ死ぬとも。

今者吾波。將死與吾背。生十方。吾二可緣跡。言跡云莫苦荷。

今は我は、死なむよ我が背、生けりとも、我に依るべしと、言ふといはなくに。

人事。繁哉君乎。二鞘之。家乎隔而。戀乍將座。

人言を、繁みや君を、二さやの、家を隔てて、戀ひつゝ居らむ。

比者。千歲八往裳。過與。吾哉然念。欲見鴨。

この頃は、千歲や行きも、過ぎぬると、我やしか思ふ。見まくほれかも。

愛常。吾念情。速河之。雖塞塞友。猶哉將崩。

美しと、我が思ふ心、早川の、塞きとせくとも、なほや崩れむ。

青山乎。橫敍雲之。灼然。吾共咲爲而。人二所知名。

青山を、橫ぎる雲の、著く、我と笑まして、人に知らゆな。

言ふことの―一說「ものいひの」恐き國ぞ―人言のさがなき國ぞの意

言ふといはなくに―いはぬに、「言ふ」は添へていふのみ

二さやの―刀の鞘の二室に仕切りたるものかといへど未詳、「家を隔てて」といふ序なるは論なし

見まくほれかも―見まく欲すればかも

橫敍―「敍」は「殺」の誤

我と笑まして―我に對して笑ひて

知らゆな―知らるな

たまきはる—枕詞
命に向ふ—命と等しき
菅の根の—枕詞
なか〳〵に—寧ろ却りて
息の緒にして—命掛けにて

直相而。見而者耳社。靈剋。命向。吾戀止眼。
直に逢ひて、見てばのみこそ、たまきはる、命に向ふ、我が戀止まめ。
不欲常云者。將强哉吾背。菅根之。念亂而。戀管母將有。
否と言はば、强ひめや我が背、菅の根の、思ひ亂れて、戀ひつゝあらむ。

大伴宿禰家持與二交遊一別歌三首

蓋毛。人之中言。聞可毛。幾許雖待。君之不來益。
蓋しくも、人の中言、聞けるかも、幾許待てども、君が來まさぬ。
中々爾。絶年云者。如此許。氣緒爾四而。吾將戀八方。
なか〳〵に、絶えむとし言はば、斯くばかり、息の緒にして、我が戀ひめやも。
相念。人爾有莫國。懃。情盡而。戀流吾毳。
相思ふ、人にあらなくに、懃に、心盡して、戀ふる我かも。

大伴坂上郎女歌七首

大伴坂上郎女歌二首

眞十鏡。磨師心乎。縱者。後爾雖云。驗將在八方。

まそ鏡、研ぎし心を、ゆるしてば、後に言ふとも、驗あらめやも。

眞玉附。彼此兼手。言齒五十戸常。相而後社。悔二破有跡五十戸。

眞玉附く、をちこち兼ねて、言はいへど、逢ひて後こそ、悔にはありといへ。

中臣女郎贈二大伴宿禰家持一歌五首

娘子部四。咲澤二生流。花勝見。都毛不知。戀裳摺可聞。

女郎花、咲澤に生ふる、はながつみ、嘗ても知らぬ、戀もするかも。

海底。奧乎深目手。吾念有。君二波將相。年者經十方。

海の底、沖を深めて、我が思へる、君には逢はむ。年は歴ぬとも。

春日山。朝居雲乃。鬱。不知人爾毛。戀物香聞。

春日山、朝居る雲の、おほゝしく、知らぬ人にも、戀ふるものかも。

研ぎし心を云々―清き心をゆるめて人に靡かばの意
後に言ふとも―後に悔ゆとも の意
眞玉附く―枕詞
をちこち―今と後と
咲澤―地名なるべし
はながつみ―諸説あり、(一)まこも(二)たのじも(三)はなあやめ、「嘗て」といふ爲の序
おほゝしく―おぼつかなく

春日王歌一首　元志貴皇子之子母曰二多紀皇女一也

足引之。山橘乃。色丹出而。語言繼而。相事毛將有。

足引の、山橘の、色に出て、語らひ繼ぎて、逢ふこともあらむ。

湯原王歌一首

月讀之。光二來益。足疾乃。山乎隔而。不遠國。

月夜見の、光に來ませ、足引の、山を隔てて、遠からなくに。

和歌一首　元不レ審二作者一

月讀之。光者清。雖照有。惑情。不堪念。

月夜見の、光はさやに、照らせれど、惑へる心、堪へじとぞ思ふ。

安倍朝臣蟲麻呂歌一首

倭文手纒。數二毛不有。壽持。奈何幾許。吾戀渡。

「倭文手纒」、數にもあらぬ、命もて、何かも幾許、我が戀ひ渡る。

色づく山―秋黄葉する山
思ひ過ぐべき―思ひをやり過ぐべき、見あかぬ妹故に我が思ひをやり過ごさん方なくもおもふの意

語らひ繼ぎて―一說、本文「言」は「者」の誤にて「語らばつぎて」か

月夜見―月のこと

壽持―「壽」は「身」又は「吾身」の誤にて、「身をもちて」又は「我が身もて」か
倭文手纒―枕詞

不相見者—一説「者」は「而」の誤にて、「あひみずて」

夜は籠るらむ—未だ夜は明けざるならん

暫は云々—暫は待ちてあれ

朝にけに—「け」は日、朝毎にの意

向座而。雖見不飽。吾妹子二。立離往六。田付不知毛。
向ひ居て、見れども飽かぬ、我妹子に、立別れ行かむ、たづき知らずも。

大伴坂上郎女歌二首

不相見者。幾久毛。不有國。幾許吾者。戀乍裳荒鹿。
逢見ぬは、幾ばく久も、あらなくに、幾許我は、戀ひつゝもあるか。

戀戀而。相有物乎。月四有者。夜波隱良武。須臾羽蟻待。
戀ひ〳〵て、逢ひたるものを、月しあれば、夜は籠るらむ。暫はあり待て。

右大伴坂上郎女之母石川内命婦與二安倍朝臣蟲滿之母安曇外命婦一。同居姉妹同氣之親焉。縁レ此郎女蟲滿相見不レ疎。相談既密。聊作二戯歌一以爲二問答一也。

厚見王謌一首

朝爾日爾。色付山乃。白雲之。可思過。君爾不有國。
朝にけに、色づく山の、白雲の、思ひ過ぐべき、君にあらなくに。

て事を盡しざまに言ひなすこと
聞きこすな―聞くことと勿れ
長くと思はば―長く逢はんと思はゞ

あごの山―志摩國英虞郡か
叉手―魚をすくひとる具
はへし―さしのべし

佐保―大和國

言義之―「義」は「羲」の誤
石上―枕詞

戀戀而。相有時谷。愛寸。事盡手四。長常念者。
戀ひ〳〵て、逢へる時だに、麗しき、言盡してよ。長くと思はば、

市原王歌一首

網兒之山。五百重隱有。佐堤乃埼。左手蠅師子之。夢二四所見。
あごの山、五百重隱せる、さでの崎、叉手はへし子が、夢にし見ゆる。

安部宿禰年足歌一首

佐穗度。吾家之上二。鳴鳥之。音夏可思吉。愛妻之兒。
佐保渡り、我家の上に、鳴く鳥の、聲なつかしき、はしき妻の兒。

大伴宿禰像見歌一首

石上。零十方雨二。將關哉。妹似相武登。言義之鬼尾。
石上、降るとも雨に、障らめや。妹に逢はむと、言ひてしものを。

安倍朝臣蟲麻呂歌一首

など諸說あれど、要するに未詳也
言のなぐさぞ—我が心を慰めんとの言葉に過ぎざるぞ
はねず—庭櫻か
知僧—「僧」は「信」の誤
しゑや—感動詞
奥は云々—末はいかゞあらん
汝をと我をと—汝と我とを
中言—雙方の間に立入り

思はぬを、思ふといはば、天地の、神も知らさむ。

大伴坂上郎女歌六首

吾耳曾。君爾者戀流。吾背子之。戀云事波。言乃名具左曾。
我のみぞ、君には戀ふる。我が背子が、戀ふとふ事は、言のなぐさぞ。

不念常。曰手師物乎。翼酢色之。變安寸。吾意可聞。
思はじと、いひてしものを、はねず色の、移ろひやすき、我が心かも。

雖念。知僧裳無跡。知物乎。奈何幾許。吾戀渡。
思へども、驗も無しと、知るものを、何ぞこゝばくも、我が戀ひ渡る。

豫。人事繁。如是有者。四惠也吾背子。奥裳何如荒海藻。
豫め、人言繁し。斯くしあらば、しゑや我が背子、奥も如何にあらめ。

汝乎與吾乎。人曾離奈流。乞吾君。人之中言。聞起名湯目。
汝をと我を、人ぞさくなる。いで我君、人の中言、聞きこすなゆめ。

若え—若がへり
家なる人—駿河麻呂の妻をさすか
玉主—駿河麻呂、一説「玉守」玉は娘
偶も—思ひかけても
まねく—多く
をそろ—うそつき
邑禮左變—「うたがふなゆめ」「いぶかるなゆめ」

我妹子は、常世の國に、住みけらし。昔見しより、若えましにけり。

大伴坂上郎女歌二首

久堅乃。天露霜。置二家里。宅有人毛。待戀奴濫。
久方の、天の露霜、置きにけり。家なる人も、待ち戀ひぬらむ。
玉主爾。珠者授而。勝且毛。枕與吾者。率二將宿。
玉主に、玉は授けて、かつぐも、枕と我は、いざ二人寝む。

大伴宿禰駿河麻呂歌三首

情者。不忘物乎。儻。不見日數多。月曾經去來。
心には、忘れぬものを、偶も、見ざる日まねく、月ぞ經にける。
相見者。月毛不經爾。戀云者。乎曾呂登吾乎。於毛保寒毳。
逢見ては、月も經なくに、戀ふと言はば、をそろと我を、思はさむかも。
不念乎。思常云者。天地之。神祇毛知寒。邑禮左變。

人の言―人の口端

よけくや―平安なりや、一說「さきくや」

夏葛の―枕詞、一說、本文「夏」は「蔓」の誤にて、「はふくずの」

心者。忘日無久。雖念。人之事社。繁君爾阿禮。

心には、忘るゝ日なく、思へども、人の言こそ、繁き君にあれ。

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

不相見而。氣長久成奴。比日者。奈何好去哉。言借吾妹。

相見ずて、け長くなりぬ。この頃は、如何によけくや。訝し我妹。

大伴坂上郎女歌一首

夏葛之。不絶使乃。不通有者。言下有如。念鶴鴨。

夏葛の、絶えぬ使の、淀めれば、事しもあるごと、思ひつるかも。

右坂上郎女者。佐保大納言卿女也。駿河麻呂此高市大卿之孫也。兩卿兄弟之家女孫姑姪之族。是以題レ歌送答相二問起居一。

大伴宿禰三依離復相歡歌一首

吾妹兒者。常世國爾。住家良思。昔見從。變若益爾家利。

反轉—絲を絡る具
掛けて云々—妹が方へ寄せんと云々

我が渡る—未詳、古義「吾」は「直」の誤にて「たゞわたり」かといへどいかゞ、私に按ずるに「吾」は「君」の誤にはあらじか

息の緒に—命に掛けて
ゆるさく—ゆるして別れ去らしむる意

度まねく—度繁く
負はぬ—妹が

我妹子に、戀ひて亂れば、反轉に、掛けて寄せむと、我が戀ひ初めし。

紀女郎怨恨歌三首　元鹿人大夫之女名曰二小鹿一安貴王之妻也

世間之。女爾思有者。吾渡。痛背乃河乎。渡金目八。
世の中の、女にしあらば、我が渡る、あなせの川を、渡りかねめや。

今者吾羽。和備會四二結類。氣乃緒爾。念師君乎。縱左思者。
今は我は、侘びぞしにける。息の緒に、思ひし君を、ゆるさく思へば。

白妙乃。袖可別。日乎近見。心爾咽飮。哭耳四所泣。
白妙の、袖別るべき、日を近み、心に咽び、音のみし泣かゆ。

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

丈夫之。思和備乍。遍多。嘆久嘆乎。不負物可聞。
丈夫の、思ひ侘びつゝ、度まねく、なげく嘆きを、負はぬものかも。

大伴坂上郎女歌一首

どの誤かといふ

戀ふれこそ—「こそ」の上に「ば」を略す

要と—一說「要に」

寢ねらえずけれ—寢られえざりけれ

幸也—一說「幸」は「辛」の誤にて「からしや」

燒太刀の—枕詞

へつかふ—絕えもせず逢ひもせず思はせぶりをすること、表に依るが如く見せかけて內心に實なきこと

たゞ一夜、隔てしからに、新玉の、月か經ぬると、思ほゆるかも。

娘子復報贈歌一首

吾背子我。如是戀禮許曾。夜干玉能。夢所見管。寐不所宿家禮。

我がせこが、かく戀ふれこそ、ぬば玉の、夢と見えつゝ、寢ねらえずけれ。

湯原王亦贈歌一首

波之家也思。不遠里乎。雲居爾也。戀管將居。月毛不經國。

はしけやし、間近き里を、雲居にや、戀ひつゝ居らむ。月も經なくに。

娘子復報贈和歌一首

絕常云者。和備染責跡。燒太刀乃。隔付經事者。幸也吾君。

絕ゆと言はば、侘しみせむと、「燒太刀の」、へつかふことは、よけくや我君。

湯原王歌一首

吾妹兒爾。戀而亂在。久流部寸二。懸而緣與。余戀始。

わきによりて寝るが古のならはしといふ、一説本文「片」は「不」の誤にて「枕さらずて」
妻と—本文、一説「與」は「乃」の誤にて、妻は夫にて湯原王をさす
乏しさ—飽き足らぬ事か
妹—本文「婦」の字「つま」と訓ずべし
率たれども—連れて來たれども、一説「率たちめど」と訓じ、連れて來たきは山々なれど、大事の玉と思ひて家に置きて來りたれば誠に戀しとの意とす
またす—遣す、一説「まつる」
まきて—纏うて
妻問ひに—男女相語ふと思ひて
さけじ—はなさじ
心遮—「遮」の上に「不」を脫せしか、又は「所思亂」な

家二四手。雖見不飽乎。草枕。客毛妻與。有之乏左。
家にして、見れど飽かぬを、草枕、旅にも妻と、あるが乏しさ。

湯原王亦贈歌二首

草枕。客者嬬者。雖率有。匣内之。珠社所念。
草枕、旅には妹は、率たれども、櫛笥の内の、玉とこそ思へ。

余衣。形見爾奉。布細之。枕下離。巻而左宿座。
我が衣、形見にまたす。敷妙の、枕離らさず、まきてさ寝ませ。

娘子復報贈歌一首

吾背子之。形見之衣。嬬問爾。余身者不離。事不問友。
我が背子が、形見の衣、妻問ひに、我が身はさけじ、言問はずとも。

湯原王亦贈歌一首

直一夜。隔之可良爾。荒玉乃。月歟經去跡。心遮。

佐伯云々―此題と歌とは前頁「君により」の次に入るべきものならん

うはへなき―諸說あり、(一)なきは添へたる詞、人はかくうはべばかりのものかなと歎く意(二)うへもなき、これほどの情なきは又上もあらじの意(三)うはべなき、深き心よりも先さしあたりうはべの情もなしの意(四)あいそなき、あへなき

取られぬ―古義「取らえぬ」

枕かたさる―夫の他にあるほどは枕を片避りて片

何すとか、使の來つる。君をこそ、かにもかくにも、待ちがてにすれ。

佐伯宿禰赤麻呂歌一首

初花之。可散物乎。人事乃。繁爾因而。止息比者鴨。

初花の、散るべきものを、人言の、繁きに因りて、淀む頃かも。

湯原王贈二娘子一歌二首　元志貴皇子之子也

宇波弊無。物可聞人者。然許。遠家路乎。令還念者。

うはへなき、ものかも人は、然ばかり、遠き家路を、歸す思へば。

目二破見而。手二破不所取。月内之。楓如。妹乎奈何責。

目には見て、手には取られぬ、月の内の、桂の如き、妹をいかにせむ。

娘子報贈歌二首

幾許。思異目鴨。敷細之。枕片去。夢所見來之。

いかばかり、思ひけめかも、敷妙の、枕かたさる、夢に見え來し。

藻臥し束鮒—藻に臥せる一束ほどの鮒

まかむ—枕にせん
涙に沈み—我は

行かむ—行きて遇はん

八代女王獻二天皇一歌一首

君爾因。言之繁乎。古郷之。明日香乃河爾。潔身爲爾去。

君により、言の繁きを、古里の、明日香の川に、禊しに行く。

一尾云。龍田超。三津之濱邊爾。潔身四二由久。

娘子報二贈佐伯宿禰赤麻呂一歌一首

吾手本。將卷跡念牟。丈夫者。戀水定。白髮生二有。

我が袂、まかむと思はむ、丈夫は、涙に沈み、白髮生ひにたり。

佐伯宿禰赤麻呂和謌一首

白髮生流。事者不念。戀水者。鹿煮藻闕二毛。求而將行。

白髮生ふる、ことは思はず、涙をば、かにもかくにも、求めて行かむ。

大伴四綱宴席歌一首

奈何鹿。使之來流。君乎社。左右裳。待難爲禮。

汝ー妻
な戀ひそー戀ふといふ勿れ、我戀は汝にも増れるものをとの意か

松の葉にー松を待つにいひかく
ゆつりぬーうつりぬ
黄葉のー枕詞
過ぎぬや云々ー君にあはぬ夜のあまた過ぎぬるよの意
天皇ー聖武
戀云吾妹ー一說「云」は「念」の誤にて「こひもふわぎも」
消ぬかにー消えぬる程に

今やー今より、一說「いそや」と訓みて動(イソシ)の意とす

佐伯宿禰東人和歌一首

草枕。客爾久。成宿者。汝乎社念。莫戀吾妹。

草枕、旅に久しく、なりぬれば、汝をこそ思へ、な戀ひそ我妹。

池邊王宴誦歌一首

松之葉爾。月者由移去。黄葉乃。過哉君之。不相夜多焉。

松の葉に、月はゆつりぬ。黄葉の、過ぎぬや君が、逢はぬ夜多み。

天皇思二酒人女王一御製歌一首　元女王者穗積皇子之孫女也

道相而。咲之柄爾。零雪乃。消者消香二。戀云吾妹。

道に遇ひて、笑ましゝからに、降る雪の、消なば消ぬかに、戀ふとふ我妹。

高安王裹鮒贈二娘子一歌一首　元高安王者後賜二姓大原眞人氏一

奧幣往。邊去伊麻夜。爲妹。吾漁有。藻臥束鮒。

沖邊行き、邊に行き今や、妹がため、我が漁れる、藻臥し束鮒。

本文「乎」は「手」の誤　年深く云々―末々長く絶えじといへば　磨ぎし心を云々―堅き心をゆるめて人の意に從ひしをいふ　其の日の極―その日よりしてこの方　浪のむた―浪と共に　かにかくに云々―かなたこなたになびく心はもたで一筋に思ひ賴む云々　神やさけけむ―我等の仲を神が離らかしゝか　さふ―さまたぐ　通はせる―一説「通はしし」　あからひく―枕詞　た童の―子供の如く　たもとほり―めぐりまはり

賴めずば―たのませずば、本文「念」は「令」の誤か

ぎし心を、ゆるしてし、其の日の極、浪のむた、靡く玉藻の、かにかくに、心は持たず、「大船の」、憑める時に、「千早振る」、神やさけけむ、「空蟬の」、人かさふらむ、通はせる、君も來まさず、玉梓の、使も見えず、成りぬれば、いたも術なみ、「ぬば玉の」、夜はすがらに、あからひく、日も暮るゝまで、嘆けども、しるしを無み、思へども、たづきを知らに、手弱女と、言はくも著く、た童の、音のみ泣きつゝ、たもとほり、君が使を、待ちや兼ねてむ。

反歌

從元。長謂管。不念恃者。如是念二。相益物歟。

始より、長く言ひつゝ、賴めずば、斯かる思ひに、遇はましものか。

西海道節度使判官佐伯宿禰東人妻贈夫君歌一首

無間。戀爾可有牟。草枕。客有公之。夢爾之所見。

間無く、戀ふれにかあらむ、草枕、旅なる君が、夢にし見ゆる。

思へか―思へばか
君が―君を
押照る―枕詞
聞こして―のたまひて、

蘆邊より、滿ち來る潮の、彌增しに、思へか君が、忘れかねつる。

大神女郎贈二大伴宿禰家持一歌一首

狹夜中爾。友喚千鳥。物念跡。和備居時二。鳴乍本名。
小夜中に、友呼ぶ千鳥、物思ふと、侘び居る時に、鳴きつゝもとな。

大伴坂上郎女怨恨歌一首幷短歌

押照。難波乃菅之。根毛許呂爾。君之聞四乎。年深。長四云者。眞十鏡。磨師情乎。縱手師。其日之極。浪之共。靡珠藻乃。云云。意者不持。大船乃。憑有時丹。千磐破。神哉將離。空蟬乃。人歟禁良武。通爲。君毛不來座。玉梓之。使母不所見。成奴禮婆。痛毛爲便無三。夜干玉乃。夜者須我良爾。赤羅引。日母至闇。雖嘆。知師乎無三。雖念。田付乎白二。幼婦常。言雲知久。手小童之。哭耳泣管。徘徊。君之使乎。待八兼手六。
押照る、難波の菅の、懇に、君が聞こして、年深く、長くし言へば、眞寸鏡、磨

もだもあらましを—もだして止むべかりしを
遂げざらなくに—遂げざるに、「なく」は添辭にて否定にはあらず
もとな—由もなく
泣かも—泣かん、「も」は「や」の結び
夢に見えこそ—せめて枕なりとも夢に見えよ
劒太刀—枕詞

中中者。默毛有益呼。何爲跡香。相見始兼。不遂等。
なか〱に、もだもあらましを、何すとか、相見初めけむ。遂げざらなくに。

山口女王贈二大伴宿禰家持一歌五首

物念跡。人爾不見常。奈麻強。常念弊利。在曾金津流。
物思ふと、人に見えじと、なまじひに、常に思へど、ありぞかねつる。

不相念。人乎也本名。白細之。袖漬左右二。哭耳四泣裳。
相思はぬ、人をやもとな、白妙の、袖ひづまでに、音のみし泣かも。

吾背子者。不相念跡裳。敷細乃。君之枕者。夢爾見乞。
我が背子は、相思はずとも、敷妙の、君が枕は、夢に見えこそ。

劒太刀。名惜雲。吾者無。君爾不相而。年之經去禮者。
「劒太刀」、名の惜しけくも、我はなし。君に逢はずて、年の經ぬれば。

從蘆邊。滿來鹽乃。彌益荷。念歟君之。忘金鶴。

打禮杼—「打」の下に「奈」を脱せしか
寝よとの鐘—亥の時
寝ねがてぬかも—寝ねかぬるかな

額づくがごと—頭を地につけて禮拜するが如し、「額づく如し」と訓ずる方可ならんか

見ねどもあるを—見ずしてもあらるゝにありがてましも—ありかねん、もは助辭、本文「自」は「目」の誤

思へかも—思へばかも
こゝだ—そこばく、誠に
おほゝし—覺束なし

皆人乎。宿與殿金者。打禮杼。君乎之念者。寐不勝鴨。
皆人を、寝よとの鐘は、打つなれど、君をし思へば、寝ねがてぬかも。

不相念。人乎思者。大寺之。餓鬼之後爾。額衝如。
相思はぬ、人を思ふは、大寺の、餓鬼の後に、額づくがごと。

從情毛。我者不念寸。又更。吾故郷爾。將還來者。
心ゆも、我は思はざりき。復更に、我が故郷に、歸り來むとは。

近有者。雖不見在乎。彌遠。君之伊座者。有不勝自。
近くあれば、見ねどもあるを、いや遠く、君が座さば、ありがてましも。

右二首相別後更來贈。

大伴宿禰家持和歌二首

今更。妹爾將相八跡。念可聞。幾許吾胸。鬱悒將有。
今更に、妹に逢はめやと、思へかも、こゝだ我が胸、おほゝしからむ。

言問はす—ものいふ
面影にして—目の前にちらついて

劒太刀云々—男の具なればそれを身に添ふるは男に逢ふしるし
祥—又「しるし」

神し云々—神に理の無くば逢はずに死にもせん、苟も神に理あらば我至誠の戀豈神に通じていとしき人に逢はしめ給はざらんや
多奈和丹—此句未詳

従情毛。吾者不念寸。山河毛。隔莫國。如是戀常羽。
心ゆも、我は思はざりき。山川も、隔たらなくに、斯く戀ひむとは。

暮去者。物念益。見之人乃。言問爲形。面景爲而。
夕されば、物思ひまさる。見し人の、言問はすさま、面影にして。

念西。死爲物爾。有麻世波。千遍曾吾者。死變益。
思ふにし、死にするものに、あらませば、千度ぞ我は、死にかへらまし。

劒太刀。身爾取副常。夢見津。何如之怪曾毛。君爾相爲。
劒太刀、身に取り添ふと、夢に見つ。何の祥ぞも、君に逢はむため。

天地之。神理。無者社。吾念君爾。不相死爲目。
天地の、神し理、無くばこそ、我が思ふ君に、逢はず死にせめ。

吾毛念。人毛莫忘。多奈和丹。浦吹風之。止時無有。
我も思ふ、人もな忘れ。おほなわに、浦吹く風の、止む時なかれ。

日にけには―けは日、日日に
八百日行く濱―限りなく長き濱
空蟬の―枕詞
岩橋の―枕詞
水無瀬川―川の名にあらず、川の水の砂をくゞりて上に水の無き川、されば「下ゆ」といはん序とせり
下ゆ云々―下ゆは底よりと同じく、人知れず戀ひ瘦するをいふ
おほに―仄に
人故に―人なるものを
伊勢……浪―序
かしこき人―高貴の人なるべし

吾命之。將全幸限。忘目八。彌日異者。念益十方。
我が命の、全けむ限り、忘れめや。いや日にけには、思ますとも。

八百日往。濱之沙毛。吾戀二。豈不益歟。奥島守。
八百日行く、濱の眞砂も、我が戀に、あに勝らじか。沖つ島守。

宇都蟬之。人目乎繁見。石走。間近君爾。戀度可聞。
「空蟬の」人目を繁み、「岩橋の」間近き君に、戀ひ渡るかも。

戀爾毛曾。人者死爲。水瀬河。下從吾瘦。月日異。
戀にもぞ、人は死にする。水無瀬川、下ゆ我瘦す、月に日にけに。

朝霧之。欝相見之。人故爾。命可死。戀渡鳴。
朝霧の、おほに相見し、人故に、命死ぬべく、戀ひ渡るかも。

伊勢海之。礒毛動爾。因流浪。恐人爾。戀渡鳴。
伊勢の海の、礒もとゞろに、寄する浪、かしこき人に、戀ひ渡るかも。

衣手乎。打廻乃里爾。有吾乎。不知曾人者。待跡不來家留。
衣手を、うちわの里に、ある我を、知らずぞ人は、待てど來ずける。

荒玉。年之經去者。今師波登。勤與吾背子。吾名告爲莫。
新玉の、年の經行けば、今しはと、ゆめよ我が背子、我が名告らすな。

吾念乎。人爾令知哉。玉匣。開阿氣津跡。夢西所見。
我が思を、人に知らせや、玉櫛笥、開き明けつと、夢にし見えつ。

闇夜爾。鳴奈流鶴之。外耳。聞乍可將有。相跡羽奈之爾。
暗き夜に、鳴くなる田鶴の、外のみに、聞きつゝかあらむ。逢ふとはなしに。

君爾戀。痛毛爲便無見。楢山之。小松下爾。立嘆鶴。
君に戀ひ、いたも術無み、なら山の、小松が下に、立ち嘆きつる。

吾屋戸之。暮陰草乃。白露之。消蟹本名。所念鴨。
我が宿の、夕陰草の、白露の、消ぬがにもとな、思ほゆるかも。

衣手を―枕詞
うちわの里―宣長は本文「打」は「折」の誤にて「をりたむ里」也、道を折れまがれば至る里にていと近きところの意といふ
今しはと―もはや差支なからうなどと油斷して
知らせや―知らせたればにや
玉櫛笥云々―當時のいひならはしか
術無み―せんかたなさに
夕陰草―庭の夕陰の草
消ぬがに―消えも失する程に
もとな―由もなく

妻戀しつゝ―今我を戀ふと仰ある時に當つて

もとな―由もなく 戀ひば―行く末戀しくば

一首―「一云」の誤

白鳥の―枕詞 とば山―大和國か

大伴坂上郎女歌一首

出而將去。時之波將有乎。故。妻戀爲乍。立而可去哉。

出でて往なむ、時しはあらむを、殊更に、妻戀しつゝ、立ちて往ぬべしや。

大伴宿禰稻公贈田村大孃歌一首 元大伴宿奈麻呂卿之女也

不相見者。不戀有益乎。妹乎見而。本名如此耳。戀者奈何將爲。

相見ずは、戀ひざらましを、妹を見て、もとな斯くのみ、戀ひば如何にせむ。

右一首姉坂上郎女作。

笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首

吾形見。見管之努波世。荒珠。年之緒長。吾毛將思。

我が形見、見つゝ忍ばせ。新玉の、年の緒長く、我も思はむ。

白鳥能。飛羽山松之。待乍會。吾戀度。此月比乎。

「白鳥の、」とば山松の、待ちつゝぞ、我が戀ひ渡る、この月頃を。

見まつりて、未だ時だに、變らねば、年月の如、思ほゆる君。

足引乃。山爾生有。菅根乃。懃見卷。欲君可聞。

足引の、山に生ひたる、菅の根の、懃見まく、欲しき君かも。

大伴坂上家之大娘報贈大伴宿禰家持歌四首

生而有者。見卷毛不知。何如毛。將死與妹常。夢所見鶴。

生きてあらば、見まくも知らに、何しかも、死なむよ妹と、夢に見えつる。

丈夫毛。如此戀家流乎。幼婦之。戀情爾。比有目八方。

丈夫も、かく戀ひけるを、手弱女の、戀ふる心に、比へらめやも。

月草之。徒安久。念可母。我念人之。事毛告不來。

月草の、移ろひやすく、思へかも、我が思ふ人の、言も告げこぬ。

春日山。朝立雲之。不居日無。見卷之欲寸。君毛有鴨。

春日山、朝立つ雲の、居ぬ日なく、見まくのほしき、君にもあるかも。

變らねば—變らぬに

足引の……根の—序

生きて云々—生きて居たとてどうせ逢見る事の出來るか如何か知らぬもの一層共に死なうぞと仰せなさると夢に見たりと也

月草—露草、その花の色はよく衣につけど早く變るものなれば心のかはりやすきに譬ふ　思へかも—思へばかも

居ぬ日なく—居ぬ日なきが如く

草香江—河内國
たづ〳〵し—たど〳〵し、心もとなし
城の山—太宰府より筑後國へ越ゆる道にありとぞ
淋しけむ—淋しからん、「さぶしけむ」と訓ずる方然るべし
我が通はむと云々—我が師のもとへ常に通はんと思ひしに卿は上京せらるゝ事故、我が通ふべき衝に當る城の山道は自然人馬の往來も絶えて荒涼寂寞たらん
手爾者雖觸—一説「手にはふれゝど」と訓ず
難波男—王自らを指して宣ふならんか

草香江の、入江にあさる、蘆田鶴の、あなたづ〳〵し。友なしにして。

太宰帥大伴卿上レ京之後筑後守葛井連大成悲歎作歌一首

從今者。城山道者。不樂牟。吾將通常。念之物乎。
今よりは、城の山道は、淋しけむ。我が通はむと、思ひしものを。

大納言大伴卿新袍贈二攝津大夫高安王一歌一首

吾衣。人莫著會。網引爲。難波壯士乃。手爾者雖觸。
我が衣、人にな著せそ、網引する、難波男の、手には觸るとも。

大伴宿禰三依悲レ別歌一首

天地與。共久。住波牟等。念而有師。家之庭羽裳。
天地と、共に久しく、住まはむと、思ひてありし、家の庭はも。

金明軍與二大伴宿禰家持一歌二首　元明軍者大納言卿之資人也

奉見而。未時太爾。不更者。如年月。所念君。

川の音清し—訓「川とさやけし」
行かな—行かん

まそ鏡—枕詞
さびつゝ居らむ—心さびしく居らん
黑髮變白髮手裳—古義には文字通りに「黑髮變り白けても」と訓ず
いたき戀—堪へ難き戀、戀によせて再會し難きを歎ずるにや

月夜吉。河音清之。率此間。行毛不去毛。遊而將歸。
月夜よし、川の音清し。いざこゝに、行くも行かぬも、遊びて行かな。

右一首防人佑大伴四綱。

太宰帥大伴卿上レ京之後沙彌滿誓賜レ卿歌二首

眞十鏡。見不飽君爾。所贈哉。旦夕爾。左備乍將居。
「まそ鏡」見飽かぬ君に、後れてや、朝夕に、さびつゝ居らむ。
野干玉之。黑髮變白髮手裳。痛戀庭。相時有來。
「ぬば玉の」黑髮白く、變りても、いたき戀には、遇ふ時ありけり。

大納言大伴卿和歌二首

此間在而。筑紫也何處。白雲乃。棚引山之。方西有良思。
こゝにありて、筑紫やいづく、白雲の、たなびく山の、方にしあるらし。
草香江之。入江二求食。蘆鶴乃。痛多豆多頭思。友無二指天。

上レ京。於レ是大監大伴宿禰百代少典山口忌寸若麻呂及卿男家持等相ニ送驛使一。共到ニ夷守驛家一。聊飲悲レ別乃作ニ此歌一。

太宰帥大伴卿被レ任ニ大納言一臨ニ入レ京之時一府官人等餞ニ卿筑前國蘆城驛家一歌四首

三埼廻之。荒礒爾縁。五百重浪。立毛居毛。我念流吉美。
「み崎曲の、荒磯に寄する、五百重浪、立ちても居ても、我が思へる君。

右一首筑前掾門部連石足。

辛人之。衣染云。紫之。情爾染而。所念鴨。
から人の、衣染むとふ、紫の、心に染みて、思ほゆるかも。

山跡邊。君之立日乃。近付者。野立鹿毛。動而曾鳴。
大和へ、君が立つ日の、近づけば、野に立つ鹿も、とよみてぞ鳴く。

右二首大典麻田連陽春。

み崎曲—一説「みさきみ」と訓ずべし、地名にあらず、さて三句までは序

から人—諸説あり、(一)韓人(二)「淑人」の誤にて「よき人」に(三)「宇萬人」の誤にて「うま人」(四)「宮人」の誤にて「みや人」

大伴の―枕詞
茜さし―枕詞
たぐひてぞ來し―遠く送り來れるをいふ
しかの濱―筑前國
以耑―以前

大伴乃。見津跡者不云。赤根指。照有月夜爾。直相在登聞。
大伴の、見つとは言はじ。茜さし、照れる月夜に、たゞに逢へりとも。

太宰大監大伴宿禰百代等贈二驛使一歌二首

草枕。羇行君乎。愛見。副而會來四。鹿乃濱邊乎。
草枕、旅行く君を、うるはしみ、たぐひてぞ來し。しかの濱邊を。

右一首大監大伴宿禰百代。

周防在。磐國山乎。將超日者。手向好爲與。荒其道。
周防なる、岩國山を、越えむ日は、手向よくせよ。荒きその道。

右一首少典山口忌寸若麻呂。

以耑天平二年庚午夏六月。帥大伴卿忽生二瘡脚一。疾二苦枕席一。因レ此馳レ驛。上奏望二請庶弟稻公姪胡麻呂欲レ語二遺言一者。勅二右兵庫助大伴宿禰稻公治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人一。給レ驛發遣令レ看二卿病一。而逕二數旬一幸得二平復一。于時稻公等以二病既療一發レ府

孤悲死牟。後者何爲牟。生日之。爲社妹乎。欲見爲禮。

戀ひ死なむ、後は何せむ。生ける日の、ためこそ妹を、見まく欲りすれ。

不念乎。思常云者。大野有。三笠杜之。神思知三。

思はぬを、おもふと言はば、大野なる、三笠の森の、神し知らさむ。

無暇。人之眉根乎。徒。令掻乍。不相妹可聞。

暇なく、人の眉根を、徒に、爬かしめつゝも、逢はぬ妹かも。

大伴坂上郎女歌二首

黒髪二。白髪交。至耆。如是有戀庭。未相爾。

黒髪に、白髪交り、老ゆるまで、かゝる戀には、未だ遇はなくに。

山菅乃。實不成事乎。吾爾所依。言禮師君者。與孰可宿良牟。

山菅の、實ならぬことを、我によせ、言はれし君は、誰とか寢らむ。

賀茂女王歌一首

大野―筑前國大野郡

眉根を云々―人に戀ひらるれば眉かゆしといふ諺ありしなり

山菅の―山菅は實のなるものなるより、たゞ實といはんための枕詞に用ひしなり

言はれし―世間からかれこれと噂されし

君がため、醸みし待酒、安の野に、一人や飲まむ、友なしにして。

賀茂女王贈二大伴宿禰三依一歌一首 元故左大臣長屋王之女也

筑紫船。未毛不來者。豫。荒振公乎。見之悲左。

筑紫船、未だも來ねば、豫め、荒ぶる君を、見るが悲しさ。

土師宿禰水通従二筑紫一上レ京海路作歌二首

大船乎。榜乃進爾。磐爾觸。覆者覆。妹爾因而者。

大船を、漕ぎのすゝみに、岩に觸り、覆らばかへれ、妹によりてば。

千磐破。神之社爾。我掛師。幣者將賜。妹爾不相國。

千早振る、神の社に、我が掛けし、幣は賜ばらむ。妹に逢はなくに。

太宰大監大伴宿禰百代戀歌四首

事毛無。生來之物乎。老奈美爾。如此戀于毛。吾者遇流香聞。

ことも無く、あり來しものを、老次に、かゝる戀にも、我は遇へるかも。

待酒—人を待つために殊更に醸しゝ酒
安の野—筑前國夜須郡
來ねば—來ぬに
荒ぶる—疎くなる意か
すゝみ—すさみ
岩に觸り—岩に觸れ
妹によりてば—早く妹の許に依り添はゞ此戀心の安まらんとなるべし
幣は云々—幣を返し給はれ
生來—「生」は「在」の誤か、古義には「あれ來し」と訓ずれどいかゞ
老次に—老年になりて

大和路—大和へ上る旅なれば斯くいふ
志摩の浦—筑前國志摩郡志摩の郷の浦
戀ひまくは—戀ひんは

我が君は—女をさす
わけ—今「おまへ」といふ位に當る目下に對する二人稱、それをそのまゝ自稱に用ひたる也
思へかも—思へばかも
二行きぬらむ—逢ふ夜逢はぬ夜と二つながら經行くをいふ、本文「走」は「去」の誤か
そきへ—遠く離れたる
遠けども—遠けれども

古の人—大伴卿
をさせる—飲み給ひし、古義に「たばせる」と訓じ、賜ひたるの義とす
吉備の酒—吉備國より產出せる酒か、又は黍の酒か
貫簀—盥の上に掛くる簀なり、それは嘔吐の具にせんとの意の戯なるべし

大和路の、志摩の浦曲に、寄る浪の、間も無けむ。我が戀ひまくは。

右三首作者未ㇾ詳。

大伴宿禰三依歌一首

吾君者。和氣乎波死常。念可毛。相夜不相夜。二走良武。
我が君は、わけをば死ねと、思へかも、逢ふ夜逢はぬ夜、二行きぬらむ。

丹生女王贈二太宰帥大伴卿一歌二首

天雲乃。遠隔乃極。遠鷄跡裳。情志行者。戀流物可聞。
天雲の、そきへの極み、遠けども、心し行けば、戀ふるものかも。

古。人乃令食有。吉備能酒。痛者爲便無。貫簀賜牟。
古の、人のをさせる、吉備の酒、病めば術なし。貫簀賜ばらむ。

太宰帥大伴卿贈二大貳丹比縣守卿遷二任民部卿一歌一首

爲君。釀之待酒。安野爾。獨哉將飲。友無二思手。

有りこせぬかも—有れかし、本文「與」は「乞」の誤

心も身さへ—心さへ身さへ

明けぬれば—古義に「明けなば」と訓ず、然るべし

大船の—枕詞

へて、自妻と、憑める今宵、秋の夜の、百夜の長く、有りこせぬかも。

反歌

天雲之。外從見。吾妹兒爾。心毛身副。緣西鬼尾。

天雲の、外に見しより、我妹子に、心も身さへ、よりにしものを。

今夜之。早開者。爲便乎無三。秋百夜乎。願鶴鴨。

この夜の、早く明けぬれば、術を無み、秋の百夜を、願ひつるかも。

五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任餞于筑前國蘆城驛家歌三首

天地之。神毛助與。草枕。羇行君之。至家左右。

天地の、神も助けよ、草枕、旅行く君が、家に至るまで。

大船之。念憑師。君之去者。吾者將戀名。直相左右二。

大船の、思ひ頼みし、君が去なば、我は戀ひむな。たゞに逢ふまでに。

山跡道之。島乃浦廻爾。緣浪。間無牟。吾戀卷者。

あらずは―あらんよりは
關守い―いは助辭
みかの原―山城國相樂郡
外のみ見つゝ―外にのみ見つゝ
敷妙の―枕詞

反歌

後居而。戀乍不有者。木國乃。妹背乃山爾。有益物乎
後れ居て、戀ひつゝあらずは、紀の國の、妹背の山に、あらましものを。

吾背子之。跡履求。追去者。木乃關守伊。將留鴨。
我が背子が、跡履み求め、追ひ行かば、紀の關守い、止めなむかも。

二年乙丑春三月幸二三香原離宮一之時得二娘子一作歌一首并短歌　笠朝臣金村

三香之原。客之屋取爾。珠桙乃。道能去相爾。天雲之。外耳見管。言將問。緣乃無者。情耳。咽乍有爾。天地。神祇辭因而。敷細乃。衣手易而。自妻跡。憑有今夜。秋夜之。百夜乃長。有與宿鴨。
みかの原、旅の宿に、玉桙の、道の行合に、天雲の、外のみ見つゝ、言問はむ、由の無ければ、心のみ、咽せつゝあるに、天地の、神ことよせて、敷妙の、衣手か

天皇之—一說「大皇之」の誤にて「大君の」

八十伴緒と—多くの武夫と共に

天飛ぶや—枕詞

眞土山—大和國と紀伊國との境

親しくも—一說「親しけく」

あそゝには—おほよそはの意か

しかすがに—さうはいふものの、さすがに

もだも得あらねば—默つてじつとしては居られぬ故

道守—關守

術を知らにと—せむかたを知らずして

天皇之。行幸乃隨意。物部乃。八十伴雄與。出去之。愛夫者。天翔哉。輕路從。玉田次。畝火乎見管。麻裳吉。木道爾入立。眞土山。越良武公者。黃葉乃。散飛見乍。親。吾者不念。草枕。客乎便宜常。思乍。公將有跡。安蘇蘇二破。且者雖知。之加須我仁。默然得不在者。吾背子之。往乃萬萬。將追跡者。千遍雖念。手嫋女。吾身之有者。道守之。將問答乎。言將遣。爲便乎不知跡。立而爪衝。

天皇の、行幸のまに、武士の、八十伴緒と、出で行きし、うつくし夫は、「天飛ぶや」輕の路より、玉襷、畝火を見つゝ、あさもよし、紀路に入りたつ、眞土山、越ゆらむ君は、黃葉の、散り飛ぶ見つゝ、親しくも、我をば思はず、「草枕」旅を宜しと、おもひつゝ、君はあらむと、おそゝには、且は知れども、しかすがに、もだも得あらねば、我が背子が、行のまにく、追はむとは、千度思へど、手弱女の、我が身にしあれば、道守の、問はむ答を、言ひ遣らむ、術を知らにと、立ちて躓く。

心ある如—あだし心ある如く

思へばか—思へばにや

たゆたひぬらし—躊躇して居るらし

他辭乎。繁言痛。不相有寸。心在如。莫思吾背。
人言を、繁みこちたみ、逢はざりき。心ある如、な思ひ我がせ。
吾背子師。遂常云者。人事者。繁有登毛。出而相麻志呼。
我が背子し、遂げむと言はば、人言は、繁くありとも、出でて逢はましを。
吾背子爾。復者不相香常。思墓。今朝別之。爲便無有都流。
我が背子に、または逢はじかと、思へばか、今朝の別れの、術なかりつる。
現世爾波。人事繁。來生爾毛。將相吾背子。今不有十方。
この世には、人言繁し、來む世にも、逢はむ我がせこ、今ならずとも。
常不止。通之君我。使不來。今者不相跡。絶多比奴良思。
常止まず、通ひし君が、使來ず。今は逢はじと、たゆたひぬらし。

神龜元年甲子冬十月幸二紀伊國一之時爲レ贈二從駕人一所レ誂二娘子一笠朝臣金村作歌一首并短歌

敷妙の―枕詞

意宇の海―出雲國意宇郡の海か

長手―長き路

痛す取物―古義「偲不敢物」にて「しぬびあへぬもの」と訓ずべしといへり

君いし無くば―いしは二つとも下へつく助辭にて、君なくばの意ならん

敷細乃。手枕不纏。間置而。年曾經來。不相念者。

敷妙の、手枕まかず、間おきて、年ぞ經にける。逢はぬ思へば。

右安貴王娶二因幡八上采女一。係念極甚。愛情尤盛。於レ時勅斷二不敬之罪一。退二却本郷一焉。于レ是王意悼怛。聊作二此歌一也。

門部王戀歌一首

飫宇能海之。鹽干乃滷之。片念爾。思哉將去。道之永手呼。

意宇の海の、潮干の潟の、片思に、思ひや行かむ。道の長手を。

右門部王任二出雲守一時。娶二部内娘子一也。未レ有二幾時一既絶二往來一。累月之後更起二愛心一。仍作二此歌一贈二致娘子一。

高田女王贈二今城王一歌六首

事清。甚毛莫言。一日太爾。君伊之哭者。痛寸取物。

こと淸く、いともな言ひそ。一日だに、君いし無くば、痛き疵ぞも。

打日差す、宮に行く兒を、ま悲しみ、止むれば苦し、遣れば術なし。

難波方。鹽干之名凝。飽左右二。人之見兒乎。吾四乏毛。

難波潟、潮干の名殘、飽くまでに、人の見る兒を、我し乏しも。

安貴王謌一首并短歌

遠嬬。此間不在者。玉桙之。道乎多遠見。思空。安莫國。嘆虛。不安物乎。水空徃。雲爾毛欲成。高飛。鳥爾毛欲成、明日去而。於妹言問。爲吾。妹毛事無。爲妹。吾毛事無久。今裳見如。副而毛欲得。

遠妻の、此處に在らねば、玉桙の、道をた遠み、思ふ空、安けくなくに、嘆く空、安からぬものを、み空行く、雲にもがも。高く飛ぶ、鳥にもがも。明日行きて、妹に言問ひ、我が爲めに、妹もこと無く、妹がため、我もこと無く、今も見し如、たぐひてもがも。

反歌

打日差す―枕詞
宮に行く―宮仕に往く
ま悲しみ―まは接頭語、いとほしさに、
人の見る兒―兒は妹
遠妻―遙に離れ居る妻
た遠み―たは發語
思ふ空―空はさまなどいふ意
安けくなくに―一説「安からなくに」
今も見し如―都にありし時見し如く今も

又大伴坂上郎女歌一首

佐保河乃。涯之官能。小歷木莫刈烏。在乍毛。張之來者。立隱金。

佐保川の、岸のつかさの、柴な刈りそ。在りつゝも、春し來らば、立ち隱るがね。

天皇賜二海上女王一御歌一首

赤駒之。越馬柵乃。緘結師。妹情者。疑毛奈思。

赤駒の、越ゆる馬柵の、標結ひし、妹が心は、疑ひもなし。

右今案。此歌擬古之作也。但以二往當便一賜二斯歌一歟。

海上女王奉レ和歌一首　元志貴皇子之女也

梓弓。爪引夜音之。遠音爾毛。君之御幸乎。聞之好毛。

梓弓、爪引く夜音の、遠音にも、君が行幸を、聞くはしよしも。

大伴宿奈麻呂宿禰歌二首　元佐保大納言第三之子也

打日指。宮爾行兒乎。眞悲見。留者苦。聽去者爲便無。

つかさ―高き所
立ち隱るがね―其陰で竊かに會はん爲めに
天皇―聖武

馬柵―廐の前に馬の出ぬやうに横へる棒

爪引く―隨身が夜の陣に弦を鳴らすをいふ
行幸―本文「幸」は「事」の誤にて、御言か

ぬば玉の―枕詞
あらぬか―あれかし、せめて年に一度なりともかはらず來れかしの意
戀ふらく―戀ふる
川門―川の流の狹まりて瀨をなす處

大伴郎女和ル歌四首

狹穗河乃。小石踐渡。夜干玉之。黑馬之來夜者。年爾母有糠。
佐保川の、小石踏み渡り、「ぬば玉の」駒の來る夜は、年にもあらぬか。

千鳥鳴。佐保乃河瀨之。小浪。止時毛無。吾戀爾。
千鳥鳴く、佐保の川瀨の、小波、止む時もなし、我が戀ふらくは。

將來云毛。不來時有乎。不來云乎。將來常者不待。不來云物乎。
來むと言ふも、來ぬ時あるを、來じと言ふを、來むとは待たじ。來じと言ふものを。

千鳥鳴。佐保乃河門乃。瀨乎廣彌。打橋渡須。奈我來跡念者。
千鳥鳴く、佐保の川門の、瀨を廣み、打橋渡す。汝が來と思へば。

右郎女者。佐保大納言卿之女也。初嫁二一品穗積皇子一。被レ寵無レ儔。而皇子薨之後時藤原麻呂大夫娉二之郎女一焉。郎女家二於坂上里一。仍族氏號曰二坂上郎女一也。

降らぬか―降れかしな
雨づつみ―雨づつしみ
君にたぐひて―君により捺ひて

しき忍ぶ―しげ〳〵と思ひ忍ぶ、一説「しき慕ふ」と訓ず

神さびけむも―神さぶは古ぶ、「も」は「かも」の意、一説「たましひけむも」にて、魂も消えん哉の義とす

渡る―逢はずしてこちへ居る
年にも云々―一年もこちへて居るといふに

蒸衾云々―暖き衾の柔き下に、本文「烝」は「蒸」の誤

久堅乃。雨毛落糠。雨乍見。於君副而。此日令晩。

久方の、雨も降らぬか。雨づつみ、君にたぐひて、この日暮さむ。

藤原宇合大夫遷レ任上レ京時常陸娘子贈歌一首

庭立。麻手刈干。布慕。東女乎。忘賜名。

庭に立ち、麻を刈り干し、しき忍ぶ、東女を、忘れ給ふな。

京職大夫藤原大夫賜二大伴郎女一歌三首

𡢳嬬等之。珠篋有。玉櫛乃。神家武毛。妹爾阿波受有者。

少女らが、玉櫛笥なる、玉櫛の、神さびけむも。妹に逢はずあれば。

好渡。人者年母。有云乎。何時間曾毛。吾戀爾來。

よく渡る、人は年にも、ありとふを、何時の間にぞも、我が戀ひにける。

烝被。奈胡也我下丹。雖臥。與妹不宿者。肌之寒霜。

蒸衾、なごやが下に、臥したれど、妹とし寢ねば、肌し寒しも。

吾以在。三相二搓流。絲用而。附手益物。今曾悔寸。
我が持たる、三つ合ひに縒れる、絲もちて、附けてましもの、今ぞ悔しき。

大納言兼大將軍大伴卿歌一首

神樹爾毛。手者觸云乎。打細丹。人妻跡云者。不觸物可聞。
榊にも、手は觸るとふを、うつたへに、人妻といへば、觸れぬものかも。

石川郎女歌二首

春日野之。山邊道乎。與曾理無。通之君我。不所見許呂香裳。
春日野の、山邊の道を、よそりなく、通ひし君が、見えぬ頃かも。

大伴女郎歌一首　元今城王之母也。今城王後賜大原眞人氏也

雨障。常爲公者。久堅乃。昨夜雨爾。將懲鴨。
雨障り、常する君は、久方の、昨日の雨に、懲りにけむかも。

後人追和歌一首

ゆゝしみと―いまゝゝしく思ひて
今ぞ―紐がきれたりと聞く今ぞ
神樹―一説、かみき
うつたへ―にーひたすらに、一概に
よそりなく―よるべきたよりもなく、おぼつかなく、一説、供廻りもなく只一人
雨障り―雨を憚りて家を出でぬをいふ、一說、「あまづつみ」と訓ずべしといふ

穂田―刈り頃の田
刈りばか―穡の刈る程になれるもの、宣長說には「はか」と揚みて讀み、田などを植ゑ又は刈る時にする區劃
か寄り合はば―かは發語、寄り合ひて働かば
そこもか人の云々―斯く寄り合ふをもかれこれと人のいひさわがんの意
大原―大和國
いち柴―櫟柴、いつしかの序
良之―下に「毛」或は「奈」の脫せるか
けせる―著給へる
針目落ちず―針目殘さず
一人寢て云々―紐は我妻ならでは結ばしむべきものならずとせる當時の風習を背景として讀み味ふべし

秋田之。穂田乃刈婆加。香縁相者。彼所毛加人之。吾乎事將成。
秋の田の、穂田の刈りばか、か寄り合はば、そこもか人の、我を言なさむ。

志貴皇子歌一首

大原之。此市柴乃。何時鹿跡。吾念妹爾。今夜相有香裳。
大原の、このいち柴の、何時しかと、我が思ふ妹に、今宵逢へるかも。

阿倍女郎歌一首

吾背子之。盖世流衣之。針目不落。入爾家良之。我情副。
我が背子が、けせる衣の、針目落ちず、入りにけらしも。我が心さへ。

中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌一首

獨宿而。絶西紐緒。忌見跡。世武爲便不知。哭耳之曾泣。
一人寢て、斷えにし紐を、ゆゝしみと、せむ術知らに、音のみしぞ泣く。

阿倍女郎答歌一首

見れば、青旗の、葛城山に、棚引ける、白雲隱り、天ざかる、鄙の國邊に、たゞ向ひ、淡路を過ぎ、粟島を、そがひに見つゝ、朝凪に、水手の聲呼び、夕凪に、檝の音しつゝ、浪の上を、い行きさぐくみ、岩の間を、い行きもとほり、稻日都麻、浦みを過ぎて、鳥じもの、なづさひ行けば、家の島、荒磯の上に、打靡き、しゞに生ひたる、神馬藻も、などかも妹に、告らず來にけむ。

反歌

白妙乃。袖解更而。還來武。月日乎數而。往而來猿尾。

白妙の、袖解きかへて、歸り來む、月日をよみて、行きて來ましを。

幸二伊勢國一時當麻麻呂大夫妻作歌一首

吾背子者。何處將行。己津物。隱之山乎。今日歟超良武。

我がせこは、何處行くらむ、沖つ藻の、なばりの山を、今日か越ゆらむ。

草孃歌一首

天ざかる—枕詞、本文「我」は「柯」などの誤か
そがひに見つゝ—後に見つゝ
さぐくみ—踏み分け
稻日都麻—播磨國印南郡の海の島か
浦み—海べ、浦曲
鳥じもの—水鳥の如く
なづさひ—浪に浮び
家の島—播磨國揖保郡か
しゞに—繁く
神馬藻—穂俵といふ海藻、「のらず」といはん料、一説「我」は「能」の誤にて「なのりその」と訓ず、從ふべし、下に「神馬藻も」と書き下したるは「我」を「茂」の誤となす略解の説に因

袖解きかへて—本文「袖」は「紐」の誤か、上二句は相寢しことをいふ、一説に、袖を解きはなして男女互に形見とすること
月日をよみて—月日をいつ〳〵と數へて

草孃—「草」の下に「香」を脱せしか、「さかのいらつめ」と訓むか、古義には別府信榮の説とて娼婦の義とし「うかれめ」と訓ぜり

よしをなみ―よしの無きが爲めに

臣女―(一)「姫」の誤にて、たをやめ、(二)みやひめ(三)「臣」は「少」の誤にて、をとめ(四)文字通りに「おみのめ」等諸説あり

青旗乃―一説、「旗」は「楊」の誤にて「あをやぎの」

鏡なす―鏡の如き
三津―難波
さにづらふ―枕詞
紐解きさけず―旅のさま
明けぐれ―夜明けがたのなほ少しくらき時

衣手の、別る今宵ゆ、妹も我も、いたく戀ひむな。逢ふよしをなみ。

丹比眞人笠麻呂下二筑紫國一時作歌一首并短歌

臣女乃。匣爾乘有。鏡成。見津乃濱邊爾。狹丹頰相。紐解不離。吾妹兒爾。戀乍居者。明晩乃。旦霧隱。鳴多頭乃。哭耳之所哭。吾戀流。千重乃一隔母。名草漏情毛有哉跡。家當。吾立見者。青旗乃。葛木山爾。多奈引流。白雲隱。天佐我留。夷乃國邊爾。直向。淡路乎過。粟島乎。背爾見管。朝名寸二。水手之音喚。暮名寸二。梶之聲爲乍。浪上乎。五十行左具久美。磐間乎。射往廻。稻日都麻。浦箕乎過而。鳥自物。魚津左比去者。家乃島。荒磯之宇倍爾。打靡。四時二生有。莫告我。奈騰可聞妹爾。不告來二計謀。

「手弱女の、櫛笥に上れる、鏡なす」三津の濱邊に、「さにづらふ」紐解きさけず、我妹子に、戀ひつゝ居れば、明けぐれの、朝霧隱り、鳴く田鶴の、音のみし泣かゆ。我が戀ふる、千重の一重も、慰もる、心もあれやと、家のあたり、我が立ち

鎮めての意

墨坂—大和國宇陀郡、初句より我までは墨坂の住みといはん序のみか或は坂は誤字か、古女の許へ男の通ふを住むといへり、女にもいひしにや定かならず

我無けなくに—我なきにあらざるに、我が居るからは

敷妙の—枕詞

枕ゆくゝる—枕より漏る

君家爾。吾住坂乃。家道乎毛。吾者不忘。命不死者。

君が家に、我墨坂の、家路をも、我は忘れじ。命死なずは。

安倍女郎歌二首

今更。何乎可將念。打靡。情者君爾。緣爾之物乎。

今更に、何をか思はむ。打靡き、心は君に、依りにしものを。

吾背子波。物莫念。事之有者。火爾毛水爾毛。吾莫七國。

我がせこは、ものな思ひそ。事しあらば、火にも水にも、我無けなくに。

駿河婇女歌一首

敷細乃。枕從久久流。淚二曾。浮宿乎思家類。戀乃繁爾。

敷妙の、枕ゆくゝる、淚にぞ、浮寢をしける。戀の繁きに。

三方沙彌歌一首

衣手乃。別今夜從。妹毛吾母。甚戀名。相因乎奈美。

來及べかも—及ぶは重なる意
思へかも—思へばにや
飽かざらむ—本文「武」は「式」の誤か
碁檀越—碁は氏、檀越は名か

神風の—枕詞
濱荻—海邊の荻

少女らが—枕詞
袖振山—大和國石上郡の布留山に袖振るをいひかく
瑞垣の—上よりこゝ迄「久しき」の序

玉衣の—枕詞、一說「珠」は「纈」の誤にて、「ありぎぬの」と訓む、織衣の意とす
さゐ〳〵云々—遠き旅に立つ時妻が歎きさわぐを

百重にも、來及べかもと、思へかも、君が使の、見れど飽かざらむ。

碁檀越往㆓伊勢國㆒時留妻作歌一首

神風之。伊勢乃濱荻。折伏。客宿也將爲。荒濱邊爾。
神風の、伊勢の濱荻、折り伏せて、旅寢やすらむ。荒き濱邊に。

柿本朝臣人麻呂歌三首

未通女等之。袖振山乃。水垣之。久時從。憶寸吾者。
少女らが、袖振山の、瑞垣の、久しき時ゆ、思ひき我は。

夏野去。小牡鹿之角乃。束間毛。妹之心乎。忘而念哉。
夏野ゆく、雄鹿の角の、束の間も、妹が心を、忘れてもへや。

珠衣乃。狹藍左謂沉。家妹爾。物不語來而。思金津裳。
玉衣の、さゐ〳〵鎭み、家の妹に、もの言はず來て、思ひかねつも。

柿本朝臣人麻呂妻歌一首

あひ知らしめし云々―はじめに媒介せし人を恨めしみ思へ―恨めしく思ふ、あまり戀のつのりて片時別れん事もつらき程苦しきにつけてはと補ひ見よ、反言修辭の一例也

月―有明の月

三熊野―三は美稱、紀伊國

濱木綿―濱おもと、其の莖の皮幾重もかさなりて花は木綿の如く白く垂る、その皮のかさなれるを以て百重の序とす

たゞに云々―直接相見ぬの意

吾妹兒矣。相令知。人乎許曾。戀之益者。恨三念。
我妹子を、あひ知らしめし、人をこそ、戀のまされば、恨めしみ思へ。

朝日影。爾保敝流山爾。照月乃。不厭君乎。山越爾置乎。
朝日影、匂へる山に、照る月の、飽かざる君を、山越しにおきて。

柿本朝臣人麻呂歌四首

三熊野之。浦乃濱木綿。百重成。心者雖念。直不相鴨。
三熊野の、浦の濱木綿、百重なす、心は思へど、たゞに逢はぬかも。

古爾。有兼人毛。如吾歟。妹爾戀乍。宿不勝家牟。
古に、ありけむ人も、我が如か、妹に戀ひつゝ、寝ねがてにけむ。

今耳之。行事庭不有。古。人曾益而。哭左倍鳴四。
今のみの、業にはあらず。古の、人ぞ勝りて、泣きさへ泣きし。

百重二物。來及毳常。念鴨。公之使乃。雖見不飽有哉。

戀ふるは乏し—風だに戀ひ給ふは羨しき事よ
風をだに—上の一句を重ねいふ意

吹黄云々—この端詞には誤あるべし

眞野の浦—攝津國
よどの云々—水のよどみに渡せる橋か、繼橋は中に島ありて二つになれる橋、さて繼橋といひて繼ぎて思ふ意を含ます
心ゆも—心よりも
思へや—思へばにや
いつ藻—多く生えたる藻

時じけめやも—何時にても時ならずといふ事あらんや

衣手に云々—母の袖にすがりて泣く兒にもまさりて別を惜む我を云々

風乎太爾。戀流波乏之。風小谷。將來登時待者。何香將嘆。
風をだに、戀ふるは乏し。風をだに、來むとし待たば、何か嘆かむ。

吹黄刀自歌二首

眞野之浦乃。與騰乃繼橋。情由毛。思哉妹之。伊目爾之所見。
眞野の浦の、よどの繼橋、心ゆも、思へや妹が、夢にし見ゆる。

河上乃。伊都藻之花乃。何時何時。來益我背子。時自異目八方。
川の上の、いつ藻の花の、何時も〳〵、來ませ我がせこ、時じけめやも。

田部忌寸櫟子任二太宰一時歌四首

衣手爾。取等騰己保里。哭兒爾毛。益有吾乎。置而如何將爲。元舍人千年
衣手に、取り滯り、泣く兒にも、勝れる我を、置きて如何にせむ。

置而行者。妹將戀可聞。敷細乃。黑髮布而。長此夜乎。元田部忌寸櫟子
おきて行かば、妹戀ひむかも、敷妙の、黑髮敷きて、長きこの夜を。

來者」は「かよひは」又「さわぎは」

寢ねがてにして―本文、一說「登」は「死弖」或は「管」の誤か、「いねがてにつゝ」と訓むべし、又「登」は「乃三」の誤にて、「寢ねがてにのみ」

明しつらく―明しつる哉

きぶしゑ―さびしよ

君にしあらねば―其人々が一人として我が戀しく思ふ君ならねば

己呂其侶―「呂」は「乃」の誤

いさや川―川の名に女の心をいさ知らずといふ意を含ませたり

け―日

近江天皇―天智

ど、我が戀ふる、君にしあらねば、晝は、日の暮るゝまで、夜は、夜の明くる極、思ひつゝ、寢ねがてにして、明しつらくも。長きこの夜を。

反歌

山羽爾。味村騷。去奈禮騰。吾者左夫思惠。君二四不在者。

山の端に、あぢ群騷ぎ、行くなれど、我はさぶしゑ。君にしあらねば。

淡海路乃。鳥籠之山有。不知哉川。氣乃己呂其侶波。戀乍裳將有。

近江路の、鳥籠の山なる、いさや川、けの此の頃は、戀ひつゝもあらむ。

右今案。高市岳本宮後岡本宮二代二帝各有㆑異焉。但稱㆓岡本天皇㆒未㆑審㆓其指㆒。

額田王思㆓近江天皇㆒作歌一首

君待登。吾戀居者。我屋戸之。簾動之。秋風吹。

君待つと、我が戀ひ居れば、我が宿の、簾動かし、秋の風ふく。

鏡王女作歌一首

萬葉集　巻第四

相聞

難波天皇妹奉上在山跡皇兄御歌一首

一日社。人母待告。長氣乎。如此所待者。有不得勝。

一日こそ、人も待ち繼げ、長きけを、かく待たるれば、ありがてなくも。

岳本天皇御製一首并短歌

神代從。生繼來者。人多。國爾波滿而。味村乃。去來者行跡。吾戀流。君爾之不有者。晝波。日乃久流留麻弖。夜者。夜之明流寸食。念乍。寐宿難爾登。阿可思通良久茂。長此夜乎。

神代より、生れ繼ぎ來れば、人さはに、國には滿ちて、〈あぢ群の、〉いざとは行け

天皇―仁徳？

長きけ―けは日、長き月日

かく待たるれば―一説、本文「所」は「耳」の誤にて、「かくのみまてば」か

ありがてなくも―待ち堪へ難しの意

天皇―舒明か、齊明ならば未だ后に立たぬ時の歌か

あぢ群の―枕詞

いざとは―一説、本文「去

なきのみ―一說「音のみし」と訓ず

打背見乃。世之事爾在者。外爾見之。山矣耶今者。因香跡思波牟。
空蟬の、世のことなれば、外に見し、山をや今は、よすがと思はむ。
朝鳥之。啼耳鳴六。吾妹子爾。今亦更。逢因矣無。
朝鳥の、なきのみ鳴かむ。我妹子に、今また更に、逢ふよしを無み。

（右三首七月廿日高橋朝臣作歌也。名字未レ審。但云奉膳之男子焉。）

入居嘆舍―「舍」は「合」の誤
泣母―「母」は「毎」の誤

さしかへて―さしかはして
あたら世に―「あらた世に」と訓ずべし
絶えじい―いは助辭

ほのになりつゝ―葬式を見送りてやう〳〵に遠くなりゆくをいふ、一説、「髣髴」は「おほに」と訓む
さ寢し―さは發語

言問はぬ―ものいはぬ

よすが―形見といふに似たる意、せめて亡き妻のえにしと思ひ眺めて悶々の情を行ると也

庭。出立偲。夕爾波。入居嘆舍。腋挾。兒乃泣母。雄自毛能。負見抱見。朝烏之。啼耳哭管。雖戀。効矣無跡。辭不問。物爾波在跡。吾妹子之。入爾之山乎。因鹿跡叙念。

白妙の、袖さしかへて、靡き寢し、我が黒髮の、眞白髮に、ならむ極、あたら世に、共にあらむと、玉の緒の、絶えじい妹と、結びてし、言は果さず、思へりし、心は遂げず、白妙の、袂を別れ、にきびにし、家ゆも出でて、みどり兒の、泣くをもおきて、朝霧に、ほのになりつゝ、山城の、相樂山の、山の間に、行過ぎぬれば、言はむ術、爲む術知らに、我妹子と、さ寢し妻屋に、朝には、出で立ち偲び、夕には、入り居嘆かひ、わき挾む、兒の泣く毎に、男じもの、負ひみ抱きみ、朝鳥の、音のみ泣きつゝ、戀ふれども、驗を無みと、言問はぬ、物にはあれど、我妹子が、入りにし山を、よすがとぞ思ふ。

反歌

て哀悼悲痛するさまの日頃の愉快なりしに變るをいふ

はしきかも—皇子をほめていふ

見しゝ—見給ひし

大伴の云々—姓氏録大伴宿禰の條「以大來目部爲靫負部云々」

彌日けに、變らふ見れば、悲しきろかも。

反歌

波之吉可聞。皇子之命乃。安里我欲比。見之活道乃。路波荒爾鷄里。

はしきかも、皇子の命の、あり通ひ、見しゝいくぢの、路は荒れにけり。

大伴之。名負靫帶而。萬代爾。憑之心。何所可將寄。

大伴の、名に負ふ靫帶びて、萬代に、憑みし心、何所か寄せむ。

右三首三月二十四日作歌。

悲二傷死妻一高橋朝臣作歌一首幷短歌

白細之。袖指可倍氏。靡寢。吾黑髮乃。眞白髮爾。成極。新世爾。共將有跡。玉緒乃。不絕射妹跡。結而石。事者不果。思有之。心者不遂。白妙之。手本矣別。丹杵火爾之。家從裳出而。綠兒乃。哭乎毛置而。朝霧。髣髴爲乍。山代乃。相樂山乃。山際。往過奴禮婆。將云爲便。將爲便不知。吾妹子跡。左宿之妻屋爾。朝

八十伴緒—多くの伴緒、伴緒は上古部屬の長の稱
あどもひ—引率し
しゝ—鹿猪等の獸類の總稱
大御馬の云々—御馬をとゞめて見晴す
いくぢ山—久邇の都に程近きところにあるべし
木立のしゞに—繁茂せる林に
移ひにけり—覓去をいふ
五月蠅なす—枕詞
白妙に云々—喪服を著け

掛巻毛。文爾恐之。吾王。皇子之命。物乃負能。八十伴男乎。召集。聚率比賜比。朝獵爾。鹿猪践起。暮獵爾。鶉雉履立。大御馬之。口抑駐。御心乎。見爲明米之。活道山。木立之繁爾。咲花毛。移爾家里。世間者。如此耳奈良之。丈夫之。心振起。劍刀。腰爾取佩。梓弓。靫取負而。天地與。彌遠長爾。萬代爾。如此毛欲得跡。憑有之。皇子乃御門乃。五月蠅成。驟騷舍人者。白栲爾。服取著而。常有之。咲比振麻比。彌日異。更經見者。悲呂可毛。

掛けまくも、あやに畏し。我が大君、皇子の命、武士の、八十伴緒を、召し集へ、あどもひ給ひ、朝獵に、しゝ踐み起し、夕獵に、とり履み立て、大御馬の、口おしとゞめ、御心を、見し明らめし、いくぢ山、木立のしゞに、咲く花も、移ひにけり。世の中は、斯くのみならし。丈夫の、心振起し、劍太刀、腰に取り佩き、梓弓、靫取り負ひて、天地と、彌遠永に、萬代に、斯くしもがもと、憑めりし、皇子の御門の、「五月蠅なす、騷ぐ舍人は、」白妙に、衣取り著て、常なりし、笑まひ振舞、

召し—「をし」と訓ずべし
久邇—山城國相樂郡
春さりぬれば—春になりぬれば
日けに—日々に
白妙—喪服をいふ也、本文「布」を略す
和豆香山—山城國相樂郡
御輿—葬送の車
天知らしぬれ—薨じ給ひぬれば
こい轉び—臥しまろび
おほに—おぼろげに、おほよそに

山。御輿立之而。久堅乃。天所知奴禮。展轉。泥土打雖泣。將爲須便毛奈思。

掛けまくも、あやに畏し。言はまくも、ゆゝしきかも。我が大君、皇子の命、萬代に、召し給はまし、大日本、久邇の都は、打靡く、春さりぬれば、山邊には、花咲きをゝり、河瀬には、年魚子さ走り、彌日けに、榮ゆる時に、妖言の、禍言とかも、白妙に、舍人裝ひて、和豆香山、御輿立たして、「久方の」天知らしぬれ、こい轉び、ひづち泣けども、せむ術もなし。

反歌

吾王。天所知牟登。不思者。於保爾曾見谿流。和豆香蘇麻山。
我が大君、天知らさむと、思はねば、おほにぞ見ける。和豆香杣山。
足檜木乃。山左倍光。咲花乃。散去如寸。吾王香聞。
足引の、山さへ光り、咲く花の、散りにし如き、我が大君かも。

右三首二月三日作歌。

山隱りつれ―山に隱れたれば、葬られしをいふ
心どもなし―我は利心もなし
不忍―「忍」の上に「得」を脱す
かつ―一方には
霞―火葬の煙に似たればなり
はしき―愛らしき
乎爲里―「爲」は「烏」の誤か
年魚小―「小」は「子」の誤か

離家。伊麻須吾妹乎。停不得。山隱都禮。情神毛奈思。
家離り、座す我妹を、止めかね、山隱りつれ、心どもなし。
世間之。常如此耳跡。可都知跡。痛情者、不忍都毛。
世の中し、常斯くのみと、かつ知れど、いたき心は、忍びかねつも。
佐保山爾。多奈引霞。毎見。妹乎思出。不泣日者無。
佐保山に、たなびく霞、見る毎に、妹を思ひ出て、泣かぬ日はなし。
昔許曾。外爾毛見之加。吾妹子之。奧槨常念者。波之吉佐寶山。
昔こそ、外にも見しか、我妹子が、墓と思へば、はしき佐保山。

十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舍人大伴宿禰家持作歌六首

掛卷母。綾爾恐之。言卷毛。齋忌志伎可物。吾王。御子乃命。萬王爾。食賜麻思。大日本。久邇乃京者。打靡。春去奴禮婆。山邊爾波。花咲乎爲里。河湍爾波。年魚小狹走。彌日異。榮時爾。逆言之。枉言登加聞。白細爾。舍人裝束而。和豆香

跡もなき—跡方もなき、無常なる

時はしも云々—時もあるべきに

心いたく—情なくも

我妹か—「か」は「かな」

かねてより—一說「あらかじめ」

經ぬ—移り來れり

思ふに、胸こそ痛め。言ひもかね、名附けも知らに、跡もなき、世の中なれば、せむ術もなし。

反歌

時者霜。何時毛將有乎。情哀。伊去吾妹可。若子乎置而。

時はしも、何時もあらむを、心いたく、去にし我妹か、若子をおきて。

出行。道知末世波。豫。妹乎將留。塞毛置末思乎。

出でて行く、道知らませば、かねてより、妹を留めむ、關も置かましを。

妹之見師。屋前爾花咲。時者經去。吾泣涙。未干爾。

妹が見し、宿に花咲く、時は經ぬ、我が泣く涙、未だ干なくに。

悲緒未レ息更作歌五首

如是耳。有家留物乎。妹毛吾毛。如千歲。憑有來。

斯くのみに、ありけるものを、妹も我も、千歳の如も、頼みたりける。

偲べ—めで給へ

知るものを—心得ては居りながら甚甲斐もなく

はしきやし—愛らしく美しき

水鴨なす—鴨の如くに
空蟬の—枕詞
足引の—枕詞
そこ思ふに—それを思ふにつけて

秋去らば、見つゝ偲べと、妹が植ゑし、宿の撫子、咲きにけるかも。

移レ朔而後悲二嘆秋風一家持作歌一首

虚蟬之。代者無常跡。知物乎。秋風寒。思努妣都流可聞。

空蟬の、世は常なしと、知るものを、秋風寒み、偲びつるかも。

又家持作歌一首并短歌

吾屋前爾。花曾咲有。其乎見杼。情毛不行。愛八師。妹之有世婆。水鴨成。二人雙居。手折而毛。令見麻思物乎。打蟬乃。借有身在者。露霜乃。消去之如久。足日木乃。山道乎指而。入日成。隱去可婆。曾許念爾。胸己所痛。言毛不得。名付毛不知。跡無。世間爾有者。將爲須辨毛奈思。

我が宿に、花ぞ咲きたる。そを見れど、心も行かず。はしきやし、妹がありせば、水鴨なす、二人並び居、手折りても、見せましものを、「空蟬の」、假れる身なれば、露霜の、消ぬるが如く、「足引の」、山路を指して、入日なす、隱りにしかば、そこ

過ぎにし云々—君が然言はるゝにつけて吾もその亡き婦の在世の樣が思ひ出さるゝと也

留め得ぬ、命にしあれば、敷妙の、家ゆは出でて、雲隱りにき。

右新羅國尼曰㆓理願㆒也。遠感㆓王德㆒。歸㆓化聖朝㆒。於㆑時寄㆓住大納言大將軍大伴卿家㆒。既逕㆓數紀㆒焉。惟以天平七年乙亥忽沈㆓運病㆒。既趣㆓泉界㆒。於㆑是大家石川命婦依㆓餌藥事㆒往㆓有馬溫泉㆒。而不㆑會㆓此哀㆒。但郎女獨留葬㆓送屍柩㆒。既訖仍作㆓此歌㆒贈㆓入溫泉㆒。

十一年己卯夏六月大伴宿禰家持悲㆓傷亡妾㆒作歌一首

從今者。秋風寒。將吹烏。如何獨。長夜乎將宿。

今よりは、秋風寒く、吹きなむを、いかでか一人、長き夜を寢む。

弟大伴宿禰書持卽和歌一首

長夜乎。獨哉將宿跡。君之云者。過去人之。所念久爾。

長き夜を、一人や寢むと、君がいへば、過ぎにし人の、思ほゆらくに。

又家持見㆓砌上瞿麥花㆒作歌一首

秋去者。見乍思跡。妹之殖之。屋前之石竹。開家流香聞。

栲綱の―枕詞
問ひさくる―もの言ひやる
内日さす―枕詞
皇祖の―古義「大君の」
都しみゝに―しみゝには繁く、繁榮なる都の意
思ひけめかも―思ひけんか
つれもなき―緣もゆかりもなき
生ける人―古義「生るれば」
敷妙の―枕詞
夕闇と―夕闇の如く、本文「晩闇跡」一說「くらやみと」
たもとほり―思ひ迷ひ
有馬山―攝津國

之。衣袖不干。嘆乍。吾泣涙。有間山。雲居輕引。雨爾零寸八。

「栲綱の」新羅の國ゆ、他言を、善しと聞かして、問ひさくる、親族兄弟、無き國に、渡り來まして、皇祖の、敷き座す國に、「内日さす」都しみゝに、里家は、さはにあれども、如何樣に、思ひけめかも、つれもなき、佐保の山邊に、泣く兒なす、慕ひ來まして、「敷妙の」家をも作り、「新玉の」年の緒長く、住ひつゝ、座ししものを、生ける人、死ぬちふ事に、免れぬ、ものにしあれば、憑めりし、人の盡、「草枕」旅なる程に、佐保川を、朝川渡り、春日野を、そがひに見つゝ、「足引の」山邊を指して、夕闇と、隱りましぬれ、言はむ術、爲む術知らに、たもとほり、唯一人して、「白妙の」衣手干さず、嘆きつゝ、我が泣く涙、有馬山、雲居たなびき、雨に降りきや。

反歌

留不得。壽爾之在者。敷細乃。家從者出而。雲隱去寸。

這ひたもとほり―這ひ廻り

黄葉の―秋來りて色づき散る木の葉の如く移り去ぬれば―死したれば

右五首資人金明軍不ㇾ勝ニ犬馬之慕ー。心中感緒作歌。

見禮杼不飽。伊座之君我。黄葉乃。移伊去者。悲喪有香。

見れど飽かず、座しゝ君が、黄葉の、移り去ぬれば、悲しくもあるか。

右一首勅ニ內禮正縣犬養宿禰人上ー。使ㇾ檢ニ護卿病ー。而醫藥無ㇾ驗。逝水不ㇾ留。因ㇾ斯悲慟。卽作ニ此歌ー。

七年乙亥大伴坂上郎女悲ニ嘆尼理願死去ー作歌一首幷短歌

栲角乃。新羅國從。人事乎。吉跡所聞而。問放流。親族兄弟。無國爾。渡來座而。天皇之。敷座國爾。內日指。京思美彌爾。里家者。左波爾雖在。何方爾。念鷄目鴨。都禮毛奈吉。佐保乃山邊爾。哭兒成。慕來座而。布細乃。宅乎毛造。荒玉乃。年緒長久。住乍。座之物乎。生者。死云事爾。不免。物爾之有者。憑有之。人乃盡。草枕。客有間爾。佐保河乎。朝川渡。春日野乎。背向爾見乍。足氷木乃。山邊乎指而。晩闇跡。隱益去禮。將言爲便。將爲須敝不知爾。徘徊。直獨而。白細

我妹子が、植ゑし梅の木、見る毎に、心咽せつゝ、涙し流る。

天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌六首

愛八師。榮之君乃。伊座勢波。昨日毛今日毛。吾乎召麻之乎。
はしきやし、榮えし君の、座しせば、昨日も今日も、我を召さましを。

如是耳。有家類物乎。芽子花。咲而有哉跡。問之君波母。
斯くのみに、ありけるものを、萩が花、咲きてありやと、問ひし君はも。

君爾戀。痛毛爲便奈美。蘆鶴之。哭耳所泣。朝夕四天。
君に戀ひ、いたも術無み、蘆田鶴の、音のみし泣かゆ。朝夕にして。

遠長。將仕物常。念有之。君師不座者。心神毛奈思。
遠長く、仕へむものと、思へりし、君し座さねば、こゝろどもなし。

若子乃。匍匐多毛登保里。朝夕。哭耳曾吾泣。君無二四天。
みどり子の、這ひたもとほり、朝夕に、音のみぞ我が泣く。君なしにして。

はしきやし—美しき

斯くのみ云々—斯くはかなくなり給へる物を今は慕ひまつるとも甲斐なし

いたも—いたくも

蘆田鶴の—「の」は「の如く」の意

こゝろど—利心（トゴコロ）、しつかりして働く心

みどり子の—みどり子の如く、一說「若き子の」と訓むべし

敏馬―攝津國
歸るさ―歸途

宿―一說「しま」と訓ず、築山の義也、從ふべし

與妹來之。敏馬能埼乎。還左爾。獨而見者。涕具末之毛。
妹と來し、敏馬の崎を、歸るさに、一人して見れば、涙ぐましも。

去左爾波。二吾見之。此埼乎。獨過者。情悲哀。
行くさには、二人我が見し、この崎を、一人過ぐれば、心悲しも。

一云。見毛左可受伎濃。

右二首過敏馬埼日作歌。

還入故鄕家即作歌三首

人毛奈吉。空家者。草枕。旅爾益而。辛苦有家里。
人もなき、空しき家は、草枕、旅にまさりて、苦しかりけり。

與妹爲而。二作之。吾山齋者。木高繁。成家留鴨。
妹として、二人つくりし、我が宿は、木高く繁く、なりにけるかも。

吾妹子之。殖之梅樹。毎見。情咽都追。涕之流。

雲に云々—火葬の煙をいふ

言だに告げず—傳言だに爲さずして

樫の木—杉、檜等に似て實の群生する木といふ

鞆—備後國

昨日社。公者在然。不思爾。濱松之上。於雲棚引。

昨日こそ、君はありしか。思はぬに、濱松の上の、雲にたなびく。

何時然跡。待牟妹爾。玉梓乃。事太爾不告。往公鴨。

何時しかと、待つらむ妹に、玉梓の、言だに告げず、去にし君かも。

天平二年庚午冬十二月太宰帥大伴卿向レ京上道之時作歌五首

我妹子之。見師鞆浦之。天木香樹者。常世有跡。見之人曾奈吉。

我妹子が、見し鞆の浦の、樫の木は、常世にあれど、見し人ぞなき。

鞆浦之。礒之室木。將見每。相見之妹者。將所忘八方。

鞆の浦の、磯の樫の木、見む毎に、あひ見し妹は、忘らえめやも。

礒上丹。根蔓室木。見之人乎。何在登問者。語將告可。

磯の上に、根はふ樫の木、見し人を、如何なりと問はば、語り告げむか。

右三首。過二鞆浦一日作歌。

天雲の云々—日本國をさす
玉葛—枕詞
おや—親父
たちにし—都を
母の命—母を敬ひていふ
和栲—絹布
如何ならむ云々—いつかと待つ意
躑躅花—枕詞
匂へる君—龍麻呂
なづさひ—遠き海路を上り來ることを網を引くに譬ふ
待ちけむ人—龍麻呂
押照る—枕詞
白妙の—枕詞
衣手—本文「衣」の下「手」を脱せしか
空蟬の—枕詞
時ならずして—自殺せしをいふ

二。白栲。衣不干。朝夕。在鶴公者。何方爾。念座可。鬱蟬乃。惜此世乎。露霜。置而往監。時爾不在之天。

天雲の、むかぶす國の、武士と、いはれし人は、皇祖の、神の御門に、外のへに、立ちさもらひ、内のへに、仕へ奉りて、「玉葛」彌遠永く、おやの名も、繼ぎ行くものと、母父に、妻に子供に、語ひて、たちにし日より、「垂乳根の」、母の命は、齋瓮を、前に据ゑ置きて、一手には、木綿取持たし、一手には、和栲奉り、平けく、眞幸く座せと、天地の、神にこひのみ、如何ならむ、年月日にか、「躑躅花」匂へる君が、引く網の、なづさひ來むと、立ちて居て、待ちけむ人は、大君の、命畏み、「押照る」難波の國に、新玉の、年經るまでに、「白妙の」、衣手干さず、朝夕に、ありつる君は、如何樣に、思ひ座せか、「空蟬の」、惜しきこの世を、露霜の、置きて去にけむ、時ならずして。

反歌

天皇の—「大君の」と訓ずべし
大あらき云々—御壽命の限りにはあらねど
あらむとぞ—あらむとてぞ
乎—平の誤
之牛—系の誤か

天皇の、御言畏み、大あらきの、時にはあらねど、雲隱ります。

悲㆓傷膳部王㆒歌一首

世間者。空物跡。將有登曾。此照月者。滿闕爲家流。

世の中は、空しきものと、あらむとぞ、この照る月は、滿ちかけしける。

右一首。作者未㆑詳。

天平元年己巳攝津國班田史生丈部龍麻呂自經死之時判官大伴宿禰三中作歌一首并短歌

天雲之。向伏國。武士登。所云人者。皇祖。神之御門爾。外重爾。立候。内重爾。仕奉。玉葛。彌遠長。祖名文。繼往物與。母父爾。妻爾子等爾。語而。立西日從。帶乳根乃。母命者。齋忌戸乎。前坐置而。一手者。木綿取持。一手者。和細布奉。乎。間幸座與。天地乃。神祇乞禱。何在。歳月日香。茵花。香君。之牛留鳥。名津匝來與。立居而。待監人者。王之。命恐。押光。難波國爾。荒玉之。年經左右

故人―此の卿の妻太宰府にて死せしこと卷七に見ゆ

まきてし―枕とせし
敷妙の―枕詞

歸るべき―都に也
時にはなり來―本文一說「來」は「去」の誤、「時にはなりぬ」又「來來」の誤にて「きにけり」
まくらかむ―枕として寢ん、寢るべき人はあらぬ也

玆次ニ焉。

神龜五年戊辰太宰帥大伴卿思二戀故人一歌三首

愛。人纏而師。敷細之。吾手枕乎。纏人將有哉。

うるはしき、人のまきてし、「敷妙の、」我が手枕を、まく人あらめや。

右一首。別去而經二數旬一作歌。

應還。時者成來。京師爾而。誰乎本平可。吾將枕。

歸るべき、時にはなり來。都にて、誰が袂をか、我がまくらかむ。

在京師。荒有家爾。一宿者。益旅而。可辛苦。

都なる、荒れたる家に、一人寢ば、旅にまさりて、苦しかるべし。

右二首。臨レ近二向レ京之時一作歌。

神龜六年己巳左大臣長屋王賜レ死之後倉橋部女王作歌一首

天皇之。命恐。大荒城乃。時爾波不有跡。雲隱座。

葛飾の、眞間の入江に、打靡く、玉藻刈りけむ、手兒名し思ほゆ。

和銅四年辛亥河邊宮人見二姫島松原美人屍一哀慟作歌四首

加麻幡夜能。美保乃浦廻之。白管仕。見十方不怜。無人念者。
かざはやの、みほの浦曲の、白躑躅、見れども寂し。無き人思へば。

或云。見者悲霜。無人思丹。

見津見津四。久米能若子我。伊觸家武。礒之草根乃。干巻惜裳。
「みつ〳〵し」粂の若子が、い觸れけむ、磯の茅根の、枯れまくをしも。

人言之。繁比日。玉有者。手爾巻以而。不戀有益雄。
人言の、繁きこの頃、玉ならば、手に巻き持ちて、戀ひざらましを。

妹毛吾毛。清之河乃。河岸之。妹我可悔。心者不持。
妹も我も、きよみの川の、川岸の、妹が悔ゆべき、心はもたじ。

右案。年紀并所處乃娘子屍作歌人名已見レ上也。但歌辭相違。是非難レ別。因以累二載於

和銅四年云々―この端詞は錯簡なるべし
加麻幡夜能―「麻」は「座」の誤か
かざはや―地名か　みほ―紀伊國か
みつ〳〵し―枕詞　い觸れけむ―「い」は接頭語
玉ならば―我が思ふ妹の
きよみの川―飛鳥の清見原の川か　妹が悔ゆべき―岸のくえ落つるより悔ゆるにつゞく

「八雲さす」、出雲の兒らが、黑髮は、吉野の川の、沖になづさふ。

過勝鹿眞間娘子墓時山部宿禰赤人作歌一首幷短歌

古昔。有家武人之。倭文幡乃。帶解替而。廬屋立。妻問爲家武。勝牡鹿乃。眞間之手兒名之。奥槨乎。此間登波聞杼。眞木葉哉。茂有良武。松之根也。遠久寸。言耳毛。名耳母吾者。不所忘。

古に、ありけむ人の、賤機の、帶解き交へて、伏屋建て、妻問しけむ、葛飾の、眞間の手兒名が、墓を、此處とは聞けど、眞木の葉や、茂りたるらむ、松が根や、遠く久しき。言のみも、名のみも我は、忘らえなくに。

反歌

吾毛見都。人爾毛將告。勝牡鹿之。間間能手兒名之。奥津城處。

我も見つ、人にも告げむ。葛飾の、眞間の手兒名が、墓所。

勝牡鹿乃。眞眞乃入江爾。打靡。玉藻苅兼。手兒名志所念。

八雲さす―枕詞
なづさふ―浮び漂ふ、水死のさま也
眞間―下總國葛飾郡
賤機の帶―倭文(シヅ)の帶
伏屋建て―古へ妻問ひするには先づ住むべき家を建つべき習なりき
妻問―男女相逢ふこと
手兒名―美しく愛らしきを意味する名(固有名詞)と見るべし
聞けど―下に「其墓のさだかに見えざるは」と補ひ、下文「久しき」の下に「爲にやあらん」と補ひて見よ、眞木、松の二つは墓なる木を取りて敍述の背景としたる也
遠く久しき―年代が

草枕。羇宿爾。誰嬬可。國忘有。家待莫國。
草枕、旅の宿に、誰が夫か、國忘れたる。家待たなくに。

田口廣麻呂死之時刑部垂麻呂作歌一首

百不足。八十隅坂爾。手向爲者。過去人爾。蓋相牟鴨。
「百足らず、八十隅坂に、手向せば、過ぎにし人に、けだし逢はむかも。

土形娘子火葬泊瀬山時柿本朝臣人麻呂作歌一首

隱口能。泊瀬山之。山際爾。伊佐夜歴雲者。妹鴨有牟。
隱口の、泊瀬の山の、山の間に、いさよふ雲は、妹にかもあらむ。

溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麻呂作歌二首

山際從。出雲兒等者。霧有哉。吉野山。嶺霏霺。
山の間ゆ、出雲の兒らは、霧なれや、吉野の山の、嶺にたなびく。

八雲刺。出雲子等。黒髪者。吉野川。奥名豆颯。

家待たなくに—故郷にて家人の待ち居らんに、「なくに」は否定なるを肯定に用ひたる例は多かり

百足らず—枕詞
八十隅坂—本文「隅坂」は「隈路」の誤か、然らば「やそのくまぢ」と訓むべし、くまぢは道の曲り目
過ぎにし人—死せる人

雲—火葬の煙

山の間ゆ—山の間より出る雲とつゞく

つぬさはふ―枕詞
朝さらず―朝毎に、日々に
思ひつゝ―折りかざさんと思ひつゝ
通ひけましは―通ひけんは
はふ葛の―枕詞

玉は亂れて云々―玉は石田王に喩へ、泊瀬美人が愛玩せる玉は亂れたり、即ち最愛の王は死したりといふなるべし、但附說の或說を是として云はゞ玉は紀皇女に喩へたる事いふ迄もなけれど、前の長歌の反歌として見ん方穩かならん

川風の云々―この歌は或說に從ひて然るべからん
似る人―紀皇女に

「つぬさはふ」磐余の道を、朝さらず、行きけむ人の、思ひつゝ、通ひけましは、郭公、鳴く五月には、あやめ草、花橘を、玉に貫き、鬘にせむと、九月の、時雨の時は、黄葉を、折りかざさむと、「はふ葛の」彌遠永く、萬代に、絶えじと思ひて、通ひけむ、君をば明日ゆ、外にかも見む。

右一首或云。柿本朝臣人麻呂作。

或本反歌二首

隱口乃。泊瀬越女我。手二纒在。玉者亂而。有不言八方。

隱口の、泊瀬少女が、手にまける、玉は亂れて、ありといはずやも。

河風。寒長谷乎。歎乍。公之阿流久爾。似人母逢耶。

川風の、寒き長谷を、歎きつゝ、君があるくに、似る人も逢へや。

右二首者或云。紀皇女薨後山前王代二石田王一作之也。

柿本朝臣人麻呂見二香具山屍一悲慟作歌一首

に、御室を建てて、枕邊に、齋瓮を据ゑ、竹玉を、間なくに貫き垂り、木綿襷、腕に懸けて、天なる、さゝらの小野の、七ふ菅、手に取持ちて、久方の、天の川原に、出で立ちて、禊ぎてましを、高山の、巖の上に、座せつるかも。

反歌

逆言之。狂言等可聞。高山之。石穗乃上爾。君之臥有。
妖言の、禍言とかも。高山の、巖の上に、君がこやせる。

石上。振乃山有。杉村乃。思過倍吉。君爾有名國。
石上、布留の山なる、杉村の、思ひ過ぐべき、君にあらなくに。

同石田王卒之時山前王哀傷作歌一首

角障經。石村之道乎。朝不離。將歸人乃。念乍。通計萬四波。霍公鳥。鳴五月者。菖蒲。花橘乎。玉爾貫（一云「貫交」）。蘰爾將爲登。九月能。四具禮能時者。黄葉乎。折挿頭跡。延葛乃。彌遠永（一云「田葛根乃、彌遠長爾」）。萬世爾。不絕等念而（一云「大船之。念憑而」）。將通。君乎婆明日從（一云「君乎從明日香」）。外爾可聞見牟。

て後世の辻占の類
石占―石を踏み數へ又は蹴りて占ふこと
御室―神の座す處、神社
間なく―「しゞに」とも訓ずべし
さゝらの小野―天上にある野の名といふ
七ふ菅―古來諸説あれど定かならず、古義には「七」は「石」の誤にて「いはひすげ」かといへり、いかゞ
高山の巖―泊瀬山の陵
とかも―ならんかな
石上―枕詞
布留―大和國山邊郡

手力雄神則承天照太神之手、引而奉出」

弱竹の―枕詞
とをよる―姿のたをやかなるをいふ
さにづらふ―枕詞
隱口の―枕詞
玉梓―文の使
禍言―一說、本文「枉」は「狂」の誤にてたはこと
そくへ―遠く隔たれる
夕占―ゆふうら、夕方衢に立ちてうらなふことに

石田王卒之時丹生女王作歌一首并短歌

名湯竹乃。十縁皇子。狹丹頰相。吾大王者。隱久乃。始瀨乃山爾。神左備爾。伊都伎坐等。玉梓乃。人曾言鶴。於余頭禮可。吾聞都流。枉言加。我聞都流母。天地爾。悔事乃。世間乃。悔言者。天雲乃。曾久敝能極。天地乃。至流左右二。杖策毛。不衝毛去而。夕衢占問。石卜以而。吾屋戶爾。御諸乎立而。枕邊爾。齋戶乎居。竹玉乎。無間貫垂。木綿手次。可比奈爾懸而。天有。左佐羅能小野之。七相菅。手取持而。久堅乃。天川原爾。出立而。潔身而麻之乎。高山乃。石穗乃上爾。伊座都流香物。

「弱竹の」とをよる皇子「さにづらふ」我が大君は、「隱口の」泊瀨の山に、神さびに、齋き座すと、「玉梓の」人ぞ言ひつる。妖言か、我が聞きつる。禍言か、我が聞きつるも。天地に、悔しき事の、世の中の、悔しき事は、「天雲の、そくへの極、天地の、至れる迄に、杖衝きも、衝かずも行きて、夕占問ひ、石占以ちて、我が宿

まかむ―枕とせん　こやせる―臥せる、死したる

百傳ふ―枕詞　雲隠りなむ―死に往かん

睦魂あへや―御心に叶へばにや　宮―陵

手力もがも―神代紀、「乃以御手細開磐戸窺之時、

家ならば、妹が手まかむ、草枕、旅にこやせる、この旅人あはれ。

大津皇子被レ死之時磐余池般流レ涕御作歌一首

百傳。磐余池爾。鳴鴨乎。今日耳見哉。雲隠去牟。

百傳ふ、磐余の池に、鳴く鴨を、今日のみ見てや、雲隠りなむ。

右藤原宮朱鳥元年冬十月。

河内王葬二豊前國鏡山一之時手持女王作歌三首

王之。親魄相哉。豊國乃。鏡山乎。宮登定流。

大君の、睦魂あへや、豊國の、鏡の山を、宮と定むる。

豊國乃。鏡山之。石戸立。隱爾計良思。雖待不來座。

豊國の、鏡の山の、岩戸たて、隱りにけらし。待てど來まさず。

石戸破。手力毛欲得。手弱寸。女有者。爲便乃不知苦。

岩戸わる、手力もがも。た弱き、女にしあれば、術の知らなく。

き統める玉―著けて多くの玉をすべくゝる玉の意ならん
二つなし―數にあらず、たぐひなしの意
此方彼方―宣長は「かにもかくにも」と訓ず、從ふべし
鹽衣―葛布にて仕立てたる上古下民の衣服
間遠にしあれば―藤衣の織目あらきを住所の遠きに譬ふ
足引―山
こゞし―險し
引かば云々―いきなり言ひ寄りても物にする事難からんと、まづ他人に取られぬ警戒をして、遂に我物にせんの用意を爲すとの意なるべし

伊奈太吉爾。伎須賣流玉者。無二。此方彼方毛。君之隨意。
頂に、き統める玉は、二つなし。此方彼方も、君がまに〳〵。

大綱公人主宴吟歌一首

須麻乃海人之。鹽燒衣乃。藤服。間遠之有者。未著穢。
須磨の海人の、鹽燒衣の、藤衣、間遠にしあれば、未だ來なれず。

大伴宿禰家持歌一首

足日木能。石根許其思美。菅根乎。引者難三等。標耳曾結焉。
足引の、岩根こゞしみ、菅の根を、引かば難みと、標のみぞ結ふ。

挽歌

上宮聖德皇子出二遊竹原井一之時見二龍田山死人一悲傷御作歌一首

家有者。妹之手將纒。草枕。客爾臥有。此旅人何怜。

石竹之。其花爾毛我。朝旦。手取持而。不戀日將無。
撫子の、その花にもが、朝なさな、手に取り持ちて、戀ひぬ日なけむ。

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

一日爾波。千重浪敷爾。雖念。奈何其玉之。手二卷難寸。
一日には、千重浪しきに、思へども、なぞその玉の、手に卷き難き。

大伴坂上郎女橘歌一首

橘乎。屋前爾殖生。立而居而。後雖悔。驗將有八方。
橘を、宿に植ゑ生ほせ。立ちて居て、後に悔ゆとも、驗あらめやも。

和歌一首

吾妹兒之。屋前之橘。甚近。殖而師故二。不成者不止。
我妹子が、宿の橘、いと近く、植ゑてし故に、ならずはやまじ。

市原王歌一首

朝なさな—朝な〳〵

千重浪しきに—しきには頻に、千重波の打ち寄する如く頻に
その玉の—上に浪のことをいひし縁にて女を海にかづき取る玉によす

生ほせ—命令の格也
後に—あだし男に手折られて後に

神の社―男の前より堅く約したる女に喩ふ

待つ鹿に―粟を待ち食む鹿の如くに頻に通はんものを、古義「しゝ待ちに」と訓じ粟を食みに來る猪鹿を待窺ひての義とす

社しとむるを―社は神、とむるは止り守る、一説本文「烏」は「戸母」の誤にて「やしろしるとも」又「留烏」は「有侶」の誤にて「ありとも」

我が―一説「我は」

とめたる―一説「つきたる」

春日里爾―「爾」古本「之」とある方宜し

植子水葱―水葱はみづあふひの類、古植ゑ作りて食とせり、その葉の細きを小なぎといふ

千磐破。神之社四。無有世伐。春日之野邊。粟種益乎。
千早振、神の社し、無かりせば、春日の野邊に、粟蒔かましを。

佐伯宿禰赤麻呂更贈歌一首

春日野爾。粟種有世伐。待鹿爾。繼而行益乎。社師留烏。
春日野に、粟蒔けりせば、待つ鹿に、繼ぎて行かましを、社しとむるを。

娘子復報歌一首

吾祭。神者不有。丈夫爾。認有神曾。好應祀。
我が祭る、神にはあらず、丈夫に、とめたる神ぞ、よく祭るべき。

大伴宿禰駿河麻呂娉二同坂上家之二孃一歌一首

春霞。春日里爾。殖子水葱。苗有跡云師。柄者指爾家牟。
「春霞」春日の里の、植子水葱、苗なりといひし、枝は差しにけむ。

大伴宿禰家持贈二同坂上家之大孃一歌一首

梅の花云々―心變りがしたといふは我が契りたる女ならで他の女の事なるべし

山守―他に約したる女に喩ふ　ありける知らに―ありけるを知らずに　結のはぢしつ―しめ結びしはぢをかきたり

蓋しありとも―實際はあるにあらねど、よしあるとするも

朝にけに―朝に日に　如何にしてかも―いかにせば

梅花。開而落去登。人者雖云。吾標結之。枝將有八方。

梅の花、咲きて散りぬと、人はいへど、我が標結ひし、枝ならめやも。

大伴坂上郎女宴ニ親族一之日吟歌一首

山守之。有家留不知爾。其山爾。標結立而。結之辱爲都。

山守の、ありける知らに、その山に、標結ひ立てて、結のはぢしつ。

大伴宿禰駿河麻呂即和歌一首

山主者。蓋雖有。吾妹子之。將結標乎。人將解八方。

山守は、蓋しありとも、我妹子が、結ひけむ標を、人解かめやも。

大伴宿禰家持贈ニ同坂上家之大孃一歌一首

朝爾食爾。欲見。其玉乎。如何爲鴨。從手不離有牟。

朝にけに、見まく欲りする、その玉を、如何にしてかも、手ゆ離れざらむ。

娘子報ニ佐伯宿禰赤麻呂一贈歌一首

託馬野爾。生流紫。衣染。未服而。色爾出來。
つくま野に、生ふる紫、衣に染め、未だ著ずして、色に出にけり。

陸奧之。眞野乃草原。雖遠。面影爲而。所見云物乎。
陸奧の、眞野の茅原、遠けども、面影にして、見ゆとふものを。

奧山之。磐本菅乎。根深目手。結之情。忘不得裳。
奧山の、岩本菅を、根深めて、結びし心、忘れかねつも。

藤原朝臣八束梅歌二首

妹家爾。開有梅之。何時毛何時毛。將成時爾。事者將定。
妹が家に、咲きたる梅の、いつも〳〵、なりなむ時に、ことは定めむ。

妹家爾。開有花之。梅花。實之成名者。左右將爲。
妹が家に、咲きたる花の、梅の花、實にしなりなば、かもかくもせむ。

大伴宿禰駿河麻呂梅歌一首

つくま野—近江國坂田郡
眞野—行方郡
茅原—茅は、ち、かや、すげ、すゝき等の總稱
遠けども—遠けれども
面影にして—面影に、「して」は添辭
いつも〳〵—いつにても「ことは定めむ」に掛る
なりなむ時に云々—女の侍賃に諾けん時夫婦の契を定めんの義と古義にいふ
かもかくもせむ—ともかくも事定めせん

鳥總立。足柄山爾。船木伐。樹爾伐歸都。安多良船材乎。
「鳥總立て、」足柄山に、船木伐り、木に伐り行きつ。あたら船木を。

太宰大監大伴宿禰百代梅歌一首

烏珠之。其夜乃梅乎。手忘而。不折來家里。思之物乎。
「ぬば玉の」その夜の梅を、た忘れて、折らず來にけり。思ひしものを。

滿誓沙彌月歌一首

不所見十方。孰不戀有米。山之末爾。射狹夜歷月乎。外爾見而思香。
見えずとも、誰戀ひざらめ、山の端に、いさよふ月を、よそに見てしか。

金明軍歌一首

印結而。我定義之。住吉乃。濱乃小松者。後毛吾松。
標結ひて、我が定めてし、住吉の、濱の小松は、後も我が松。

笠女郎贈大伴宿禰家持歌三首

鳥總立て―船木伐りに掛る枕詞
足柄山―相模國
木に云々―他人が船木に伐り行きたり
あたら船木を―吾が物にせんとしたる女を他人に取られたるを惜むなるべし

ぬば玉の―枕詞
た忘れて―たは接頭語

不戀有米―一説「米」は「牟」の誤にて「戀ひざらむ」
よそに見てしか―よそながらも見まほしの意といふ、この歌は三四二一五と句の順序を變へて見るべし

我定義之―「義」は「義」の誤

にはー海上

ためばー巡れば

譬喩歌ータトヘウタと訓ず、概ね戀の喩と見るべし

納回ー「納」は「汭」の誤、此句古義には「うらみもとほる」と訓む、「うらみ」は浦のめぐりの意といへり

輕の池ー大和國高市郡

からに、寝の寝がてねば、瀧の上の、淺野の雉子、明けぬとし、立ちとよむらし
いざ子供、敢て漕ぎ出む。にはも靜けし。

反歌

島傳。敏馬乃埼乎。許藝廻者。日本戀久。鶴左波爾鳴。
島傳ひ、敏馬の崎を、漕ぎためば、大和戀しく、田鶴さはに鳴く。

右若宮年魚麻呂誦レ之。但未レ審二作者一。

譬喩歌

紀皇女御歌一首

輕池之。納回往轉留。鴨尙爾。玉藻乃於丹。獨宿名久二。
輕の池の、浦曲行きめぐる、鴨すらに、玉藻の上に、獨り寝なくに。

造筑紫觀世音寺別當沙彌滿誓歌一首

排ふる裝置、うつは作る

こゝもあらまし—今の時代までもながらへつらん、一說「こゝにもあらまし」と訓みて、此のあたりまでも流れ來てあらましの意とす

待從爾—一說、「待從」は「侍候」の誤にて「さもらふに」

わたつみ—海神
あやしきものか—あやしきものかな
居待月—枕詞
潮さゐ—潮の滿ち來る時浪の騷ぎ立つこと

右一首。此下無﹂詞諸本同。

古爾。梁打人乃。無有世伐。此間毛有益。柘之枝羽裳。

古に、梁うつ人の、なかりせば、こゝもあらまし、柘の枝はも。

右一首若宮年魚麻呂作。

羇旅歌一首并短歌

海若者、靈寸物香。淡路島。中爾立置而、白浪乎。伊與爾囘之。座待月。開乃門從者。暮去者。鹽乎令滿。明去者。鹽乎令干。鹽左爲能。浪乎恐美。淡路島。礒隱居而。何時鴨。此夜乃將明跡。待從爾。寢乃不勝宿者。瀧上乃。淺野之雉。開去歲。立動良之。率兒等。安倍而榜出牟。爾波母之頭氣師。

わたつみは、あやしきものか。淡路島、中に立て置きて、白浪を、伊豫に廻らし、(居待月、)明石の門ゆは、夕されば、潮を滿たしめ、明けされば、潮を干しむ。潮さゐの、浪を恐み、淡路島、礒隱り居て、何時しかも、此の夜の明けむと、待つ

にあらずとて
まして戀しみ—後にいよいよ戀しからんとて
なづみぞ云々—なづむは滯り澁る意、非常なる困難を侵して來たれり
よそのみ—よそにのみ
なづみけるかも—なづみ來れるかも
韓藍—鷄冠花（ケイトウ）なり、女に喩ふ
仙柘枝—古吉野の里に仙女ありしが同じ所に味稻（ウマシネ）といふ男の川に梁打ちて魚取るに、其仙女柘枝となりて流れ來て其の梁に止りぬ、男それを取りて置くに美しき女となりしをめでて相住みけりといふ傳説
霰降り—枕詞
かなわ—かねわ、わは感動詞、一說「和」は「手」の誤にて「かねて」
梁はうたずて—梁は木を打ち並べて水を塞ぎ魚を

反歌

筑波根矣。四十耳見乍。有金手。雪消乃道矣。名積來有鴨。
筑波嶺を、よそのみ見つゝ、ありかねて、雪解の道を、なづみけるかも。

山部宿禰赤人歌一首

吾屋戸爾。幹藍種生之。雖干。不懲而亦毛。將蒔登曾念。
我が宿に、韓藍蒔き生ほし、枯れぬれど、懲りずてまたも、蒔かむとぞ思ふ。

仙柘枝歌三首

霰零。吉志美我高嶺乎。險跡。草取可奈和。妹手乎取。
「霰降り」、きしみが嶽を、險しみと、草取りかなわ、妹が手を執る。

右一首或云。吉野人味稻與二柘枝仙媛一歌也。但見二柘枝傳一無レ有二此歌一。

此暮。柘之左枝乃。流來者。梁者不打而。不取香聞將有。
この夕、柘の小枝の、流れ來ば、梁はうたずて、取らずかもあらむ。

木綿疊み―木綿にて織れる布をたゝみて
さかしらなせそ―無理なことをすな、一說「心進むな」
風まもり―よき風を待ちて
去ませ―去にませ、注意して行き給へ
路―海路
筑波岳―常陸國筑波郡
雞が鳴く―枕詞
二神の云々―男體山女體山の二峰並び立てる故にいふ
なみたち―並び立ち
みがほし―見たき
國見―高き所に上りて國の形勢を望見すること
時じく時と―今は其の時

木綿疊み、手に取り持ちて、斯くだにも、我はこひなむ。君に逢はじかも。

右歌者。以天平五年冬十一月供祭大伴氏神之時。聊作此歌。故曰祭神歌。

筑紫娘子贈行旅歌一首

思家登。情進莫。風俟。好爲而伊麻世。荒其路。

家思ふと、さかしらなせそ、風まもり、よくして去ませ。荒き其の路。

登筑波岳丹比眞人國人作歌一首并短歌

雞之鳴。東國爾。高山者。左波爾雖有。明神之。貴山乃。儕立乃。見杲石山跡。神代從。人之言嗣。國見爲。筑羽乃山矣。冬木成。時敷時跡。不見而往者。益而戀石見。雪消爲。山道尙矣。名積叙吾來前二。

「雞が鳴く」、東の國に、高山は、さはにあれども、二神の、貴き山の、なみたちの、みがほし山と、神代より、人の言ひ嗣ぎ、國見する、筑波の山を、「冬籠、時じく時と、見ずていなば、ましてこひしみ、雪解せる、山路すらを、なづみぞ我が來し。

昔者之—「𨺉者」は「看」の誤にて、「昔見し」

白髮つく—枕詞

齋瓮を云々—神を祭る時に用ふる酒甕、古は地を掘りて据ゑ置きて醸せしまゝにて神に奉りければ掘り据ゑといふ

竹玉を云々—玉に緒を貫きて小竹につけたるを、やゝ後には玉の代りに竹のくだを用ひしにや、しゝじものにくは繁くにて竹玉の數多きをいふ

おすひ—襲ひの意にて古衣服の上に襲ね著たる服なるべし

こひなむ—こひのむ、請ひ祈る

昔者之。舊堤者。年深。池之瀲爾。水草生家里。

古の、舊き堤は、年深み、池の渚に、水草生ひにけり。

大伴坂上郎女祭レ神歌一首并短歌

久堅之。天原從。生來。神之命。奥山乃。賢木之枝爾。白香付。木緜取付而。齋戸乎。忌穿居。竹玉乎。繁爾貫垂。十六自物。膝折伏。手弱女之。押日取懸。如此谷裳。吾者祈奈牟。君爾不相可聞。

久方の、天の原より、生れ來たる、神の命、奥山の、榊が枝に、白髮つく、木綿とり附けて、齋瓮を、齋ひ掘り据ゑ、竹玉を、しゞに貫き垂り、しゝじもの、膝折り伏せ、手弱女の、おすひ取り懸け、斯くだにも、我はこひなむ、君に逢はじかも。

反歌

木綿疊。手取持而。如此谷母。吾波乞嘗。君爾不相鴨。

如く戀に涙の絶え間なきをいふ

笠の山—三笠山

著せそ—一說「著しめ」從ふべし

蜻蛉羽の云々—とんぼの羽の如く薄き衣の袖

玉匣—枕詞

奧に思ふ—深く祕めて愛する

朝にけに—朝に日に

石上乙麻呂朝臣歌一首

雨零者。將蓋跡念有。笠乃山。人爾莫令蓋。霑者漬跡裳。

雨降らば、著むと思へる、笠の山、人にな著せそ、濡れはひづとも。

湯原王芳野作歌一首

吉野爾有。夏實之河乃。川余杼爾。鴨曾鳴成。山影爾之氏。

吉野なる、なつみの川の、川淀に、鴨ぞ鳴くなる。山陰にして。

湯原王宴席歌二首

秋津羽之。袖振妹乎。珠匣。奧爾念乎。見賜吾君。

蜻蛉羽の、袖振る妹を、玉匣、奧に思ふを、見給へ我君。

青山之。嶺乃白雲。朝爾食爾。恒見杼毛。目頰四吾君。

青山の、嶺の白雲、朝にけに、常に見れども、珍し我君。

山部宿禰赤人詠二故太政大臣藤原家之山池一歌一首

おうの海—出雲國意宇郡の海か（本文「飫」の下に「字」を脱す）
佐保川—大和國
思ほゆらくに—思ほゆるに

春日を—枕詞
春日の山—大和國添上郡
高座の—枕詞
三笠の山—春日山の内
朝さらず—朝毎に
顏鳥—美しき鳥の稱とも雉の雄とも呼子鳥ともいふ
雲居—雲
いさよひ—物の滯るをいふより轉じて心の動きて定まらぬをいふ
暮るゝまで、明くるきはみ—共に「ことぐ」と訓じて可ならん
立ちて居て—立ちても居ても

鳴く鳥—顏鳥
止めば繼がるゝ—啼き止むかと思へば又啼きつぐ

おうの海の、河原の千鳥、汝が鳴けば、我が佐保川の、思ほゆらくに。

山部宿禰赤人登二春日野一作歌一首并短歌

春日乎。春日山乃。高座之。御笠乃山爾。朝不離。雲居多奈引。容鳥能。間無數鳴。雲居奈須。心射左欲比。其鳥乃。片戀耳爾。晝者毛。日之盡。夜者毛。夜之盡。立而居而。念曾吾爲流。不相兒故荷。

春日を、春日の山の、高座の、三笠の山に、朝さらず、雲居棚引き、顏鳥の、間無く屢鳴く、雲居なす、心いさよひ、其の鳥の、片戀のみに、晝はも、日の暮るるまで、夜はも、夜の明くるきはみ、立ちて居て、思ひぞ我が爲る、逢はぬ兒故に。

反歌

高桉之。三笠乃山爾。鳴鳥之。止者繼流。戀喪爲鴨。

高座の、三笠の山に、鳴く鳥の、止めば繼がるゝ、戀も爲るかも。

眞檝—左右に檝を立つるをいふ
しゞ貫き—はげしく漕ぐこと
漁するかも—實際漁するにあらず海邊或は海上を行く旅なれば斯くいふのみ、古義には「いそみするかも」と訓じ、磯めぐりする哉の意とせり

まけのまに〳〵云々—任命のまゝに何事も聽從するものぞ

とのぐもる—雲のたなびきて曇ること
戀ひつゝ居りき—寢ずして起き居たり
がてり—がてら

大船二。眞梶繁貫。大王之。御命恐。礒廻爲鴨。
大船に、眞檝しゞ貫き、大君の、御言畏み、漁するかも。

右今案石上朝臣乙麻呂任二越前國守一蓋此大夫歟。

和歌一首

物部乃。臣之壯士者。大王。任乃隨意。聞跡云物曾。
武士の、臣の男は、大君の、まけのまに〳〵、聞くとふものぞ。

右作者未レ審。但笠朝臣金村之歌中出也。

安倍廣庭卿歌一首

雨不零。殿雲流夜之。潤濕跡。戀乍居寸。君待香光。
雨降らで、とのぐもる夜の、濡れひづと、戀ひつゝ居りき。君待ちがてり。

出雲守門部王思レ京歌一首

飯海乃。河原之乳鳥。汝鳴者。吾佐保河乃。所念國。

角鹿津乘レ船時笠朝臣金村作歌一首并短歌

越海之。角鹿之濱從。大舟爾。眞梶貫下。勇魚取。海路爾出而。阿倍寸管。我榜行者。丈夫之。手結我浦爾。海未通女。鹽燒炎。草枕。客之有者。獨爲而。見知師無美。綿津海乃。手二卷四而有。珠手次。懸而之努櫃。日本島根乎。

越の海の、角鹿の濱ゆ、大舟に、眞檝貫き下し、「いさな取り」、海路に出でて、喘ぎつゝ、我が漕ぎ行けば、「丈夫の、手結が浦に、海人少女、鹽燒く煙、「草枕」旅にしあれば、獨して、見る驗無み、海神の、手に卷かしたる、「玉襷、懸けて偲びつ。大和島根を。

反歌

越海乃。手結之浦矣。客爲而。見者乏見。日本思櫃。

越の海の、手結の浦を、旅にして、見ればともしみ、大和偲びつ。

石上大夫歌一首

家戀ふらしも―家人の我を戀ふらし

角鹿―越前國敦賀

いさな取り―枕詞

丈夫の―枕詞

獨して云々―獨して見るは見るかひもなしの意

海神の云々―序

玉襷―枕詞

懸けて偲びつ―大和の人に見せばやと心に掛けて偲びたり

ともしみ―珍しく面白さに

潮干なば、玉藻刈りつめ。家の妹が、濱裹乞はば、何を示さむ。

秋風乃。寒朝開乎。佐農能岡。將超公爾。衣借益矣。

秋風の、寒き朝けを、佐野の岡、越えなむ君に、衣かさましを。

美沙居。石轉爾生。名乘藻乃。名者告志五余。親者知友。

鵙鳩居る、磯わに生ふる、神馬藻の、名は告らしてよ。親は知るとも。

或本歌曰。

美沙居。荒礒爾生。名乘藻乃。告名者告世。父母者知友。

笠朝臣金村鹽津山作歌二首

丈夫之。弓上振起。射都流矢乎。後將見人者。語繼金。

丈夫の、弓末振り立て、射つる矢を、後見む人は、語り繼ぐがね。

鹽津山。打越去者。我乘有。馬曾爪突。家戀良霜。

鹽津山、打ち越え行けば、我乘れる、馬ぞ躓く。家戀ふらしも。

刈りつめ—一説「刈りこめ」從者へ命令する也

朝け—夜明
佐野の岡—紀伊國か

神馬藻—海藻、ほだはらの一名
名は告らしてよ—名は告げてよ。本文「五」は「弖」の誤

鹽津山—近江國淺井郡

語り繼ぐがね—がねは接尾語、語り繼ぐやうに

馬ぞ躓く—家人の戀ふれば馬の躓くといふ諺ありしか

上古麻呂歌一首

今日可聞。明日香河乃。夕不離。川津鳴瀨之。淸有良武。

今日もかも、明日香の川の、夕さらず、蛙鳴く瀨の、淸くあるらむ。

或本歌發句云。明日香川今毛可毛等奈。

山部宿禰赤人歌六首

繩浦從。背向爾所見。奧島。榜回舟者。釣爲良下。

繩の浦ゆ、背向に見ゆる、沖つ島、漕ぎたむ舟は、釣せすらしも。

武庫浦手。榜轉小舟。粟島矣。背爾見乍。乏小舟。

武庫の浦を、漕ぎたむ小舟、粟島を、背向に見つゝ、ともしき小舟。

阿倍乃島。宇乃住石爾。依浪。間無比來。日本師所念。

阿倍の島、鵜の住む磯に、寄る浪の、間無く此の頃、大和し思ほゆ。

鹽干去者。玉藻苅藏。家妹之。濱褁乞者。何矣示。

天下を經營せし由あればかく頌へ申せり　志都—周防國か石見國か

夕さらず—夕毎に　清くあるらむ—一說「さやけかるらむ」

背向—背面　釣せ—敬語ならば「釣らし」と訓ずべしといふ說に從ふべし、「し」は強辭　漕ぎたむ—漕ぎめぐる　粟島—讃岐國か　ともし—羨し、粟島を後ろに見て讃に向ひ漕ぎ上る舟と見ての詠なるべし

阿倍の島—攝津國か

若湯座王歌一首

葦邊波。鶴之哭鳴而。湖風。寒吹良武。津乎能埼羽毛。

葦邊には、田鶴が音鳴きて、港風、寒く吹くらむ、つをの崎はも。

釋通觀歌一首

見吉野之。高城乃山爾。白雲者。行憚而。棚引所見。

三吉野の、高城の山に、白雲は、行き憚りて、たなびける見ゆ。

日置少老歌一首

縄乃浦爾。鹽燒火氣。夕去者。行過不得而。山爾棚引。

縄の浦に、鹽燒く煙、夕されば、行き過ぎかねて、山にたなびく。

生石村主眞人歌一首

大汝。少彦名乃。將座。志都乃石室者。幾代將經。

大己貴、少彦名の、座しけむ、志都の岩屋は、幾代經ぬらむ。

つをの崎―伊豫國、武藏國、近江國等諸說あり

縄の浦―攝津國か

大己貴云々―神代記、大己貴命、少彦名命と共に

夜光る、玉といふとも、酒飲みて、心を遣るに、豈及かめやも。

世間之。遊道爾。冷者。醉哭爲爾。可有良師。
世の中の、遊の道に、淋しくは、醉泣するに、ありぬべからし。

今代爾之。樂有者。來生者。蟲爾鳥爾毛。吾羽成奈武。
此の世にし、樂しくあらば、來む世には、蟲に鳥にも、我はなりなむ。

生者。遂毛死。物爾有者。今生在間者。樂乎有名。
生るれば、遂にも死ぬる、ものなれば、此の世なる間は、樂しくをあらな。

默然居而。賢良爲者。飲酒而。醉泣爲爾。尚不如來。
默し居て、賢するは、酒飲みて、醉泣するに、猶及かずけり。

沙彌滿誓歌一首

世間乎。何物爾將譬。旦開。榜去師船之。跡無如。
世の中を、何に譬へむ。朝開き、漕ぎにし船の、跡無きがごと。

冷者—一説「冷」は「怜」の誤にて「たぬしきは」と訓むべし、又、「冷」は「洽」にて「あまねきは」

生るれば—一説「生ける人」

樂しくをあらな—をは助辭、樂しく暮してあらんかな

及かずけり—及かざりけり

朝開き—朝港を出づること、此句以下拾遺集に「朝ぼらけこぎ行く舟の跡の白浪」と改め載せたり

漕ぎにし—漕ぎ去にし

七の賢き人—所謂竹林の七賢人、嵆康、阮籍、山濤、劉伶、阮咸、向秀、王戎

賢しと—一說「さかしみと」するし—しは助辭

極りて—此上もなく

なか〳〵に—なまなかに人とあらずは—人とあらんよりは

酒壺に—吳志、「鄭泉臨卒時語同輩曰、必葬我陶家之後、化而爲土、幸見取爲酒壺、實獲我心矣」

賢をすと云々—賢人ぶりて酒飲まぬ人を罵れるなり

價無き云々—非常に高價なる寶、法華經に所謂無價寶珠

古の、七の賢き、人どもも、欲りするものは、酒にしあるらし。

賢跡。物言從者。酒飲而。醉哭爲師。益有良之。

賢しと、物言ふよりは、酒飲みて、醉泣するし、優りたるらし。

將言爲便。將爲便不知。極。貴物者。酒西有良之。

言はむ術、せむ術知らに、極りて、貴きものは、酒にしあるらし。

中中二。人跡不有者。酒壺二。成而師鴨。酒二染嘗。

なか〳〵に、人とあらずは、酒壺に、なりにてしがも、酒に染みなむ。

痛醜。賢良乎爲跡。酒不飲。人乎熟見者。猿二鴨似。

あなみにく、賢をすと、酒飲まぬ、人をよく見れば、猿にかも似る。

價無。寶跡言十方。一坏乃。濁酒爾。豈益目八。

價無き、寶といふとも、一坏の、濁れる酒に、豈優らめや。

夜光。玉跡言十方。酒飲而。情乎遣爾。豈若目八目。一云八方

不知火の―枕詞
筑紫の綿―昔筑紫より每年綿を貢せり、その多く積み重ねたるを見てよめるなるべし
其の彼の母―其の彼は子をいひ、母は即ち我が妻
大伴卿―旅人
驗無き云々―かひなきもの思ひをせんよりは
一坏の―一杯の
聖人―魏略「太祖禁酒而人竊飲、故難言酒、以白酒爲賢者、淸酒爲聖人」

沙彌滿誓詠レ綿歌一首

白縫。筑紫乃綿者。身著而。未者伎禰杼。暖所見。
不知火の、筑紫の綿は、身に著けて、未だは著ねど、暖に見ゆ。

山上臣憶良罷レ宴歌一首

憶良等者。今者將罷。子將哭。其彼母毛。吾乎將待曾。
憶良らは、今は退らむ。子泣くらむ、其の彼の母も、我を待つらむぞ。

太宰帥大伴卿讃レ酒歌十三首

驗無。物乎不念者。一坏乃。濁酒乎。可飲有良師。
驗無き、物を思はずは、一坏の、濁れる酒を、飲むべかるらし。
酒名乎。聖跡負師。古昔。大聖之。言乃宜左。
酒の名を、聖人と負ほせし、古の、大聖人の、言の宜しさ。
古之。七賢。人等毛。欲爲物者。酒西有良師。

藤浪―藤花
君―太宰帥旅人をさす

大伴卿―旅人

をちめやも―再び若盛りに歸る事あらんや
ほと〳〵―ほとんど、大方

あらぬか―あれかし
象の小川―吉野

淺茅原―枕詞
つばら〳〵に―樣々と事細かに

香具山―大伴卿の故郷はこの附近にありしなるべし
忘れぬがため―いかにもして忘れんが爲に
淵有毛―一說「有」の下「也」を脱せるか、「淵にあれやも」又「毛」は「乞」の誤にて「淵に有りこそ」
夢のわだ―わだは淵、象川の附近か

藤浪の、花は盛に、なりにけり。奈良の都を、思ほすや君。

帥大伴卿歌五首

吾盛。復將變八方。殆。寧樂京師乎。不見歟將成。
我が盛り、またをちめやも。ほと〳〵に、奈良の都を、見ずかなりなむ。

吾命毛。常有奴可。昔見之。象小河乎。行見爲。
我が命も、常にあらぬか、昔見し、象の小川を、行きて見むため。

淺茅原。曲曲二。物念者。故郷之。所念可聞。
（淺茅原）つばら〳〵に、物思へば、古りにし里の、思ほゆるかも。

萱草。吾紐二附。香具山乃。故去之里乎。不忘之爲。
忘草、我が紐に附く。香具山の、古りにし里を、忘れぬがため。

吾行者。久者不有。夢乃和太。湍者不成而。淵有毛。
我が行きは、久にはあらじ。夢のわだ、瀬とはならずて、淵にあるかも。

見渡者。明石之浦爾。燒火乃。保爾曾出流。妹爾戀久。
見渡せば、明石の浦に、燈す火の、穂にぞ出でぬる。妹に戀ふらく。

或娘子等賜ニ裹乾鰒一戲請ニ通觀僧之咒願一時通觀作歌一首

海若之。奧爾持行而。雖放。宇禮牟曾此之。將死還生。
海の、沖に持ち行きて、放つとも、うれむぞ是が、甦らまし。

太宰少貳小野老朝臣歌一首

青丹吉。寧樂乃京師者。咲花乃。薫如。今盛有。
青丹よし、奈良の都は、咲く花の、匂ふが如く、今盛なり。

防人司佑大伴四繩歌二首

安見知之。吾王乃。敷座在。國中者。京師所念。
やすみしょ、我が大君の、しき座せる、國の中には、都思ほゆ。

藤浪之。花者盛爾。成來。平城京乎。御念八君。

見渡せば云々―海人の漁火を見てその景色をやがて序とす
穂―思の外にあらはるゝこと
戀ふらく―戀ふる事の
うれむぞ―いかんぞ
青丹よし―枕詞
防人―太宰府の部屬
中には―「者」は「在」の誤にて、「中なる」と訓ずべしといへる古義の説然るべからん

五百枝云々―繁茂せる、しゞは繁くの意
栂の木の―枕詞
玉葛―枕詞
常に―本文の文字通りに「止まず」と訓じて可ならん
みがほし―見まほし
さわぐ―蛙の鳴きさわぐをいふ
古思へば―昔の盛りなりし樣を思ひ出づれば
明日香川云々―ところの樣をやがて序とせり
戀―古京を慕ふ情

三諸乃。神名備山爾。五百枝刺。繁生有。都賀乃樹乃。彌繼嗣爾。玉葛。絶事無。在管裳。不止將通。明日香能。舊京師者。山高三。河登保志呂之。春日者。山四見容之。秋夜者。河四清之。旦雲二。多頭羽亂。夕霧丹。河津者騷。毎見。哭耳所泣。古思者。

三諸の、神名備山に、五百枝差し、しゞに生ひたる、栂の木の、彌繼々に、玉葛、絶ゆる事なく、在りつゝも、常に通はむ。明日香の、古き京は、山高み、河遠白し。春の日は、山しみがほし。秋の夜は、河しさやけし。朝雲に、田鶴は亂れ、夕霧に、蛙はさわぐ。見る毎に、音のみし泣かゆ。古思へば。

反　歌

明日香河。川余藤不去。立霧乃。念應過。孤悲爾不有國。

明日香川、かは淀去らず、立つ霧の、思ひ過ぐべき、戀にあらなくに。

門部王在二難波一見二漁火燭光一作歌一首

皇祖神—皇統の神、又前の天皇をもいふ、舊訓「すめろぎ」

こゞし—嶮し

いさには—伊豫國溫泉郡に伊佐爾波神社あり、そこなるべし

歌偲び云々—「歌思ひ辭思はしゝ」にて、上宮太子の歌文を思ひめぐらせしことなるべし

おみの木—樅

遠き代に—上に昔をいひ、中に今をいひ、こゝに末の世をかけていへり

饒田津—伊豫國、本文「飽」は「饒」の誤か、或は飽田津といふ地もありといふ

年の知らなく—年暦の數へきれぬ程舊くなりとの意

皇祖神之。神乃御言乃。敷座。國之盡。湯者霜。左波爾雖在。島山之。宜國跡。極此疑。伊豫能高嶺乃。射狹庭乃。崗爾立之而。歌思。辭思爲師。三湯之上乃。樹村乎見者。臣木毛。生繼爾家里。鳴鳥之。音毛不更。遐代爾。神左備將往。行幸處。

皇祖神の、神の命の、しき座す、國の盡、湯はしも、さはにあれども、島山の、宜しき國と、こゞしかも、伊豫の高嶺の、いさにはの、岡に立たして、歌偲び、辭偲びせし、み湯の上の、樹群を見れば、おみの木も、生ひ繼ぎにけり。鳴く鳥の、聲も變らず、遠き代に、神さび行かむ。行幸處。

反歌

百式紀乃。大宮人之。飽田津爾。船乘將爲。年之不知久。

百磯城の、大宮人の、饒田津に、船乘しけむ、年の知らなく。

登二神岳一山部宿禰赤人作歌一首并短歌

座す神かも―神は富士山
せの海―鳴澤のこと、池のことをも海といふ
たぎちぞ―たぎちは水の激して流るゝこと、本文「富」の下に「知」を脱せしか
日本の―枕詞
見れど云々―見てもく厭くことなき哉

富士の嶺に云々―當時の諺によれるにや

ものを―「を」は「よ」に似たる感動詞

る火を、雪以て消ち、降る雪を、火以て消ちつゝ、言ひも得ず、名附けも知らに、靈しくも、座す神かも。せの海と、名づけてあるも、其の山の、つゝめる海ぞ。富士川と、人の渡るも、其の山の、水のたぎちぞ。「日本の」大和の國の、鎭とも、座す神かも。寶とも、なれる山かも。駿河なる、富士の高嶺は、見れど飽かぬかも。

反歌

不盡嶺爾、零置雪者。六月。十五日消者。其夜布里家利。
富士の嶺に、降り置ける雪は、六月の、十五日に消ぬれば、其の夜降りけり。
布士能嶺乎。高見恐見。天雲毛。伊去羽計。田菜引物緒。
富士の嶺を、高み畏み、天雲も、い行き憚り、棚引くものを。

右一首。高橋連蟲麻呂之歌中出焉。以レ類載レ此。

山部宿禰赤人至二伊豫溫泉一作歌一首幷短歌

隱ろひ―隱れの延音
い行き云々―いは接頭語、憚りは雲も此の山を越え難くて滯るをいふ
時じくぞ―時の見境もなく、年百年中
田子の浦ゆ―田子の浦より更に展望よき地點に
なまよみの―枕詞
打ち寄する―枕詞
こち〴〵―彼方此方
み中―眞中

き憚り、時じくぞ、雪は降りける。語り繼ぎ、言ひ繼ぎ行かむ。富士の高嶺は。

反歌

田兒之浦從。打出而見者。眞白衣。不盡能高嶺爾。雪者零家留。
田子の浦ゆ、打ち出て見れば、眞白にぞ、富士の高嶺に、雪は降りける。

詠二不盡山一歌一首幷短歌

奈麻余美乃。甲斐乃國。打緣流。駿河能國與。己知其智乃。國之三中從。出立有。不盡能高嶺者。天雲毛。伊去波伐加利。飛鳥母。翔毛不上。燎火乎。雪以滅。落雪乎。火用消通都。言不得。名不知。靈母。座神香聞。石花海跡。名付而有毛。彼山之。堤有海曾。不盡河跡。人乃渡毛。其山之。水乃當烏。日本之。山跡國乃。鎭十方。座神可聞。寶十方。成有山可聞。駿河有。不盡能高峰者。雖見不飽香聞。
なまよみの、甲斐の國、打ち寄する、駿河の國と、こち〴〵の、國のみ中ゆ、出で立てる、富士の高嶺は、天雲も、い行き憚り、飛ぶ鳥も、とびも上らず、燃ゆ

山からし―からは接尾語、の故に、に因ての意、しは助詞
行幸の宮―離宮
伊去波代加利―「代」は「伐」の誤
ふりさけ云々―ふりは接頭語、遠く仰ぎ見ること

萬代爾。不改將有。行幸之宮。
み芳野の、芳野の宮は、山からし、貴かるらし。川からし、さやけかるらし。天地と、長く久しく、萬代に、變らずあらむ、行幸の宮。

反歌

昔見之。象乃小河乎。今見者。彌淸。成爾來鴨。
昔見し、象の小川を、今見れば、いよゝさやけく、成りにけるかも。

山部宿禰赤人望二不盡山一歌一首幷短歌

天地之。分時從。神左備而。高貴寸。駿河有。布士能高嶺乎。天原。振放見者。度日之。陰毛隱比。照月乃。光毛不見。白雲母。伊去波代加利。時自久曾。雪者落家留。語告。言繼將往。不盡能高嶺者。
天地の、分れし時ゆ、神さびて、高く貴き、駿河なる、富士の高嶺を、天の原、ふりさけ見れば、渡る日の、影も隱ろひ、照る月の、光も見えず、白雲も、い行

梓弓、引き豐國の、鏡山、見ずひさならば、戀しけむかも。

式部卿藤原宇合卿被レ使レ改ニ造難波堵一之時作歌一首

昔者社。難波居中跡。所言奚米。今者京引都□備仁鷄里。

昔こそ、難波田舍と、言はれけめ。今は都と、備りにけり。

土理宣令歌一首

見吉野之。瀧乃白浪。雖不知。語之告者。古所念。

三吉野の、瀧の白浪、知らねども、語りし繼げば、昔思ほゆ。

波多朝臣少足歌一首

小浪。礒越道有。能登湍河。音之清左。多藝通瀨每爾。

漣瀰、礒巨勢路なる、のとせ川、音のさやけさ、瀧つ瀨每に。

暮春之月幸ニ芳野離宮一時中納言大伴卿奉レ勅作歌一首幷短歌未レ逕ニ奏上一歌

見吉野之。芳野乃宮者。山可良志。貴有師。永可良思。清有師。天地與。長久。

梓弓―枕詞
引き豐國の―引きたわむを引きとよと通はしていへり
見ずひさならば―久しく見ざらば
戀しけむ―戀しからん
難波堵―難波宮、堵は都に通じて書けるか
備りにけり―一說「都びにけり」
漣瀰―礒越すといひかけたり
巨勢路―大和國高市郡
大伴卿―旅人
永可良思―「永」は「水」の誤

旗薄―枕詞

久米の稚子―久米部の稚子、一説に弘計王又の名を來目稚子といひ播磨國縮見山の石室に暫しおはしけんも知れぬ故その話の紀伊にも傳はり居りしにや

常磐なる―一説「常磐なす」

岩屋戸―戸は門

宇倍吾云々―「吾」は誤入

東の云々―市は東西にあり、古都大路に菓樹を植ゑしと見ゆ

木垂る―木の老いて枝の垂るゝをいふ

博通法師往二紀伊國一見二三穗石室一作歌三首

皮爲酢寸。久米能若子我。伊座家留。〔一云「家牟」〕三穗乃石室者。雖見不飽鴨。〔一云「安禮爾家留可毛」〕

(旗薄)久米の稚子が、座しける、三穗の岩屋は、見れどあかぬかも。

常磐成。石室者今毛。安里家禮騰。住家類人曾。常無里家留。

常磐なる、岩屋は今も、ありけれど、住みける人ぞ、常なかりける。

石室戸爾。立在松樹。汝乎見者。昔人乎。相見如之。

岩屋戸に、立てる松の木、汝を見れば、昔の人を、逢ひ見るごとし。

門部王詠二東市之樹一作歌一首

東。市之殖木乃。木足左右。不相久美。宇倍吾戀爾家利。

東の、市の植木の、木垂るまで、逢はず久しみ、うべ戀ひにけり。

桉作村主益人從二豐前國一上京時作歌一首

梓弓。引豐國之。鏡山。不見久有者。戀敷牟鴨。

名ぐはしき—枕詞
大和島根—大和國

遠の御門—其の國々の府、西國にては太宰府をさす
あり通ふ—人々の昔より行き通ふをいふ
島門—讃岐の水門をいふか、卷二同じ人の讃岐の歌を見よ

見せつゝもとな—見せてよしもなき物思をさする事かな

花にもが—花にてあれかし

柿本朝臣人麻呂下二筑紫國一時海路作歌二首

名細寸。稻見乃海之。奧津浪。千重爾隱奴。山跡島根者。
名ぐはしき、稻見の海の、沖つ浪、千重に隱りぬ。大和島根は。

大王之。遠乃朝庭跡。蟻通。島門乎見者。神代之所念。
大君の、遠の御門と、あり通ふ、島門を見れば、神代し思ほゆ。

高市連黑人近江舊都歌一首

如是故爾。不見跡云物乎。樂波乃。舊都乎。令見乍本名。
かく故に、見じといふものを、細波の、古き都を、見せつゝもとな。

右謌。或本曰二小辨作一也。未レ審二此小辨者一也。

幸二伊勢國一之時安貴王作歌一首

伊勢海之。奧津白浪。花爾欲得。裹而妹之。家裹爲。
伊勢の海の、沖つ白浪、花にもが。包みて妹が、家裹にせむ。

廬前—紀伊國
すみだ川—紀伊國にあり

菅—山菅、麥門冬
凌ぎ—繁き葉のあはひまで降り入りたるをいふ
雨な降りこそ—こそは願ふ詞、一説本文「行」は「所」の誤にて「そね」と訓むべし

佐保—大和國
奈良の手向に—奈良坂の上に旅の手向する所ありしなるべし

こゞしき—凝りかさなれる、險岨なる
色に出でめやも—豈色に出さんや

兒等—妹をさすなるべし
夜渡る月云々—大空を渡る月の入らぬ内に妹が家に到らん事六ケ敷からんと心のせくを歌へる也

右或云。弁基者春日藏首老之法師名也。

大納言大伴卿歌一首

奥山之。菅葉凌。零雪乃。消者將惜。雨莫零行年。
奥山の、菅の葉凌ぎ、降る雪の、消なば惜しけむ。雨な降りこそ。

長屋王駐二馬寧樂山一作歌二首

佐保過而。寧樂乃手祭爾。置幣者。妹乎目不離。相見染跡衣。
佐保過ぎて、奈良の手向に、おく幣は、妹を目離れず、相見しめとぞ。

磐金之。凝敷山乎。超不勝而。哭者泣友。色爾將出八方。
岩が根の、こゞしき山を、越えかねて、音には泣くとも、色に出でめやも。

中納言安倍廣庭卿歌一首

兒等之家道。差間遠烏。野干玉乃。夜渡月爾。競敢六鴨。
兒等が家路、やゝ間遠きを、ぬば玉の、夜渡る月に、競ひあへむかも。

風乎疾。奥津白浪。高有之。海人釣船。濱眷奴。
風をいたみ、沖つ白浪、高からし、海人の釣船、濱に歸りぬ。

清江乃。木笑松原。遠神。我王之。幸行處。
住吉の、岸の松原、遠つ神、我が大君の、いでましどころ。

田口益人大夫任二上野國司一時至二駿河淨見埼一作歌二首

廬原乃。淸見之埼乃。見穗乃浦乃。寛見乍。物念毛奈信。
廬原の、淸見が崎の、見保の浦の、ゆたけきみつゝ、物思も無し。

晝見騰。不飽田兒浦。大王之。命恐。夜見鶴鴨。
晝見れど、飽かぬ田子の浦、大君の、御言畏み、夜見つるかも。

弁基歌一首

亦打山。暮越行而。廬前乃。角太河原爾。獨可毛將宿。
まつち山、夕越え行きて、廬前の、すみだ川原に、一人かも寝む。

れる袋の如きもの、藻貝などを入る

遠つ神—枕詞

木笑松原—「木」の下に「志」を脱せしか

廬原—駿河國廬原郡
ゆたけき—ひろやかに眺よきさま

夜見つる—公務にて夜道に此地を見たりと也

まつち山—大和に近き紀伊の山

白眞弓—やがて弓張月の意を含む
懸けたる—一說「懸けたり」
よけむ—よからん
椋橋—大和國十市郡
山を高みか—山の高き故にか
夜籠に—夜深くなりて
小田事—下に「主」を脫せるか
眞木—檜
しなふ—しなやかにうなだれる
偲ばずて—慕ふに堪へずして、故鄕の妹を慕ふなるべし
木の葉云々—木の葉も我が心を知りけん、しなびたれて有りといふ意
天探女—攝津國風土記「難波高津者天稚彥天降時、屬之神天探女乘磐舟而至于此、其磐舟所泊故號高津云々」
あせにけるかも—潮退きて淺くなりたる哉
三津—難波
くゞつ—藁にて編みつく

天原。振離見者。白眞弓。張而懸有。夜路者將吉。
天の原、ふりさけみれば、白眞弓、張りて懸けたる、夜路はよけむ。

椋橋乃。山乎高可。夜隱爾。出來月乃。光乏寸。
椋橋の、山を高みか、夜籠に、出で來る月の、光乏しき。

小田事勢能山歌一首

眞木葉乃。之奈布勢能山。之奴波受而。吾超去者。木葉知家武。
眞木の葉の、しなふ兄の山、偲ばずて、我が越え行けば、木の葉知りけむ。

角麻呂歌四首

久方乃。天之探女之。石船乃。泊師高津者。淺爾家留香裳。
久方の、天探女が、磐船の、はてし高津は、あせにけるかも。

鹽干乃。三津之海女乃。久具都持。玉藻將苅。率行見。
潮干の、三津の海女の、くゞつ持ち、玉藻刈るらむ、いざ行きて見む。

よろしなへ—心に叶ひてあかぬ事なき意
我がせの君—笠麻呂
家—奈良の都の己が家
命し—一說「命の」と訓ずべし

一云。可倍波伊香爾安良牟。

春日藏首老卽和歌一首

宜奈倍。吾背乃君之。負來爾之。此勢能山乎。妹者不喚。
よろしなへ、我がせの君が、負ひ來にし、此の兄の山を、妹とは呼ばじ。

幸二志賀一時石上卿作歌一首　名闕

此間爲而。家八方何處。白雲乃。棚引山乎。超而來二家里。
此處にして、家やも何處、白雲の、棚引く山を、越えて來にけり。

穗積朝臣老歌一首

吾命之。眞幸有者。亦毛將見。志賀乃大津爾。緣流白浪。
我が命し、眞幸くあらば、復も見む。志賀の大津に、寄する白浪。

右今案不レ審二幸行年月一。

間人宿禰大浦初月歌二首

君こそ云々—君こそは旅の往き來に見給ふらめ、我は女の身にてまた見んこと難ければよく見て行かんといふ意

つぬさはふ—枕詞、
磐余—大和國十市郡
更けにつゝ—ふけ去にたるに

榎津—攝津國住吉郡の？
武庫—攝津國

燒津—駿河國益頭郡
阿倍—駿河國阿倍郡府中
兒等はも—其美貌の目前にちらつきて忘れ難きをいふ也

栲領巾の—枕詞
兒の山—紀伊兒山
懸け—上なるは口に掛けていふ意、下なるは此山の名として附くる意

春日藏首老歌一首

角障經。石村毛不過。泊瀬山。何時毛將超。夜者深去通都。

つぬさはふ、磐余も過ぎず、泊瀬山、何時かも越えむ。夜は更けにつゝ。

高市連黒人歌一首

墨吉乃。得名津爾立而。見渡者。六兒乃泊從。出流船人。

住吉の、榎津に立ちて、見渡せば、武庫の泊ゆ、出づる船人。

春日藏首老歌一首

燒津邊。吾去鹿齒。駿河奈流。阿倍乃市道爾。相之兒等羽裳。

燒津邊に、我が行きしかば、駿河なる、阿倍の市路に、逢ひし兒等はも。

丹比眞人笠麻呂往二紀伊國一超二勢能山一時作歌一首

栲領巾乃。懸卷欲寸。妹名乎。此勢能山爾。懸者奈何將有。

栲領巾の、懸けまくほしき、妹が名を、此の兒の山に、懸けば如何にあらむ。

石川少郎—少は女の誤か
志珂—筑前國糟屋郡資珂島
海布—食用海藻の總稱、本文「軍」は「葷」の誤かといふ
櫛笥—櫛箱
古今案云々—略解に「何の據もなし後人書加へしか」
猪名野—攝津國河邊郡
名次山—武庫郡
つのの松原—武庫郡か、巻一「綱の浦」、巻十七「都努の松原」
しめさむ—見しめん
子供—旅に伴ひ行ける人人
白菅—地名なるべし
眞野—攝津國八田部郡

石川少郎歌一首

然之海人者。軍布苅鹽燒。無暇。髪梳乃小櫛。取毛不見久爾。
志珂の海人は、海布刈り鹽燒き、暇なみ、櫛笥の小櫛、取りも見なくに。

右今案。石川朝臣君子號曰二少郎子一也。

高市連黑人歌二首

吾妹兒二。猪名野者令見都。名次山。角松原。何時可將示。
我妹子に、猪名野は見せつ。名次山、つのの松原、何時かしめさむ。

去來兒等。倭部早。白菅乃。眞野乃榛原。手折而將歸。
いざ子供、大和へ早く、（白菅の、）眞野の榛原、手折りて行かむ。

黑人妻答歌一首

白菅乃。眞野之榛原。往左來左。君社見良目。眞野之榛原。
白菅の、眞野の榛原、往くさ來さ、君こそ見らめ。眞野の榛原。

磯の崎、漕ぎたみ行けば、近江のみ、やその港に、田鶴さはに鳴く。

未詳。

吾船者。枚乃湖爾。榜將泊。奥部莫避。左夜深去來。

我が船は、比良の港に、漕ぎはてむ。沖へなさかり。小夜更けにけり。

何處。吾將宿。高島乃。勝野原爾。此日暮去者。

何處にか、我は宿らむ。高島の、勝野の原に、此の日暮れなば。

妹母我母。一有加母。三河有。二見自道。別不勝鶴。

妹も我も、一つなれかも、三河なる、二見の道ゆ、別れかねつる。

一本云。

水河乃。二見之自道。別者。吾勢毛吾毛。獨可毛將去。

速來而母。見手益物乎。山背。高槻村。散去奚留鴨。

疾く來ても、見てましものを、山城の、高槻の村、散りにけるかも。

漕ぎたみ―漕ぎめぐり
やその港―數々の港
未詳―此の二字誤りて入れたるものといふ
比良―近江國志賀郡
はてむ―泊らん
沖へなさかり―沖の方へ離れ行く勿れ
勝野―近江國高島郡三尾鄕勝野の原か
一つなれかも―一體のものなればかも
疾く―一說「はや」と訓ず
高槻の村―の黃葉

は藤原

屋部坂―高市郡か

來來―「坐來」の誤にて、「ましけり」と訓ずべしと古義にいふ

山もと―本文一說、「やました」と訓みて赤の枕詞なり

朱のそほ船―朱塗の船、官船の都へ歸るならんといとゞ都戀しく思はるの意なるべし

作良田―尾張國愛知郡に作良鄕あり、その田、愛知は吾湯市(アユチ)ともいへり

四極山―攝津國

棚無小舟―船棚のなき小舟

右今案從二明日香一遷二藤原宮一之後作二此歌一歟。

阿倍女郎屋部坂歌一首

人不見者。我袖用手。將隱乎。所燒乍可將有。不服而來來。

人見ずば、我が袖もちて、隱さむを、燒けつゝかあらむ、著ずて來にけり。

高市連黑人羇旅歌八首

客爲而。物戀敷爾。山下。赤乃曾保船。奧榜所見。

旅にして、物戀しきに、山もとの、朱のそほ船、沖に漕ぐ見ゆ。

櫻田部。鶴鳴渡。年魚市方。鹽干二家良進。鶴鳴渡。

作良田へ、田鶴鳴きわたる、あゆち潟、潮干にけらし、田鶴鳴きわたる。

四極山。打越見者。笠縫之。島榜隱。棚無小舟。

四極山、打ち越え見れば、笠縫の、島漕ぎかくる、棚無小舟。

礒前。榜手回行者。近江海。八十之湊爾。鵠佐波二鳴。

いさよふ―川波の（網代木にあたりて）暫くよどむをいふ
みわが崎、佐野―紀伊國牟婁郡
渡―渡し場
夕浪千鳥―夕浪に立ち騷ぐ千鳥
しぬに―しをれて
こぬれ―梢
さつを―獵師
島待―「島」は「君」の誤
我がせこ―親しき皇子達などをさす
明日香―舊き都、今の都

長忌寸奥麻呂歌一首

苦毛。零來雨可。神之埼。狹野乃渡爾。家裳不有國。
苦しくも、降り來る雨か、みわが崎、佐野の渡に、家もあらなくに。

柿本朝臣人麻呂歌一首

淡海乃海。夕浪千鳥。汝鳴者。情毛思努爾。古所念。
近江の海、夕浪千鳥、汝が鳴けば、心もしぬに、古思ほゆ。

志貴皇子御歌一首

牟佐佐婢波。木末求跡。足日木乃。山能佐都雄爾。相爾來鳴。
鼯鼠は、こぬれ求むと、足引の、山のさつをに、逢ひにけるかも。

長屋王故鄕歌一首

吾背子我。古家乃里之。明日香庭。乳鳥鳴成。島待不得而。
我がせこが、古家の里の、明日香には、千鳥鳴くなり。君待ちかねて。

往來乍益。及常世。
やすみしゝ、我が大君、高光る、日の皇子、しき座す、大殿の上に、久方の、天傳ひ來る、雪じ物、往き來つゝませ、萬代までに。

反歌一首

矢釣山。木立不見。落亂。雪驪。朝樂毛。
矢釣山、木立も見えず、降り亂る、雪はたらなる、朝樂しも。

從近江國上來時刑部垂麻呂作歌一首

馬莫疾。打莫行。氣並而。見氏毛和我歸。志賀爾安良七國。
馬ないたく、打ちてな行きそ。けならべて、見ても我が行く、志賀にあらなくに。

柿本朝臣人麻呂從近江國上來時至宇治河邊作歌一首

物乃部能。八十氏河乃。阿白木爾。不知代經浪乃。去邊白不母。
武士の、やそ宇治川の、網代木に、いさよふ波の、行方知らずも。

及常世—「常」は「萬」の誤か或は「座」の誤にて、行き通ひつゝいやしき座せか
日の皇子—新田部皇子
天傳ひ云々—空より降り來る雪の如く
雪驪—「驪」は「駁」の誤か、或は驪（競ひて）の誤か、古義には「驪」の誤、「樂」の下に「吉」を脫すとして、「雪にさわぎて參らくよしも」と訓ぜり
矢釣山—飛鳥、この近くに皇子の山莊ありしなるべし
はたらなる—まばらなる、まだらなる
安良七國—「七」は「匕」の誤
けならべて—日並べて、日數を重ねて
武士の—枕詞
網代木—魚をとる網代を懸くるために立つる杙

あらくも―あるも
かづき―水をくゞること
鶚―小鴨
何時の間も―何時の間にかも
神さびけるか―かは疑なり
鉾杉云々―鉾杉は杉の若木、すべて木といふべきを木のもとといふこと集中に多し

反歌二首

人不榜。有雲知之。潛爲。鴦與高部共。船上住。
人漕がず、あらくも著し。かづきする、鴛鴦と鶚と、船の上に住む。

何時間毛。神左備祁留鹿。香山之。鉾椙之本爾。薜生左右二。
何時の間も、神さびけるか、香具山の、鉾杉がもとに、苔むすまでに。

或本歌云。
天降就。神乃香山。打靡。春去來者。櫻花。木晩茂。松風丹。池浪颸。邊津返者。阿遲村動。奧邊者。鴨妻喚。百式乃。大宮人乃。去出。榜來舟者。竿梶母。無而佐夫之毛。榜與雖思。

右今案遷二都寧樂一之後。怜レ舊作二此歌一歟。

柿本朝臣人麻呂獻二新田部皇子一歌一首并短歌

八隅知之。吾大王。高輝。日之皇子。茂座。大殿於。久方。天傳來。白雪仕物。

（天ざかる）鄙の長路ゆ、戀ひ來れば、明石の戸より、倭島見ゆ。

一本云。家門當所見。

飼飯海乃。庭好有之。苅薦乃。亂出所見。海人釣船。

氣比の海の、にはよくあらし、（刈菰の）亂れ出づる見ゆ。海人の釣船。

一本云。武庫乃海。舶爾波有之。伊射里爲流。海部乃釣船。浪上從所見。

鴨君足人香具山歌一首幷短歌

天降付。天之芳來山。霞立。春爾至婆。松風爾。池浪立而。櫻花。木晩茂爾。奥邊波。鴨妻喚。邊津方爾。味村左和伎。百磯城之。大宮人乃。退出而。遊船爾波。梶棹毛。無而不樂毛。己具人奈四二。

（あもりつく）天の香具山、霞立つ、春に至れば、松風に、池波立ちて、櫻花、木の暮しげに、沖邊には、鴨め呼ばひ、邊つ方に、味鴨群騷ぎ、百磯城の、大宮人の、退り出て、遊ぶ船には、權棹も、無くて寂しも。漕ぐ人無しに。

天ざかる―枕詞
戸―瀬戸、海峽
倭島―大和國、大倭秋津洲といふより略していふ
氣比―越前國、一本武庫の海とある方宜し、又淡路に氣比野といふ地ありともいふ
にはよく―海上の穩かなるをいふ
刈菰の―枕詞
香具山歌―高市皇子薨じて後香具山の宮に住む人もなくて荒れたるさまをよめるなるべし
あもりつく―枕詞
池波―池は埴安の池
木の暮しげに―木の暮は木の茂りて下の暗きこと、しげは繁き意
鴨め―めは群（ムレ）の約音なりといふ
味鴨―鴨の一種、小鴨
遊ぶ船には―遊びし船には

敏馬―攝津國
夏草の―枕詞
野島―淡路國
妹が結びし―「妹が結べる」と訓ずべし、旅の衣の肩に附けたる紐ならん)
荒妙の―枕詞
藤江の浦―播磨國明石郡
いなび野―播摩國印南郡
思へれば―思へるに
かこの島―播磨の國、一説本文「可古」には「阿古」の誤にて吾子(アコ)の意によみなしたるものにして、攝津國阿古をいふかといへり、いかゞ
燈火の―枕詞
大門―海峽、瀬戸
漕ぎ別れなむ―明石海峽に入らば大和の方も見えずならんの意

一本云。處女乎過而。夏草乃。野島我崎爾。伊保里爲吾等者。

粟路之。野島之前乃。濱風爾。妹之結。紐吹返。
淡路の、野島が崎の、濱風に、妹が結びし、紐吹き返す。

荒栲。藤江之浦爾。鈴寸釣。白水郎跡香將見。旅去吾乎。
荒妙の、藤江の浦に、鱸釣る、海人とか見らむ、旅行く我を。

一本云。白栲乃。藤江能浦爾。伊射利爲流。

稻日野毛。去過勝爾。思有者。心戀敷。可古能島所見。
いなび野も、行き過ぎがてに、思へれば、心戀しき、かこの島見ゆ。

一云。潮見。

留火之。明大門爾。入日哉。榜將別。家當不見。
燈火の、明石の大門に、入らむ日や、漕ぎ別れなむ、家のあたり見ず。

天離。夷之長道從。戀來者。自明門。倭島所見。

奥浪。邊波雖立。和我世故我。三船乃登麻里。瀾立目八方。

沖つ浪、邊波立つとも、我が背子が、御船の泊、浪立ためやも。

右今案。従四位下石川宮麻呂朝臣。慶雲年中任ニ大貳一。又正五位下石川朝臣吉美侯。神龜年中任ニ少貳一。不レ知ニ兩人誰作ニ此歌一焉。

又長田王作歌一首

隼人乃。薩摩乃迫門乎。雲居奈須。遠毛吾者。今日見鶴鴨。

隼人の、薩摩の瀬戸を、雲居なす、遠くも我は、今日見つるかも。

柿本朝臣人麻呂覊旅歌八首

三津埼。浪矣恐。隱江乃。舟公。宣奴島爾。

三津の崎、浪を恐み、隱江の、船漕ぐ君が、行くか野島に。

珠藻苅。敏馬乎過。夏草之。野島之崎爾。舟近著奴。

玉藻刈る、敏馬を過ぎて、夏草の、野島が崎に、舟近づきぬ。

邊波—濱邊の方に立つ波

隼人の—或は九州南部の總稱にて薩摩はその内の地名か、當時薩摩といふ國名はいまだあらず

薩摩の瀬戸—薩摩國出水郡の入海か

舟公、宣奴島爾—舟令寄敏馬崎爾（ふねはよせなむみぬめのさきに）舟八毛何時寄奴島爾（ふねはもいつかよせむぬしまに）などの誤かといふ

三津—難波

玉藻刈る—海川などに冠らする詞

神さび居るか—「か」は「かな」
これの水島—これはここ、水島は肥後國葦北郡葦北
浦ゆ—「ゆ」はより

春日王奉レ和歌一首

王者。千歳爾麻佐武。白雲毛。三船乃山爾。絶日安良米也。
大君は、千歳に座さむ、白雲も、三船の山に、絶ゆる日あらめや。

或本歌一首。

三吉野之。御船之山爾。立雲之。常將在跡。我思莫苦二。

右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出。

長田王被レ遣二筑紫一渡二水島一之時歌二首

如聞。眞貴久。奇母。神左備居賀。許禮能水島。
聞きし如、まこと尊く、奇しくも、神さび居るか、これの水島。

葦北乃。野坂乃浦從。船出爲而。水島爾將去。浪立莫勤。
葦北の、野坂の浦ゆ、船出して、水島に行かむ、浪立つなゆめ。

石川大夫和歌一首

日の皇子―長皇子
若菰を―枕詞、
しゝ―猪鹿をすべていふ
い匍ひ―いは接頭語
もとほれ―めぐる
しゝじ物―しゝの如く
眞十鏡―枕詞
春草の―枕詞
綱にさし―本文「網」は「綱」の誤か、衣笠は左右に綱ありて侍臣ひかへつゝ行くもの
三船の山―吉野の内

やすみしゝ、我が大君、高光る、我が日の皇子の、馬並めて、御獵たゝせる、「若菰を」、獵路の小野に、しゝこそは、い匍ひ拝め、鶉こそ、い匍ひもとほれ。しゝじ物、いはひ拝み、鶉なす、いはひもとほり、畏みと、仕へ奉りて、久方の、天見る如く、「眞十鏡」仰ぎて見れど、「春草の」彌めづらしき、我が大君かも。

反歌

久堅乃。天歸月乎。網爾刺。我大王者。蓋爾爲有。
久方の、天行く月を、綱にさし、我が大君は、衣笠にせり。

或本反歌一首。

皇者。神爾之坐者。眞木之立。荒山中爾。海成可聞。

弓削皇子遊二吉野一時御歌一首

瀧上之。三船乃山爾。居雲乃。常將有等。和我不念久爾。
瀧の上の、三船の山に、居る雲の、常にあらむと、我が思はなくに。

強話ー「話」は一本「語」
宣らせこそーこその上に「ば」を略す
志斐いーいは助辭
強言とのるー然るに強言と仰あるは何事ぞや、「強話」古義には「しひがたり」と訓ず
詔ー天皇持統、難波に行幸せる時の事か
網子ー網を引く人
獵路池ー獵路は大和國十市郡か、池は野の誤か

不聽雖謂。話禮話禮常。詔許曾。志斐伊波奏。强話登言。

いなと言へど、語れ〳〵と、宣らせこそ、志斐いは申せ。强言と宣る。

長忌寸意吉麻呂應レ詔歌一首

大宮之。内二手所聞。網引爲跡。網子調流。海人之呼聲。

大宮の、内まで聞ゆ。網引すと、網子調ふる、海人の呼聲。

右一首。

長皇子遊二獵路池一之時柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌

八隅知之。吾大王。高光。吾日乃皇子乃。馬並而。三獵立流。弱薦乎。獵路乃小野爾。十六社者。伊波比拜目。鶉己曾。伊波比回禮。四時自物。伊波比拜。鶉成。伊波比毛等保理。恐等。仕奉而。久堅乃。天見如久。眞十鏡。仰而雖見。春草之。益目頰四寸。吾於富吉美可聞。

雜歌―クサ〳〵ノウタと訓ず

天皇―持統か

雷岳―大和國高市郡雷村にある飛鳥の神奈備山、雄略紀七年、天皇三諸岳の神形を見給はんとして少子部蜾蠃に詔しゝに蜾蠃三諸岳に登りて山神を取りて奉る、其の雷光りて目かゞやけるに畏れ給ひて岳に放たしめ名を改めて雷とするよし見ゆ

盧云々―巻十三に三諸の山のとつ宮所とあればこゝに離宮ありしにや、本文「流」は「須」の誤にて「盧せすかも」か

天皇―持統か

此者―「此」は「比」の誤か

志斐の―のは貴ぶ意を有す

萬葉集卷第三

雜歌

天皇御二遊雷岳一之時柿本朝臣人麻呂作歌一首

皇者。神二四座者。天雲之。雷之上爾。盧爲流鴨。

大君は、神にし座せば、天雲の、雷の上に、盧せるかも。

右或本云。獻二忍壁皇子一也。其歌曰。王。神座者。雲隱。伊加土山爾。宮敷座。

天皇賜二志斐嫗一御歌一首

不聽跡雖云。强流志斐能我。强語。此者不聞而。朕戀爾家里。

いなと言へど、强ふる志斐のが、强語、この頃聞かずて、我戀ひにけり。

志斐嫗奉レ和歌一首　嫗名未詳

或本歌曰。

高圓之。野邊乃秋芽子。勿散禰。君之形見爾。見管思奴幡武。

三笠山。野邊從遊久道。己伎太久母。荒爾計類鴨。久爾有名國。

梓弓―以下五句高圓山のまとの序
高圓山―春日の內にあり
ひさめ―大雨
ひづちて―濡れて
もとな言へる―由なきことを言ひしならん
聞けば―語るを聞きしかばの意
泣かゆ―泣かる
手火―葬送の御供に火をともしつれたるをいふ
こゝだ―澤山
高圓の云々―皇子の宮高圓にありし故なり
こきだくも―こゝだくも、非常に

之御子之。御駕之。手火之光曾。幾許照而有。
梓弓、手に取り持ちて、丈夫の、さつ矢手挾み、立ち向ふ、高圓山に、春野燒く、野火と見るまで、燃ゆる火を、如何にと問へば、玉桙の、道來る人の、泣く涙、ひさめに降れば、白妙の、衣ひづちて、立ち止り、我に語らく、なにしかも、もとな言へる、聞けば、音のみし泣かゆ、語れば、心ぞ痛き、天皇の、神の皇子の、いでましの、手火の光ぞ、こゝだ照りたる。

短　歌二首

高圓之。野邊乃秋芽子。徒。開香將散。見人無爾。
高圓の、野邊の秋萩、いたづらに、咲きか散るらむ、見る人なしに。
御笠山。野邊往道者。己伎太雲。繁荒有可。久爾有勿國。
三笠山、野邊行く道は、こきだくも、しゞに荒れたるか、久にあらなくに。

右歌笠朝臣金村歌集出。

姫島—難波の邊に在るか
小松がうれ—小松の枝
潮干なありそね—潮の干ること勿れ、ねはなに同じ
見まく—見んも

右一首歌作者未レ詳。但古本以二此歌一載二於此次一也。

寧樂宮

和銅四年歳次二辛亥一河邊宮人姫島松原見二嬢子屍一悲歎作歌二首

妹之名者。千代爾將流。姫島之。子松之末爾。蘿生萬代爾。
妹が名は、千代に流れむ。姫島の、小松がうれに、苔むすまでに。

難波方。鹽干勿有曾禰。沈之。妹之光儀乎。見卷苦流思母。
難波潟、潮干なありそね。沈みにし、妹が姿を、見まく苦しも。

靈龜元年歳次二乙卯一秋九月志貴親王薨時作歌一首并短歌

梓弓。手取持而。丈夫之。得物矢手挿。立向。高圓山爾。春野燒。野火登見左右。燎火乎。何如問者。玉桙之。道來人乃。泣涙。霈霖爾落者。白妙之。衣埿漬而。立留。吾爾語久。何鴨。本名言。聞者。泣耳師所哭。語者。心曾痛。天皇之。神

鴨山―石見國にある埋葬場か
知らずと―知らずして、一本「知られと」
石川―鴨山の麓にあるか
いはずやも―人の言へるにあらずや
たゞに云々―直接逢はんとすとも逢ひ難からん
雲立ち渡れ云々―せめて雲だに立ち渡れ、それを形見として見つゝ慕はん
枕に―枕邊に
誰か云々―誰か古郷の人に告げなん

鴨山の、岩根しまける、我をかも、知らずと妹が、待ちつゝあらむ。

柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首

且今日且今日。吾待君者。石水。貝爾（一云谷爾）交而。有登不言八方。

今日々々と、我が待つ君は、石川の、貝に交りて、ありといはずやも。

直相者。相不勝。石川爾。雲立渡禮。見乍將偲。

たゞに逢はば、逢ひも兼ねてむ、石川に、雲立ち渡れ、見つゝ偲ばむ。

丹比眞人名闕擬二柿本朝臣人麻呂之意一報歌一首

荒浪爾。縁來玉乎。枕爾置。吾此間有跡。誰將告。

荒浪に、寄せ來る玉を、枕に置き、我こゝなりと、誰か告げなむ。

或本歌曰

天離。夷之荒野爾。君乎置而。念乍有者。生刀毛無。

天ざかる、鄙の荒野に、君をおきて、思ひつゝあれば、生けりともなし。

なかの湊—那珂郡の湊か
時つ風—潮の滿ち來る時起る風
しき浪—頻に寄せ來る浪
檝—櫂
引き折りて—引きたわめて漕ぐさま
多けど—多けれども
名ぐはし—名のうるはしき
ころ伏す—轉び伏す、浪にうち上げられて死し居るをいふ
おほゝしく—おぼつかなく
はしき—愛する
とりてたげまし—死骸をとりあげること
うはぎ—よめな、屍骸をうはぎに譬へて、うはぎの時過ぐるまで摘みとる人もなきにたとへしか、此歌種々異説あり、以上單に略解の説を示す
敷妙の—枕詞
枕とまきて—まくは枕とす
なせる—なは寢ること、臥したるさまに死し居ればいふ

騒ぐ、いさな取り、海を恐み、行く船の、檝引き折りて、彼方此方の、島は多けど、名ぐはし、狭岑の島の、荒磯わに、廬りて見れば、浪の音の、繁き濱邊を、敷妙の、枕に爲して、荒床に、ころ伏す君が、家知らば、行きても告げむ、妻知らば、來も問はましを、玉桙の、道だに知らず、おほゝしく、待ちか戀ふらむ、はしき妻等は。

反歌

妻毛有者。採而多宜麻之。佐美乃山。野上乃宇波疑。過去計良受也。
妻もあらば、とりてたげまし、佐美の山、野の上のうはぎ、過ぎにけらずや。

奥波。來依荒磯乎。色妙乃。枕等巻而。奈世流君香聞。
沖つ波、來寄る荒磯を、敷妙の、枕とまきて、なせる君かも。

柿本朝臣人麻呂在二石見國一臨レ死時自傷作歌一首

鴨山之。磐根之巻有。吾乎鴨。不知等妹之。待乍將有。

時ならず云々—突然夭死せる
志我津の兒等—この釆女は近江國志我津より貢せられしものか
罷路—葬送の道、一說罷り路は「罷りにし」
空數ふ—枕詞
大津の兒—釆女
おほに—おほよそに
狹岑島—那珂郡
石中—礒邊の意
荒磯面—「面」は「回」の誤
たまもよし—枕詞
こゝだ—非常に
神の御面と—古事記に、「伊邪那伎命云々、生₂伊豫之二名島₁、此島者身一而有₂面四₁、毎ν面有ν名」とて、伊與、讚岐、粟、土左の四つの國の御名あるをいふ

天數。凡津子之。相日。於保爾見敷者。今叙悔。

空數ふ、大津の兒が、逢ひし日に、おほに見しかば、今ぞ悔しき。

讚岐狹岑島視₂石中死人₁柿本朝臣人麻呂作歌一首幷短歌

玉藻吉。讚岐國者。國柄加。雖見不飽。神柄加、幾許貴寸。天地。日月與共。滿將行。神乃御面跡。次來。中乃水門從。船浮而。吾榜來者。時風。雲居爾吹爾。奥見者。跡位浪立。邊見者。白浪散動。鯨魚取。海乎恐。行船乃。梶引折而。彼此之。島者雖多。名細之。狹岑之島乃。荒磯面爾。廬作而見者。浪音乃。茂濱邊乎。敷妙乃。枕爾爲而。荒床。自伏君之。家知者。往而毛將告。妻知者。來毛問益乎。玉桙之。道太爾不知。欝悒久。待加戀良武。愛伎妻等者。

「たまもよし、讚岐の國は、國柄か、見れども飽かぬ。神柄か、こゝだ貴き。天地、日月と共に、足り行かむ、神の御面と、つぎて來る、なかの港ゆ、船浮けて、我が漕ぎ來れば、時つ風、雲居に吹くに、沖見れば、しき浪立ち、邊見れば、白波

露己曾婆。朝爾置而。夕者。消等言。霧己曾婆。夕立而。明者。失等言。梓弓。音聞吾母。髣髴見之。事悔敷乎。布栲乃。手枕纒而。劍刀。身二副寐價牟。若草。其嬬子者。不怜彌可。念而寐良武。時不在。過去子等我。朝露乃如也。夕霧乃如也。

秋山の、したべる妹、「弱竹の、」とを寄る兒等は、如何樣に、思ひ居れか、「栲綱の、」長き命を、露こそは、朝に置きて、夕には、消ゆといへ、霧こそは、夕に立ちて、朝には、失すといへ、「梓弓、」音聞く我も、ほの見し、こと悔しきを、敷妙の、手枕まきて、「劍太刀、」身に添へ寢けむ、「若草の、」其つまの子は、寂しみか、思ひて寢らむ。時ならず、過ぎにし兒等が、朝露のごと、夕霧のごと。

短　歌二首

樂浪之。志我津子等何。一云「志我津之子我」罷道之。川瀨道。見者不怜毛。

細波の、志我津の兒等が、罷路の、川瀨の道を、見れば寂しも。

念而寐良武—古本下に悔彌可、念戀良武（クヤシミカ、オモヒコフラム）の二句あり
秋山のしたべる妹—したぶは萎ぶの意にてやがて紅葉するをいふといふ、こゝは紅顏に譬ふ
弱竹の—枕詞
とを寄る—たをやかに寄る
思ひ居れか—思ひ居ればか
栲綱の—枕詞、舊訓タクナハノ
梓弓—枕詞、この語の前に「人は長く生き長らふべきを、さもなくて果敢なく亡せたりと」と補ひ、上の「長き命を」に擬して見よ
音聞く我も—采女が死にたる事を傳へ聞きたる我さへ
ほの見し—一說、反歌に「於保に見し」とあれば、こゝもおほに見しと訓むべし
劍太刀—枕詞
若草の—枕詞
つまの子—夫

葉。茂如。念有之。妹庭雖在。恃有之。妹庭雖有。世中。背不得者。香切火之。燎流荒野爾。白栲。天領巾隱。鳥自物。朝立伊行(イユキ)而。入日成。隱西加婆。吾妹子之。形見爾置有。綠兒之。乞哭別。取委(トリマカス)。物之無者。男自物(ヲトコジモノ)。腋挿持。吾妹子與。二吾宿之。枕附。嬬屋內爾。旦者(ヒルハ)。浦不怜(サビ)晚之。夜者(ヨルハ)。息衝明之。雖嘆。爲便不知。雖戀。相緣無。大鳥。羽易山爾。汝戀。妹座等。人云者。石根割見而。奈積來之。好雲叙無。宇都曾臣。念之妹我。灰而座者(ハヒニテマセバ)。

短歌三首。

去年見而之。秋月夜。雖度(ワタレドモ)。相見之妹者。益(イヤ)年離。

衾路。引出山。妹置。山路念邇(オモフニ)。生刀毛無。

家來而(イヘニキテ)。吾屋乎見者(ワガヤヲミレバ)。玉床之(タマドコノ)。外向來(ホカニムキケリ)。妹木枕(イモガコマクラ)。

吉備津采女死時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

秋山。下部留妹。奈用竹乃。騰遠依子等者。何方爾。念居可。栲紲之。長命乎。

枕附く―枕詞
嬬屋―夫婦の共寢する室
うらさび―心寂しく
いきづき―嘆息する
大鳥の―枕詞
羽がひの山―巻十に、かすがなる羽買山とあり、この山に葬りしなるべし
石根さくみて―岩が根を蹈みなやみて
なづみ來し―苦しき思をして來れり
よけくもぞ無き―よくもなし、その甲斐もなし
陽炎の―枕詞
衾路を―枕詞か、所の名か
引手の山―前の羽がひの山と一つ處ならん

持ち、我妹子と、二人我が寢し、枕附く、嬬屋の内に、晝はも、うらさび暮らし、夜はも、いきづき明かし、嘆けども、せむ術知らに、戀ふれども、逢ふ由を無み、大鳥の、羽がひの山に、我が戀ふる、妹は座すと、人の言へば、石根さくみて、なづみ來し、よけくもぞ無き、空蟬と、思ひし妹が、陽炎の、仄にだにも、見えぬ思へば。

短　歌二首

去年見而之。秋乃月夜者。雖照。相見之妹者。彌年放。
去年見てし、秋の月夜は、照せれど、相見し妹は、いや年離かる。

衾道乎。引手乃山爾。妹乎置而。山徑往者。生跡毛無。
衾路を、引手の山に、妹を置きて、山路を行けば、生けりともなし。

或本歌曰。

宇都曾臣等。念之時。携手。吾二見之。出立。百兄槻木。虚知期知爾。枝刺有如。春

我が二人見し―妻と共に見し
走出―門口
槻―欅の類
こち〲―彼方此方
兒等―妹
世の中を―常ならぬ世のならはしより脫することは出來ぬ故に
白妙の云々―葬送の柩の前後左右に旗を立てゝ行く樣ならん
鳥じ物―枕詞
取り與ふ物―玩具
男じ物―本文「鳥穗」は「鳥德」の誤かといふ

乃枝之。春葉之。茂之如久。念有之。妹者雖有。憑有之。兒等爾者雖有。世間乎。背之不得者。蜻火之。燎流荒野爾。白妙之。天領巾隱。鳥自物。朝立伊麻之氐。入日成。隱去之鹿齒。吾妹子之。形見爾置。若兒乃。乞泣毎。取與。物之無者。鳥穗自物。腋挾持。吾妹子與。二人吾宿之。枕付。嬬屋之内爾。晝羽裳。浦不樂晩之。夜者裳。氣衝明之。嘆友。世武爲便不知爾。戀友。相因乎無見。大鳥。羽易乃山爾。吾戀流。妹者伊座等。人之云者。石根左久見手。名積來之。吉雲曾無寸。打蟬跡。念之妹之。珠蜻。髣髴谷裳。不見思者。

空蟬と、思ひし時に、携へて、我が二人見し、走出の、堤に立てる、槻の木の、こち〲の枝の、春の葉の、茂きが如く、思へりし、妹にはあれど、憑めりし、兒等にはあれど、世の中を、背きしえねば、陽炎の、燃ゆる荒野に、白妙の、天領巾隱り、鳥じ物、朝立ちいまして、入日なす、隱れにしかば、我妹子が、形見に置ける、みどりごの、乞ひ泣く毎に、取り與ふ、物し無ければ、男じ物、脇挾み

隠れて戀ふるに譬ふ
暮れぬるが如―一本「暮れ行くが如」
沖つ藻の―如く
過ぎて云々―死ぬるをいふ
玉梓の―枕詞
梓弓―枕詞
音に聞きて―その便を聞きて、一本「音のみ聞きて」とある方宜し
玉襷―枕詞、以下「鳴く鳥の」まで音の序
音も聞えず―妹が聲も聞えず
玉桙の―枕詞
袖ぞ振りつる―招くさま
迷はせる―迷ひたる、一本「まどはせる」と訓ず
なべに―に連れて、と共に

玉梓の、使の言へば、梓弓、音に聞きて、言はむ術、爲む術知らに、音のみを、聞きてありえねば、我が戀ふる、千重の一重も、慰むる、心もあれやと、我妹子が、止まず出で見し、輕の市に、我が立ち聞けば、玉襷、畝火の山に、鳴く鳥の、音も聞えず、玉桙の、道行く人も、一人だに、似てし行かねば、術をなみ、妹が名呼びて、袖ぞ振りつる。

或本有謂之名耳聞而有不得者句。

短歌二首

秋山之。黄葉乎茂。云迷流。妹乎將求。山道不知母。一云「路不知而」

秋山の、黄葉を茂み、迷はせる、妹を求めむ、山路知らずも。

黄葉之。落去奈倍爾。玉梓之。使乎見者。相日所念。

黄葉の、散りぬるなべに、玉梓の、使を見れば、逢へる日思ほゆ。

打蟬等。念之時爾。一云「宇都曾臣等念之」取持而。吾二人見之。趍出之。堤爾立有。槻木之。己知碁智

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首幷短歌

天飛也。輕路者。吾妹兒之。里爾思有者。懃。欲見騰。不止行者。人目乎多見。眞根久往者。人應知見。狹根葛。後毛將相等。大船之。思憑而。玉蜻。磐垣淵之。隱耳。戀管在爾。度日乃。晩去之如。照月乃。雲隱如。奧津藻之。名延之妹者。黃葉乃。過伊去等。玉梓之。使乃言者。梓弓。聲爾聞而。(一云「聲耳聞而」)將言爲便。世武爲便不知。聲耳乎。聞而有不得者。吾戀。千重之一隔毛。遣悶流。情毛有八等。吾妹子之。不止出見之。輕市爾。吾立聞者。玉手次。畝火乃山爾。喧鳥之。音母不所聞。玉桙。道行人毛。獨谷。似之不去者。爲便乎無見。妹之名喚而。袖曾振鶴。

天飛ぶや、輕の道は、我妹子が、里にしあれば、懇に、見まく欲しけど、止まず行かば、人目を多み、まねく行かば、人知りぬべみ、眞葛、後も逢はむと、大船の、思ひ憑みて、陽炎の、磐垣淵の、隱りのみ、戀ひつゝあるに、渡る日の、暮れぬるが如、照る月の、雲隱る如、沖つ藻の、靡きし妹は、黃葉の、過ぎて去にしと、

寄る浪の如くとこしなへにとおぼして在りしといふ意

天飛ぶや—枕詞

輕—高市郡

見まく欲しけど—見たけれど

まねく—繁く

眞葛—枕詞

大船の—枕詞

陽炎の—枕詞

磐垣淵の云々—谷などの岩の垣の如くそばだてる處を磐垣淵といふ、忍び

吉隱—大和國城上郡　寒ならまくに—人死して一周年の間は家人墓の傍に行きて宿るが古の習なれば、雪深く降らば道の絶えんことを悲みてよめるなるべし

やすみしゝ—大君(天皇)に冠する枕詞なれど轉じては王にも冠す　そこをしも—その薨去し給ひしことを

五百重が下に—「下」は「上」の誤か、或は「下」は裏の意にて、うちといふに同じきか

又短歌一首—これは右の反歌にあらず、別に端詞ありしなるべし

細波の—枕詞　さゞれ波—小波　しく〳〵に—頻に、頻に

弓削皇子薨時置始東人歌一首并短歌

安見知之。吾王。高光。日之皇子。久堅乃。天宮爾。神隨。神等座者。其乎霜。文爾恐美。晝波毛。日之盡。夜羽毛。夜之盡。臥居雖嘆。飽不足香裳。

やすみしゝ、我が大君、高光る、日の皇子、久方の、天つ宮に、神隨、神と座せば、そこをしも、あやに畏み、晝はも、日の暮るゝまで、夜はも、夜の明くる極、臥し居嘆けど、飽き足らぬかも。

反歌一首

王者。神西座者。天雲之。五百重之下爾。隱賜奴。

大君は、神にし座せば、天雲の、五百重が下に、隱り給ひぬ。

又短歌一首

神樂波之。志賀左射禮浪。敷布爾。常丹跡君之。所念有計類。

細波の、志賀さゞれ波、しく〳〵に、常にと君が、思ほせりける。

隱り沼の云々—草などにかくれて見えず流るゝ水を、舍人の行かん方を知らず歎くに譬ふ

あはに—本文「安」は佐の誤にて「さはに」卽ち多くの意なるべしといふ

短歌二首

久堅之。天所知流。君故爾。日月毛不知。戀渡鴨。

久方の、天知らしぬる、君故に、月日も知らに、戀ひ渡るかも。

埴安乃。池之堤之。隱沼之。去方乎不知。舍人者迷惑。

埴安の、池の堤の、隱り沼の、行方を知らに、舍人は惑ふ。

或書反歌一首。

哭澤之。神社爾三輪須惠。雖禱祈。我王者。高日所知奴。

右一首類聚歌林曰。檜隈女王怨泣澤神社之歌也。案日本紀曰。持統天皇十年丙申秋七月辛丑朔庚戌後皇子尊薨。

但馬皇女薨後穗積皇子冬日雪落遙望御墓悲傷流涕御作歌一首

零雪者。安幡爾勿落。吉隱之。猪養乃岡之。塞爲卷爾。

降る雪は、あはにな降りそ、吉隱の、猪養の岡の、塞ならまくに。

ち向ひしも、露霜の、消なば消ぬべく、行く鳥の、爭ふはしに、度會の、齋宮ゆ、神風に、い吹き惑はし、天雲を、日の目も見せず、常闇に、覆ひ給ひて、定めてし、瑞穗の國を、神隨、太敷きまして、やすみしゝ、我大君の、天の下、申し給へば、萬代に、然かしも、あらむと、木綿花の、榮ゆる時に、我が大君、皇子の御門を、神宮に、裝ひまつりて、遣しゝ、御門の人も、白妙の、麻衣著て、埴安の、御門の原に、茜さす、日の暮るゝ迄、鹿じ物、い這ひ伏しつゝ、ぬば玉の、夕になれば、大殿を、振りさけ見つゝ、鶉なす、い這ひもとほり、侍へど、侍ひ兼ねて、春鳥の、さまよひぬれば、嘆も、未だ過ぎぬに、憶も、未だ盡きねば、言さへぐ、百濟の原ゆ、神葬、葬りいまして、朝もよし、城の上の宮を、常宮と、定めまつりて、神隨、鎭りましぬ。然れども、我が大君の、萬代と、思ほし召して、作らしゝ、香具山の宮、萬代に、過ぎむと思へや。天の如、振りさけ見つゝ、玉襷、懸けて偲ばむ、畏かれども。

い巻き—いは接頭語、本文「纒」は「つむじ」と訓じたるもあり
亂れて來れ—下に「ば」を略す
爭ふはしに—爭ふ間に
天の下云々—高市皇子の大政大臣に任ぜられし事をいふ、申すは政を執り申す意
木綿花の—枕詞
神宮—殯宮
御門の人—舍人
白妙の麻衣—喪服をいふ
埴安の御門の原—香具山の宮の御門の前の野原
茜さす—枕詞
日の暮るゝ迄—古義には「日之盡」を、凡て「ひのこと〴〵」と訓ぜり
鹿じ物—枕詞
鶉なす—枕詞
春鳥の—枕詞
さまよひぬれば—さまよひぬるにの意、さまよふは歎き呼ぶ意
盡きねば—盡きぬに
言さへぐ—枕詞
朝もよし—枕詞
定めまつりて—略解「高くまつりて」と訓ず、今宣長の説に從ひて改む
天の如—畏多けれどもせめて之れをだに形見として仰ぎ見奉らんとの意

萬代爾。過牟登念哉。天之如。振放見乍。玉手次。懸而將偲。恐有騰文。

かけまくも、由々しきかも、言はまくも、あやに畏き、明日香の、眞神の原に、久方の、天つ御門を、畏くも、定め給ひて、神さぶと、磐隱れます、やすみしゝ、我が大君の、聞し召す、そともの國の、眞木立つ、不破山越えて、狛劒、わざみが原の、假宮に、あもり座して、天の下、治め給ひ、食國を、定め給ふと、鳥が鳴く、東の國の、御軍を、召し給ひて、千早振る、人を和せと、まつろはぬ、國を治めと、皇子ながら、まけ給へば、大御身に、太刀取り帶ばし、大御手に、弓取り持たし、御軍を、あどもひ給ひ、齊ふる、鼓の音は、雷の、聲と聞くまで、吹きなせる、管の音も、敵見たる、虎か吼ゆると、諸人の、怯ゆるまでに、捧げたる、旗の靡きは、冬籠り、春さり來れば、野毎に、附きて有る火の、風のむた、靡ける如く、取り持てる、弓弭の騷ぎ、御雪降る、冬の林に、暴風かも、い卷き渡ると、思ふ迄、聞の畏く、引き放つ、箭の繁けく、大雪の、亂れて來れ、まつろはず、立

かけまくも云々―賤しき我等の口に懸けて申し奉らんも畏きかな
天つ御門を云々―天武天皇の御陵をいふ
我が大君―天武天皇
そともの國―そともは背面、美濃國、大和の北なればいふ
眞木立つ―枕詞
狛劒―枕詞
假宮―行宮
あもり座して―來り止り居給ひて
鳥が鳴く―枕詞
千早振る―枕詞
まつろはぬ―服從せぬ
皇子ながら―皇子におはしながら
まけ給へば―任命し給へば
大御身―皇子の御身
あどもひ―率ゐ
齊ふる―武士を呼びそろへる
吹きなせる―吹きならす
管云々―管は笛、一本「笛の音は」と訓ず
冬籠り―枕詞、本文「成」は「盛」の誤か
野毎に云々―野を燒く火をいふ、一本「春野やく火の」と訓ず
風のむた―風と共に

太敷座而—一說「而」の字衍、「ふとしきいます」と訓ず

遣使—遣使の誤

不得者—不得天の誤か

高之—定の誤か

一云「笛之音波」小角乃音母。敵見有。虎可叫吼登。諸人之。一云「聞惑麻低」協流麻低爾。指擧有。幡之靡者。冬
木成。春去來者。野每。一云「冬木成。春野燒火乃」著而有火之。風之共。靡如久。取持流。弓波受乃驟。三
雪落。冬乃林爾。一云「由布乃林」飄可母。伊卷渡等。念麻低。一云「諸人。見惑麻低爾」聞之恐久。引放。箭繁計久。大雪一云「霰
成。曾知余里久禮婆」乃。亂而來禮。不奉仕。立向之毛。露霜之。一云「朝霜之。消者消言爾。打蟬等。安良蘇布波之爾」消者消倍久。去鳥乃。相競端爾。渡
會乃。齋宮從。神風爾。伊吹惑之。天雲乎。日之目毛不令見。常闇爾。覆賜而。
定之。水穗之國乎。神隨。太敷座而。八隅知之。吾大王之。天下。申賜者。萬代。
然之毛。一云「如是毛。安良無等」將有登。木綿花乃。榮時爾。吾大王。一云「刺竹。皇子御門乎」皇子之御門乎。神宮爾。裝束奉而。
遣使。御門之人毛。白妙乃。麻衣著。埴安乃。御門之原爾。赤根刺。日之盡。鹿
自物。伊波比伏管。烏玉能。暮爾至者。大殿乎。振放見乍。鶉成。伊波比廻。雖
侍候。佐母良比不得者。春鳥之。佐麻欲比奴禮者。嘆毛。未過爾。憶毛。未盡者。
言左敝久。百濟之原從。神葬。葬伊座而。朝毛吉。木上宮乎。常宮等。高之奉而。
神隨。安定座奴。雖然。吾大王之。萬代跡。所念食而。作良志之。香來山之宮。

なぐさもる云々―大君即ち忍坂部皇子の斯く悲み給ふ樣を見れば我さへ心を慰め難き由なり
そこ故に―それ故に
術知らましや―一說この一句誤字あるべし、「せんすべをなみ」とか「せんすべしらに」などあるべしと
天地の云々―天地と共に長く
御名に云々―皇女の御名に負ひたる
はしきやしいとはしき
我が大君―皇女
形見かこゝを―こゝは明日香川、一說本文「何」は「荷」の誤にて、こゝを形見に偲び行かむと上へ返る意なりと
のどに―のどかに
城上―皇子の陵は廣瀨郡三立岡にあり、城上はその古名ならん
契沖曰く、人麻呂の長歌多き中にも、此歌ことに長篇にて、つぶさに壬申の亂をしづめ給へる事を記されたれば、皇子の威名大功此歌によりて不朽を日月に懸けたりといふべし、千歲の美魂、皇子の精神にそひて此歌にとどまれり云々

短歌二首

明日香川。四我良美渡之。塞益者。進留水母。能杼爾賀有萬思。（一云「水乃與杼爾加有益」）
明日香川(あすかがは)、笧渡(しがらみわた)し、堰(せ)かませば、流(なが)るゝ水(みづ)も、のどにかあらまし。
明日香川。明日谷（一云「左倍」）將見等。念八方。（一云「念香毛」）吾王。御名忘世奴。（一云「御名不所忘」）
明日香川(あすかがは)、明日(あす)だに見(み)むと、思(おも)へやも。我(わ)が大君(おほぎみ)の、御名(みな)忘(わすれ)せぬ。

高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

挂文。忌之伎鴨。（一云「由遊志計禮杼母」）言久母。綾爾畏伎。明日香乃。眞神之原爾。久堅能。天津御門
乎。懼母。定賜而。神佐扶跡。磐隱座。八隅知之。吾大王乃。所聞見爲。背友乃
國之。眞木立。不破山越而。狛劍。和射見我原乃。行宮爾。安母理座而。天下。
治賜。（一云「掃賜而」）食國乎。定賜等。鳥之鳴。吾妻乃國之。御軍士乎。喚賜而。千磐破。人乎
和爲跡。不奉仕。國乎治跡。（一云「掃部等」）皇子隨。任賜者。大御身爾。大刀取帶之。大御手爾。
弓取持之。御軍士乎。安騰毛比賜。齊流。鼓之音者。雷之。聲登聞麻低。吹響流。

石橋―石をならべて渡とせるもの
打橋―板などにてかけはづしの出來る樣に造りたる橋
生ひ靡ける―本文「鳥」は「鳥」の誤か
生ひをゝれる―をゝるはたわむの意
吾が大君―皇女
立たせば―立たせ給へば
ころぶせば―臥すれば
よろしき―萬づ備はれるをいふ
空蟬と云々―空蟬は現身の義、御在世中
敷妙の―枕詞
君と折々―君は夫忍坂部皇子
御食向ふ―枕詞
木瓲の宮云々―出て遊びし所の御墓となりたるをいふ
あぢさはふ―枕詞
めごとも云々―あひ見る事も絕えぬ
しかれかも―しかあればしかも、一本「そこをしも」と訓ず
鵼鳥の―枕詞
片戀妻―妻は一本「しつつ」と訓ず
朝鳥の―枕詞
夏草の―枕詞
夕星の―枕詞
大船の―枕詞

飛ぶ鳥の、明日香の川の、上つ瀬に、石橋渡し、下つ瀬に、打橋渡し、石橋に、生ひ靡ける、玉藻もぞ、絕ゆれば生ふる。打橋に、生ひをゝれる、川藻もぞ、枯るれば生ゆる。なにしかも、我が大君の、立たせば、玉藻の如く、ころぶせば、川藻の如く、靡かひし、よろしき君が、朝宮を、忘れ給ふや、夕宮を、背き給ふや。空蟬と、思ひし時に、春べは、花折りかざし、秋立てば、黃葉かざし、「敷妙の、」袖携はり、鏡なす、見れども飽かず、望月の、彌珍らしみ、思ほしゝ、君と折々、いでまして、遊び給ひし、「御食向ふ、」木瓲の宮を、常宮と、定め給ひて、あぢさはふ、めごとも絕えぬ。しかれかも、あやに悲しみ、「鵼鳥の、」片戀妻、「朝鳥の、」通はす君が、「夏草の、」思ひ萎えて、「夕星の、」か行きかく行き、「大船の、」たゆたふ見れば、なぐさもる、心もあらず。そこ故に、術知らましや、音のみも、名のみも絕えず、天地の、彌遠永く、偲び行かむ、御名にかゝせる、明日香川、萬代までに、はしきやし、我が大君の、形見かこゝを。

木瓲―廣瀬郡

此歌以下三首、古義には、弓削皇子云々の歌（七十五頁）の次に置けり

秋九月己巳朔丁丑。淨大參皇子川島薨。

明日香皇女木瓲（キノヘ）殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

飛鳥。明日香乃河之。上瀨。石橋渡。一云「石浪」下瀨。打橋渡。石橋。一云「石浪」生靡留。玉藻毛叙。絕者生流。打橋。生乎爲禮流。川藻毛叙。干者波由流。何然毛。吾王乃。立者。玉藻之如。許呂臥者。川藻之如久。靡相之。宜君之。朝宮乎。忘賜哉。夕宮乎。背賜哉。宇都曾臣跡。念之時。春部者。花折插頭。秋立者。黃葉插頭。敷妙之。袖携。鏡成。雖見不厭。三五月之。益目頰染。所念之。君與時時。幸而。遊賜之。御食向。木瓲之宮乎。常宮跡。定賜。味澤相。目辭毛絕奴。然有鴨。一云「所己乎之毛」綾爾憐。宿兄鳥之。片戀嬬。一云「爲乍」朝鳥。一云「朝露」往來爲君之。夏草乃。念之萎而。夕星之。彼往此去。大船。猶預不定見者。遣悶流。情毛不在。其故。爲便知之也。音耳母。名耳毛不絕。天地之。彌遠長久。思將往。御名爾懸世流。明日香河。及萬代。早布屋師。吾王乃。形見何此焉。

流れ觸らばへ｜流れ觸るる

靡かひし｜靡き合ひし

たゝなづく｜枕詞

柔膚すらを｜すらはそれの意

劒刀｜枕詞

ぬば玉の｜枕詞

そこ故に｜それ故に

慰めてける云々｜本文「魚」は「兼」、「留」は「田」の誤にて、「慰め兼ねてけだしくも逢ふやと思ひて」と訓ずべしと荒木田氏說也

敷裳合ふ｜枕詞

玉垂の｜枕詞

小市｜高市郡

逢はぬ君ゆゑ｜逢はぬ君なるものを、古へ新喪には墓所の傍に假庵を作りて一周年の間人して守らせて主人も折々行きて宿りし習ありしをいふ也

敷妙の｜枕詞

袖かへし｜袖を交しゝ

小市野云々｜小市野に葬られたるをいふ

靡相之。嬬乃命乃。多田名附。柔膚尙乎。劒刀。於身副不寐者。烏玉乃。夜床母一云「阿禮奈牟」荒良無。所虚故。名具鮫魚天氣留。敷藻相。一云「公毛相哉登」屋常念而。玉垂乃。越乃大野之。旦露爾。玉藻者埿打。夕霧爾。衣者沾而。草枕。旅宿鴨爲留。不相君故。

飛ぶ鳥の、明日香の河の、上つ瀬に、生ふる玉藻は、下つ瀬に、流れ觸らばへ、玉藻なす、か寄りかく寄り、靡かひし、夫の命の、「たゝなづく」柔膚すらを、劒刀、身に添へ寝ねば、ぬば玉の、夜床も荒るらむ。そこ故に、慰めてける、「敷裳合ふ」、宿と思ひて、玉垂の、小市の大野の、朝露に、玉裳はひづち、夕霧に、衣は濡れて、草枕、旅寝かもする、逢はぬ君ゆゑ。

反　歌

敷妙之。袖易之君。玉垂之。越野過去。亦毛將相八方。

敷妙の、袖かへし君、玉垂の、小市野に過ぎぬ。復も逢はめやも。

一云。乎知野爾過奴。

右或本曰。葬二河島皇子越智野一之時。獻二泊瀬部皇女一歌也。日本紀曰。朱鳥五年辛卯

朝日照る、島の御門に、おほゝしく、人音もせねば、まうら悲しも。

眞木柱。太心者。有之香杼。此吾心、鎭目金津毛。

眞木柱、太き心は、ありしかど、此の我が心、鎭めかねつも。

毛許呂裳遠。春冬片設而。幸之。宇陀乃大野者、所念武鴨。

毛衣を、春冬かたまけて、出でましゝ、宇陀の大野は、思ほえむかも。

朝日照。佐太乃岡邊爾。鳴鳥之。夜鳴變布。此年己呂乎。

朝日照る、佐太の岡邊に、鳴く鳥の、夜泣き替らふ、此の年頃を。

八多籠良家。夜晝登不云。行路乎。吾者皆悉。宮道叙爲。

やたこらが、夜晝といはず、行く道を、我はことゞゝ、宮路にぞする。

右日本紀曰。三年己丑夏四月癸未朔乙未薨。

柿本朝臣人麻呂獻二泊瀬部皇女忍坂部皇子一歌一首并短歌

飛鳥。明日香乃河之。上瀬爾。生玉藻者。下瀬爾。流觸經。玉藻成。彼依此依。

舍に下り居るなるべし
おほゝしく—おぼつかなく
まうら悲しも—まは接頭語、心悲しき哉
眞木柱—枕詞
毛衣—古へ獵の時は多く皮衣を用ゐたり
かたまけて—時節を待ち設けて
出でましゝ—行幸せし
思ほえむかも—見るにつけて昔の樣の思ひ出さるる事ならん
鳴く鳥の—如く
夜泣き替らふ—舍人等の歎きつゝ、交替して宿直するをいふ、一說「泣きかへらふ」と訓む、繰返し泣く義とす
やたこらが—やたこらとは奴等即ち賤しき里人をさす、本文「多」は「足」、「家」は「我」の誤か
宮路—宮仕のため通ふ路
忍坂部皇子—誤つて入る

とことはーとこしなへに、永久に
瀧の御門ー瀧のある方の御門
水傳ふー枕詞
礒云々ー前の歌の瀧の邊りの礒をいふ
浦まー浦のまはり
もくさくー繁く咲く
入りがてぬー入り兼ぬる
つれもなきー縁もゆかりもなき
歸り居ばー交替して歸り行きて宿直せば
住まはむー宿直せん
旦覆ー天陰(アマグモリ)の誤か、古義には「アカネサス」と訓ず
日の入り行けばー暮れ行けば
島に云々ー宮の外に池島ありて日暮るれば其邊の

我が御門、千代とことはに、榮えむと、思ひてありし、我し悲しも。

東乃。多藝能御門爾。雖伺侍。昨日毛今日毛。召言毛無。
東の、瀧の御門に、侍らへど、昨日も今日も、召すことも無し。

水傳。磯乃浦回乃。石乍自。木丘開道乎。又將見鴨。
水傳ふ、磯の浦まの、岩躑躅、もくさく道を、復見なむかも。

一日者。千遍參入之。東乃。大寸御門乎。入不勝鴨。
一日には、千度參りし、東の、大御門を、入りがてぬかも。

所由無。佐太乃岡邊爾。反居者。島御橋爾。誰加住舞無。
つれもなき、佐太の岡邊に、歸り居ば、島の御橋に、誰か住まはむ。

旦覆。日之入去者。御立之。島爾下座而。嘆鶴鴨。
朝曇り、日の入り行けば、御立しゝ、島に下り居て、嘆きつるかも。

旦日照。島乃御門爾。鬱悒、人音毛不爲者。眞浦悲毛。

島—皇子の折にふれて御覽ぜし島にて、島の宮の内にありしなるべし
にはたづみ—枕詞
橘の云々—島の宮は橘寺の附近にありしか
飽かねかも—飽かねばかも
住む鳥—放ち鳥をさす
あらびな行きそ—飛去りて行くな
年かはるまで—來年まで
とぐら—塒、本文「埘」は「栖」の誤か
雁の子—古義には鷹の子なるべしといへり

朝日照る、佐田の岡邊に、群れ居つゝ、我が泣く涙、止む時もなし。

御立爲之。島乎見時。庭多泉。流涙。止曾金鶴。
御立たしゝ、島を見る時、「にはたづみ」流るゝ涙、止めぞかねつる。

橘之。島宮爾者。不飽鴨。佐田乃岡邊爾。侍宿爲爾往。
橘の、島の宮には、飽かねかも、佐田の岡邊に、宿直しに行く。

御立爲之。島乎母家跡。住鳥毛。荒備勿行。年替左右。
御立たしゝ、島をも家と、住む鳥も、あらびな行きそ、年かはるまで。

御立爲之。島之荒磯乎。今見者。不生之草。生爾來鴨。
御立たしゝ、島の荒磯を、今見れば、生ひざりし草、生ひにけるかも。

鳥埘立。飼之雁乃兒。栖立去者。檀崗爾。飛反來年。
とぐら立て、飼ひし雁の子、巣立ちなば、眞弓の岡に、飛び歸り來ね。

吾御門。千代常登婆爾。將榮等。念而有之。吾志悲毛。

高光る、我が日の皇子の、萬代に、國知らさまし、島の宮はも。

島宮。池上有。放鳥。荒備勿行。君不座十方。

島の宮、池の上なる、放ち鳥、あらびな行きそ、君座さずとも。

高光。吾日皇子乃。伊座世者。島御門者。不荒有益乎。

高光る、我が日の皇子の、座しせば、島の御門は、荒れざらましを。

外爾見之。檀乃岡毛。君座者。常都御門跡。侍宿爲鴨。

よそに見し、眞弓の岡も、君座せば、とこつ御門と、宿直するかも。

夢爾谷。不見在之物乎。鬱悒。宮出毛爲鹿。作日之隅回乎。

夢にだに、見ざりしものを、おほゝしく、宮出もするか、さ檜の隈わを。

天地與。共將終登。念乍。奉仕之。情違奴。

天地と、共に終へむと、思ひつゝ、仕へまつりし、心違ひぬ。

朝日氐流。佐太乃岡邊爾。群居乍。吾等哭涙。息時毛無。

日の皇子—日並知皇子
島の宮—高市郡、一說に、今橘寺のあるあたり

放鳥—翅を切りて放ち飼ふ水鳥
あらびな行きそ—人に疎くなり行くな

とこつ御門と—常の御殿として

おほゝしく—おぼつかなく
宮出—御門を出入すること
さ檜の隈わ—さは接頭語檜隈なり、本文「隅」は「隈」の誤、眞弓の岡は檜隈郷の内にあり、「作日」一本「佐田」これも檜隈郷の内にて眞弓の岡と山つゞきなり

満たしの意、御惠を望月の如くあまねく四方に満たしけん
大船の—枕詞
天つ水云々—旱魃に雨を待つ如くに御即位の程を待ち居りしに
つれもなき—縁もゆかりもなき
眞弓の岡—高市郡
宮柱云々—陵の樣を宮殿になぞらへていふ
御言云々—口をきかず
まねく—數多く
そこ故に—それ故に
行方知らずも—御墓づかへの日數終りて皆々退散するをいふ
荒れまく—荒れんが
茜さす—枕詞
ぬばたまの—枕詞
夜渡る月の—皇子を月に譬ふ、上に日の事をいふは月の隱るゝを強く言はんためなり、一說に、日は天皇(持統)を指し奉ると也
隱らく—隱る

し、御殿を、高知りまして、朝每に、御言問はさず、日月の、まねくなりぬる、そこ故に、皇子の宮人、行方知らずも。

反歌二首

久堅乃。天見如久。仰見之。皇子乃御門之。荒卷惜毛。

久方の、天見る如く、仰ぎ見し、皇子の御門の、荒れまく惜しも。

茜刺。日者雖照有。烏玉之。夜渡月之。隱良久惜毛。

茜さす、日は照せれど、ぬばたまの、夜渡る月の、隱らく惜しも。

或本云。以二件歌一爲二後皇子尊殯宮之時反歌一也。

或本歌一首。

島宮。勾乃池之。放鳥。人目爾戀而。池爾不潛。

皇子尊宮舍人等慟傷作歌二十三首

高光。我日皇子乃。萬代爾。國所知麻之。島宮婆毛。

久方の―枕詞
天の河原―天の安ノ河原の略
八百萬千萬神云々―天孫を瑞穂の國へ降臨せしめんとの神議をさす
天地のより合ひの極み―既に天地の相分れしといふに對して又より合はん時までの意
神の命―天孫瓊々杵命をさす
神降り云々―降臨せしめ奉りき、こゝまで天孫降臨の御事
日の皇子―日並知皇子をさす
天皇―持統、淨御原宮におはせり
我が大君云々―日並知皇子
春花の云々―春の花の如くめでたからん
望月の云々―たゝはしは

開。神上。一云「神登座爾之可婆」上座奴。吾王。皇子之命乃。天下。所知食世者。春花之。貴在等。望月乃。滿波之計武跡。天下。一云「食國」四方之人之。大船之。思憑而。天水。仰而待爾。何方爾。御念食可。由縁母無。眞弓乃崗爾。宮柱。太布座。御在香乎。高知座而。明言爾。御言不御問。日月之。數多成塗。其故。一云「刺竹之。皇子宮人。歸邊不知爾爲」皇子之宮人。行方不知毛。

天地の、初の時し、「久方の、」天の河原に、八百萬、千萬神の、神集ひ、集ひ座して、神はかり、はかりし時に、天照す、日女の命、天をば、知し召すと、葦原の、水穗の國を、天地の、より合ひの極み、知し召す、神の命と、天雲の、八重搔分けて、神降り、座せまつりし、高光る、日の皇子は、飛鳥の、淨の宮に、神隨、太敷きまして、天皇の、敷きます國と、天の原、岩戸を開き、神上り、上り座しぬ。我が大君、皇子の命の、天の下、知し召せば、春花の、たふとからむと、望月の、たゝはしけむと、天の下、四方の人の、「大船の、」思ひ憑みて、「天つ水、」仰ぎて待つに、如何樣に、思ほし召せか、つれもなき、眞弓の岡に、宮柱、太敷き座

うつそみの―「うつせみの」に同じ、枕詞
いもせ―古は男女の兄弟をもいもせといへり
いその上に―二上山の石のほとりに
あしび―あせみ
ありと言はなくに―おはしまさぬ事なるに詮方もなし

移二葬大津皇子屍於葛城二上山一之時大來皇女哀傷御作歌二首

宇都曾見乃。人爾有吾哉。從明日者。二上山乎。弟世登吾將見。
うつそみの、人なる我や、明日よりは、二上山を、いもせと我が見む。

磯之於爾。生流馬醉木乎。手折目杼。令視倍吉君之。在常不言爾。
いその上に、生ふるあしびを、手折らめど、見すべき君が、ありと言はなくに。

右一首。今案不レ似二移葬之歌一。蓋疑從二伊勢神宮一還レ京之時。路上見二花盛一傷哀咽作二此歌一乎。

日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

天地之。初時之。久堅之。天河原爾。八百萬。千萬神之。神集。集座而。神分。分之時爾。天照。一云「指上。日女之命」日女之命。天乎波。所知食登。葦原乃。水穗之國乎。天地之。依相之極。所知行。神之命等。天雲之。八重搔別而。一云「八重雲別而」神下。座奉之。高照。日之皇子波。飛鳥之。淨之宮爾。神隨。太布座而。天皇之。敷座國等。天原。石門乎

靡足—「足」はしの假名に用ひしか、又は「之」の誤か
明日香の—此歌全體として通じ難し
高光る—枕詞
神風の—枕詞
鹽氣のみ香れる—香るは潮の滿つる時曇るをいふ
うまごり—枕詞
あやに—極めて、甚しく
乏しき—珍らしく羨しき
天皇—持統
君—大津皇子
見まく欲り我がする—我が見んと欲する

子。何方爾。所念食可。神風乃。伊勢能國者。奧津藻毛。靡足波爾。鹽氣能味。香乎禮流國爾。味凝。文爾乏寸。高照日之御子。

明日香の、淸御原の、宮に、天の下、知ろし召しゝ、やすみしゝ、我が大君、高光る、日の皇子、如何樣に、思ほし召せか、神風の、伊勢の國は、沖つ藻も、靡きし波に、鹽氣のみ、香れる國に、うまごり、あやに乏しき、高光る、日の皇子。

藤原宮御宇天皇代　高天原廣野姬天皇

大津皇子薨之後大來皇女從二伊勢齋宮一上京之時御作歌二首

神風之。伊勢能國爾母。有益乎。奈何可來計武。君毛不有國。
神風の、伊勢の國にも、在らましを、何しか來けむ。君もあらなくに。

欲見。吾爲君毛。不有爾。奈何可來計武。馬疲爾。
見まく欲り、我がする君も、在らなくに、何しか來けむ。馬疲るゝに。

山吹の―皇女を譬ふ
立ち裝ひたる―一說「儀」は「茂」の誤にて「立ち茂みたる」
山淸水―山吹は深山の水邊などに咲くものなれば斯くつゞけたり
大后―皇后
めし給ふらし―らしは過去
神岳―飛鳥の神南備山
今日もかも―天皇御在世ならば
あやに―極めて
うらさび―心淋しく
荒妙の―枕詞
習賜―「習」は「誦」の誤か

八隅知之。我大王之。暮去者。召賜良之。明來者。問賜良之。神岳乃。山之黃葉乎。今日毛鴨。問給麻思。明日毛鴨。召賜萬旨。其山乎。振放見乍。暮去者。綾哀。明來者。裏佐備晚。荒妙乃。衣之袖者。乾時文無。

やすみしゝ、我が大君の、夕されば、めし給ふらし、明け來れば、問ひ給ふらし、神岳の、山の黃葉を、今日もかも、とひ給はまし。明日もかも、めし給はまし。其山を、振り放け見つゝ、夕されば、あやに悲しみ、明け來れば、うらさび暮し、荒妙の、衣の袖は、乾る時もなし。

一書曰。天皇崩之時太上天皇御製歌二首。

燃火物。取而裹而。福路庭。入澄不言八面。智男雲。

向南山。陣雲之。青雲之。星離去。月牟離而。

天皇崩之後八年九月九日奉レ爲二御齋會一之夜夢裏習賜御歌一首

明日香能。淸御原乃。宮爾。天下。所知食之。八隅知之。吾大王。高照。日之皇

の明くるきはみ、晝はも、日の暮るゝまで、音のみを、泣きつゝ在りてや、百磯城の、大宮人は、行き別れなむ。

明日香淸御原宮御宇天皇代　天渟中原瀛眞人天皇

十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首

三諸之。神之神須疑。已具耳矣自得見監乍共。不寐夜叙多。
三諸の、神の神杉、斯くのみに、有りとし見つゝ、寢ねぬ夜ぞ多き。

神山之。山邊眞蘇木綿。短木綿。如此耳故爾。長等思伎。
神山の、山邊まそ木綿、短木綿、斯くのみからに、長くと思ひき。

山振之。立儀足。山淸水。酌爾雖行。道之白鳴。
山吹の、立ち装ひたる、山淸水、酌みに行かめど、道の知らなく。

天皇崩之時大后御作歌一首

音のみを云々—葬りて一周の間は近習の臣より舍人まで御陵に侍宿することと見ゆ
百磯城の—枕詞

天皇—天武

三諸—三輪山
斯く……見つゝ—本文誤脱ありて讀み難し、姑く古義の訓ずるがまゝに書き下せり
神山—三輪山
まそ木綿—木綿は穀（カヂ）の皮、木綿、麻などを割きたるものを「そ」と總稱す、「ま」は賞美の辭
短木綿—木綿に長きと短きとあり、特に短きを取り出でて皇女の短命に譬ふ
斯くのみからに—斯くのみ短命なるものを

いさなとり―枕詞
沖つ櫂―沖漕ぐ櫂
若草の―枕詞
夫―天皇をさす、本文「嬬之」の下に「命之」を脱せるか
思ふ鳥―放ち飼にせし鳥のなほ湖にすめるを見てよめるか
細波の―枕詞
大山守―大山は御山、皇居近き山なれば山守を置きしならん
標―人を入らしめぬしるし
まさなくに―いまさぬに
山科―山城國宇治郡

大后御歌一首

鯨魚取。淡海乃海乎。奧放而。榜來船。邊附而。榜來船。奧津加伊。痛勿波禰曾。邊津加伊。痛莫波禰曾。若草乃。嬬之。念鳥立。

「いさなとり」近江の海を、沖避けて、漕ぎ來る船、邊附きて、漕ぎ來る船、沖つ櫂、いたくな撥ねそ、邊つ櫂、いたくな撥ねそ。「若草の」夫の、思ふ鳥立つ。

石川夫人歌一首

神樂浪乃。大山守者。爲誰可。山爾標結。君毛不有國。

細波の、大山守は、誰が爲か、山に標結ふ、君もまさなくに。

從㆓山科御陵㆒退散之時額田王作歌一首

八隅知之。和期大王之。恐也。御陵奉仕流。山科乃。鏡山爾。夜者毛。夜之盡。晝者母。日之盡。哭耳呼。泣乍在而哉。百磯城乃。大宮人者。去別南。

やすみしゝ、我ご大君の、畏きや、御陵仕ふる、山科の、鏡の山に、夜はも、夜

玉蘰—枕詞、一說本文「玉」は「山」の誤かともいふ
影に—面影に
忘らえぬ—忘られぬ
空蟬し—空蟬は顯の身、人間、しの下に「も」を略す
神に堪へねば云々—天皇は崩じて神となりて天がけり給ふ故我が人間の身にては從ひ得ねば離れ居るとの意
玉ならば云々—釧とて手に玉を纏ふことあればいふ
きぞの夜—昨夜
大殯—天皇崩後山陵を造る間假にをさめ奉るをいふ
標—標繩、永く留め奉らん爲めにしりくめなはを結ふべかりしをと也
我ご—我が

人はよし、思ひ止むとも、玉蘰、影に見えつゝ、忘らえぬかも。

天皇崩時婦人作歌一首　姓氏未詳

空蟬師。神爾不勝者。離居而。朝嘆君。放居而。吾戀君。玉有者。手爾卷持而。衣有者。脫時毛無。吾戀。君曾伎賊乃夜。夢所見鶴。

空蟬し、神に堪へねば、離れ居て、朝嘆く君、離り居て、我が戀ふる君、玉ならば、手にまき持ちて、衣ならば、脫ぐ時もなく、我が戀ひむ、君ぞきその夜、夢に見えつる。

天皇大殯之時歌二首

如是有刀。豫知勢婆。大御船。泊之登萬里人。標結麻思乎。

斯からむと、豫て知りせば、大御船、はてし泊に、標結はましを。

八隅知之。吾期大王乃。大御船。待可將戀。四賀乃辛崎。

やすみしゝ、我ご大君の、大御船、待ちか戀ふらむ、滋賀の唐崎。

小松がうれ—小松の枝

天皇—天智

大后—皇后

ふりさけ見れば—遙にふり仰ぎ見れば

天足らし—天と共に極なし

青旗—白旗、古へ葬式に用ひたるもの

こ旗—本文「木」は「小」の誤か、然らば「をばた」にて、をは接頭語

目には見れども云々—今も面影には見ゆれど直接相逢ふことは得ず

後將見跡。君之結有。磐代乃。子松之宇禮乎。又將見香聞。

後見むと、君が結べる、磐代の、小松がうれを、復見けむかも。

近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇

天皇聖躬不豫之時大后奉御歌一首

天原。振放見者。大王乃。御壽者長久。天足有。

天の原、ふりさけ見れば、大君の、御命は長く、天足らしたり。

一書曰。近江天皇聖體不豫御病急時。太后奉ㇾ獻御歌一首。

青旗乃。木旗能上乎。賀欲布跡羽。目爾者雖視。直爾不相香裳。

青旗の、こ旗の上を、通ふとは、目には見れども、直に逢はぬかも。

天皇崩御之時倭太后御作歌一首

人者縱。念息登母。玉蘰。影爾所見乍。不所忘鴨。

笥—食物を盛る器

心も解けず—思がむすぼれて、「結び」の縁語

翼なす—翼は鳥の意、鳥の如くに、本文「翔」は「翅」の誤か

あり通ひつゝ云々—皇子の魂のあり〳〵て飛鳥の如く天がけり通ひて見るらめど

家にあれば、笥に盛る飯を、草枕、旅にしあれば、椎の葉に盛る。

長忌寸意吉麻呂見二結松一哀咽歌二首

磐代乃。岸之松枝。將結。人者反而。復將見鴨。

磐代の、岸の松が枝、結びけむ、人は還りて、復見けむかも。

磐代乃。野中爾立有。結松。情毛不解。古所念。

磐代の、野中に立てる、結び松、心も解けず、古思ほゆ。

未詳。

山上臣憶良追和歌一首

鳥翔成。有我欲比管。見良目杼母。人社不知。松者知良武。

翼なす、あり通ひつゝ、見らめども、人こそ知らね、松は知るらむ。

右件歌等雖レ不二挽レ柩之時所一レ作。唯擬二歌意一故以載二于挽歌類一焉。

大寶元年辛丑幸二于紀伊國一時見二結松一歌一首　元柿本朝臣人麻呂歌集中出也

挽歌—カナシミウタと訓ず、哀傷歌

天皇—齊明

有間皇子—孝徳天皇の御子、反を謀りて紀伊國に送られ藤白の地にて絞れ給ふ、路に紀州磐代濱を經て松枝を結び再會を松に契り給へる也

磐代—紀伊國

右歌體雖レ同。句句相替因レ此重載。

柿本朝臣人麻呂妻依羅娘子與二人麻呂一相別歌一首

勿念跡。君者雖言。相時。何時跡知而加。吾不戀有牟。

な思ひそと、君は言へども、逢はむ時、何時と知りてか、我が戀ひざらむ。

挽歌

後崗本宮御宇天皇代　天豊財重日足姫天皇

有間皇子自傷結二松枝一歌二首

磐白乃。濱松之枝乎。引結。眞幸有者。亦還見武。

磐代の、濱松が枝を、引結び、ま幸くあらば、復還り見む。

家有者。笥爾盛飯乎。草枕。旅爾之有者。椎之葉爾盛。

を速み―の速さに
雲居にぞ―雲居遙になる迄
あたりを―あたりより

津乃浦乎無美―略解の書入に「是は津能乃浦回乎の能と回を脫し無美は紛て入たりと見ゆ」

青駒の、足掻を速み、雲居にぞ、妹があたりを、過ぎて來にける。

秋山爾。落黃葉。須臾者。勿散亂曾。一云「知里勿亂曾」妹之當將見。

秋山に、落つる黃葉、暫らくは、な散り亂れそ、妹があたり見む。

或本歌一首幷短歌。

石見之海。津乃浦乎無美。浦無跡。人社見良目。濿無跡。人社見良目。吉咲八師。浦者雖無。縱惠夜思。濿者雖無。勇魚取。無邊乎指而。柔田津乃。荒磯之上爾。蚊青生。玉藻息都藻。明來者。浪己曾來依。夕去者。風己曾來依。浪之共。彼依此依。玉藻成。靡吾宿之。敷妙之。妹之手本乎。露霜乃。置而之來者。此道之。八十隈每。萬段。顧雖爲。彌遠爾。里放來奴。益高爾。山毛越來奴。早敷屋師。吾嬬乃兒我。夏草乃。思志萎而。將嘆。角里將見。靡此山。

反歌

石見之海。打歌山乃。木際從。吾振袖乎。妹將見香。

つぬさはふ—枕詞
ことさへぐ—枕詞
いくり—いは接頭語、石
さ寢る—さは接頭語
はふつたの—枕詞
肝向ふ—枕詞
大船の—枕詞
渡の山—石見國
妻籠る—枕詞
屋上の山—渡の山の附近にあるべし
妻籠る……渡らふ月の—「惜し」の序なるべし、實の月としては後の入日に叶はず
天傳ふ—枕詞
入日射しぬれ—夕日さしぬれば
敷妙の—枕詞

延都多乃。別之來者。肝向。心乎痛。念乍。顧爲騰。大舟之。渡乃山之。黄葉乃。散之亂爾。妹袖。清爾毛不見。嬬隱有。屋上乃山乃。（一云「室上山」）自雲間。渡相月乃。雖惜。隱比來者。天傳。入日刺奴禮。丈夫跡。念有吾毛。敷妙乃。衣袖者。通而沾奴。

「つぬさはふ、」石見の海の、「ことさへぐ、」辛の崎なる、「いくりにぞ、深海松生ふる、荒磯にぞ、玉藻は生ふる、玉藻なす、靡き寢し兒を、深海松の、深めて思へど、「さ寢る夜は、いくらもあらず、「はふつたの、」別れし來れば、「肝向ふ、」心を痛み、思ひつゝ、顧みすれど、「大船の、」渡の山の、黄葉の、散のまがひに、妹が袖、さやにも見えず、「妻籠る、」屋上の山の、雲間より、渡らふ月の、惜しけども、隱ひ來れば、「天傳ふ、」入日射しぬれ、丈夫と、思へる我も、「敷妙の、」衣の袖は、通りて濡れぬ。

反歌二首

青駒之。足掻乎速。雲居曾。妹之當乎。過而來計類。（一云「當者隱來計留」）

か青なる—かは接頭語
朝羽振る云々—風浪の立つを鳥の羽振に譬ふ
浪のむた—浪と共に
玉藻なす—玉藻の如くに
露霜の—枕詞
夏草の—枕詞
思ひ萎えて—なよ〳〵かにうなだれて物思ふさま
忍ぶ—我を慕ふ
石見のや—やは助詞
さやに—笹の風にさらさらと鳴る音
騒げども—それに心も奪はれずと補ふ

妹を、露霜の、おきてし來れば、此の道の、八十隈毎に、萬度、顧みすれど、彌遠に、里はさかりぬ。益高に、山も越え來ぬ。夏草の、思ひ萎えて、忍ぶらむ、妹が門見む。靡け此の山。

反歌

石見乃也。高角山之。木際從。我振袖乎。妹見都良武香。
石見のや、高角山の、木の間より、我が振る袖を、妹見つらむか。

小竹之葉者。三山毛清爾。亂友。吾者妹思。別來禮婆。
笹の葉は、み山もさやに、騒げども、我は妹思ふ、別れ來ぬれば。

或本反歌。

石見爾有。高角山乃。木間從文。吾袂振乎。妹見監鴨。

角鄣經。石見之海乃。言佐敝久。辛乃埼有。伊久里爾曾。深海松生流。荒磯爾曾。玉藻者生流。玉藻成。靡寐之兒乎。深海松乃。深目手思騰。左宿夜者。幾毛不有。

丹生の川―大和國、其の川を隔てゝ住みしなり　ゆく〳〵と―停りなくすらすらとの意か　戀ひたき―いと戀しき、一說「戀ひたむ」と訓ず　我がせ―一說「あおと」と訓ず、皇弟弓削皇子

角の浦―石見國那賀郡　浦ま―浦のめぐり　浦無しと―浦と稱する程のものも無しと　見らめ―見るらめ　よしゑやし―よしや　無けども―無けれども　いさなとり―枕詞　海邊―以下十句餘は海のことをいひて妹が事をいはん序とせり　にぎたづ―わたづの誤讀、石見國那賀郡かといふ

丹生の川、瀬は渡らずて、ゆく〳〵と、戀ひたき我がせ、いで通ひ來ね。

柿本朝臣人麻呂從二石見國一別レ妻上來時歌二首并短歌

石見乃海。角乃浦回乎。浦無等。人社見良目。潟無等。〔一云「礒無登」〕人社見良目。能咲八師。浦者無友。縱畫屋師。潟者無鞆。〔一云「礒者」〕鯨魚取。海邊乎指而。和多豆乃。荒礒乃上爾。香青生。玉藻息津藻。朝羽振。風社依米。夕羽振。浪社來縁。浪之共。彼縁此依。玉藻成。依宿之妹乎。〔一云「波之伎余思、妹之手本乎」〕露霜乃。置而之來者。此道乃。八十隈毎。萬段。顧爲騰。彌遠爾。里者放奴。益高爾。山毛越來奴。夏草之。念之奈要而。志怒布良武。妹之門將見。靡此山。

石見の海、角の浦まを、浦無しと、人こそ見らめ、潟無しと、人こそ見らめ、よしゑやし、浦は無けども、よしゑやし、潟は無けども、いさなとり、海邊を指して、にぎたづの、荒礒の上に、か青なる、玉藻沖つ藻、朝羽振る、風こそ寄せめ。夕羽振る、浪こそ來寄れ。浪のむた、かよりかくより、玉藻なす、依り寢し

耳によく似ば—話の如くならば、一說「耳によく似つ」話の通りとす
葦……我がせ—一說「アシノウレ、アナヤムワガセ」と訓ず、脚氣などなるべし
つとめ給ぶべし—自愛し給ふべし
古りにし—老いたる
た童—母の手去らぬ程の幼兒をいふ

遊士爾。吾者有家里。屋戸不借。令還吾曾。風流士者有。
みやびをに、我はありけり。宿かさず、歸せる我ぞ、みやびをにはある。

同石川女郎更贈二大伴田主中郎一歌一首

吾聞之。耳爾好似。葦若末乃。足痛吾勢。勤多扶倍思。
我が聞きし、耳によく似ば、葦芽の、あしなへ我がせ、つとめ給ぶべし。

右依二中郎足疾一。贈二此歌一問訊也。

大津皇子宮侍石川女郎贈二大伴宿禰宿奈麻呂一歌一首

古之。嫗爾爲而也。如此許。戀爾將沈。如手童兒。
古りにし、嫗にしてや、斯くばかり、戀に沈まむ、た童のごと。
一云。戀乎太爾忍金手武多和良波乃如。

長皇子與二皇弟一御歌一首

丹生乃河。瀨者不渡而。由久遊久登。戀痛吾弟。乞通來禰。

かきれつらむか―かきるは掻き入るにて垂髪をあげて結ぶこと、一説本文「入」は「上」の誤にて「揚げつらむか」
亂れたりとも―この垂れたる髪にて君に見え初めしなれば、たとひ亂れたりともこのまゝになし置きて上ぐまじ
橘の―古は衢大路の衢に木を植ゑしと見ゆ
八衢―幾筋にも道の別れたるところ、一筋ならず思ふこと多きに譬へたり
みやびを―風流なる男
おその―氣のきかぬおろかの、戯れていふ也

人皆は、今は長しと、たけと言へど、君が見し髪、亂れたりとも。

橘之。蔭履路乃。八衢爾。物乎曾念。妹爾不相而。　三方沙彌

橘の、蔭履む路の、八衢に、物をぞ思ふ、妹に逢はずて。

石川女郎贈ニ大伴宿禰田主ニ歌一首　元郎佐保大納言大伴卿之第二子母曰ニ巨勢朝臣ニ

遊士跡。吾者聞流乎。屋戸不借。吾乎還利。於曾能風流士。

みやびをと、我は聞けるを、宿貸さず、我を歸せり、おそのみやびを。

大伴田主字曰ニ仲郎ニ。容姿佳艶風流秀絶。見人聞者靡レ不ニ歎息ニ也。時有ニ石川女郎ニ。自成ニ雙栖之感ニ。恒悲ニ獨守之難ニ。意欲レ寄レ書未レ逢ニ良信ニ。爰作ニ方便ニ。而似ニ賤嫗ニ。已提ニ鍋子ニ。而到ニ寢側ニ。哽音蹢足。叩レ戸諮曰。東隣貧女將ニ取レ火來ニ矣。於レ是仲郎暗裏非レ識ニ冒隱之形ニ。慮外不レ堪ニ拘接之計ニ。任レ念取レ火。就跡歸去也。明後女郎既恥ニ自媒之可レ愧。復恨ニ心契之弗レ果。因作ニ斯歌ニ以贈諺戯焉。

大伴宿禰田主報贈歌一首

芳野河。逝瀨之早見。須臾毛。不通事無。有巨勢濃香毛。
吉野川、行く瀨の早み、暫しくも、淀むこと無く、ありこせぬかも。

吾妹兒爾。戀乍不有者。秋芽之。咲而散去流。花爾有猿尾。
我妹子に、戀ひつゝあらずは、秋萩の、咲きて散りぬる、花ならましを。

暮去者。鹽滿來奈武。住吉乃。淺香乃浦爾。玉藻苅手名。
夕さらば、潮滿ち來なむ、住吉の、淺香の浦に、玉藻刈りてな。

大船之。泊流登麻里能。絶多日二。物念痩奴、人能兒故爾。
大船の、はつる泊りの、たゆたひに、物思ひ痩せぬ、ひとの兒故に。

三方沙彌娶二園臣生羽之女一未レ經二幾時一臥レ病作歌三首

多氣婆奴禮。多香根者長寸。妹之髮。比來不見爾。掻入津良武香。三方沙彌
たけばぬれ、たかねば長き、妹が髮、此の頃見ぬに、かきれつらむか。

人皆者。今波長跡。多計登雖言。君之見師髮。亂有等母。元娘子

の自ら解るといふ義にてもありしか、契沖說には髮が涙にて濕れたりとす
早み―早き故に、下に「暫くもよどむ事なきが如く」と補ひ見よ
ありこせぬ―あれこそと同じく願ふ意、會ひ見たしと也
あらずは―あらんよりは一層の事
玉藻刈りてな―玉藻は皇女を譬ふ、「刈りてな」は「刈りてむ」
大船の……泊りの―序
はつる―舟の行きつくこと
たゆたひ―ゆら〳〵と動くこと、物思ふ心に譬ふる也
ひとの兒故に―他人の女なるものをの意、未だ得ぬ程なればなり
三方沙彌―三方は氏、沙彌は名か
たけばぬれ―たくは束ぬ、ぬるは解くる、一說、ぬる〳〵として結び難く

も
志賀山寺―崇福寺
戀ひつゝあらずは―戀ひつゝあらんよりは
標―後より來る人の便に設くるもの
己も世に―本文「母」は「我」の誤にて「己が世に」か
あさ川―苦しき思をする喩ならん、一説に男女相逢ふを川を渡るに譬へ、人言により中絕え行くは淺き中なる哉と歎きし意とす
醜の丈夫―自ら罵りていふ
丈夫の云々―古義に「マスラヲノコノ、コフレコソ」と訓ず、男子の戀ふればこそ也、從ふべし
もとゆひ―結びたる髮、契沖說に只髮の事
なれけれ―ぬるは解くる、人に戀ひらるれば髮

遺居而。戀管不有者。追及武。道之阿回爾。標結吾勢。
後れ居て、戀ひつゝあらずは、追ひ及かむ。道の隈わに、標結へ我が夫。

但馬皇女在二高市皇子宮一時竊接二穗積皇子一事旣形而後御作歌一首

人事乎。繁美許知痛美。己母世爾。未渡。朝川渡。
人言を、繁みこちたみ、己も世に、未だ渡らぬ、あさ川渡る。

舍人皇子御歌一首

丈夫哉。片戀將爲跡。嘆友。鬼乃益卜雄。尙戀二家里。
丈夫や、片戀せむと、歎けども、醜の丈夫、なほ戀ひにけり。

舍人娘子奉レ和歌一首

歎管。丈夫之戀。亂許曾。吾髮結乃。漬而奴禮計禮。
歎きつゝ、丈夫の戀ひ、亂れこそ、我がもとゆひの、ひぢてぬれけれ。

弓削皇子思二紀皇女一御歌四首

古に—古を
鳥—郭公
御井—秋津の離宮の附近にありしか

蘿生松柯—コケムセルマツガエ

玉松—玉は美稱、一說に、老松の葉の圓く繁りたるものといひ、又、玉は山の誤とす
はしき—かはゆらし
持ちて通はく—通はくは「通ふ」の延、松にそへて何とかいひ遣はせるをいふ也

但馬皇女—高市皇女穂積皇子と共に異母兄妹
穂向—稻の穂は一方に寄り靡けば譬ふ
片寄に—一概に
緣りなゝ—よりなん
こちたかりとも—世間の評判は如何にうるさくとも

古爾。戀流鳥鴨。弓弦葉乃。三井能上從。鳴渡遊久。
古に、戀ふる鳥かも、譲葉の、御井の上より、鳴き渡り行く。

額田王奉レ和歌一首 元從二倭京一進入。

古爾。戀良武鳥者。霍公鳥。蓋哉鳴之。吾戀流其騰。
古に、戀ふらむ鳥は、郭公、蓋しや鳴きし、我が戀ふるごと。

從二吉野一折二取蘿生松柯一遣時額田王奉レ入歌一首

三芳野乃。玉松之枝者。波思吉香聞。君之御言乎。持而加欲波久。
三吉野の、玉松が枝は、はしきかも。君が御言を、持ちて通はく。

但馬皇女在二高市皇子宮一時思二穂積皇子一御歌一首

秋田之。穂向之所緣。異所緣。君爾因奈名。事痛有登母。
秋の田の、穂向の寄れる、片寄に、君に緣りなゝ、こちたかりとも。

勅二穂積皇子一遣二近江志賀山寺一時但馬皇女御作歌

足引の―枕詞

竊婚―シヌビテアヒ給ヘルと訓ず

津守連通―陰陽道に勝れたる人

大船の―枕詞

遠方……かやの―「束」の緣語

足日木乃。山之四附二。妹待跡。吾立所沾。山之四附二。
足引の、山の雫に、妹待つと、我立ち濡れぬ、山の雫に。

石川郎女奉レ和歌一首

吾乎待跡。君之沾計武。足日木能。山之四附二。成益物乎。
我を待つと、君が濡れけむ、足引の、山の雫に、ならましものを。

大津皇子竊二婚石川女郎一時津守連通占二露其事一皇子御作歌一首

大船之。津守之占爾。將告登波。益爲爾知而。我二人宿之。
大船の、津守が占に、のらむとは、正しに知りて、我が二人寢し。

日並皇子尊贈二賜石川女郎一御歌一首　元女郎字曰二大名兒一也

大名兒、彼方野邊爾。苅草乃。束間毛。吾忘目八。
大名兒を、遠方野邊に、刈るかやの、束の間も、我忘れめや。

幸二于吉野宮一時弓削皇子贈二與額田王一歌一首

我が里に、大雪降れり。大原の、古りにし里に、降らまくは後。

藤原夫人奉レ和歌一首

吾岡之。於可美爾言而。令落。雪之摧之。彼所爾塵家武。

我が岡の、おかみに言ひて、降らせたる、雪の摧けし、そこに散りけむ。

藤原宮御宇天皇代　元高天原廣野姫天皇　今天皇謚曰二持統天皇一

大津皇子竊下二於伊勢神宮一上來時大伯皇女御作歌

吾勢枯乎。倭邊遣登。佐夜深而。鷄鳴露爾。吾立所霑之。

我が背子を、大和へやると、さ夜更けて、曉露に、我立ち濡れし。

二人行杼。去過難寸。秋山乎。如何君之。獨越武。

二人行けど、行き過ぎ難き、秋山を、いかでか君が、一人越えなむ。

大津皇子贈二石川郎女一御歌一首

大原—藤原ともいひ、藤原氏の本居地、この歌は夫人のこゝに下り居し時に戯によみて賜ひしならん

降らまくは後—大原わたりに降るはこゝより後ならんの意

おかみ—雨雪を降らしむる龍神

摧けし—しは強辭

背子—女より男を親みて呼ぶ語

さ夜更けて云々—別のかなしさに見送りすとて外に立ち居たる也

行き過ぎ難き云々—秋の山は物寂しければ也

東人之。荷向篋乃。荷之緒爾毛。妹情爾。乘爾家留香聞。禪師
東人の、荷前箱の、荷の緒にも、妹が心に、乘りにけるかも。

大伴宿禰娉二巨勢郎女一時歌一首

玉葛。實不成樹爾波。千磐破。神曾著常云。不成樹別爾。
玉葛、實ならぬ樹には、ちはやぶる、神ぞ著くとふ、ならぬ樹毎に。

巨勢郎女報贈歌一首

玉葛。花耳開而。不成者。誰戀有目。吾孤悲念乎。
玉葛、花のみ咲きて、ならざるは、誰が戀ならめ、我は戀ひもふを。

明日香清御原宮御宇天皇代　天渟名原瀛眞人天皇

天皇賜二藤原夫人一御歌一首

吾里爾。大雪落有。大原乃。古爾之郷爾。落卷者後。

荷前—年毎にはじめて貢る調物

荷の緒云々—荷の緒の如くにも、荷前を箱に入れて紐にて馬に結びつけて上る故に荷の緒といひ乘るといふ

妹が心に云々—妹が事の常に我が心の頭にあるをいふ

玉葛—「實なる」の序

ちはやぶる—枕詞

神ぞ著くとふ—「とふ」は「といふ」の約、當時の諺を利用して淺はかな戀をすると神がのりつくぞと怖しがらせをいふなるべし

誰が戀云々—仰の如く淺はかな戀は抑々誰が上にや、我は心底から戀ひ思ふものを

天皇—天武

采女—古諸國より貢せる女
我はもや—もやは感動詞
久米禪師—俗人の名、久米は氏、禪師は名
みすゞ刈る—枕詞、一説「水篶刈」の字にて「みこもかる」と訓ぜり
信濃の—弓は古甲斐信濃より貢したりといふ
うま人—貴人即ち石川郎女をさす
さびて—をとめさび翁さびの類、其方に深く進む意、ぐつと貴人ぶつてなど解すべし
緒はくるわざ—本文「強」は「弦」の誤、緒は弦、はくは懸くる意
梓弓—枕詞
引かば云々—引くに隨ひて
知りがてぬ—知り難きかな
つらを—蔓緒にて弦のこと

内大臣藤原卿娶二采女安見兒一時作歌一首

吾者毛也。安見兒得有。皆人乃。得難爾爲云。安見兒衣多利。
我はもや、安見兒得たり。皆人の、得がてにすとふ、安見兒得たり。

久米禪師娉二石川郎女一時歌五首

水篶苅。信濃乃眞弓。吾引者。宇眞人佐備而。不言常將言可聞。禪師
みすゞ刈る、信濃の眞弓、我が引かば、うま人さびて、いなと言はむかも。

三篶苅。信濃乃眞弓。不引爲而。強作留行事乎。知跡言莫君二。郎女
みすゞ刈る、信濃の眞弓、引かずして、緒はくるわざを、知ると云はなくに。

梓弓。引者隨意。依目友。後心乎。知勝奴鴨。郎女
梓弓、引かばまにまに、寄らめども、後の心を、知りがてぬかも。

梓弓。都良絃取波氣。引人者。後心乎。知人曾引。禪師
梓弓、つらを取りはけ、引く人は、後の心を、知る人ぞ引く。

かくり―隱れて
行く水の―のは如くの意

玉櫛笥―枕詞
覆ふ云々―こゝまで「明けて」の序
明けて―夜が明けて
君が名は云々―本文君と吾と交互に誤りたるものか、一說、君は男なれば名の立つも苦しかるまじけれど我は誠に羞しの意と解せり
三室の山―三輪山
さなかづら―さねかづら、一種の蔓草、こゝまで「さ寝ずは」の序
さ寝ずは―さは接頭語、寢ずには
ありがてまし―生きながらへ難からん、死んでしまはん

一云。妹之當繼而毛見武爾。
一云。家居麻之乎。

鏡王女奉レ和御歌一首　鏡王女又曰二額田姫王一也。

秋山之。樹下隱。逝水乃。吾許曾益目。御念從者。
秋山の、木の下がくり、行く水の、吾こそ增さめ、御思よりは。

內大臣藤原卿娉二鏡王女一時鏡王女贈二內大臣一歌一首

玉匣。覆乎安美。開而行者。君名者雖有。吾名之惜毛。
玉櫛笥、覆ふを安み、明けて往なば、君が名はあれど、我が名し惜しも。

內大臣藤原卿報二贈鏡王女一歌一首

玉匣。將見圓山乃。狹名葛。佐不寐者遂爾。有勝麻之目。
玉櫛笥、三室の山の、さなかづら、さ寝ずは遂に、ありがてましも。
或本歌云。玉匣三室戸山乃。

天皇—天智

鏡王女—鏡女王の誤、大和國平群郡に家ありて遷都後もそこに住みしかば

つぎて云々—打ちつゞきても見たきに

大島のね云々—ねは峰、高き峰に住まばその方を望む便もあればなり

聽。爰天皇歌以乞ニ於皇后一之。三十年秋九月乙卯朔乙丑。皇后遊ニ行紀伊國一到ニ熊野岬一。取ニ其處之御綱葉一而還。於レ是天皇伺ニ皇后不レ在而娶ニ八田皇女一納ニ於宮中一。時皇后到ニ難波津一。聞ニ天皇合ニ八田皇女一大恨レ之云云。亦曰。遠飛鳥宮御宇雄朝嬬稚子宿禰天皇廿三年春正月甲午朔庚子。木梨輕皇子爲ニ太子一。容姿佳麗。見者自感。同母妹輕大娘皇女亦艷妙也云云。遂竊通。乃悒懷少息。廿四年夏六月。御羹汁凝以作レ氷。天皇異レ之トニ其所由一。卜者曰。有ニ內亂一。盖親親相姦乎云云。仍移ニ大娘皇女於伊豫一者。今案ニ代二時不レ見ニ此歌一也。

近江大津(オホツノ)宮御宇天皇代　天命開別(アメミコトヒラカスワケノ)天皇。

天皇賜ニ鏡王女一御歌一首

妹之家毛。繼而見麻思乎。山跡有。大島嶺爾。家母有猿尾。

妹(いも)が家(いへ)も、つぎて見(み)ましを、大和(やまと)なる、大島(おほしま)のねに、家(いへ)もあらましを。

ありつゝも云々—このまゝ生きながらへて君の來るまで待たん

きらふ—曇る

在管裳。君乎者將待。打靡。吾黑髮爾。霜乃置萬代日。

ありつゝも、君をば待たむ、打靡く、我黑髮に、霜の置くまでに。

秋之田。穗上爾霧相。朝霞。何時邊乃方二。我戀將息。

秋の田の、穗の上にきらふ、朝霞、何邊の方に、我が戀止まむ。

或本歌曰。

居明而。君乎者將待。奴婆珠乃。吾黑髮爾。霜者零騰文。

右一首古歌集中出。

古事記曰。輕太子奸二輕大郎女一。故其太子流二於伊豫湯一也。此時衣通王不レ堪二戀慕一而追往時歌曰。君之行。氣長久成奴。山多豆乃。迎乎將往。待爾者不待。此云二山多豆一者。是今造レ木者也。

右一首歌。古事記與二類聚歌林一所レ說不レ同。歌主亦異焉。因檢二日本紀一曰。難波高津宮御宇。大鷦鷯天皇廿二年春正月。天皇語二皇后一。納二八田皇女一將レ爲レ妃。時皇后不レ

相聞—シタシミウタと訓ず、戀歌を主として相親の情を歌へる歌を集む

天皇—仁德

迎へか—「か」の上に「に」を略す

戀ひつゝあらずは—戀ひつゝあらんよりは
しまきて—しは強辭、枕にして

萬葉集巻第二

相聞

難波高津宮御宇天皇代　大鷦鷯天皇

磐姫皇后思二天皇一御作歌四首

君之行。氣長成奴。山多都禰。迎加將行。待爾可將待。

君が行き、け長くなりぬ。山尋ね、迎へか行かむ、待ちにか待たむ

右一首歌。山上憶良臣類聚歌林載焉。

如此許。戀乍不有者。高山之。磐根四巻手。死奈麻死物乎。

斯くばかり、戀ひつゝあらずは、高山の、岩根しまきて、死なましものを。

寧樂宮

長皇子與志貴皇子於佐紀宮倶宴歌

秋去者。今毛見如。妻戀爾。鹿將鳴山曾。高野原之宇倍。

秋去らば、今も見る如、妻戀に、鹿鳴かむ山ぞ、高野原のうへ。

右一首長皇子。

佐紀宮—添下郡高野原にありし長皇子の宮か

秋去らば—今の如く交情も變らずつきあはんとの意を妻戀ふ鹿によせて詠みしならん

見がてり—見がてら

うらさぶる云々—うらさびしき心

さまみし—一說、彌は「禰」の誤にて「さまねし」と訓ず、さは接頭語、まねしは間無しの意

久方の—」枕詞

流らふ—降る

海の底云々—立の序

立田山—大和國平群郡

青丹吉。寧樂乃家爾者。萬代爾。吾母將通。忘跡念勿、
青丹吉、寧樂の家には、萬代に、我も通はむ、忘ると思ふな。

右歌作主未レ詳。

和銅五年壬子夏四月遣二長田王于伊勢齋宮一時山邊御井作歌

山邊乃。御井乎見我氐利。神風乃。伊勢處女等。相見鶴鴨。
山の邊の、御井を見がてり、神風の、伊勢少女ども、逢ひ見つるかも。

浦佐夫流。情佐麻彌之。久堅乃。天之四具禮能。流相見者。
うらさぶる、心さまみし、久方の、天の時雨の、流らふ見れば。

海底。奥津白浪。立田山。何時鹿越奈武。妹之當見武。
海の底、沖つ白浪、立田山、何時か越えなむ、妹があたり見む。

右二首今案不レ似二御井所レ作。若疑當時誦二之古歌一歟。

或本從二藤原京一遷二于寧樂宮一時歌

天皇乃。命畏美。柔備爾之。家乎擇。隱國乃。泊瀨乃川爾。舼浮而。吾行河乃。川隈之。八十阿不落。萬段。顧爲乍。玉桙乃。道行晩。青丹吉。楢乃京師乃。佐保川爾。伊去至而。我宿有。衣乃上從。朝月夜。清爾見者。栲乃穗爾。夜之霜落。磐床等。川之氷凝。冷夜乎。息言無久。通乍。作家爾。千代二手來。座牟公與。吾毛通武。

天皇の、命畏み、にきびにし、家を離りて、こもりくの、泊瀨の川に、船浮けて、我が行く川の、川隈の、八十隈落ちず、萬度、顧みしつゝ、玉桙の、道行き暮し、青丹吉、奈良の都の、佐保川に、い行き至りて、我が寢たる、衣の上ゆ、朝月夜、さやに見れば、栲のほに、夜の霜降り、磐床と、川の氷凝り、冴ゆる夜を、いこふ事なく、通ひつゝ、造れる家に、千代までに、座さむ君と、我も通はむ。

反歌

て他に往かば
君―明日香に止る人々をさすか

命畏み―勅命を拜して
にきびにし家―住みなれし家
離りて―本文「擇」は「放」の誤
こもりくの―枕詞
川隈―川の曲りたる所
玉桙の―枕詞
青丹吉―枕詞
い行き―いは接頭語
衣の上ゆ―衣は「床」の誤か、「ゆ」はより、まだ假屋にて夜床の上より月影の見えてわびしき樣を敍したる也
朝月夜―有明の月
栲のほに―栲は白布、ほは色、白布の如くに眞白に
いこふ―休む

右一首長屋王。

和銅元年戊申天皇御製歌

丈夫之。鞆乃音爲奈利。物部乃。大臣。楯立良思母。

丈夫の、鞆の音すなり。武士の、大臣、楯立つらしも。

御名部皇女奉レ和御歌

吾大王。物莫御念。須賣神乃。嗣而賜流。吾莫勿久爾。

我が大君、物な思ほし、皇神の、嗣ぎて給へる、我無けなくに。

和銅三年庚戌春二月従二藤原宮一遷二于寧樂宮一時御輿停二長屋原一廻望二古郷一御作歌

一書云。太上天皇御製。

飛鳥。明日香能里乎。置而伊奈婆。君之當者。一云「君之當乎。不見而香毛安良牟」不所見香聞安良武。

飛ぶ鳥の、明日香の里を、おきて往なば、君があたりは、見えずかもあらむ。

天皇—元明

鞆—左臂に著け弓弦の之に觸れて勇ましき音を立たしむべくしたる武具

武士の大臣—軍の大將

物な思ほし—御心配遊ばす勿れ

皇神の云々—皇神のよざしつがせ給へる、この三四の句を初句の上に廻して見よ

我無けなくに—我無きに非ず、一説本文「吾」は「君」の誤

從藤原宮云々—藤原宮は明日香宮の誤、寧樂宮は藤原宮の誤か

飛ぶ鳥の—枕詞

おきて往なば—捨て置き

敷妙の―枕詞

はやみ―地名なるべし、妹を早く見んの意を含めり

我をまつ椿―「まつ」に待つと松を掛けて園中の松椿と續けし也

吹かざるなゆめ―風よ吹き通へかしの意

寒けくに―寒くあるのに

はた―また

宇治間山―吉野にあり

衣かすべき―古は男女互に衣をかりて著たり

玉藻苅。奥敝波不榜。敷妙之。枕之邊。忘可禰津藻。
玉藻刈る、沖へは漕がじ、敷妙の、枕のあたり、忘れかねつも。

右一首式部卿藤原宇合。

長皇子御歌

吾妹子乎。早見濱風。倭有。吾松椿。不吹有勿勤。
我妹子を、はやみ濱風、倭なる、我をまつ椿、吹かざるなゆめ。

大行天皇幸二于吉野宮一時歌

見吉野乃。山下風之。寒久爾。爲當也今夜毛。我獨宿牟。
三吉野の、山の嵐の、寒けくに、はたや今宵も、我が一人寢む。

右一首或云天皇御製歌。

宇治間山。朝風寒之。旅爾師手。衣應借。妹毛有勿久爾。
宇治間山、朝風寒し、旅にして、衣かすべき、妹もあらなくに。

御津—攝津國
忘貝—こゝまで序
忘れて思へや—思ふ事を忘れんや

草枕—枕詞
岸—住吉の岸
埴生—あかつち、古へかゝる物を染料とせしならん

倭—藤原あたりをさす
來らむ—行くらむといふに同じ
象の中山—吉野の秋津の宮の近くにあり
大行天皇—崩御後御謚を奉らぬ間の稱、こゝは文武天皇。

寢らえぬに—寢られぬに
鳴くべしや—鳴きて我に物思はするは何たる事ぞや

大伴の、御津の濱なる、忘貝、家なる妹を、忘れて思へや。

右一首身人部王。

草枕。客去君跡。知麻世婆。岸之埴布爾。仁寶播散麻思乎。

草枕、旅行く君と、知らませば、岸の埴生に、匂はさましを。

右一首清江娘子進二長皇子一。

太上天皇幸二于吉野宮一時高市連黑人作歌

倭爾者。鳴而歟來良武。呼兒鳥。象乃中山。呼曾越奈流。

倭には、鳴きてか來らむ、呼子鳥、象の中山、呼びぞ越ゆなる。

大行天皇幸二于難波宮一時歌

倭戀。寢之不所宿爾。情無。此渚崎爾。多津鳴倍思哉。

倭戀、寢の寢らえぬに、情無く、此の洲の崎に、鶴鳴くべしや。

右一首忍坂部乙麻呂。

羽交—左右の翅の打ち交ふ所
霰打つ—枕詞
あられ松原—山城國宇治川の沿岸にまばらに立てる松原をいふ、この句の下に「と」を補ひて見よ
住吉—攝津國住吉郡
おとひ少女—おとゝひ、姉妹
大伴の—枕詞
まきて—枕にして、一説本文「杼」は「夜」の誤
高師の濱—和泉國大島郡とも、攝津國難波ともいふ

葦邊行く、鴨の羽交に、霜降りて、寒き夕は、大和し思ほゆ。

長皇子御歌

霰打。安良禮松原。住吉之。弟日娘與。見禮常不飽香聞。
霰打つ、あられ松原、住吉の、おとひ少女と、見れど飽かぬかも。

太上天皇幸二于難波宮一時歌

大伴乃。高師能濱乃。松之根乎。枕宿杼。家之所偲由。
大伴の、高師の濱の、松が根を、まきてし寢れど、家し偲ばゆ。

右一首置始東人。

旅爾之而。物戀之伎乃。鳴事毛。不所聞有世者。孤悲而死萬思。
旅にして、物戀ふ鴫の、鳴くことも、聞えざりせば、戀ひて死なまし。

右一首高安大島。

大伴乃。美津能濱爾有。忘貝。家爾有妹乎。忘而念哉。

廬—行宮、長皇子妃又は皇子の思人の此行幸に出立てりしならん
さつ矢—獵に用ゐる矢
立ち向ひ—こゝまで下のまと(的)の序
まとかた—伊勢國多氣郡か
在根良—(一)布根畫、布根竟(フネハツル)(二)百船能(モヽフネノ)(三)百船舟(モヽツフネ)等諸說あり
わた中—海中、海路平かならんため海神に幣奉れといふ意
子供—船中の人々
日本へ—下に「歸らむ」と補ふ
大伴の—枕詞
御津—攝津國、西國へ行きかふ船の出入せし港
寒暮夕—「夕」は「者」の誤
和—「倭」の誤

丈夫之。得物矢手插。立向。射流圓方波。見爾清潔之。
丈夫が、さつ矢手挾み、立ち向ひ、射るまとかたは、見るにさやけし。

三野連名闕入レ唐時春日藏首老作歌

在根良。對馬乃渡。渡中爾。幣取向而。早還許年。
ありねよし、對馬の渡、わた中に、幣取り向けて、早歸り來ね。

山上臣憶良在二大唐一時憶二本鄕一歌

去來子等。早日本邊。大伴乃。御津乃濱松。待戀奴良武。
いざ子供、早も日本へ、大伴の、御津の濱松、待ち戀ひぬらむ。

慶雲三年丙午幸二于難波宮一時

志貴皇子御作歌

葦邊行。鴨之羽我比爾。霜零而。寒暮夕。和之所念。

引馬野―遠江國敷智郡
はり原―榛林
衣匂はせ―旅行に摺衣を著る習あればいふ
船はてすらむ―船とまるならん
あれの崎―美濃國不破郡荒崎か
漕ぎたみ―漕ぎめぐり
棚無小舟―棚は船の兩舷に渡せる板、小舟には棚なければいふ
ながらふる―寢衣の裾の長きをいふなるべし
端―衣の端、一說本文「妻」は「雪」の誤
面無み―はづかしき故に、「宵」よりこゝまで「なばり」といふ爲の緣語
なばり―伊賀國名張郡、隱るの古語
け長き妹―久しく別れ居る妹

引馬野に、匂ふはり原、入り亂り、衣匂はせ、旅のしるしに。

右一首長忌寸奧麻呂。

何所爾可。船泊爲良武。安禮乃崎。榜多味行之。棚無小舟。
何所にか、船はてすらむ。あれの崎、漕ぎたみ行きし、棚無小舟。

右一首高市連黑人。

譽謝女王作歌

流經。妻吹風之。寒夜爾。吾勢能君者。獨香宿良武。
ながらふる、端吹く風の、寒き夜に、我が夫の君は、獨か寢らむ。

長皇子御歌

暮相而。朝面無美。隱爾加。氣長妹之。廬利爲里計武。
宵に逢ひて、朝面無み、なばりにか、け長き妹が、庵せりけむ。

舍人娘從駕作歌

「武」の誤にて、「あれつが むにかといふ
少女がとも―少女等
しき召さるかも―しげし
げと召さるゝ事かな

つら〳〵椿―多く生ひつ
ちなりたる椿、椿林
つら〳〵に―つく〴〵と
思ふな―思ふ事よ

あさもよし―枕詞
ともしも―うらやましき
かな
まつち山―大和に近き所
の紀伊の山

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸二于紀伊國一時歌

巨勢山之。列列椿。都良都良爾。見乍思奈。許湍乃春野乎。

巨勢山の、つら〳〵椿、つら〳〵に、見つゝ思ふな、巨勢の春野を。

右一首坂門人足。

朝毛吉。木人乏母。亦打山。行來跡見良武。樹人友師母。

あさもよし、紀人ともしも、まつち山、往來とみらむ、紀人ともしも。

右一首調首淡海。

或本歌。

河上乃。列列椿。都良都良爾。雖見安可受。巨勢能春野者。

右一首春日藏首老。

二年壬寅太上天皇幸二于參河國一時歌

引馬野爾。仁保布榛原。入亂。衣爾保波勢。多鼻能知師爾。

我ご大君―ごはがに同じ
荒妙の―枕詞
在り立たし―立たせ給ひて
めし給へば―見給へば
青香具山―青は木の繁く榮え居るをいふ
日の經の云々―香具山は東門に向へるをいふ
しみさび―神々しく茂りて
みづ山―木のみづ〳〵しく若くうるはしき山の意
日の緯の―畝火山の南門に向へるをいふ、緯一に「ぬき」と訓ず
耳梨―本文「耳高」は「耳爲」(ミヽナシ)の誤か
青菅山―常緑なる山菅の茂れる山をいふ
そともの―背面の、北面の
よろしなへ云々―山形整然としておごそかなるをいふ
名ぐはし―枕詞
かげともの云々―かげともは南、吉野山の南門より遙に望まるゝをいふ
高知るや云々―高知るや、天知るや、何れも枕詞、天の影日の影のうつる此淸水こそ云々の意
あれつげや―あれつげばにや、あれつぐは生れ繼ぐの意、一說本文「哉」は

知也。日御影乃。水許曾波。常爾有米。御井之淸水。

やすみしゝ、我ご大君、高光る、日の皇子、荒妙の、藤井が原に、大御門、始め給ひて、埴安の、堤の上に、在り立たし、めし給へば、大和の、青香具山は、日の經の、大御門に、春山と、しみさび立てり、畝火の、此みづ山は、日の緯の、大御門に、みづ山と、山さび座す。耳梨の、青菅山は、そともの、大御門に、よろしなへ、神さび立てり、名ぐはし、吉野の山は、かげともの、大御門ゆ、雲居にぞ、遠くありける。高知るや、天の御影、天知るや、日の御影の、水こそは、常にありなめ、御井の眞淸水。

短歌

藤原之。大宮都加倍。安禮衝哉。處女之友者。之吉召賀聞。

藤原の、大宮仕、あれつげや、少女がともは、しき召さるかも。

右歌作者未レ詳。

すみ
巨勢路—高市郡
ふみ負へる云々—支那禹王の時靈龜圖を負ひて洛水に出でし故事
泉の川—山城國相樂郡、出づに掛く
百たらず—枕詞
いそはく見れば—かく人民の諸國よりあつまり來りて仕へまつるも天皇の神にておはします故なるべしとの意

手弱女—丈夫に對する女、こゝは宮女をさす
明日香風—明日香に吹く風

見れば、神ながらならし。

右日本紀曰。朱鳥七年癸巳秋八月幸㆓藤原宮地㆒。八年甲午春正月幸㆓藤原宮㆒。冬十二月庚戌朔乙卯遷㆓居藤原宮㆒。

從㆓明日香宮㆒遷㆓居藤原宮㆒之後志貴皇子御作歌

婇女乃。袖吹反。明日香風。京都乎遠見。無用爾布久。
手弱女の、袖吹き反す、明日香風、都を遠み、徒に吹く。

藤原宮御井歌

八隅知之。和期大王。高照。日之皇子。麁妙乃。藤井我原爾。大御門。始賜而。埴安乃。堤上爾。在立之。見之賜者。日本乃。青香具山者。日經乃。大御門爾。春山跡。之美佐備立有。畝火乃。此美豆山者。日緯能。大御門爾。彌豆山跡。山佐備伊座。耳高之。青菅山者。背友乃。大御門爾。宜名倍神佐備立有。名細。吉野乃山者。影友乃。大御門從。雲居爾曾。遠久有家留。高知也。天之御蔭。天

荒妙の―枕詞
をす國を云々―天が下を知ろし召さんと
みあらか―宮殿
思ほすなへに―おぼしめすまゝに
よりてあれこそ―こその上に「ば」を略す
石橋の―枕詞
衣手の―枕詞
田上山―近江國栗本郡
眞木―檜杉類の總名
つまで―斧もて裂きて木造せし材
武士の―枕詞
浮べ流せれ―下に「ば」を補ふ
家忘れ云々―家をも身をも顧みず
鴨じ物―枕詞
日の御門―藤原の宮をさ

海乃國之。衣手能。田上山之。眞木佐苦。檜乃嬬手乎。物乃布能。八十氏河爾。玉藻成。浮倍流禮。其乎取登。散和久御民毛。家忘。身毛多奈不知。鴨自物。水爾浮居而。吾作。日之御門爾。不知國依。巨勢道從。我國者。常世爾成牟。圖負留。神龜毛。新代登。泉乃河爾。持越流。眞木乃都麻手乎。百不足。五十日太爾作。泝須良牟。伊蘇波久見者。神隨爾有之。

やすみしゝ、吾大君、高光る、日の皇子、荒妙の、藤原が上に、をす國を、めし給はむと、みあらかに、高知らさむと、神隨、思ほすなへに、天地も、よりてあれこそ、石橋の、近江の國の、衣手の、田上山の、眞木さく、檜のつまでを、武士の、やそ宇治川に、玉藻なす、浮べ流せれ、そを取ると、さわぐ御民も、家忘れ、身もたな知らず、鴨じ物、水に浮き居て、我が造る、日の御門に、知らぬ國より、巨勢路より、我が國に、常世にならむ、ふみ負へる、神龜も、新代と、泉の川に、持ち越せる、眞木のつまでを、百足らず、筏に作り、上すらむ、いそはく

陽炎の―枕詞、本文「限」は「蜻」の誤か
夕さり來れば―夕になりくれば
旗薄―薄は高く穗に出て旗の如くなればいふとぞ
しのを押しなべ―其薄のしなひをおしなびかせ
草枕―枕詞
旅宿りせす―旅宿りし給ふ
古思ひて―父草壁皇子の嘗て安騎に獵し給ひし跡を慕ひて
短歌―反歌と同義
旅人―供奉の朝臣
うちなびき―安らかに手足を延して
眞草―薄芽などをいふ
黄葉の―人の死ぬことを黄葉の散り行くに譬へし例多し、本文「葉」の上に「黄」を脱す
陽炎の立つ―曙色の催すをいふ
日並知の皇子―御父草壁皇子
時は來向ふ―其時は今やめぐり來れり

短歌

阿騎乃野爾。宿旅人。打靡。寢毛宿良目八方。古部念爾。
安騎の野に、宿る旅人、打靡き、寢も寢らめやも、古思ふに。

眞草苅。荒野二者雖有。葉。過去君之。形見跡曾來師。
眞草苅る、荒野にはあれど、黄葉の、過ぎにし君が、形見とぞ來し。

東。野炎。立所見而。反見爲者。月西渡。
東の、野に陽炎の、立つ見えて、顧みすれば、月傾きぬ。

日雙斯。皇子命乃。馬副而。御獵立師斯。時者來向。
日並知の、皇子の命の、馬並めて、御獵立たしゝ、時は來向ふ。

藤原宮之役民作歌

八隅知之。吾大王。高照。日之皇子。荒妙乃。藤原我宇倍爾。食國乎。賣之賜牟登。都宮者。高所知武等。神長柄。所念奈戸二。天地毛。縁而有許曾。磐走。淡

安騎野—宇陀郡

やすみしゝ—枕詞
高光る—枕詞
日の皇子—天皇
太敷かす—宏大なる、立派なる
こもりくの—枕詞
眞木—檜、深山に生ふ
しもと—本文「禁」は「楚」の誤か、若き木立の茂りたるをいふ
坂鳥の—枕詞

右日本紀曰。朱鳥六年壬辰春三月丙寅朔戊辰。以二淨廣肆廣瀬王等一爲二留守官一。於レ是中納言三輪朝臣高市麻呂脱二其冠位一擎二上於朝一。重諫曰。農作之前車駕未レ可二以動一。辛未天皇不レ從レ諫。遂幸二伊勢一。五月乙丑朔庚午御二阿胡行宮一。

輕皇子宿二于安騎野一時柿本朝臣人麻呂作歌

八隅知之。吾大王。高照。日之皇子。神長柄。神佐備世須登。太敷爲。京乎置而。隱口乃。泊瀬山者。眞木立。荒山道乎。石根。禁樹押靡。坂鳥乃。朝越座而。玉限。夕去來者。三雪落。阿騎乃大野爾。旗須爲寸。四能乎押靡。草枕。多日夜取世須。古昔念而。

やすみしゝ、我大君、高光る、日の皇子、神ながら、神さびせすと、太敷かす、京をおきて、こもりくの、泊瀬の山は、眞木立つ、荒山道を、石が根の、しもと押しなべ、坂鳥の、朝越えまして、陽炎の、夕さり來れば、み雪降る、安騎の大野に、旗薄、しのを押しなべ、草枕、旅宿りせす、古思ひて。

あごの浦—志摩國英虞(アゴ)郡、こゝに行宮ありしなり
少女等—御供の女官等
釧著く—枕詞
答志の崎—志摩國
今もかも—今や恰も
潮さゐに—潮さわぎ、潮の滿ち來る時波のさわぐをいふ
いらご—三河國、其の崎長く突出してたぶしの崎と對し其の間に多くの島あり
おきつもの—枕詞
なばりの山—伊勢國名張郡、なばりは隱るの古語か
我妹子—妻
いさみの山—所在未詳、いざ見むとするにいさみの山のと掛詞なるべし
高みかも—高ければにや
大和—妻の居るところ

嗚呼見乃浦爾。船乘爲良武。𡢳嬬等之。珠裳乃須十二。四寶三都良武香。
あごの浦に、船乘すらむ、少女等が、珠裳の裾に、潮滿つらんか。

釧著。手節乃崎二。今毛可母。大宮人之。玉藻苅良武、
釧著く、答志の崎に、今もかも、大宮人の、玉藻刈るらむ。

潮左爲二。五十良兒乃島邊。榜船荷。妹乘良六鹿。荒島回乎。
潮さゐに、いらごの濱邊、漕ぐ船に、妹乘るらむか、荒き島わを。

當麻眞人麻呂妻作歌

吾勢枯波。何所行良武。己津物。隱乃山乎。今日香越等六。
我が兄は子、何所行くらむ。おきつもの、なばりの山を、今日か越ゆらむ。

石上大臣從駕作歌

吾妹子乎。去來見乃山乎。高三香裳。日本能不所見。國遠見可聞。
我妹子を、いさみの山を、高みかも、大和の見えぬ、國遠みかも。

神ながら―天皇は卽神にまします故にの意
神さびせす―神嚴ならしめんとしての意
たゝなはる―幾重も〳〵立ち重りたる意の枕詞
青垣山―青山垣の如くそばだてるをいふ
鵜川を立て―鵜川は鵜飼、鵜飼をする人を立たしめ
神の御代―聖代
せす―なし給ふ

立。下瀨爾。小網刺渡。山川母。依氏奉流。神乃御代鴨。

やすみしゝ、我が大君、神ながら、神さびせすと、吉野川、たぎつ河內に、高殿を、高知り座して、登り立ち、國見をすれば、たゝなはる、青垣山の、山神の、まつる貢と、春べは、花かざし持ち、秋立てば、黃葉かざせり。ゆふ川の、神も、大御食に、仕へまつると、上つ瀨に、鵜川を立て、下つ瀨に、小網さし渡し、山川も、よりて仕ふる、神の御代かも。

反歌

山川毛。因而奉流。神長柄。多藝津河內爾。船出爲加母。

山川も、よりて仕ふる、神ながら、たぎつ河內に、船出せすかも。

右日本紀曰。三年己丑正月天皇幸二吉野宮一。八月幸二吉野宮一。四年庚寅二月幸二吉野宮一。五月幸二吉野宮一。五年辛卯正月幸二吉野宮一。四月幸二吉野宮一者未レ詳二知何月從駕作歌一。

幸二于伊勢國一時留レ京柿本朝臣人麻呂作歌

やすみしゝ―枕詞
聞こしをす―聞こしめす、治め給ふ
さはに―多く
山川―山と川
河内―川の行きめぐれる所
御心を―枕詞
花散らふ―花の散る
宮柱云々―天皇離宮におはすをいふ
百敷の―枕詞
大宮人―朝臣
彌高良之―高の字「加」を脱せるか
石走る―枕詞
瀧の都―吉野の離宮
見れど飽かぬかも―見ても〳〵更に飽く事なきかな
常滑―いつまでもかはらず滑かなること

珠水激。瀧之宮子波。見禮跡不飽可聞。

やすみしゝ、我が大君の、聞こしをす、天の下に、國はしも、さはにあれども、山川の、清き河内と、御心を、吉野の國の、花散らふ、秋津の野邊に、宮柱、太敷き座せば、百敷の、大宮人は、船並めて、朝川渡り、船競ひ、夕河渡る。此の川の、絶ゆる事なく、此の山の、彌高からし。石走る、瀧の都は、見れど飽かぬかも。

反歌

雖見飽奴。吉野乃河之。常滑乃。絶事無久。復還見牟。

見れど飽かぬ、吉野の川の、常滑の、絶ゆる事なく、復かへり見む。

安見知之。吾大王。神長柄。神佐備世須登。芳野川。多藝津河内爾。高殿乎。高知座而。上立。國見乎爲波。疊有。青垣山。山神乃。奉御調等。春部者。花挿頭持。秋立者。黄葉頭刺理。(一云黄葉加射之) 遊副川之。神母。大御食爾。仕奉等。上瀬爾。鵜川乎

白浪の―下に「寄する」を略せるか
濱松が枝―「枝」は「根」の誤なるべし
手向草―手向の具
勢能山―紀伊國
これやこの―これがかの
名に負ふ―名に持つ、我が戀ふなる大和にいます夫の君のそのせといふ語を名に持てる

幸二于紀伊國一時川島皇子御作歌　或云山上臣憶良作

白浪乃。濱松之枝乃。手向草。幾代左右二賀。年乃經去良武。

白浪の、濱松が枝の、手向草、幾代までにか、年の經ぬらむ。

一云。年者經爾計武。

日本紀曰。朱鳥四年庚寅秋九月。天皇幸二紀伊國一也。

越二勢能山一時阿閉皇女御作歌

此也是能。倭爾四手者。我戀流。木路爾有云。名爾負勢能山。

これやこの、大和にしては、我が戀ふる、紀路にありとふ、名に負ふせの山。

幸二于吉野宮一之時柿本朝臣人麻呂作歌二首并短歌二首

36 八隅知之。吾大王之。所聞食。天下爾。國者思毛。澤二雖有。山川之。淸河内跡。御心乎。吉野乃國之。花散相。秋津乃野邊爾。宮柱。太敷座波。百磯城乃。大宮人者。船並氏。旦川渡。舟競。夕河渡。此川乃。絶事奈久。此山乃。彌高良之。

天皇の云々—天智天皇をさす
きれる—くもりへだつる
百敷の—枕詞
大宮所—皇居の跡

幸くあれど—昔に變らずあれど
大宮人の云々—船にのりてあそぶ大宮人のなきをいふ
大わだ—わだは入江
淀むとも—淀みて待つとも

あれや—あればにや

國つ御神—志賀郡邊にまつれる神
うらさびて—うらは心、神の心のあれすさびて其爲めに

は、此處と聞けども、大殿は、此處と云へども、春草の、茂く生ひたる、霞立つ、
春日のきれる、百敷の、大宮所、見れば悲しも。

反　歌

樂浪之。思賀乃辛崎。雖幸有。大宮人之。船麻知兼津。
細波の、志賀の唐崎、幸くあれど、大宮人の、船待ち兼ねつ。

左散難彌乃。志我能大和太。一云比良乃與杼六友。昔人二。亦母相目八毛。一云將會跡母戸八
細波の、志賀の大わだ、淀むとも、昔の人に、またも逢はめやも。

高市古人感二傷近江舊堵一作歌　或書云高市連黒人

古。人爾和禮有哉。樂浪乃。故京乎。見者悲寸。
古の、人に我あれや、細波の、舊き都を、見れば悲しき。

樂浪乃。國都美神乃。浦佐備而。荒有京。見者悲毛。
細波の、國つ御神の、うらさびて、荒れたる都、見れば悲しも。

白妙の―枕詞
乾したり―一に「さらせり」と訓ず、布帛を晒し乾すをいふ也

夷者雖有―一說に「有」の上に「不」を補ひ「ひなるはあらねど」と訓ず、從ふべからん
或云霞立云々―霞立つ、春日か霧れる、夏草か、繁くなりぬる」と訓ず、都の跡の見えぬは春日の霞める爲めか、夏草の茂くなれる爲めかと疑へる意也、最も從ふべきが如し
玉襷―枕詞
橿原の云々―神武天皇をさす、ゆはよりの意
樛の木の―枕詞
思ほしめせか―御考へ遊ばしたる故にや
天ざかる―枕詞
岩橋の―枕詞
細波の―枕詞

春過而。夏來良之。白妙能。衣乾有。天之香來山。
春過ぎて、夏來るらし、白妙の、衣乾したり。天の香具山。

過二近江荒都一時柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次。畝火之山乃。橿原乃。日知之御世從。或云「自宮」阿禮座師。神之盡。樛木乃。彌繼嗣爾。天下。所知食之乎。或云「食來」或云「虛見倭乎置。青丹吉平山越而」天爾滿。倭乎置而。青丹吉。平山乎越。何方。或云「所念計米可」御念食可。天離。夷者雖有。石走。淡海國乃。樂浪乃。大津宮爾。天下。所知食兼。天皇之。神之御言能。大宮者。此間等雖聞。大殿者。此間等雖云。春草之。茂生有。或云「霞立。春日香霧流。夏草香。繁成奴留」霞立。春日之霧流。百磯城之。大宮處。見者悲毛。或云「見者左夫思母」

玉襷、畝火の山の、橿原の、ひじりの御代ゆ、生れましゝ、神の盡、樛の木の、彌繼ぎ嗣に、天の下、知ろし召しゝを、空に見つ、大和をおきて、青丹吉、奈良山を越え、如何樣に、思ほしめせか、天ざかる、鄙にはあれど、岩橋の、近江の國の、細波の、大津の宮に、天の下、知ろし召しけむ、天皇の、神の尊の、大宮

隈も落ちず—殘る所なく
よき人—昔の歌人をさす
君—天皇より臣下をさす、かゝる例多し
天皇—持統

其の雪の、時無きが如、其の雨の、間無きが如、隈も落ちず、思ひつゝぞ來る。其の山道を。

或本歌。

三芳野之。耳我山爾。時自久曾。雪者落等言。無間曾。雨者落等言。其雪。不時如。其雨。無間如。隈毛不墮。思乍叙來。其山道乎。

右句々相換。因レ此重載焉。

天皇幸二于吉野宮一時御製歌

淑人乃。良跡吉見而。好常言師。芳野吉見與。良人四來三。

よき人の、好しと善く見て、好しと言ひし、吉野善く見よ、よき人よ君。

紀曰。八年己卯五月庚辰朔甲申。幸二于吉野宮一。

藤原宮御宇天皇代　高天原廣野姫天皇

天皇御製歌

打麻乎。麻續王。白水郎有哉。射等籠荷四間乃。珠藻苅麻須。

うちそを、麻續王、海人なれや、伊良虞が島の、玉藻刈ります。

麻續王聞レ之感傷和歌

空蟬之。命乎惜美。浪爾所濕。伊良虞能島之。玉藻苅食。

空蟬の、命を惜しみ、浪に濡れ、伊良虞の島の、玉藻刈りをす。

右案二日本紀一曰。天皇四年乙亥夏四月戊戌朔乙卯。三品麻績王有レ罪流二于因幡一。一子流二伊豆島一。一子流二血鹿島一也。是云レ配二于伊勢國伊良虞島一者。若疑後人緣二歌辭一而誤記乎。

天皇御製歌

三芳野之。耳我嶺爾。時無曾。雪者落家留。間無曾。雨者零計類。其雪乃。時無如。其雨乃。間無如。隈毛不落。思乍叙來。其山道乎。

三吉野の、みよがの峰に、時無くぞ、雪は降りける。間無くぞ、雨は降りける。

うちそを—枕詞
海人なれや—海人にてあればにや
刈ります—刈りて居させ給ふ

空蟬の—枕詞

時無く—時じく、いつといふ時の見境もなく

紫の―紫草の如くに
匂へる―うるはしき
人妻故に―人の妻なるも
のを

天皇―天武

波多横山―伊勢國壹志郡

ゆつ岩むら―岩の多くむ
らがれるところ
常にも云々―萬年新造に
てありたきものかな

紫草能。爾保散類妹乎。爾苦久有者。人嬬故爾。吾戀目八方。

紫の、匂へる妹を、憎くあらば、人妻故に、我戀ひめやも。

紀曰。天皇七年丁卯夏五月五日。縱ニ獵於蒲生野ー。于レ時大皇弟諸王内臣及群臣皆悉從焉。

明日香清御原宮御宇天皇代　天渟中原瀛眞人天皇

十市皇女參ニ赴於伊勢神宮ー時見ニ波多横山巖ー吹黄刀自作歌

河上乃。湯都磐村二。草武左受。常丹毛冀名。常處女煑手。

川のへの、ゆつ岩むらに、草むさず、常にもがもな、常處女にて。

吹黄刀自未レ詳也。但紀曰。天皇四年乙亥春二月乙亥朔丁亥。十市皇女阿閉皇女參ニ赴於伊勢神宮ー。

麻續王流ニ於伊勢國伊良虞島ー之時人哀傷作歌

隱すか―かは「かな」に同じく咏歎の辭

さぬばり―さは添頭語、ぬは野、はりは榛

衣に著くなす―なすは如くに、古榛の皮にて衣を摺りし故その著きやすきを我が夫の目に著くたとへに用ひたるなり

蒲生野―近江國

茜さす―枕詞

紫野―紫といふ草の生ふる野

占野―御獵のため占めおく野

野守―天皇に喩ふ、略解には「外によそへたる意なし」といへり

反歌

三輪山乎。然毛隱賀。雲谷裳。情有南畝。可苦佐布倍思哉。

三輪山を、然も隱すか。雲だにも、情あらなむ。隱さふべしや。

右二首歌。山上憶良大夫類聚歌林曰。遷二都近江國一時御二覽三輪山一御歌焉。日本書紀曰。六年丙寅春三月辛酉朔己卯遷二都于近江一。

綜麻形乃。林始乃。狹野榛能。衣爾著成。目爾都久和我勢。

三輪山の、繁樹が下の、さぬばりの、衣に著くなす、目に著く我が夫。

右一首歌。今案不レ似二和歌一。但舊本載二于此次一。故以猶載焉。

天皇遊二獵蒲生野一時額田王作歌

茜草指。武良前野逝。標野行。野守者不見哉。君之袖布流。

茜さす、紫野行き、占野行き、野守は見ずや、君が袖振る。

皇太子答御歌　明日香宮御宇天皇

冬ごもり—枕詞、本文「成」は「盛」の誤か
春さり來れば—春になりくれば
山を茂み—山の茂き故に
忍ぶ—慕ふ、愛する
そこ—それ
恨めし—本文恨は怜の誤にて「おもしろし」ならんかといふ
うま酒—枕詞
三輪の山—三輪の山を
青丹吉—枕詞
道の隈—道のまがりくねりたるところ
いさかる—いは接頭語、離る
つばらに—詳に

冬木成。春去來者。不喧有之。鳥毛來鳴奴。不開有之。花毛佐家禮杼。山乎茂。入而毛不取。草深。執手母不見。秋山乃。木葉乎見而者。黄葉乎婆。取而曾思奴布。青乎者。置而曾歎久。曾許之恨之。秋山吾者。

冬ごもり、春さり來れば、鳴かざりし、鳥も來鳴きぬ。咲かざりし、花も咲けれど、山を茂み、入りても取らず、草深み、手折りても見ず」秋山の、木の葉を見ては、黄葉をば、取りてぞ忍ぶ、青きをば、置きてぞ歎く。そこし恨めし、秋山我は。

額田王下二近江國一時作歌井戸王卽和歌

味酒。三輪乃山。青丹吉。奈良能山乃。山際。伊隱萬代。道隈。伊積流萬代爾。委曲毛。見管行武雄。數數毛。見放武八萬雄。情無。雲乃。隱障倍之也。

うま酒、三輪の山、青丹吉、奈良の山の、山の間に、い隱るゝまで、道の隈、いさかるまでに、つばらにも、見つゝ行かむを、屢も、見さけむ山を、情なく、雲の、隱さふべしや。

然なれこそ、空蟬も、妻を、爭ふらしき。

反歌

高山與。耳梨山與。相之時。立見爾來之。伊奈美國波良。
香具山と、耳梨山と、逢ひし時、立ちて見に來し、印南國原。

渡津海乃。豐旗雲爾。伊理比沙之。今夜乃月夜。淸明己曾。
海の、豐旗雲に、入日さし、今宵の月夜、明けくこそ。

右一首歌。今案不レ似二反歌一也。但舊本以二此歌一載二於反歌一。故今猶載レ此歟。亦紀曰。
天豐財重日足姬天皇先四年乙巳立爲天皇爲二皇太子一。

○近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇

天皇詔二內大臣藤原朝臣一競二憐春山萬花之艷秋山千葉之彩一時額田王
以レ歌判レ之歌

文は畝火を、女山と認め「うねびを愛(ヲ)しと」と訓ず、これによれば香具山は主語となる

然なれこそ―こその上にはを略す

空蟬―現代の人らしき―らし

逢ひし時―香具山と耳梨山と逢ひしなり、幸文の說によれば逢ふに非ず爭ふ意

見に來し―仙覺說に播風土記を引きて出雲國阿菩大神とす

印南國原―印南は播磨の郡名、古は一郡一郷をも國といへり、原は廣く平かなる所の稱

豐旗雲―豐は大なる意、旗雲は旗の如くたなびける雲

爲天皇―三字衍文

天皇―天智

藤原朝臣―鎌足

代—齡
磐代—紀伊國日高郡磐代の名によりて其の岡の草を結びて齡を契るなり
假庵—古は旅中假庵を作りて宿れり
かや—屋根の葺草
野島—淡路國
あこねの浦—紀伊國
子島—紀伊國
三山—香具山、畝火山、耳梨山、皆大和國、男山なる畝火と耳梨とが女山なる香具山を爭ひしと也
香具山は—香具山をば
畝火男々し—畝火は男山にて男々しと也、木下幸

君之齒母。吾代毛所知哉。磐代乃。岡之草根乎。去來結手名。
君が代も、我が代も知れや、磐代の、岡の草根を、いざ結びてな。

吾勢子波。借廬作良須。草無者。小松下乃。草乎苅核。
我が背子は、假庵作らす、かや無くば、小松が下の、かやを刈らさね。

吾欲之。野島波見世追。底深伎。阿胡根能浦乃。珠曾不拾。
吾が欲りし、野島は見せつ、底清き、あこねの浦の、珠ぞ拾はぬ。

或頭云。吾欲子島羽見遠。

右檢ニ山上憶良大夫類聚歌林ニ曰。天皇御製歌云云。

中大兄　近江宮御宇天皇三山歌一首

高山波。雲根火雄男志等。耳梨與。相諍競伎。神代從。如此爾有良之。古昔母。然爾有許曾。虛蟬毛。嬬乎。相挌良思吉。
香具山は、畝火男々しと、耳梨と、相爭ひき。神代より、斯くなるらし、古も、

熟田津—伊豫國
潮も云々—月も出て潮も滿ちぬ

莫囂圓隣—此歌、集中最も難解にして諸説紛々たり、今其一二を採りて下に譯文を示せり、蓋し誤脱の甚しきものなるべく、これに關する諸説等は今凡て省略に從ふ

熟田津に、船乘りせむと、月待てば、潮も叶ひぬ。今は漕ぎ來な。

右檢二山上憶良大夫類聚歌林一曰。飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑九年丁酉十二月己巳朔壬午。天皇大后幸二于伊豫湯宮一。後岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御船西征始就二于海路一。庚戌御船泊二于伊豫熟田津石湯行宮一。天皇御二覽昔日猶存之物一。當時忽起二感愛之情一。所以因製二歌詠一爲二之哀傷一也。即此歌者天皇御製焉。但額田王歌者別有二四首一。

幸二于紀溫泉一之時額田王作歌

莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾瀬子之射立爲兼五可新何本。

夕月の、あふぎてとひし、我背子が、い立たせるかね、いつかあはなむ。（通行本）

紀の國の、山越えて行け、我背子が、い立たせりけむ、いづかしが本。（荷田東萬呂）

かまやまの、霜消えて行け、我背子が、い立たするがね、いつかしが本。（本居宣長）

中皇女命往二于紀伊溫泉一之時御歌

天皇—皇極

み草—秋の百草
宇治の都—行幸の時山城宇治に行宮を造りければいふ
假庵—行宮

天皇—齊明

明日香川原宮御宇天皇代　天豐財重日足姬天皇

額田王歌　未詳

金野乃。美草苅葺。屋杼禮里之。兎道乃宮子能。借五百磯所念。

秋の野の、み草苅り葺き、宿れりし、宇治の都の、假庵し思ほゆ。

右檢ニ山上憶良大夫類聚歌林ニ曰。一書戊申年幸ニ比良宮ニ大御歌。但紀曰。五年春正月己卯朔辛巳。天皇至レ自ニ紀温湯ニ。三月戊寅朔天皇幸ニ吉野宮ニ而肆宴焉。庚辰天皇幸ニ近江之平浦ニ。

後崗本宮御宇天皇代　天豐財重日足姬天皇位後卽位後崗本宮

額田王歌

熟田津爾。船乘世武登。月待者。潮毛可奈比沼。今者許藝乞菜。

わづき—たづき
むら肝の—枕詞
心を痛み—心の悲しきままに
鵼子鳥—枕詞
玉襷—枕詞
掛けの宜しく—言にかけていふもよろしく、下のかへらひぬればに掛る
衣手—袖
かへらひぬれば—吹き通ひぬれば
草枕—枕詞
思ひ遣る—心を慰むる
たづき—たより、方便
知らに—知らず
綱の浦—讃岐國
燒く鹽の—のは如くの意
ときじみ—時の見境もなく吹く故に
寢る夜落ちず—一夜も漏れず、毎夜々々
かけて忍びつ—遠く戀ひ慕ふ

霞立つ、長き春日の、暮れにける、わづきも知らず、むら肝の、心を痛み、鵼子鳥、うら歎居れば、玉襷、掛けの宜しく、遠つ神、我大君の、行幸の、山越の風の、獨り居る、我が衣手に、朝夕に、かへらひぬれば、大夫と、思へる我も、草枕、旅にしあれば、思ひ遣る、たづきを知らに、綱の浦の、海人少女等が、燒く鹽の、思ひぞ燒くる、我が下情。

反歌

山越乃。風乎時自見。寢夜不落。家在妹乎。懸而小竹櫃。
山越の、風をときじみ、寢る夜落ちず、家なる妹を、かけて忍びつ。

右檢二日本書紀一無レ幸二於讃岐國一。亦軍王未レ詳也。但山上憶良大夫類聚歌林曰。紀曰天皇十一年己亥冬十二月己巳朔壬午幸二于伊豫温湯宮一云云。一書云。伊與風土記也是時宮前在二二樹木一。此之二樹斑鳩此米二鳥大集。時勅多掛二稻穗一而養レ之。乃作歌云云。若疑從二此便一幸レ之歟。

やすみしゝ―枕詞
朝には云々―片時はなさず御愛翫遊ばされたる、
い寄せのいは接頭語
御執らし―御弓
なか弭―長弭の意とし、又御弓の名ともいへど、「加」は「利」の誤にて、鳴弭の義とする説穏かならん
梓―古へ弓をつくるに用ひし木
反歌―「はんか」又「かへしうた」と讀む、長歌の大意を概括し又いひ足らざるを補ふ短歌
たまきはる―枕詞
草深野―草深き野

加弭乃。音爲奈里。

やすみしゝ、我が大君の、朝には、取撫で給ひ、夕には、い寄せ立てよし、御執らしの、梓の弓の、なか弭の、音すなり。朝獵に、今立たすらし。夕獵に、今立たすらし。御執らしの、梓の弓の、なか弭の、音すなり。

反歌

玉刻春。内乃大野爾。馬數而。朝布麻須等六。其草深野。

たまきはる、宇智の大野に、馬列めて、朝踏ますらむ、その草深野。

幸二讚岐國安益郡一之時軍王見レ山作歌

霞立。長春日乃。晩家流。和豆肝之良受。村肝乃。心乎痛。奴要子鳥。卜歎居者。珠手次。懸乃宜久。遠神。吾大王乃。行幸能。山越風乃。獨座。吾衣手爾。朝夕爾。還比奴禮婆。丈夫登。念有我母。草枕。客爾之有者。思遣。鶴寸乎白土。網能浦之。海處女等之。燒鹽乃。念曾所燒。吾下情。

へ、名告らさね。空見つ、大和の國は、おしなべて、我こそ居らし、告りなべて、我こそ居れ。我こそは、夫とし告らめ、家をも名をも。

高市崗本宮御宇天皇代

息長足日廣額天皇

天皇登二香具山一望レ國之時御製歌

山常庭。村山有等。取與呂布。天乃香具山。騰立。國見乎爲者。國原波。煙立籠。海原波。加萬目立多都。怜國曾。蜻島。八間跡能國者。

大和には、群山あれど、取りよろふ、天の香具山、登り立ち、國見をすれば、國原は、煙立籠め、海原は、鷗立ちたつ。うまし國ぞ、秋津洲、大和の國は。

天皇遊二獵内野一之時中皇命使下間人連老上獻歌

八隅知之。我大王乃。朝庭。取撫賜。夕庭。伊縁立之。御執乃。梓弓之。奈加弭乃。音爲奈利。朝獵爾。今立須良思。暮獵爾。今他田渚良之。御執。梓能弓之。奈

名告らさね―名を申せ
空見つ―枕詞
おしなべて―すべて
居らし―らしは「り」の延、一説「をれ」と訓む。「師」は下に附けて「しきなべて」と訓ず
告りなべて―政令を布いて
我こそは云々―我を夫と思ひて家をも名をも申せ
高市―大和國高知郡
天皇―舒明
香具山―大和國十市郡
取りよろふ―とりは接頭語、よろふは物の具足したる意、香具山の形の整然たるをいふ也
國見―高きところに登りて國の形勢を望み見ること
國原、海原―原はすべて廣く平かなる所の稱也
煙立籠め―人家稠密の樣
海原―香具山の麓なる埴安の池
うまし―よき、結構なる
秋津洲―大和國の一名
内野―大和國宇智郡

泊瀬—大和國城上郡

天皇—雄略

籠—かご、一に「こ」と訓ず

ふぐし—野菜など掘り取る串

摘ます—摘む

兒—女

家のらへ—又「いへきかな」と訓ず、本文「吉」一本「告」、「閑」は「聞」の誤となす說に據る

萬葉集

巻第一

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代　大泊瀬稚武天皇

天皇御製歌

籠毛與。美籠母乳。布久思毛與。美夫君志持。此岳爾。菜採須兒。家吉閑。名告沙根。虛見津。山跡乃國者。押奈戸手。吾許曾居師。告名倍手。吾己曾座。我許者。背齒告目。家乎毛名雄毛。

籠もよ。み籠持ち、ふぐしもよ、みふぐし持ち、此の岡に、菜摘ます兒、家のら

春相聞

夏雜歌

卷第七

作歌二首
四年壬申　藤原宇合卿遣西海道節度使時
高橋連蟲麻呂作歌一首并短歌○天皇賜
酒節度使卿等御歌一首并短歌○中納言
安倍廣庭卿歌一首
五年癸酉　超草香山時神社忌寸老麻呂作
歌二首○山上臣憶良沈痾之時歌一首○
大伴坂上郎女與姪大伴宿禰家持歌一首
○安部朝臣蟲麻呂月歌一首○大伴坂上
郎女月歌三首○豊前國娘子月歌一首○
湯原王月歌二首（今本こゝに勘公卿補任今年二十の九字あり、是は右の湯原王の事に付後人公卿補任を考る事有て傍に書付けるを誤て載たるならんと契沖いへり尤除べし）○
藤原朝臣八束月歌一首○市原王宴禱父
安貴王歌一首○湯原王打酒歌一首○紀
朝臣鹿人松樹歌一首（本文見二茂岡之松樹一歌と有、こゝは略書るか）
○同鹿人泊瀬河歌一首○大伴坂上郎女
詠元興寺之里歌一首○同郎女初月歌一
首○大伴宿禰家持初月歌一首○大伴坂
上郎女宴親族歌一首
六年甲戌　海犬養宿禰崗麻呂應詔歌一首
○春三月幸于難波宮時歌六首　作者未
詳歌一首　船王歌一首　守部王歌一首
山部宿禰赤人歌一首　安部朝臣豊繼歌
一首○筑後守葛井連大成遙見海人釣船
作歌一首○桉作村主益人歌一首
八年丙子　夏六月幸于芳野離宮時山部宿
禰赤人應詔歌一首并短歌○市原王悲獨
子歌一首○忌部首黒麻呂恨友人賒來歌
一首（本文に人字无）○冬十一月葛城王等賜橘姓
之時御製歌一首○橘宿禰奈良麻呂應詔
歌一首○十二月葛井連廣成家宴歌二首
九年丁丑　春正月橘少卿并諸大夫等宴彈
正尹門部王宅歌二首　門部王　橘文明
（本文橘宿禰文成とあり）○榎井王後追和歌一首○春二

卷第二…………三五

萬葉集上目錄

一、今古本としるせるは、東万呂翁の得られしにて、いさゝか古き時書つる本也。さて世に常におなる活字の本をば、一本とて擧たり。又伊勢の國人がもてる古本に、元暦元年校合せるよし、奥書したるあり。今其本を擧たるなれば、傍に元の字をしるせり。又官本と擧たるは、代匠記に官本を校合せし本の有しを得て、それよりとれる也。拾穂本と擧たるは、北村季吟の校合せる古本をいへり。すべてくさ〴〵の本、よしとおもはるゝをのみ擧て、誤れりと覺ゆるをばとらず。

一、すべて此書廿巻の中に載せたる事は、後人の加へたるにてやうなく思はるゝ事をもらさず書り。其中には、はやくよりかゝりしにやとおぼゆる事もすくなからずして、たわやすく改べきにあらればなり。此解、千蔭とともにあげつらひたすけなせるは、平春海、源道別、源躬弦なり。

本書の校訂校正には文學士中村虎之輔氏と椿強祐氏とを煩はしたる事甚だ多し。茲に特記して其勞を謝す。

大正四年六月　　　校訂者　塚本哲三

が奥書にいへり。契沖はすべて目錄なかりしが正本なるべし、初學の爲に詞書のまゝにひろひ出し、或は左註をとり、或は自らの料簡をもて書る所もありといへり。翁はもと目錄なかりしを、後人のまじろしにくはへたる物なりといはれき。げにもいたく心得ぬ書ざまなる所どもおほし。されど、是もいと近き世にせしものとも見えれば、其まゝに書て誤れる所は、其よしそこにいへり。本文の端詞に誤たる事の目錄のかた正しきもあるは、後とても猶、あまた善本も有しほどに書るならむ。しか目錄によりて、本文の誤を知事もあれば、必捨べきものにはあらず。

一、今本卷一、仙覺が書る奥書に、他本漢字歌一首書畢、假名歌更書レ之、常儀也。然而於二今本一者、爲レ糺二和漢之符合一、於二漢字右一、今付二假字一畢と有て、もと日本紀竟宴の歌のさまに書けるものなるを改たりとみゆ。かく文字の右にかな付たるも見やすけれど、此書はかなをもはらとすべきを、片かなは見まがふ事もあれば、古きによりて、今のいろはがなもて字の左に書り。されども長歌は、字もて一首書畢て、更にかなもて書ては見合せがたかれば、字のくだりのかたへごとにかなを交へて書つ。

徵（田中道麿）、萬葉集攷解（香川景樹）、萬葉集美夫君志（木村正辭）等殆んど枚擧に暇あらず。就中最も人口に膾炙し、今日なほ萬葉を窺ふものの梯梯として必ず讀むは千蔭の「萬葉集略解」にして、古來の註解を大成し研究形式の最も完備せるは、雅澄の「萬葉集古義」なり。

今本書を成すに當りては、本文と目錄とは一に「略解」を擇る事とし、「略解」の訓の傍書なるをば原文と對立せしめ、且「略解」が示す所の訓義に從ひて現用の漢字を配し、原訓讀の假名を傍訓となしたり。而して頭註には專ら「略解」の說と「古義」の說とを參酌し、之を通俗化して理解し易からしめ、異說の甚しきものは一々列記する事とせり。かゝる形式は萬葉集に一新記錄を作りたるものにして、自ら僭越の思無きにあらざれども、此形式の通讀上最も便利にして、本文庫の立場として最も適當なるべきを信じたればなり。因に「略解」の例言中、本書に多少の關係を有する條項を摘記する事左の如し。

一、目錄は卷十五まで有て、十六以下なき本あり。またすべて目錄有もまち〳〵なりしよし、仙覺

家持の歌最も多きに居る。

萬葉集の歌には、長歌、短歌、旋頭歌（五七七五七七）の三體ありて、概ね、雜、四季、相聞、挽歌、譬喩歌に部類せられたれど、後世の歌集の如く整然たるにはあらず。而して其文字は萬葉假名と稱し、漢字を假りて我國語を寫したるものにして、義訓、借訓、戲書、略書、省畫、異字等の錯綜せるが上に、錯簡誤脫亦少なからずして、訓讀の困難名狀すべからず、用語と語法と亦後世を以て推し難き點多ければ、古來幾多の研究の世に公にせらるゝありたれど、なほ究めて悉さゞる所尠しとせず。試に古來の註解書の主要なるものを擧ぐれば、

萬葉集抄（仙覺律師一名「仙覺抄」）、萬葉代匠記（僧契沖）、萬葉考（加茂眞淵）、萬葉集略解（橘千蔭）、萬葉集古義（鹿持雅澄）

等にして、其他參考に値ひするものは、

詞林采葉（僧由阿）、釋萬葉集（德川光圀）、萬葉緯（今井似閑）、萬葉集童蒙抄（荷田春滿）、萬葉拾穗抄（北村季吟）、玉の小琴（本居宣長）、槻の落葉（荒木田久老）、萬葉集燈（富士谷御杖）、萬葉集檜抓（橘守部）、撰集萬葉

緒言

萬葉集二十卷は奈良朝の末に撰ばれたる和歌集にして、今日に傳はれる我歌集中最古のものなり。其採錄せる歌は仁德の朝より淳仁踐祚の翌年卽ち天平寶字三年に及び、其間實に四百餘年の久しきに亘れども、歌數の最も多きは持統以後なるを以て、之を奈良朝時代の歌集と稱するの最も當れるを覺ゆ。撰者につきては異說少なからねど、家持が見聞のまゝ記錄し置きたる草案の、整理せられずして後世に傳はれるものなりとなす契沖の說、最も有力なるが如し。眞淵は榮花物語月宴の卷の記事を根據として、卷一、二、十三、十一、十二、十四の六卷のみ眞の萬葉集にして、卷また此順序たりしなるべし、これ卽ち橘諸兄の勅を奉じて撰する所、而して他の諸卷は、別の諸歌集の混入せるものなりといへり。或は諸兄が撰したるをば、後に家持が自己の家集と隨見隨錄の歌とを增補せるもの、卽ち今日の萬葉集にてもあるべきか。撰集の體を得たるは前記の六卷のみにして、他は諸家の雜集たるが如く、殊に卷五は山上憶良の集、四、八、十七、十八の四卷は大伴氏の集にして、

萬葉集

上

